上峰町文化財調査報告書　第20集

堤六本谷遺跡Ⅳ
堤三本松遺跡Ⅱ
堤三本柳遺跡Ⅱ
青柳古墳群Ⅰ

平成７～９年度佐賀県農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年３月

上峰町教育委員会

上峰町文化財調査報告書　第20集

堤六本谷遺跡Ⅳ
堤三本松遺跡Ⅱ
堤三本柳遺跡Ⅱ
青柳古墳群Ⅰ

平成７～９年度佐賀県農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年３月

上峰町教育委員会

堤六本谷遺跡11区　全景（南西から）

堤六本谷遺跡11区　全景（西から）

堤六本谷遺跡11区　調査区北側（写真上方が北）

堤六本谷遺跡11区　調査区南側（写真上方が北）

堤三本松遺跡２区　全景（南より）

堤三本松遺跡２区　遺構集中部（写真上方が北）

堤三本柳遺跡１区　全景（写真上方が北東）

青柳古墳群１区　全景（南より）

青柳古墳群１区　全景（東より）

序

従来、上峰町は「遺跡の宝庫」と言われてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生し南北に延びる洪積世丘陵と開析谷、さらに有明海へと続く沖積平野と変化に富んだ地形を含む町域には、いたるところに先人たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整に努めてまいりました。

上峰町では、町北部の大字堤地区を対象とした上峰北部県営農業基盤整備事業が昭和60年度より開始され、これに伴う埋蔵文化財発掘調査を進めてまいりました。

この報告書は、平成７年度から平成９年度に実施した堤六本谷遺跡、堤三本松遺跡、堤三本柳遺跡、青柳古墳群の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。これらの遺跡の調査では、奈良時代の遺構や遺物を中心に縄文時代から近世に及ぶ人々の暮らしの跡が発掘されました。堤六本谷遺跡では、奈良時代の集落の跡が検出され、また、堤三本柳遺跡では、古墳時代の墳墓が出土するなど、これまで比較的資料の少なかった山麓部で当時の社会を解明する上で欠かせない貴重な資料を得ることができました。

この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産として、文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力をいただきました文化庁、佐賀県教育委員会文化財課、佐賀県農林部をはじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成13年３月

上峰町教育委員会

教育長　古賀一守

例　言

1．本書は、平成７年度から平成９年度の佐賀県農業基盤整備事業に伴い、上峰町教育委員会が佐賀県農林部の委託事業により発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本柳に所在する堤六本谷遺跡、大字堤字三本松に所在する堤三本松遺跡、大字堤字三本柳に所在する堤三本柳遺跡および大字堤字二本柳に所在する青柳古墳群の発掘調査報告書である。
2．本書は、平成12年度佐賀県営農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査事業として、佐賀県農林部の委託事業により上峰町教育委員会が作成、刊行したものである。
3．発掘調査は、平成７年度から平成９年度の農業基盤整備事業の施工により地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ部分について年度ごとに便宜的な調査区域を設定し、実施したものである。
4．各年度の調査遺跡名・調査地区名・調査面積・調査期間は、以下のとおりである。

年　度	遺跡名	調査地区名	調査面積	調査期間
平成７年度	堤六本谷遺跡	11区	9,750㎡	平成７年６月２日 ～ 平成８年１月31日
平成８年度	堤三本松遺跡	２区	1,875㎡	平成８年７月31日 ～ 平成８年12月３日
平成９年度	堤三本柳遺跡	１区	625㎡	平成９年10月21日 ～ 平成10年２月５日
	堤三本柳遺跡	１区	5,000㎡	

5．現場での遺構実測作業は、平成７年度、８年度、９年度いずれも有限会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
6．遺構の個別写真及び出土遺物の写真撮影は、調査員が行った。また、気球による遺跡の全景などの空中写真撮影については平成７年度、８年度、９年度いずれも有限会社空中写真企画に委託した。
7．調査後の出土遺物、記録類の整理作業は、随時、上峰町文化財整理事務所にて実施した。
8．本書中の挿図・実測図作成、拓本、トレース作業などは、調査員の指示により、製図作業員が行った。
9．本書の執筆・編集は、原田大介が行った。
10．本報告書に係る発掘調査で出土した全ての遺物、及び図面・写真・その他の記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　例

1．遺跡の略号は、堤六本谷遺跡が「TTR」、堤三本松遺跡が「TSM」、堤三本柳遺跡が「TSY」、青柳古墳群が「AOY」であり、調査区の略号は、平成７年度の堤六本谷遺跡11区を「TTR-11」、平成８年度の堤三本松遺跡２区を「TSM-２」、平成９年度の堤三本柳遺跡１区を「TSY-１」、青柳古墳群１区を「AOY-１」とした。
2．遺構番号は、遺構の種別を表す２文字のアルファベットに続き、調査区ごとに001、002などの３桁の番号を組み合わせて表記した。

SH……竪穴式住居址　SB……掘立柱建物址　ST……古墳　SC……石棺墓　SP……周溝墓　SK……土壙
SD……溝跡・溝状遺構　SX……性格不明遺構・その他

例）SH-001　１号竪穴式住居址　SK015　15号土壙

3．挿図中の方位については、全て座標北を基準としている。
4．表中の数値に付した記号について、（　）は推定値を、※は部分値・残存部値をそれぞれ表している。
5．土器実測図の縮尺は、原則として１/４であるが、土器拓影など、同一図版内で縮尺が異なるものについては、遺物報告番号の後に続けてその縮尺を特記している。
6．土器実測図中のスクリーン部分は、赤色塗彩を表す。同図中のヘラ削り調整痕に付した「↑」印は、調整に用いたヘラ状工具の器面に対する相対的な移動方向を表している。
7．遺物実測図の遺物報告番号は、調査年度ごと、遺跡ごとに一連の番号を付した。また、この番号は、遺物写真図版の遺物報告番号と一致する。

調査組織

平成７年度

調査事務局	総　　括	野口國雄	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	江頭典雄	〃	教育課長
	経費執行	白浜博己	〃	社会教育係長
		鶴田浩二	〃	社会教育係
		原田大介	〃	〃
調査組織	調査員	鶴田浩二	上峰町教育委員会	社会教育係
		原田大介	〃	〃
調査指導		佐賀県教育委員会文化財課		

平成８年度

調査事務局	総　　括	野口國雄	上峰町教育委員会	教育長（～平成８年10月20日）
		江頭典雄	教育長職務代理者	（平成８年10月21日～平成８年11月20日）
		鶴田　浩	上峰町教育委員会	教育長（平成８年11月21日～平成９年１月４日）
		江頭典雄	教育長職務代理者	（平成９年１月６日～平成９年２月４日）
		古賀一守	上峰町教育委員会	教育長（平成９年２月５日～）
	事務主任	江頭典雄	〃	教育課長
	経費執行	原田大介	〃	文化係長
		鶴田浩二	〃	文化係
調査組織	調査員	原田大介	〃	文化係長
		鶴田浩二	〃	文化係
調査指導		佐賀県教育委員会文化財課		

平成９年度

調査事務局	総　　括	古賀一守	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	江頭典雄	〃	教育課長
	経費執行	原田大介	〃	文化係長
		鶴田浩二	〃	文化係
調査組織	調査員	原田大介	〃	文化係長
		鶴田浩二	〃	文化係
調査指導		佐賀県教育委員会文化財課		

発掘作業参加者

平成７年度

秋山キミ、秋山ユキエ、秋山ヨシエ、石橋テル、石丸富男、石丸ミチエ、稲員シヅ子、稲員トシエ、稲員春雄、江頭晴次、江越栄子、江越　晋、江越清太、大石貞義、大坪弘子、大坪光代、大坪ミヨコ、緒方　中、緒方ツタエ、緒方マツヨ、川原ツヤ、川原ミヨ、久佛衣江、後藤セツ子、最所和子、執行一水、執行ミハル、島　四郎、高島　昇、武廣ハル子、田中ミスエ、鶴田エミ子、鶴田　馨、鶴田キヨ子、鶴田末友、鶴田久子、鶴田八重子、豊福政子、福島一雄、福島ツタエ、藤井妙子、藤戸道子、古川シマ子、松尾キミエ、松尾茂實、松尾トシエ、三好スエ、矢動丸五十三、矢動丸喜三、矢動丸辰夫、矢動丸信子、山下保子、山田瑞穂、吉田英子（発掘作業員）
大隈弓子、島　美保子、田尻祐子、馬原喜美子、矢動丸洋子（製図作業員）

平成８年度

秋山　巌、秋山ユキエ、秋山ヨシエ、石橋テル、石丸ミチエ、大坪光代、大坪ミヨコ、川原ツヤ、川原ミヨ、久佛衣江、執行ミハル、島　四郎、田中ミスエ、藤戸道子、古川シマ子、三好スエ、矢動丸五十三、矢動丸信子、山田瑞穂（発掘作業員）
大隈弓子、島　美保子、田尻祐子、馬原喜美子、矢動丸洋子（製図作業員）

平成９年度

秋山キミ、秋山ヨシエ、石橋テル、石丸富男、石丸ミチエ、江口照代、江越　晋、大石貞義、大坪光代、大坪ミヨコ、緒方ツタエ、川原ミヨ、北島光男、久佛衣江、後藤セツ子、最所和子、執行一水、執行ミハル、志波正千、高尾マツヨ、高島ハツネ、武廣ハル子、田中ミスエ、田中　豊、鶴田　馨、鶴田キヨ子、鶴田末友、鶴田八重子、福島一雄、福島ツタエ、古川シマ子、松尾キミエ、松尾トシエ、馬原喜美子、三好スエ、矢動丸五十三、矢動丸喜三、矢動丸信子、山田瑞穂、吉田英子（発掘作業員）
大隈弓子、島　美保子、田尻祐子、矢動丸洋子（製図作業員）

整理作業参加者

岩下貴子、大坪麻理子、坂本恵子、島　美保子、早田美智子、田尻祐子

目　次

序
例言・凡例
調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1
　1．遺跡の位置 …… 1
　2．歴史的環境 …… 3

Ⅱ．調査に至る経緯 …… 8

Ⅲ．平成７年度堤六本谷遺跡11区の調査 …… 11
　1．堤六本谷遺跡と調査区の概要 …… 11
　2．調査の経過 …… 11
　3．遺構 …… 12
　　(1)　竪穴式住居址 …… 12
　　(2)　掘立柱建物址 …… 26
　　(3)　土壙 …… 35
　4．遺物 …… 50

Ⅳ．平成８年度堤三本松遺跡２区の調査 …… 75
　1．堤三本松遺跡と調査区の概要 …… 75
　2．調査の経過 …… 75
　3．遺構 …… 77
　4．遺物 …… 79

Ⅴ．平成９年度堤三本柳遺跡１区・青柳古墳群１区の調査 …… 82
　1．堤三本柳遺跡・青柳古墳群と調査区の概要 …… 82
　2．調査の経過 …… 82
　3．堤三本柳遺跡１区の調査 …… 83
　4．青柳古墳群１区の調査 …… 86
　　(1)　遺構 …… 86
　　１古墳などの墳墓 …… 86
　　２竪穴式住居址 …… 122
　　３土壙・その他 …… 122
　　(2)　遺物 …… 128

Ⅵ．まとめ …… 150

挿図目次

Fig. 1　上峰町北部地形概略図（1/10,000）……2

2　堤六本谷遺跡・堤三本松遺跡・堤三本柳遺跡・青柳古墳群の位置および周辺遺跡（1/50,000）……4

3　堤六本谷遺跡・堤三本松遺跡・堤三本柳遺跡・青柳古墳群周辺地形図及び調査区位置図（1/5,000）10

4　堤六本谷遺跡11区遺構配置図（1/800）……13・14

5　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(1)　SH-125・SH-136・SH-137・SH-144（1/80）……19

6　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(2)　SH-145・SH-156・SH-157（1/80）……20

7　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(3)　SH-158・SH-160・SH-161（1/80）……21

8　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(4)　SH-162・SH-163・SH-164（1/80）……22

9　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(5)　SH-174・SH-175・SH-177（1/80）……23

10　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(6)　SH-190・SH-192・SH-193（1/80）……24

11　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(7)　SH-203・SH-212・SH-219（1/80）……25

12　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(8)　SH-248・SH-260・SH-265（1/80）……26

13　堤六本谷遺跡11区掘立柱建物址実測図(1)　SB-116・SB-121（1/80）……29

14　堤六本谷遺跡11区掘立柱建物址実測図(2)　SB-147・SB-151（1/80）……30

15　堤六本谷遺跡11区掘立柱建物址実測図(3)　SB-152・SB-155（1/80）……31

16　堤六本谷遺跡11区掘立柱建物址実測図(4)　SB-183・SB-186（1/80）……32

17　堤六本谷遺跡11区掘立柱建物址実測図(5)　SB-200・SB-210（1/80）……33

18　堤六本谷遺跡11区掘立柱建物址実測図(6)　SB-217・SB-239（1/80）……34

19　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(1)　SK-110～SK-114・SX-115・SK-117（1/60）……39

20　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(2)　SK-118～SK-120・SK-122～SK-124・SK-126（1/60）……40

21　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(3)　SK-127～SK-135・SK-138～SK-140（1/60）……41

22　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(4)　SK-142・SK-148～SK-150・SK-153・SK-154・SK-159・SK-165　SK-170（1/60）……42

23　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(5)　SK-171～SK-173・SK-176・SK-178（1/60）……43

24　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(6)　SK-185・SK-187～SK-189・SK-191・SK-195・SK-197・SK-198（1/60）……44

25　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(7)　SK-199・SK-201・SK-202・SK-204～SK-209（1/60）……45

26　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(8)　SK-211・SK-213～SK-216・SK-218・SK-220～SK-222（1/60）　46

27　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(9)　SK-223～SK-225・SK-227～SK-231（1/60）……47

28　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(10)　SK-232～SK-238・SK-240・SK-242～SK-246・SK-249・SK-251・SK-252（1/60）……48

29　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(11)　SK-253～SK-258・SK-261・SK-263・SK-264・SX-266（1/60）…49

30　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(1)（1/4）……60

31　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(2)（1/4）……61

32　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(3)（1/4）……62

33 堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(4)（1/4） ……63
34 堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(5)（1/4） ……64
35 堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(6)（1/4） ……65
36 堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(7)（1/4） ……66
37 堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(8)（1/4） ……67
38 堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(9)（1/4） ……68
39 堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(10)（1/4） ……69
40 堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(11)（1/4） ……70
41 堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(12)（1/4） ……71
42 堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(13)（1/4） ……72
43 堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(14)（1/4） ……73
44 堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(15)（1/4） ……74
45 堤三本松遺跡2区遺構配置図（1/600） ……76
46 堤三本松遺跡2区土壙実測図(1) SK-001～SK-012（1/60） ……78
47 堤三本松遺跡2区土壙実測図(2) SK-013～SK-017・SK-019・SK-020（1/60） ……79
48 堤三本松遺跡2区出土遺物実測図（1/4） ……81
49 堤三本柳遺跡1区遺構配置図（1/500） ……83
50 堤三本柳遺跡1区出土遺物実測図（1/4） ……85
51 青柳古墳群1区遺構配置図（1/500） ……87
52 青柳古墳群1区SC-001実測図（1/80・1/40） ……90
53 青柳古墳群1区SC-002実測図（1/40） ……91
54 青柳古墳群1区ST-003実測図（1/80） ……93
55 青柳古墳群1区ST-003石室実測図（1/60） ……94
56 青柳古墳群1区ST-003石室閉塞石実測図（1/60） ……95
57 青柳古墳群1区SC-004実測図（1/40） ……96
58 青柳古墳群1区SC-005実測図（1/80） ……97
59 青柳古墳群1区SC-005石室実測図（1/40） ……98
60 青柳古墳群1区SC-006実測図（1/40） ……98
61 青柳古墳群1区SC-007実測図（1/40） ……99
62 青柳古墳群1区SC-009実測図（1/80） ……100
63 青柳古墳群1区SC-010実測図（1/80・1/40） ……101
64 青柳古墳群1区SC-011実測図（1/80） ……102
65 青柳古墳群1区SC-012実測図（1/40） ……103
66 青柳古墳群1区SC-013実測図（1/80） ……104
67 青柳古墳群1区SC-016実測図（1/40） ……105
68 青柳古墳群1区ST-017実測図（1/80） ……106
69 青柳古墳群1区ST-017石室実測図（1/60） ……107

70　青柳古墳群１区 SC-018実測図（１/40）……108
71　青柳古墳群１区 SC-020実測図（１/40）……109
72　青柳古墳群１区 SC-021実測図（１/80・１/40）……111
73　青柳古墳群１区 SC-022実測図（１/80）……112
74　青柳古墳群１区 SC-022石室実測図（１/40）……113
75　青柳古墳群１区 SC-023実測図（１/80・１/40）……115
76　青柳古墳群１区 SC-024実測図（１/40）……116
77　青柳古墳群１区 SC-025実測図（１/40）……117
78　青柳古墳群１区 SC-026実測図（１/80・１/40）……118
79　青柳古墳群１区 SC-027実測図（１/40）……119
80　青柳古墳群１区 SP-028実測図（１/80・１/40）……121
81　青柳古墳群１区竪穴式住居址実測図 SH-051・SH-065（１/80）……124
82　青柳古墳群１区土壙実測図(1)　SK-053～SK-056（１/60）……125
83　青柳古墳群１区土壙実測図(2)　SK-057～SK-059・SK-061・SK-069（１/60）……126
84　青柳古墳群１区土壙実測図(3)　SK-070～SK-081（１/60）……127
85　青柳古墳群１区土壙実測図(4)　SK-083～SK-085・SK-088（１/60）……128
86　青柳古墳群１区出土遺物実測図(1)（１/４）……137
87　青柳古墳群１区出土遺物実測図(2)（１/４）……138
88　青柳古墳群１区出土遺物実測図(3)（１/４）……139
89　青柳古墳群１区出土遺物実測図(4)（１/４）……140
90　青柳古墳群１区出土遺物実測図(5)（１/４）……141
91　青柳古墳群１区出土遺物実測図(6)（１/４）……142
92　青柳古墳群１区出土遺物実測図(7)（１/４）……143
93　青柳古墳群１区出土遺物実測図(8)（１/４）……144
94　青柳古墳群１区出土遺物実測図(9)（１/４）……145
95　青柳古墳群１区出土遺物実測図(10)（１/４）……146
96　青柳古墳群１区出土遺物実測図(11)（１/４）……147
97　青柳古墳群１区出土遺物実測図(12)（１/４）……148
98　青柳古墳群１区出土遺物実測図(13)（１/４）……149

表　目　次

Tab. 1　農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査協議一覧（平成７年度～９年度）……9
2　堤六本谷遺跡11区出土竪穴式住居址一覧表……18
3　堤六本谷遺跡11区出土掘立柱建物址一覧表……28
4　堤六本谷遺跡11区出土土壙一覧表……35
5　堤六本谷遺跡11区出土土製品・石器等一覧表……59

6　堤三本松遺跡２区土土壙一覧表……77
7　青柳古墳群１区出土土壙一覧表 ……122
8　青柳古墳群１区出土土製品・石器・鉄器等一覧表 ……136
報告書抄録

図版目次

巻頭図版
PL. 1　堤六本谷遺跡11区　全景
2　堤六本谷遺跡11区　全景
3　堤六本谷遺跡11区　調査区
4　堤三本松遺跡２区　全景
5　堤三本松遺跡２区　遺構集中部
6　堤三本柳遺跡１区　全景
7　青柳古墳群１区　全景
8　青柳古墳群１区　全景
図版
9　堤六本谷遺跡11区　遺構(1)
10　堤六本谷遺跡11区　遺構(2)
11　堤六本谷遺跡11区　遺構(3)
12　堤六本谷遺跡11区　遺構(4)
13　堤六本谷遺跡11区　遺構(5)
14　堤六本谷遺跡11区　遺構(6)
15　堤六本谷遺跡11区　遺構(7)
16　堤六本谷遺跡11区　遺構(8)
17　堤六本谷遺跡11区　遺構(9)
18　堤六本谷遺跡11区　遺構(10)
19　堤六本谷遺跡11区　遺構(11)
20　堤六本谷遺跡11区　遺構(12)
21　堤六本谷遺跡11区　遺構(13)
22　堤六本谷遺跡11区　遺構(14)
23　堤六本谷遺跡11区　遺構(15)・遺物(1)
24　堤六本谷遺跡11区　遺物(2)
25　堤六本谷遺跡11区　遺物(3)
26　堤六本谷遺跡11区　遺物(4)
27　堤六本谷遺跡11区　遺物(5)
28　堤六本谷遺跡11区　遺物(6)

29　堤六本谷遺跡11区　遺物(7)
30　堤六本谷遺跡11区　遺物(8)
31　堤六本谷遺跡11区　遺物(9)
32　堤六本谷遺跡11区　遺物(10)
33　堤六本谷遺跡11区　遺物(11)
34　堤六本谷遺跡11区　遺物(12)
35　堤六本谷遺跡11区　遺物(13)
36　堤六本谷遺跡11区　遺物(14)
37　堤六本谷遺跡11区　遺物(15)
38　堤六本谷遺跡11区　遺物(16)
39　堤六本谷遺跡11区　遺物(17)
40　堤六本谷遺跡11区　遺物(18)
41　堤六本谷遺跡11区　遺物(19)
42　堤六本谷遺跡11区　遺物(20)
43　堤六本谷遺跡11区　遺物(21)
44　堤六本谷遺跡11区　遺物(22)
45　堤六本谷遺跡11区　遺物(23)
46　堤六本谷遺跡11区　遺物(24)
47　堤六本谷遺跡11区　遺物(25)
48　堤六本谷遺跡11区　遺物(26)
49　堤三本松遺跡２区　遺構(1)
50　堤三本松遺跡２区　遺構(2)
51　堤三本松遺跡２区　遺構(3)・遺物
52　堤三本柳遺跡１区　遺構
53　堤三本柳遺跡１区　遺物
54　青柳古墳群１区　遺構(1)
55　青柳古墳群１区　遺構(2)
56　青柳古墳群１区　遺構(3)
57　青柳古墳群１区　遺構(4)
58　青柳古墳群１区　遺構(5)
59　青柳古墳群１区　遺構(6)
60　青柳古墳群１区　遺構(7)
61　青柳古墳群１区　遺構(8)
62　青柳古墳群１区　遺構(9)
63　青柳古墳群１区　遺構(10)
64　青柳古墳群１区　遺構(11)
65　青柳古墳群１区　遺構(12)

66　青柳古墳群１区　遺構⒀
67　青柳古墳群１区　遺構⒁
68　青柳古墳群１区　遺構⒂
69　青柳古墳群１区　遺構⒃
70　青柳古墳群１区　遺構⒄
71　青柳古墳群１区　遺物(1)
72　青柳古墳群１区　遺物(2)
73　青柳古墳群１区　遺物(3)
74　青柳古墳群１区　遺物(4)
75　青柳古墳群１区　遺物(5)
76　青柳古墳群１区　遺物(6)
77　青柳古墳群１区　遺物(7)
78　青柳古墳群１区　遺物(8)
79　青柳古墳群１区　遺物(9)
80　青柳古墳群１区　遺物⑽
81　青柳古墳群１区　遺物⑾
82　青柳古墳群１区　遺物⑿
83　青柳古墳群１区　遺物⒀
84　青柳古墳群１区　遺物⒁
85　青柳古墳群１区　遺物⒂
86　青柳古墳群１区　遺物⒃
87　青柳古墳群１区　遺物⒄
88　青柳古墳群１区　遺物⒅
89　青柳古墳群１区　遺物⒆
90　青柳古墳群１区　遺物⒇
91　青柳古墳群１区　遺物(21)
92　青柳古墳群１区　遺物(22)
93　青柳古墳群１区　遺物(23)
94　青柳古墳群１区　遺物(24)
95　青柳古墳群１区　遺物(25)
96　青柳古墳群１区　遺物(26)
97　青柳古墳群１区　遺物(27)
98　青柳古墳群１区　遺物(28)
99　青柳古墳群１区　遺物(29)

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置（Fig.1・2）

堤六本谷遺跡、堤三本松遺跡、堤三本柳遺跡および青柳古墳群が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町・北茂安町と、南部は同郡三根町と、西部は神埼郡東脊振村・三田川町と境を接している。また、この神埼郡との境界は、旧来の三根郡との郡界を踏襲しており、現在も町のほぼ中央を東西に横断する国道34号線付近の三田川町と接する地区は郡境と呼称されている。

鳥栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部に背振山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部には有明海へと続く沖積平野が展開するという、変化に富んだ地形が発達している。なかでも、山麓部から沖積平野部へ移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって浸食され北から南へ延びる舌状を呈した段丘を数多く形成している。そして、これらの段丘は古くから人々の生活の場として利用され、段丘上には数多くの遺跡が分布し、遺跡数、内容ともに県内でも有数の地域となっている。

そのようななか、南北に細長い町域をもつ上峰町においても、北部に山麓部、中央部に洪積世丘陵部、南部に沖積平野部と、この佐賀県東部の特徴的な地形が展開しており、中央部に発達する洪積世丘陵地域を中心に遺跡の分布が知られ、古くから「遺跡の宝庫」と呼ばれてきた。

今回調査を行った各遺跡が所在する町北部の大字堤地区は、中央を北部の鎮西山山麓を源とする切通川本流が小さく蛇行しながら南流し、これに幾条かの小河川が流入し支流を形成している。これら切通川本支流の浸食作用によって形成された谷底平野を境界として、堤地区には、大小の南北に延びる舌状丘陵が発達している。

平成７年度に調査を実施した堤六本谷遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字六本谷、一本柳に所在し、切通側東岸の標高24m～40m付近の洪積世丘陵上に位置している。遺跡が立地する丘陵は、鎮西山南麓から南西へ派生する丘陵（以下、青柳丘陵と呼称する。）で、東方の八藤遺跡、新立古墳群が立地する八藤丘陵とは切通川支流の大鳥井川によって、西方の屋形原遺跡が立地する丘陵（以下、屋形原丘陵と呼称する。）とは切通川本流によってそれぞれ分かたれている。この丘陵の中位段丘面には青柳古墳群が立地しており、丘陵周辺部の低位段丘面に遺跡は広がっている。

平成８年度に調査を実施した堤三本松遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本黒木、三本松に所在し、切通川西岸の標高36m～38m付近の洪積世丘陵上に位置している。遺跡が立地する丘陵は、鎮西山西方の神埼郡東脊振村との境界付近に位置する標高約70mの独立小丘から南東へ派生する屋形原丘陵の東辺からさらに南へ舌状に派生する低位段丘で、東方の鎮西山の南麓から広がり、堤五本松遺跡、青柳古墳群などが立地する丘陵とは切通川本流によって、西方の屋形原丘陵本体とは小浸食谷よってそれぞれ分かたれている。

平成９年度に調査を実施した堤三本柳遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字三本柳に所在し、鎮西山南麓から南へ派生する青柳丘陵の基部標高50m付近から、さらに西に派生する標高30m～50mの洪積世丘陵上に遺跡は位置している。

また、同年に堤三本柳遺跡とともに調査を行った青柳古墳群は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本柳、二本柳、六本谷に所在し、鎮西山南麓から県道佐賀川久保鳥栖線の南へ派生する青柳丘陵の中位段丘面および低位段丘下位面の標高30m～60m付近に位置しており、丘陵周辺部の低位段丘面には堤六本谷遺跡が広がっている。

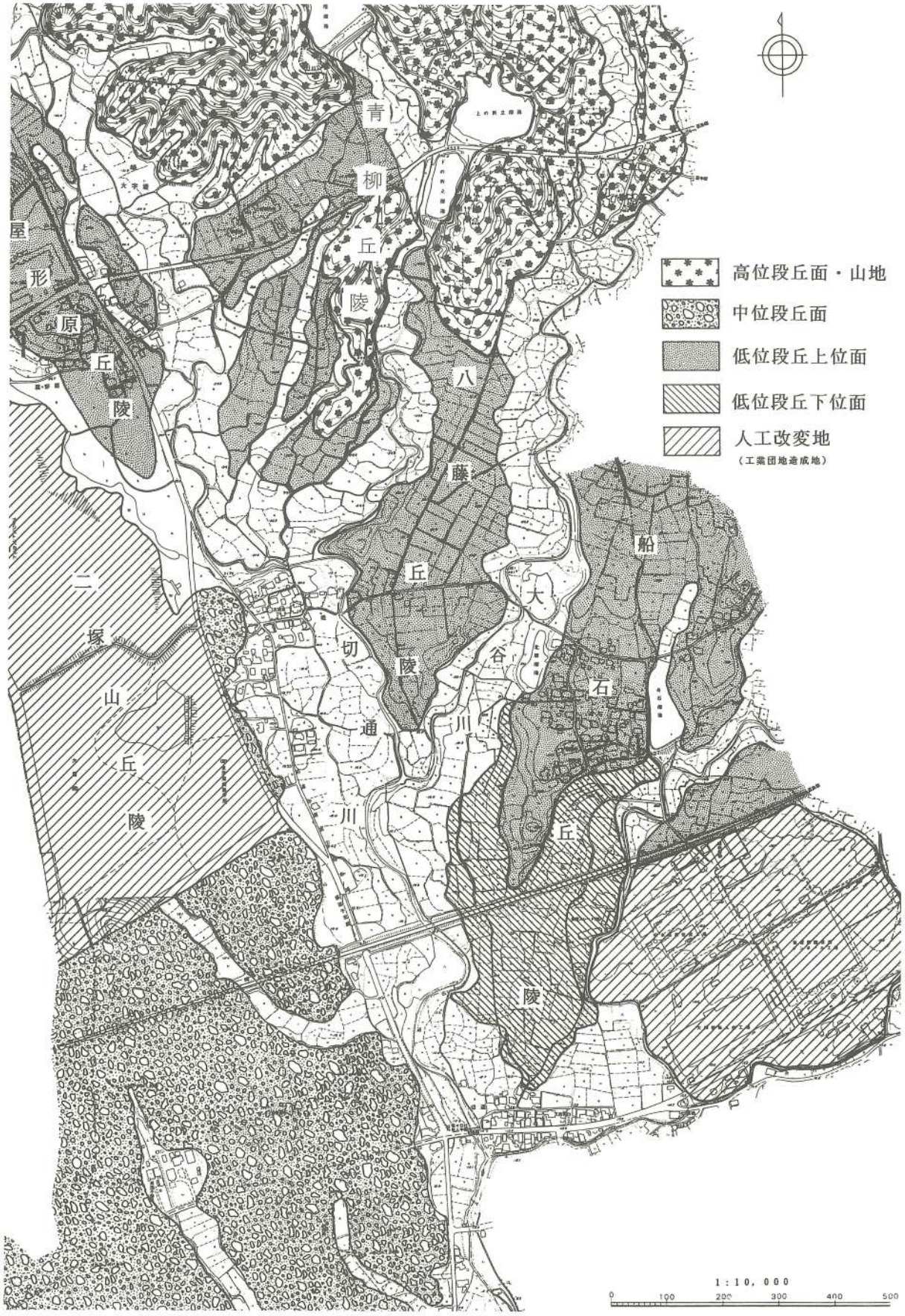


Fig. 1　上峰町北部地形概略図（1/10,000）

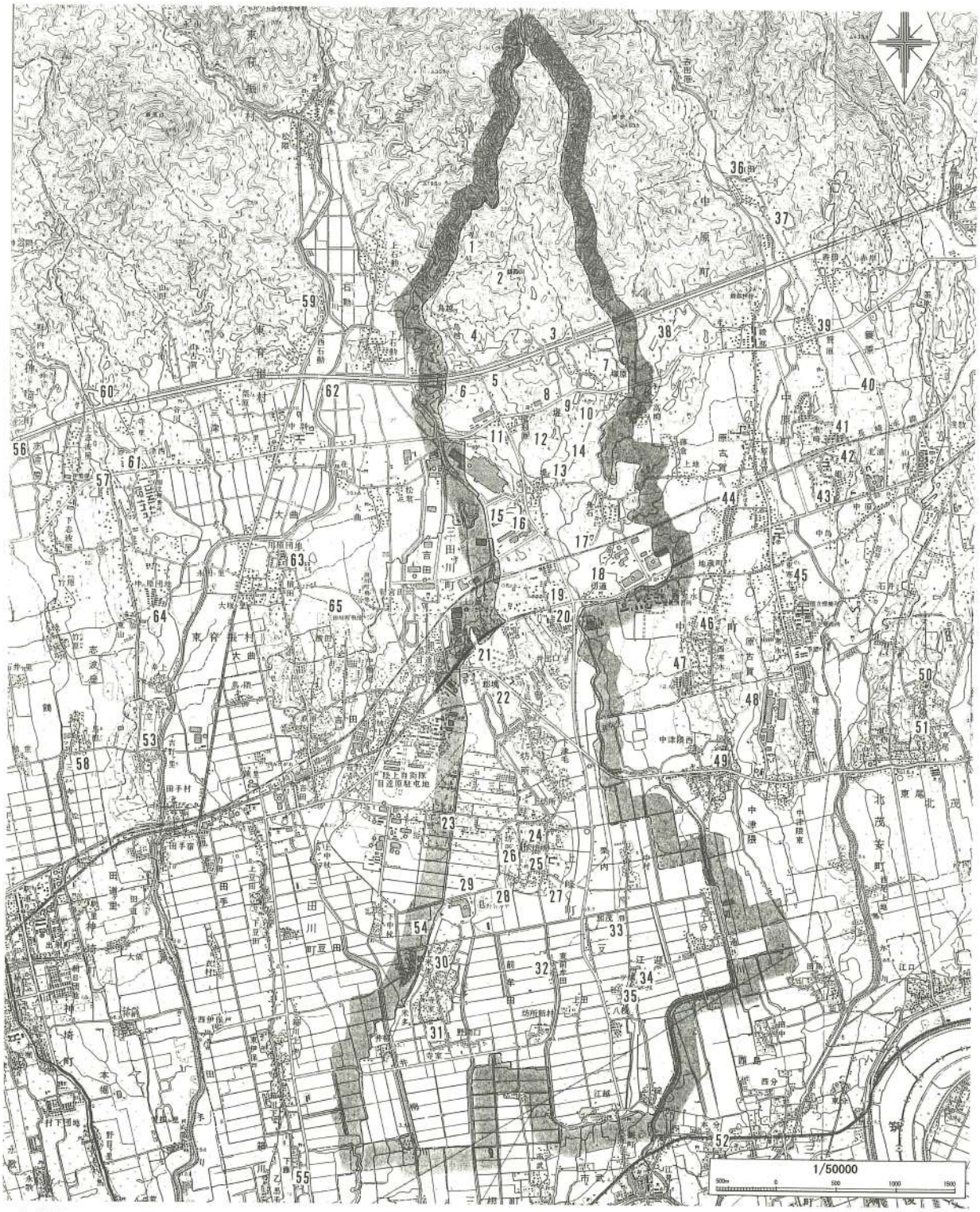
2．歴史的環境（Fig. 2）

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述のとおり、山麓部から洪積世丘陵部におよぶ一帯が古くから人々の生活の舞台となっており、山麓部および各段丘上には、現在、遺跡の存在が知られ、県内においてもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の分布密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵部のほとんどが、各時代の集落あるいは墓域として占有され、とりわけ、弥生時代以降の遺跡を縄文時代以前の遺跡と比較すると、量的にも、質的にも爆発的に増加、充実する。銅鐸の鋳型を出土した鳥栖市安永田遺跡[1]、約400基の甕棺墓が検出された中原町姫方遺跡[2]、12本の銅矛を埋納した北茂安町検見谷遺跡[3]、甕棺墓から舶載鏡を出土した神埼郡東脊振村三津永田遺跡[4]、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構、遺物が検出された神埼郡三田川町・神埼・東脊振の２町１村にまたがる吉野ケ里遺跡[5]など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ弥生時代の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。南北約12㎞、東西約３㎞と南北に細長い町域を持つ本町においても同様で、町の北部から中央部を占める洪積世段丘上に弥生時代を中心に各時代の遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡についてみると、各段丘の層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の出土、採取にとどまっている。町内では、平成４年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の調査において細石刃１点とこの時期のものと考えられる石器類が少量出土しているが、これが発掘調査における主な出土例である[6]。周辺地域では、神埼郡三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器の採取例が報告されている[7]。また、平成５年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡下層における阿蘇４火砕流跡と埋没林に係る調査において、先土器時代の年代示標となっている姶良-Tn 火山灰（AT）の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査において遺構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風積土層の最上部付近でアカホヤと伴に検出されている[8]。

縄文時代になると、中原町香田遺跡[9]や東脊振村戦場ヶ谷遺跡[10]などが出現する。町内においても、これまでも町北部の丘陵部から土器や石器が、耕作や先覚者の遺跡の表面観察などによって断片的に出土、採取されていたが、この度の上峰北部農業基盤整備事業に伴う発掘調査の結果、平成元年度の船石遺跡11区[11]、平成２年度から５年度にわたり実施した八藤丘陵の調査[12]において、遺構や遺物がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数や規模、その内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから『魏志倭人伝』の「弥奴国」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に所属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町の南部や中央部の米多地区、坊所地区の丘陵部は、中世以降集落として発達し、早くから宅地化が進み、本格的な発掘調査の例に乏しく、わずかに再開発に伴い部分的に小規模の発掘調査が行われているに過ぎず、遺跡の詳細について把握できていないのが現状である。これに対して、町北部の堤地区周辺では、近年の工業団地建設や農業基盤整備事業など大型開発に伴い広範囲かつ大規模な発掘調査が実施され、各遺跡から当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的な遺跡としては、甕棺墓から細形銅剣や貝釧を出土した切通遺跡[13]、神埼郡東脊振村、三田川町にまたがる、佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い甕棺墓、土壙墓など約300基が調査され、舶載鏡、小型仿製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡[14]、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡[15]、地区運動公園整備に伴う調査で５世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の甕棺墓が検出された船石遺跡[16]などが



上峰町
1 奥の院古墳群
2 鎮西山山城
3 二本柳古墳群
4 鎮西山南麓古墳群
5 **堤三本松遺跡**
6 屋形原古墳群
7 谷渡古墳群
8 **堤三本柳遺跡**
9 **青柳古墳群**
10 新立古墳群
11 屋形原遺跡
12 **堤六本谷遺跡**
13 堤土塁跡
14 八藤遺跡
15 二塚山遺跡
16 五本谷遺跡
17 船石遺跡
18 船石南遺跡
19 切通遺跡
20 一本谷遺跡
21 坊所一本谷遺跡
22 上のびゅう塚古墳
23 目達原古墳群
24 坊所城跡
25 樫寺遺跡
26 杉寺遺跡
27 坊所二本松遺跡
28 坊所三本松遺跡
29 塔の塚廃寺跡
30 上米多貝塚
31 米多城跡
32 前牟田城跡
33 加茂環濠集落跡
34 江迎城跡
35 一ノ橋環濠集落跡
中原町
36 山田蔵骨器出土地
37 山田古墳群
38 大塚古墳
39 八幡社遺跡
40 簑原遺跡
41 姫方遺跡
42 姫方前方後円墳
43 姫方原遺跡
44 ドンドン落遺跡
45 町南遺跡
46 天神遺跡
47 西寒水遺跡
北茂安町
48 宝満谷遺跡
49 宝満宮前方後円墳
50 大塚古墳
51 東尾銅剣出土遺跡
三根町
52 本分貝塚
三田川町
53 吉野ヶ里丘陵遺跡群
54 下中杖遺跡
55 下藤貝塚
神埼町
56 志波屋六本松遺跡
57 伊勢塚前方後円墳
58 馬郡遺跡
東脊振村
59 西石動古墳群
60 戦場ヶ谷遺跡
61 三津永田遺跡
62 西石動遺跡
63 松原遺跡
64 辛上廃寺跡
65 横田遺跡

Fig. 2　堤六本谷遺跡・堤三本松遺跡・堤三本柳遺跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000）

知られている。また、この度の県営農業基盤整備事業に伴う調査においても、船石遺跡[17]、船石南遺跡[18]、八藤遺跡[19]から住居址や甕棺墓などが多数検出されている。

古墳時代になるとこの地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中原町姫方原遺跡[20]、上峰町五本谷遺跡[21]などにおいて方形周溝墓が営まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から佐賀郡大和町に至る山麓や丘陵部に大型の前方後円墳が出現する。鳥栖市剣塚古墳[22]、中原町姫方古墳[23]、上峰町西南部から神埼郡三田川町にまたがる目達原古墳群[24]、神埼郡神埼町伊勢塚古墳[25]、佐賀市銚子塚古墳[26]、佐賀郡大和町船塚古墳[27]など佐賀県東部の代表的な古墳が築かれるようになる。さらに後期になると、現在長崎自動車道や県道佐賀川久保鳥栖線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが山麓部の尾根や谷あるいは丘陵を単位として後期古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』にみえる三根郡綾部（あやべ）・米多（めた）郷に属する当時の上峰町一帯は、『古事記』、『国造本紀』などの記事によれば応神天皇の曾孫にあた「都紀女加（つきめか）」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南西部の米多地区から神崎郡三田川町東部の目達原（めたばる）一帯にあったと推定されている。町内の主要な古墳としては、都紀女加を始祖とする米多国造一族の墳墓として、５世紀代後半に形成されたと考えられる上のびゅう塚（現在、陵墓参考地「都紀女加王墓」宮内庁管轄）はじめ無名塚、大塚、稲荷塚などの前方後円墳６基ほか古稲荷塚など円墳数基からなる目達原古墳群[28]が知られていたが、戦前の陸軍飛行場建設の際に、唯一上のびゅう塚を残し他の古墳は簡単な発掘調査後破壊されている。また町の北部の古墳としては、同じく５世紀代の古墳で、蛇行状鉄剣、蛇行状鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳１～３号墳[29]が知られている。古墳時代後期の古墳としては、町北部の鎮西山の周辺山麓部から高位段丘上にかけて、小円墳を主体とする谷渡、青柳、新立、奥の院、鎮西山南麓、屋形原などの古墳群が点在している。

一方、この時期の集落は、神崎郡三田川町下中杖遺跡[30]、同郡東脊振村下石動遺跡[31]などが知られているが、弥生時代集落に比べ、遺跡そのものの数も少なく、調査例も少なくいまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的な発掘調査の例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中杖遺跡、東脊振村辛上廃寺跡[32]、霊仙寺跡[33]などが著名であるが、この時期の遺跡についてもまとまった調査例が少なく、実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条里制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。また、大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土塁跡[34]や塔の塚廃寺跡[35]などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間の谷底平野を遮断する形で築かれた堤土塁跡は、版築工法により築かれた福岡県の水城に似た施設＝「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、灌漑用水確保のための溜池の堤防であるとする説など議論がなされてきたが、平成２年度からの土塁の東方に接する八藤丘陵の調査において、土塁東端から一直線に八藤丘陵を東方へ横断する道路側溝状の遺構が検出され[36]、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されることとなった。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚廃寺跡は、百済系単弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。また町内における奈良・平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査や町内の大規模小売店舗建設に先立つ坊所一本谷遺

跡[37]の調査などでまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、町南部の平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られていた[38]。しかし、昭和40年代後半からの圃場整備事業によって、これら平野部の遺構は、原状がほとんど失われてしまった。そのようななかで、町の親水公園として整備された江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が建物跡ともに出土し、また、坊所城跡では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している[39]。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と呼ぶにふさわしい地域といえる。

註

1）藤瀬禎博・石橋新次　『柚比遺跡群範囲確認調査第３年次概要報告書』　鳥栖市文化財調査報告書第30集　鳥栖市教育委員会　1980
2）木下巧・天本洋一　『姫方遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第30集　佐賀県教育委員会　1974
3）七田忠昭　『検見谷遺跡』　北茂安町文化財調査報告書第２集　北茂安町教育委員会　1986
4）金関丈夫・坪井清足・金関恕　「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』　日本考古学協会　1961
5）七田忠昭他　『吉野ヶ里』　佐賀県文化財調査報告書第113集　佐賀県教育委員会　1992
6）原田大介　『八藤遺跡Ⅲ』　上峰町文化財調査報告書第16集　上峰町教育委員会　1999
7）七田忠志　「原始」『上峰村史』　上峰村　1979
8）下山正一・西田民雄　「Ⅱ．佐賀県上峰町周辺の地形と地質」『佐賀平野の阿蘇４火砕流と埋没林』　上峰町文化財調査報告書第11集　上峰町教育委員会　1994
9）高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋　「香田遺跡」『香田遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書２　佐賀県文化財調査報告書第57集　佐賀県教育委員会　1981
10）七田忠志　「佐賀県戦場ケ谷遺跡」『史前学雑誌』　６－２・４　1934
11）原田大介　『船石遺跡Ⅴ』　上峰町文化財調査報告書第12集　上峰町教育委員会　1995
12）原田大介　『八藤遺跡Ⅱ・堤土墨跡Ⅱ』　上峰町文化財調査報告書第14集　上峰町教育委員会　1998
前出(6)
13）金関丈夫・金関恕・原口正三　「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』　日本考古学協会　1961
14）高島忠平・七田忠昭他　「二塚山遺跡」『二塚山』　佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979
15）七田忠昭　『一本谷遺跡』　上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
16）七田忠昭　『船石遺跡』　上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
17）鶴田浩二・原田大介　『船石遺跡Ⅱ図録編』　上峰村文化財調査報告書第６集　上峰村教育委員会　1988
鶴田浩二・原田大介　『船石遺跡Ⅱ本文編』　上峰村文化財調査報告書第７集　上峰村教育委員会　1989
18）昭和60、62年度、上峰村教育委員会調査、整理中
19）原田大介　『八藤遺跡Ⅰ』　上峰町文化財調査報告書第13集　上峰町教育委員会　1997
20）木下巧他　『姫方原遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第33集　佐賀県教育委員会1976
21）木下　巧・七田忠昭　「五本谷遺跡」『二塚山』　佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979
22）石橋新次　『剣塚前方後円墳』　鳥栖市文化財調査報告書第22集　鳥栖市教育委員会　1984
23）前出(2)
24）松尾禎作　「目達原古墳群調査報告」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』　第９輯　佐賀県教育委員会　1950
25）木下之治　「古代国家の形成」『佐賀県史』佐賀県　1968
26）木下之治編　『銚子塚』　佐賀市教育委員会1976
27）松尾禎作　『佐賀県考古大観』　祐徳博物館　1959
28）前出(24)
29）前出(16)
30）七田忠昭・高山久美子・西田和己　『下中杖遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第54集　佐賀県教育委員会　1980
31）高瀬哲郎他　「下石動遺跡」『下石動遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6)　佐賀県文化財調査報告書第86集　佐賀県教育委員会　1987

32）松尾禎作　「東脊振村辛上廃寺跡の調査」　『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第５輯　佐賀県　1936
33）田平徳栄他　『雲仙寺跡』　東脊振村文化財調査報告書第４集　東脊振村教育委員会　1980
34）高島忠平・柾一義　『堤土塁跡』　上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1978
35）松尾禎作　「塔の塚廃寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』　第７輯　佐賀県　1940
36）前出(12)
37）平成５、６年度、上峰町教育委員会調査、整理中
38）米倉二郎　「中世」『上峰村史』　上峰村　1979
39）原田大介　『坊所城跡』　上峰町文化財調査報告書第10集　上峰町教育委員会　1992

Ⅱ．調査に至る経緯

上峰町は、昭和30年代までは純農村として、近世以来の水田耕作を主とした農業経営が連綿として行われてきた。しかし、戦後の激変する社会・産業の構造は、労働力の都市部への流出などを招き、旧来の農業経営による農家経済を圧迫する事態となった。この農家経済の行き詰まりを打開するためには、近代的な大型圃場と農地の集団化を併せ行い、高度の農業生産技術と大型機械の一貫作業体系の導入により、労働生産性の向上と農業経営の合理化による農家所得の増大を図る必要があった。

佐賀県では、昭和38年度より県営農業基盤整備事業の計画が策定され、昭和41年度より事業が開始された。上峰町においても、昭和42年度にモデル事業として町南部の碇地区を対象に事業が実施され、昭和46年度以降、町の中央部を東西に横断する国道34号線以南の沖積平野に広がる町南部の圃場を対象に昭和58年度まで事業が実施された。

一方、国道34号線以北の大字堤地区の耕地は、洪積世丘陵と切通川本支流の浸食谷底平野からなっており、地区の１戸当たりの平均耕地面積は約0.6haと県平均を下回り、用水源には河川、溜池があてられていたが、いずれも用水確保が不十分であり、慢性的な用水不足を来していた。また、圃場は不整形で散在し、道路は狭く未整備で機械導入も困難で圃場条件は極めて悪かった。このため、昭和58年度より、堤地区を対象とした上峰北部農業基盤整備事業の実施に向けた調査計画が開始され、昭和60年度より事業が実施されるに至った。

しかし、地形的制約の上に成り立ってきた従来の耕地の集団化、道路・用排水路の整備を目的とした農業基盤整備事業の実施は、一方では土地の大規模な改変を必要とし、ひいては地下の埋蔵文化財に工事の影響を及ぼすことが予想され、今日的要求と埋蔵文化財の保護との調整という問題が文化財保護行政の大きな課題となった。この課題の解決策として、佐賀県においては、農業基盤整備事業とこれに伴う埋蔵文化財の保護との調整について、県農林部と県教育委員会との間で「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」（昭和53年４月締結、昭和59年４月一部改正。）という覚書を交わし、現在この確認事項に基づき、県農林部、県教育委員会、市町村土地改良担当課、市町村教育委員会の関係機関四者による協議が行われ、事業の実施面積の調整、工事の設計変更などによる埋蔵文化財発掘調査面積の縮小など、文化財の保護に関する調整が行われてきた。

この調整は、「農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する協議会」にて実施されており、具体的には、例年以下の手続きを踏んでいる。

(1)　「第１回協議会」（毎年10月中旬）

次年度の農業基盤整備事業実施計画が提示され、当該区域内の埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、埋蔵文化財確認調査の要不要を確認する。

(2)　確認調査（10月中旬～12月上旬）

次年度の農業基盤整備事業実施計画地区内について遺構の有無・密度・内容、遺構面までの表度の深度等を把握する。

(3)　「第２回協議会」（毎年12月中旬）

確認調査の結果を基に、事業計画の設計変更など本調査面積の縮小につとめ、必要最小限の部分を次年度埋蔵文化財本調査区域とする。

上峰町における上峰北部農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する協議調整は、昭和59年９月に、県

農業基盤整備事業担当部局から県教育委員会に昭和60年度農業基盤整備事業施工計画が提出され、国道34号線以北、ＪＲ長崎本線以南の耕地について農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて協議をもったことに始まる。以後、毎年この協議を経て農業基盤整備事業と埋蔵文化財の保護との調整を行っている。

今回報告する堤六本谷遺跡・堤三本松遺跡・堤三本柳遺跡・青柳古墳群を含む地域についての埋蔵文化財の取扱いについての協議、調整は以下のとおりであった。

平成３年10月17日、「平成４年度農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する協議会」（第１回）が開催された。協議の結果、平成４年度以降の農業基盤整備事業の対象地区のうち、確認調査が未実施の区域について、確認調査を実施することとなった。

確認調査は、県道富士中原停車場線の東側で長崎自動車道と県道佐賀川久保鳥栖線の間の耕地、さらに県道佐賀川久保鳥栖線以南では塚原集落付近の谷水田部、八藤丘陵北部付近、青柳丘陵およびその周辺の田面、耕地約18.2haを対象に、稲刈り終了をまって実施した。調査は、２ｍ×２ｍの試掘溝を約20ｍ間隔で設定し、実施した。その結果、青柳丘陵では、県道佐賀川久保鳥栖線以北の区域で青柳古墳群および堤三本柳遺跡が立地する低位段丘上位面から遺構が検出され、同県道以南の区域では堤六本谷遺跡が立地する低位段丘下位面部分において遺構が検出された。また、長崎自動車道の南の区域では、屋形原丘陵の東辺から小半島状に派生する低位段丘下位面に位置する堤三本松遺跡で遺構が検出された。

このように今回報告する４遺跡についての確認調査は平成３年度に実施したが、平成４年度から６年度までは農業基盤整備事業が他の工区を対象に実施され、平成７年度になって県道佐賀川久保鳥栖線以南の堤六本谷遺跡を含む区域が事業の対象となり、以後、平成８年度には堤三本松遺跡を含む区域、平成９年度には青柳古墳群および堤三本柳遺跡を含む区域を対象に事業が実施されることとなった。年度ごとの「農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する協議会」において遺跡の取扱いについての協議を行い、最終的に、以下のとおり、事業予定地区内の遺跡について、事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

Tab. 1　農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査協議一覧（平成７年度～９年度）

年度	「文化財の保護に関する協議会」		遺跡名	調査地区名	調査面積
	第１回	第２回			
平成７年度	平成６年10月11日	平成６年12月16日	堤六本谷遺跡	11区	9,750㎡
平成８年度	平成７年10月11日	平成７年12月15日	堤三本松遺跡	２区	1,875㎡
平成９年度	平成８年10月14日	平成８年12月18日	堤三本柳遺跡	１区	625㎡
			青柳古墳群	１区	5,000㎡

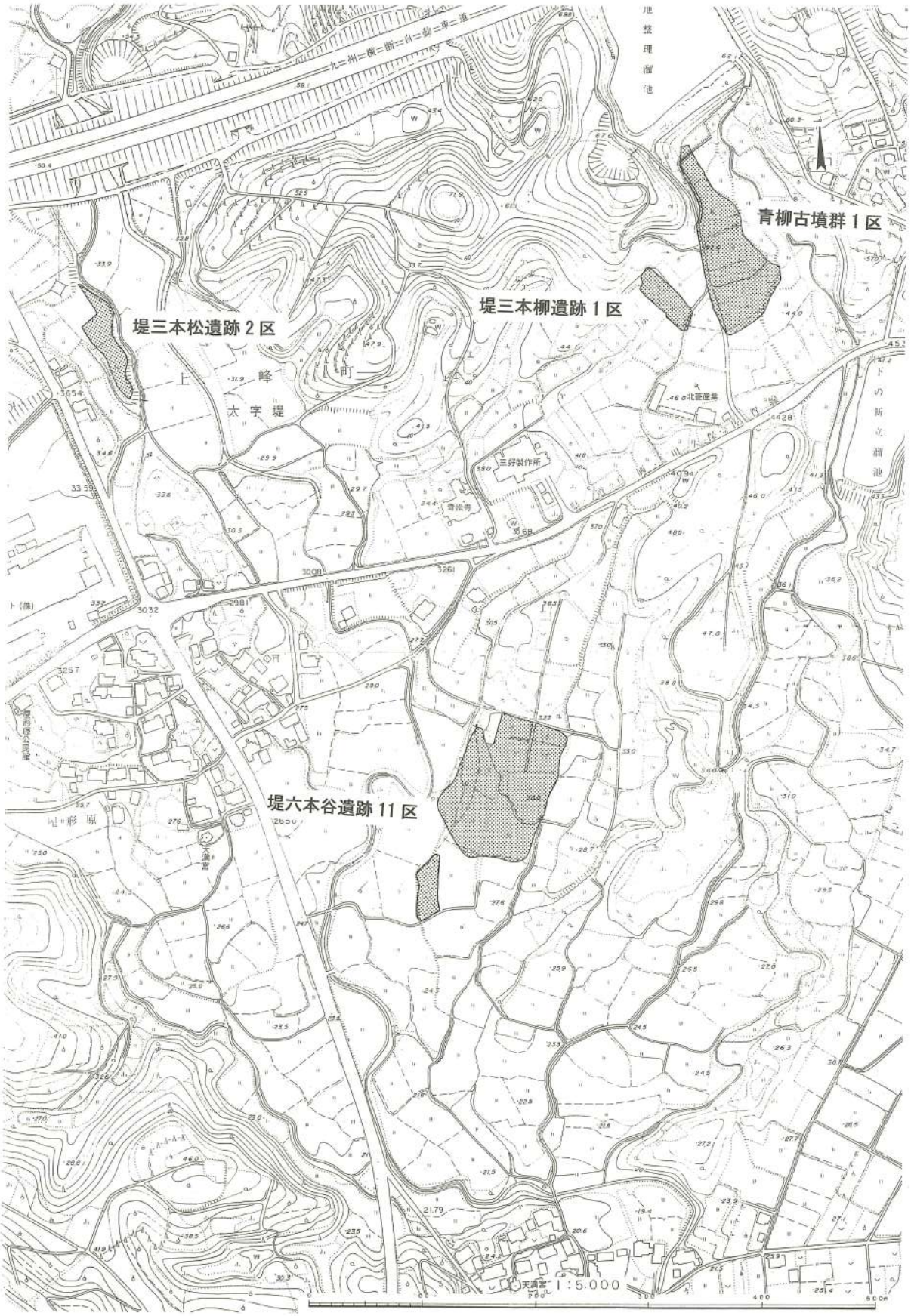


Fig. 3　堤六本谷遺跡・堤三本松遺跡・堤三本柳遺跡・青柳古墳群周辺地形図及び調査区位置図（1/5,000）

Ⅲ．平成７年度堤六本谷遺跡11区の調査

１．堤六本谷遺跡と調査区の概要（Fig. １、３・PL. １～３）

堤六本谷遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本柳、六本谷の「青柳丘陵」と呼称する洪積世段丘の先端部（標高25m～35m付近）に位置している。青柳丘陵は、鎮西山南麓から派生し、長崎自動車道を横断し、さらに県道佐賀川久保鳥栖線の南へと舌状に延びる丘陵となっており、東方の八藤丘陵、西方の屋形原丘陵とは、それぞれ、東は切通川支流の大鳥居川、西は切通川本流によって分たれている。

本丘陵上には、県道以南の中位段丘（標高30m～45m付近）上に小円墳が点在しており、青柳古墳群の名称で周知の埋蔵文化財包蔵地として知られていたものの、中位段丘面の周辺に広がる低位段丘上位面については、これまで埋蔵文化財の所在の有無については不明であった。

しかし、農業基盤整備事業施工予定地区を対象とし、平成元年度および平成３年度に実施した埋蔵文化財確認調査によって、この低位段丘部分において弥生時代、奈良時代、近世の遺構・遺物が検出され、全体で20,000㎡ほどの集落遺跡が所在していることが判明し、堤六本谷遺跡の名称で新たに周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこととなった。また同時に、本遺跡の南方約200m付近には、東の八藤丘陵と西の二塚山丘陵の間の谷部を東西に遮断する形で堤土塁跡が築かれており、遺跡がこの後背地にあたることから、堤土塁の築造目的解明につながるような遺構の存在も期待された。

遺跡が立地する大字堤字一本柳、六本谷地区の青柳丘陵先端部にあたる低位段丘上位面は、前述のように中位段丘面の周辺に発達しているが、小水路によって浸食された小谷によりいくつかの支丘に分かれヤツデの葉状を呈している。現在は、主に水田あるいは畑として利用されている。

堤六本谷遺跡のうち、平成７年度の埋蔵文化財発掘調査の対象となった区域は、大字堤字一本柳地区で、現屋形原集落東方の切通川東岸の標高30m～35m付近の低位段丘面で、農業基盤整備事業の施工によって削平が予定されている部分9,750㎡部分について、11区の調査区名で調査を実施した。

発掘調査は、調査対象区域全域にまたがる部分に座標北を基準とする10m×10mグリッドを東西列東からＡ～Ｐの16列、南北列北から５～25の21列を設定、これを基準に実施した。

調査区域は、堤六本谷遺跡が立地する支丘の鞍部に当たり、調査区域のほぼ全域で竪穴式住居址、掘立柱建物址はじめ土壙などが検出された。

調査区域の土層は、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層は失われ、耕作土の直下が洪積世丘陵を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

堤六本谷遺跡の今回の調査では、古墳時代の竪穴式住居址11軒、奈良時代の竪穴式住居址６軒、出土遺物が無いかあっても少量で時期を特定しがたいもの８軒の合計25軒、掘立柱建物址12棟、土壙107基、その他溝跡、ピットなどが検出された。これらの遺構に伴い、土師器、須恵器を中心に若干の遺物が出土した。

２．調査の経過

平成７年度の農業基盤整備事業に伴う発掘調査は、圃場基盤造成工事により面的に削平が予定される部分9,750㎡について便宜的に11区の調査区名を冠して実施した。現地での調査は、平成７年６月２日に着手し平成８年１月31日まで現場にて作業を行った。以下簡略に調査経過を記す。

６月２日、調査区の表土剥ぎに着手した。６月後半から７月下旬まで梅雨の時期で作業は進捗しなかった。

7月10日、作業員を召集し、現地にて簡単な発掘調査の安全祈願を行った後、発掘機材の搬入・休憩所に使用するテント設営など行い、午後から作業員の人力による遺構検出作業を開始した。以後、調査区北側の表土剥ぎが終了した部分について、遺構検出作業に着手、検出された遺構は土壙やピットなどの遺構から逐次掘り下げ作業もあわせて行い、必要に応じて遺構の写真撮影を行った。

梅雨明けの7月後半からは天候にも恵まれ、調査の範囲を調査区中央部へと拡大していった。

7月24日、これまでに検出した住居址などの遺構の掘り下げ作業に着手。

8月12日から16日まで、お盆に伴い作業休止。

8月17日、お盆の連休後も重機による表土剥ぎと作業員による遺構検出、掘り下げ作業、記録作業を併行して続けた。

10月25日、調査区南部の飛び地部分の表土剥ぎを終了。

11月6日より調査区全域の測量杭打ちに着手。以後、遺構の実測作業を開始。

この間も、遺構の検出、掘り下げ作業を進め、調査区南部へと範囲を拡大して行った。

12月23日から平成8年1月7日まで年末年始のため、作業休業。

1月17日、SX-266の掘り下げを最後に、遺構の掘り下げ作業終了。その後、各遺構から出土した遺物の取り上げ作業、各遺構の個別の写真撮影、全体の清掃作業などを行い、1月23日、調査区全体の気球写真撮影。

1月31日、遺構の実測作業が終了し、現場での作業を終了した。

その後、出土遺物、記録類を文化財整理事務所へ移し、年度末まで、遺物の水洗い、実測図、写真類の整理などを同事務所にて実施し、平成7年度の作業を終了した。

3．遺　構（Fig. 4～29・PL. 1～3、9～23・Tab. 2）

11区の調査で検出された遺構は、古墳時代の竪穴式住居址11軒、奈良時代の竪穴式住居址6軒、出土遺物が無いかあっても少量で時期を特定しがたいもの8軒の合計25軒、掘立柱建物址12棟、土壙107基、その他溝跡、ピットなどであった。

(1) 竪穴式住居址（Fig. 4～12・PL. 3、9～14）

今回の調査で検出された竪穴式住居址は、25軒であった。各住居の年代は出土遺物などから、SH-125、SH-144、SH-158、SH-160、SH-161、SH-174、SH-175、SH-190、SH-193、SH-212、SH-219などが古墳時代後期の所産、SH-137、SH-145、SH-156、SH-157、SH-163、SH-164などが奈良時代の所産になるものと考えられる。

SH-125（Fig. 5・PL. 9）

SH-125は、D-14Gr. で検出された方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約3.5m×短辺約3.1m、床面積9.2㎡。主柱穴は2本。住居南東壁の中央よりやや南によった位置にカマドをもつ。カマドは潰れた状態で検出され、構築材と思われる山砂や焼土が約0.7m×0.7mの範囲で壁際にうず高く堆積している。床面までの掘り込みの深さは20㎝程度。主軸は、N-36°-Eである。

SH-136（Fig. 5・PL. 9）

SH-136は、E-13Gr. で検出されたやや不整な小型の方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約2.7m×短辺約2.6

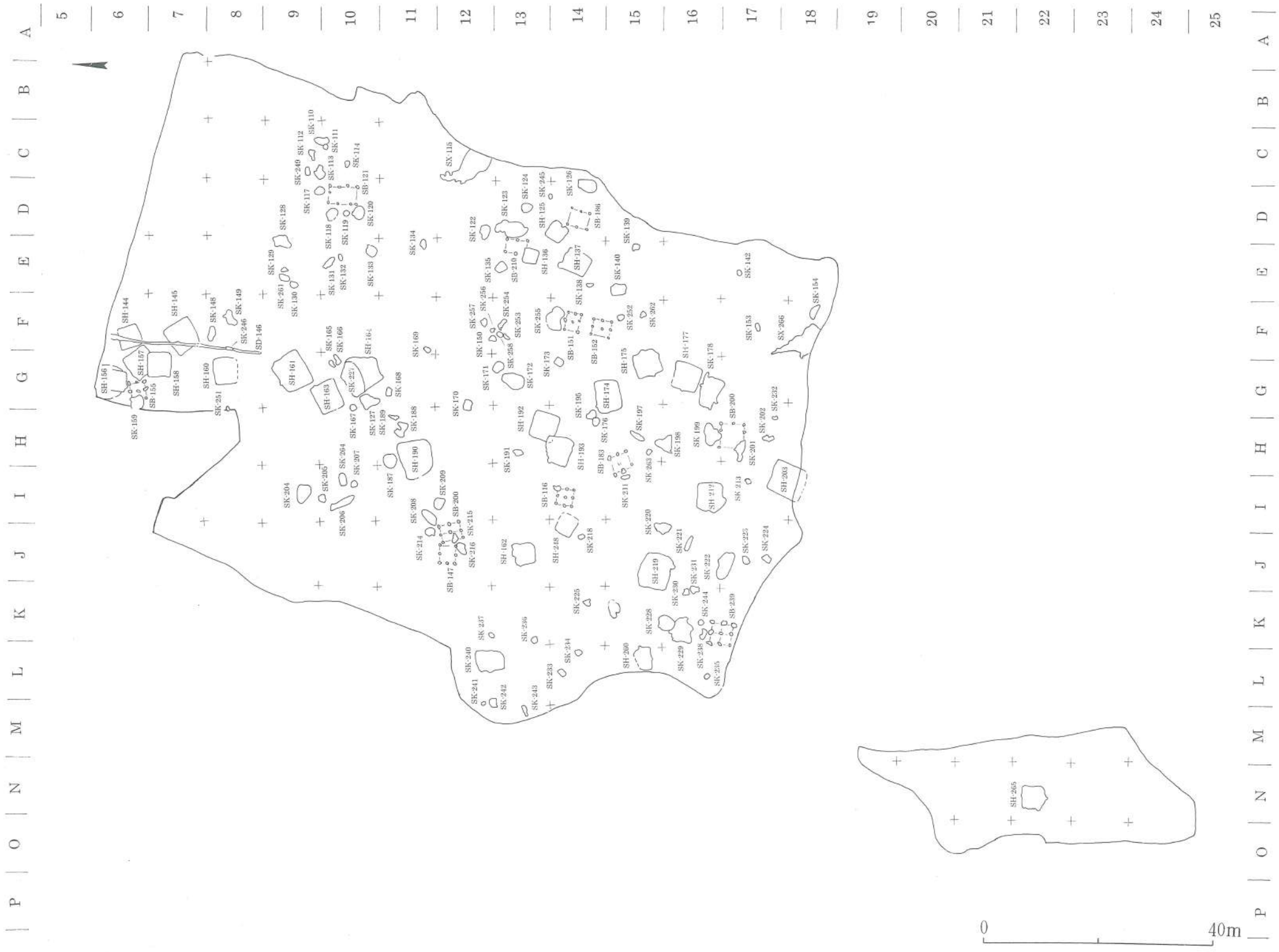


Fig. 4　堤六本谷遺跡11区遺構配置図（1/800）

m、床面積は5.8㎡。床面に柱穴状のピットは見られるものの、主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは20㎝弱。主軸は、長辺を基準にするとN-13°-Eである。

SH-137（Fig.5・PL.9）

SH-137は、E-14Gr.で検出されたやや不整な長方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約4.3m×短辺約3.8m、床面積は15.2㎡。主柱穴は4本。住居南壁の中央にカマドをもつ。カマドは潰れた状態で検出され、構築材と思われる山砂や焼土が約0.9m×0.8mの範囲で壁際にうず高く堆積している。カマド焚き口部分に0.9m×0.7m、深さ0.4mの楕円形の貯蔵穴をもつ。また、住居北壁中央に2段の階段状の張り出しをもち、この部分が入り口かと推定される。床面までの掘り込みの深さは30㎝弱。主軸は、長辺を基準にするとN-25°-Eである。

SH-144（Fig.5・PL.10）

SH-144は、F-6Gr.で検出されたやや不整な方形の竪穴式住居址。住居の一部を後世の溝跡に切られている。規模は、長辺約4.2m×短辺約3.8m、床面積は13.6㎡。床面にピットを1本もつが浅く、主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは20㎝程度。主軸は、長辺を基準にするとN-19°-Wである。

SH-145（Fig.6・PL.10）

SH-145は、F-7Gr.で検出されたやや不整な方形と推定される竪穴式住居址。掘り込みは浅く、住居の南東壁の全部および南西壁の一部を失っており、さらに後世の溝跡に切られている。規模は、一辺5.2m程、床面積は推定で24.5㎡程度。床面にピットをもつが、主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは、深いところで15㎝程度。主軸は、長辺を基準にするとN-36°-Eである。

SH-156（Fig.6・PL.10）

SH-156は、G-6Gr.で検出された方形と推定される竪穴式住居址。後世の溝跡に切られ住居の北壁部を失っている。規模は、一辺3.5m程、床面積は遺存部で7.7㎡程度。主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは50㎝程度。主軸は、長辺を基準にするとN-9°-Eである。

SH-157（Fig.6・PL.11）

SH-157は、G-6Gr.で検出された方形の竪穴式住居址。住居の南隅をSH-158に切られている。規模は、長辺約4.9m×短辺約4.7m、床面積は推定で21.3㎡。床面にピットを2本もつが、主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは20㎝程度。主軸は、長辺を基準にするとN-38°-Wである。

SH-158（Fig.7・PL.11）

SH-158は、G-7Gr.で検出された隅丸方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約4.4m×短辺約4.3m、床面積は16.8㎡。住居北壁際に貯蔵穴と考えられる径70㎝、深さ35㎝程の土壙をもつ。主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは40㎝弱。主軸は、長辺を基準にすると南北方向を主軸とする。

SH-160（Fig. 7・PL. 11）

SH-160は、G-8Gr. で検出された方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約4.6m×短辺約4.2m、床面積は16.6㎡。床面にピットをもつが、主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは25㎝程度。主軸は、長辺を基準にするとN-83°-Eである。

SH-161（Fig. 7・PL. 12）

SH-161は、G-9Gr. で検出された方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約5.6m×短辺約5.4m、床面積は23.8㎡。住居の東側壁際に幅20㎝～30㎝、深さ10㎝程の周溝がめぐる。主柱穴は4本。床面までの掘り込みの深さは25㎝程度。主軸は、長辺を基準にするとN-53°-Eである。

SH-162（Fig. 8・PL. 12）

SH-162は、J-13Gr. で検出されたやや不整な方形の竪穴式住居址。規模は、一約3.8m、床面積は13.0㎡。住居の北壁ほぼ中央部分にカマド構築材が堆積し壁外側には煙道施設であろうか馬蹄形の張り出しをもつ。主柱穴は4本。床面までの掘り込みの深さは10㎝程度。主軸は、N-12°-Wである。

SH-163（Fig. 8・PL. 12）

SH-163は、G-10Gr. で検出された方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約5.1m×短辺約4.6m、床面積は20.3㎡。住居の南壁際中央部分に貯蔵穴と思われる径60㎝、深さ40㎝程の円形の土壙をもつ。床面にピットをもつが、主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは25㎝程度。主軸は、長辺を基準にするとN-63°-Eである。

SH-164（Fig. 8）

SH-164は、G-10Gr. で検出された不整なプランを呈す竪穴式住居址。規模は、6.7m×5.2m、床面積は22.8㎡。床面にピットをもつが、主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは10㎝程度。主軸は、長軸を基準にするとN-33°-Wである。

SH-174（Fig. 9）

SH-174は、G-15Gr. で検出された隅丸長方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約5.5m×短辺約4.3m、床面積は20.2㎡。主柱穴は4本。床面までの掘り込みの深さは20㎝程度。主軸は、長辺を基準にするとN-79°-Eである。

SH-175（Fig. 9）

SH-175は、G-15Gr. で検出されたやや不整な方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約4.6m×短辺約4.4m、床面積は16.2㎡。床面にピットを多数もつが、主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは30㎝程度。主軸は、長辺を基準にするとN-26°-Wである。

SH-177（Fig. 9）

SH-177は、G-16Gr. で検出された方形の竪穴式住居址。規模は、一辺約4. 9m、床面積は20. 1㎡。床面にピッ

トを多数もつが、主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは15cm程度。主軸は、N-23°-Eである。

SH-190（Fig. 10・PL. 13）

SH-190は、H-11Gr. で検出されたやや不整な隅丸方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約6.3m×短辺約6.0m、床面積は31.2m²。床面にピットをもつが、主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは30cm強。主軸は、長辺を基準にするとN-79°-Eである。

SH-192（Fig. 10・PL. 13）

SH-192は、H-13Gr. で検出された隅丸方形の竪穴式住居址。住居南壁の立ち上がりは地山の傾斜によってほとんど失われている。規模は、長辺約4.7m×短辺約4.5m、床面積は18.8m²。主柱穴は4本。床面は主柱穴の内側が5cm～10cm一段高くなっている。床面までの掘り込みの深さは主柱穴内側の一段高い部分で10cm程度。主軸は、長辺を基準にするとN-72°-Wである。

SH-193（Fig. 10・PL. 13）

SH-193は、H-14Gr. で検出された不正な方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約4.9m×短辺約4.7m、床面積は18.6m²。主柱穴は4本と推定される。床面中央やや北よりに貯蔵穴か、径100cm、深さ30cm程の不整円形の土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは15cm程度。主軸は、長辺を基準にするとN-76°-Wである。

SH-203（Fig. 11・PL. 14）

SH-203は、I-18Gr. で検出された方形の竪穴式住居址。調査区南端で検出され、住居の南側は後世の削平によって失われている。規模は、遺存する東西長約5.2m、南北長は遺存部で約4.0m、床面積は遺存部で17.9m²。主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは25cm弱。主軸は、遺存している住居北壁を基準にするとN-68°-Wである。

SH-212（Fig. 11・PL. 14）

SH-212は、I-16Gr. で検出された隅丸方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約4.7m×短辺約4.4m、床面積は17.5m²。南壁際中央よりやや東に寄ったところに貯蔵穴と思われる径70cm×60cm、深さ20cm程の楕円円形の土壙をもつ。主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは40cm程度。主軸は、長辺を基準にすると東西方向を主軸とする。

SH-219（Fig. 11・PL. 14）

SH-219は、J-15Gr. で検出されたやや不整な方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約6.1m×短辺約5.6m、床面積は26.0m²。床面に多数ピットをもつが、主柱穴は2本。床面までの掘り込みの深さは40cm程度。主軸は、長辺を基準にするとN-77°-Wである。

SH-248（Fig. 12）

SH-248は、J-14Gr. で検出された方形の竪穴式住居址。地山の傾斜によって住居の北東壁および南東壁の大

部分の立ち上がりを失っている。規模は、長辺推定で約3.2m×短辺約3.0m、床面積は遺存部で8㎡程度。主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは深いところで10cm程度。主軸は、長辺を基準にするとN-60°-Wである。

SH-260 (Fig. 12)

SH-260は、L-15Gr. で検出されたやや不整な隅丸方形の竪穴式住居址。地山の傾斜によって住居の北壁および西壁の大部分の立ち上がりを失っている。規模は、長辺推定で約4.0m×短辺約3.9m、床面積は推定で10㎡程度。南壁際中央に貯蔵穴と思われる径70cm×60cm、深さ20cm程の楕円円形の土壙をもつ。主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは深いところで10cm程度。主軸は、長辺を基準にするとN-72°-Eである。

SH-265 (Fig. 12)

SH-265は、N-22Gr. で検出されたやや不整な方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約3.7m×短辺約3.6m、床面積は12.2㎡。住居の南東角に貯蔵穴と思われる90cm×60cm、深さ10cm程の方形の土壙をもつ。主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは深いところで10cm程度。主軸は、長辺を基準にするとN-1°-Eとほぼ南北方向を主軸とする。

Tab. 2　堤六本谷遺跡11区出土竪穴式住居址一覧表

住居址番号	平面形態	規模（m・㎡）				棟方向	屋内施設				出土遺物	備考
		長辺	短辺	深さ	床面積		主柱穴	溝	炉・焼土など	その他		
SH-125	方形	3.45	3.10	0.19	9.2	N-36°-E	2本		カマド		土師器碗	
SH-136	方形	2.73	2.55	0.17	5.8	N-13°-E						
SH-137	長方形	4.33	3.83	0.28	15.2	N-25°-E	4本		カマド	貯蔵穴	土師器甕・須恵器坏	
SH-144	方形	4.18	3.80	0.20	13.6	N-19°-W					土師器坏・高杯・壺・須恵器坏	
SH-145	方形	5.16	※5.0	0.14	※24.6	N-36°-E					土師器甕、石製紡錘車	
SH-156	方形	3.50	※2.5	0.50	※7.7	N-9°-E					土師器甕・坏・須恵器坏・坏蓋	
SH-157	方形	4.90	4.70	0.20	21.3	N-38°-W					土師器甕・坏・坏蓋	
SH-158	隅丸方形	4.40	4.30	0.38	16.8	N-0°-				貯蔵穴	須恵器坏・壺	
SH-160	方形	4.60	4.20	0.24	16.6	N-83°-E					土師器甕・甑	
SH-161	方形	5.60	5.40	0.26	23.8	N-57°-E		一部			須恵器高坏	
SH-162	方形	3.76	3.70	0.09	13.0	N-12-W	4本		カマド		土師器甕・坏・高杯・須恵器坏	
SH-163	方形	5.10	4.50	0.26	20.3	N-63°-E					土師器甕・高杯・須恵器坏	
SH-164	不整形	6.74	5.17	0.10	22.8	N-33°-W					土師器甕・鉢・坏須恵器坏・坏蓋、鉄滓	
SH-174	長方形	5.46	4.27	0.20	20.2	N-79°-E	4本				土師器甕・鉢・坏・須恵器坏・高杯・坏蓋・甕	
SH-175	方形	4.62	4.37	0.30	16.2	N-26°-W					土師器甕・坏・須恵器坏・高杯・坏蓋・甕	
SH-177	方形	4.87	4.85	0.14	21.0	N-23°-E						
SH-190	隅丸方形	6.32	6.00	0.32	31.2	N-79°-E					土師器甕・坏・高杯・須恵器坏・坏蓋、砥石・磨石	
SH-192	隅丸方形	4.74	4.54	0.07	18.8	N-72°-W	4本				石斧	
SH-193	方形	4.87	4.67	0.14	18.6	N-76°-W				貯蔵穴	土師器甕・坏・甑・須恵器坏・坏蓋	
SH-203	方形	※4.0	5.20	0.23	※17.9	N-68°-E						
SH-212	隅丸方形	4.74	4.35	0.40	17.5	N-90°-E				貯蔵穴	土師器甕・坏・壺・須恵器甕・坏・坏蓋・高杯、砥石	

住居址番号	平面形態	規模（m・m²）				棟方向	屋内施設				出土遺物	備考
		長辺	短辺	深さ	床面積		主柱穴	溝	炉・焼土など	その他		
SH-219	方形	6.06	5.46	0.38	26.0	N-77°-W	2本				土師器甕・壺	
SH-248	方形	3.21	2.96	0.10	(8.1)	N-60°-W					土師器甕・須恵器坏蓋	
SH-260	隅丸方形	4.00	2.94	0.09	(10.2)	N-72°-E				貯蔵穴		
SH-265	方形	3.68	3.56	0.09	12.2	N-1°-E				貯蔵穴		

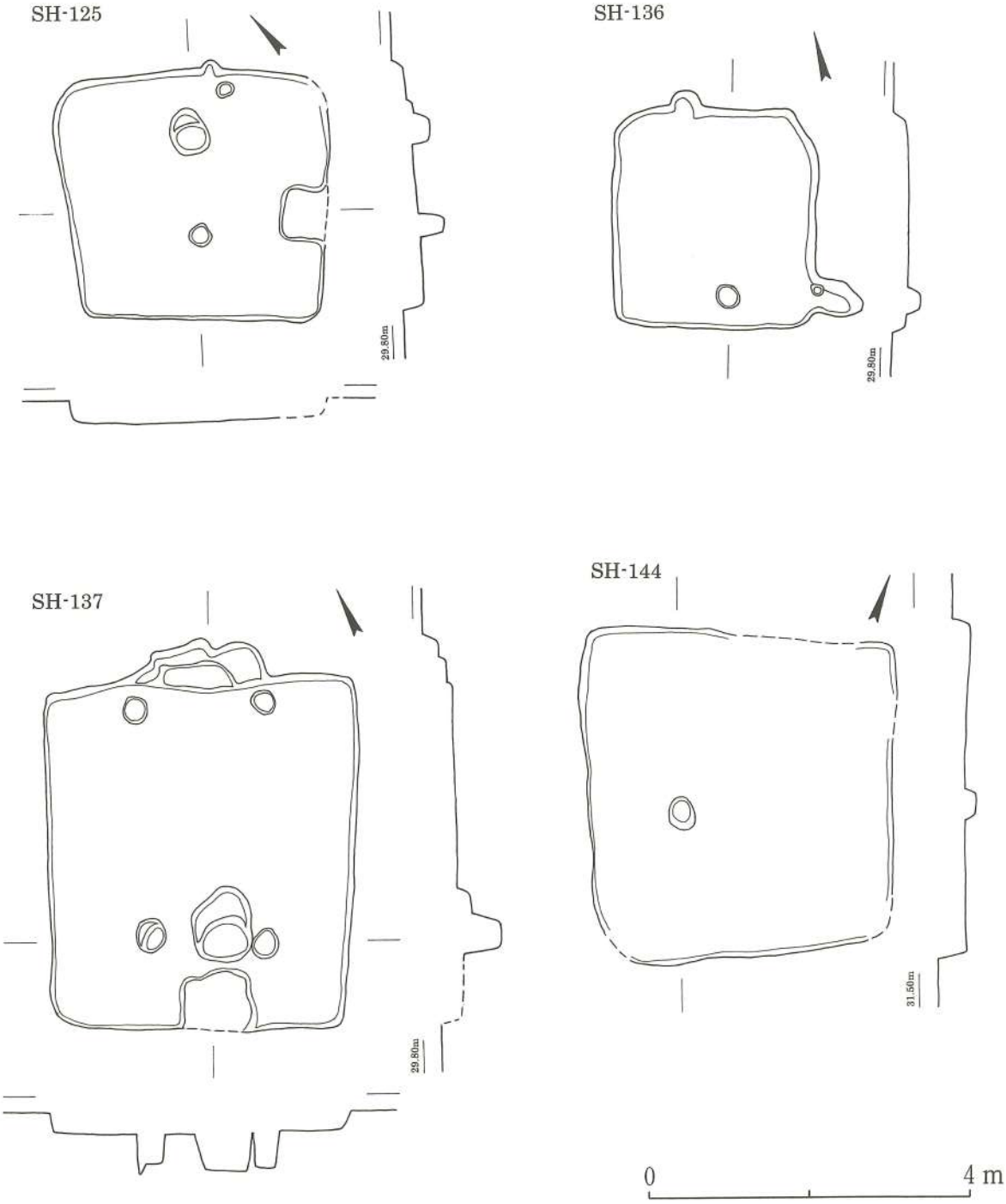


Fig. 5　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(1)　SH-125・SH-136・SH-137・SH-144（1/80）

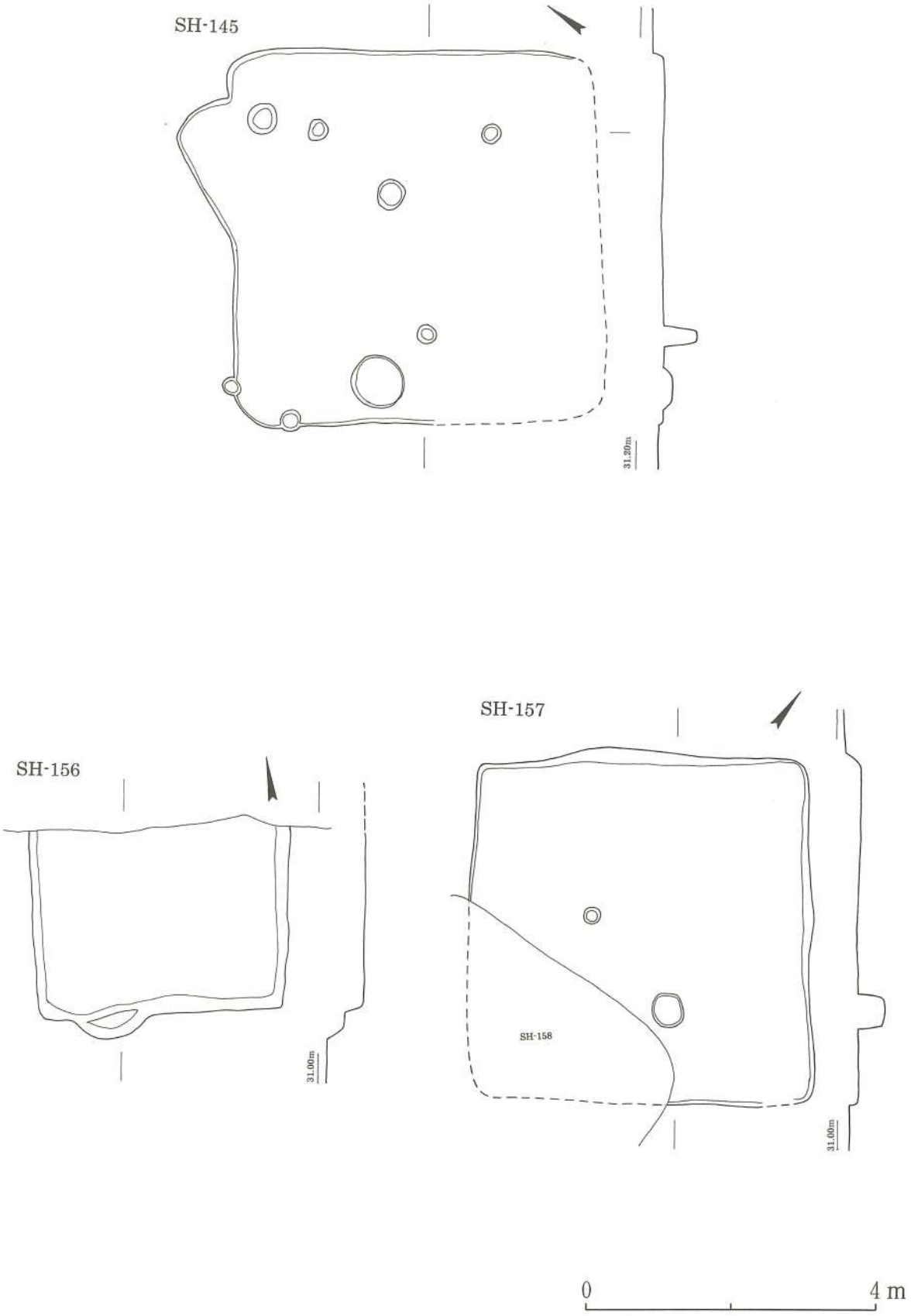


Fig. 6　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(2)　SH-145・SH-156・SH-157（1/80）

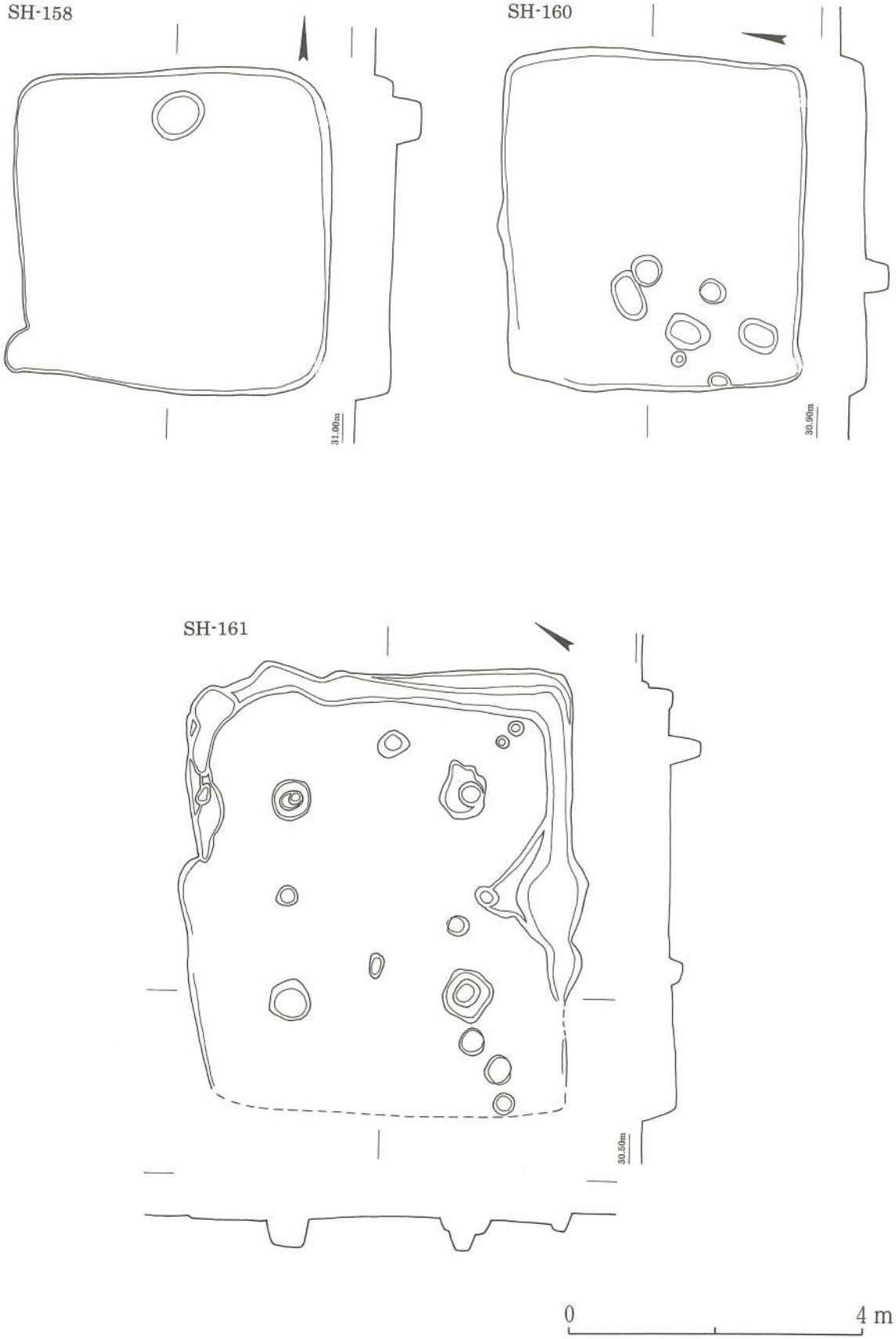


Fig. 7　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(3)　SH-158・SH-160・SH-161（1/80）

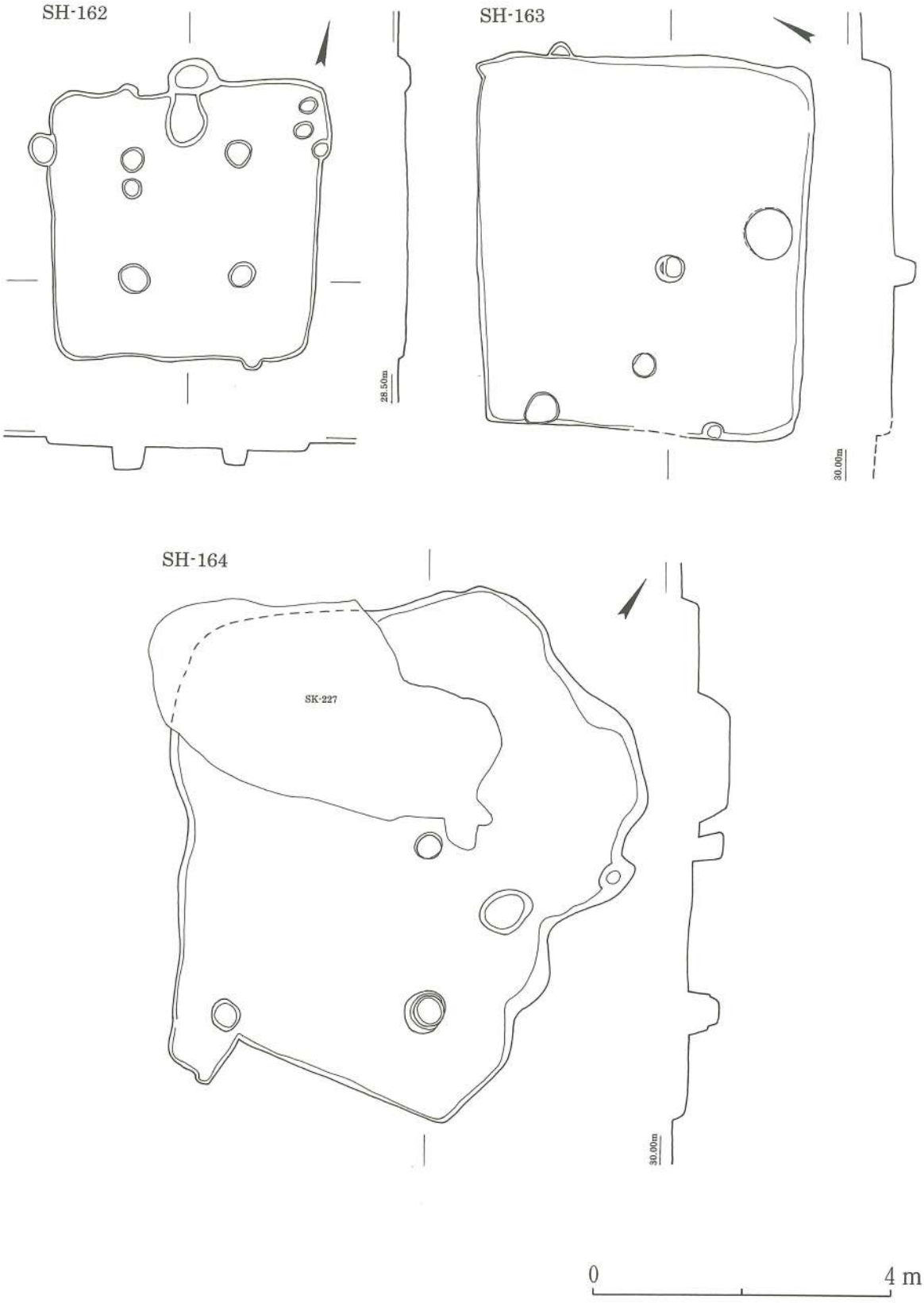


Fig. 8　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(4)　SH-162～SH-164（1/80）

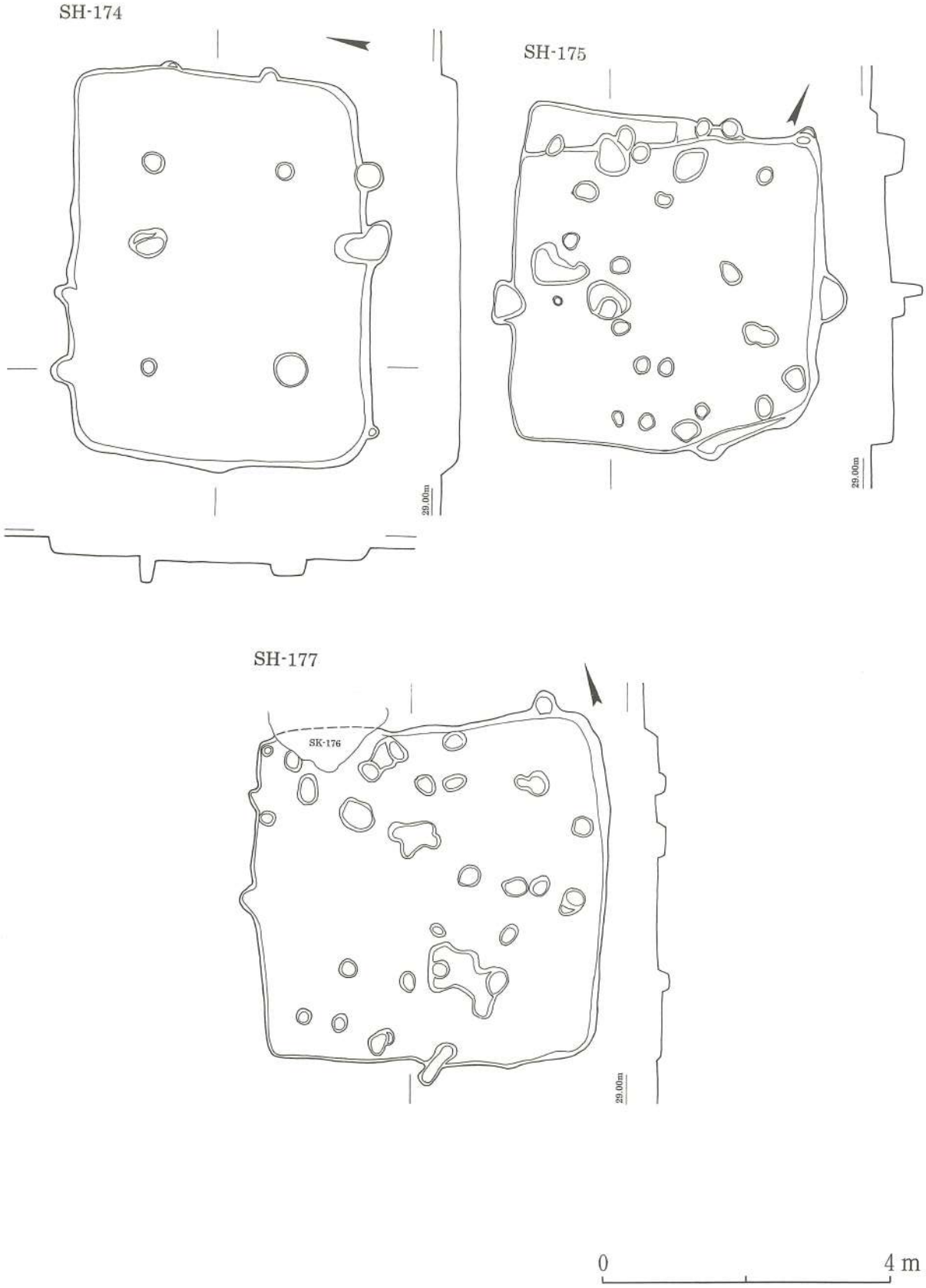


Fig. 9　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(5)　SH-174・SH-175・SH-177（1/80）

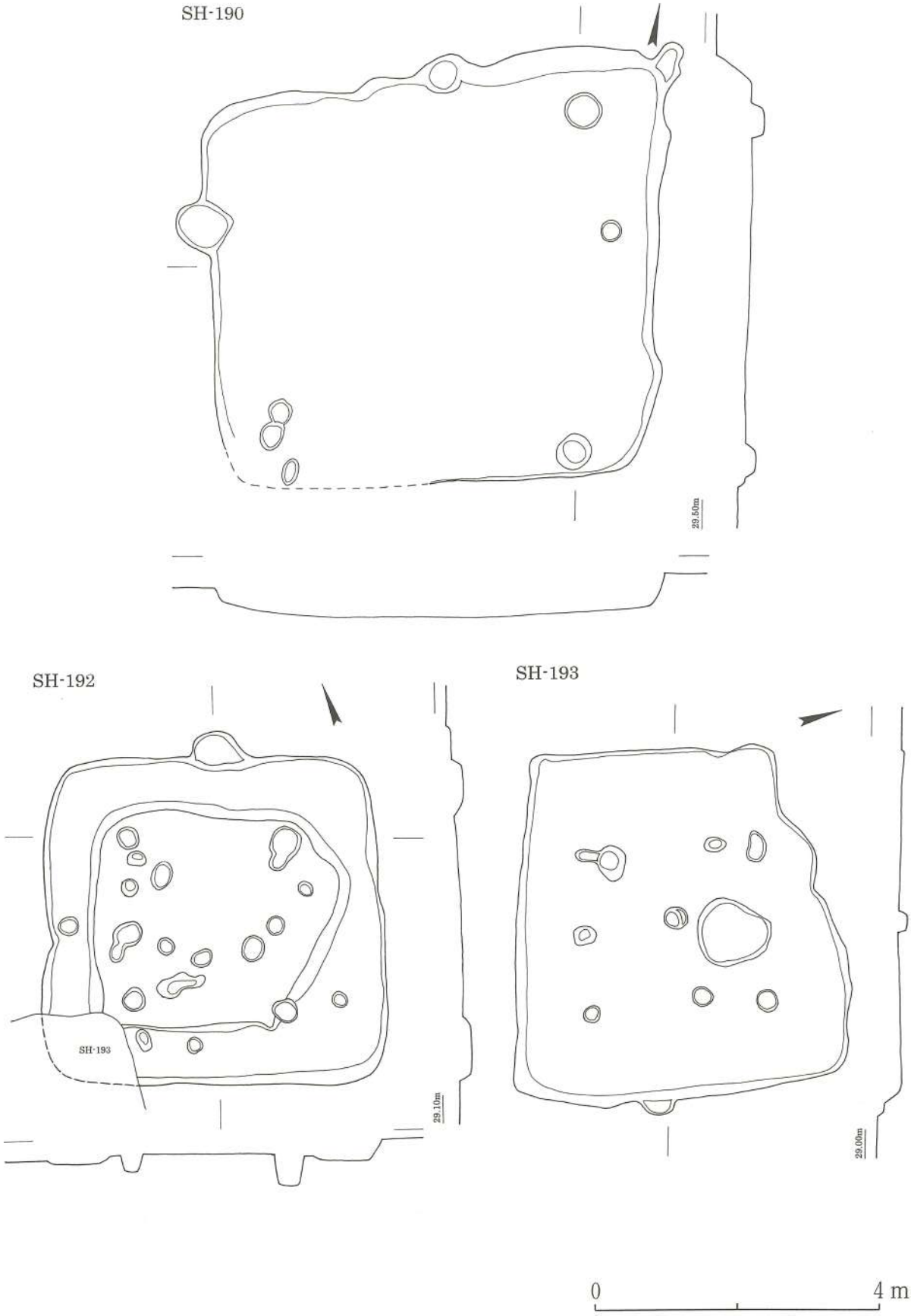


Fig. 10　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(6)　SH-190・SH-192・SH-193（1/80）

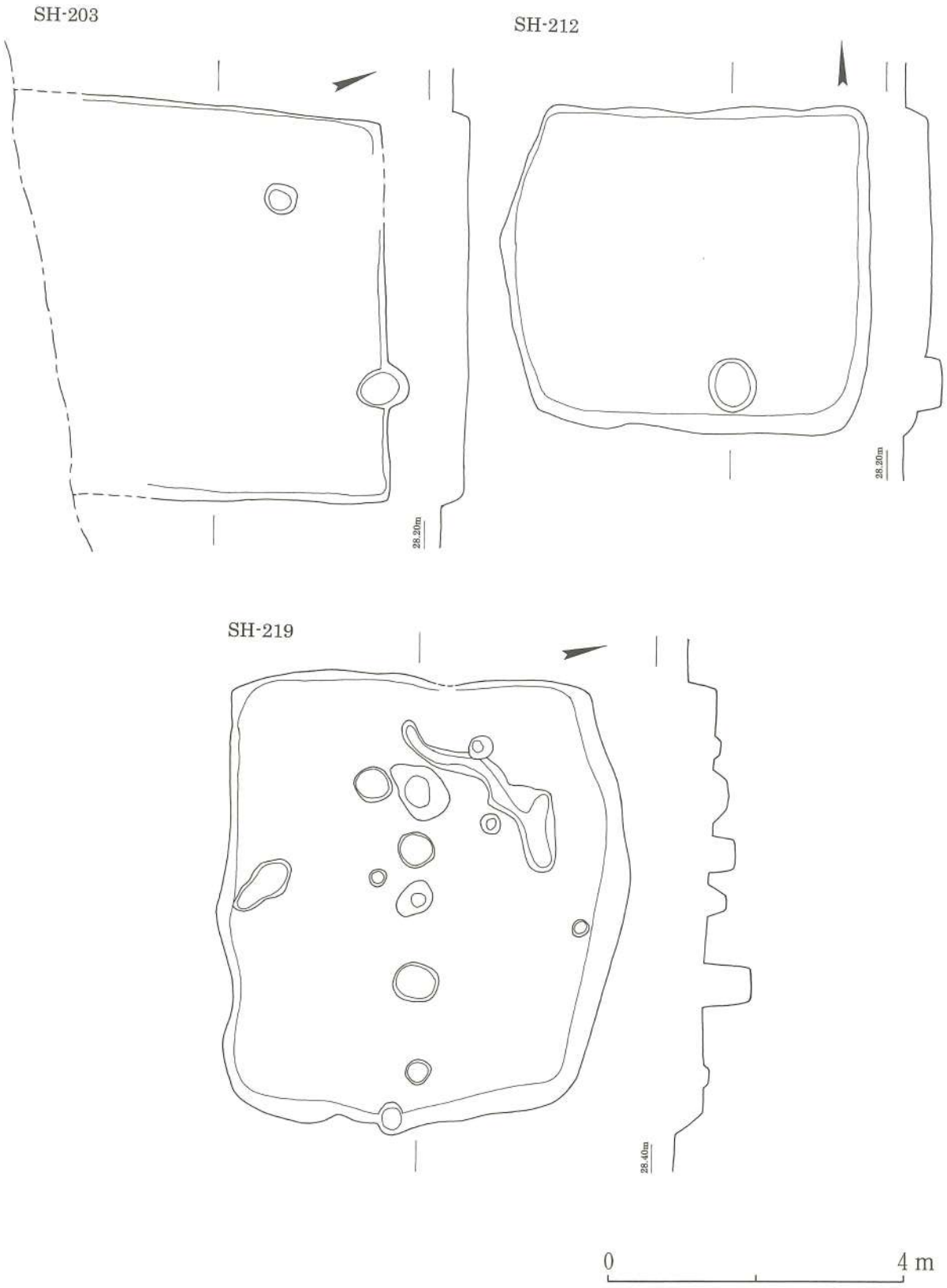


Fig. 11　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(7)　SH-203・SH-212・SH-219（1/80）

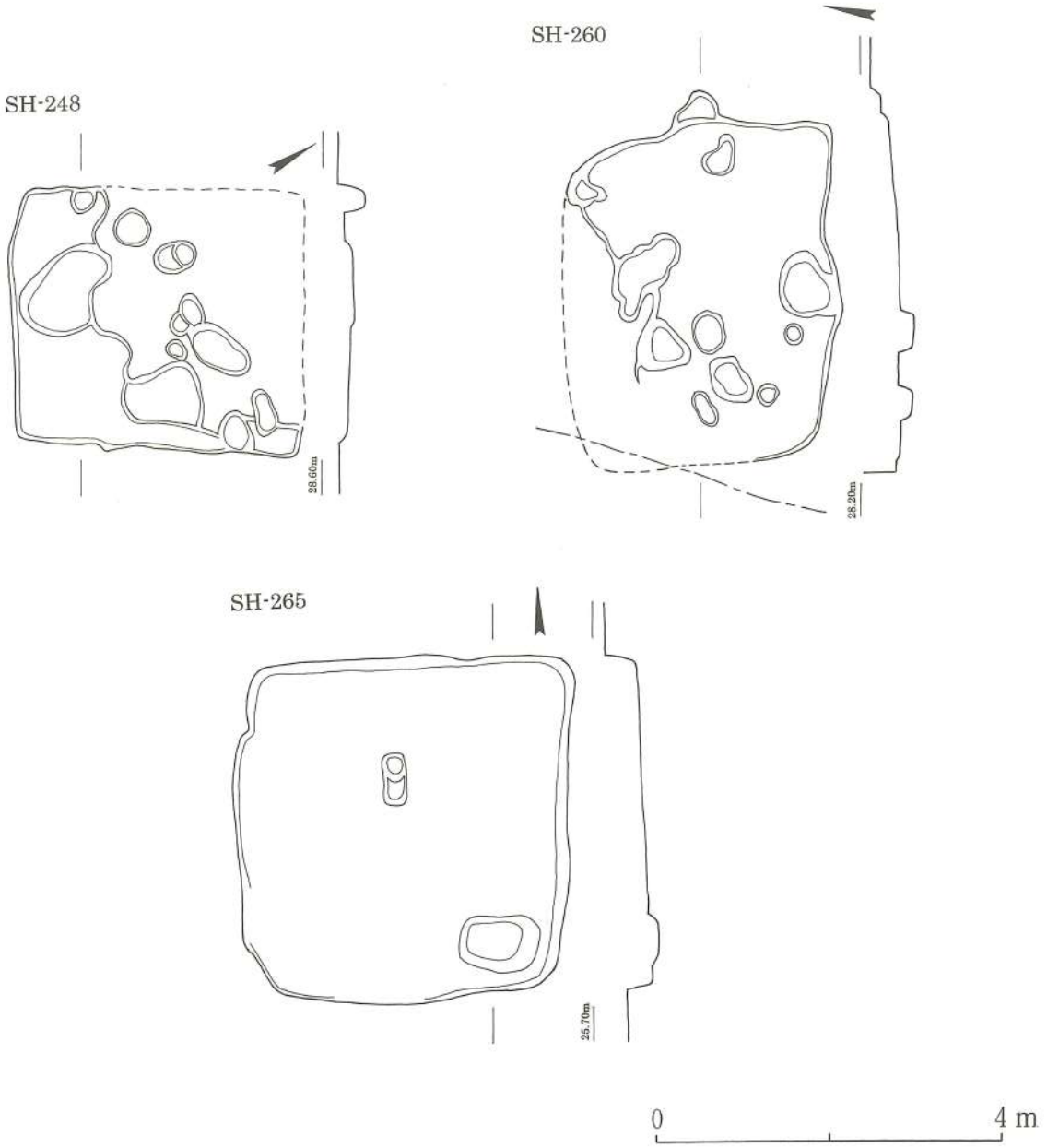


Fig. 12　堤六本谷遺跡11区竪穴式住居址実測図(8)　SH-248・SH-260・SH-265

(2)　**掘立柱建物址**（Fig. 4、13～18・PL. 1～3・Tab. 3）

今回の調査で検出された掘立柱建物址は、12棟であった。規模は一辺の延長が2.4m～3.6mとばらつきはあるものの SB-116、SB-147、SB-151、SB-152、SB-155、SB-217、SB-239の2間×2軒の総柱の建物が7棟と最も多く、SB-217を除くと主軸もほぼ南北あるいは東西方向となっている。各建物の年代は、柱穴から奈良時代の土師器甕、須恵器坏蓋を出土した SB-217以外は、柱穴からの出土遺物もなく断定はできない。しかし、その他の住居址、土壙などの遺構の年代から古墳時代後期から奈良時代の範疇のものと推測できる。

SB-116（Fig. 13）

SB-116は、I-13Gr. で検出された2間×2間の平面形態がほぼ正方形を呈す総柱の掘立柱建物址。規模は、

桁行2.8m×梁行2.6m、桁行の柱間は、1.4m、梁行の柱間は1.3m、床面積7.3㎡。主柱穴は直径40㎝～50㎝、深さ25㎝程度の円形の掘り方。長軸を基準にすると、主軸はN-8°-Eである。

SB-121 (Fig. 13)

SB-121は、D-10Gr. で検出された1間×3間の平面形態が長方形を呈す掘立柱建物址。規模は、桁行4.8m×梁行2.8m、床面積16.0㎡。桁行の柱間は、北から1.5m、2.2m、1.1mと不規則。主柱穴は直径30㎝～50㎝、深さ20㎝～30㎝程度の円形の掘り方。桁方向を基準にすると、主軸はほぼ南北方向でN-3°-Eである。

SB-147 (Fig. 14)

SB-147は、J-12Gr. で検出された2間×2間の平面形態がほぼ正方形を呈す総柱の掘立柱建物址。規模は、桁行3.1m×梁行2.7m、桁行の柱間は、1.55m、梁行の柱間は1.4m、床面積8.7㎡。主柱穴は直径45㎝～60㎝、深さ25㎝～60㎝程度の円形の掘り方。桁方向を基準にすると、主軸はN-88°-Wである。

SB-151 (Fig. 14)

SB-151は、F-14Gr. で検出された2間×2間の平面形態がやや長方形を呈す掘立柱建物址。総柱の建物と考えられるが、建物西辺中央の柱穴が確認できなかった。規模は、桁行3.0m×梁行2.4m、床面積7.2㎡。桁行の柱間は、1.5m、梁行の柱間は、1.2m。主柱穴は直径25㎝～70㎝、深さ20㎝～50㎝程度の円形の掘り方。桁方向を基準にすると、主軸はN-81°-Wである。

SB-152 (Fig. 15)

SB-152は、F-14Gr. で検出された2間×2間の平面形態がやや長方形を呈す掘立柱建物址。総柱の建物と考えられるが、建物西辺中央の柱穴が近世以降の溝によって失われている。規模は、桁行3.2m×梁行2.8m、床面積9.0㎡。桁行の柱間は、1.4m、梁行の柱間は、1.35m。主柱穴は直径30㎝～45㎝、深さ20㎝～30㎝程度の円形の掘り方。桁方向を基準にすると、主軸はN-10°-Eである。

SB-155 (Fig. 15)

SB-155は、G-6Gr. で検出された2間×2間の平面形態がほぼ正方形を呈す掘立柱建物址。総柱の建物と考えられるが、建物西辺中央の柱穴がSK-159によって失われている。規模は、桁行2.8m×梁行2.7m、床面積7.6㎡。桁行の柱間は、1.4m、梁行の柱間は、1.35m。主柱穴は直径30㎝～80㎝、深さ30㎝～40㎝程度の円形の掘り方。桁方向を基準にすると、主軸はN-82°-Eである。

SB-183 (Fig. 16)

SB-183は、H-15Gr. で検出された平面形態がほぼ正方形を呈す掘立柱建物址。中央に柱穴をもち2間×2間の総柱の建物と考えられるが、建物南北辺中央の柱穴が確認できなかった。規模は、桁行3.2m×梁行3.0m、床面積9.6㎡。桁行の柱間は、1.6m、梁行の柱間は、1.5m。主柱穴は直径60㎝～80㎝、深さ15㎝～65㎝程度の円形の掘り方。桁方向を基準にすると、主軸はN-20°-Wである。

SB-186 (Fig. 16)

SB-186は、D-14Gr. で検出された1間×2間の平面形態が長方形を呈す掘立柱建物址。規模は、桁行3.4m×梁行2.6m、床面積8.8㎡。桁行の柱間は、1.7m。主柱穴は直径25cm～60cm、深さ20cm～30cm程度の円形の掘り方。桁方向を基準にすると、主軸はN-28°-Eである。

SB-200 (Fig. 17)

SB-200は、H-17Gr. で検出された2間×3間の平面形態がほぼ正方形を呈す掘立柱建物址。規模は、桁行4.4m×梁行4.4m、床面積17.6㎡。桁行の柱間は、1.4m。梁行の柱間は、2.4m。主柱穴は直径30cm～60cm、深さ50cm程度の円形の掘り方。桁方向を基準にすると、主軸はN-86°-Wである。

SB-210 (Fig. 17)

SB-210は、E-13Gr. で検出された1間×2間の平面形態が長方形を呈す掘立柱建物址。建物南西角の柱穴はSH-136のために確認できなかった。規模は、桁行3.6m×梁行2.4m、床面積8.6㎡。桁行の柱間は、1.4m。主柱穴は直径30cm～60cm、深さ50cm程度の円形の掘り方。桁方向を基準にすると、主軸はN-5°-Eである。

SB-217 (Fig. 18)

SB-217は、J-12Gr. で検出された平面形態がやや長方形を呈す掘立柱建物址。2間×2間の総柱の建物と考えられるが、建物南西角および西辺中央の柱穴を後世の削平およびSK-215により失っている。規模は、桁行3.6m×梁行2.8m、床面積10.1㎡。桁行の柱間は、1.8m、梁行の柱間は、1.4m。主柱穴は直径40cm～60cm、深さ15cm～60cm程度の円形の掘り方。桁方向を基準にすると、主軸はN-16°-Wである。

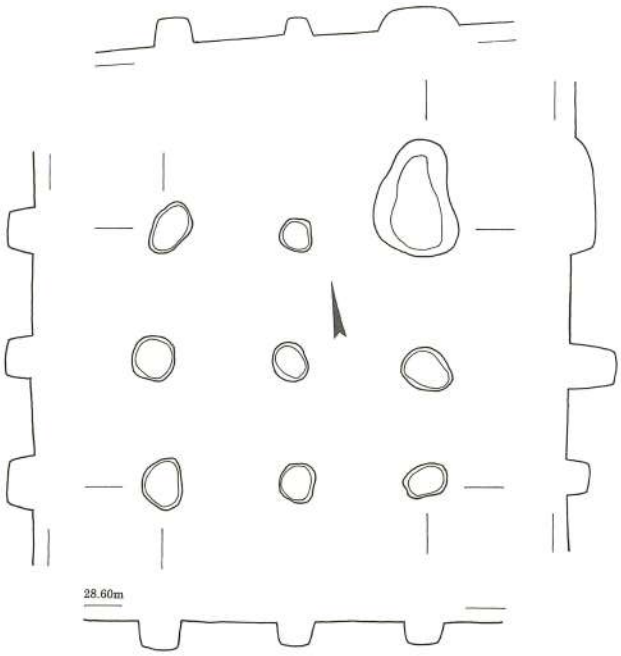
SB-239 (Fig. 18)

SB-239は、K-16Gr. で検出された2間×2間の平面形態がほぼ正方形を呈す総柱の掘立柱建物址。規模は、桁行、梁行ともに3. 6m、床面積13. 0㎡。桁行、梁行の柱間は、1. 8m。主柱穴は直径50cm～70cm、深さ15cm～110cm程度の円形の掘り方。桁方向を基準にすると、主軸はN-8°-Eである。

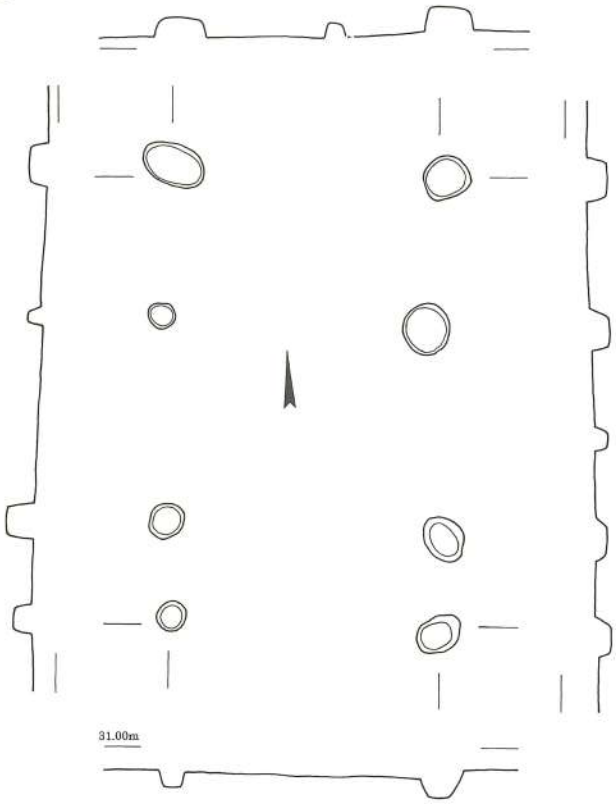
Tab. 3　堤六本谷遺跡11区出土掘立柱建物址一覧表

遺構番号	平面形態	規　模（単位m・㎡）				棟方向	備　考
		桁　行	梁　行	長さ×幅	床面積		
SB-116	2×2	1.4	1.3	2.8×2.6	7.3	N-8°-E	
SB-121	1×3	1.5/2.2/1.1	2.8	4.8×2.8	13.4	N-3°-E	
SB-147	2×2	1.6	1.4	3.1×2.7	8.4	N-88°-W	
SB-151	2×2	1.5	1.2	3.0×2.4	7.2	N-81°-W	
SB-152	2×2	1.6	1.4	3.2×2.8	9.0	N-10°-E	
SB-155	2×2	1.4	1.35	2.8×2.7	7.6	N-82°-W	
SB-183	1×2	3.2	1.5	3.2×3.0	9.6	N-20°-W	
SB-186	1×2	1.7	2.6	3.4×2.6	8.8	N-28°-E	
SB-200	2×3	1.4	2.1	4.2×4.2	17.6	N-86°-W	
SB-210	1×2	1.8	2.4	3.6×2.4	8.6	N-5°-E	
SB-217	2×2	1.8	1.4	3.6×2.8	10.1	N-16°-W	土師器・須恵器出土
SB-239	2×2	1.8	1.8	3.6×3.6	13.0	N-8°-E	

SB-116



SB-121



0 4 m

Fig. 13　堤六本谷遺跡11区掘立柱建物址実測図(1)　SB-116・SB-121（1/80）

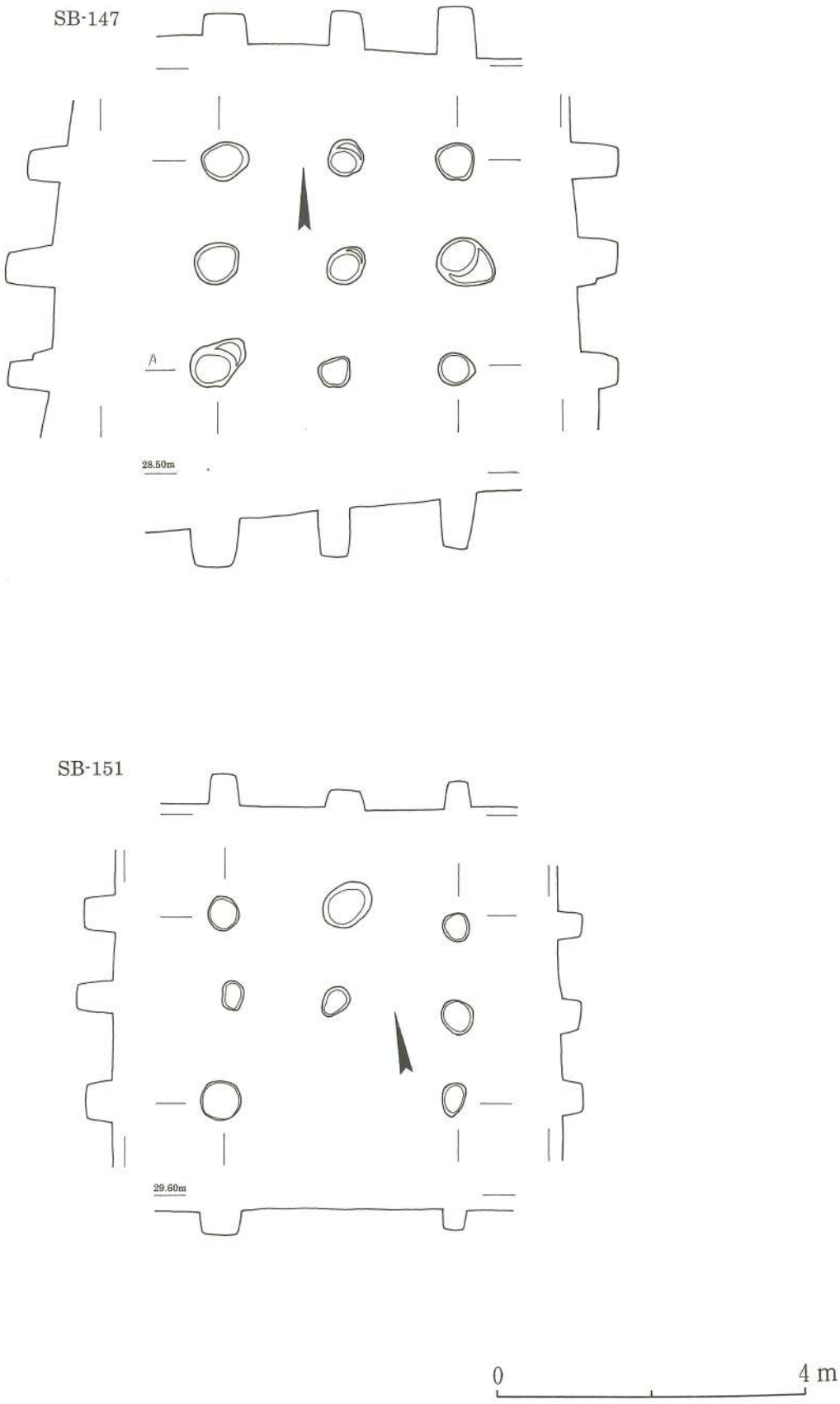


Fig. 14　堤六本谷遺跡11区掘立柱建物址実測図(2)　SB-147・SB-151（1/80）

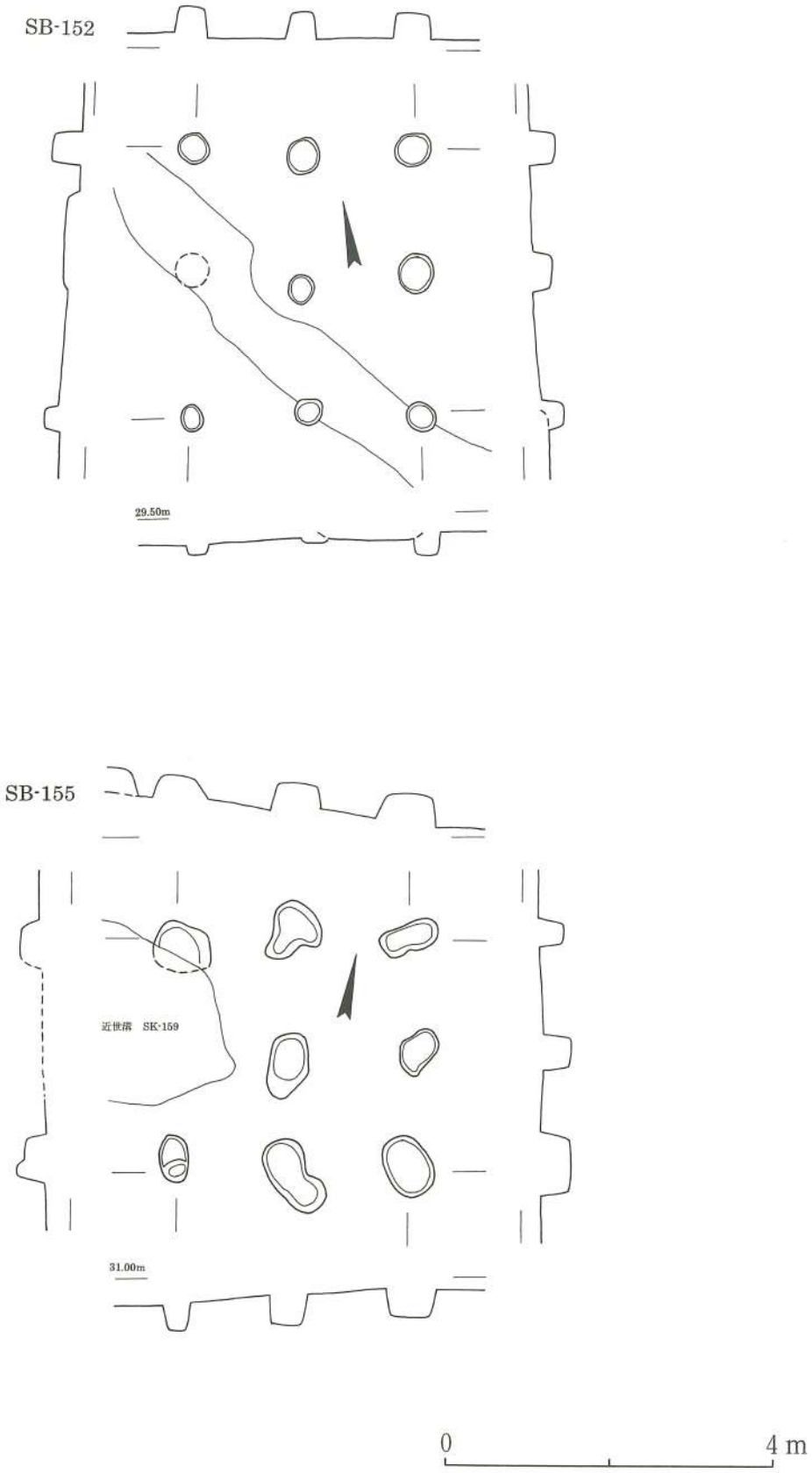
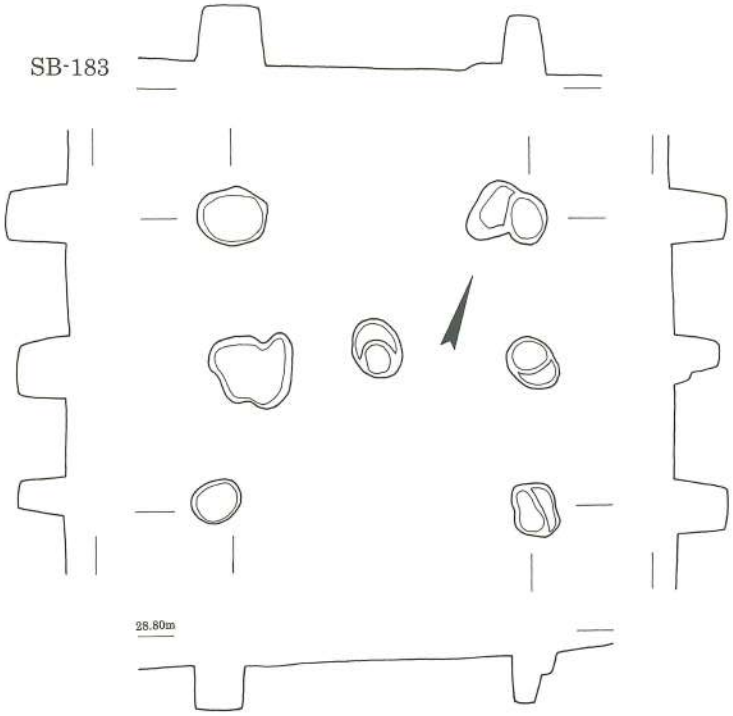


Fig. 15　堤六本谷遺跡11区掘立柱建物址実測図(3)　SB-152・SB-155（1/80）



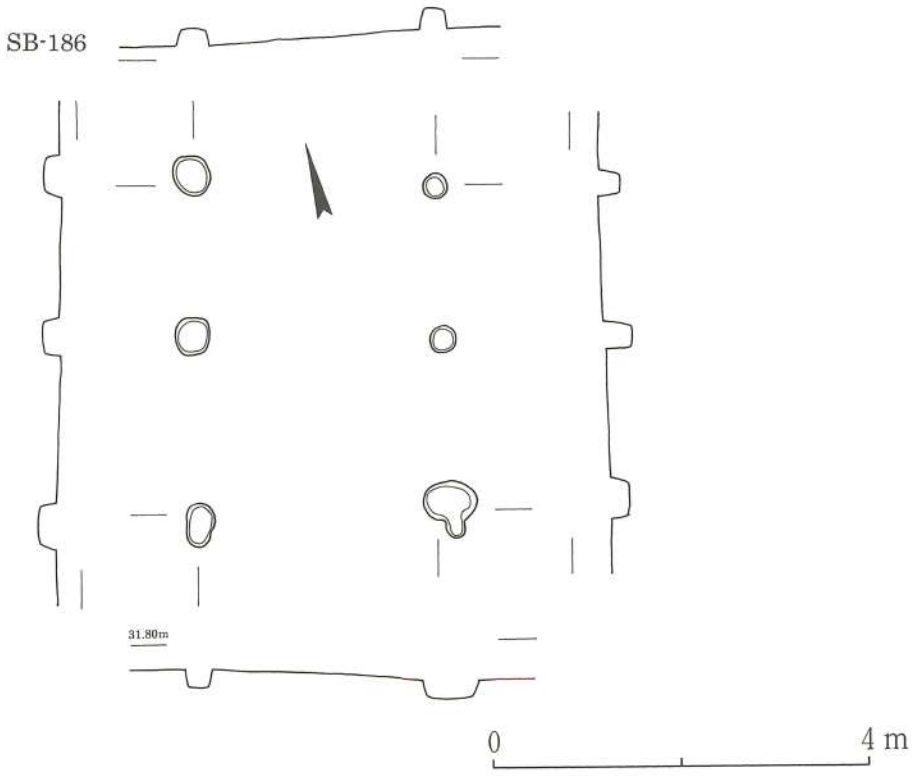


Fig. 16　堤六本谷遺跡11区掘立柱建物址実測図(4)　SB-183・SB-186（1/80）

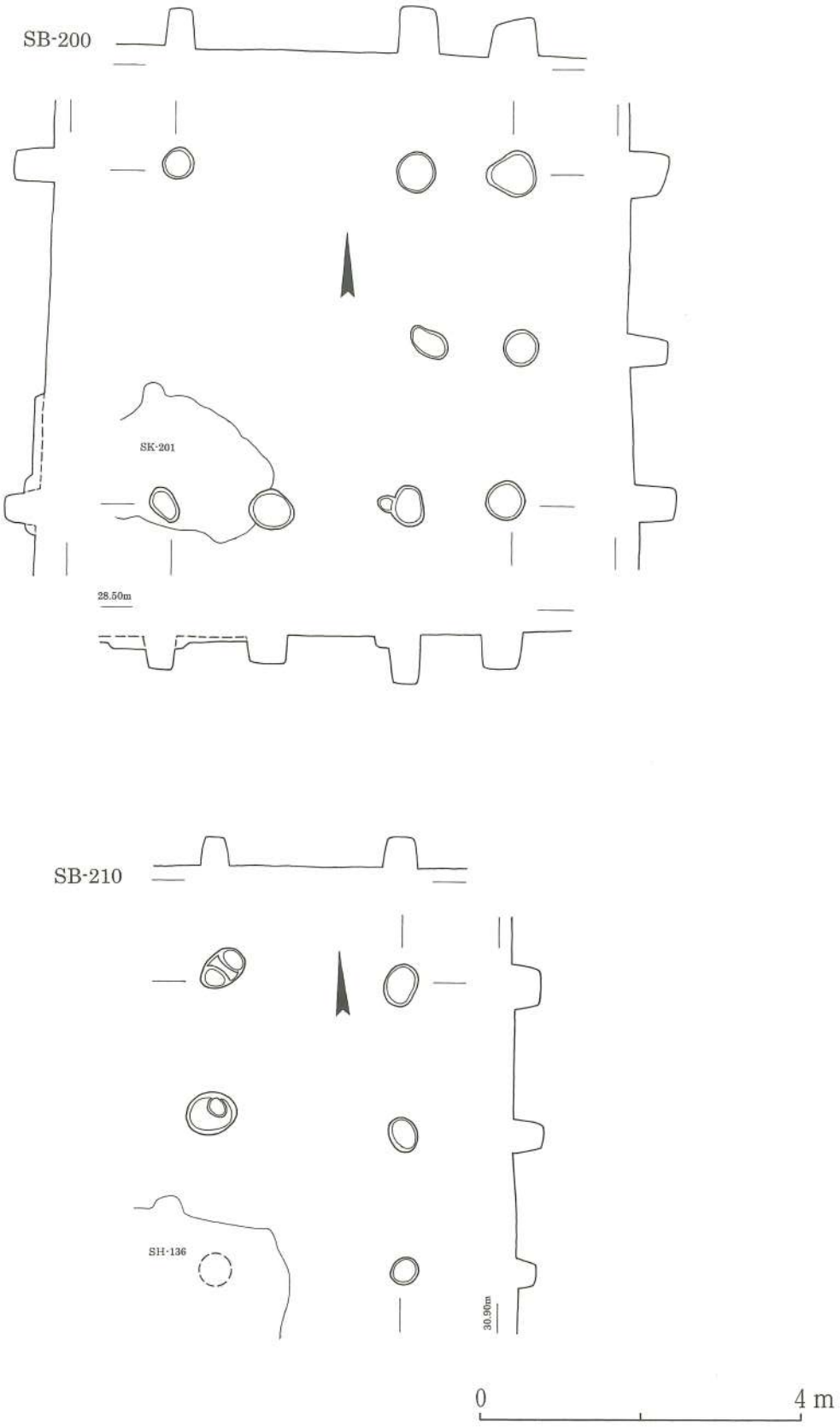


Fig. 17　堤六本谷遺跡11区掘立柱建物址実測図(5)　SB-200・SB-210（1/80）

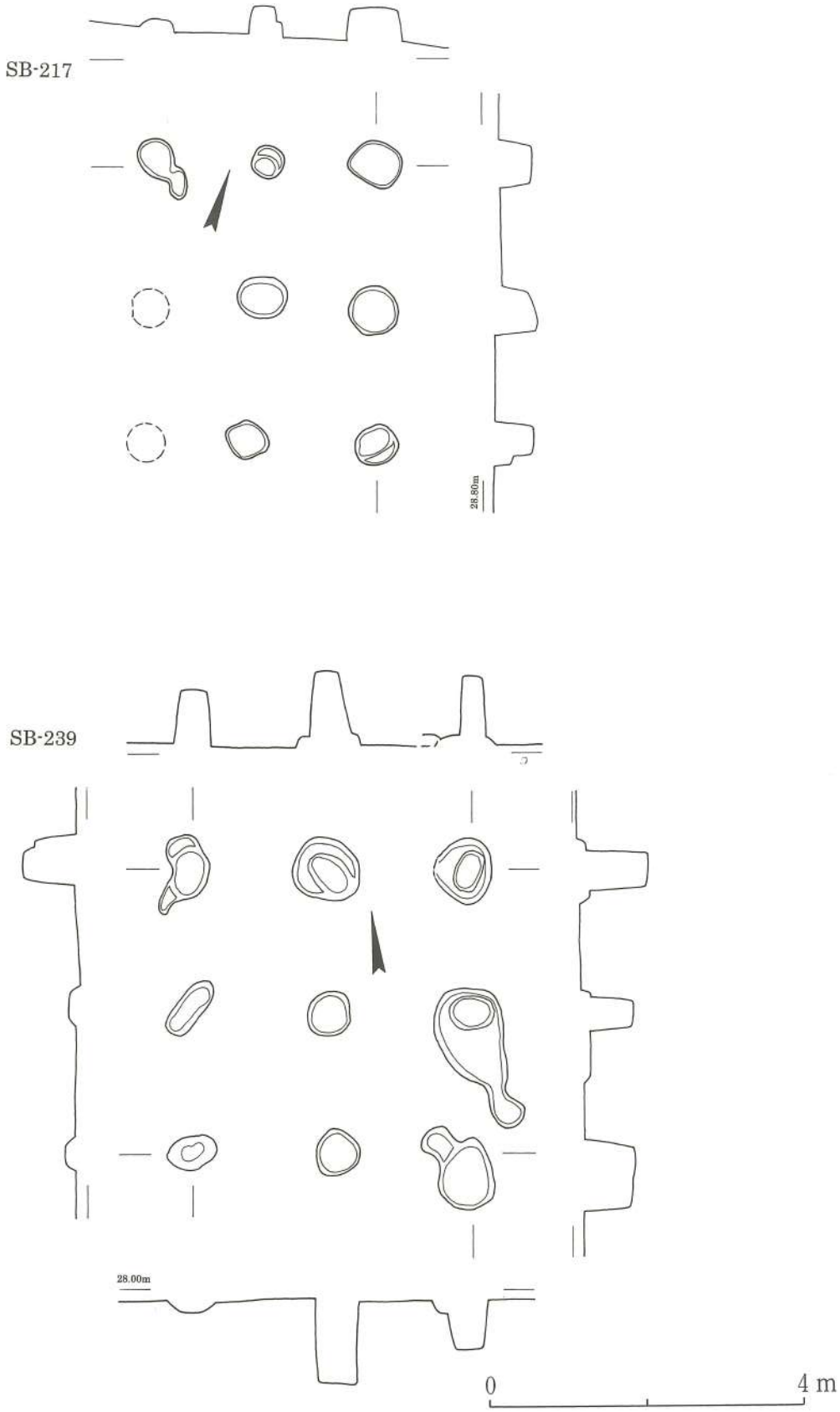


Fig. 18　堤六本谷遺跡11区掘立柱建物址実測図(6)　SB-217・SB-239（1/80）

(3) **土壙**（Fig. 4、19～29・PL. 3、15～23・Tab. 4）

今回の調査で土壙として取り扱った貯蔵穴などの遺構は、SX（性格不明遺構）として取り扱った遺構を含めて、107基であった。これらの土壙のうち、出土遺物などから時期が特定できる土壙は、縄文式土器片を出土したSK-214、SK-218、SK-229、SK-237などが縄文時代後期、土師器、須恵器を出土した土壙のうちSK-159、SK-172、SK-178、SK-222、SX-266などが古墳時代、SX-115、SK-117、SK-123、SK-128、SK-135、SK-148、SK-167、SK-187、SK-188、SK-204、SK-224、SK-255、SK-258などが奈良時代の所産になるものと考えられ、その他の土壙はまとまった遺物をもつものも少なく、時期を特定するまでには至らなかった。

Tab. 4　堤六本谷遺跡11区　出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・m²)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-110	不整形	2.57 2.35	1.41 0.62	0.20	1.4			
SK-111	隅丸方形	1.11 0.87	0.94 0.79	0.29	0.5			
SK-112	不整形	1.98 1.88	1.08 0.95	0.12	0.9			
SK-113	不整方形	1.74 1.64	1.66 1.56	0.36	2.6	1本	土師器甕・	
SK-114	不整形	1.22 1.11	0.76 0.62	0.36	0.5			
SX-115	不整形	※9.2 ※6.4	(4.3) (3.8)	0.64	※15.5		土師器甕・須恵器坏、甕・滑石製石鍋、磨石	
SK-117	楕円形	1.90 1.54	1.32 1.11	0.31	1.3		土師器甕・須恵器坏、甕・石斧	
SK-118	不整形	2.20 2.08	2.09 1.50	0.05	2.0			
SK-119	円形	1.00 0.84	0.90 0.76	0.31	0.5	1本	土師器坏蓋	
SK-120	円形	2.40 2.08	2.10 1.17	0.41	1.9			
SK-122	不整形	2.58 2.44	1.64 1.53	0.09	2.5			
SK-123	不整形	5.08 4.90	2.64 2.54	0.38	9.4		土師器甕、坏・須恵器坏、坏蓋	
SK-124	不整円形	2.02 1.82	1.71 1.60	0.35	0.9			
SK-126	不整形	3.28 3.06	2.13 1.82	0.07	3.2			
SK-127	不整形	2.58 2.54	2.52 2.37	0.20	4.8			
SK-128	不整形	2.62 1.54	1.76 1.64	0.32	2.0		土師器甕・須恵器坏	
SK-129	不整形	1.22 0.90	0.80 0.63	0.14	0.3			
SK-130	不整形	1.34 1.19	(1.3) (1.1)	0.10	※0.9			
SK-131	不整形	1.92 1.70	0.98 0.84	0.08	0.9			
SK-132	楕円形	1.26 1.12	0.76 0.65	0.09	0.6			
SK-133	不整形	1.94 1.84	1.74 1.57	0.11	2.5			

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・m²)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-134	不整形	2.05 1.94	1.86 1.37	0.39	1.1		土師器坏	
SK-135	不整形	1.54 1.32	1.22 1.12	0.18	1.1		土師器甕・須恵器坏	
SK-138	不整形	1.20 1.15	0.74 0.57	0.22	0.5			
SK-139	不整形	1.70 1.60	1.04 0.98	0.08	1.0	2本		
SK-140	不整形	1.13 1.00	0.90 0.77	0.09	0.6			
SK-142	不整形	2.66 2.54	2.00 1.92	0.03	4.0			
SK-148	不整形	2.56 2.20	1.30 0.94	0.48	1.6		土師器甕・須恵器坏	
SK-149	不整形	3.80 3.67	3.07 2.74	0.20	2.9		土師器高坏	
SK-150	不整形	1.27 0.88	1.04 0.64	0.42	0.4			
SK-153	不整形	1.41 1.36	0.61 0.54	0.49	0.6			
SK-154	不整形	2.8 2.40	※1.2 ※1.1	0.2	※0.9			
SK-159	不整形	2.50 2.30	2.16 1.89	0.43	3.0		土師器甕・須恵器坏	
SK-165	不整形	1.32 1.23	0.81 0.67	0.36	0.6			
SK-166	不整形	1.92 1.80	1.08 0.97	0.18	1.1			
SK-167	不整円形	1.26 1.06	1.25 0.90	0.33	0.7		須恵器坏	
SK-168	不整形	1.56 1.42	0.98 0.90	0.11	1.0	1本		
SK-169	不整形	1.40 1.25	0.91 0.74	0.26	0.6			
SK-170	不整形	1.94 1.56	1.50 1.15	0.40	1.6			
SK-171	不整形	2.14 1.82	1.76 1.30	0.51	0.8			
SK-172	不整円形	4.02 3.83	2.81 2.66	0.38	5.0		土師器甕、鉢・須恵器坏、坏蓋、甕	
SK-173	長方形	1.50 1.30	1.34 1.16	0.23	1.6	1本		
SK-176	不整形	1.46 1.09	1.28 1.02	0.35	1.0		土師器甕	
SK-178	不整形	1.50 1.40	1.34 1.20	0.46	13.5		土師器甕、坏・須恵坏、坏蓋	
SK-185	円形	1.56 1.42	1.38 1.29	0.41	0.6			
SK-187	不整円形	2.78 2.03	2.26 2.05	0.44	3.8		土師器甕、高坏・須恵器坏、高坏、坏蓋、甕・砥石	
SK-188	不整形	2.70 2.59	2.10 1.96	0.36	3.3		土師器甕、坏、高坏・須恵器坏、高坏、甕	
SK-189	不整形	2.04 1.57	0.87 0.74	0.56	0.8			
SK-191	不整形	3.00 2.87	1.64 1.46	0.10	3.1			

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・m²)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-195	不整形	2.05 1.67	1.18 0.85	0.50	1.2			
SK-197	不整形	2.96 2.60	0.97 0.82	0.10	1.7			
SK-198	不整形	3.09 2.98	2.92 2.81	0.57	4.3			
SK-199	不整形	3.94 3.70	2.64 2.54	0.17	6.5		土師器甕	
SK-201	不整形	2.24 2.16	1.56 1.46	0.14	2.6			
SK-202	不整形	1.99 1.88	1.14 0.88	0.10	0.9			
SK-204	不整形	3.34 3.24	2.50 2.41	0.43	1.0		土師器甕、甑、坏・須恵器坏、高坏、坏蓋	
SK-205	不整形	1.36 1.23	1.25 1.16	0.18	1.3			
SK-206	不整形	4.26 4.06	1.25 1.15	0.17	4.1			
SK-207	不整形	1.27 1.16	1.20 0.85	0.25	0.7			
SK-208	不整形	3.57 2.41	1.56 0.94	0.92	1.3		土師器壺	
SK-209	不整形	2.04 1.86	1.74 1.44	0.46	2.3			
SK-211	不整形	1.71 1.30	0.65 0.34	0.32	0.4			
SK-213	不整楕円形	1.26 1.06	0.95 0.56	0.13	0.5			
SK-214	不整形	1.83 1.58	1.37 1.00	0.61	1.2		縄文式土器深鉢、鉢	
SK-215	不整形	1.78 1.66	1.12 0.92	0.44	1.0			
SK-216	不整形	2.51 2.30	1.27 1.02	0.28	1.7			
SK-218	不整形	1.06 0.95	0.87 0.75	0.46	0.5		縄文式土器浅鉢	
SK-220	不整形	1.14 1.04	0.68 0.54	0.30	0.3			
SK-221	隅丸方形	2.82 2.63	0.84 0.67	05.0	1.5			
SK-222	不整形	5.06 4.90	2.40 2.22	0.20	8.0		土師器甕・須恵器坏、坏蓋、甕	
SK-223	不整形	1.56 1.38	1.136 0.84	0.17	0.9			
SK-224	不整形	1.66 1.35	1.05 0.86	0.64	0.5		土師器甕、坏・須恵器坏、甕	
SK-225	不整形	1.51 1.32	1.16 1.00	0.28	0.7	1本		
SK-227	不整形	4.90 4.46	2.70 2.12	0.70	6.4			
SK-228	不整円形	2.94 1.90	2.58 1.42	1.29	2.2			
SK-229	不整形	4.75 4.56	3.66 3.57	0.13	12.5		縄文式土器鉢・弥生式土器甕、碗、須恵器坏	
SK-230	不整形	1.46 1.08	1.02 0.78	0.18	0.52			

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・m²)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-231	不整楕円形	1.57 1.47	1.22 1.16	0.19	0.6			
SK-232	隅丸長方形	1.13 0.97	0.57 0.49	0.76	0.2		須恵器甕	
SK-233	隅丸長方形	1.44 1.11	1.04 0.90	0.09	0.9	2本		
SK-234	不整方形	1.15 1.05	1.08 0.98	0.19	0.8	1本		
SK-235	円形	0.98 0.68	0.85 0.63	0.25	0.3		石斧	
SK-236	不整形	1.28 1.08	1.00 0.82	0.34	0.5			
SK-237	不整円形	1.00 0.81	0.74 0.61	0.49	0.4		縄文式土器鉢	
SK-238	不整形	1.70 1.45	1.06 0.82	0.23	1.0			
SK-240	不整形	5.21 5.06	3.56 3.46	0.11	14.7			
SK-242	不整形	1.63 1.56	1.30 1.22	0.21	1.6			
SK-243	不整形	2.08 1.26	0.74 0.48	0.17	0.6			
SK-244	円形	1.03 0.92	0.96 0.81	0.23	0.4		土師器坏、高坏、壺・須恵器坏	
SK-245	隅丸長方形	0.85 0.72	0.62 0.44	0.19	0.3			
SK-246	不整形	1.22 1.09	0.49 0.35	0.22	0.3			
SK-249	不整形	1.31 1.16	0.97 0.87	0.16	0.5	1本		
SK-251	不整形	0.83 0.76	0.59 0.52	0.44	0.3			
SK-252	不整形	1.52 1.28	1.03 0.85	0.18	0.9			
SK-253	不整形	1.49 1.35	0.52 0.36	0.37	0.4			
SK-254	不整形	1.94 1.82	0.78 0.61	0.44	0.8		縄文式土器浅鉢・土師器甕・須恵器坏	
SK-255	不整楕円形	(2.5) (2.0)	1.60 0.70	0.35	(2.0)		縄文式土器鉢・土師器甕、坏、高坏他	
SK-256	不整形	1.13 0.56	0.83 0.64	0.16	0.3		土師器甕	
SK-257	不整形	1.66 1.58	1.23 1.17	0.14	0.5			
SK-258	不整形	1.16 1.03	1.04 0.90	0.08	0.7	2本	土師器坏	
SK-261	不整形	2.32 2.18	1.16 1.00	0.10	1.1			
SK-263	不整円形	0.95 0.82	0.90 0.76	0.15	0.5			
SK-264	不整形	(2.4) (2.3)	1.42 1.30	0.11	(3.0)			
SX-266	不整形	※7.3 ※7.0	※4.2 ※3.9	0.18	※13.4		土師器甕、坏、壺・須恵器坏	

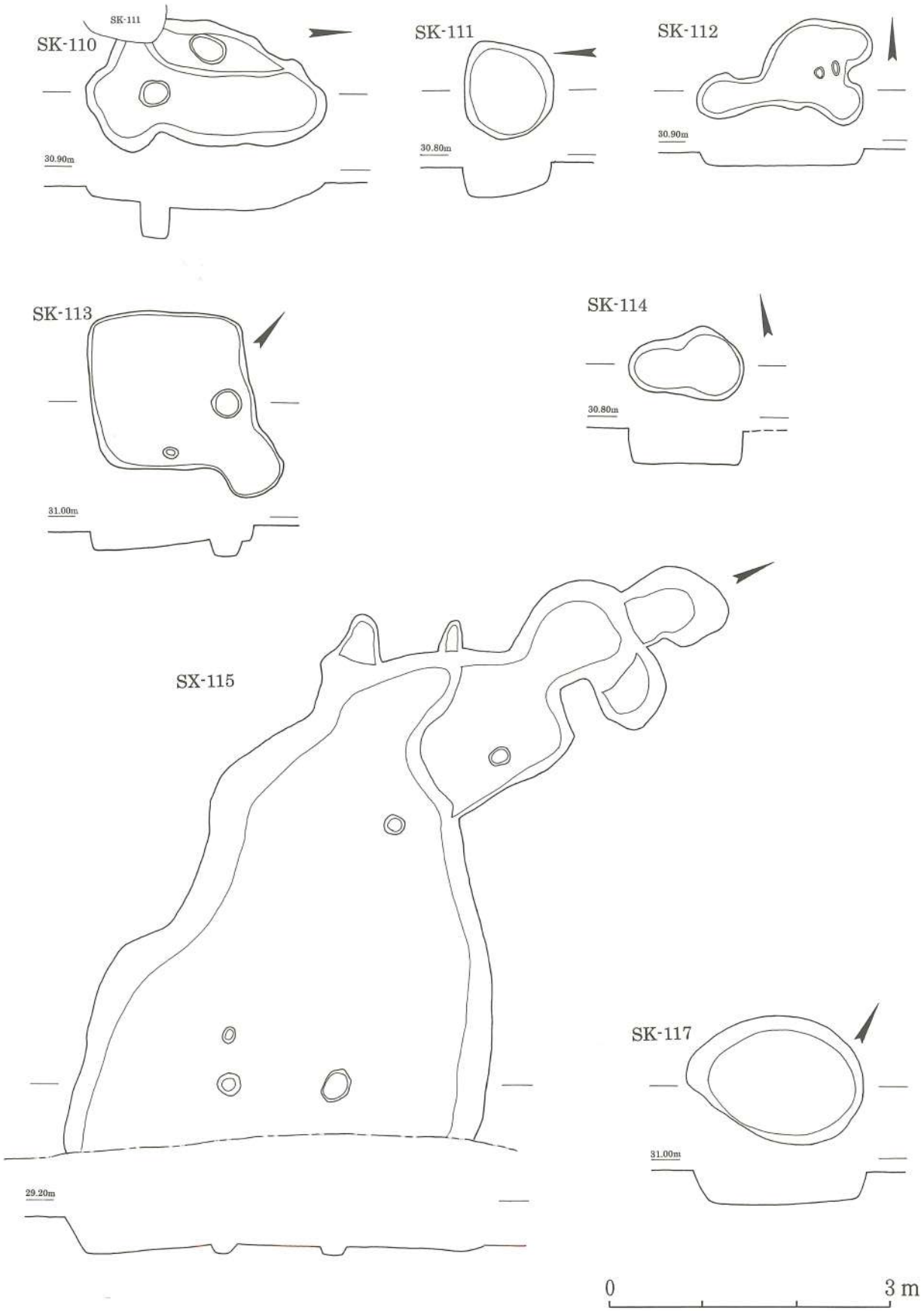


Fig. 19　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(1)　SK-110～SK-114・SX-115・SK-117（1/60）

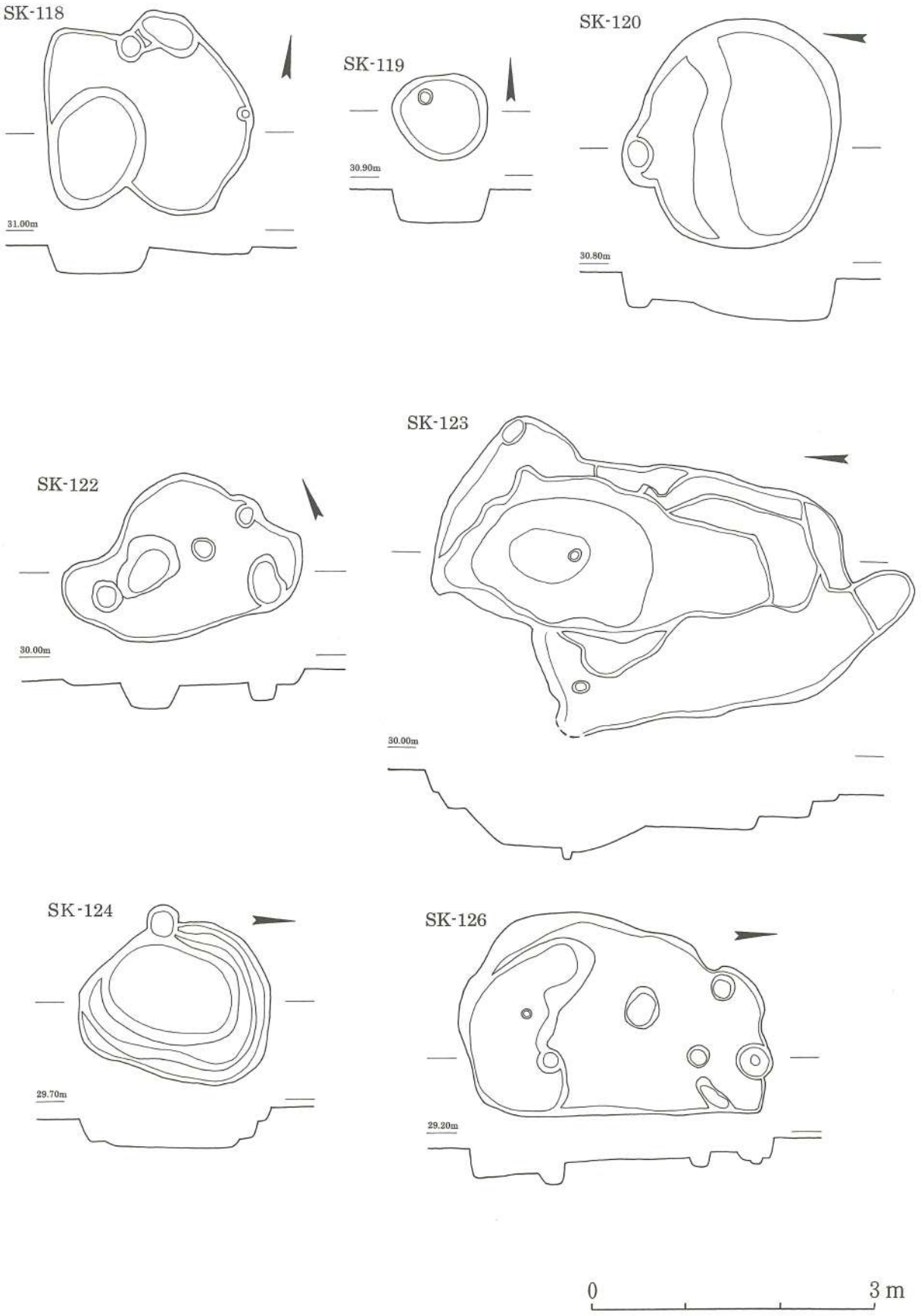


Fig. 20　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(2)　SK-118～SK-120・SK-122～SK-124・SK-126（1/60）

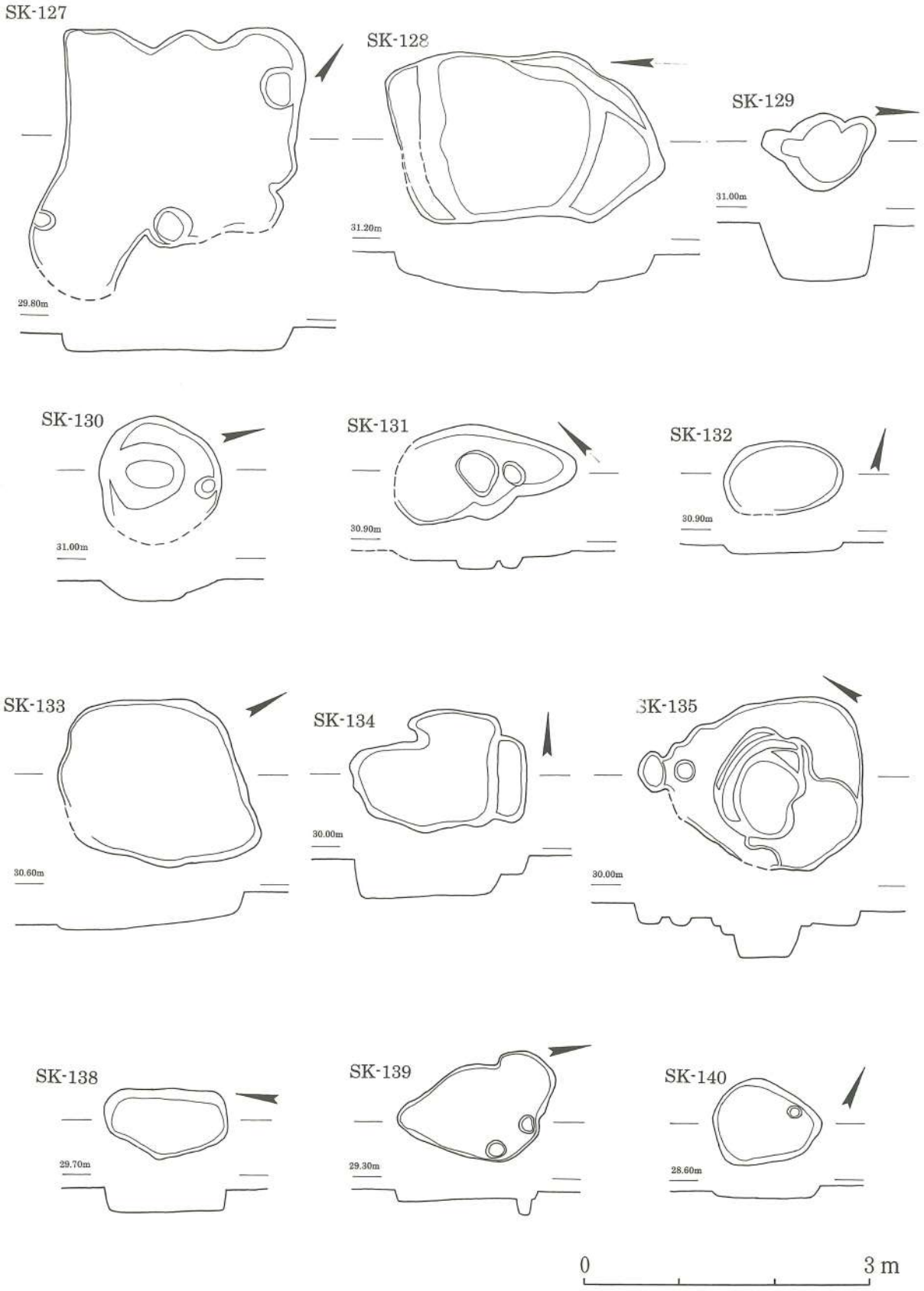


Fig. 21　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(3)　SK-127～SK-135・SK-138～SK-140（1/60）

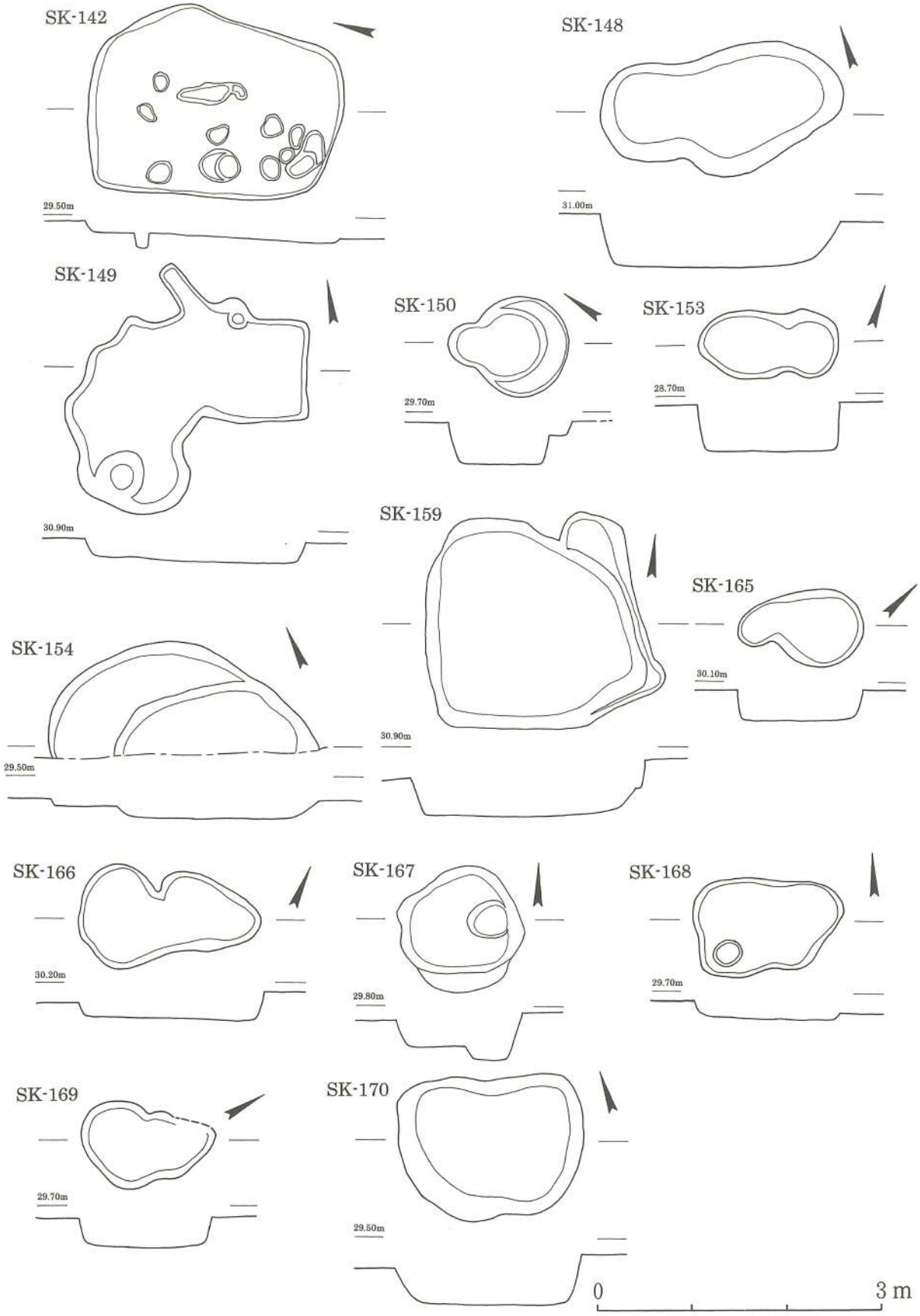


Fig. 22　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(4)
SK-142・SK-148～SK-150・SK-153・SK-154・SK-159・SK-165～SK-170（1/60）

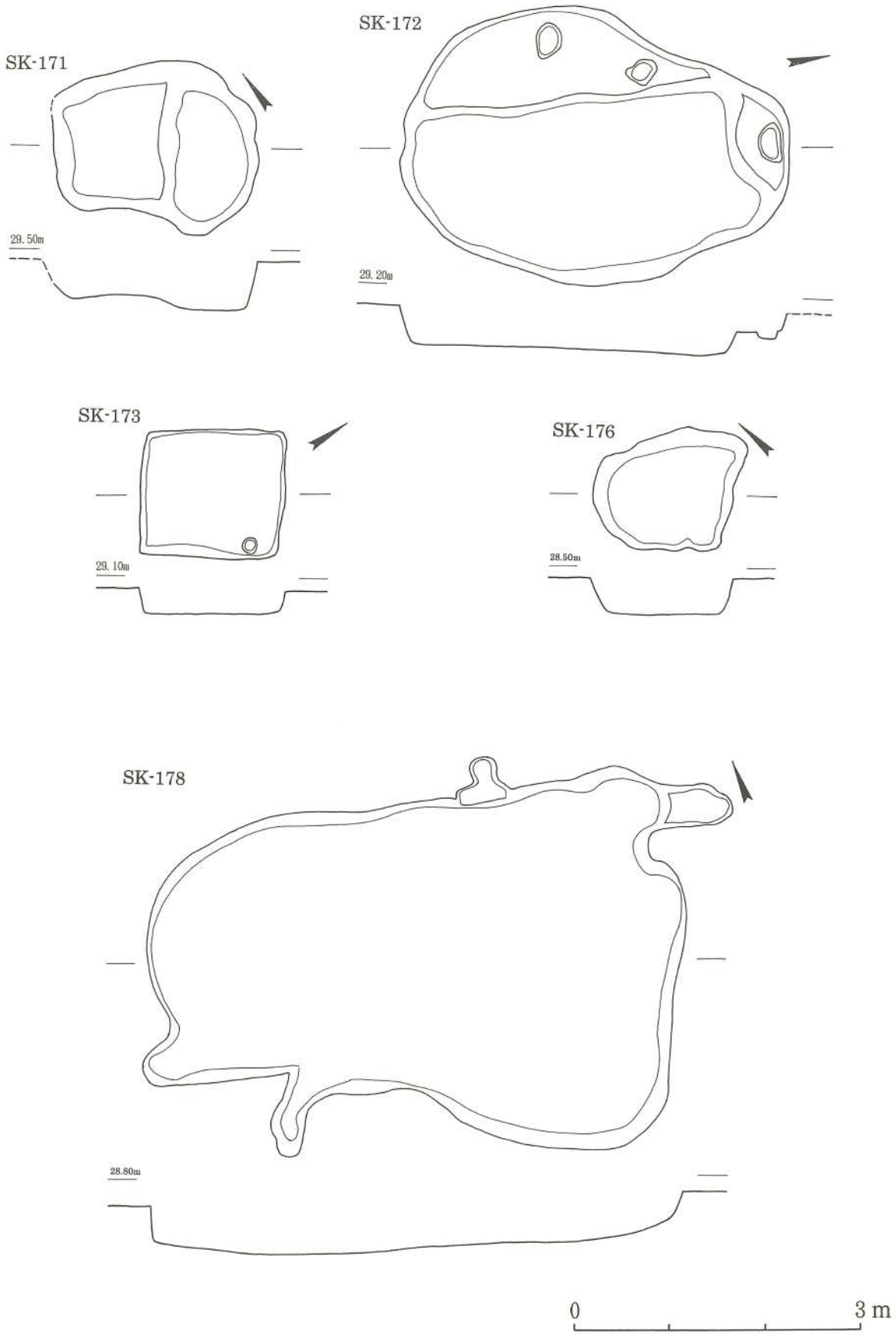


Fig. 23　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(5)　SK-171～SK-173・SK-176・SK-178（1/60）

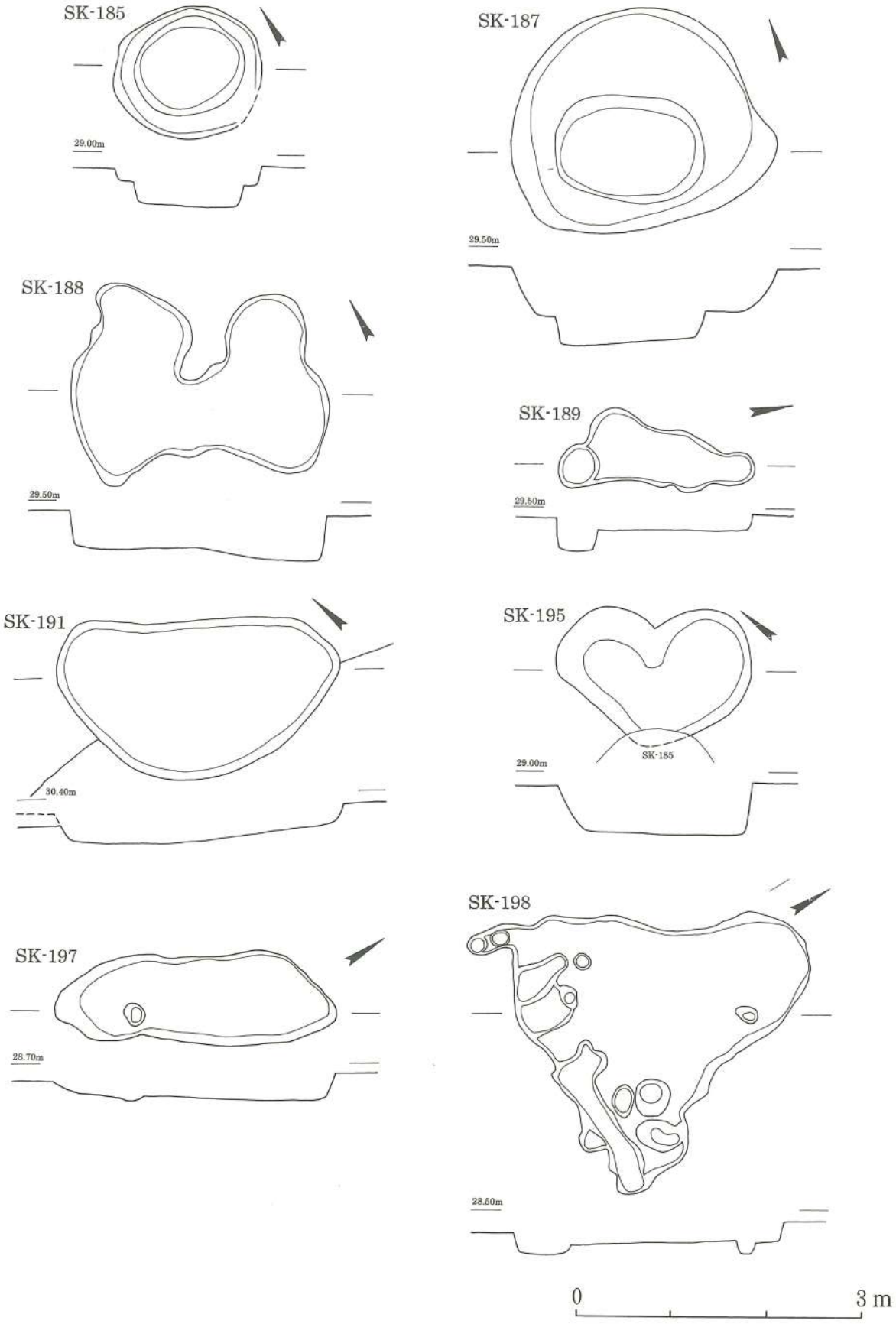


Fig. 24　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(6)
SK-185・SK-187～SK-189・SK-191・SK-195・SK-197・SK-198（1/60）

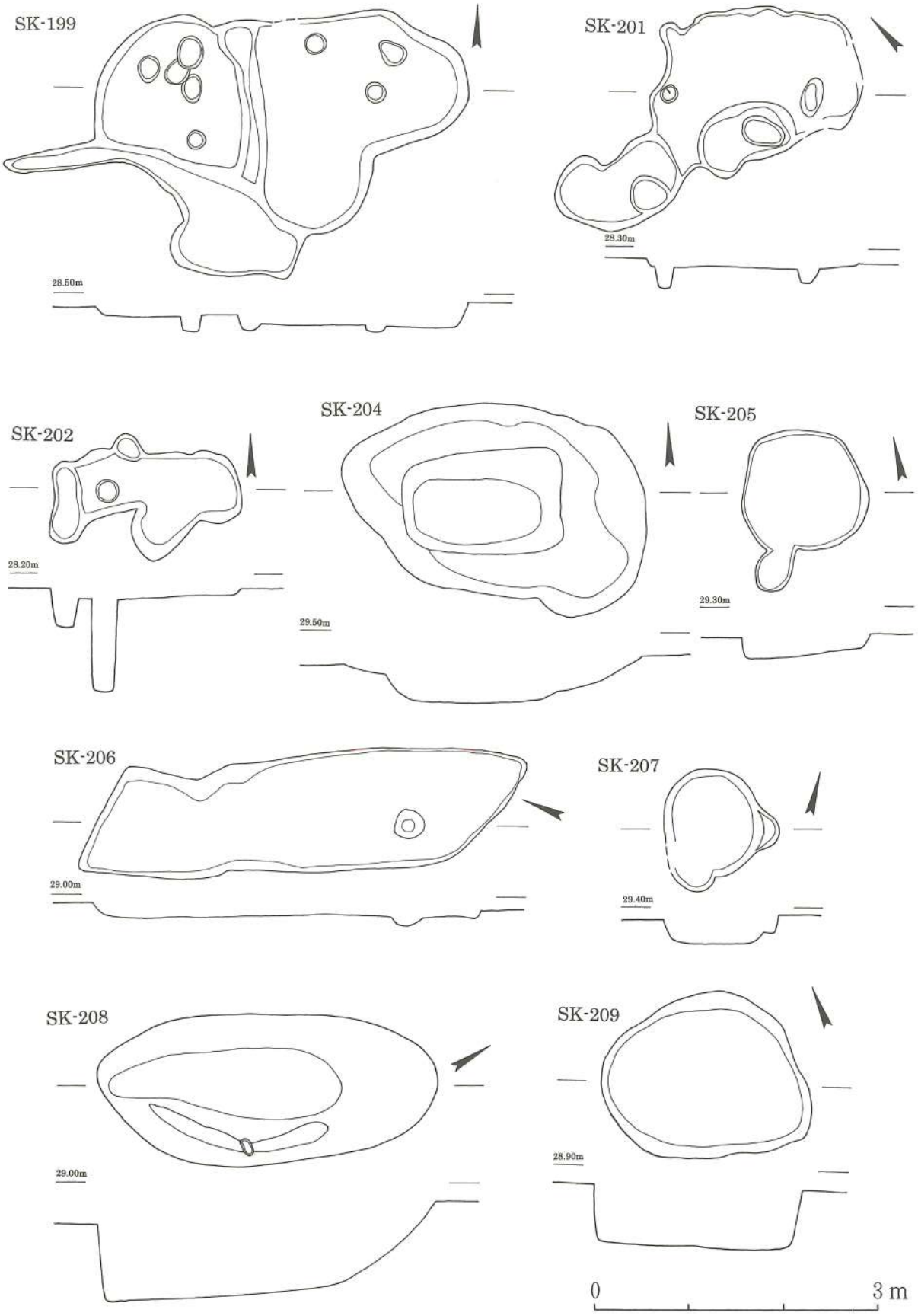


Fig. 25　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(7)　SK-199・SK-201・SK-202・SK-204～SK-209（1/60）

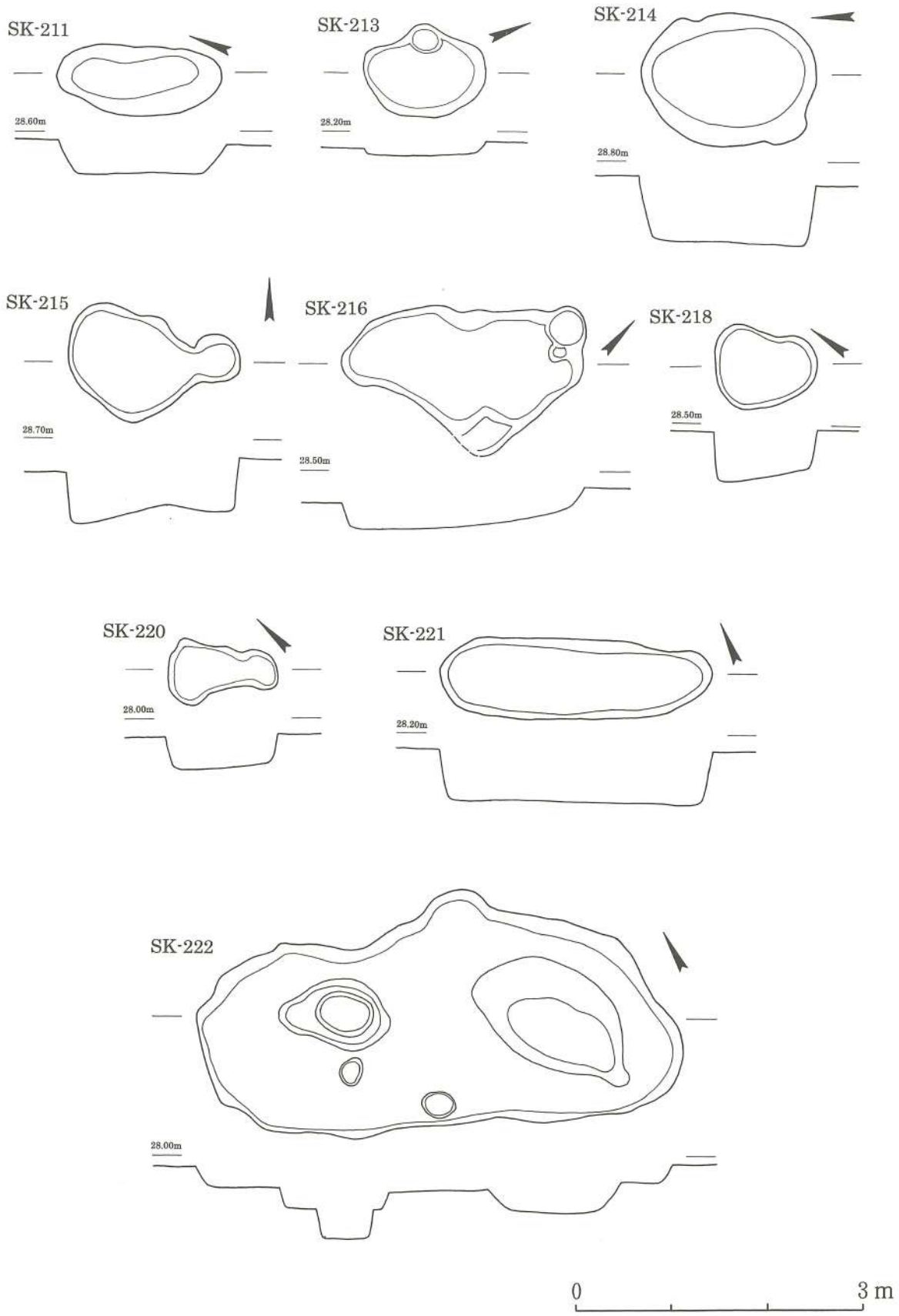


Fig. 26　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(8)
SK-211・SK-213～SK-216・SK-218・SK-220～SK-222（1/60）

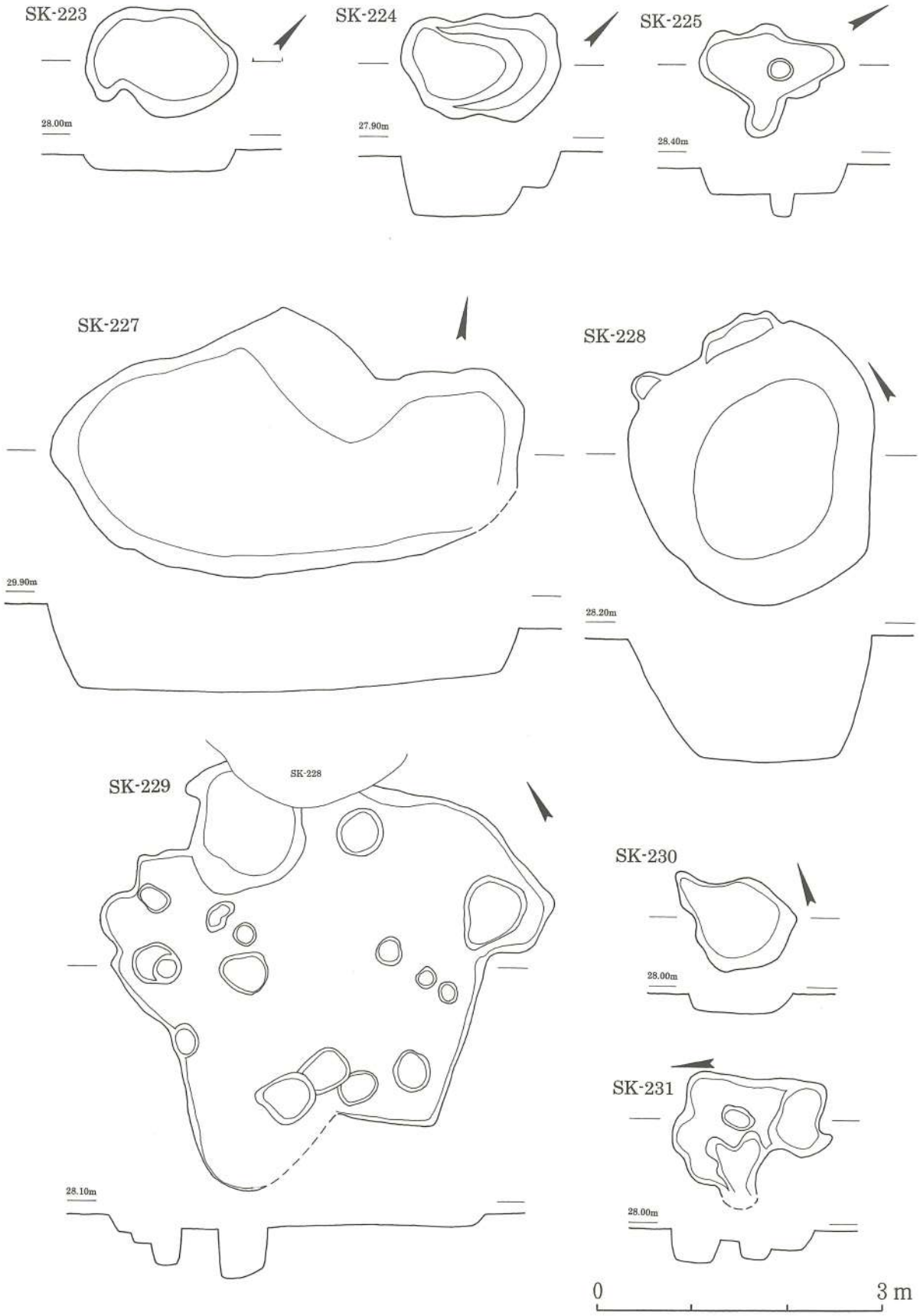


Fig. 27　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(9)　SK-223～SK-225・SK-227～SK-231（1/60）

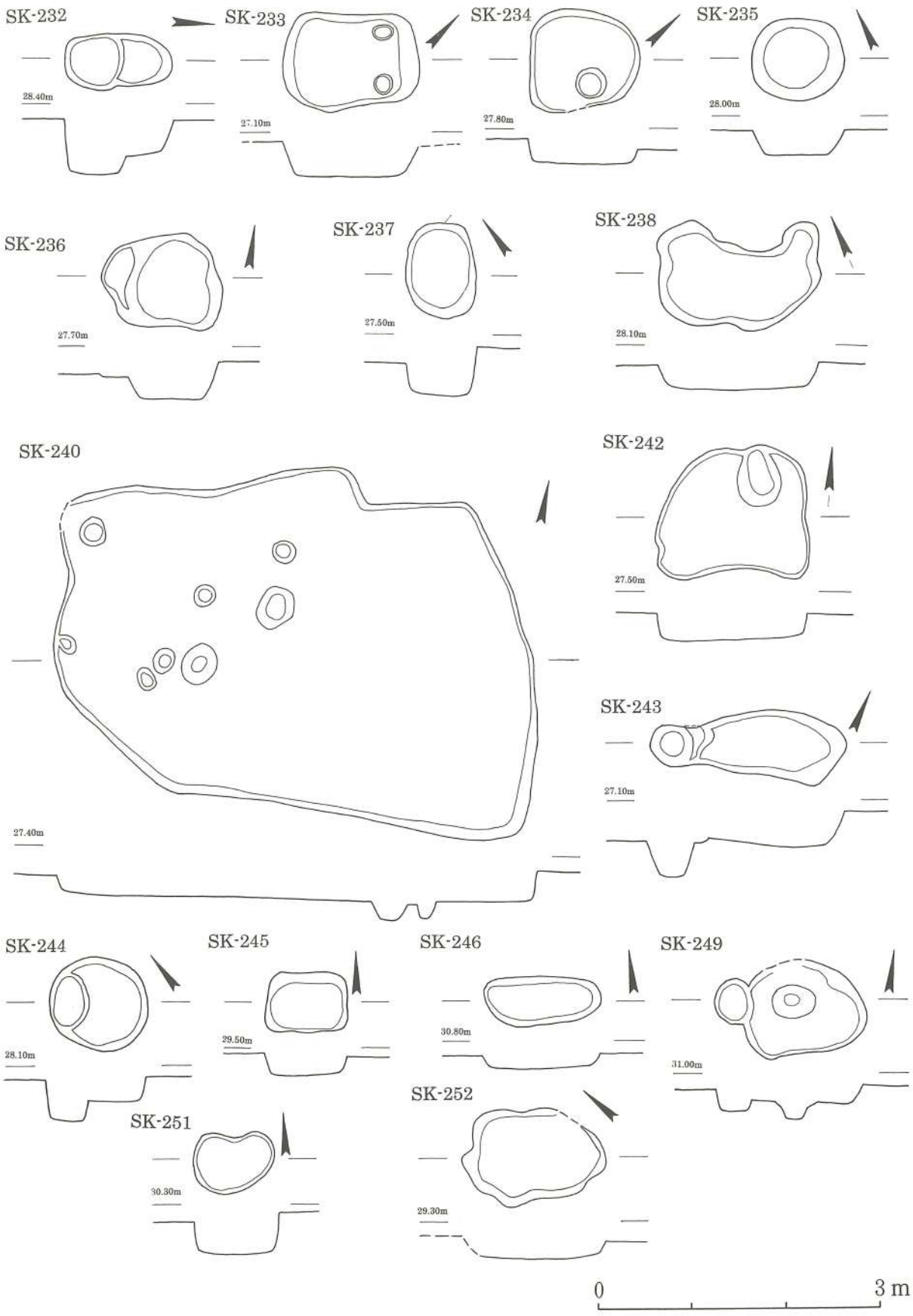


Fig. 28　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(10)
SK-232～SK-238・SK-240・SK-242～SK-246・SK-249・SK-251・SK-252（1/60）

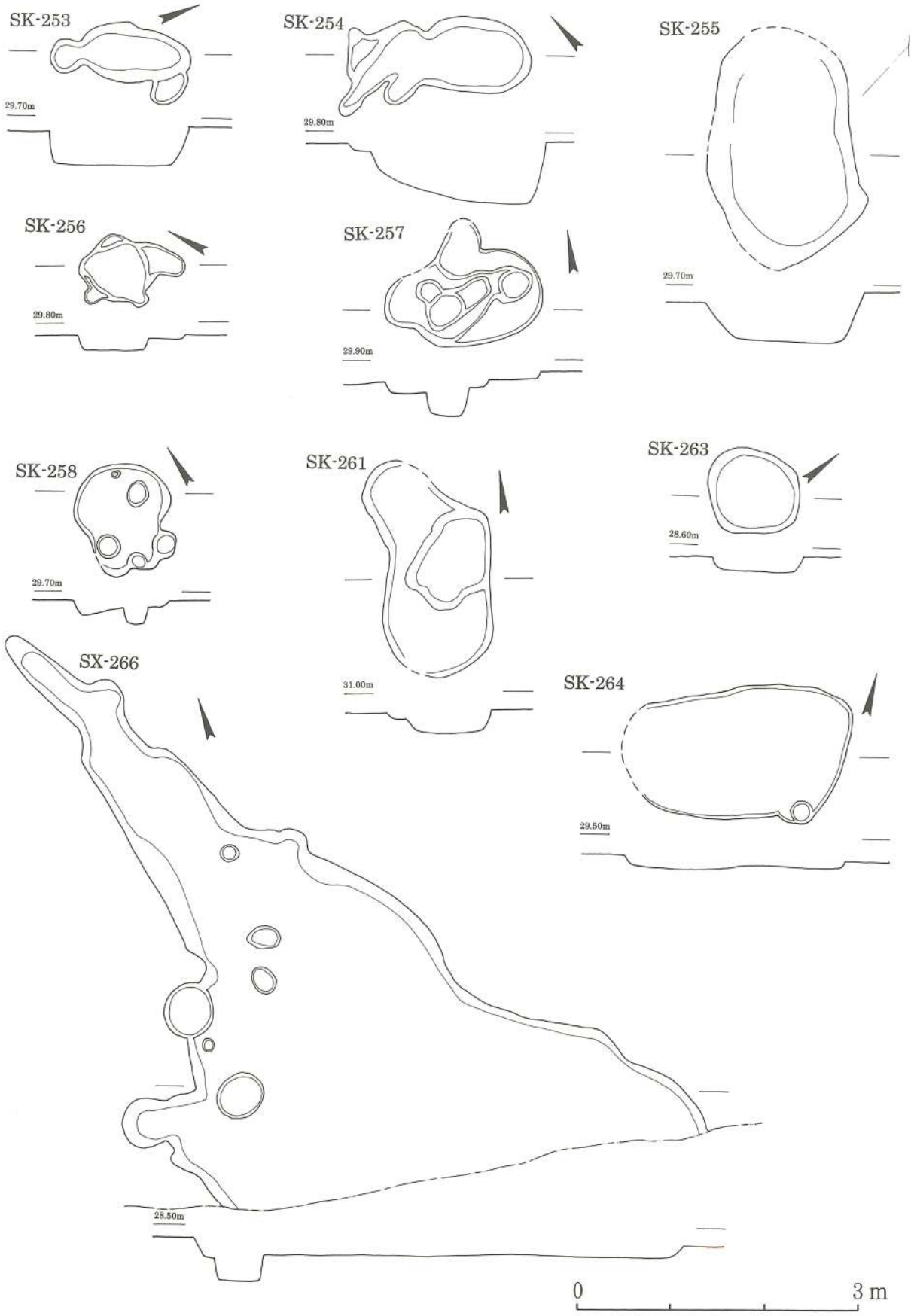


Fig. 29　堤六本谷遺跡11区土壙実測図(11)
SK-253～SK-258・SK-261・SK-263・SK-264・SX-266（1/60）

4．遺　物（Fig.30～44・PL.23～48）

今回の調査では前述した住居址、土壙などの遺構からまとまった量の遺物が出土した。そのほか近世以降の耕作溝などと考えられる溝跡からも少量ではあるが遺物が出土している。ここでは、図示できる遺物について土器類などを遺構ごとに報告する。土器以外の石器などについては、章末に器種ごとに報告したい。

SK-113出土土器（Fig.30・PL.23）

1は、土師器甕。頸部がくびれ口縁は外反し大きく開く。内面外面ともにナデ。

SK-115出土土器など（Fig.30・PL.23）

2は、須恵器甕。球形の胴部に外反し開く口縁がつく。胴部遺存部内外面にタタキ目を残す。3は、滑石製石鍋。体部外面に鍔上の張り出しがめぐる。補修孔であろうか、遺存部分に径7㎜程の小孔が穿孔されている。4は、須恵器坏。平底で体部はやや外反し口縁に至る。5～7は鞴の羽口と考えられる円筒状の土製品。明黄褐色を呈すが、熱を受けた部分は灰色に変性している。

SK-117出土土器（Fig.30・PL.23）

8は、土師器甕。胴部はほとんどくびれず、口縁が「く」の字形に外傾し開く。内外面ともにナデ。9、10は須恵器。9は広口壺。10は高台坏、底部は平坦で体部は直線的に外傾する。底面外周より内側に「ハ」の字形に開く太く短い高台がめぐる。

SK-119出土土器（Fig.30）

11は須恵器坏蓋。天井部は平坦で低く口縁端部が下方に小さく折り曲げられている。扁平なつまみがつく。

12～18、22,23は土師器。12、15～18は甕。12は小型の甕で口縁が「く」の字形に開く。内面ヘラケズリ。15～17は口縁が大きく外反しほぼ水平に開く。18は口縁部が肥厚し外反する。16から18は内面ヘラケズリ。13、14は鉢。半球形の胴部に肥厚し外反する口縁がつく。14は内面ヘラケズリ。22、23は坏。平底で、22は体部がやや内湾しながら立ち上がり口縁に至る。23は体部が直線的に外傾し開く。

19～21、24～37は須恵器。19～21は、浅い体部に短い口縁がつく皿。19は底部がやや垂れ、底部と口縁部の境界に明瞭な稜をもち、口縁は短く外反しながら開く。20はやや上底気味の底部で、短い口縁が外傾し開く。21は平底で、底部と口縁部の境界に明瞭な稜をもち、口縁は小さく外反しながら開く。内面に「×」状のヘラ描き記号をもつ。24～30は坏。24はやや丸底気味の底部で体部はやや外反しながら開き口縁に至る。口縁端部は肥厚し玉縁状を呈す。25は底部中央が垂れ、体部は直線的に外傾し口縁に至る。26は平底で、底部と体部の境界に明瞭な稜をもち、体部は直線的に外傾し口縁に至る。27は平底で体部はやや内湾しながら立ち上がり口縁に至る。28はやや上底の底部で体部は直線的に外傾し開く。29、30は平底で、体部がやや外反し開く。31～35は高台坏。34を除くと一般的な坏より体部が深くいずれも大振りである。31は底面が平坦で体部はやや外反し開く。底面外周よりかなり内側に「ハ」の字形に開く太く短い高台がめぐる。32は底面が平坦で体部はやや外反し開く。底面外周に「ハ」の字形に開くシャープな高台がめぐる。33は底面が平坦で体部は直線的に開き、体部上位でやや外反し口縁に至る。底面外周に「ハ」の字形に開く低く小さな高台がめぐる。34は底面がやや垂れ、体部は直線的に開く。底面外周に「ハ」の字形に開く高台がめぐる。35は直線的に開く体部に小さく外反する口縁がつく。底面

外周に「ハ」の字形に開くシャープな高台がめぐる。36、37は坏蓋。36は天井部が高く、口縁端部が内側につままれている。やや高さのあるつまみをもつ。37は天井部が平坦で浅く口縁端部が外反し下方につままれている。

SK-125出土土器（Fig. 31・PL. 26）

38は土師器碗。丸底の体部が内湾しながら立ち上がり、体部上端をつまむことにより口縁を作り出している。内外面ともにナデ。

SK-128出土土器（Fig. 31）

39は土師器甕。胴部上位がくびれ、頸部は「く」の字形に屈折し、短い口縁がやや外反し開く。

40は須恵器の坏蓋。傘状の小振りな体部で、口縁部内面に断面三角形に近いかえりをもつ。

SK-134出土土器（Fig. 31）

41は土師器坏。平底で体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部は外側への張り出しはなく、内側に小さな受けをもつ。

SK-135出土土器（Fig. 31・PL. 26）

42は土師器甕。胴部上位がくびれ、頸部は「く」の字形に屈折し、短い口縁がやや外反し開く。内面ヘラケズリ。

43は須恵器高台坏。体部の腰は内湾し体部はやや外反しながら口縁に至る。底面外周に「ハ」の字形に開く太く高い高台がめぐる。

SK-137出土土器（Fig. 31・PL. 26）

44は須恵器坏蓋。天井部は丸みを帯び、口縁端部が外反し下方につままれている。扁平なつまみをもつ。

45は土師器甕または甑。底部は丸底と推定され、胴部上位はくびれることなく短い口縁が小さく外反し開く。外面ハケ目。

SK-144出土土器（Fig. 31・PL. 27）

46、47は土師器。46は高坏。坏部上位を欠く。脚部は中空で裾部は朝顔状に外反し開く。裾部下部はSD-146として調査した溝跡から出土した。47は瑳？不整な球形を呈し、肩部下位に櫛描き波状文がめぐる。須恵器の焼成不良品とも考えられる

48、49は須恵器。48は坏。口縁部が外側やや上方に張り出し、外反しながらも内傾するシャープな受けをもつ。49は坏蓋、天井部が丸みを帯び、体部は内湾しながら口縁に至る。

SK-145出土土器（Fig. 31）

50は土師器甕。胴部上位はくびれることなく、口縁は外反し水平近くまで開く。

SD-146出土土器（Fig. 32）

51～53は須恵器。51、52は坏。51は平底で体部は外傾し口縁部が小さく外反する。52は口縁部が外側やや上方

に張り出し、内傾する受けをもつ。53は坏蓋。深いが天井部は平坦で口縁部は一旦外反し下方に小さくつままれている。

SK-148出土土器（Fig. 32・PL. 27～28）

54～56は土師器甕。いずれも頚部のくびれはなく口縁が外反し開く。55は内面ヘラケズリ。

57～61は須恵器の坏類。55は平底で体部が直線的に外傾し口縁に至る。58、59は高台坏。58は体部が内湾し立ち上がり口縁がやや外傾する底面外周よりやや内側に「ハ」の字形に開く高台がめぐる。59は大振りで、底面が垂れ体部はやや内湾しながら立ち上がり口縁に至る。60、61体部が浅い皿。60は平底でやや外反する短い口縁がつく。61は底部は上底気味で外反する口縁がつく。

SK-149出土土器（Fig. 32・PL. 27～28）

62、63は土師器高坏。62は脚部が下位で屈曲し裾部が大きく開く。63は中膨らみの中空の脚部。いずれも内外面ともにナデ。

SH-156出土土器（Fig. 32・PL. 28）

64、65、68は土師器。64は甕。球形の胴部に外反し開く口縁がつく。外面ハケ目。65は鉢。半球形の胴部にやや内傾する短い口縁がつく。内面ハケ目。68は坏。丸底で体部は直線的で、口縁はほぼ水平に外側へ張り出し内傾する受けをもつ。

66、67、69～72は須恵器。66、67は坏蓋。いずれも天井部は丸く深く口縁部が下方へつままれている。69～71は坏。69は平底で体部は内湾しながら立ち上がり口縁部がやや外反する。70、71は高台坏。70は体部の腰の張りが強く体部は直立に近い角度で立ち上がり口縁部がやや外反する。底面外周よりやや内側に断面が半円形に近い鈍い高台がめぐる。71は体部が直線的に外傾し口縁に至る。底面外周よりやや内側に断面が半円形に近い鈍く低い高台がめぐる。72は瓶の口縁部。

SH-157出土土器（Fig. 32）

73～75は土師器。73は坏蓋。天井部は平坦で丸みに欠け体部は内湾品が開き口縁部に至る。体部と口縁部の境界に沈線状の段がめぐる。74は高台坏。大振りで体部はやや内湾しながら立ち上がり口縁部に至る。底面は平坦で、外周より内側に小さな高台がめぐる。75は甕。頚部のくびれがなく口縁がやや外反し開く。外面ハケ目。

SH-158出土土器（Fig. 32・PL. 28）

76、77は須恵器坏。76は体部が浅い皿。平底で短い口縁部が外傾し口縁端部が小さく外反する。77は丸底で体部も丸みを帯び、口縁部は外側やや上方に張り出し、内傾する受けをもつ。

SK-159出土土器（Fig. 32、33・PL. 29）

78, 79は須恵器坏。78は丸底で体部はやや直線的で、口縁部は小さく外側やや上方に張り出し、外反し内傾する受けをもつ。79は丸底で体部はやや丸みを帯び、口縁部は外側やや上方に張り出し、内傾する受けをもつ。

81は土師器甕。頚部はややくびれ外反する口縁部がやや開く。外面ハケ目。

SK-160出土土器（Fig. 33・PL. 29）

82、83は土師器。82は甑。丸底で胴部はくびれることなく口縁部に至り、口縁部はやや外反し小さく開く。底部中央に径2.4cmの大きな穴をもちその周囲に径5mm程度の小孔がめぐる。内面ナデ。底部外面へラケズリ。83は甕の口縁部。須恵器の焼成不良品かとも考えられる。

SH-161出土土器（Fig. 33）

84は須恵器。高坏の坏部か。直線的に外傾する口縁部。

SK-163出土土器（Fig. 33・PL. 29）

85～89は土師器。58、87、89は坏。85は丸底で体部は内湾しながら立ち上がり口縁部に至る。87は大振りの浅い体部の高台坏。底面は平坦で、体部は内湾しながら立ち上がりほぼ直立する口縁部に至る。口縁端部が内側にやや肥厚する。89は底部が平坦で体部は内湾する。口縁部の外への張り出しは小さく、直線的に内傾する短い受けを持つ。

90～94は須恵器坏類。90～92は平底の坏。90は体部の腰の張りが強く口縁がやや外反する。91は体部が直線的に外傾し口縁部はやや外反する。93は体部が直線的に立ち上がり口縁部に至る。高坏の坏部か。直線的に外傾する口縁部。93、94は平底で体部が浅い皿。93は短い口縁部が直線的に外傾し、口縁端部が小さく外側につままれている。94は外反し開く短い口縁をもつ。

SH-164出土土器（Fig. 33～36・PL. 30～37）

95～120、122～136は土師器または須恵器の坏類。95、96、98、99、101、102、104、105～116、118、122、125、127～136は須恵器。97、100、103、106、117、119、120、123、124、126は土師器。95～104は平底の坏。105～116、119、122は高台坏。117、120、123は丸底の坏。118、124～136は浅い体部に短い口縁がつく皿。

121は土師器坏蓋。137～150はいずれも須恵器の坏蓋。

151、152、176は鉢。151、176は土師器。いずれも内湾し立ち上がる体部に外反する口縁がつく。内外面ともにナデ。152は須恵器。内湾しながら立ち上がる体部の上端が小さく内側につままれ口縁が作り出されている。

153～175、177～179はいずれも土師器の甕または甑。168は甑の底部。169は丸底の甕胴部。

180、181は須恵器高坏。180は坏部。浅い体部に短い口縁がつく。181は脚部。裾部が朝顔状にほぼ水平に大きく開く。

SK-167出土土器（Fig. 37・PL. 37）

182、183は須恵器坏。182は平底に近く、体部はやや外反し口縁部に至る。183は高台坏。底面は垂れ体部の腰は丸みを帯びやや外反しながら開き口縁部に至る。

SK-172出土土器（Fig. 37・PL. 37、38）

184～188は須恵器。184は坏。体部はやや丸みを帯び、体部は直線的に開く口縁部は外側やや上方に張り出し太く短く内傾する受けがつく。185、186は坏蓋。185は天井部が丸みを帯び、体部と口縁部の境界に稜をもつ。186は、体部が深く天井部は丸みを帯び口縁部はほぼ直立する。体部と口縁部の境界に沈線状の段をもつ。天井部外

面遺存部にヘラ描きによる逆「レ」の字状の記号をもつ。187は甕または壺の口縁部。118は体部が筒状を呈す碗？

189～191は土師器。189は甑か。逆台形上に開く体部がそのまま口縁部に至る。外面ハケ目。190は鉢。丸底で半球形の体部に肥厚し外反する口縁がつく。191は甕。頸部が「く」の字形にくびれ短く小さい口縁部が外傾する。

SK-174出土土器（Fig.37、38・PL.38、39）

192～199、209は須恵器。192、194は坏。体部が直線的に開き、口縁部は外側にほぼ水平に小さく張り出し内傾する受けがつく。194は、体部が直線的に開き、口縁部は外側上方に張り出し断面三角形の太く短い受けがつく。底部外面にヘラ描きによる複数の直線が描かれている。193、195、196は坏蓋。193は天井部が平坦で傘状に開く体部がそのまま口縁に至る、口縁部内面に小さなかえりをもつ。195、196は天井部が丸みを帯びた蓋。195は口縁が内傾する。196は口縁部がやや開く。197～199はいずれも甕の口縁部。197は遺存部の一部に自然釉が掛かっている。209は高坏の脚部。

200～208、210は土師器。200～202、206、210は甕。200は頸部が「く」の字形にくびれ口縁部が外反しながら開く。201は頸部がくびれ口縁は直立し端部が小さく外反する。内面ヘラケズリ。202は頸部のくびれはなく口縁が外反し開く。206、210は把手をもつ甕。206は丸底で、球形に近い胴部の中位に把手をもつ、口縁は直立しやや外反する。外面ハケ目。210は頸部がややくびれ口縁は外反し開く。遺存部下位が一部肥厚し把手がついていた痕跡を残す。内外面ともにナデ。203、204は小型土器。203は丸底で半球形の体部上位が肥厚し口縁を作る。内外面ともにナデ。204は手捏ね。205は坏、平底で体部が直線的に外傾し口縁に至る。内外面ともにナデ。207、208は高坏脚部。

SH-175出土土器（Fig.38、39・PL.39～41）

211～224は須恵器。211は中空の高坏脚部。212～214、216は坏。212は底部が丸みを帯び、体部は直線的に開く。口縁部の外側への張り出しは水平で小さく、内傾する短い受けがつく。213は口縁部の外側への張り出しが水平に近く、直線的に内傾する受けがつく。214は底部が丸みを帯び、体部は直線的に開く。口縁部は外側やや上方へ鋭く張り出し、内傾するシャープな受けがつく。216は浅い体部の皿。平底で直線的に外傾する短い口縁がつく。215、217～219は坏蓋。215、218、219は天井部が丸みを帯び、体部は内湾しながら口縁に至る。218、219は体部と口縁部の境界に明瞭な稜をもつ。220は広口壺などの蓋。天井部は中央が垂れ下がり、口縁はほぼ直立する。221～223は細部に差異はあるもののほぼ同一形態を呈す高坏。丸底で受けをもつ坏部に二段に開く短めの脚部がつく。224は甕。胴部には内外面に叩き目を残す。

225、227は土師器甕。いずれも球形の胴部で短い口縁がほぼ直立する。内外面ともにナデ。

226は弥生式土器で壺の底部。内外面ともにナデ。

SK-176出土土器（Fig.39）

228は土師器甕。頸部がくびれ口縁部は一旦直立し端部が大きく開く。内面ヘラケズリ、外面ナデ。

SK-178出土土器（Fig.39・PL.41）

229～232、237、238は土師器。229～231、237、238は甕。229は頸部がすぼまり、短い口縁が小さく外反する。230、231は頸部がくびれ口縁が外反し開く。内外面ともにナデ。237は頸部がややくびれ口縁が直線的に「く」

の字形に開く。胴部中位両側に把手をもつ。内外面ともにナデ。238は頚部のくびれはなく口縁が外反し開く。内面ナデ、外面ハケ目。232は碗。半球形の体部が内湾しながら立ち上がりそのまま直立する口縁に至る。内面にヘラ状工具の跡を残すも、内外面ともにナデ。233～236は須恵器。233、234は坏。233は体部が浅く口縁部は外側やや上方へ大きく張り出す。直立した小さい受けがつく。234は口縁部が外側上方へ鋭く張り出し、内傾した直線的な受けがつく。235、236は坏蓋。いずれも天井部は丸みを帯び、体部が内湾しながら口縁部に至る。

SK-187出土土器（Fig.39、40・PL.41、42）

239～246は須恵器。239、242、243は高台坏。239は体部が直線的に外傾し、口縁端部がやや外反する。底面外周よりかなり内側に「ハ」の字形に開く高台がめぐる。242は体部がやや外反し口縁に至る。底面外周やや内側に断面四角形の高台がめぐる。243は体部が直線的に外傾し口縁に至る。底面外周やや内側に断面四角形の高台がめぐる。241、244、245は坏蓋。241は天井部が丸みを帯び、体部が内湾しながら口縁部に至る。体部と口縁部の境界に沈線状の段をもつ。224、225は扁平なつまみをもつ蓋。224は浅く広い体部で口縁端部がやや外反する。245は天井部が丸みを帯び、体部は内湾しながら口縁に至る。口縁端部は下方に小さく折り曲げられている。246は、長頚壺の頚部。

247～249は土師器甕。247、249は頚部のくびれがなく、口縁が外反し開く。いずれも内外面ともにナデ。248は頚部がくびれ口縁が大きく外反し開く。内面ヘラケズリ、外面ナデ。

SK-188出土土器（Fig.40・PL.42、43）

250～258、262は須恵器。250、252は高台坏。250は体部の腰が丸みをもちやや内湾しながら口縁に至る。口縁端部は小さく外傾する。底面外周よりやや内側に「ハ」の字形に開く高台がめぐる。252は大振りで、体部は直線的に開き口縁部がさらに外反する。底面外周に沿って高い高台がめぐる。251は浅い体部の皿。平底で口縁端部が小さく外反する。253、254は平底の坏。いずれも体部が外傾し口縁がやや外反する。255～257は坏蓋。255は天井部が丸みを帯び、体部が内湾しながら口縁部に至る。口縁はやや開く。体部と口縁部の境界に沈線状の段をもつ。256は天井部が丸みを帯び、体部は内湾しながら口縁に至る。口縁端部は下方に折り曲げられ小さく外反する。つまみをもつものと推定される。257は天井部が平坦で浅い体部が直線的に傘状に開き口縁に至る。口縁端部がやや肥厚する。扁平なつまみがつく。258は甕。262は高坏の脚部。裾部は朝顔状に開き裾端部がやや内湾する。

259～261、263～267は土師器。259～261は甕。259は頚部がくびれることなく直線的な口縁が「く」の字形に外傾し開く。内面ヘラケズリ。260は頚部がくびれることなく外反し開く口縁に至る。内面ヘラケズリ。261は頚部がややくびれ、直立する口縁端部が小さく外反する。内外面ともにナデ。263は台付きの甕または坏などの台部。「ハ」の字形に外反する短い台。264、266は高坏。264が高坏の裾端部。266は坏部、体部は浅く皿状を呈し、短い口縁が内湾しながら立ち上がり端部はやや外側につままれている。265、267は甑？いずれも直線的な胴部が外傾し口縁に至る。265は口縁端部内面が玉縁状に肥厚する。267は口縁がやや外反し小さく開く。胴部上位両側面に把手がつく。

SK-190出土土器（Fig.40、41・PL.43、44）

268、272～277、280は土師器。268は高台坏。体部の腰は丸みを帯び、口縁が直線的に外傾する。底面外周よ

りやや内側に断面半円形の高台がめぐる。272、275～277は甕。272は丸底で半球形の胴部で、頸部はくびれることなく、口縁が外反しやや開く。275は頸部のくびれはなく口縁が緩やかに外反し開く。276は球形の胴部で頸部がくびれ「く」の字形に直線的に開く短い口縁がつく。内面ヘラケズリ。277は頸部がややすぼまり口縁は外反し大きく開く。273、274は鉢。いずれも半球形の浅い体部に外傾し大きく開く口縁がつく。280は高坏の坏部。浅い体部が口縁部分でやや外反し、口縁端部は肥厚し断面「コ」の字形を呈す。

269～271、278は須恵器。269は高台坏。体部は内湾しながら立ち上がり口縁に至る。底面外周よりやや内側に断面四角形の高台がめぐる。270、271は坏蓋。270は天井部の歪みが激しく、口縁はほぼ直立する。体部と口縁部の境界に稜をもつ。271は天井部が丸みを帯び、体部が内湾し開きそのまま口縁に至る。体部と口縁部の境界に沈線状の段をもつ。278は樽型の胴部の上面に口縁を取り付けた甕。胴部には内外面ともに叩き目が残る。287が正面観、289が側面観。

SH-193出土土器（Fig. 41、42・PL. 44）

281～286、291は土師器。281～284は甕。281、283は胴部がすぼまり口縁が外反する。282は頸部が「く」の字形にくびれ、やや外反する口縁が開く。外面ハケ目。287は頸部のくびれがなく口縁が直線的に外傾し開く。285、286は坏。285は底部が平坦で体部は直線的に開く。口縁部は外側への張り出しは小さく、外反し内傾する受けがつく。286は底部が丸みを帯び、口縁部は外側へほぼ水平に張り出し断面三角形の低い受けがつく。291は甑。胴部は内湾しながら立ち上がり口縁に至る。底部はなく径5㎝程の孔が焼成前に穿孔されている。

287～290、292、293は須恵器。287～290は坏。287、288はいずれも底部が丸みを帯び、口縁部は外側やや上方へ張り出し、287は受けが外反しながら内傾し、288は直線的に内径する。289、290はいずれも口縁部が外側やや上方に小さく張り出し断面三角形の低い受けがつく。292は坏蓋。天井は丸く体部が内湾しながら口縁に至る。293は高坏の坏部。浅い体部は一旦屈折し外反しながら開く口縁がつく。

SK-199出土土器（Fig. 42）

294は土師器甕。頸部がくびれやや外反する口縁が開く。

SK-204出土土器（Fig. 42・PL. 45）

295～298、300、301は須恵器。295、298は坏蓋。295は体部が内湾しながら口縁に至る。298は天井部が平坦で体部は浅く口縁端部がやや肥厚し内湾する。扁平なつまみをもつ。296、297は坏。296は平底で体部がやや外反しながら開き口縁に至る。297は高台坏。体部がやや外反しながら開き口縁に至る。底面外周より内側に断面四角形の低い高台がめぐる。300、301は甕の口縁部。

302、303は土師器。302は甕胴部上位がすぼまり直立する短い口縁がつく。内外面ともにナデ。303は甑の口縁部か、朝顔状に開く。

SH-212出土土器（Fig. 42・PL. 45）

304～306、310、314は土師器。304、305は甕。304は口縁が一旦外反し開き、さらにほぼ直立する口縁が立ち上がる二重口縁をもつ。305は頸部がくびれ、口縁が外反し開く。306は小型丸底壺。小さい半円形の胴部で胴部上位に直線的に開く口縁がつく。外面に胴部と口縁部の境界は見えないが、内面の境界部分に段をもつ。310は

坏。口縁部は外側へ水平に張り出し内傾する短い受けがつく。314は小型の高坏坏部。体部は浅く逆「ハ」の字形に直線的に開き口縁端部が小さく外反する。

307～313は須恵器。307、308は体部が深く天井部が丸みを帯びた坏蓋。307は口縁がほぼ直立し、308はやや開く。いずれも体部と口縁部の境界に沈線状の段をもつ。309、311、312は坏。309は口縁部がやや上方小さく張り出し内湾し内傾する受けがつく。底部外面に回転ヘラ切り痕。311は口縁部がやや上方に張り出し内湾する受けがほぼ直立する。312は口縁部がほぼ水平に張り出し断面が三角形に近い受けがつく。313は甕または壺の肩部。遺存部に２条一組の沈線が２ヶ所にめぐり、ヘラ描きによる綾杉文が施文されている。

SB-217出土土器（Fig. 42）

315は須恵器坏蓋。口縁部が直線的にやや開く。316は土師器甕。頚部が「く」の字形にくびれ外傾する口縁がつく。

SK-219出土土器（Fig. 42・PL. 45）

317、318は土師器。317は高坏坏部の類であろうか、体部は深く、直線的に開き口縁に至る。318は甕。口縁が一旦外反し開き、さらにほぼ直立する口縁が立ち上がる二重口縁をもつ。口縁の屈曲部が凸帯状に張り出し稜をもつ。

SK-220出土土器（Fig. 42）

319は土師器甕。頚部のくびれはなく、肥厚する口縁が外反しながら開く。外面ハケ目。

SK-222出土土器（Fig. 43）

320、321は土師器。320は甕。頚部が「く」の字形にくびれ外傾する口縁がつく。321は甕口縁部。須恵器の焼成不良品かとも思われる。

322～324は須恵器。322、323は坏。322は体部が内湾し立ち上がり口縁端部が小さく外反する。323は口縁部がやや上方に張り出し、内傾する短く鈍い受けがつく。324は坏蓋。体部は内湾しながら開き口縁に至る。

SK-224出土土器（Fig. 43・PL. 45）

325～327はいずれも須恵器。325は壺などの口縁。326は坏体部が外反しながら開き口縁部に至る。327は鉢。平底と推定され、体部は直線的に外傾し開く。口縁下部に１条、胴部上位に２条の沈線がめぐる。

SK-229出土土器（Fig. 43・PL. 45、46）

328、329は須恵器坏。328は高台坏。体部が直線的に外傾し口縁に至る。底面外周やや内側に「ハ」の字形に開く高台がめぐる。329は皿。平底で口縁は外反しながら大きく開く。

330～336は縄文式土器の鉢類。336は不規則な波状口縁を呈す。

337、338は弥生式土器。337は逆「L」字形口縁の甕で口縁下部に断面三角形の凸帯が１条めぐる。338は弥碗。平底で体部が内湾しながら立ち上がり口縁に至る。内外面ともにナデ。

SK-232出土土器（Fig. 43）

339は須恵器甕の口縁部。頚部外面に櫛描き波状文をもつ。

SK-237出土土器（Fig. 43）

340は縄文式土器の浅鉢。

SK-244出土土器（Fig. 43・PL. 46）

341～343、345は土師器。341～343は坏として扱ったが、坏蓋の可能性も否めない。341、342は体部と口縁部の境界が「く」の字形に屈折しほぼ直立する口縁がつく。内外面ともにナデ。343は内湾する浅い体部で口縁端部が小さく屈曲する。345は小型の高坏。体部は逆「ハ」の字形に直線的に開き、脚部は中膨らみの袋状を呈す。

SK-248出土土器（Fig. 43、44・PL. 46）

346、347は土師器甕。346は頚部のくびれはなく外傾する短い口縁がつく。347は頚部のくびれはなく肥厚した口縁が外反する。

348、349は須恵器坏蓋。348は天井部が丸みを帯び、体部は内湾しながら口縁に至る。349は天井部が丸みを帯び、体部は内湾しながら口縁に至る。天井部中央に低い円筒状のつまみをもち、体部と口縁部の境界には沈線状の段をもつ。

SK-254出土土器（Fig. 44）

350は土師器鉢。半球形の体部で口縁は「く」の字形に屈曲、外傾し大きく開く。

351は縄文式土器浅鉢。

352は須恵器皿。平底で口縁は外傾し開く。口縁端部がやや肥厚する。

SK-255出土土器（Fig. 44・PL. 46）

353～365は土師器。353～358は甕。353は頚部がくびれ、外反する口縁が大きく開く。354～357は頚部のくびれがなく、各々口縁が小さく外反し開く。358は頚部がくびれるものの口縁部の開きは小さい。外面ハケ目。359～361は甑。胴部が外傾し開き口縁に至る。359は口縁が肥厚しやや外傾する。360は胴部が大きく開き口縁がさらに外反し開く。外面ハケ目。361は胴部が大きく開き口縁がさらに水平近くまで開く。362は鉢。体部は腰の張りが強くやや内湾しながら立ち上がり口縁に至る。内外面ともにナデ。363は浅い体部の皿。底部は丸みを帯び体部はそのまま内湾し口縁に至る。内外面ともにナデ。364は手捏ねのミニチュア土器。平底で直線的な口縁が外傾する。365は台付き甕などの台。「ハ」の字形に大きく開く。

336、367は縄文式土器の鉢類。

SK-256出土土器（Fig. 44）

368は土師器甕。頚部がくびれ口縁はやや肥厚し、外反し開く。

SK-258出土土器（Fig. 44）

369、370は土師器皿。平底で体部が浅くやや外反する短い口縁が外傾し開く。

SX-266出土土器（Fig. 44・PL. 46、47）

371は須恵器坏。底部は丸みを帯び、体部は直線的に開く。口縁部はほぼ水平に外側張り出し内傾する小さな受けがつく。底面に回転ヘラケズリ痕を残す。

372～375は土師器。372は碗。体部が内湾しながら立ち上がり口縁に至る。内外面ともにナデ。373は高台坏。体部の腰は丸く内湾し、口縁端部がやや外反する。底面外周に「ハ」の字形に開く高台がめぐる。坏内面は黒色を呈す。内黒土器。374は甕。頸部が「く」の字形にくびれやや肥厚し外傾する口縁がつく。375は小型丸底壺。ややいびつな球形の胴部に外傾し開く口縁がつく。内外面ともにナデ。

土製品・石器等

今回の調査ではこれまで報告してきた土器群とともに、すでに土器とともに報告したSK-115出土の滑石製石鍋を含めて、そのほかにも土製品や石器、石製品などが少量ではあるが出土している。ここでは、上記石鍋を除くこれらの土製品や石器、石製品などについて、出土遺構、法量・材質などを下記一覧表にまとめ報告に代える。

Tab. 5　堤六本谷遺跡11区出土土製品・石器等一覧表

遺物番号	種　類	出土遺構	法　量（cm・g）				材　質	備　考
			長　さ	幅	厚　さ	重　量		
376	土錘	SK-208	4.0	外径1.6	内径0.5	10.3	――	
377	土錘	SK-208	4.0	外径1.6	内径0.5	※8.2	――	一部欠損
378	石鏃	SH-192	2.2	1.6	0.3	1.3	黒曜石	凹基式
379	石鏃	SH-174	2.4	1.9	0.4	1.6	サヌカイト	凹基式
380	石鏃	SH-193	3.7	2.3	0.8	6.4	サヌカイト	平基式
381	石斧	SH-192	12.2	4.7	2.7	258.4	花崗岩質	
382	石斧	SK-117	9.3	4.3	1.5	83.2	砂岩質	
383	石斧	SK-224	※8.0	※6.7	※2.3	※178.8	サヌカイト	基部のみ遺存
384	石斧	SK-235	※12.2	6.8	2.2	※257.9	砂岩質	刃部欠損
385	磨石	SH-190	6.6	6.2	2.5	148.0	花崗岩質	
386	磨石	SK-115	5.2	5.1	1.8	74.8	花崗岩質	
387	砥石	SK-187	※16.0	3.8	2.4	※178.8	泥岩質	一部欠損
388	砥石	SH-190	※8.5	4.0	2.6	※120.3	砂岩質	一部欠損
389	砥石	SH-212	※15.5	13.0	2.1	※381.8	砂岩質	一部欠損
390	紡錘車	SH-145	4.3	※2.1	1.0	※17.6	滑石	
391	石製円盤	SD-140	10.4	10.0	1.3	182.1	黒色片岩系	後世の溝跡出土
392	分銅形土製品	L-13Gr.	14.9	6.6	1.0	145.3	黒色片岩系	遺構外出土
393	鉄滓	SH-164	7.0	5.3	2.3	104.9	――	
394	鉄滓	SH-164	6.8	6.7	2.3	100.1	――	

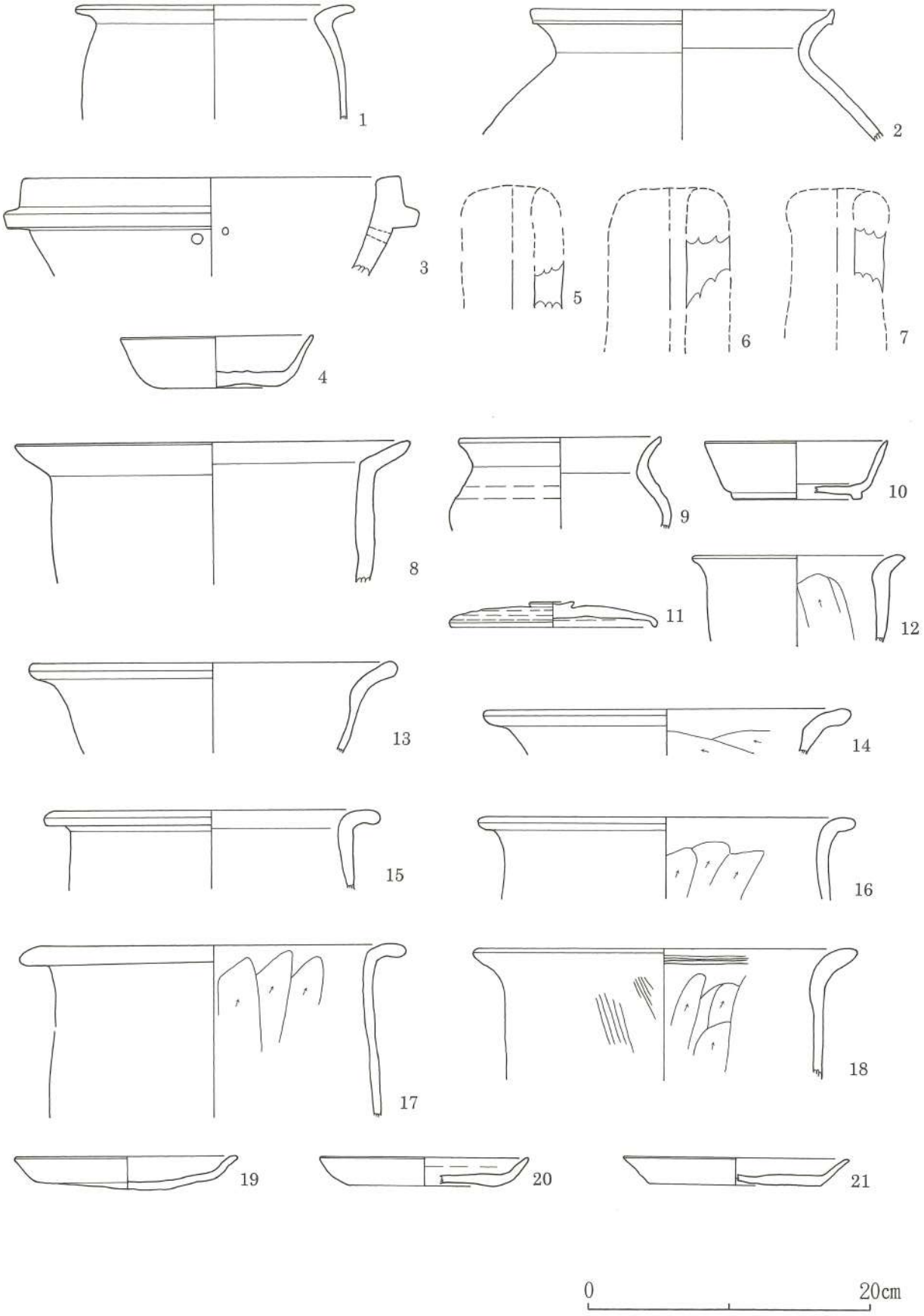


Fig. 30　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(1)（1／4）

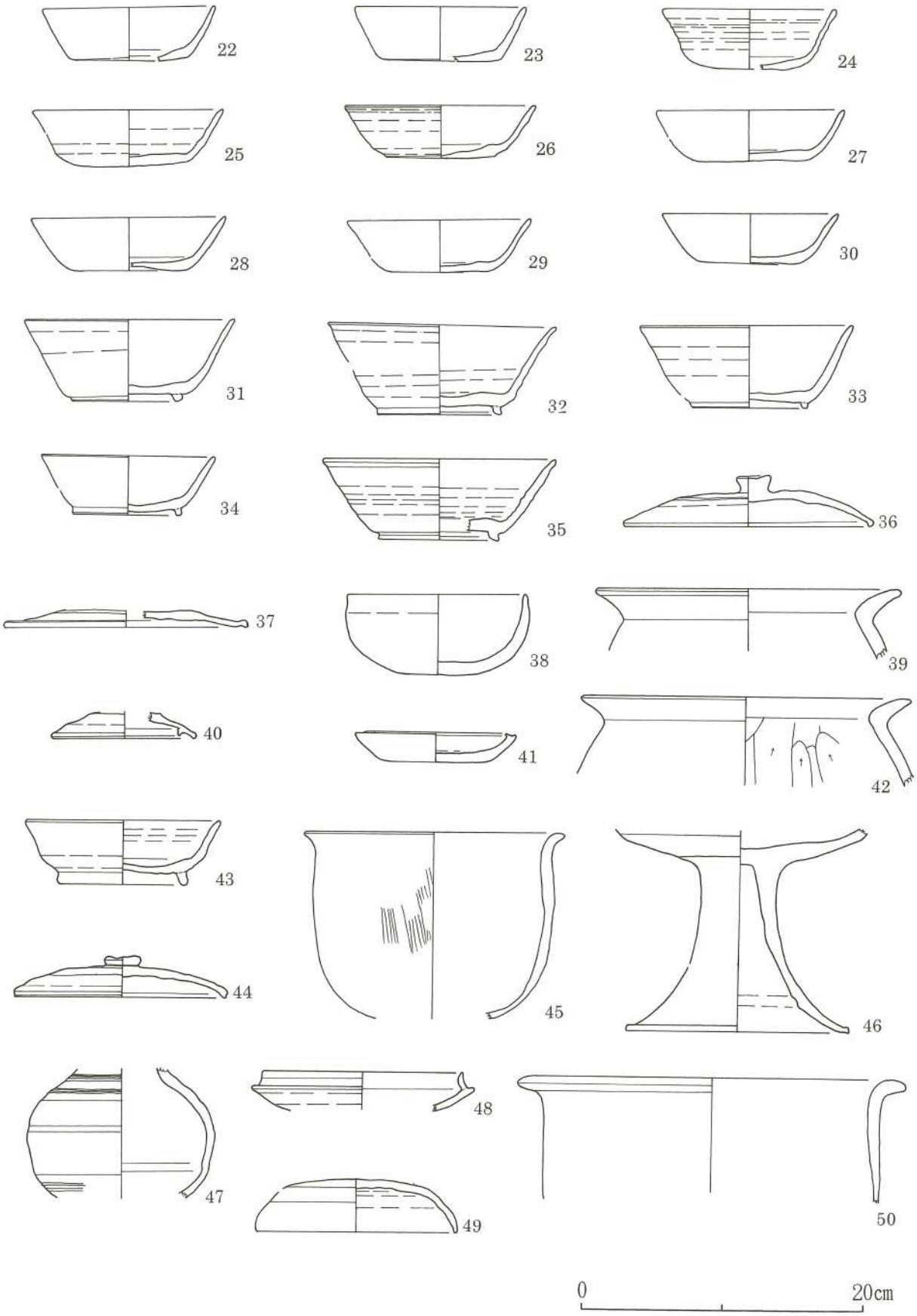


Fig. 31　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(2)（1/4）

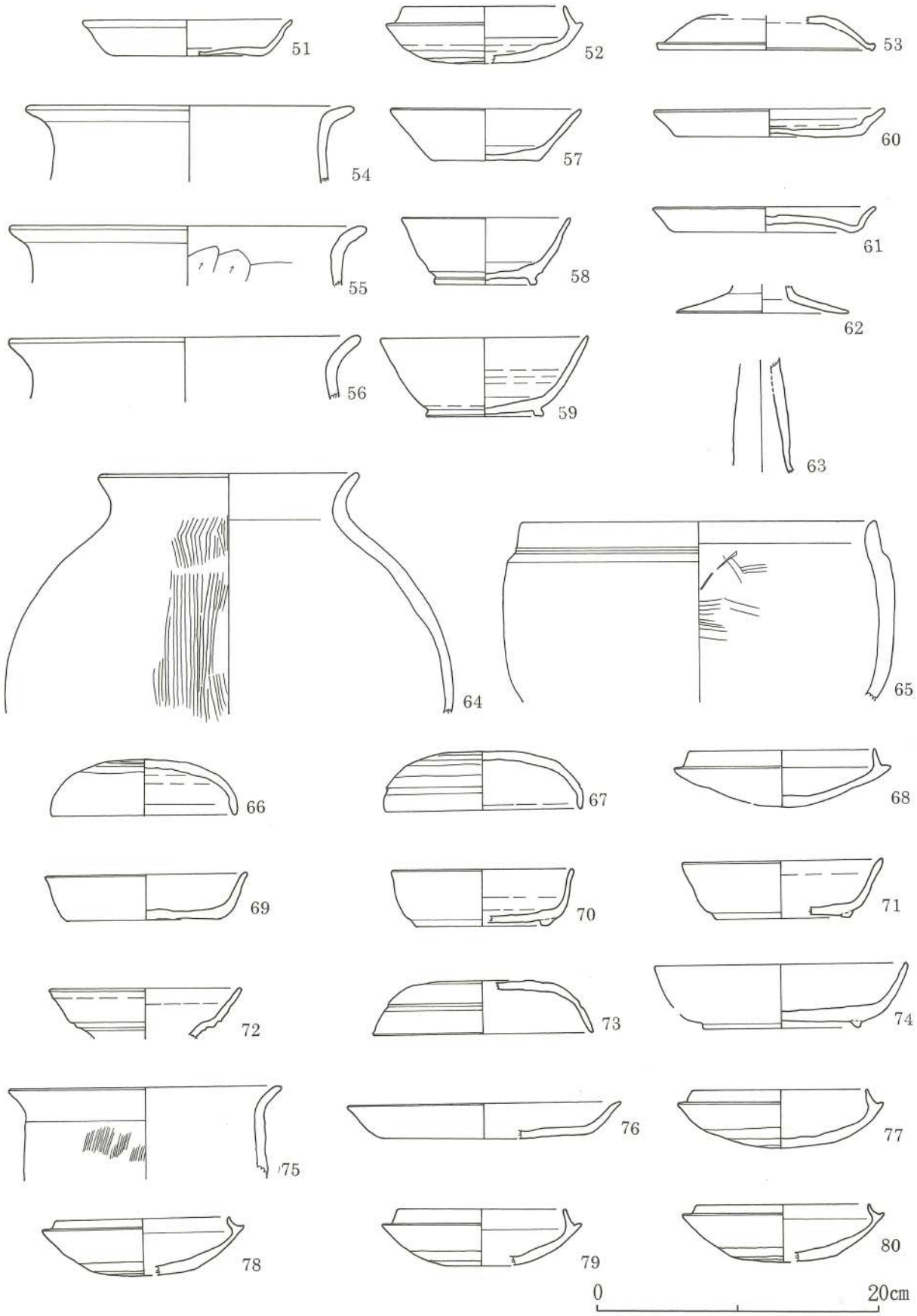


Fig. 32　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(3)（1／4）

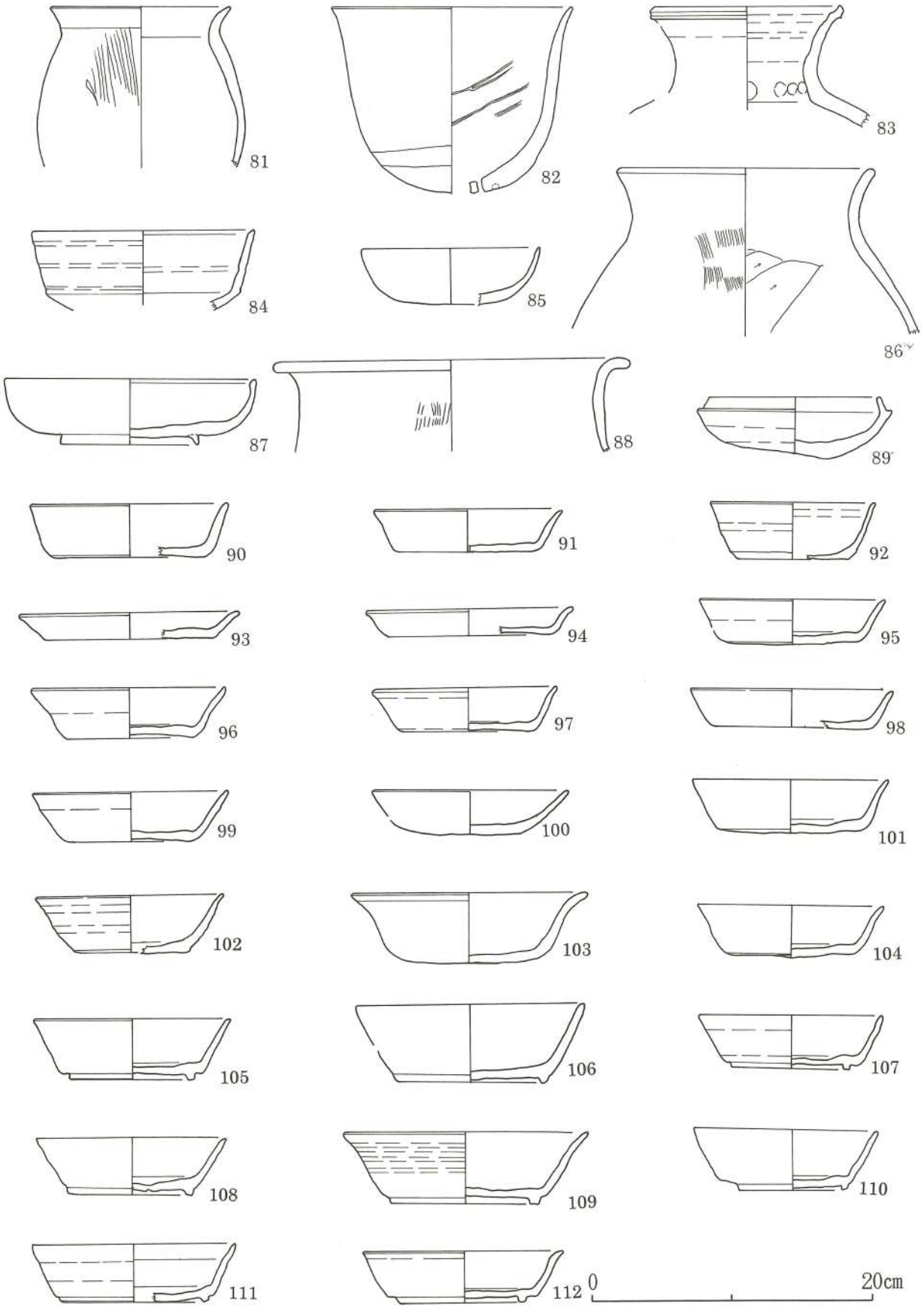


Fig. 33　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(4)（1／4）

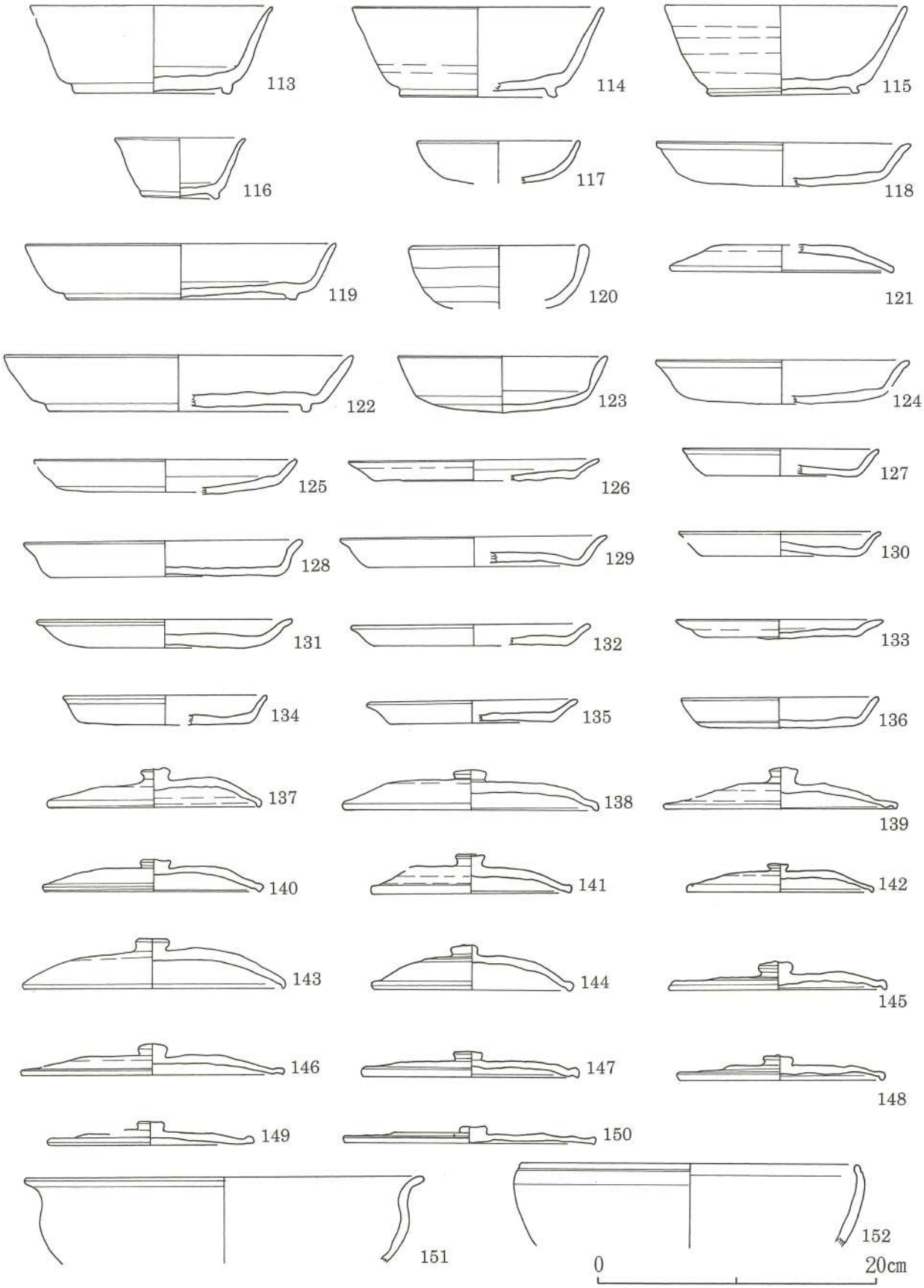


Fig. 34　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(5)（1／4）

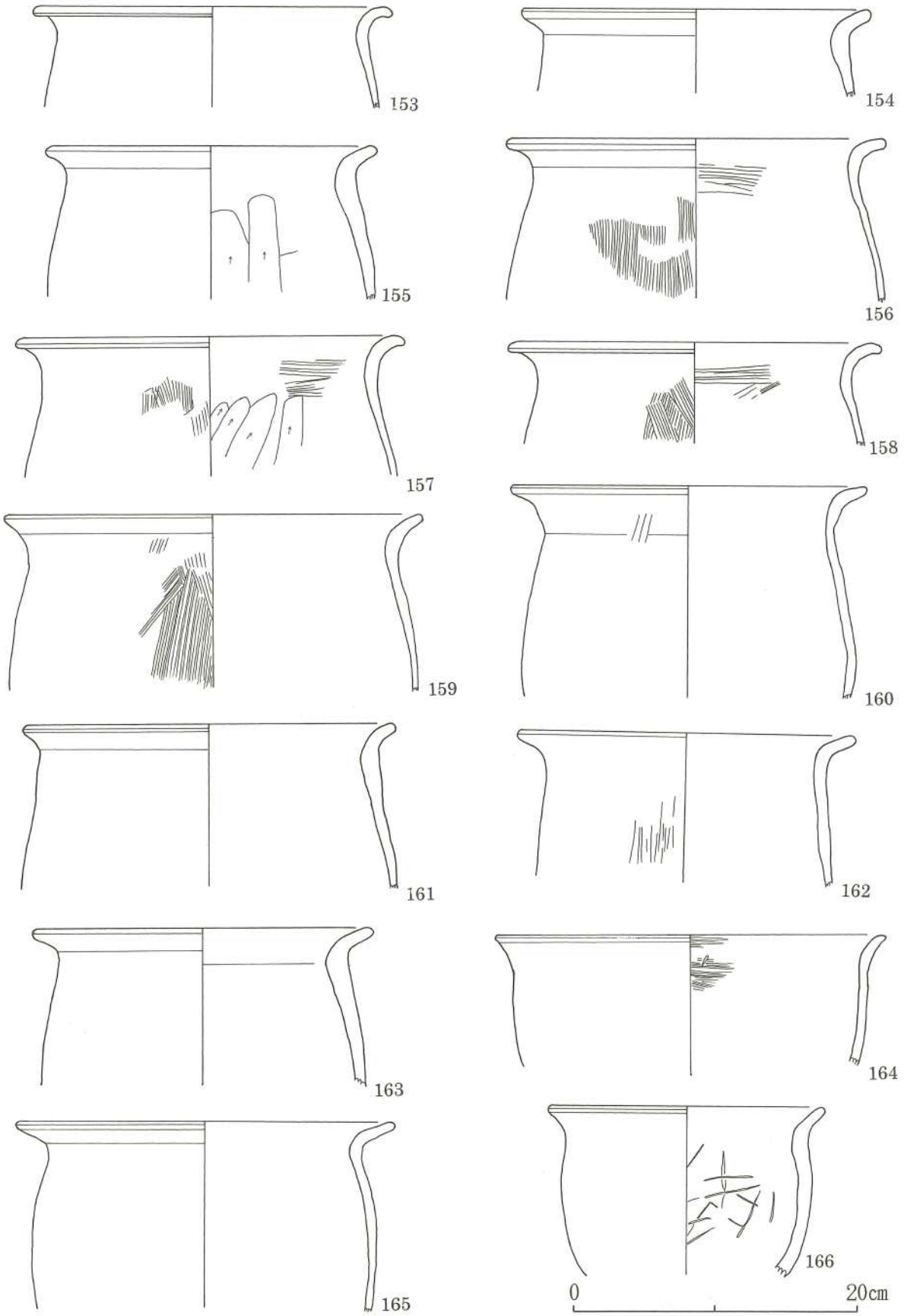


Fig. 35　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(6)（1／4）

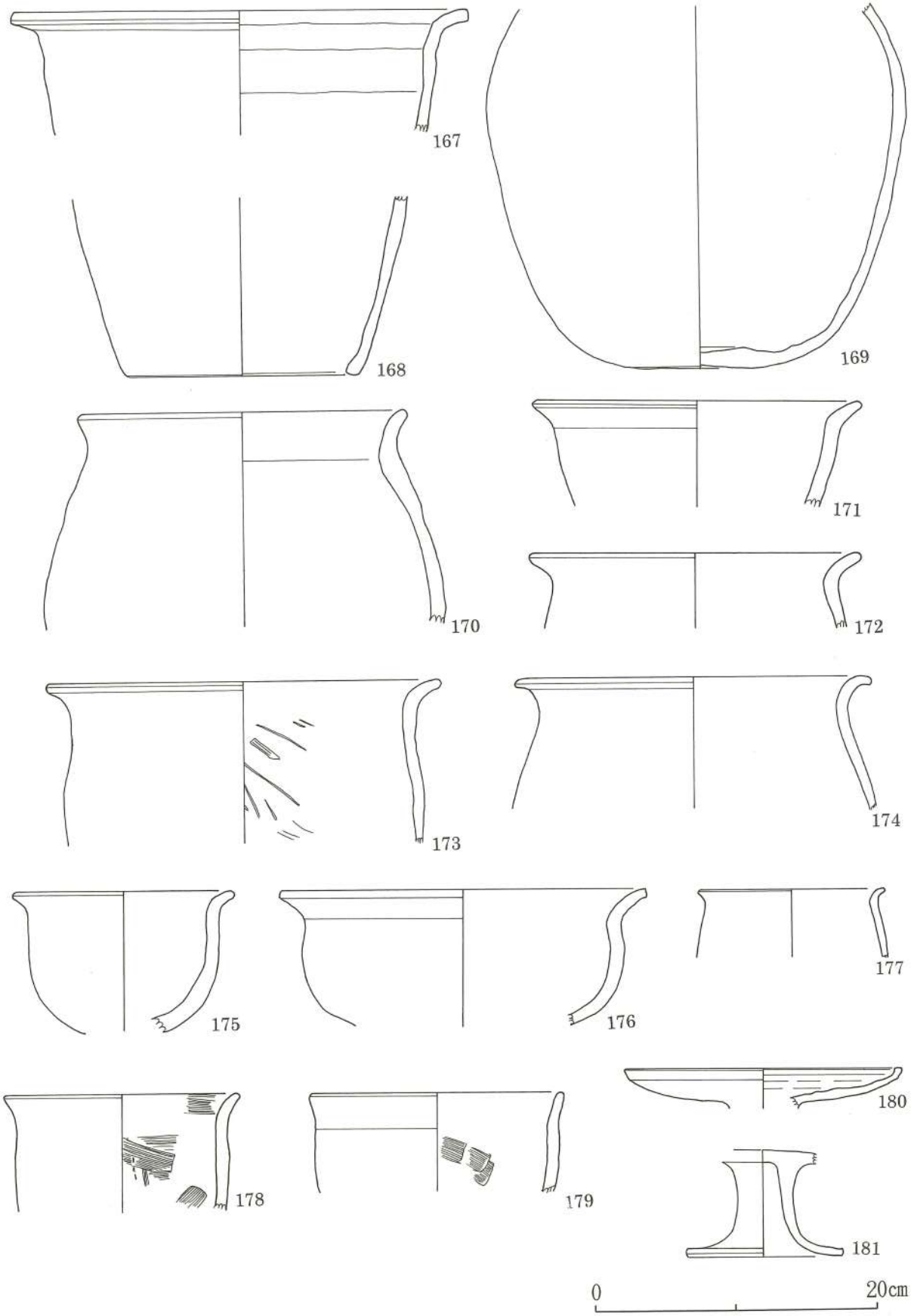


Fig. 36　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(7)（1／4）

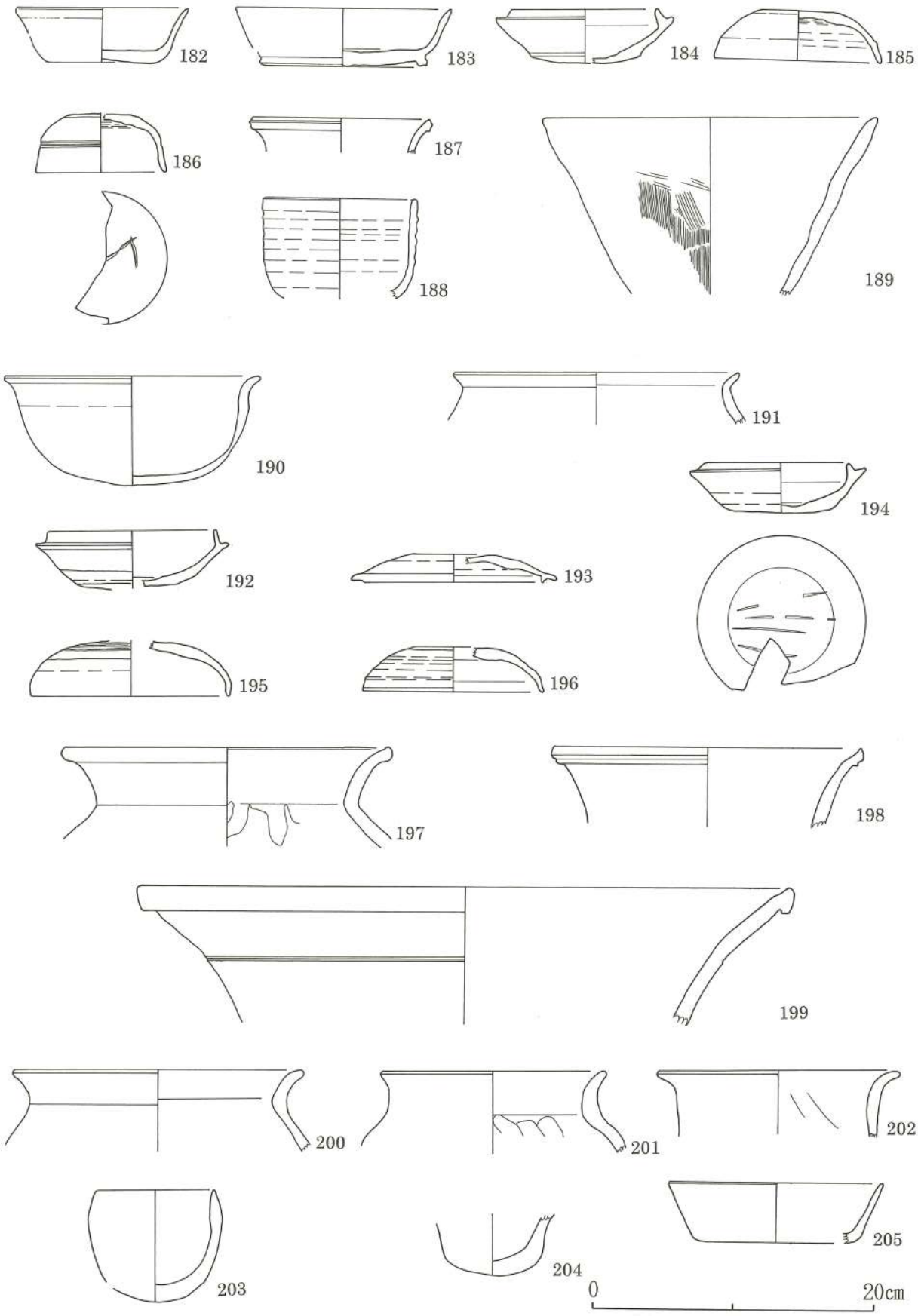


Fig. 37　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(8)（1／4）

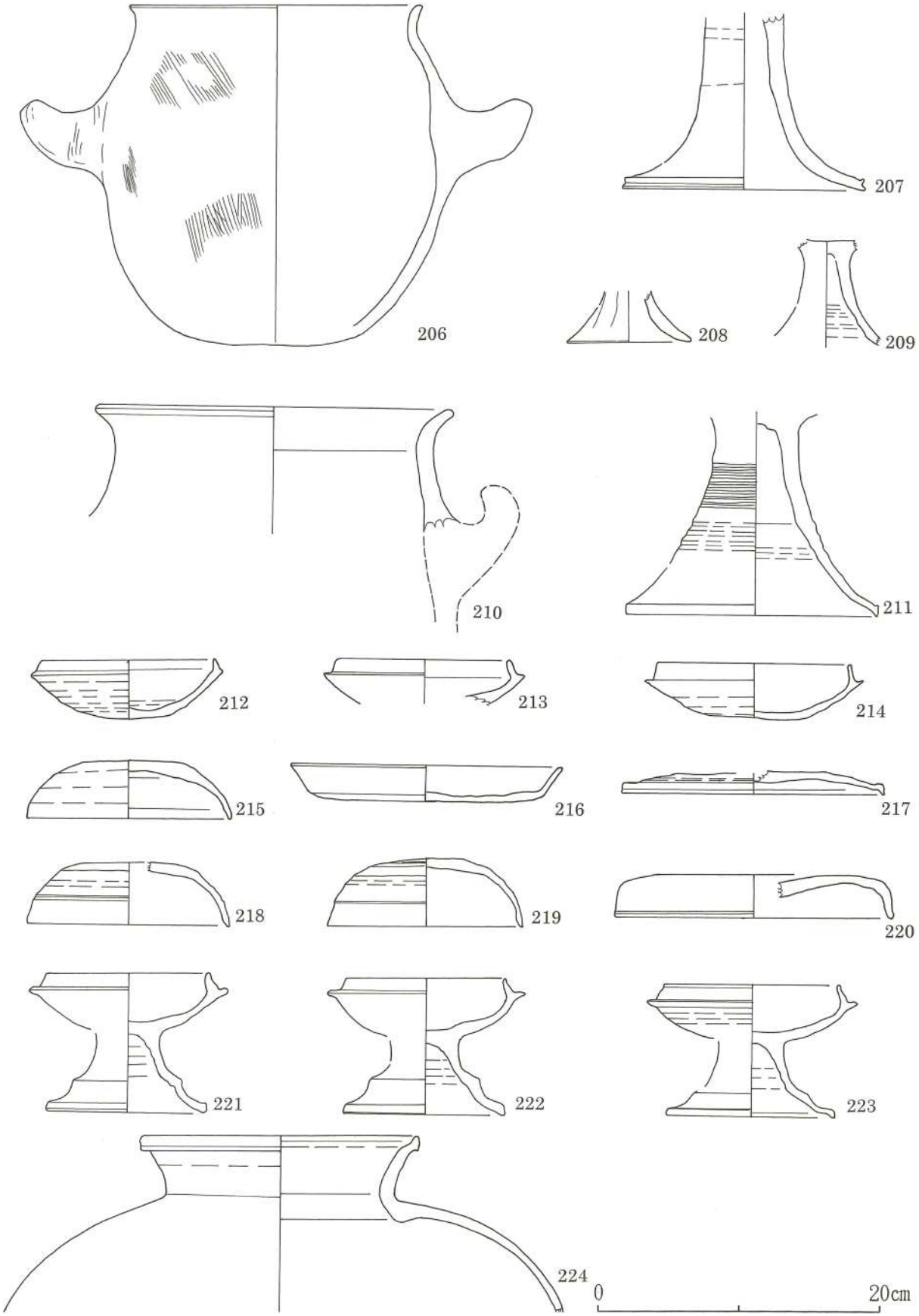


Fig. 38　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(9)（1／4）

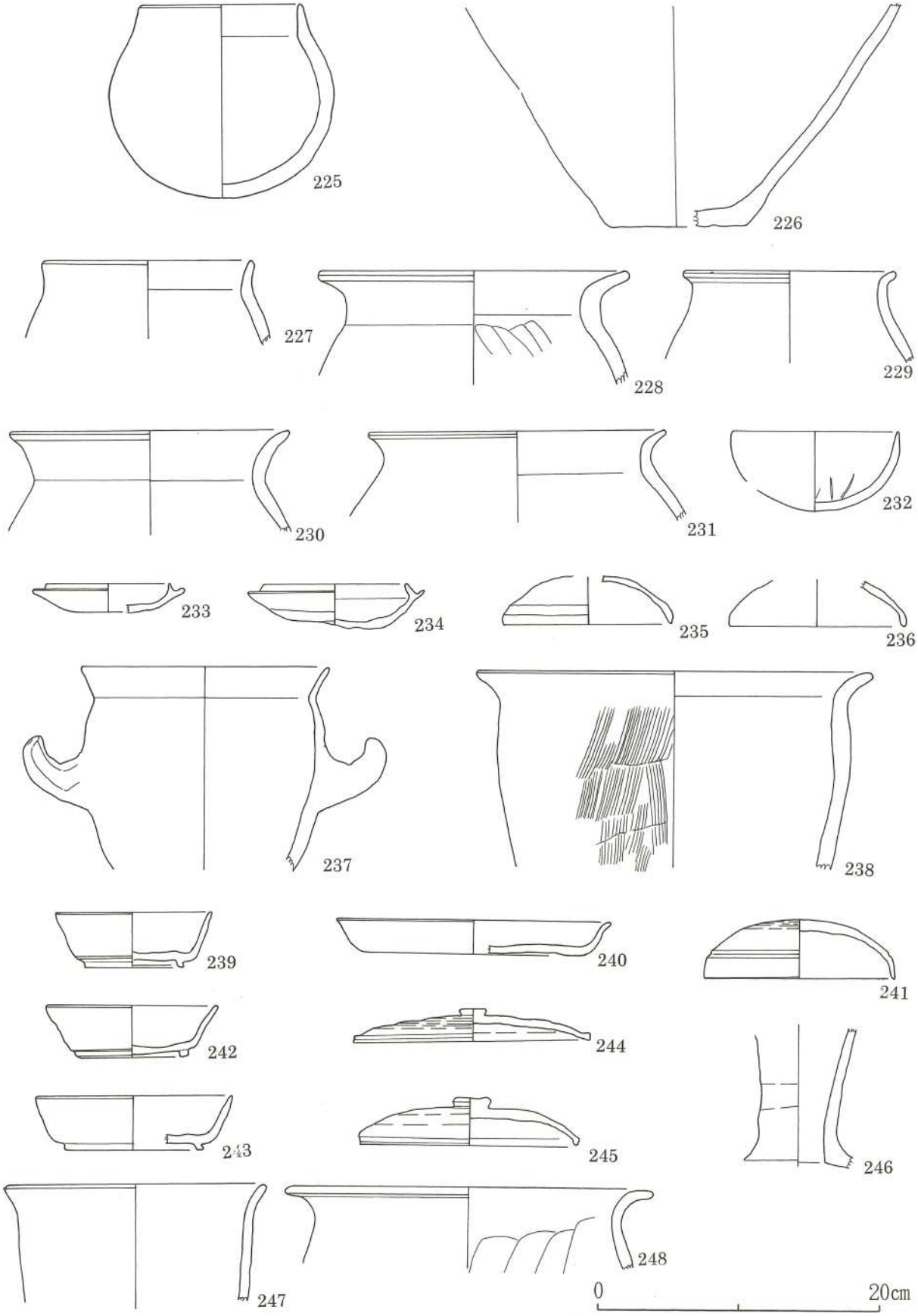


Fig. 39　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(10)（1／4）

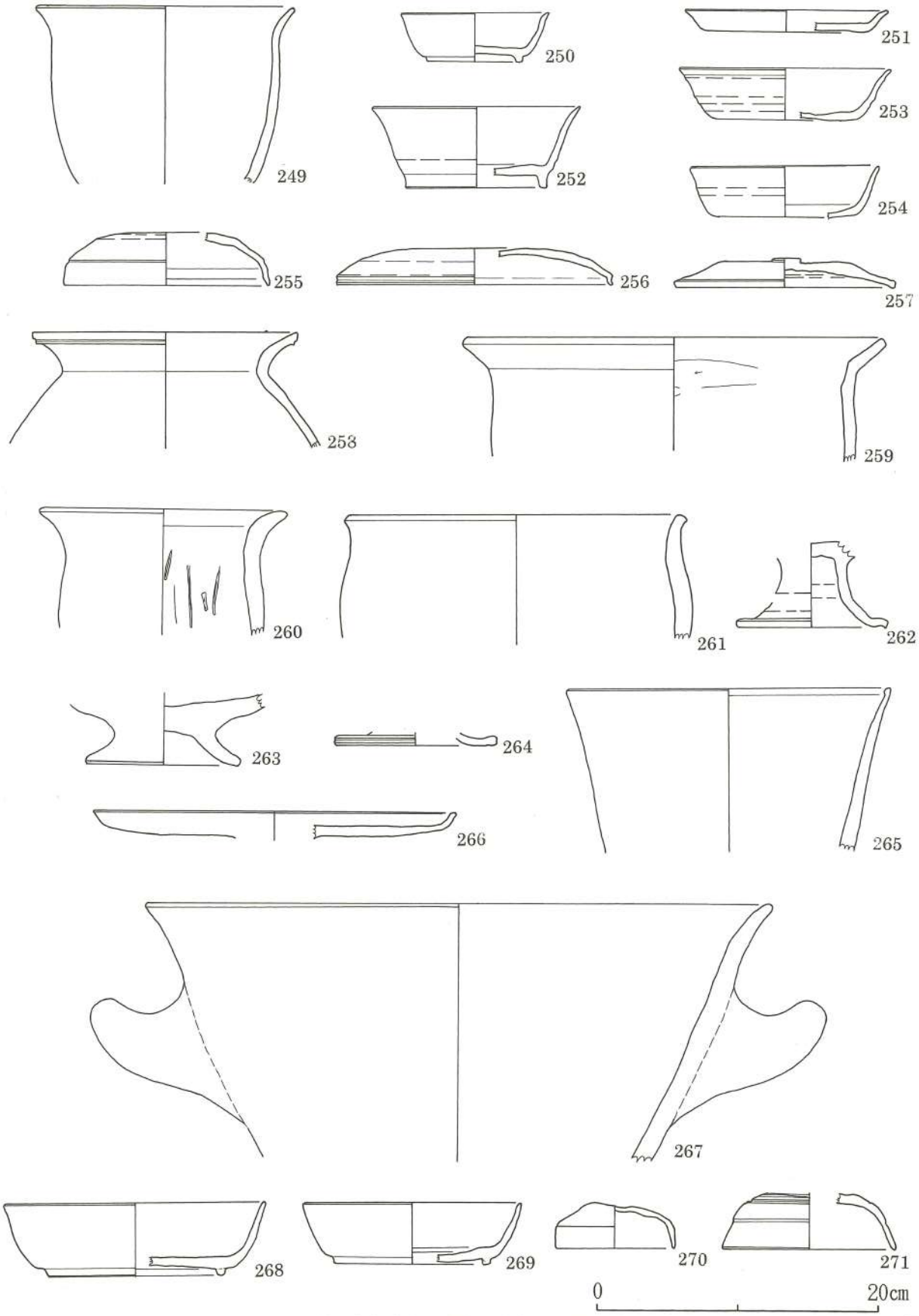


Fig. 40　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(11)（1／4）

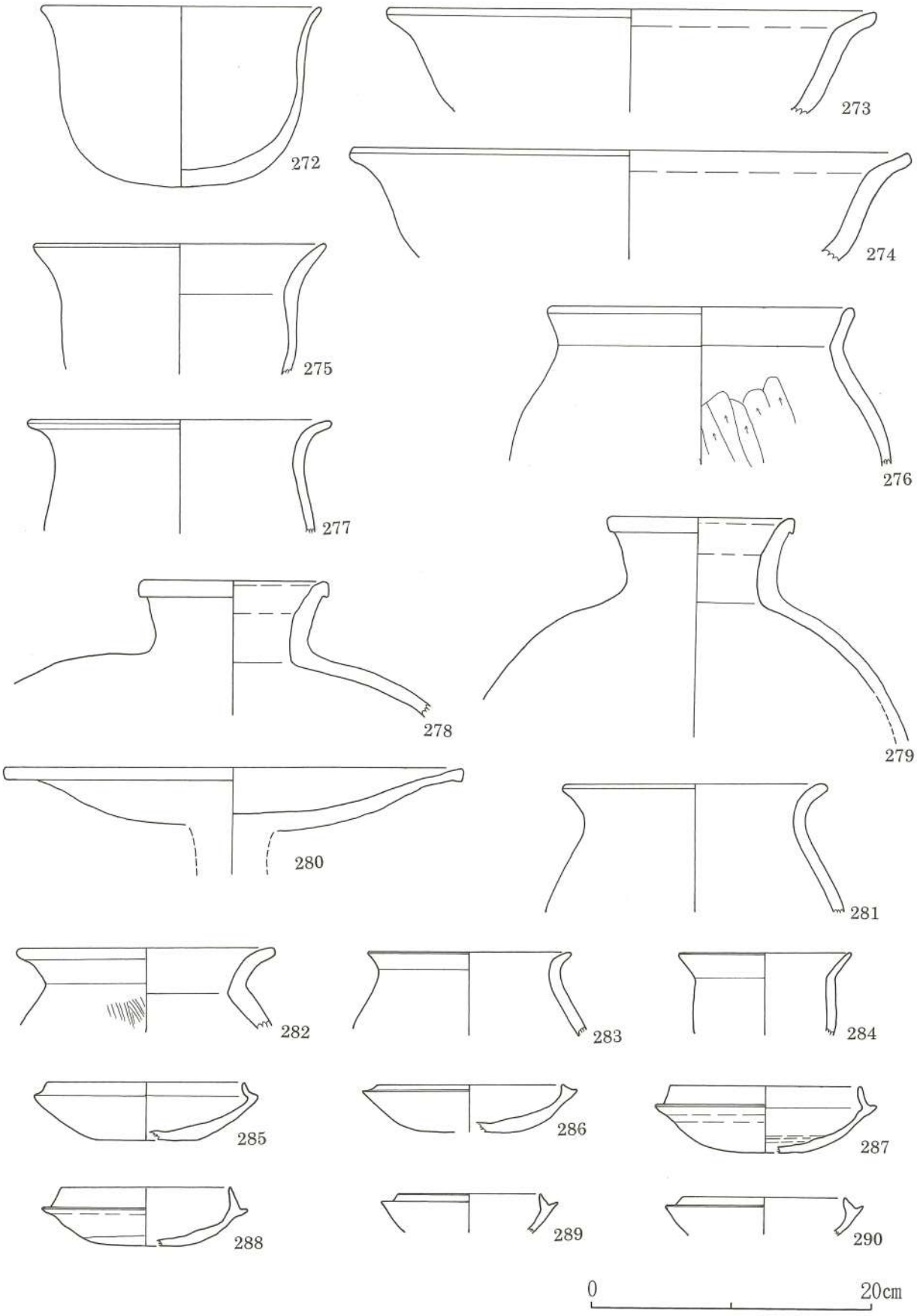


Fig. 41　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図⑫（1／4）

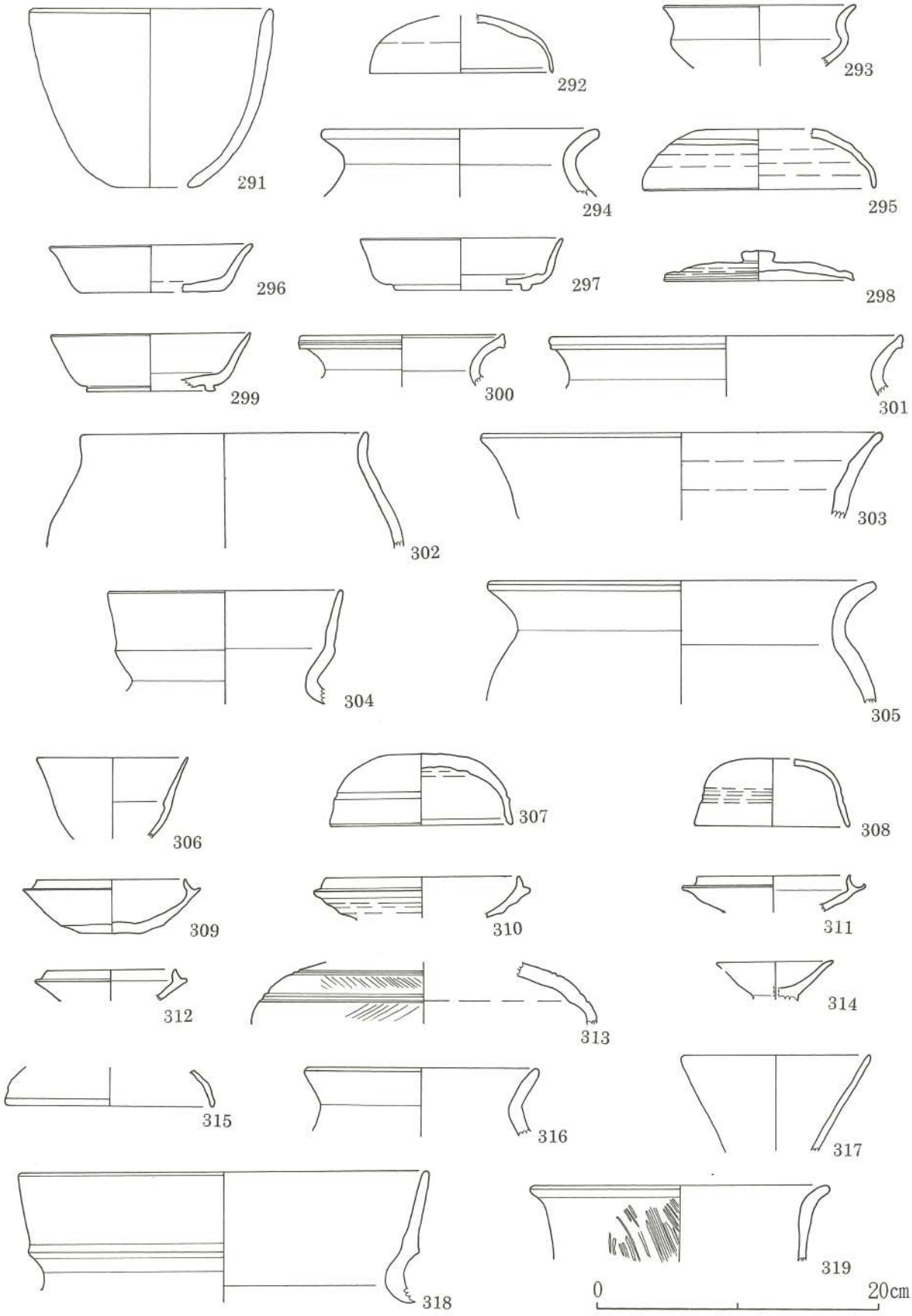


Fig. 42　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(13)（1／4）

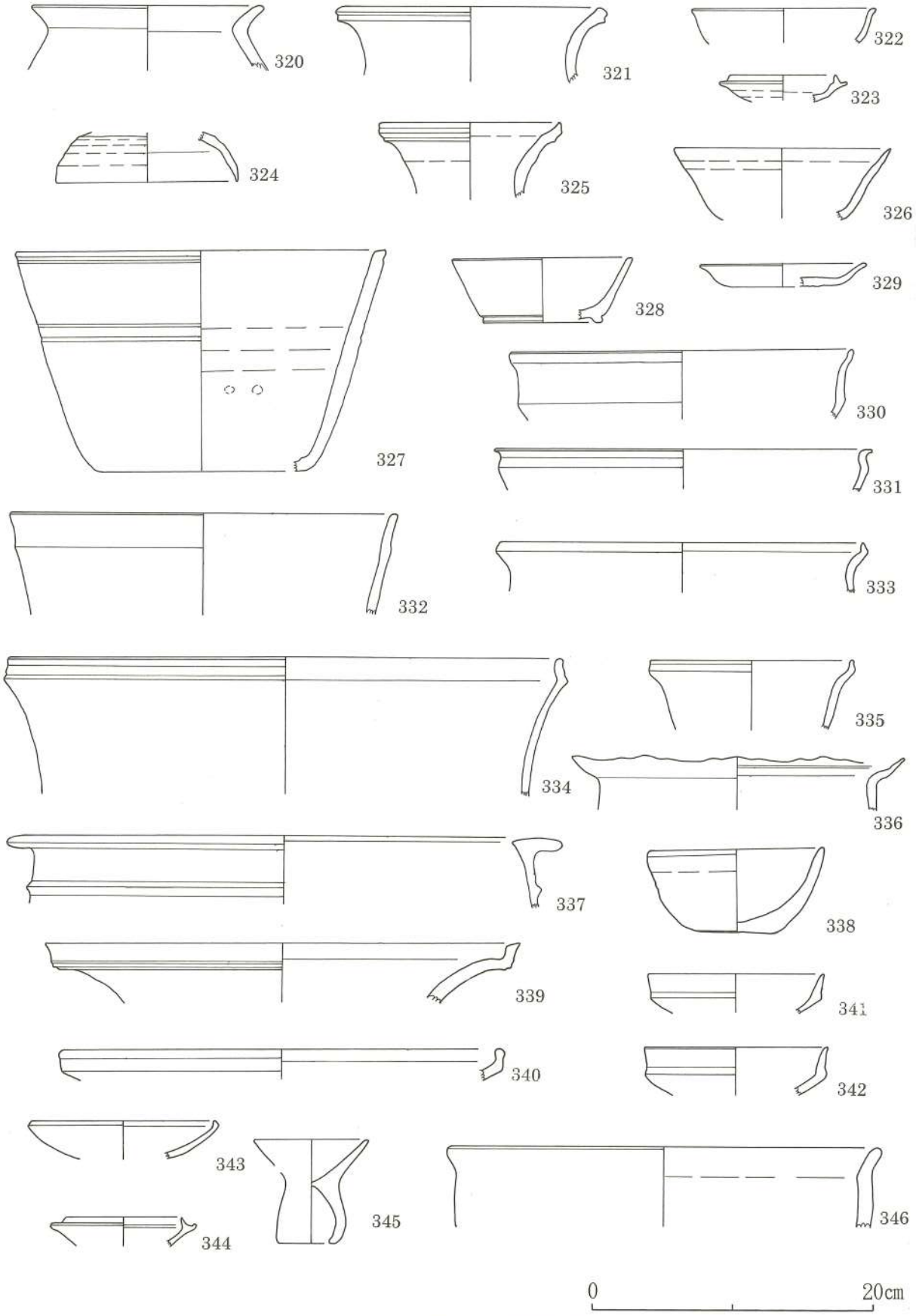


Fig. 43　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図(14)（1／4）

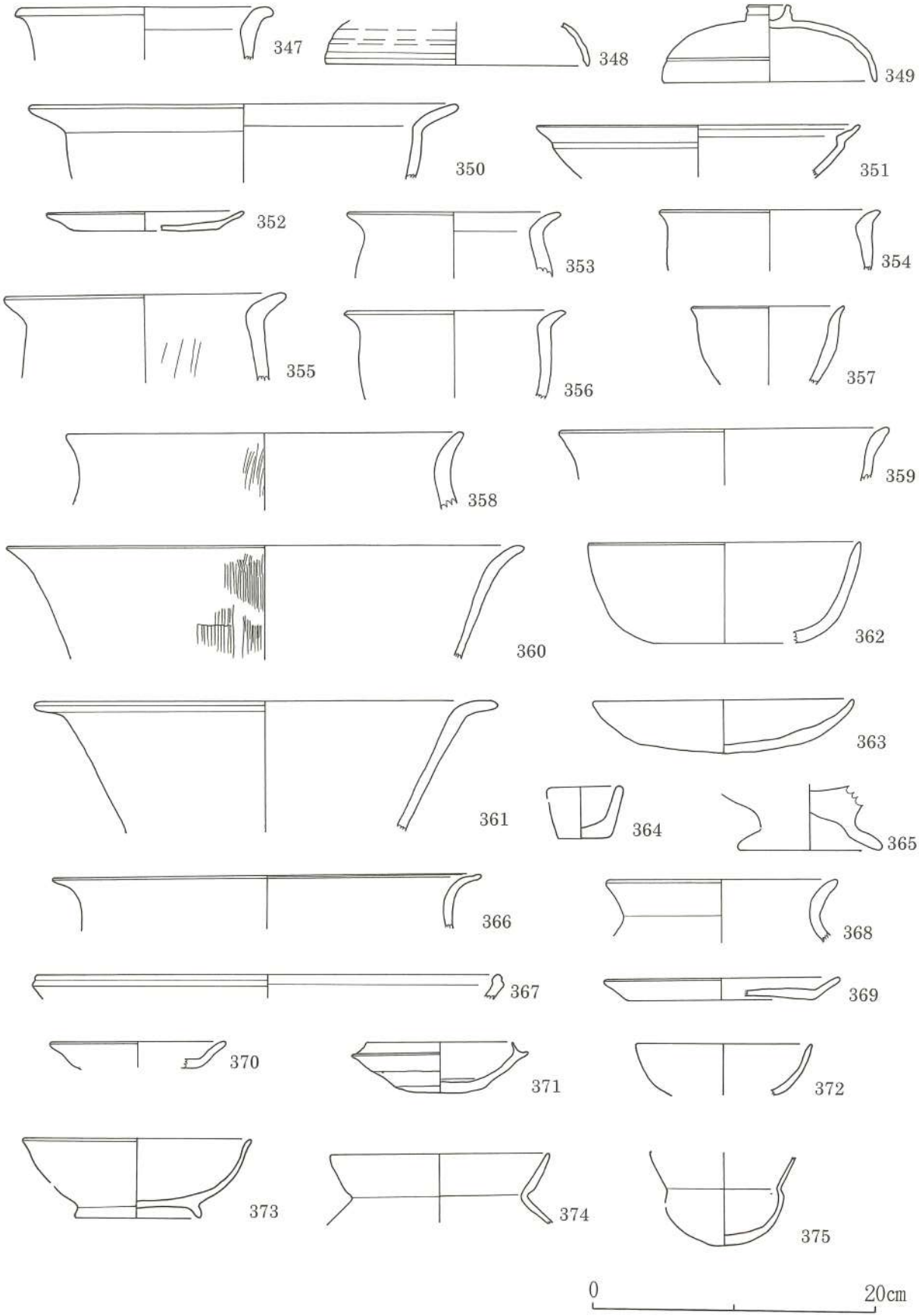


Fig. 44　堤六本谷遺跡11区出土遺物実測図⑮（1／4）

Ⅳ．平成８年度堤三本松遺跡２区の調査

１．堤三本松遺跡と調査区の概要（Fig. 1、3、45・PL. 4、5）

堤三本松遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本黒木に所在し、切通川西岸の標高36m～38m付近の洪積世丘陵上に位置している。遺跡が立地する丘陵は、鎮西山西方の神埼郡東脊振村との境界付近に位置する標高約70mの独立小丘から南東へ派生する屋形原丘陵の東辺からさらに南へ舌状に派生する低位段丘で、東方の鎮西山の南麓から広がり、堤五本松遺跡、青柳古墳群などが立地する丘陵とは切通川本流によって、西方の屋形原丘陵本体とは小浸食谷よってそれぞれ分かたれている。

本丘陵の本体である屋形原丘陵上には、蜜柑畑として開拓されるまでは小円墳が点在していたこと、現在のフランスベッド株式会社佐賀工場用地造成の際に多数の遺構や遺物が出土したことなどが知られていたが、今回の調査対象になった屋形原丘陵東辺部の低位段丘面については、これまで埋蔵文化財の所在の有無については不明であった。

しかし、農業基盤整備事業施工予定地区を対象とし、平成３年度に実施した埋蔵文化財確認調査によって、この低位段丘の先端部分において奈良時代から中世の遺構・遺物が検出され、この支丘上に2,500㎡ほどの遺跡が所在していることが予想されるに至った。

堤三本松遺跡のうち、平成８年度の埋蔵文化財発掘調査の対象となった区域は、県道富士中原停車場線東側の区域の切通川東岸の標高36m～38m付近の低位段丘面で、農業基盤整備事業の施工によって削平が予定されている部分2,500㎡のうち、この支丘の1,875㎡を堤三本松遺跡２区の調査区名で調査を実施した。

発掘調査は、調査対象区域全域にまたがる区域に座標北を基準とする10m×10mグリッドを設定、これを基準に実施した。

調査区域は、現在、主に水田として利用されており、調査区域の土層は、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層は失われ、耕作土の直下が洪積世丘陵を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

堤三本松遺跡の今回の調査の結果、検出された遺構は土壙など19基であった。さらに本丘陵の縁辺部では本来の水性堆積の砂質土を主体とする地山とその砂質土の二次的な堆積土層との境界が不明瞭で、調査中、表土剥ぎの際地山と認識した部分からも遺物がしばしば出土したため、丘陵の縁辺部を中心としてトレンチおよびグリッドを設定し遺構確認面下の土層の調査を行った。その結果、一部のトレンチで遺物の存在が確認され、部分的に二次堆積した土層が存在することが判明した。しかし、これらのトレンチ調査では二次堆積土層の下部から新たに遺構が検出されなかったことから、本来なら二次堆積土層全体を除去し、その下部を精査すべきであったが、諸般の制約から、このトレンチ調査をもって調査を終了した。

２．調査の経過

平成８年度の農業基盤整備事業に伴う発掘調査は、圃場基盤造成工事により面的に削平が予定される部分1,875㎡に便宜的に堤三本松遺跡２区の調査区名を冠して実施した。現地での調査は、平成８年７月31日に着手し、12月３日まで現場にて作業を行った。以下簡略に調査経過を記す。

７月31日、梅雨明けを待って、調査区の表土剥ぎに着手した。

８月中は別事業の発掘調査実施のため作業休止。

９月17日午後より、作業員を招集し、発掘機材の搬入・休憩所に使用するテント設営など実施した。18日よ

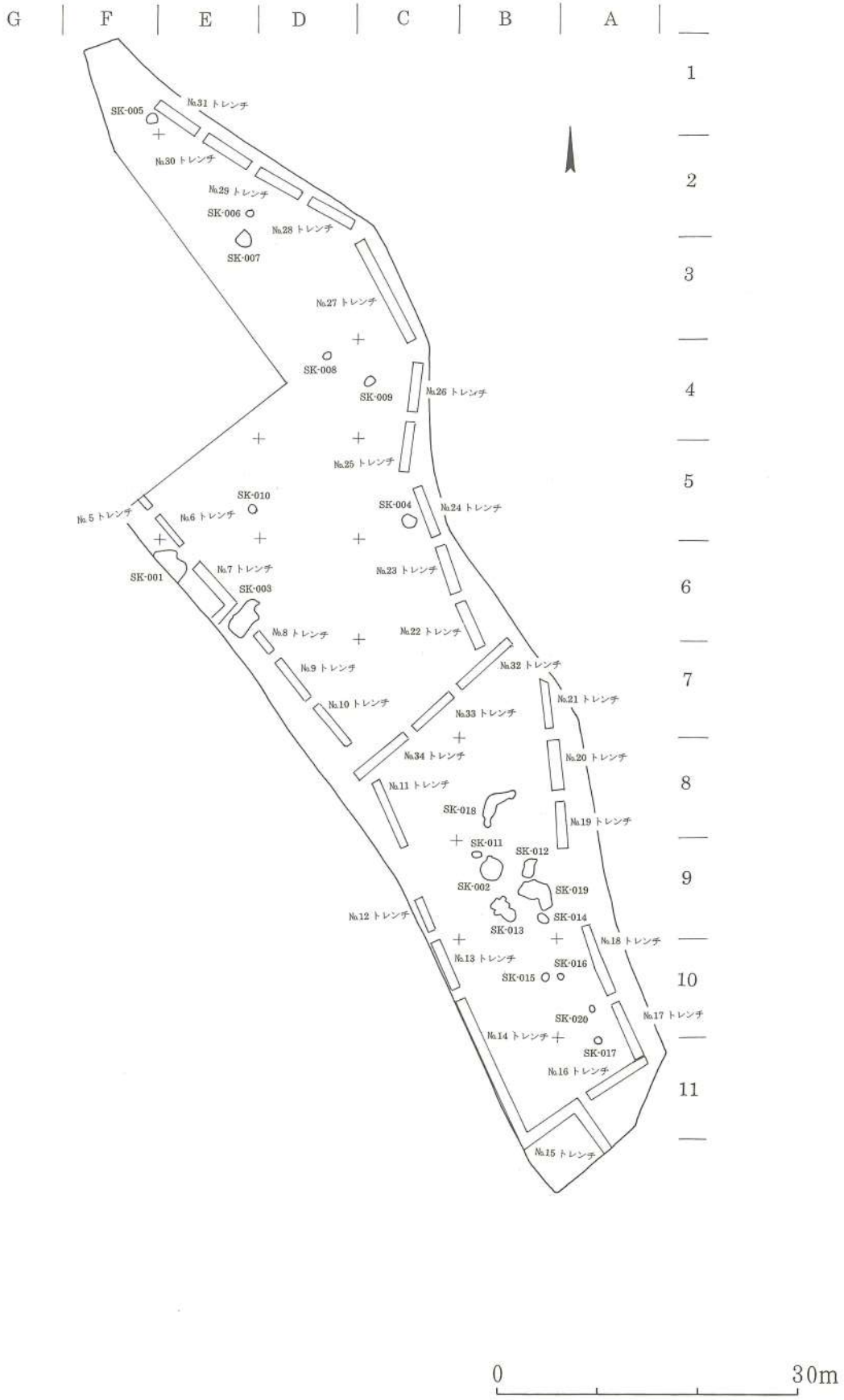


Fig. 45　堤三本松遺跡２区遺構配置図（1/600）

り遺構検出作業に着手、24日まで実施したが、調査区域内では、遺構は検出されなかった。

これを受けて、9月25日より調査区内にトレンチ及びグリッドを設定し、縄文時代以前の遺構、遺物の有無について確認作業を開始した。この作業を断続的に10月末まで続けたが新たに遺構、遺物は検出されなかった。

10月30日、トレンチ、グリッドの掘り下げ調査を終了、調査区全体の写真撮影を行った。以後、12月3日まで断続的に調査区の測量作業を行い、現地での作業を終了した。

その後、記録類を文化財整理事務所へ移し、年度末まで、実測図、写真類の整理などを同事務所にて実施し、平成8年度の作業を終了した。

3．遺　構（Fig.45～47・PL.4、5、49～51）

堤三本松遺跡2区の調査で検出された遺構は、SX（性格不明遺構）として取り扱った遺構を含めて、土壙が19基、その他ピットなどであった。

ここでは、今回の調査で土壙として取り扱った19基について報告するであった。これらの土壙のうち、出土遺物などから時期が特定できる土壙は、土師器類を出土したSK-002が古墳時代の所産になるものと考えられ、その他の土壙はまとまった遺物をもつものも少なく、時期を特定するまでには至らなかった。

Tab. 6　堤三本松遺跡2区　出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模（上段：上面、下段：底面、単位m・m²）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK－001	不整形	3.48 3.40	1.74 1.44	0.71	3.6			
SK－002	円形	2.29 1.68	2.10 1.34	0.77	2.0		土師器鉢、碗・須恵器甕	
SK－003	不整形	4.44 4.23	2.07 1.85	0.62	5.3			
SK－004	不整円形	1.49 1.23	1.38 1.04	0.65	1.1			
SK－005	不整形	1.10 0.92	0.96 0.68	0.33	0.6			
SK－006	不整円形	0.74 0.58	0.72 0.59	0.25	0.3			
SK－007	不整円形	1.60 1.02	1.56 1.19	0.36	1.0			
SK－008	不整円形	0.86 0.74	0.70 0.60	0.40	0.3			
SK－009	不整形	1.18 1.12	0.76 0.65	0.61	0.6			
SK－010	円形	0.82 0.74	0.78 0.73	0.15	0.4			
SK－011	不整楕円形	1.02 0.90	0.66 0.52	0.21	0.4			
SK－012	不整形	1.96 1.80	1.14 1.04	0.68	1.6			
SK－013	不整形	2.79 2.60	1.89 1.72	0.79	2.8			
SK－014	不整円形	1.20 0.88	0.88 0.75	0.55	0.5			
SK－015	不整円形	0.86 0.73	0.70 0.60	0.23	0.3			
SK－016	不整円形	0.70 0.60	0.60 0.44	0.24	0.2			
SK－017	円形	0.80 0.74	0.76 0.70	0.30	0.4			
SX－019	不整形	3.62 3.12	2.05 1.60	0.81	5.9			
SK－020	不整円形	0.75 0.57	0.51 0.37	0.37	0.2			

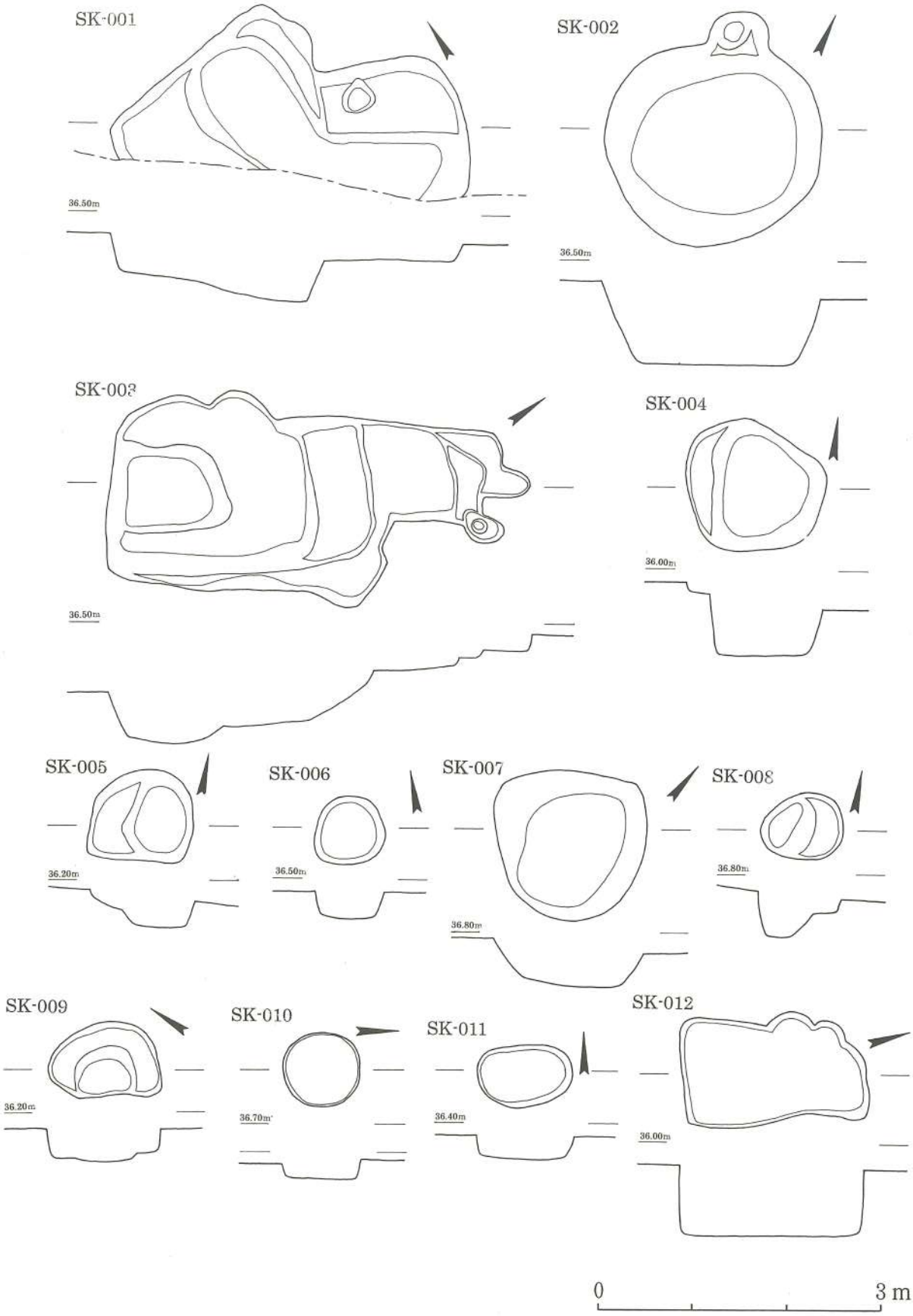


Fig. 46　堤三本松遺跡２区土壙実測図(1)　SK-001～SK-012（1/60）

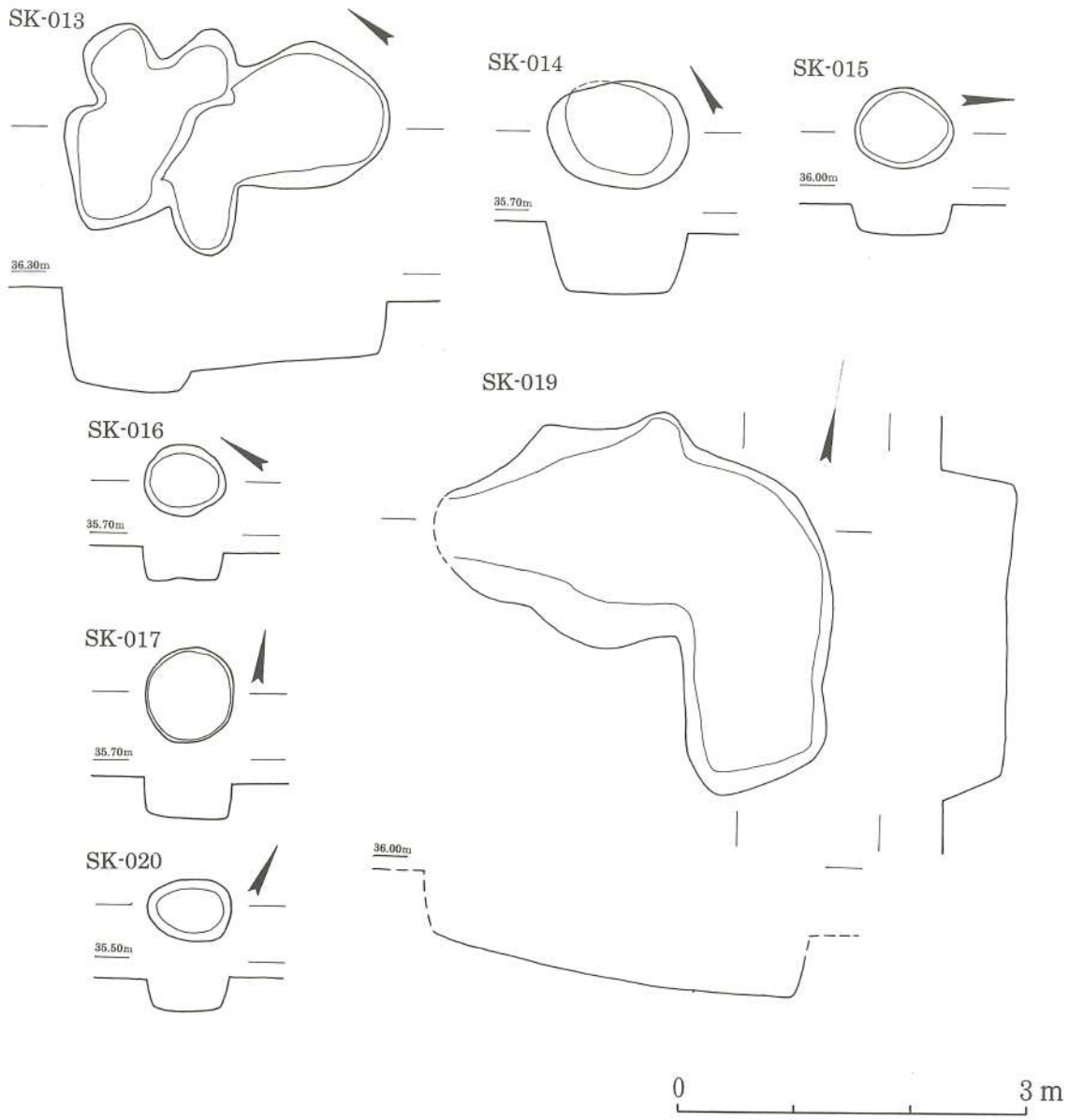


Fig. 47　堤三本松遺跡２区土壙実測図(2)　SK-013～SK-017・SX-019・SK-020（1/60）

4．遺　物（Fig. 48・PL. 51）

今回の堤三本松遺跡２区の調査で遺構から出土した遺物は、SK-002から出土した土師器類のみであった。しかし、前述したように、本丘陵の縁辺部分を中心に部分的に二次堆積土層が堆積していることが判明し、トレンチやグリッドを設定し、同層およびその下部の遺構、遺物の有無について調査を行った結果、同層中から少なからず各時期の土器類が出土した。図示に耐えないような小片も多いが、ここでは、SK-002出土遺物及び二次堆積層から出土した遺物のうち図示できる遺物について報告したい。

SK-002出土遺物（Fig. 48）

１、２は土師器。１は鉢。体部が内湾しながら立ち上がり、やや肥厚しほぼ直立する口縁をもつ。内面ナデ、外面ハケ目。２は碗。丸底で半球形の体部が内湾しながら立ち上がり口縁に至る。底部外面にハケ目を残すが、

内外面ともにナデ。3は須恵器甕の口縁部。朝顔状に開く口縁で、口縁外面に沈線が1条めぐり、その下にヘラ描きの綾杉文と思われる文様が施文されている。

No. 9 tr. 出土遺物（Fig. 48）

4は須恵器坏。口縁部が外側へ水平に張り出し、断面が三角形に近い外反する低い受けがつく。

No.15tr. 出土遺物（Fig. 48）

5は須恵器坏。口縁部が外側やや上方に小さく張り出し、断面三角形のほぼ直立する受けがつく。

No.19tr. 出土遺物（Fig. 48・PL. 51）

6、8は須恵器。6は坏。口縁部が外側へ水平に張り出し、断面三角形の直立する低い受けがつく。8は坏蓋。天井部はやや丸みを帯び、体部が内湾しながら口縁に至る。

7は土師器甕。丸底でやや扁平な球形の胴部上位がくびれ小さく外反し開く口縁がつく。

No.22tr. 出土遺物（Fig. 48）

9は須恵器坏蓋。天井部はやや丸みを帯び、体部が内湾しながら開きやや内湾する口縁に至る。

10～12は土師器。10は碗。口縁部がやや内湾する。内外ともにナデ。11は甕の口縁部。外反しながら開く。内外面ともにナデ。12は鉢。内面ヘラケズリ、外面ハケ目。

No.29tr. 出土遺物（Fig. 48）

13は中世土器土鍋。体部と口縁部の境界に稜をもつ。内面ハケ目、外面ナデ。

14は須恵器甕の口縁部。

No.29tr. 出土遺物（Fig. 48）

15は中世土器土鍋。体部は直線的に外傾し、口縁部はやや肥厚する。内面ハケ目、外面ナデ。

トレンチ外出土遺物（Fig. 48・PL. 51）

上記の各トレンチから検出された遺物のほかにも部分的な二次堆積土層から遺物が検出された。これらについて一括して報告する。

16は、18～21は土師器類。16、21は甕。16は丸底やや長胴の甕。胴部上位がくびれ外反し開く口縁がつく。内外面ともにナデ。21は甕の口縁部。18～20は高坏。18は坏部底面と体部の境界に明瞭な稜をもち、体部がやや内湾しながら開き口縁に至る。19は脚裾部。朝顔状に開く脚部で裾部がさらに大きく開く。20は坏部底面と体部の境界に稜をもち、体部が外反しながら開き口縁に至る。いずれも内外面ともにナデ。

17は須恵器坏蓋。天井部は平坦でやや開く口縁をもつ。

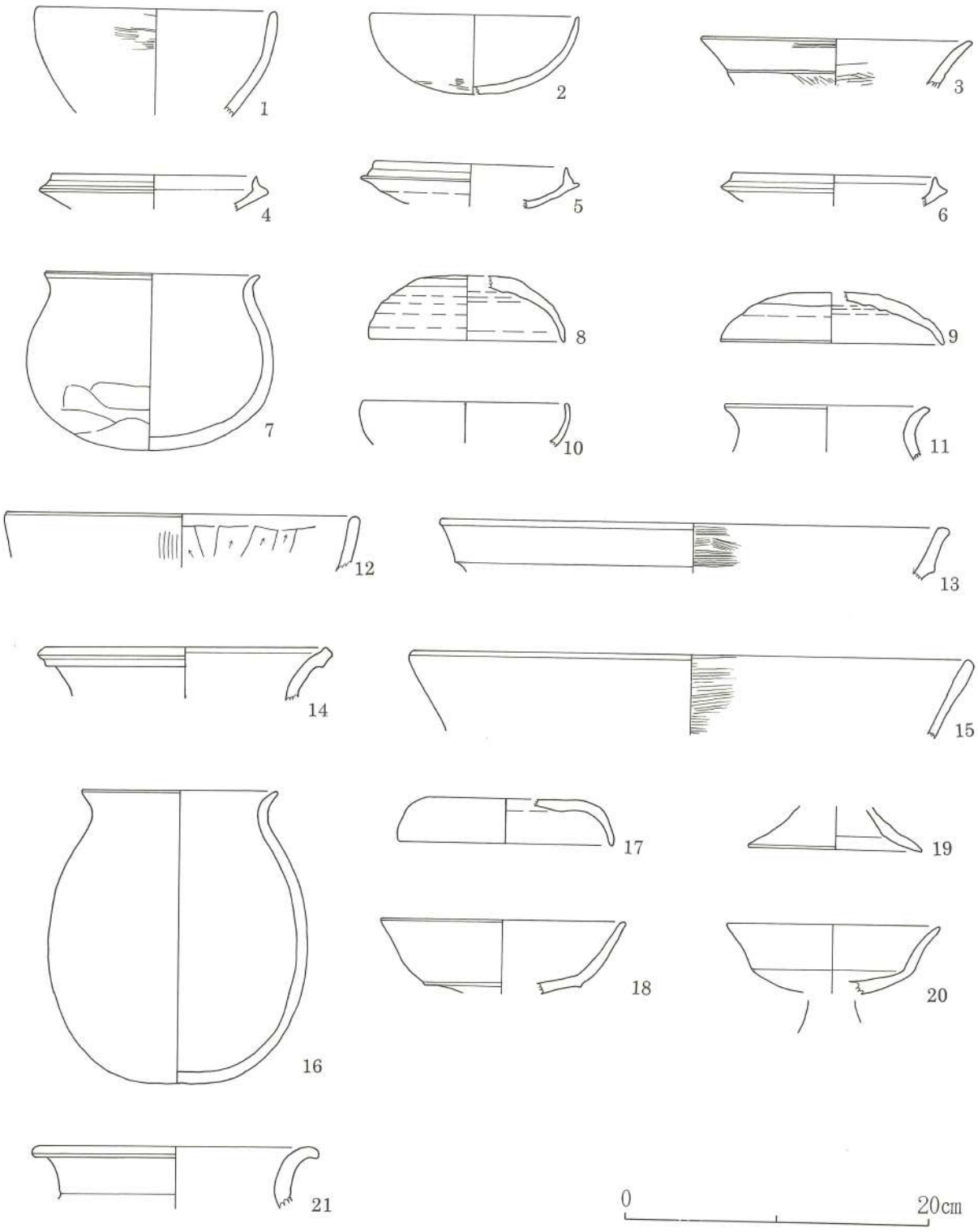


Fig. 48　堤三本松遺跡２区出土遺物実測図（１/４）

Ⅴ．平成９年度堤三本柳遺跡１区・青柳古墳群１区の調査

１．堤三本柳遺跡・青柳古墳群と調査区の概要（Fig. １、３・PL. ３）

堤三本柳遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字二本柳、三本柳に所在し、鎮西山南麓から派生する洪積世丘陵、青柳丘陵の基部標高50m付近から県道佐賀川久保鳥栖線の北に沿って西に派生する標高30m～50mの洪積世低位段丘上に位置している。

青柳古墳群は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本柳、二本柳、六本谷に所在し、鎮西山南麓から派生する洪積世丘陵、青柳丘陵の基部標高50m付近から県道佐賀川久保鳥栖線の南方大字堤字六本谷付近へ派生する標高30m～50mの洪積世高位および低位段丘上に位置している。

平成３年度に実施した農業基盤整備事業施工予定地区を対象とし埋蔵文化財確認調査によって、この青柳丘陵部分においても、土師器や須恵器を伴う遺構などが検出され、遺跡の広がりが確認された。

平成９年度の埋蔵文化財発掘調査の対象となった区域は、堤三本柳遺跡、青柳古墳群のうち、県道佐賀川久保鳥栖線北側の区域の標高46m～50m付近の低位段丘面で、農業基盤整備事業の施工によって削平が予定されている部分のうち、堤三本柳遺跡内の625㎡を堤三本柳遺跡１区、青柳古墳群内の5,000㎡を青柳古墳群１区の調査区名で調査を実施した。

発掘調査は、両遺跡の調査対象区域全域にまたがる部分に座標北を基準とする10m×10mグリッドを設定、これを基準に実施した。

調査区域は、現在、主に水田、畑として利用されており、調査区域の土層は、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層は失われ、耕作土の直下が洪積世丘陵を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

今回の両遺跡の調査の結果、堤三本柳遺跡では、近世以降の耕作に伴い開削されたと考えられる溝跡が検出され、縄文式土器片や土師器、須恵器、中世土器などが少量であるが出土した。また、青柳古墳群では古墳時代初頭から古墳時代後期にかけての周溝墓、古墳などの墳墓が21基、竪穴式住居址２軒、土壙25基その他後世の耕作に伴う溝跡、ピットなどが検出された。これらの遺構に伴い、縄文式土器片や土師器、須恵器を中心とした遺物が出土した。

２．調査の経過

平成９年度の農業基盤整備事業に伴う発掘調査は、圃場基盤造成工事により面的に削平が予定される部分対象に、便宜的に堤三本柳遺跡内の625㎡を堤三本柳遺跡１区、青柳古墳群内の5,000㎡を青柳古墳群１区の調査区名を冠して実施した。現地での調査は、平成９年９月18日に着手し、平成10年２月５日まで現場にて作業を行った。以下簡略に調査経過を記す。

９月18日、青柳古墳群にて重機による調査区の表土剥ぎに着手した。

10月14日より、作業員を招集し、発掘機材の搬入・休憩所に使用するテント設営などを行った後、表土剥ぎが終了した部分から遺構検出作業に着手、検出した遺構については、逐次掘下げを行い、必要に応じて遺構の写真撮影を行うという手順で作業を進めていった。これまでの掘削機による表土剥ぎにより古墳をはじめとする墳墓10基を確認。その他竪穴式住居址、土壙などが検出された。

10月21日、青柳古墳群の遺構掘り下げ作業と並行して、堤三本柳遺跡の重機による調査区の表土剥ぎに着手した。

11月１日より、堤三本柳遺跡についても表土剥ぎが終了した部分から遺構検出作業に着手。溝跡数条が確認された。以後、両遺跡の発掘作業を並行してすすめる。

12月25日、年内作業を終了。１月４日まで年末年始のため休業。年明け後も遺構の掘り下げ作業を進め、１月末までにほとんどの遺構の検出、掘り下げ作業を終了した。

１月26日、委託による遺構の詳細実測作業開始。これと平行して出土遺物の取り上げ作業などの作業を進めた。２月３日、出土遺物、記録類、発掘機材類の撤収を行い、２月５日、調査区全体や個別の遺構の気球による空中写真撮影を行い現地での作業を終了した。

その後、記録類を文化財整理事務所へ移し、年度末まで、出土遺物の水洗い、実測図、写真などの記録類の整理作業を同事務所にて実施し、平成９年度の作業を終了した。

３．堤三本柳遺跡１区の調査（Fig.49～50・PL. 6、52、53）

堤三本柳遺跡１区の調査では、明確に中世以前の所産になるものと考えられる明確な遺構は検出されなかった。しかし、今回の調査で、近世以降の耕作に伴い開削されたと考えられる溝跡および土壙状の掘り込みが数ヶ所で発見された。これらの溝跡および掘り込みの一部からは耕作中に出土した石室または石棺などに使用されたと考

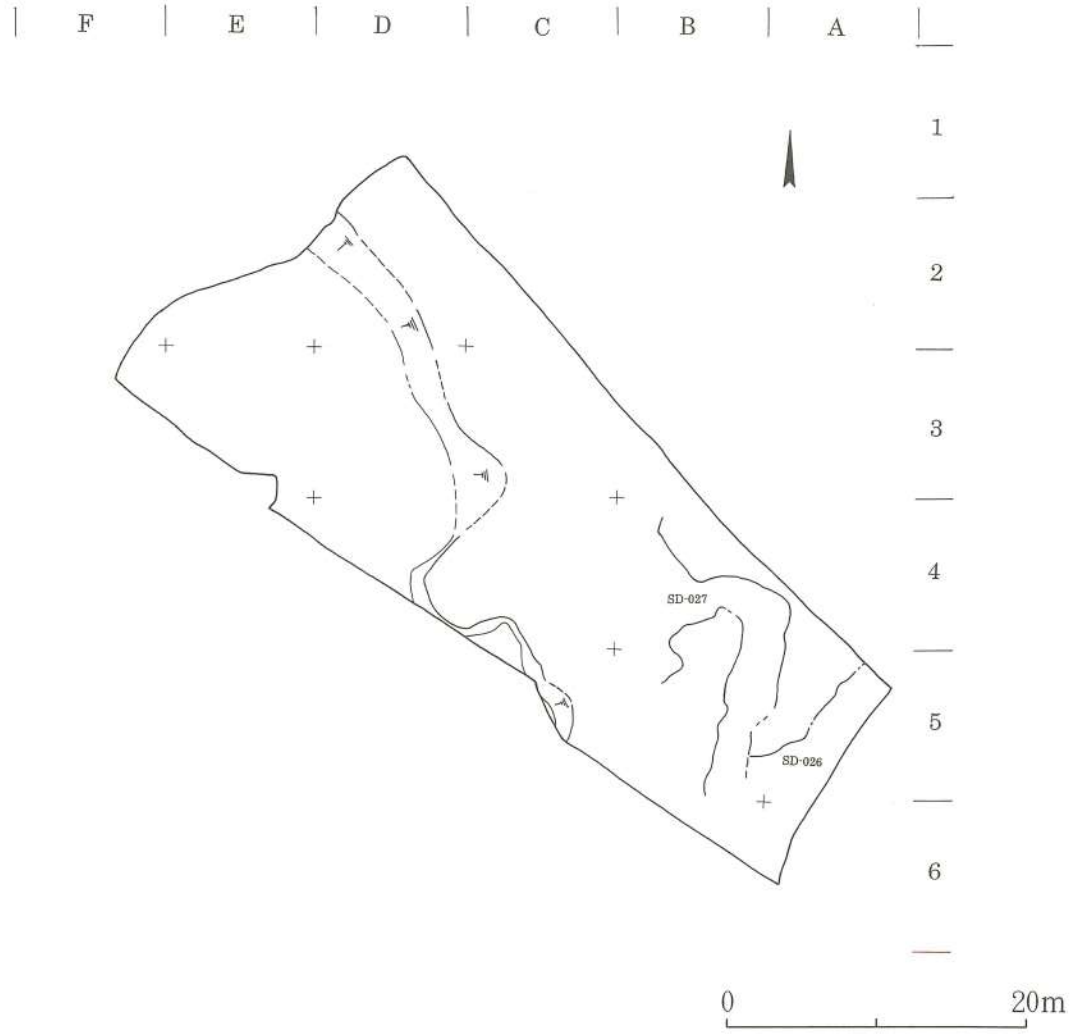


Fig.49　堤三本柳遺跡１区遺構配置図（1/500）

えられる大小の石材がまとまって出土している。このようなことからこの付近一帯が耕地として拓かれるまでは、ある程度の数の墳墓が存在していたものと推定され、多数の石材を出土した溝跡及び土壙状の掘り込みはこれらの石材を集めて遺棄したものと考えられる。

今回の調査では、中世以前の明確な遺構は検出できなかったが、前述の溝跡、土壙状の掘り込みから少量ではあるが出土している。ここではそれら出土遺物のうち、SD-026、SD-027として調査した近世以降の溝跡から出土した遺物のうち図示できるものについて報告する。

SD-026出土遺物（Fig. 50・PL. 53）

1は縄文式土器浅鉢。体部が「S」字状に屈曲する。2、3は須恵器甕。5、は土師器甕。やや内湾しながら開く口縁部。

4、6、7は中世土器。4は素焼きの擂鉢。口縁の一部を外反させ注ぎ口としている。内面に擂り目をもつ。内面ハケ目、外面ナデ。6、7は土鍋。体部は直線的に開く。内面ハケ目。

17、砂岩質の石材を使用した砥石。長さ10.0cm、幅6.8cm、厚さ4.0cm、重量387.8g（いずれも部分長）。

SD-027出土遺物（Fig. 50・PL. 53）

8は土師器高坏。16は須恵器甕。口縁外面に櫛描き波状文がめぐる。

9～15は中世土器。9、11、13は土鍋。10、12、14は擂鉢。内面に擂り目をもつ。内面ハケ目、外面ナデ。15は鉢。直立する口縁外面に2条の凸帯がめぐる。

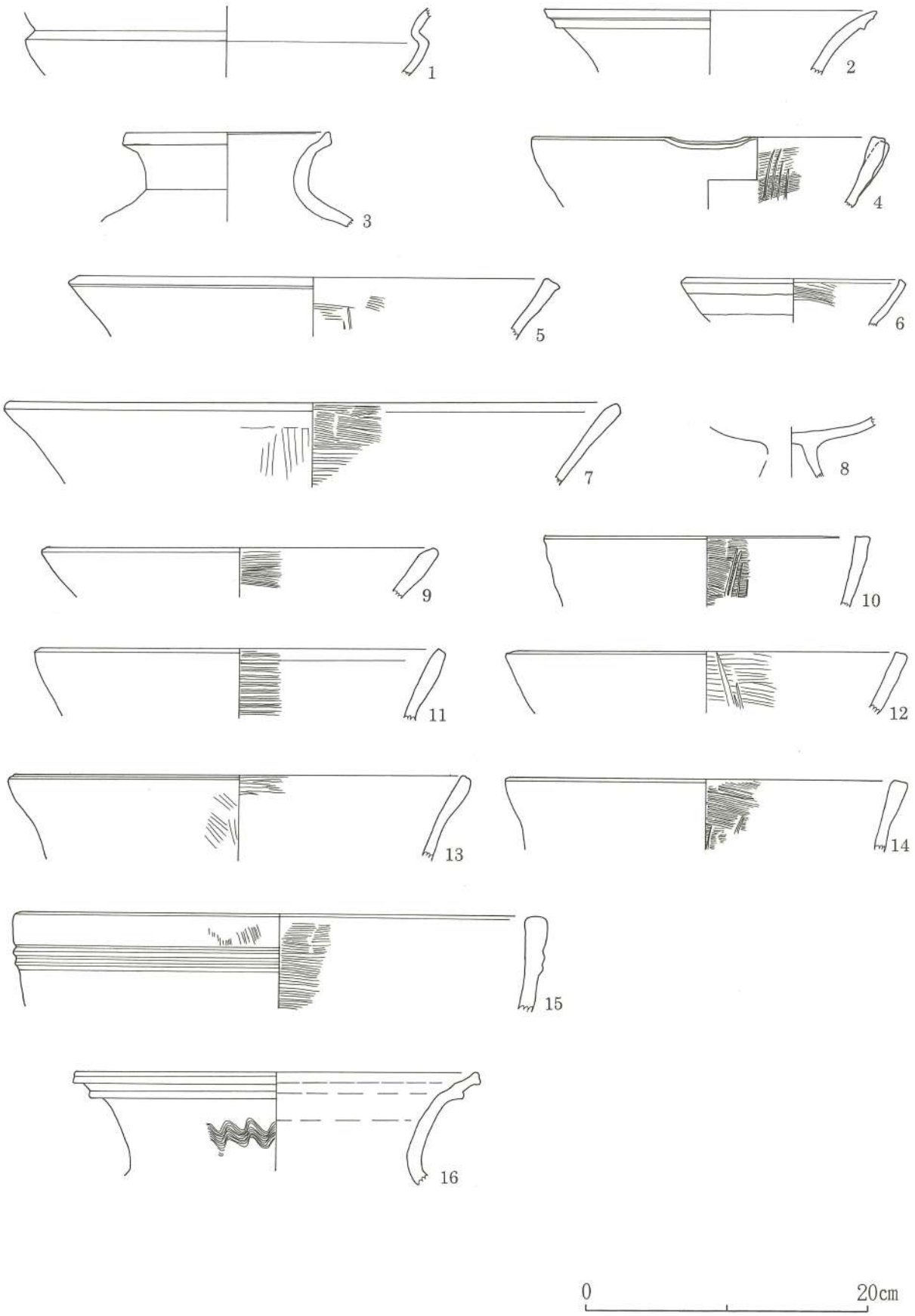


Fig. 50　堤三本柳遺跡１区出土遺物実測図（1/4）

4．青柳古墳群１区の調査（Fig.51～94・PL.７、８、54～99・Tab.７）

(1) 遺　構（Fig.51～81・PL.７、８、54～70・Tab.７）

今回の青柳古墳群１区は、青柳丘陵の基部付近の標高48m～53mの丘陵東斜面の比較的平坦な部分に位置しており、遺跡の東方に位置し、谷渡古墳群などが立地する谷渡丘陵とは、今回の調査区北東部に設けられている耕地整理溜池付近を谷頭とする浸食谷によって隔てられている。

また、今回の調査では検出された遺構のほとんどが、調査区内のほぼ中央部分を中心に検出されているが、比較的遺構が少ない調査区北部や南部は、この一帯が耕地として開かれたときに、削平され、遺構が失われたものと推定される。

調査の結果検出された遺構は、古墳等の墳墓23基、古墳時代の竪穴式住居址２軒、その他土壙25基、溝跡、ピットなどであった。

１　古墳などの墳墓（Fig.51～76・PL.７、８、54～70）

今回の調査で検出された古墳などの墳墓は23基であった。いずれの墳墓も、この一帯が後世に耕地として開かれたときに、かなり削平されており、墳丘、あるいは封土などの上部施設は全く失われ、主体部もかなり破壊されている。

これら検出された墳墓を、墳墓の形式、主体部の形態、周溝の有無などで分類すると、

・横穴式石室を主体とするもので周溝をもつものが３基

　ST-003、ST-017、ST-023

・小型の竪穴式石室あるいは石棺を主体とするもので周溝をもつものが５基

　SC-001・SC-002、SC-005、SC-021、SC-022、SC-026

・小型の竪穴式石室あるいは石棺を主体とするもので主体部のみが遺存するものが12基

　SC-004、SC-006、SC-007、SC-010、SC-012、SC-016、SC-018、SC-020、SC-024、SC-025、SC-027

・土壙墓を主体とするものが１基

　SP-028

・主体部が不明で、周溝のみが遺存するものが３基

　SC-009、SC-011、SC-013

に分類できる。

各墳墓の年代は、主体部や周溝などの出土遺物などから、６世紀後半から７世紀にかけて営まれたものと考えられる。

また、これらの墳墓のうち、土壙墓を内部主体とし周溝を伴うSP-028などは、円形周溝墓と考えられる。

以下、これらの個々の墳墓について概要を記し報告とする。なお、各墳墓に付した遺構番号は、調査当時のままとする。また石室の規模などの法量は内法の値である。

Fig. 51　青柳古墳群１区遺構配置図（１/500）

SC-001（Fig.52・PL.54、55）

SC-001は、F-6Gr.で検出された小型の竪穴式石室で、標高52m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。石室の掘り方底部と石室の腰石最下部の石材の一部が遺存するのみであった。周溝はほぼ全周が遺存している。

墳墓の形態や規模は、遺存している周溝から、墳形は正円でなく、石室の主軸に対し約45°程東に偏った方向に長い楕円形で、周溝内法で長径7.6m、短径6.2m程度の円形の墳墓であったことが推定される。周溝は、幅は検出面で0.8m～1.3m、底面で0.3m～1.0m、深さ0.1m～0.2m。断面は上面がやや広い「U」字形を呈す。

石室の掘り方は、長軸がほぼ南北方向をとる長辺3.5m、短辺2.3mのやや不整な隅丸長方形を呈す。掘り方の深さは約0.4m。石室は、この掘り方の主軸に沿って築かれている。

石室は、北小口壁および東側壁の北部が破壊されているものの、プランは長さ推定2.3m程、幅1.2mの長方形を呈すものと考えられる。石室は、西側壁が6石、南小口壁は2石を腰板とし、東側壁は南から4石の腰石が遺存している。床面には敷石などはみられない。主軸は、N-0°で南北を軸とする。

また、SC-001は同一周溝内の、SC-001の石室から北東2.5mの位置にSC-002として調査した石室をもつが、これら2基の主体部は、個々の墳墓の主体部ではなく、同一墳墓内に複数の主体部が営まれたものと推測される。

遺物は、石室内から土師器壺、須恵器坏、甕などが出土し、青銅製金張りの耳環[1]が2点出土している。また、周溝内からも、土師器甕、高坏、須恵器坏、高坏、瑳、甕、平瓶などが出土している。

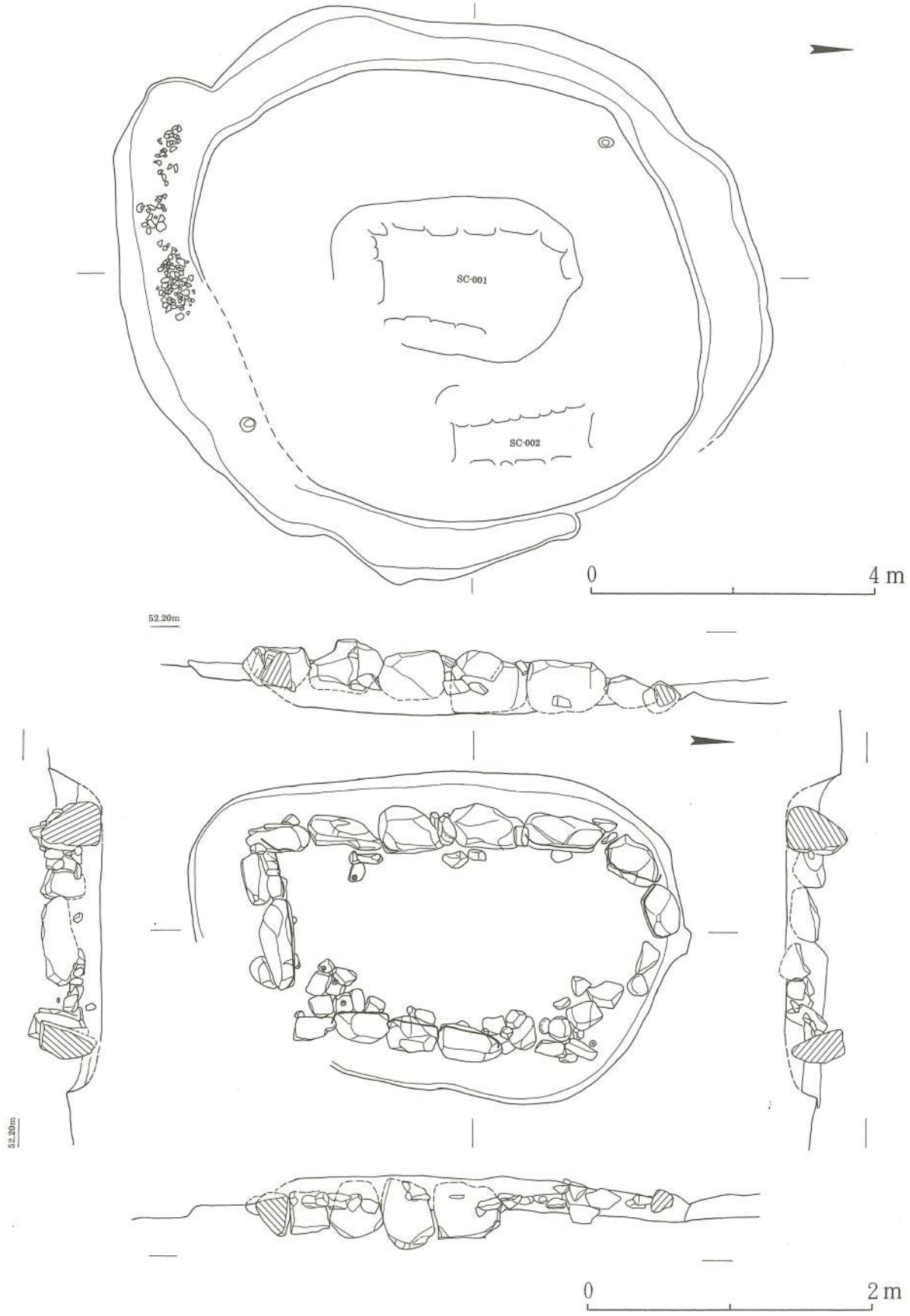


Fig. 52　青柳古墳群１区 SC-001実測図（１/80・１/40）

SC-002（Fig.53・PL.54、56）

SC-002は、F-6 Gr.で検出された小型の竪穴式石室。SC-001の周溝内に位置し、SC-001の石室から東北東方向2.5m程の位置に築かれている。

石室の掘り方は2.7m×1.5m程の長方形を呈すものと推定される（石室下部は発掘できなかったため深さともに不明）。

石室は、東側壁が破壊されているものの、プランは長さ1.8m程、幅は北小口部分で推定0.5m、南小口部分で0.4mのやや不整な長方形を呈す。石室は、西側壁が5石、南北両小口壁は1石を腰板とし、西側壁にはさらに小型の石材が上層に積上げられている。東側壁は南から4石の腰石が遺存している。床面には敷石などはみられない。主軸は、N-0°で南北を軸とする。

このSC-002は、墳丘など上部の遺構が残っていないためにSC-001との新旧関係は現場で確認できなかったが、SC-001の周溝内にあって、SC-001の石室から北東方向に2.5m程の至近距離に築かれていること、主軸が同一であることなどから、単独の墳墓ではなく、SC-001と同一墳墓の主体部と推定される。

遺物は、石室内から土師器碗、鉄鏃が出土している。

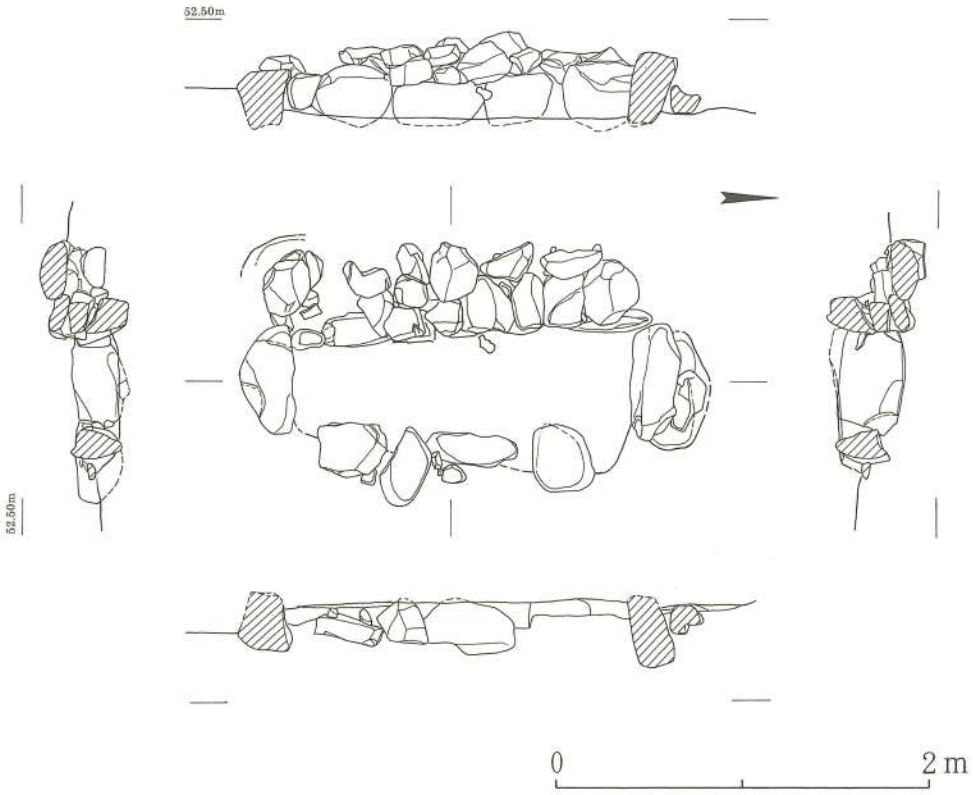


Fig.53　青柳古墳群1区SC-002実測図（1/40）

ST-003（Fig. 54～56・PL. 56、57）

ST-003は、E-7 Gr. で検出された複室？の横穴式石室を主体部とする円墳で標高51m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。石室の掘り方と石室の下部の腰石材の一部および主体部西側の周溝が全周の1/4程度遺存するのみであった。

古墳の形態や規模は、遺存している石室と周溝の位置から、直径13m程度の円墳であったことが推定される。周溝は、幅が検出面で1.5m～2.3m、底面で0.6m～1.5m、深さ0.2m～0.5m、断面は、上面が広い「U」字形を呈す。

石室の掘り方は、長辺8.0m、短辺4.mのやや不整な隅丸長方形を呈す。掘り方の深さは不明。石室は、この掘り方の主軸に沿って築かれている。

石室のプランは、両袖式で玄室の長さ4.5m、全幅2.2mの長方形を呈し、これに長さ2.0m幅1.2m程の羨道がつく。玄室の主室部分は長さ3.0m幅2.2mの方形を呈し、この主室と玄門部の間に長さ1.5m、幅1.2mの方形を呈す副室的な施設をもつ。副室床面と主室床面との間には段が設けられ主室の床面が20cm程低くなっている。玄門部分は幅0.6mの間隔で左右の袖石が立てられて石室と羨道部の境界となしている。石室は、主室奥壁が1枚の割石、左側壁は奥壁側が大きく、副室側がやや小さい2石、副室は左右両壁ともに1石を腰石としている。羨道部には細かな礫が隙間なく詰められ手前にやや大きめの割石を配し石室を閉塞している。主室左側床面の一部に敷石が見られる。石室の主軸は、N-130°-Eで南東方向に開口している。

遺物は、石室内より、青銅製金張りの耳環[1]が1点、鉄鏃などが出土している。周溝より、須恵器平瓶が出土しているほか、中世の素焼きの擂鉢や備前系の陶製の擂鉢などが出土しており、この時期に周溝が埋没したものと推定される。

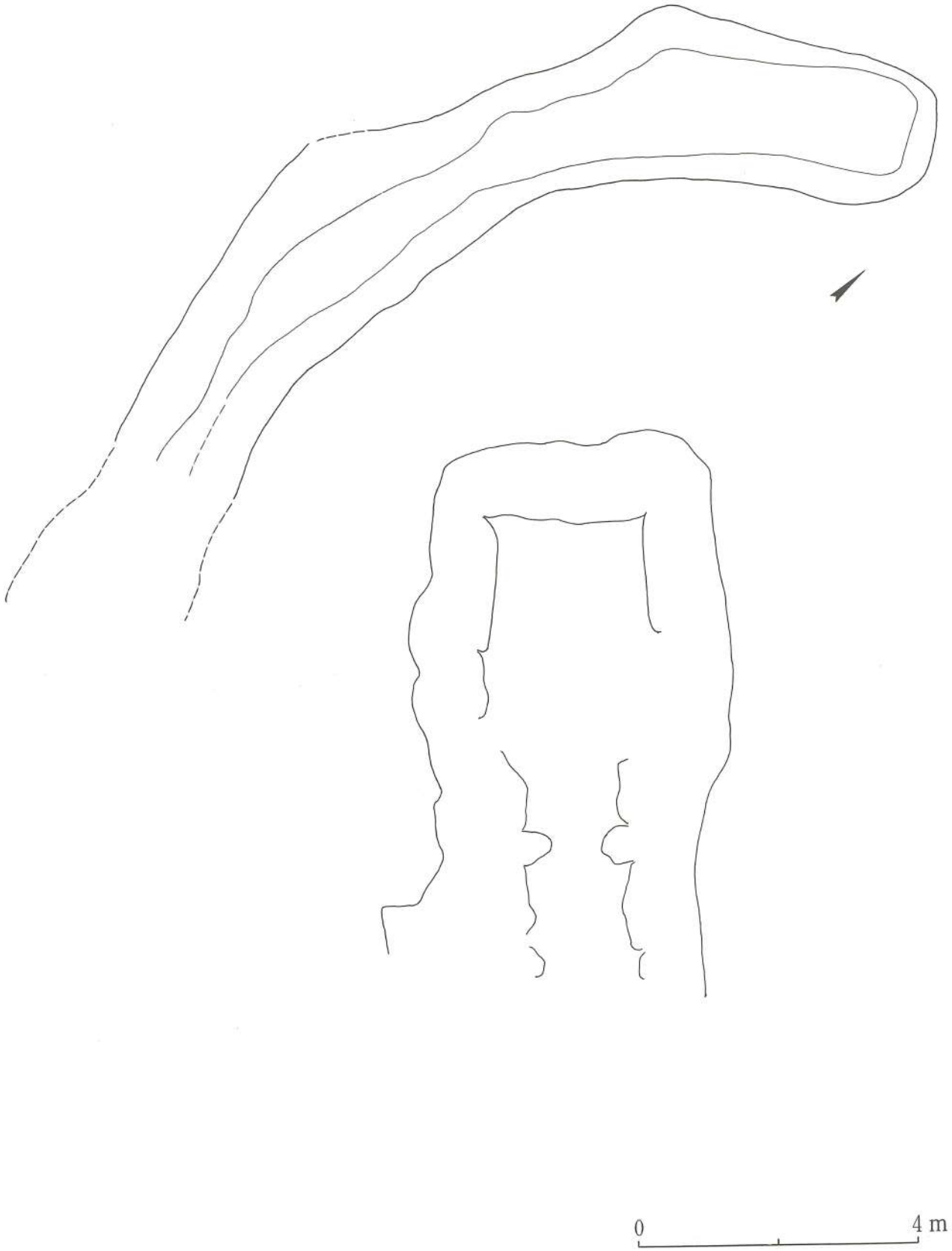


Fig. 54　青柳古墳群１区 ST-003実測図（１/80）

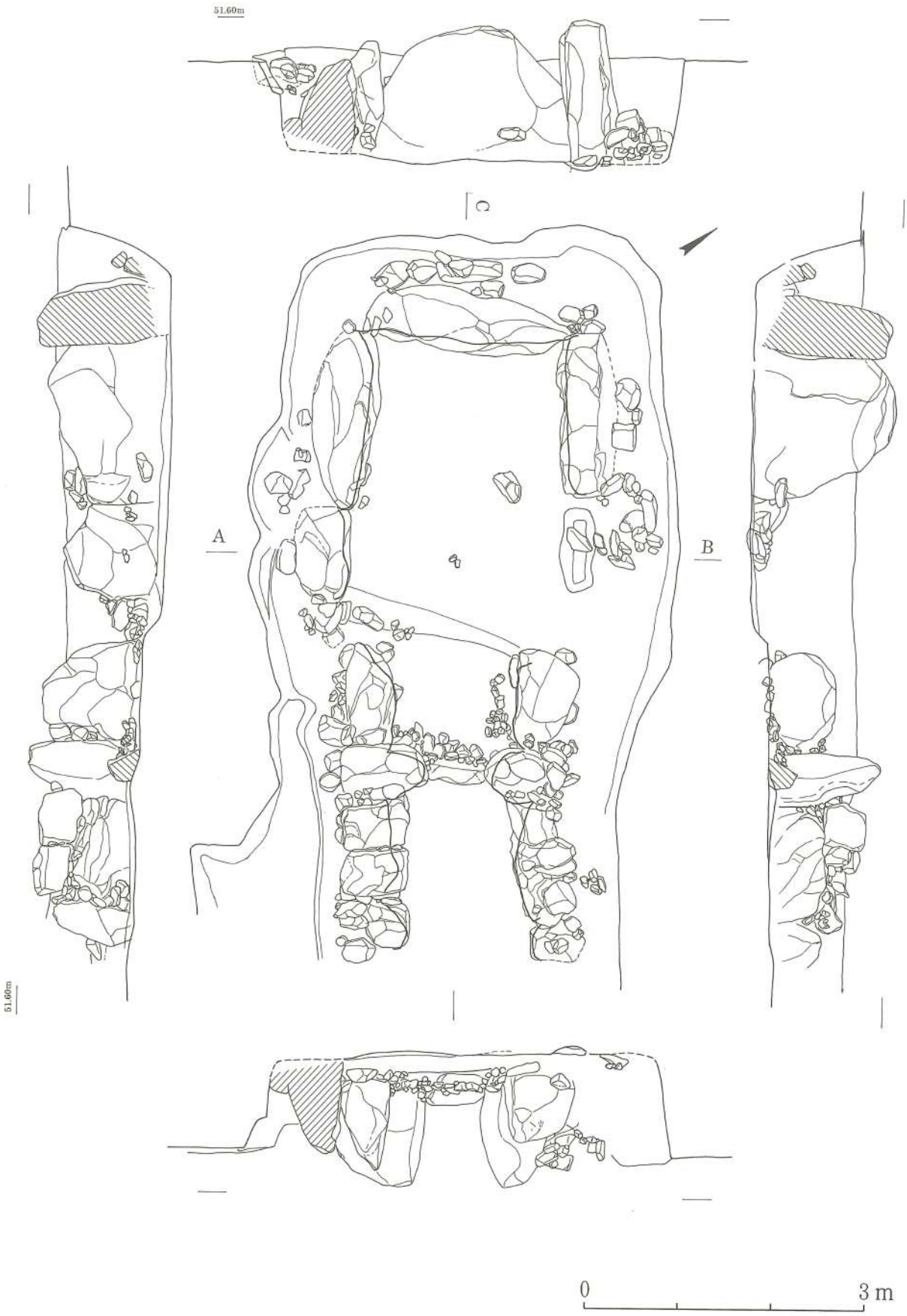


Fig. 55　青柳古墳群１区 ST-003石室実測図（1/60）

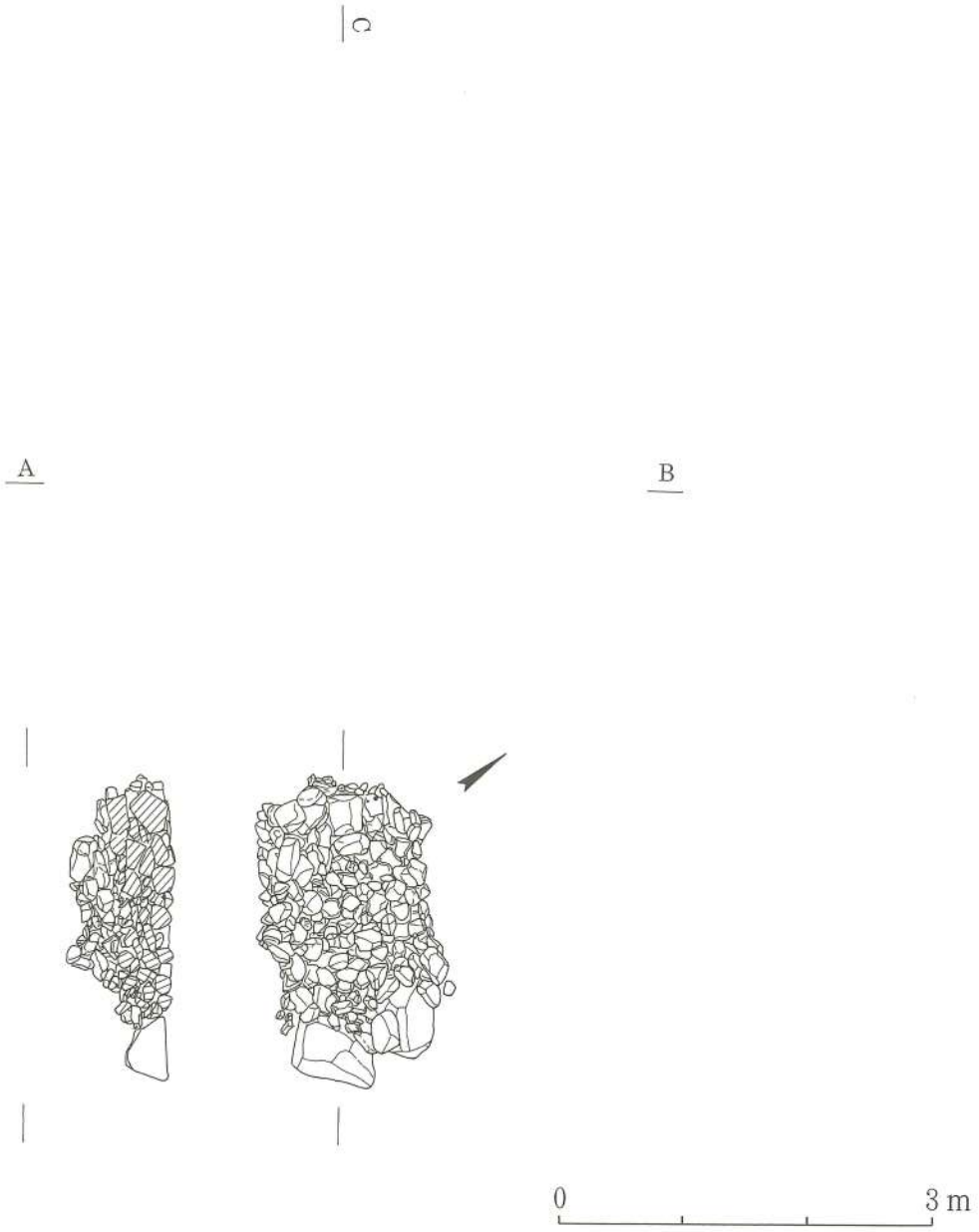


Fig. 56　青柳古墳群１区 ST-003石室閉塞石実測図（１/60）

SC-004（Fig. 57・PL. 58）

SC-004は、F-8Gr.で検出された小型の竪穴式石室で標高51m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。石室の掘り方と石室の下部の腰石材のみが遺存する。墳墓の形態や規模、周溝の有無も不明。

石室の掘り方は、長軸2.7m、短軸2.0mの不整な楕円形を呈す。掘り方の深さは不明。石室は、この掘り方の主軸に沿って築かれている。

石室のプランは、長さ1.8m、幅0.9mのやや胴が張った長方形を呈す。石室は、北東小口壁が2石、南西小口壁が1石、北西側壁5石、南東側壁4石を腰石としている。床面は全面に敷石が見られる。石室の主軸は、N-41°-Eである。

遺物は、土師器甕、丸底壺や須恵器甕が出土した。

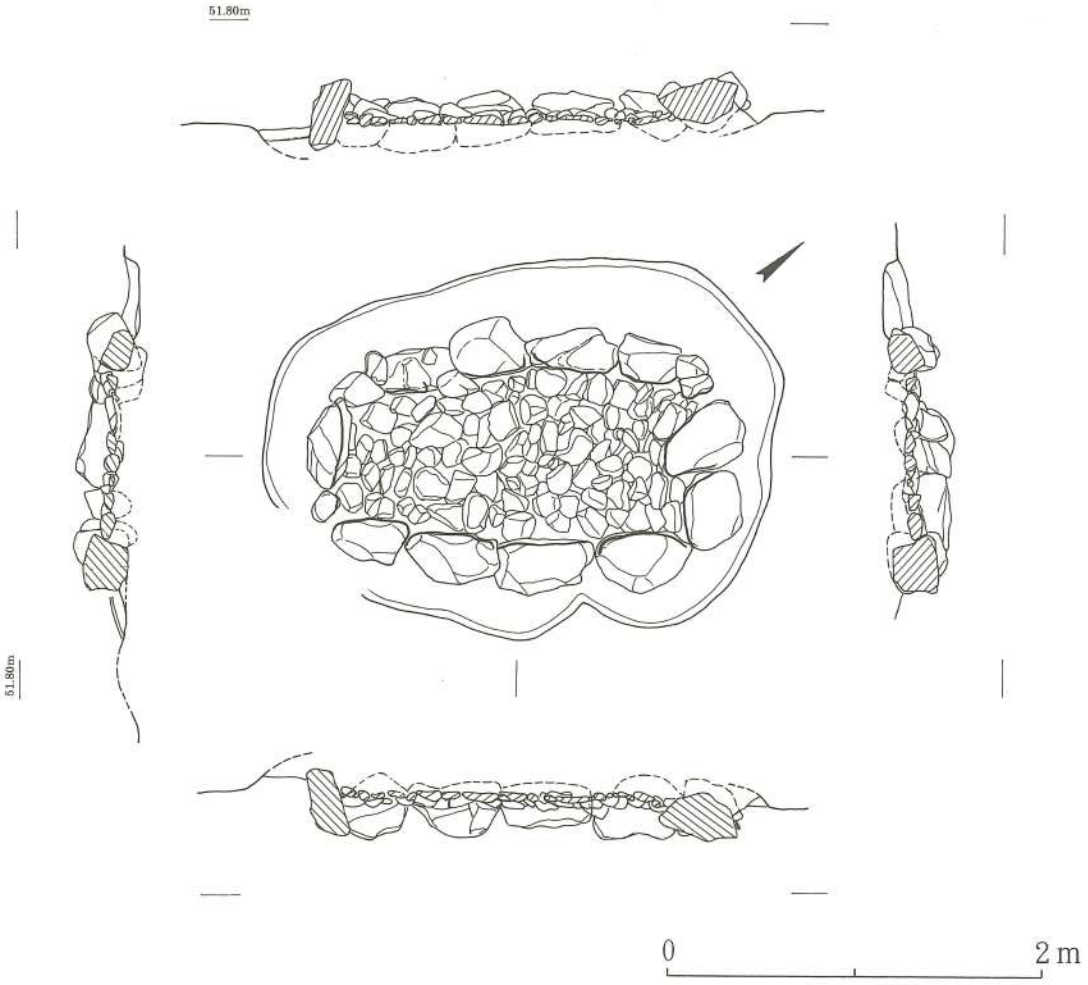


Fig. 57　青柳古墳群1区SC-004実測図（1/40）

SC-005（Fig. 58、59・PL. 58、59）

SC-005は、E-8Gr.で検出された小型の竪穴式石室で標高51m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。石室の掘り方と石室の下部の腰石材のみが遺存する。周溝は石室南西側の一部を除き全周の4/5程度が遺存する。

墳墓の形態や規模は、遺存している周溝から、周溝内法で直径7.5m程度の円形の墳墓であったことが推定される。周溝は、幅は検出面で0.3m～2.6m、底面で0.2m～2.5m、深さ0.1m弱と浅い。

石室の掘り方は、長軸3.8m、短軸2.1mの不整な隅丸長方形を呈す。掘り方の深さは30cm程度。石室は、この掘り方の主軸に沿って築かれている。

石室のプランは、長さ2.4m、幅0.8mの長方形を呈す。石室は、両小口壁が1石、北西側壁6石、南東側壁4石を腰石としている。床面には敷石などはみられない。石室の主軸は、N-45°-Eである。

遺物は、石室北東小口側の両側壁壁際に沿って鉄剣[2]が1口ずつ出土したほか鉄鏃も出土した。また、周溝からは、土師器碗や甕が出土している。

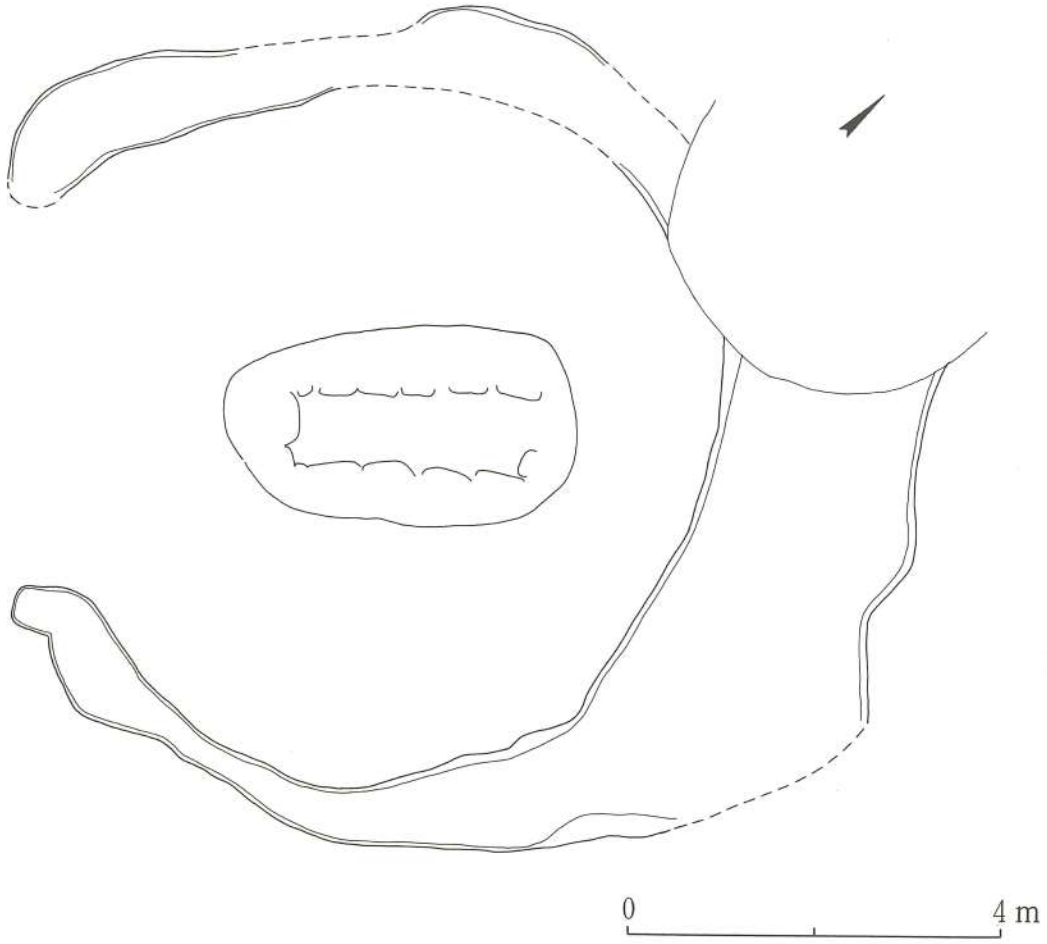


Fig. 58　青柳古墳群1区SC-005実測図（1/80）

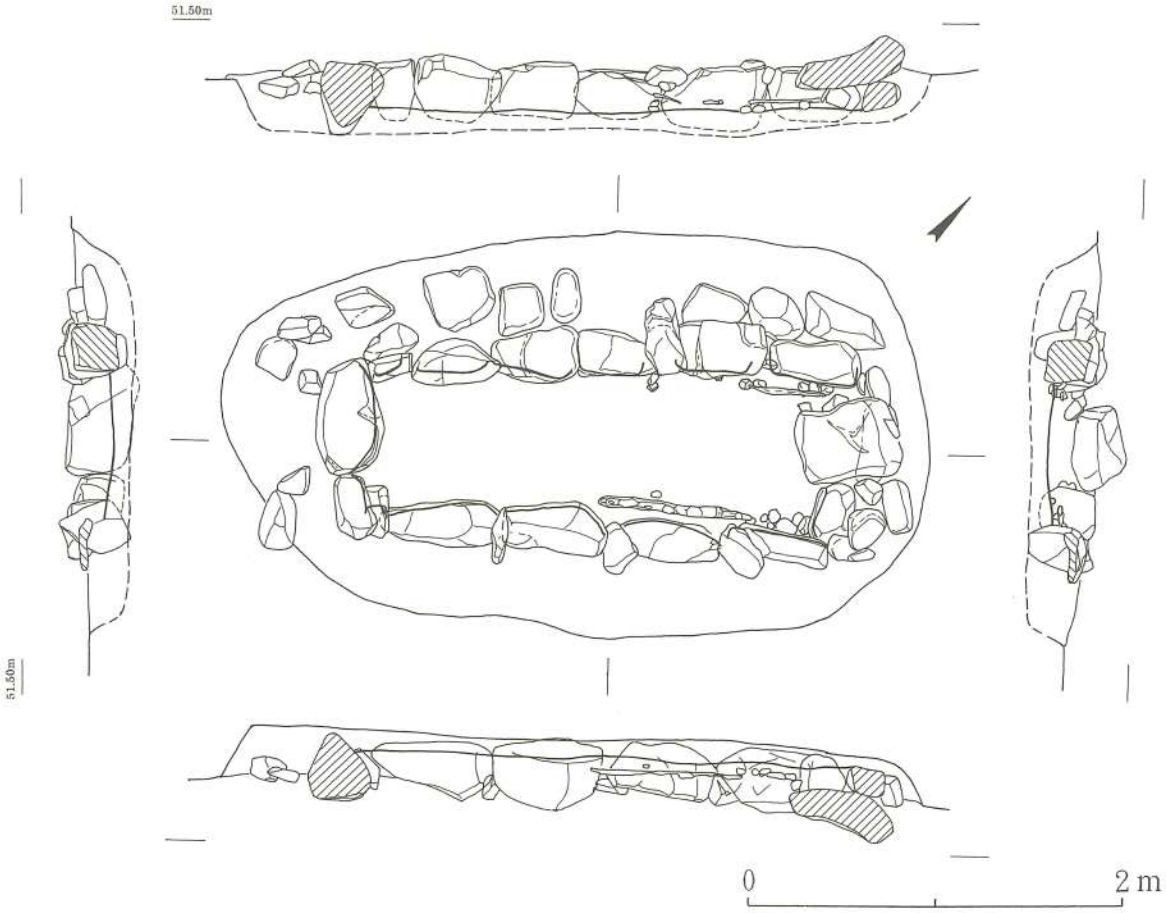


Fig. 59　青柳古墳群１区 SC-005石室実測図（１/40）

SC-006（Fig. 60・PL. 59）

SC-006は、E-７Gr.、標高51m付近にて、礫床の一部が2.2m×1.3mの範囲で検出された。ST-003の周溝遺存部の南側延長上にあり、付近一帯が耕地として開かれる以前にST-003の周溝によって破壊されたものとも推測される。礫床のみが遺存し主体部の詳細、墳墓全体の形態、規模などは不明。出土遺物もない。

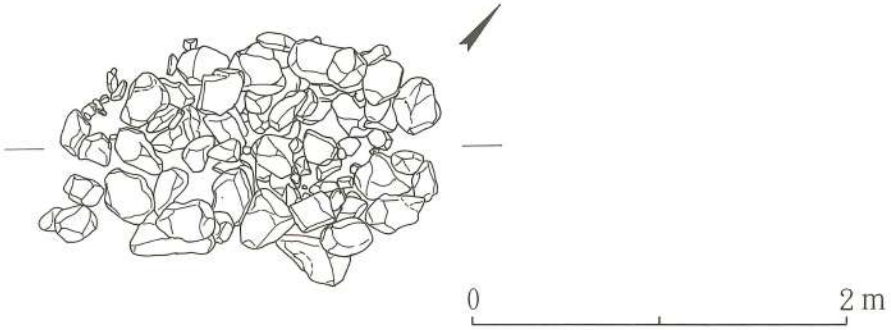


Fig. 60　青柳古墳群１区 SC-006実測図（１/40）

SC-007（Fig. 61・PL. 59）

SC-007は、E-7 Gr. で検出された小型の竪穴式石室で標高51m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。石室の掘り方の一部と石室の下部の腰石材のみが遺存する。周溝は見られない。

墳墓の形態や規模などは不明。

石室の掘り方は、長軸推定2.5m程、短軸1.8mの不整な隅丸長方形を呈す。掘り方の深さは西側で15cm程度。石室は、この掘り方の主軸に沿って築かれている。

石室は西側小口部分が破壊されているが、プランは、長さ推定1.0m程、幅0.35mの長方形を呈す。石室は、東側小口壁が1石、両側壁が2石を腰石とし、北側側壁は腰石の上部に小型の石材が積まれている。床面には敷石などはみられない。石室の主軸は、N-68°-Eである。

遺物は、土師器坏、坏蓋が出土している。

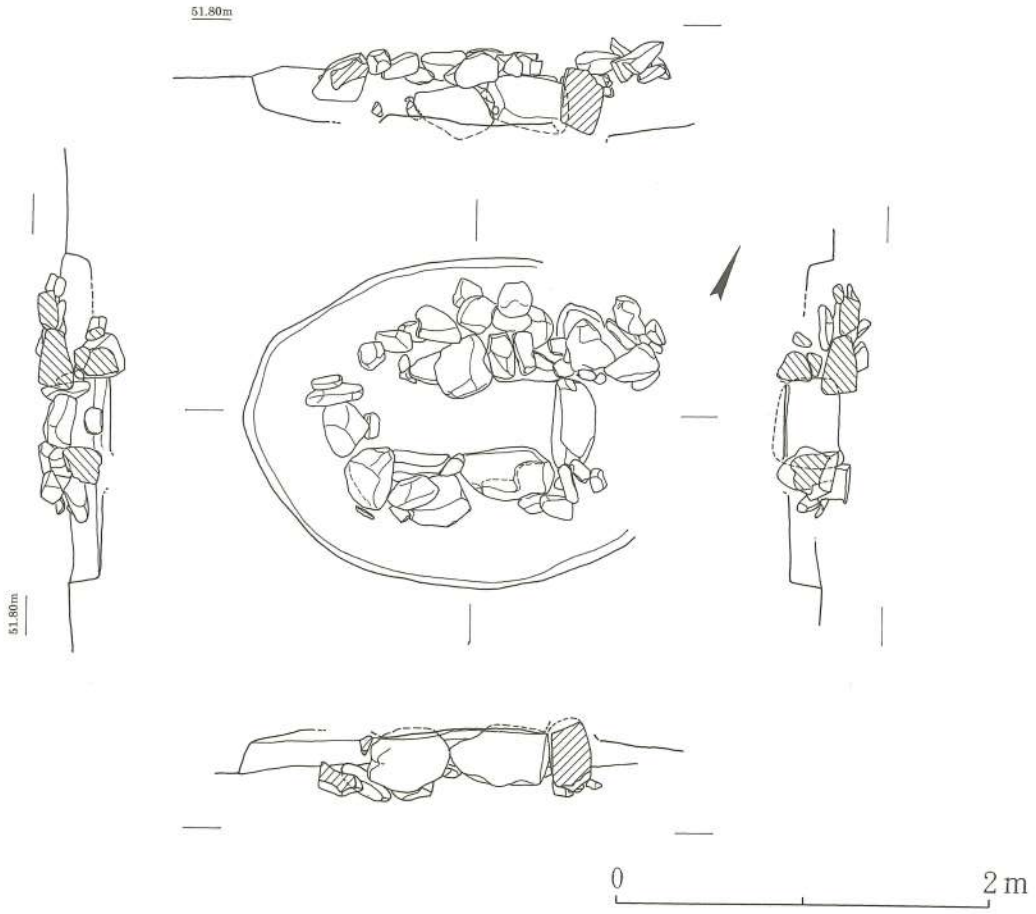


Fig. 61　青柳古墳群1区 SC-007実測図（1/40）

SC-009（Fig. 62）

SC-009は、F-9Gr.、標高51m付近で周溝と考えらる溝跡のみが検出された。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土、主体部の状況は不明。

検出された周溝は、幅が検出面で1.0m～2.4m、底面で0.9m～2.3m、深さ0.1m弱。全周の北東部分1/4弱が遺存している。周溝の遺存部から直径10m内外の円形の墳墓かと推測される。

遺物は、土師器甕が出土している。

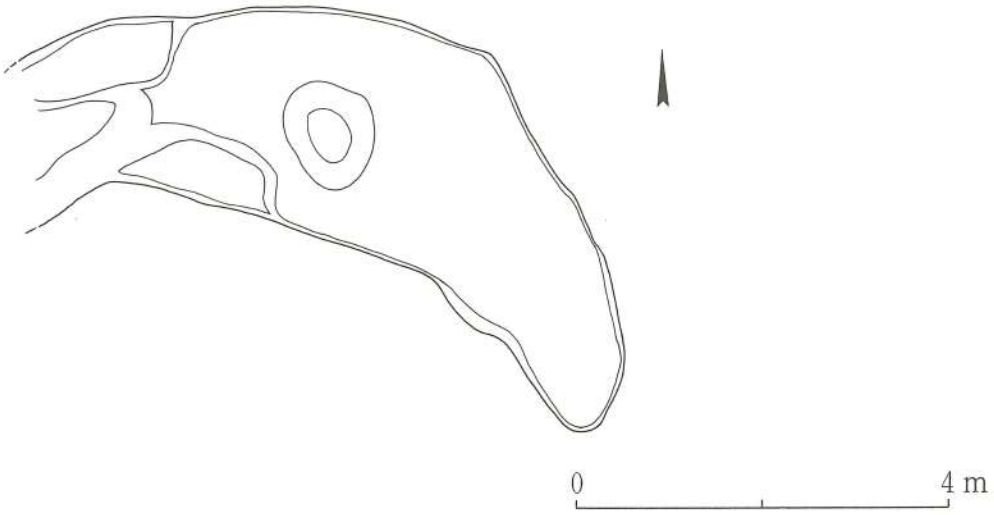


Fig. 62　青柳古墳群1区SC-009実測図（1/80）

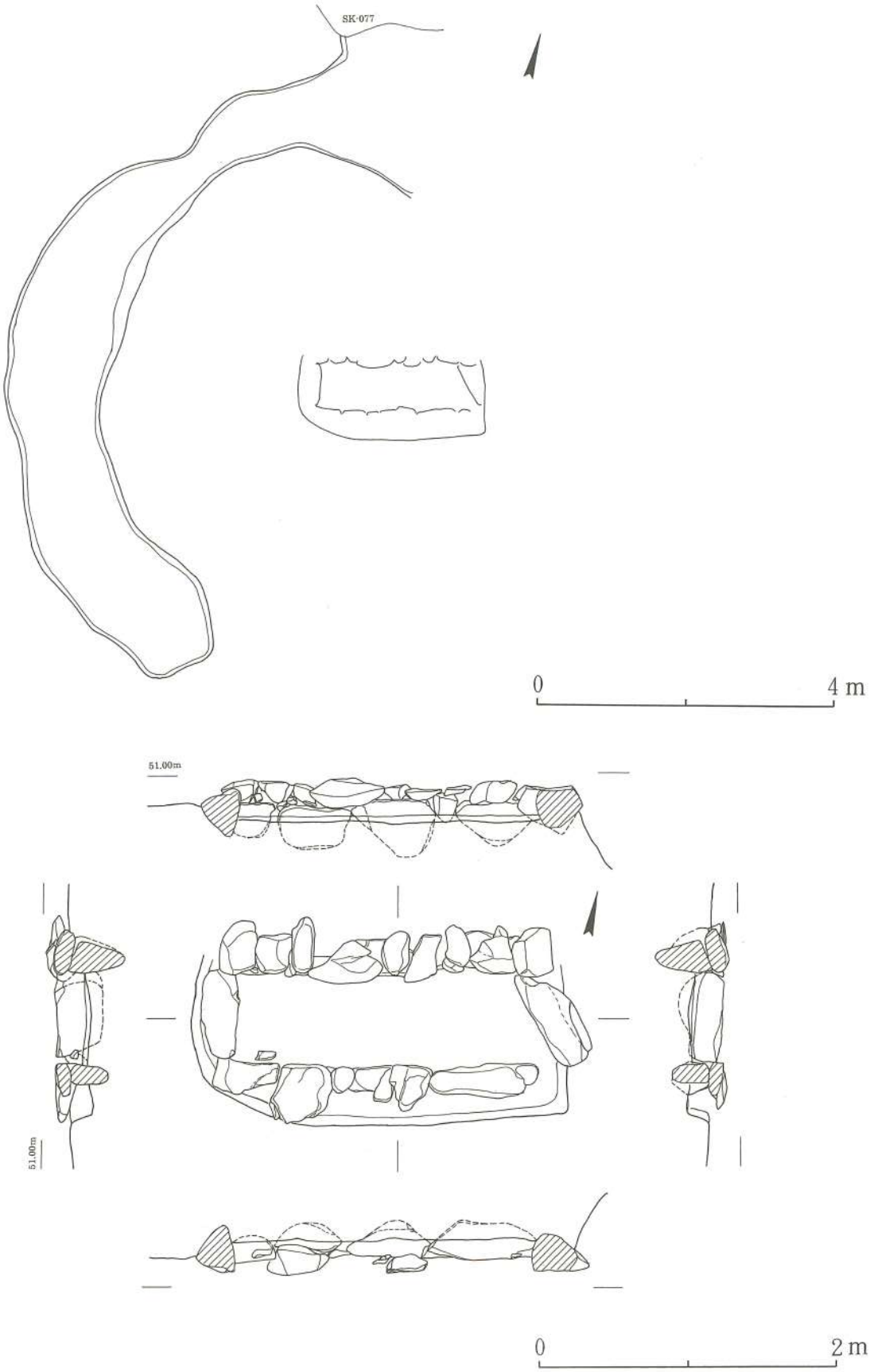


Fig. 63　青柳古墳群１区 SC-010実測図（１/80・１/40）

SC-010（Fig.63・PL.60）

SC-010は、E-10Gr.で検出された小型の竪穴式石室で標高51m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。石室の掘り方と石室の下部の腰石材のみが遺存する。周溝は石室の北部から南西部にかけて全周の1/3程度が遺存する。

墳墓の形態や規模は、遺存している周溝から、周溝内法で直径6.0m程度の円形の墳墓であったことが推定される。周溝は、幅が検出面で0.5m～1.4m、底面で0.4m～1.2m、深さは0.1mと浅い。

石室の掘り方は、長辺2.6m、短辺1.4m程の不整な長方形を呈す。掘り方の深さは不明であるが、腰石が深いところで40cm程度埋め込まれている。石室は、この掘り方の主軸に沿って築かれている。

石室のプランは、東小口壁の石材が斜めに配されているが、長さ2.1m、幅0.6mの長方形を呈す。石室は、両小口壁が1石、両側壁が4石を腰石としている。床面に敷石などはみられない。石室の主軸は、N-77°-Eである。

遺物は、周溝から土師器甕が出土している。

SC-011（Fig.64・PL.60）

SC-011は、F-10Gr.、標高51m付近で周溝と考えらる溝跡のみが検出された。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土、主体部の状況は不明。

検出された周溝は、幅が検出面で0.5m～1.8m、底面で0.4m～1.3m、深さは深いところで0.3m。全周の北東部分1/4弱が遺存している。周溝の遺存部から直径7m内外の円形の墳墓かと推測される。

時期が特定できる遺物は出土しなかった。

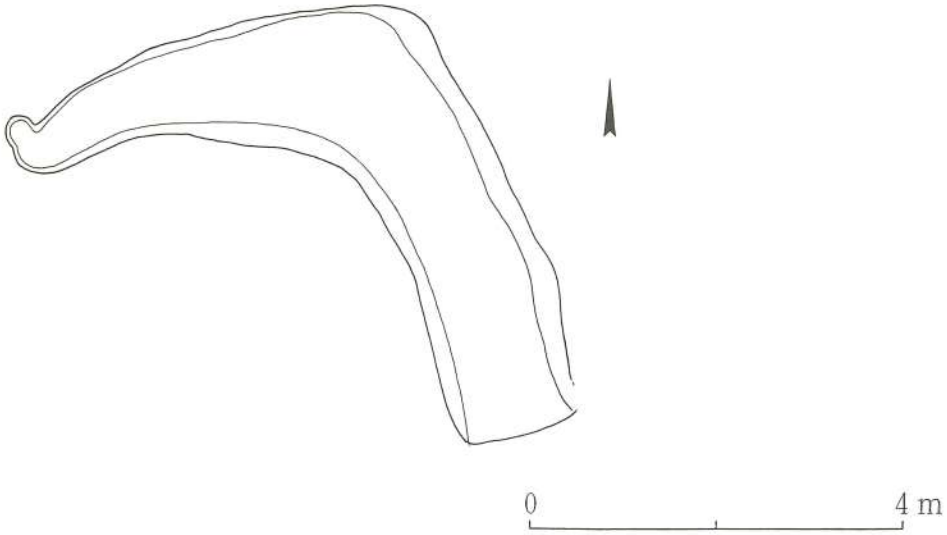


Fig.64　青柳古墳群1区SC-011実測図（1/80）

SC-012（Fig.65・PL.60）

SC-012は、D-9Gr.で検出された小型の竪穴式石室で標高51m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。石室の掘り方の一部と石室の下部の腰石材のみが遺存する。周溝は見られない。

墳墓の形態や規模などは不明。

石室の掘り方は、長軸2.0m以上、短軸1.5m程の不整な長方形を呈す。掘り方の深さは10cm程度。石室は、この掘り方の主軸に沿って築かれている。

石室は東側小口部分が破壊されているが、プランは、長さ1.5m以上、幅0.85mのやや胴が張る長方形を呈す。石室は、両側小口の石材は失われ、北側側壁は4石を腰石とし、南側側壁は2石の腰石が残る。床面の遺存部には敷石がみられるが、敷石がみられない石室南東部分は床面まで削平されている。石室の主軸は、N-76°-Eである。

遺物は、須恵器坏、坏蓋、甕、壺、瑳、提瓶、土師器高坏などがまとまって出土している。

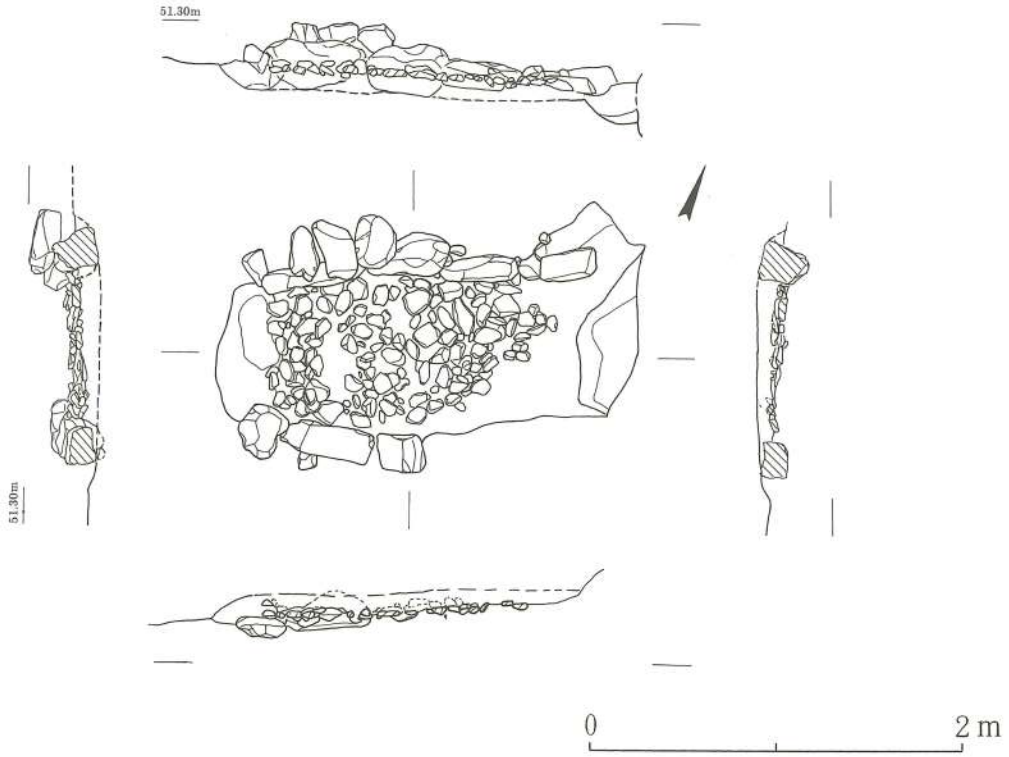


Fig.65　青柳古墳群1区SC-012実測図（1/40）

SC-013（Fig. 66）

SC-013は、E-11Gr.、標高49m付近で周溝と考えらる溝跡のみが検出された。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土、主体部の状況は不明。

検出された周溝は、幅が検出面で0.6m～1.6m、底面で0.5m～1.2m、深さは深いところで0.35m、断面は上面が広いU字形を呈す。全周の南東部分1/4弱が遺存している。また、南部の周溝に一部確認できなかった部分があるが、浅い周溝が後世の削平に伴い失われたものか、陸橋状の施設が設けられていたものかは不明である。

周溝の遺存部から直径7m内外の円形の墳墓であったと推測される。

時期が特定できる遺物は出土しなかった。

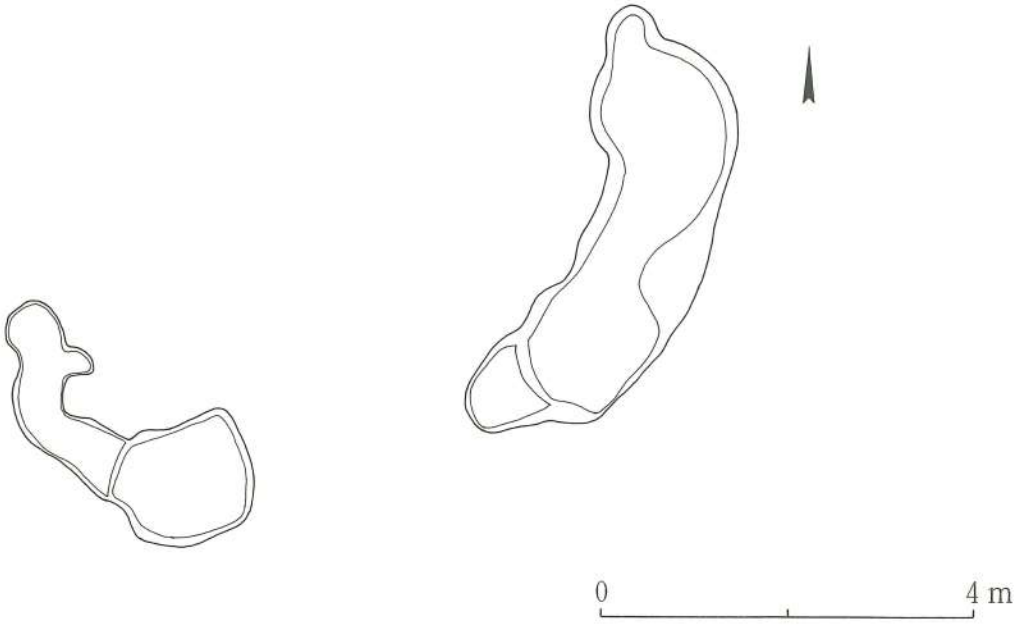


Fig. 66　青柳古墳群1区SC-013実測図（1/80）

SC-016（Fig. 67・PL. 61）

SC-016は、E-11Gr. で検出された小型の竪穴式石室。標高50m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。石室の掘り方の一部と石室の下部の腰石材のみが遺存する。周溝は見られない。

墳墓の形態や規模などは不明。

石室の掘り方は、長軸2.4m、短軸推定1.1m程の不整な長方形を呈す。掘り方の深さは20cm程度。石室は、この掘り方の主軸に沿って築かれている。

石室は東側部分が破壊されており一部石材が抜き取られているが、プランは、石材の抜き取り跡から長さ推定1.7m、幅0.3mの長方形を呈すものと推測される。石室の石材は、東小口は失われ、西小口壁は1石、北側側壁は5石で構成されていたものと思われるが西側の4石が遺存している。南側側壁は3石の腰石が残る。床面に敷石などはみられない。石室の主軸は、N-85°-Eである。

出土遺物はない。

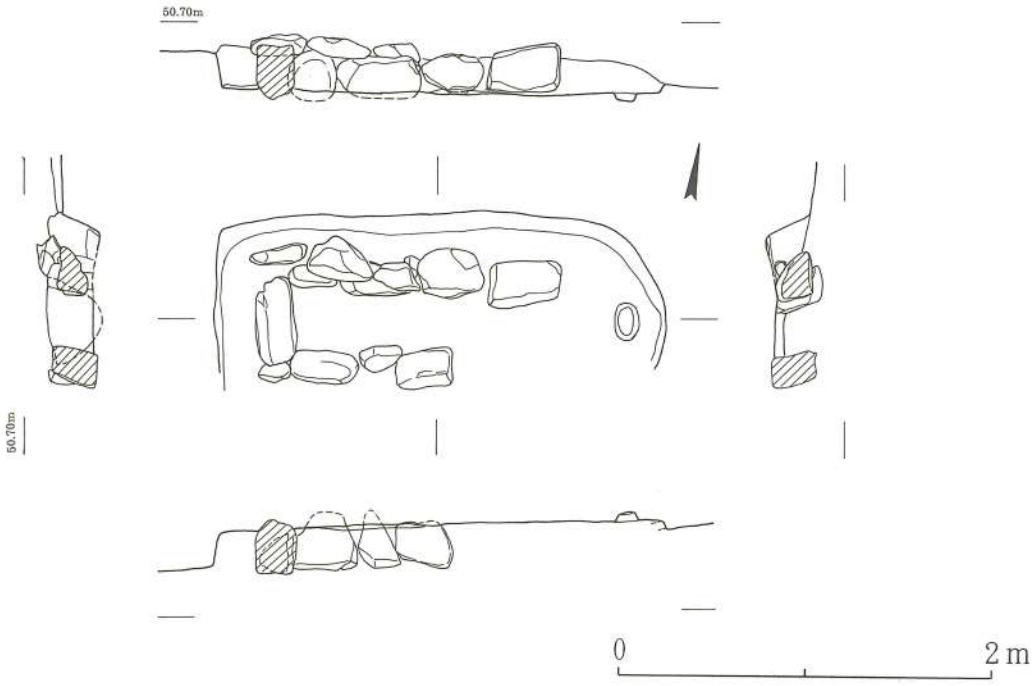


Fig. 67　青柳古墳群1区 SC-016実測図（1/40）

ST-017（Fig. 68、69・PL. 61～63）

ST-017は、C-9Gr.で検出された単室の横穴式石室を主体部とする円墳で標高50m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。石室の掘り方と石室の下部および周溝の西側部分が全周の1/2程度遺存するのみであった。

古墳の形態や規模は、遺存している石室と周溝の位置から、直径6m程度の円墳であったことが推定される。周溝は、幅が検出面で0.6m～1.0m、底面で0.2m～0.4m、深さ0.4m～0.5m、断面は、上面が広い「U」字形を呈す。

石室の掘り方は、長辺4.5m以上、短辺2.4mのやや不整な隅丸長方形を呈す。掘り方の深さは奥壁側で約1.1m。石室は、この掘り方の主軸に沿って築かれている。

石室のプランは、両袖式で玄室は一辺約1.4mのやや不整な方形を呈し、これに長さ2.4m、幅0.8mの羨道がつく。石室の主室部分は長さ3.0m幅2.2mで、玄門部分は幅0.8mの間隔で左右の袖石が立てられ、床には横長の石材を配し、玄室と羨道部の境界となしている。石室は、主室奥壁に2枚の腰石を、左側壁には最下段にやや大きめの腰石3石を、右側壁には最下段にやや大きめの腰石2石をもち、この腰石の上部に小さめの横長の石材の小口を揃えて積上げ壁面としている。玄室床面の全面に敷石がみられる。

羨道部には細かな礫が隙間なく詰められ石室を閉塞している。

石室の主軸は、N-125°-Eで南東方向に開口している。

遺物は、石室より、須恵器坏、坏蓋、瑕、土師器高坏、坏蓋、甕など。が、須恵器坏蓋、高坏などのほか青銅製金張りの耳環[1]が1点出土している。また、周溝からは、須恵器坏蓋、高坏が出土している。

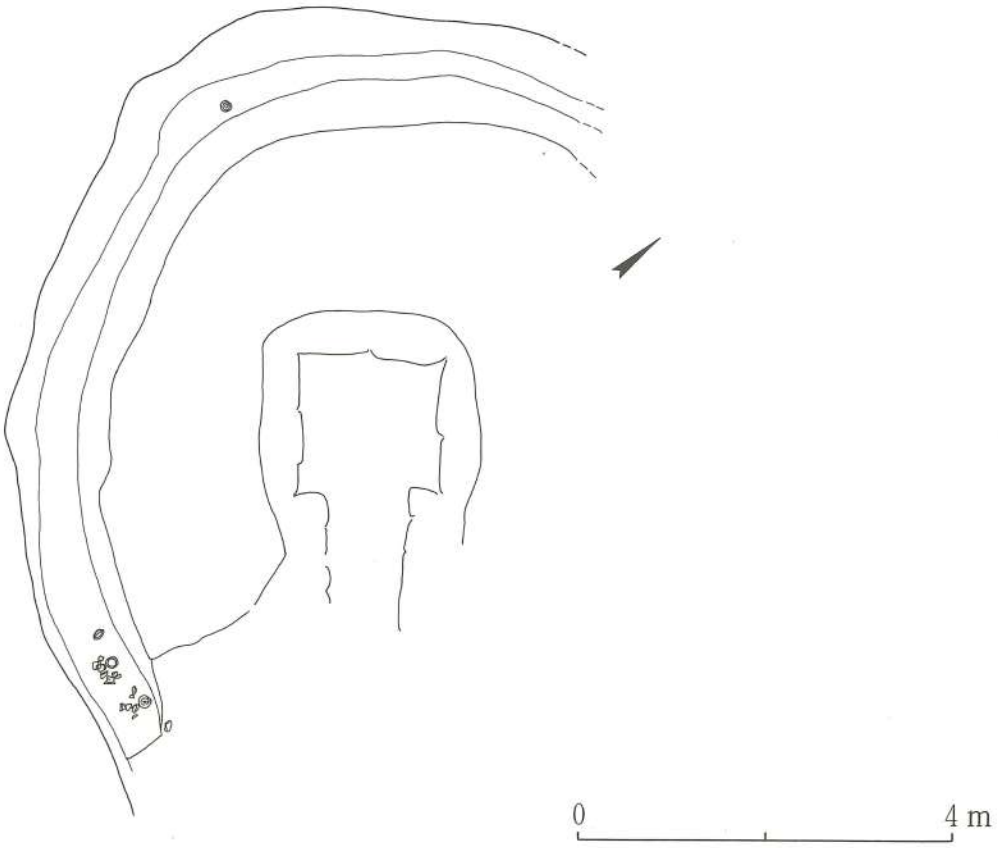


Fig. 68　青柳古墳群1区ST-017実測図（1/80）

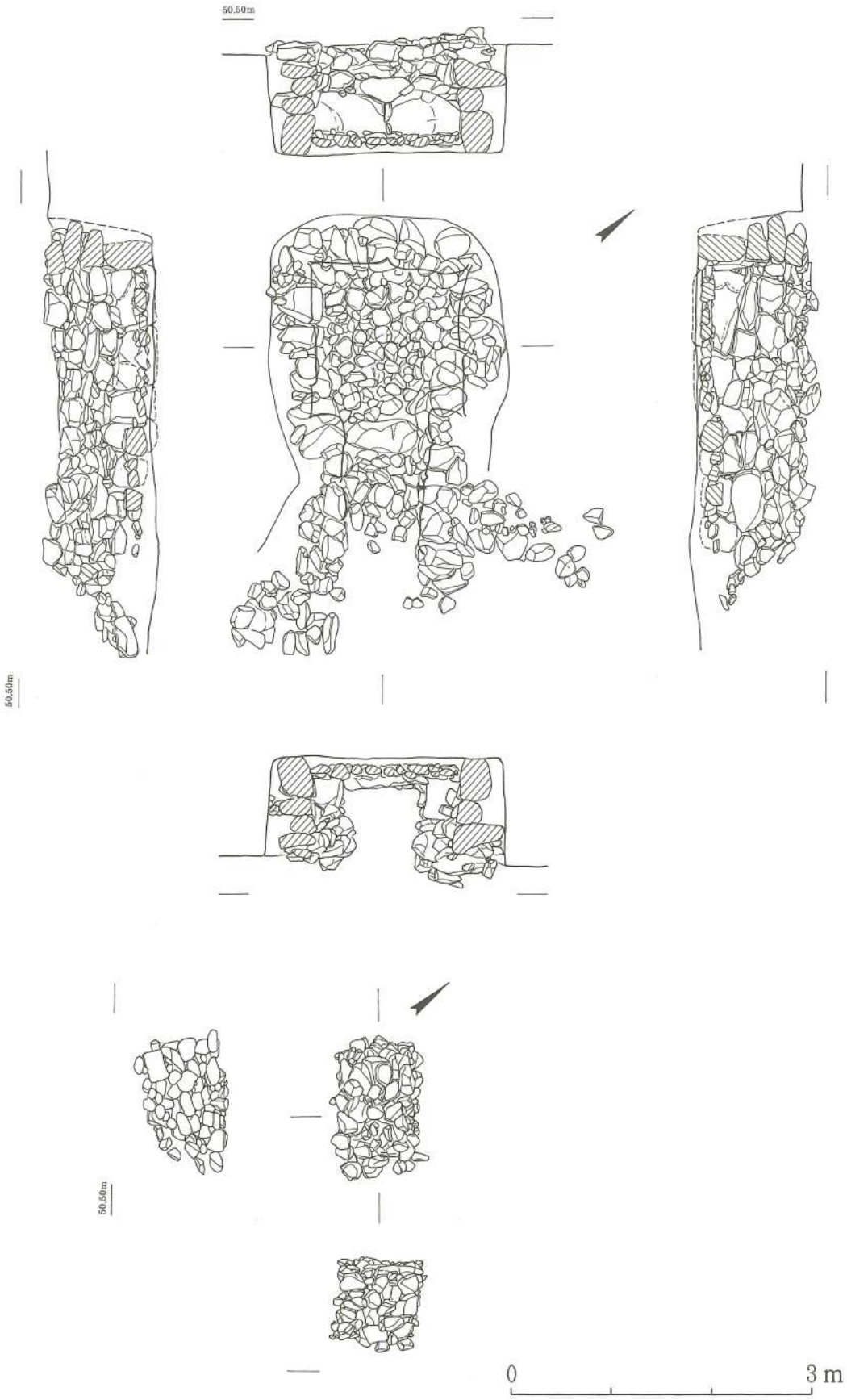


Fig. 69　青柳古墳群１区 ST-017石室実測図（1/60）

SC-018（Fig. 70・PL. 63、64）

SC-018は、C-10Gr. で検出された小型の竪穴式石室で標高50m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。石室の掘り方の一部と石室の下部の腰石材のみが遺存する。周溝は見られない。

墳墓の形態や規模などは不明。

石室の掘り方は、推定で長軸2.5m、短軸推定1.2m程の不整な長方形を呈し、掘り方の深さは20cm程度と推測される。石室は、この掘り方の主軸に沿って築かれている。

石室は破壊が激しく一部石材が抜き取られているが、石材の抜き取り跡から、プランは、長さ推定1.9m、幅0.6mの長方形を呈すものと推測される。石室の石材は、東側小口部分は失われ、西側小口部分は小石が数個遺存している。北側側壁は6石で構成されていたものと思われるが1石が抜き取られている。南側側壁は3石の腰石が残る。床面に敷石などはみられない。石室の主軸は、N-82°-W である。

出土遺物はない。

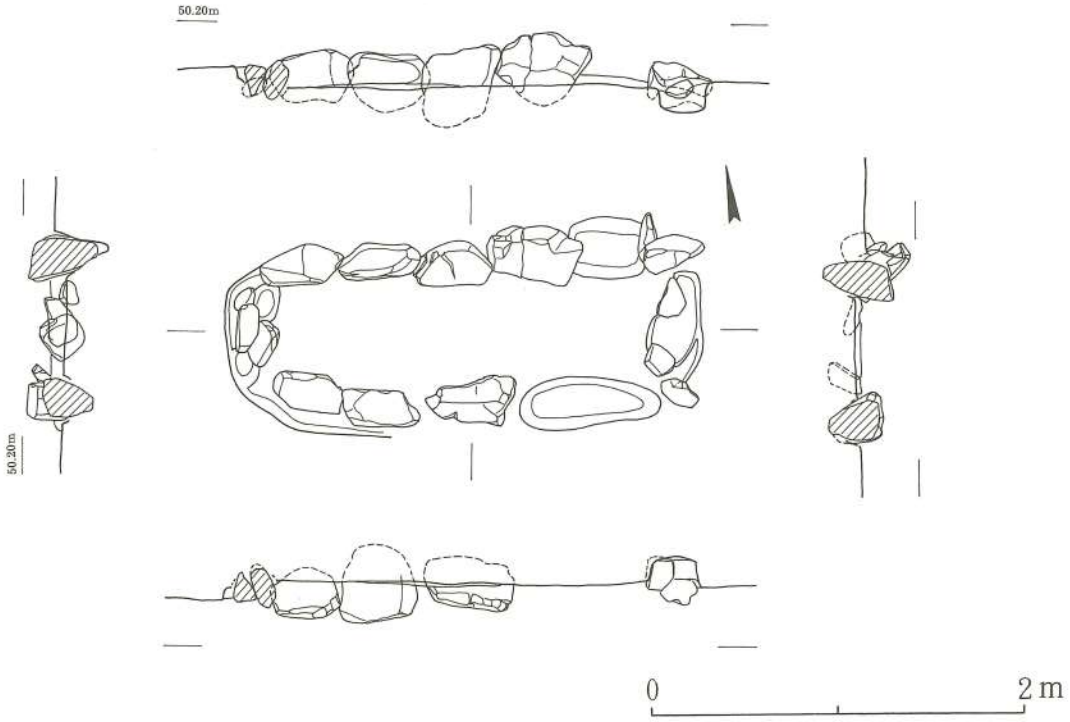


Fig. 70　青柳古墳群1区 SC-018実測図（1/40）

SC-020（Fig. 71・PL. 64）

SC-020は、D-12Gr. で検出された小型の竪穴式石室で標高49m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。石室の掘り方の一部と石室の下部の腰石材のみが遺存する。周溝は見られない。

墳墓の形態や規模などは不明。

石室の掘り方は、長軸1.8m、短軸1.3mの胴張りの隅丸長方形を呈し、掘り方の深さは25cm程度。石室は、この掘り方の主軸に沿って築かれている。

石室のプランは、長さ推定1.8m、幅0.7mの長方形を呈す。石室は、両小口壁は１石ずつ、両側側壁は４石の腰石で構成されている。床面には全面に敷石がみられる。石室の主軸は、N-53°-E である。

出土遺物はない。

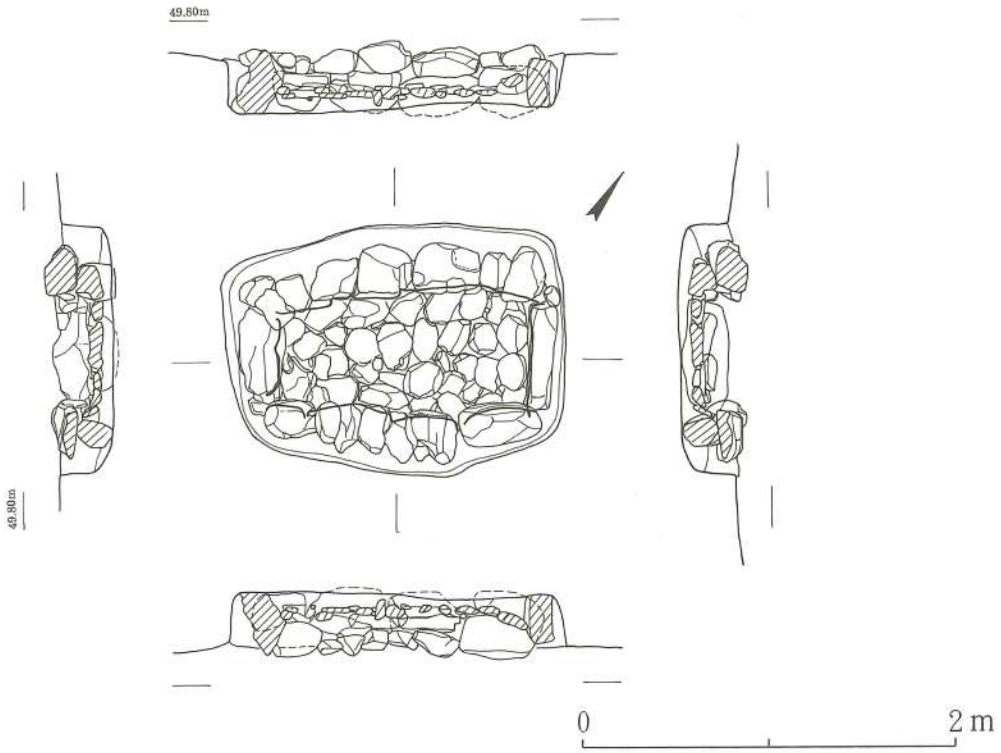


Fig. 71　青柳古墳群１区 SC-020実測図（1/40）

SC-021 (Fig. 72・PL. 64、65)

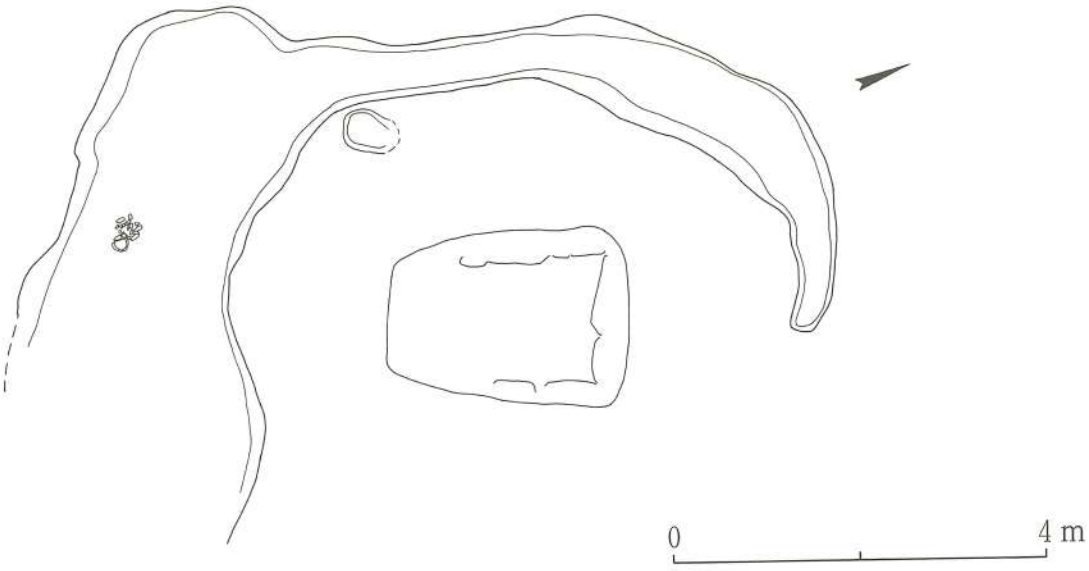
SC-021は、D-12Gr. で検出された小型の竪穴式石室で標高49m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。石室の掘り方と石室の下部の腰石材のみが遺存する。周溝は石室の北部から南部にかけて全周の1/2程度が遺存する。

墳墓の形態や規模は、遺存している周溝から、周溝内法で直径6.0m程度の円形の墳墓であったことが推定される。周溝は、幅が検出面で0.3m～2.2m、底面で0.2m～1.9m、深さは0.2m～0.3m。

石室の掘り方は、長辺2.6m、短辺は南小口側で1.1m、北小口側で1.9m程のやや末広がりの隅丸長方形を呈す。掘り方の深さは20cm程度。石室は、この掘り方の主軸に沿って築かれている。

石室のプランは、南側小口部分の石材が失われているが、掘り方同様、石室北側小口部分がやや広い長方形を呈す。長さ2.0m以上、幅は南側遺存部で推定1.0m、北小口部分で1.3mを計る。石室の腰石は、北小口壁が2石を腰石とし、西側側壁は北から3石目までが遺存している。削平されたと考えられる南側小口部分を除き床面に敷石がみられる。石室の主軸は、N-22°-Eである。

遺物は、周溝から須恵器坏、坏蓋、土師器坏などが出土している。



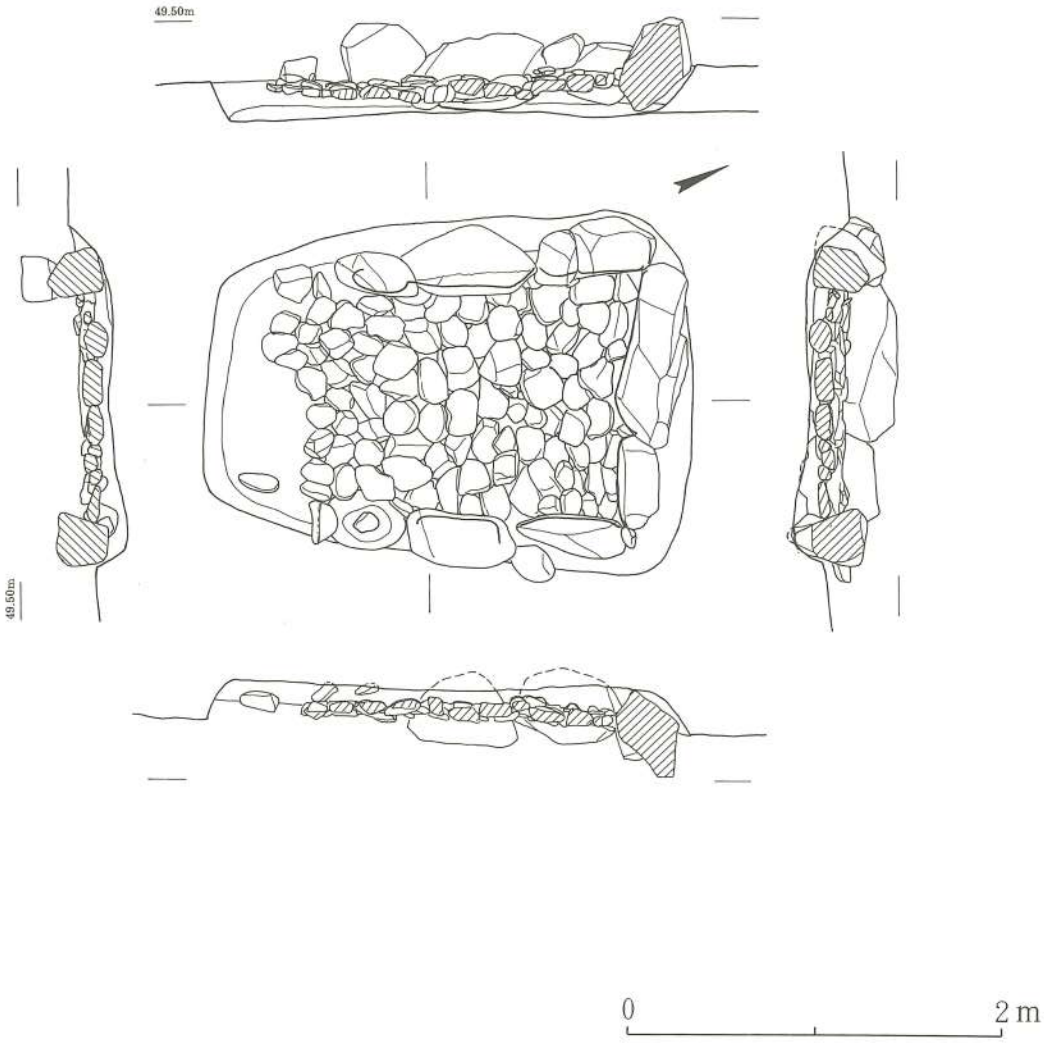


Fig. 72　青柳古墳群１区 SC-021実測図（１/80・１/40）

SC-022（Fig. 73、74・PL. 66）

SC-022は、E-13Gr. で検出された小型の竪穴式石室で標高49m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。石室の掘り方と石室の下部の腰石材のみが遺存する。周溝は石室の北部から東部にかけて全周の１/３程度が遺存する。

墳墓の形態や規模は、遺存している周溝から、周溝内法で直径7.0m程度の円形の墓墳であったことが推定される。周溝は、幅が検出面で1.2m～2.2m、底面で0.9m～1.9m、深さは0.2m～0.35m。

石室の掘り方は、長軸2.8m、短軸1.8m程の不整形を呈す。掘り方の深さは不明であるが一部の腰石が40cm程埋め込まれている。石室は、この掘り方の長軸に沿って築かれている。

石室のプランは、西側小口部分が失われているが、長さ1.8m以上、幅0.7m程の長方形を呈す。石室の腰石は、東小口壁が２石を腰石とし、両側側壁はそれぞれ２石目までが遺存している。西側小口部分を中心に床面に小礫がみられるが、石室が破壊されたときの二次堆積の可能性が強い。石室の主軸は、N-85°-E である。

時期を特定できるような土師器須恵器などの土器は出土しなかったが、石室内より鉄鏃が出土している。

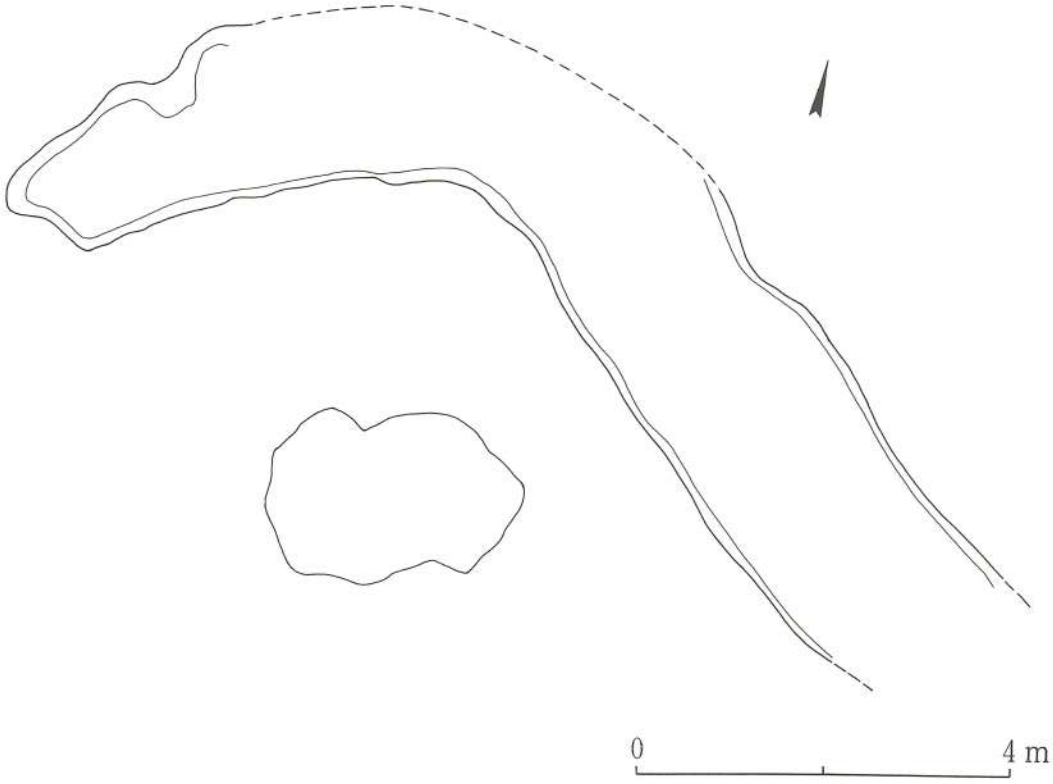


Fig. 73　青柳古墳群１区 SC-022実測図（１/80）

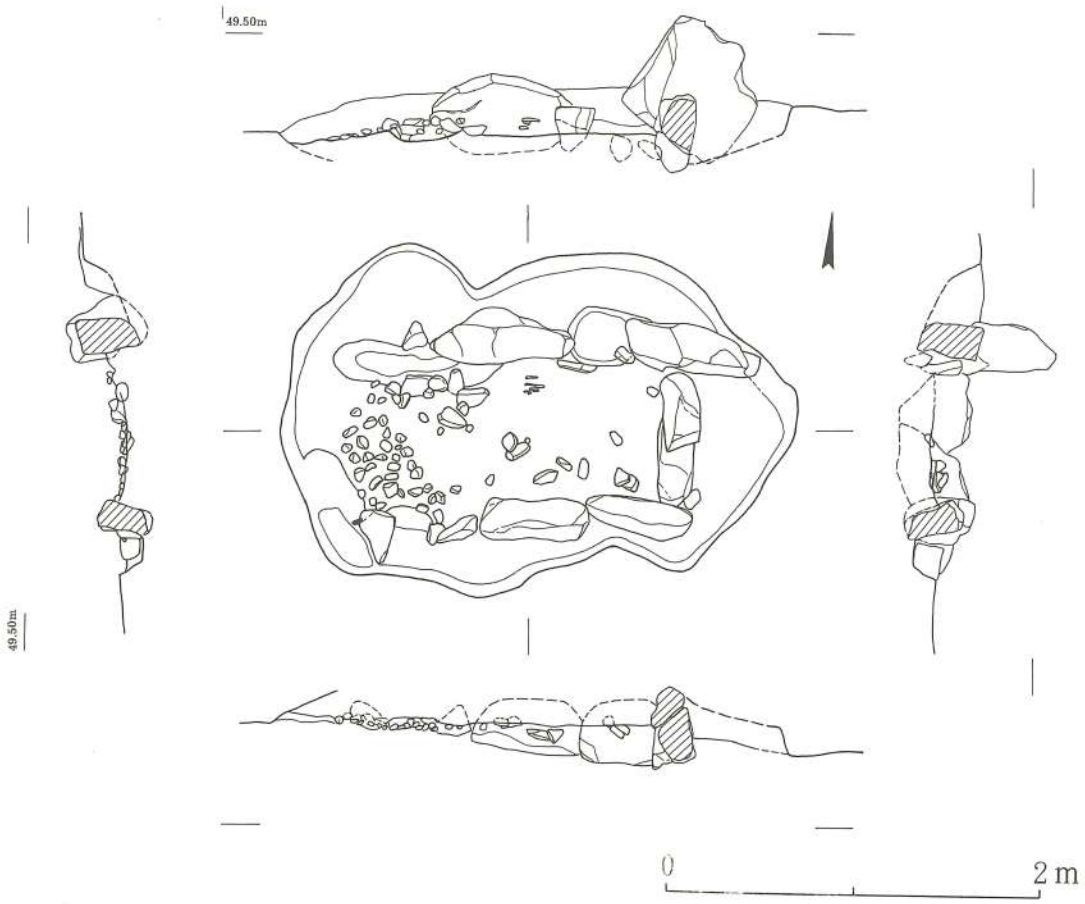


Fig. 74　青柳古墳群１区 SC-022石室実測図（1/40）

SC-023（Fig.75・PL.67、68）

SC-023は、E-16Gr.で検出された横穴式石室と推定されるを主体部をもつ円墳。調査区南端の標高48m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに南側1/2程度が削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。石室の掘り方と石室の下部および石室北側の周溝が全周の1/2程度遺存するのみであった。

古墳の形態や規模は、遺存している周溝から、直径10m弱の円墳であったことが推定される。周溝は、幅が検出面で1.4m～2.0m、底面で0.6m～1.4m、深さ0.2m～0.35m。断面は、上面が広い「U」字形を呈す。

石室の掘り方は、北側部分が一部遺存する。長軸2.5m以上、短軸3.9mのやや不整な隅丸長方形を呈すものと推定される。掘り方の深さは遺存部分で約0.8m。

石室のプランは、方形を呈すものと推測され、玄室奥壁部分で幅2.0m、延長1.5m程が遺存している。

石室は、玄室奥壁が2枚の腰石を、両側壁には腰石2石ずつが残る。この腰石の上部に扁平な石材の小口を揃えて積上げ壁面としている。遺存部に敷石などはみられない。

石室の主軸は、奥壁を基準とするとN-160°-Eである。

遺物は、石室より、土師器坏、甕などが、周溝より、須恵器坏、坏蓋、高坏、瑕、甕、壺、土師器高坏などが出土している。

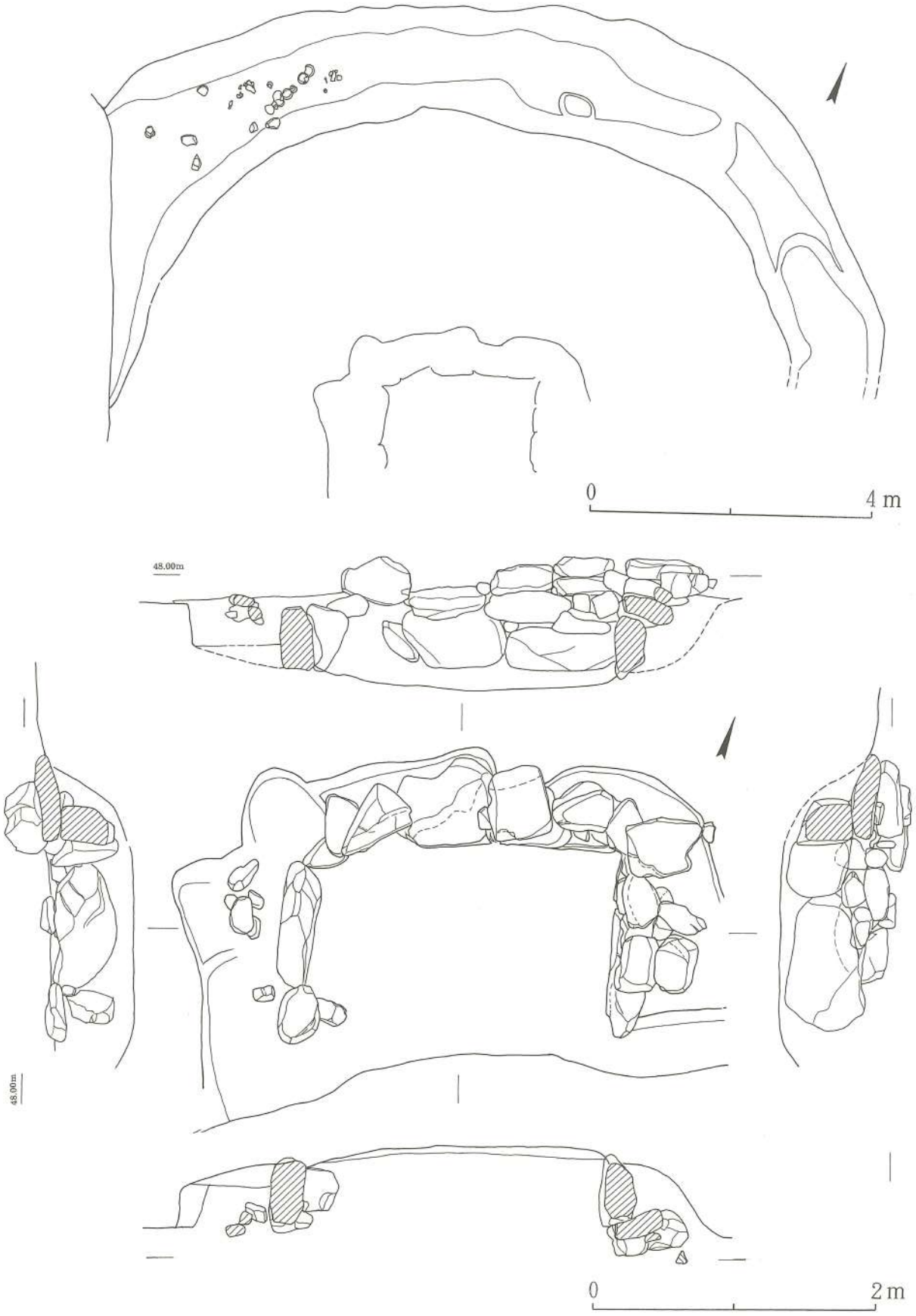


Fig. 75　青柳古墳群１区 SC-023実測図（１/80・１/40）

SC-024（Fig.76・PL.68、69）

SC-024は、C-10Gr.、標高50m付近にて、石室の掘り方と礫床の一部が検出された。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。

石室は、長さ2.8m、幅1.1m、深さ20cmの両端が丸い長方形の掘り方が遺存し、部分的に礫床の一部と考えられる敷石が残る。掘り方の長軸を基準とすると、主軸はN-85°-Eである。

出土遺物はない。

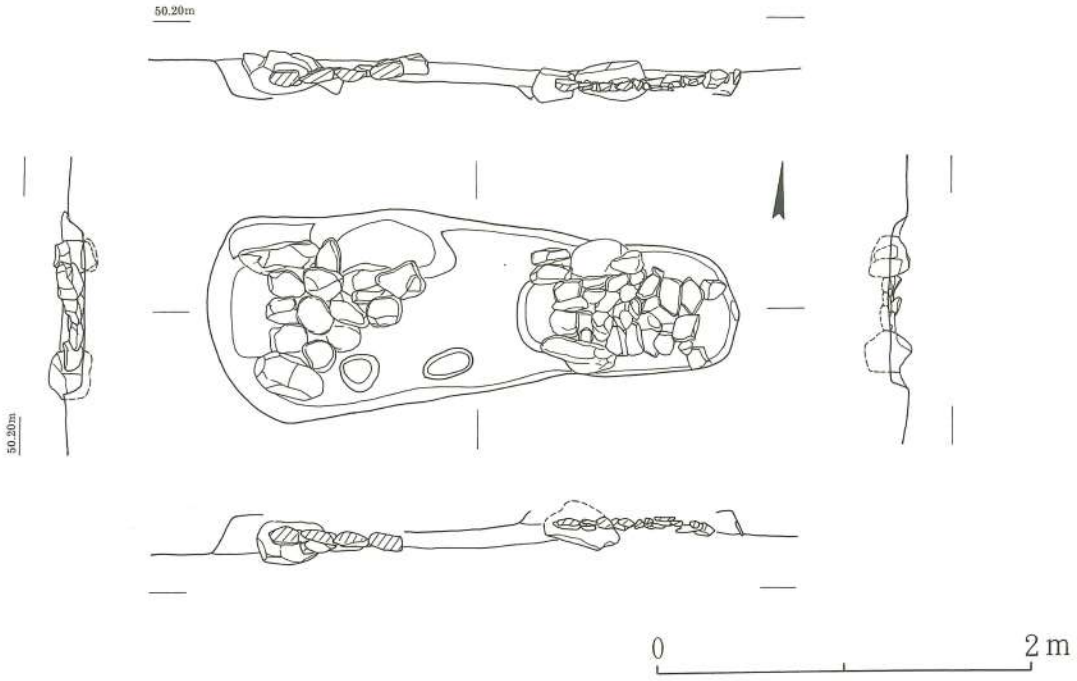


Fig.76　青柳古墳群1区SC-024実測図（1/40）

SC-025（Fig. 77・PL. 69）

SC-025は、C-10Gr.、標高50m付近にて、石室の壁の一部と考えられる列石が延長1.7mにわたり検出された。

付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土、石室の掘り方の状況は不明。遺存している壁を基準とすると、主軸はN-75°-Wである。

出土遺物はない。

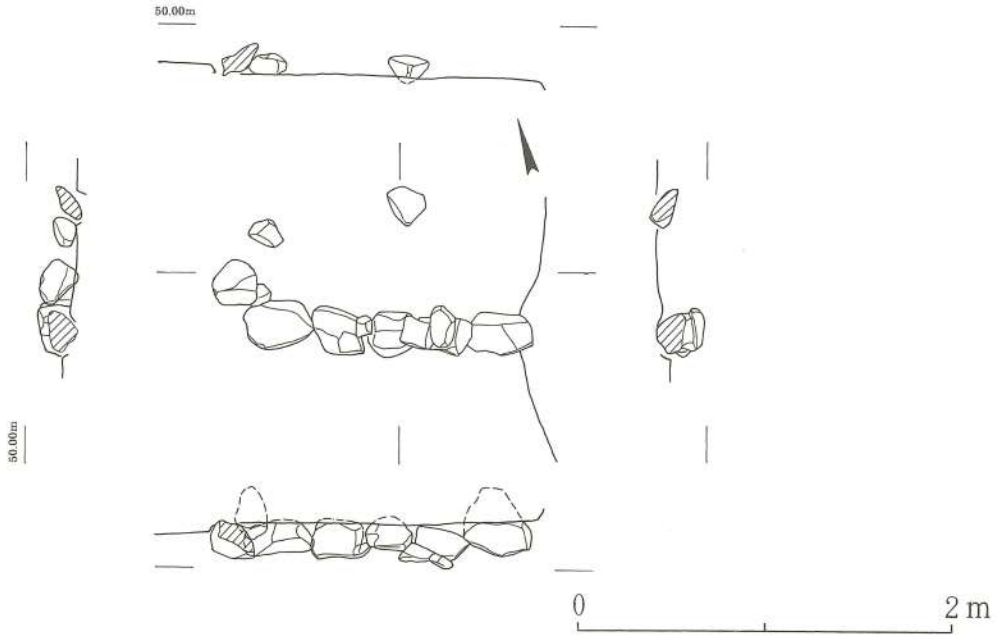


Fig. 77　青柳古墳群1区SC-025実測図（1/40）

SC-026（Fig.78・PL.69、70）

SC-026は、B-10Gr.にて、石室の北東コーナー部と考えられる部分の腰石のみが検出された。標高50m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土、石室の掘り方の状況は不明。周溝は石室の北側に全周の1/7程度が遺存する。

墳墓の形態や規模は、遺存している周溝から、周溝内法で直径7.0m程度の円形の墓墳であったことが推定される。周溝は、幅が検出面で1.3m～1.6m、底面で1.0m～1.2m、深さは0.3m～0.4m。

遺存している腰石の壁を基準とすると、主軸はN-89°-Eである。出土遺物もない。

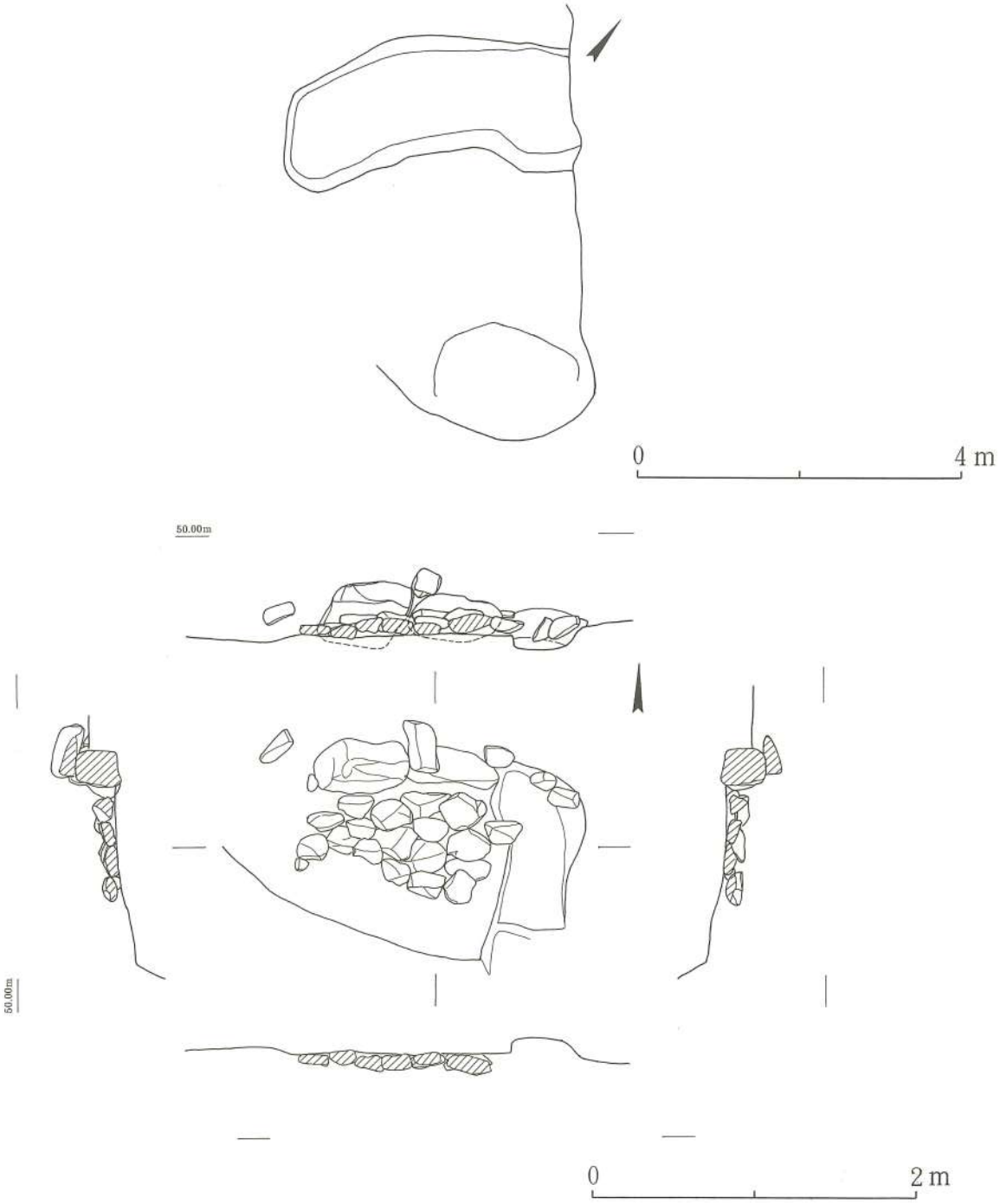


Fig.78　青柳古墳群1区SC-026実測図（1/80・1/40）

SC-027（Fig. 79・PL. 70）

SC-027は、D-13Gr.、標高49m付近にて、掘り方と礫床の一部が検出された。付近一帯が耕地として開かれたときに削平、破壊されたものと考えられ、墳丘、封土の状況は不明。

長さ1.8m、幅1.0m、深さ20cm弱の不整な楕円形の掘り方が遺存し、部分的に礫床の一部と考えられる敷石が残る。掘り方の長軸を基準とすると、主軸はN-70°-Eである。

出土遺物もない。

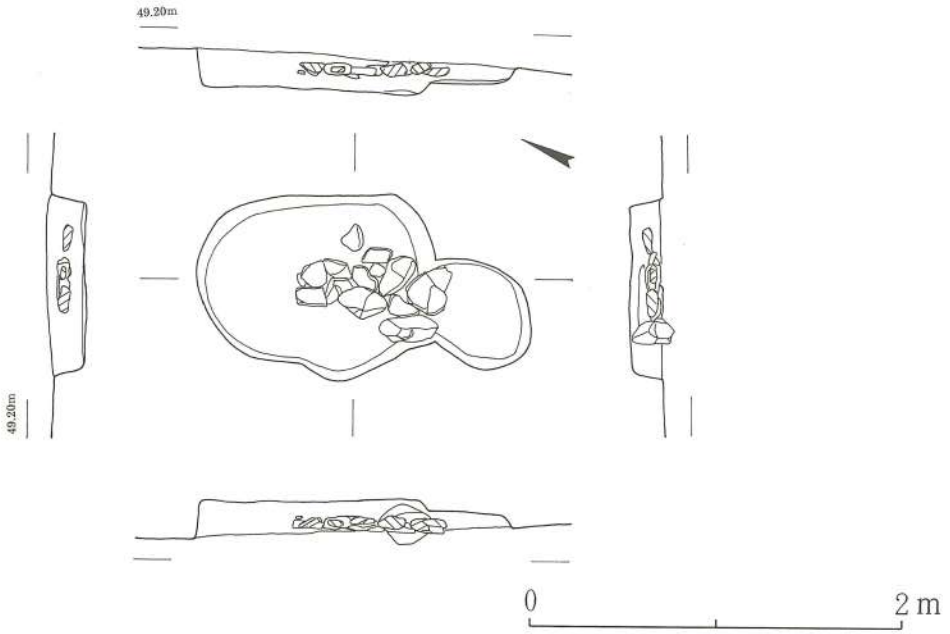


Fig. 79　青柳古墳群1区SC-027実測図（1/40）

SP-028（Fig. 80・PL. 70）

SP-028は、D-12Gr. で検出された土壙墓を内部主体とする円形周溝墓と考えられる墳墓で、標高49m付近に位置している。ある程度の削平は受けているものと考えられ、上部の施設の有無などは不明。主体部と周溝が遺存している。

周溝は内法で径4.7m×5.3mのやや不整な円形で、幅が検出面で0.3m～0.7m、底面で0.15m～0.55m、深さ0.2m～0.35m。断面は、「U」字形を呈す。

主体部と考えられる土壙墓は、長軸3.1m、短軸1.5mのやや不整な長方形に近い楕円形を呈し、深さは約0.5m。

木棺などの痕跡は認められなかった。主軸は、N-78°-E である。

時期が特定できるような遺物は出土しなかった。

註

1）各墳墓から出土した耳環については、その他の土器、石器などの出土遺物とは別に標本箱に一括保管していたが、現在、調査員のミスにより標本箱の所在が不明となっており、本報告書にて図、写真などを掲載し、詳細について報告すべきであったが、それができなかった。これらについては所在が判明し次第、調査員の責として、何らかの形で補遺していきたい。関係各位にはご迷惑をおかけすることとなったことについて、この場で深くお詫びを申し上げる次第である。

2）SC-005出土の鉄剣２口については、遺存状態が極めて不良で、現地にて取り上げる際に原状を損なわないよう努力したが、調査員の技術不足で、そのまま取り上げることができなかった。このため、本報告書にて図、写真などを掲載し、詳細について報告すべきであったが、それができなかった。

上記、２点について、関係各位にご迷惑をおかけすることとなった。この場で深くお詫びを申し上げる次第である。

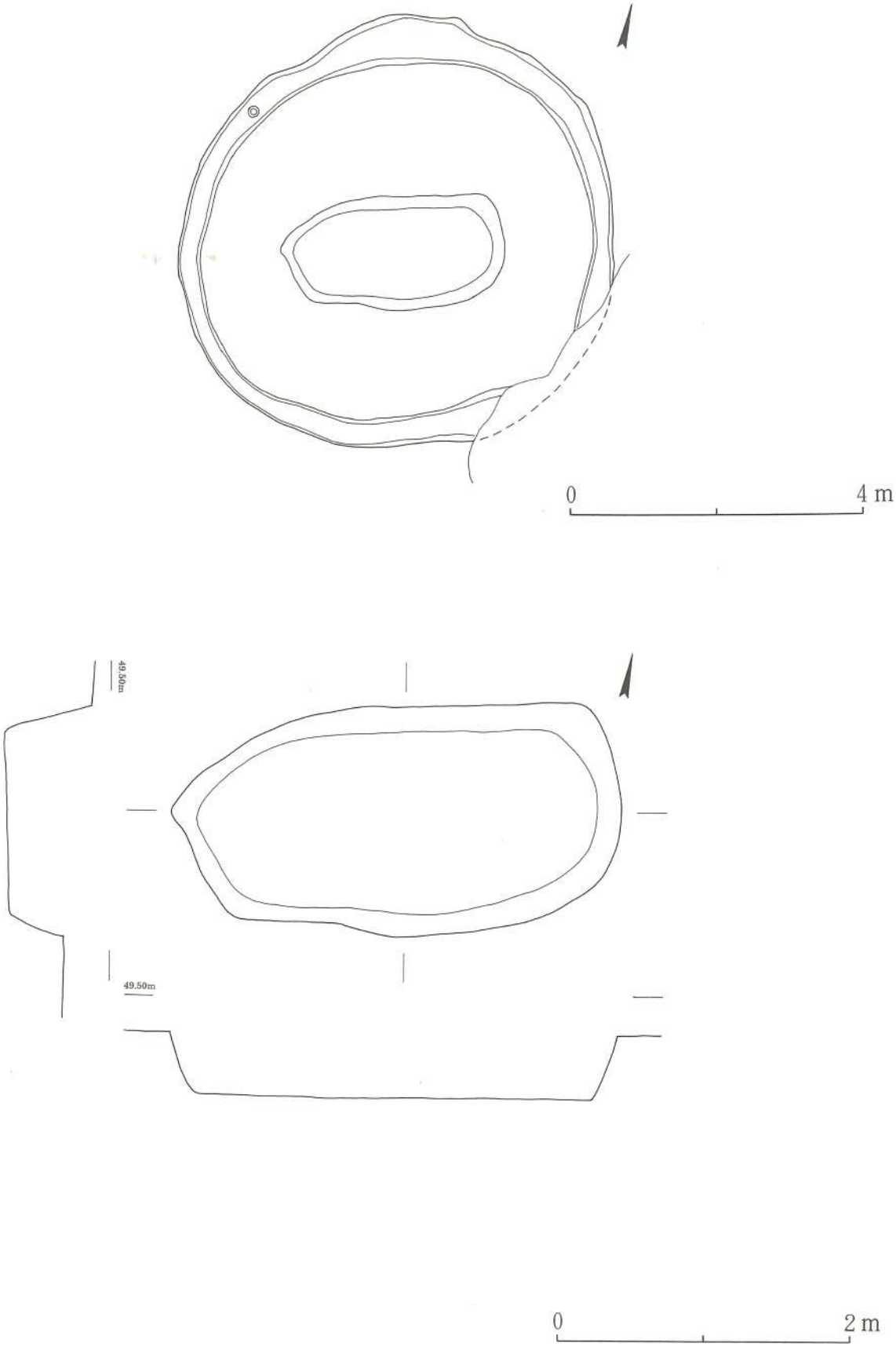


Fig. 80　青柳古墳群１区 SP-028実測図（１/80・１/40）

2 竪穴式住居址（Fig. 51、81・PL. 71）

今回の調査において、竪穴式住居址として取り扱った遺構は、SH-051、SH-065の２軒であった。両住居址ともに、町内では古手の土師器、須恵器がまとまって出土しており、古墳時代中期、５世紀代の所産になるものと考えられる。

SH-051（Fig. 81・PL. 71）

SH-051は、G-７Gr.で検出されたやや不整な方形の竪穴式住居址。住居の西側を後世の溝跡SD-052に切られている。規模は、遺存部分で一辺5.9m程度、床面積33.2㎡。主柱穴は４本。床面までの掘り込みの深さは、かなりの深度で後世の削平を受けたものと考えられ、平均で10㎝程度。主軸は、N-27°-Wである。

須恵器の壺、土師器の甕、壺、鉢、碗、坏、坏蓋、高坏などが出土している。

SH-065（Fig. 81・PL. 71）

SH-065は、E-12Gr.で検出された不正形の竪穴式住居址。平面プランは、住居の南側と西側の壁は直線で、北側と東側の壁は胴部の張りが強く張った台形に近いプランを呈し。規模は、東西長4.4m×南北長4.1m、床面積12.2㎡。主柱穴は４本。住居南東隅に貯蔵穴と思われる0.7m×0.5m、深さ20㎝の楕円形の土壙をもつ。床面までの掘り込みの深さは65㎝程度。主軸は、住居南壁を基準にするとN-６°-Wである。

3 土壙・その他（Fig. 51、82～85・PL. 72～74・Tab. ７）

今回の調査において、貯蔵穴など土壙として取り扱った遺構は25基であった。これらの土壙のうち、出土遺物などから時期が特定できる土壙は、縄文式土器を出土したSK-059、SK-061、SK-071、SK-075、SK-076、SK-077、古墳時代の土師器、須恵器などを出土したSK-055、SK-056、SK-057、SK-058、SK-069、SK-072、SK-073、SK-088などで、その他の土壙は、まとまった遺物がなく、時期を特定するまでには至らなかった。

また、今回土壙として取り扱った遺構のうち、SK-088は一辺約4.0mの方形のプランをもち、住居址の可能性が高いことを付記しておく。

これらの土壙のほかに溝跡も幾条か検出されているが、いずれも近世以降の耕作に伴い開削されたものであった。

以下、上記の土壙について、法量、出土遺物などを一覧表にまとめ報告としたい。

Tab. ７　青柳古墳群１区出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模（上段：上面、下段：底面、単位m・㎡）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-053	楕円形	1.70 1.42	1.32 1.12	0.12	1.3			
SK-054	不整形	1.52 1.41	1.34 1.22	0.17	1.4			
SK-055	不整形	4.30 4.08	2.85 2.70	0.23	8.3		縄文式土器鉢、 土師器甕	
SK-056	隅丸方形	4.10 3.84	3.50 3.38	0.39	11.2		土師器甕	

遺構番号	平面形態	規模（上段：上面、下段：底面、単位m・㎡）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-057	不整形	3.25 3.09	1.90 1.86	0.17	(4.1)		土師器碗	
SK-058	楕円形	2.75 2.47	1.40 1.25	0.30	2.4		縄文式土器鉢、土師器壺	
SK-059	不整形	4.10 4.06	3.80 3.76	0.07	12.8		縄文式土器鉢	
SK-061	不整形	2.00 1.92	1.00 0.86	0.09	1.4		縄文式土器鉢	
SK-069	不整形	7.94 7.72	2.8 2.7	0.22	15.4		須恵器坏、坏蓋、高坏	
SK-070	不整形	1.70 1.48	1.52 1.13	0.27	1.4			
SK-071	不整方形	1.16 0.60	1.02 0.56	0.46	0.2		縄文式土器鉢	
SK-072	不整形	1.22 1.14	0.83 0.74	0.06	0.6		土師器壺	
SK-073	不整形	0.95 0.74	0.93 0.63	0.37	0.4		須恵器甕	
SK-074	不整形	3.45 3.28	2.19 1.80	0.34	4.5			
SK-075	不整形	0.94 0.64	0.86 0.62	0.71	0.3		縄文式土器鉢	
SK-076	不整楕円形	1.62 1.44	1.02 0.87	0.15	1.0		縄文式土器鉢	
SK-077	不整形	2.7 2.1	2.30 2.16	0.31	(4.1)		縄文式土器鉢	
SK-078	不整形	3.00 2.72	1.64 1.20	0.24	3.2			
SK-079	不整円形	0.84 0.72	0.84 0.70	0.46	0.4			
SK-080	不整形	1.67 1.52	0.96 0.80	0.08	0.8			
SK-081	不整形	4.10 3.82	2.48 2.34	0.14	5.3			
SK-083	楕円形	1.00 0.74	0.88 0.68	0.18	0.4			
SK-084	楕円形	0.86 0.60	0.62 0.46	0.35	0.1			
SK-085	不整円形	0.72 0.60	0.66 0.50	0.42	0.2			
SK-088	正方形	3.95 3.68	3.90 3.70	0.35	12.9		土師器甕、壺	住居址の可能性大

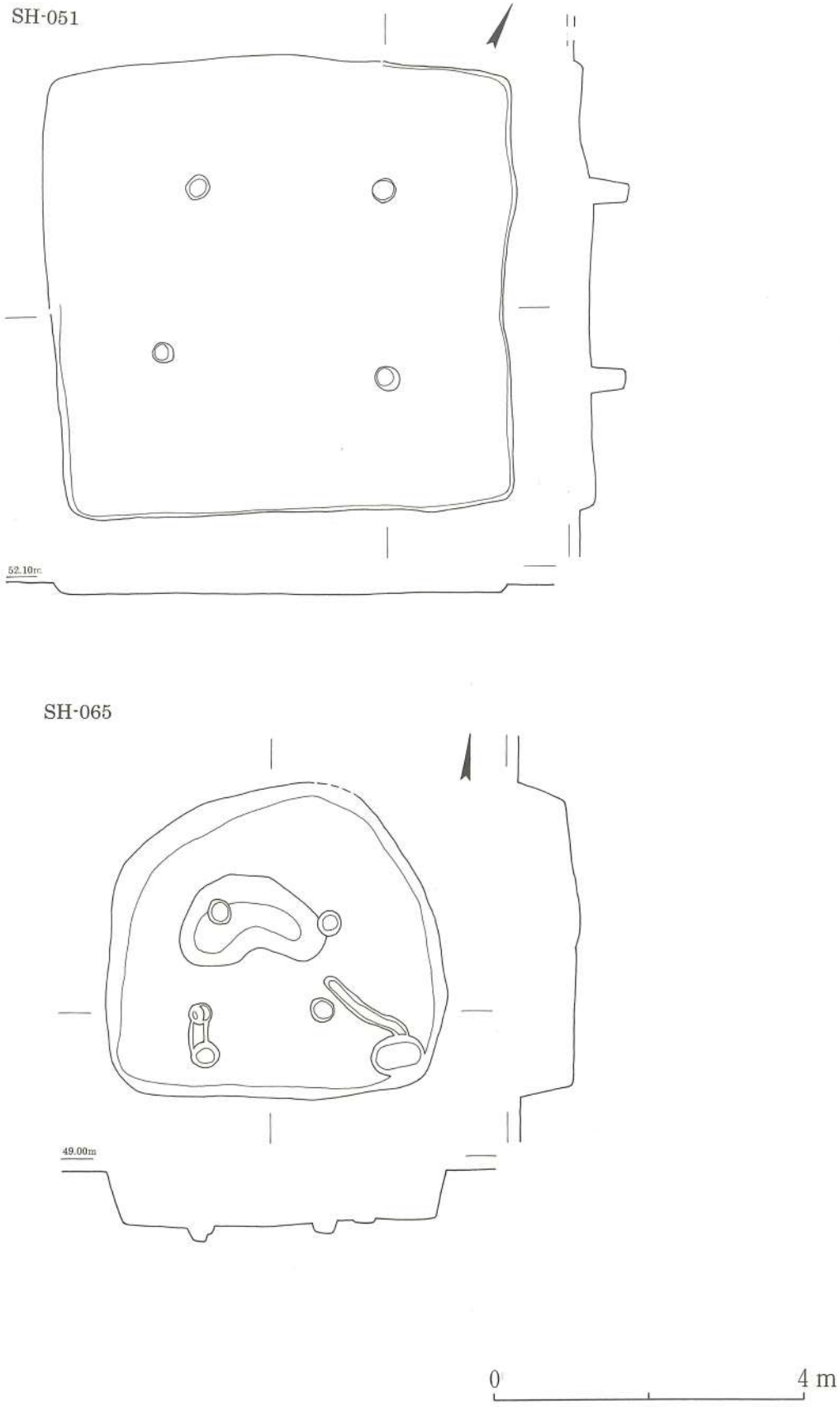


Fig. 81　青柳古墳群１区竪穴式住居址実測図　SH-051・SH-065（1/80）

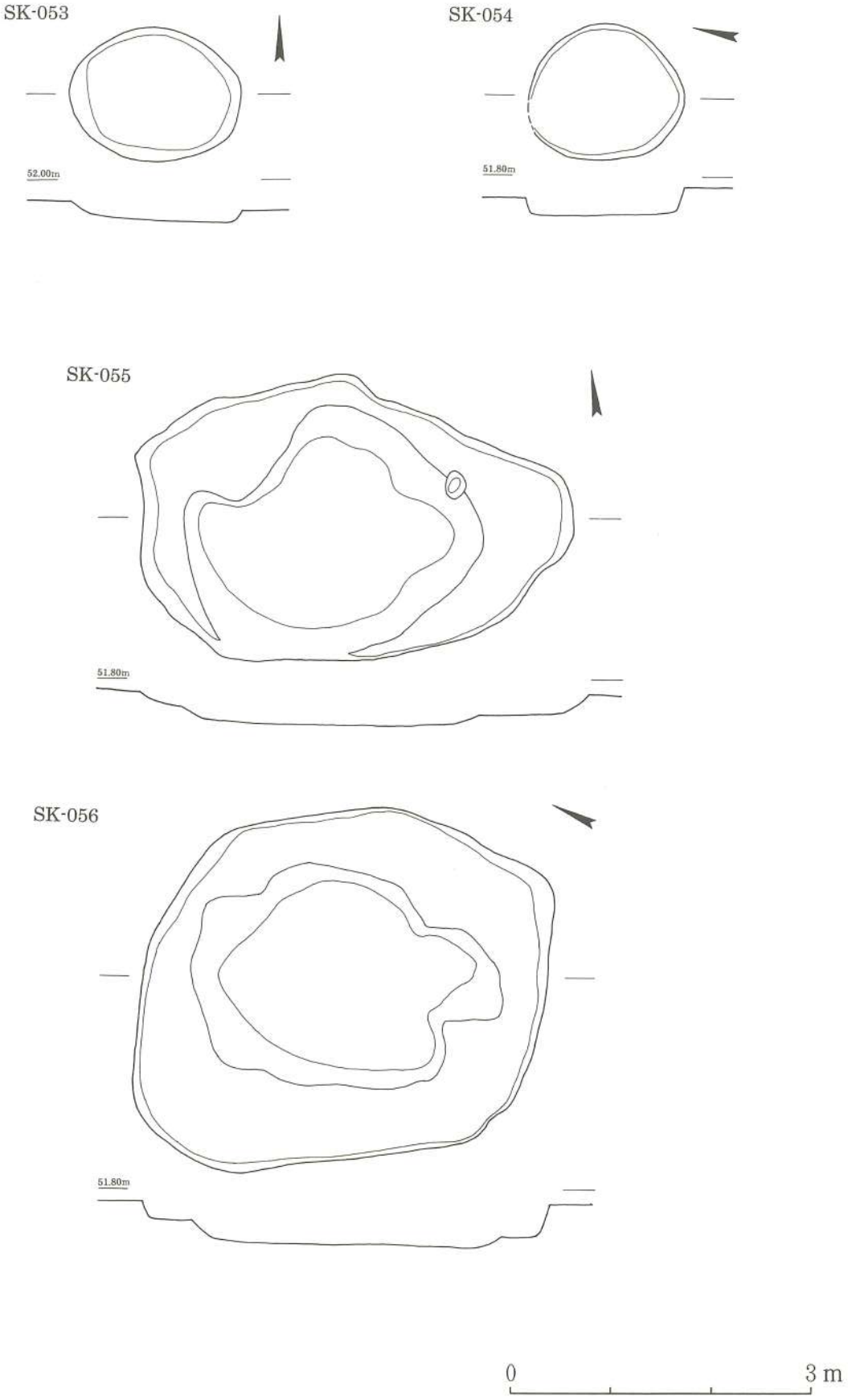


Fig. 82　青柳古墳群１区土壙実測図(1)　SK-053～SK-056（1/60）

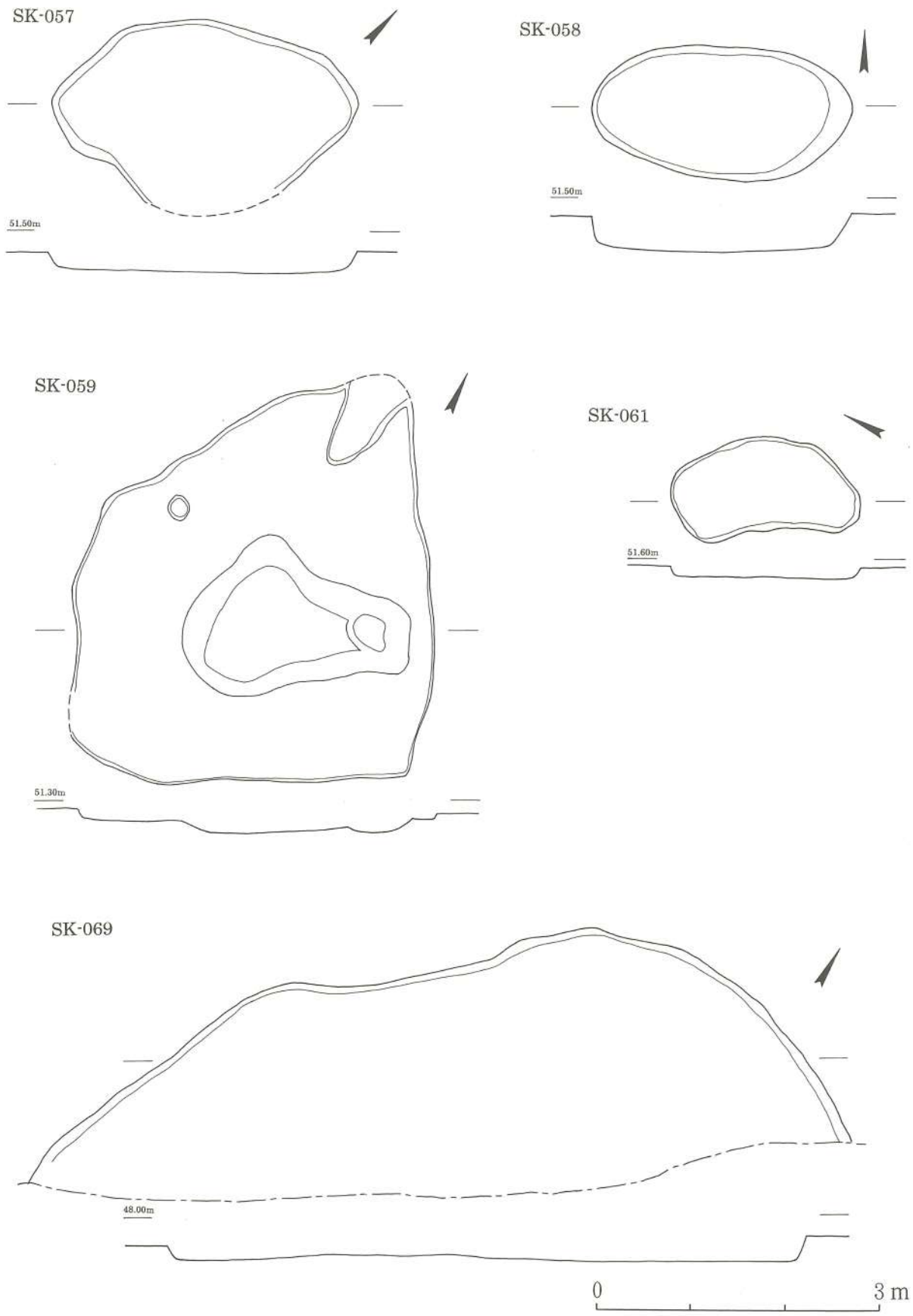


Fig. 83　青柳古墳群１区土壙実測図(2)　SK-057～SK-059・SK-061・SK-069（1/60）

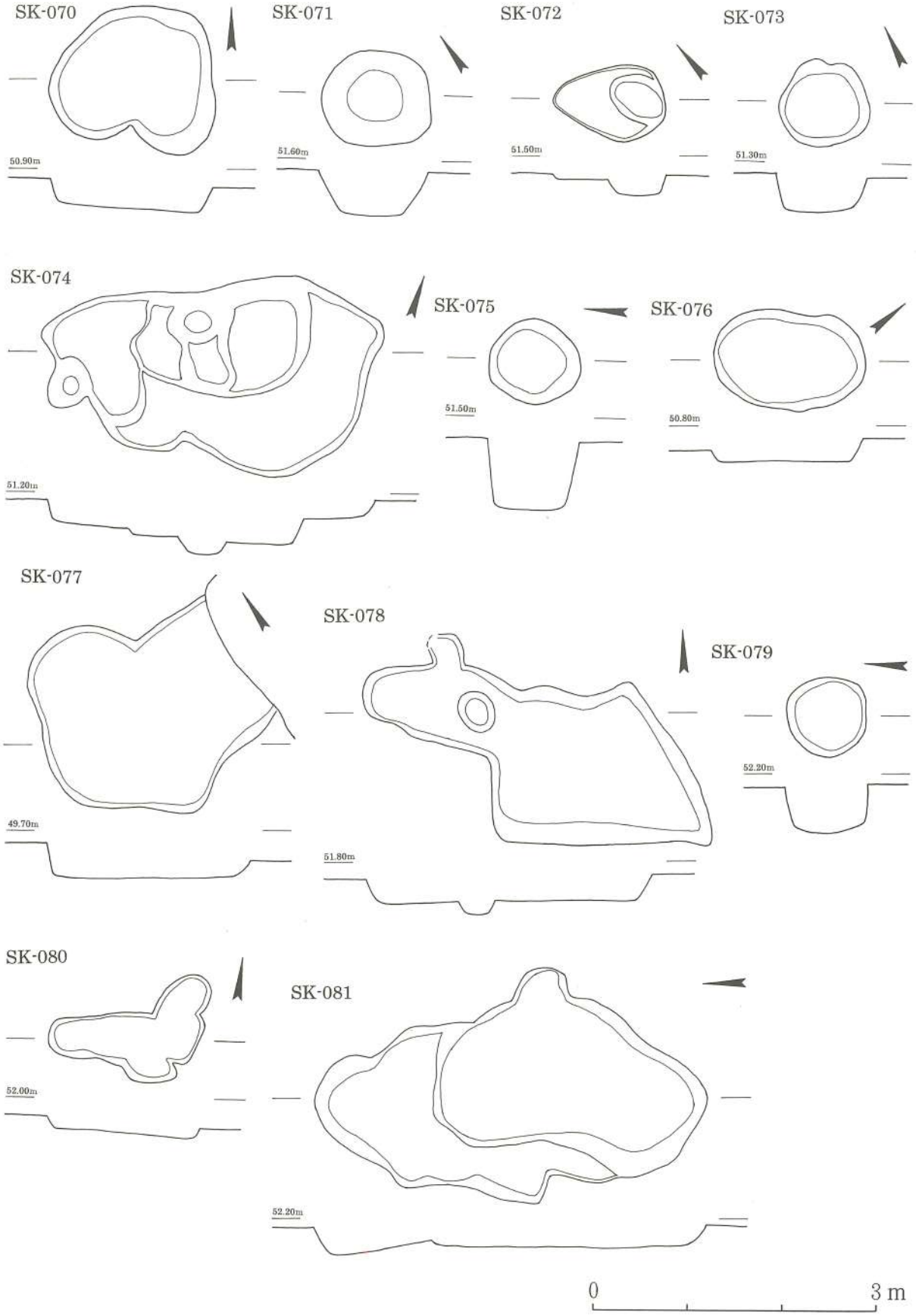


Fig. 84　青柳古墳群１区土壙実測図(3)　SK-070～SK-081（1/60）

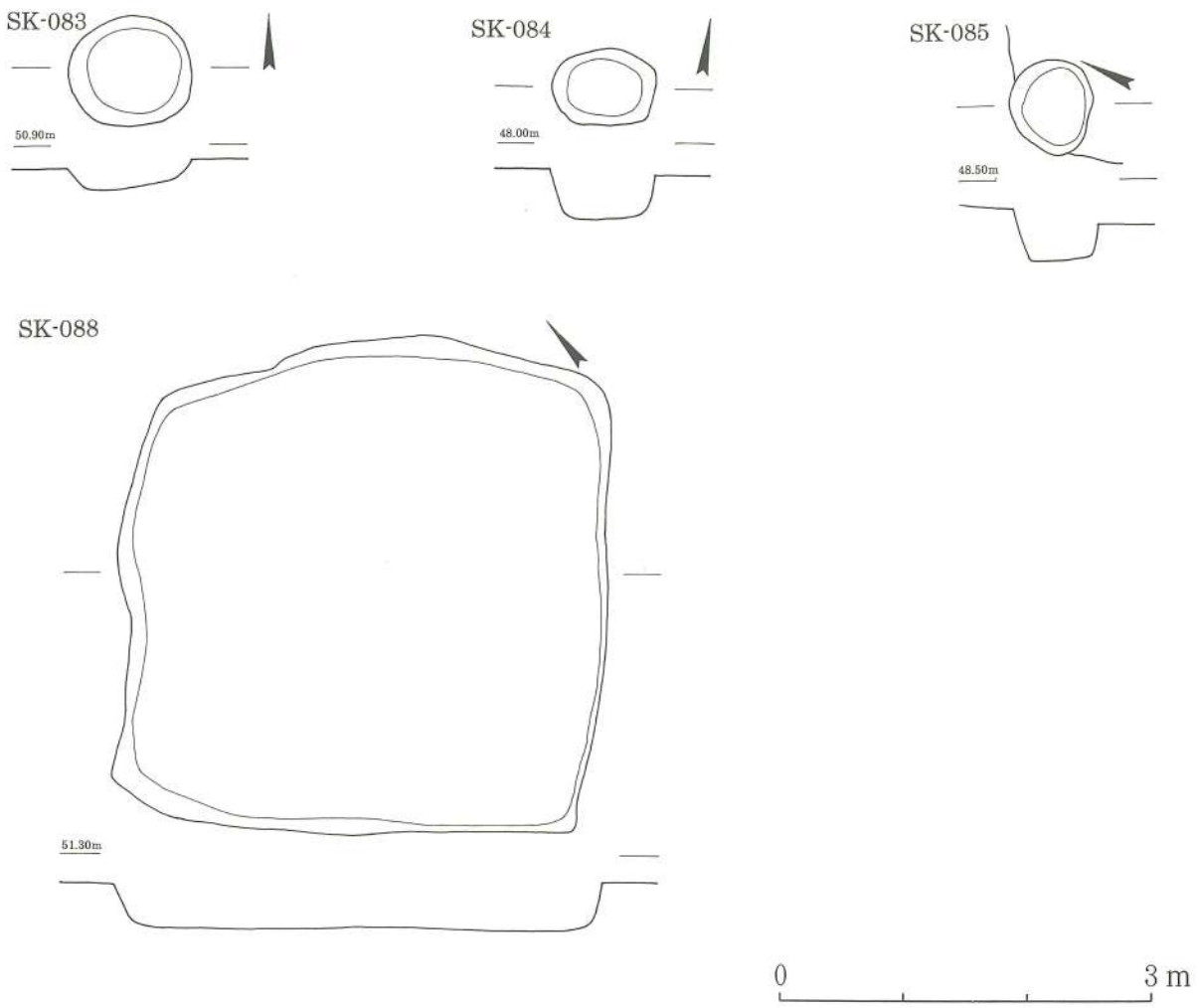


Fig. 85　青柳古墳群１区土壙実測図(4)　SK-083～SK-085・SK-088（1/60）

(2) **遺　物**（Fig. 86～98・PL. 75～99）

今回の調査では前述した墳墓、住居址、土壙などの遺構から、まとまった量の古墳時代中期の土師器、須恵器類が出土した。そのほか近世以降の耕作溝などと考えられる溝跡からも少量ではあるが遺物が出土している。

また、今回の調査では縄文式土器片も出土しているが、縄文式土器のみを出土した土壙以外にも各墳墓、住居址、溝跡から土師器、須恵器などの本来の遺物に混じり、少なからず出土しており、この一帯が耕地として開かれる以前は、今回検出された土壙のほかにも縄文時代の遺構がある程度存在していたものと考えられる。

以下、図示できる遺物について土器類などを遺構ごとに報告する。土器以外の石器などについては、章末に器種ごとに報告したい。

SC-001出土土器（Fig. 86、87・PL. 75～78）

１～４は、主体部出土。１、２、４は須恵器。１は坏蓋。天井部は丸みを帯び、体部が内湾しながら開き口縁部に至る。２は坏。口縁部が外側上方へ張り出し、内傾する短い受けがつく。４は甕。丸底で胴部中位に最大径をもち、外反しながら開く口縁部がつく。内外面に叩き目。

３は土師器の丸底壺。胴部上位がやや張りをもち、頸部がくびれ口縁が立ち上がるが、口縁端部を失っている。内外面ともにナデ。

5～28は周溝出土。5～22は須恵器。5～7は甕。5はやや尖り気味の丸底で肩部に張りをもち、頚部が「く」の字形にくびれ短い口縁が外傾し開く。内外面に叩き目、肩部と胴部中位にカキ目。6は大型甕。丸底で胴部上位に最大径をもち、頚部がくびれやや外反し開く口縁がつく。内外面に叩き目。7は丸底で胴部はややいびつな球形を呈し、外反し開く口縁がつく。内外面に叩き目を残し、肩部にカキ目。8、9は壺。底部はやや尖り気味の丸底で胴部は肩部の張りが強く、やや外反する口縁がつく。口縁部外面に櫛目。底面は回転ヘラケズリ。9は平底で胴部上位が内傾し、口縁部が外反し開く。同一個体と認められるが、口縁部と同は直接接合できなかった。胴部外面カキ目。10は平瓶。底部は平底で胴部上位が内湾し、丸みを帯びた天井部に至る。胴部天井部分が円盤で一旦閉塞された後、中心よりやや外によった位置に改めて口縁部が取り付けられている。胴部外面にカキ目を施した後に、胴部下位の部分にヘラケズリが施されている。11～20は坏。底面が丸みを帯び、口縁部はやや外側上方へ張り出し、内傾する短めの受けをもつ。底面には回転ヘラケズリ痕を残すものが多い。11～15、17は底面にヘラ描きの記号・符号をもつ。22は高坏。坏部口縁を失っている。中空の脚部は朝顔状に開く。坏部、脚部中位、裾端部に2条一単位の沈線がめぐる。22は瓶。胴部は中位に張りをもちややいびつな球形を呈し、口縁は朝顔状に大きく開く。遺存部に管を挿すために焼成前に穿孔された孔の一部がみえる。肩部上位に櫛描き波状文、口縁部の一部と胴部にカキ目をもつ。

23～28は土師器。23～25は高坏。23は坏部底面が丸みを帯び、体部はそのまま内湾しながら立ち上がり口縁に至る。脚部は裾部で緩やかに外反し端部が大きく開く。内外面ともにナデ。24は坏部底面が平坦で、体部との境界に稜をもち、体部が外傾し口縁に至る。脚部は裾部が「く」の字形に屈曲し開く。脚部内部はヘラ状の工具で粘土を抉り取っている。内外面ともにナデ。25は短い脚部で、裾部は一旦肥厚し「ハ」の字形に大きく開く。内外面ともにナデ。26は鉢。半球形の体部で頚部がくびれ、やや内湾し外傾する口縁がつく。内面に刷毛目を残し、外面ナデ。27は小型の台坏甕。台部は「ハ」の字形に短く開き、胴部両側面に把手をもち、短い口縁が外傾し小さく開く。内外面ともにナデ。28は甕。丸底で胴部はくびれることなく外反する口縁に至る。内面ナデ、外面ハケ目。

SC-002出土土器（Fig. 88・PL. 78）

29は弥生式土器。壺の胴部で内面にハケ目を残し、外面ナデ。遺存部外面は赤色塗彩。

30は縄文式土器。深鉢で口縁外面と下部に2条の刻み目凸帯がめぐる。

31は土師器碗。体部が内湾し立ち上がり直立する口縁に至る。内外面ともにナデ。

SC-003周溝出土土器（Fig. 88・PL. 79）

32は須恵器平瓶。底部は平底で胴部上位が内湾し、丸みを帯びた天井部に至る。胴部天井部分が円盤で一旦閉塞された後、中心よりやや外によった位置に改めて口縁部が取り付けられている。口縁部はやや外反し開く。胴部外面にカキ目。底部外周がヘラケズリによって面取りされている。

33は中世土器の擂鉢。平底で体部が直線的に外傾し口縁に至る。口縁の一部分を外へつまみ出すことによって注ぎ口を作り出している。内面に粗い擂り目をもつが、底部に近い部分はほとんど磨耗している。

34は尾前系の陶器の擂鉢。胎土は暗赤褐色を呈す。

SC-004出土土器（Fig. 88・PL. 79）

35は須恵器甕。球形の胴部をもつ。内外面に叩き目。

36～38は土師器。36は丸底壺。球形の胴部が頚部で「く」の字形にくびれ、口縁はやや内湾しながら開き端部が小さく外反する。内外面ともにナデ。37、38は甕。頚部が「く」の字形にくびれ、直線的に外傾する口縁がつく。37は内面ヘラケズリ、外面ナデ。38は口縁内外面にハケ目。

SC-005出土土器（Fig. 88・PL. 79）

39～42、45は土師器。39は鉢。丸底で体部部は内湾しながら立ち上がり、口縁部がやや外反外傾する。内面ナデ、体部外面ハケ目。40～42は碗、坏。40は半球形の深い体部で、口縁が小さく外傾する。41は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁は直立する。42は口縁が内湾する。いずれも内外面ともにナデ。45は甕の口縁。

43は須恵器。甕類の口縁部。

44、45～48は縄文式土器。44は浅鉢。46は押型文土器。47、48は条痕文が施され、48は沈線文をもつ。

SC-007出土土器（Fig. 88）

49、50は、土師器坏。49は蓋で、体部と口縁部の境界に段をもち、口縁部が外傾しやや開く。50は坏。口縁の外側への張り出しは水平で小さく、内傾する受けがつく。

SC-009出土土器（Fig. 89・PL. 79）

51は土師器の甕。外反する口縁部。内外面ともに一部にハケ目。

52～55は縄文式土器。52は鉢。53は外面条痕文、口縁端部に刻み目をもつ。54は鉢類の口縁部。55は押型文土器。

SC-010周溝出土土器（Fig. 89・PL. 80）

56～58は条痕文をもつ縄文式土器。58は沈線文を配す。59土師器甕の口縁。頚部はほとんどくびれず、口縁が「く」の字形に外傾し開く。内外面ともにナデ。9、10は須恵器。9は広口壺。10は高台坏、底部は平坦で体部は直線的に外傾する。底面外周より内側に「ハ」の字形に開く太く短い高台がめぐる。

SC-011周溝出土土器（Fig. 89・PL. 80）

60～63は縄文式土器。60は鉢。61は条痕文土器。62は細隆起線文土器。口唇端部に刻み目。63は刻み目凸帯文土器。

SC-012出土土器（Fig. 89～91・PL. 80～86）

64～108は石室および前提部出土。64～102は須恵器。64～79は坏。底面が丸みを帯び、口縁部はやや外側上方へ張り出し、内傾する受けをもつ。底面には回転ヘラケズリ痕を残すものが多い。77～79は底面にヘラ描きの記号・符号をもつ。80～93は坏蓋。天井部は丸みを帯び、体部が内湾しながら直立又はやや開く口縁部に至る。94～97、99は甕または壺。94～97は口縁部。99は球形に近い胴部に直立外反する口縁がつく。胴部内外面ともに叩き目。98は瑳。底面はやや平坦で球形の胴部、長い頚部は開きながら口縁に至る。胴部上位に斜め上方に管を差し込むための径1.2㎝の孔が焼成前に穿孔されている。頚部と胴肩部に細かい櫛描波状文がめぐる。100は提瓶。胴部の正面観は正円に近く、側面観は成形時の底面が平坦で、上面は緩やかなアールをもつ。胴肩部に提げるた

めの把手をもつ。口縁部は外反しながら開き端部は玉縁状を呈す。胴部上面にカキ目。101、102は壺。扁平な球形の胴部に、101は内傾する短い口縁が、102は直立しやや外反する長めの口縁がそれぞれつく。いずれも底面はヘラケズリ。101は胴部に、102は口縁下部にカキ目をもつ。

103、104、107、108は土師器。103、108は高坏。103は体部が大きく開く坏部。外面に2条沈線がめぐる。108は坏部底面が平坦で、体部との境界に稜をもち、体部が外傾し口縁に至る。脚部は裾部が「く」の字形に屈曲し開く。いずれも内外面ともにナデ。104は甕などの口縁部。口縁端部上面に櫛描文施文具による刺突文をもつ。107は坏。底面は平底に近く、体部は直線的に外傾し口縁端部がわずかに内湾する。内外面ともにナデ。

105、106は縄文式時の深鉢破片で、いずれも焼成後に穿孔された補修孔と思われる小孔をもつ。

109～118は周溝出土。109～114は須恵器。109～113は坏。底面が丸みを帯び、口縁部はやや外側上方へ張り出し、内傾する受けをもつ。底面には回転ヘラケズリ痕を残すものが多い。114は坏蓋。天井部は丸みを帯び、体部が内湾しながら直立する口縁部に至る。

115～118は土師器。115、116は坏。115は口縁部がやや外側上方へ張り出し、内傾する受けをもつ。116は口縁部の外への張り出しはほとんどなく、内傾する受けをもつ。底面ヘラケズリ。117は壺の肩部。肩部は張りが強く、2条の沈線がめぐる。118は壺または瓶類の口縁部。

ST-017出土土器（Fig. 91、92・PL. 86～88）

119～127は石室出土。119～121、127は須恵器。119、120は坏。底面が丸みを帯び、口縁部はやや外側上方へ張り出し、内傾する短い受けをもつ。底面には回転ヘラケズリ痕を残す。いずれも底面にヘラ描きの記号・符号をもつ。121は瓶。丸底で胴部は肩が張りややいびつな球形を呈す。長い頸部は開きながら口縁に至る。胴部上位に斜め上方に管を差し込むための径1.0cmの孔が焼成前に穿孔されている。底部外面回転ヘラケズリ。127は坏蓋。天井部は丸みを帯び、体部が内湾しながら口縁部に至る。天井部に扁平なつまみがつく。上面にヘラ描きの記号・符号をもつ。

122～126は土師器。122、125は甕または壺。122は胴部が直立し、頸部のくびれをもたず口縁に至る。口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。125は頸部が「く」の字形にくびれ口縁は直線的に外傾し開く。いずれも内外面ともにナデ。123、124は高坏。123は坏部底面が丸みを帯び、体部はそのまま内湾しながら立ち上がり口縁に至る。脚部は裾部が緩やかに外反し端部が開く。内外面ともにナデ。脚内部を除き赤色塗彩。124は坏部底面が平坦で、体部との境界に稜をもち、体部が外反外傾し口縁に至る。脚部は裾部が緩やかに外反し端部が開く。内外面ともにナデ。126は坏蓋。天井部は丸みを帯び、体部が内湾しながら直立する口縁部に至る。上面にヘラ描きの記号・符号をもつ。内外面ともにナデ。

128～132は周溝出土。いずれも須恵器。128～131は坏蓋。128、130は天井部が丸みを帯び、体部が内湾しながら口縁部に至る。天井部に扁平なつまみがつく。つまみ周辺にカキ目。129は天井部が平坦で体部の肩が張り直線的な口縁部がやや開く。131は体部が傘状に開き、口縁内面に身を受けるための外反内傾するかえりをもつ。131は高坏。坏部底面はやや丸みを帯び、体部との境界に段をもつ。体部は直線的に外傾し口縁に至る。脚部は裾部が緩やかに外反し端部が開く。脚部中位に沈線がめぐる。

SC-020出土土器（Fig. 92・PL. 88）

133、134は土師器坏、碗。133は丸底で体部が内湾しながら立ち上がり、口縁がさらに内湾する。134は丸底で

体部は半球形を呈し深く、口縁端部が小さく外傾する。いずれも内外面ともにナデ。

SC-021周溝出土土器（Fig. 92・PL. 88、89）

135～139はすべて須恵器。135～137は坏。135、136は底面が丸みを帯び、口縁部はやや外側上方へ張り出し、内傾する受けをもつ。底面には回転ヘラケズリ痕を残す。137は丸底で体部が内湾しながら立ち上がり口縁に至る。口縁端部内側つまみ上げ、小さい受けを作り出している。底面は回転ヘラケズリ。138、139は坏蓋。天井部が丸みを帯び、体部が内湾しながら口縁部がやや開く。

SC-023出土土器（Fig. 92、93・PL. 89～91）

140～150は石室出土。140～145は縄文式土器。いずれも鉢類の破片。140は棒状工具の先端を押圧したような円形の押圧文がみえる。143～145は条痕文をもつ。

146～150は土師器。146、147は甕。頸部が「く」の字形にくびれ、146は口縁が外傾し、147は口縁が外反する。

148～150は坏。いずれも丸底で体部が内湾しながら立ち上がり、口縁がさらに内湾する。内外面ともにナデ。

151～166は、周溝出土。151～159、161～166は須恵器。151～152は坏。151は底面が平坦で、口縁の外への張り出しが小さく外反内傾する小さな受けをもつ。152は体部の腰の張りが強く、口縁部は外側やや上方に張り出し内傾する受けがつく。153、154は坏蓋。153は体部が浅く、口縁内面の身を受けるためのかえりは小さく鈍い。154は天井部が丸みを帯び、体部が内湾しながら口縁部がやや開く。155～159は高坏。155～158はほぼ同一形態の高坏で、坏部は丸底で深く、口縁部は外側やや上方に張り出し、やや内傾する高いシャープな受けがつく。脚部は「ハ」の字形開き、裾端部が内湾する。脚部に四角形の透かしを4単位もつ。159は坏部底面が丸みを帯び、体部が内湾しながら立ち上がり口縁が外傾する。体部外面に2条の断面三角形の凸帯がめぐる。脚部は外反し「ハ」の字形開き、裾端部が内湾する。脚部に四角形の透かしを4単位もつ。161は瓶。胴部は肩部が張った丸底で頸部は短く外傾し開き、やや内湾する口縁がつく。胴部上位に斜め上方に管を差し込むための径1.5cmの孔が焼成前に穿孔されている。口縁部、頸部に細かな櫛描波状文がめぐる。胴部にはハケ目が残る。162～166は甕、壺類。162、163は口縁部。164は底部が尖り気味の丸底で、胴部は肩が張り、外反し開く口縁がつく。肩部にカキ目、胴部内外面ともに叩き目をもつ。底部は焼成後に打ち欠かれ径5cm程の不整円形の穴をもつ。165は広口の短頸壺。底部は平底で胴部は肩が張り、頸部がすぼまり直立する短い口縁がつく。胴部両側面に四角に張り出す把手をもち、把手には紐などを通すための径6cm程の孔が上下に貫通している。166は大型の甕。丸底で胴部は肩が張り、外反し開く口縁がつく。内外面ともに叩き目。

160は土師器高坏の脚部。キャブは「ハ」の字形に開き裾部で屈曲し端部が大きく広がる。

SC-024出土土器（Fig. 93・PL. 91）

167～173は縄文式土器。いずれも鉢類。167、168は粗製の深鉢で条痕文をもつ。169、171は補修孔がみえる。170は深鉢。頸部が外反し直立する短い口縁がつく。口縁外面に2条の沈線がめぐる。173は丸底の鉢。体部が内和紙ながら立ち上がり、内湾し外傾する小さな口縁がつく。

SC-025出土土器（Fig. 94・PL. 91）

174、175は縄文式土器。いずれも鉢類。174は浅鉢で大きく開く体部に短い口縁が直立する。175は外傾し開く

体部で口縁がやや外反する。

SC-026出土土器（Fig. 94・PL. 91）

176、177は縄文式土器。いずれも鉢類で条痕文をもつ。

SH-051出土土器（Fig. 94、95・PL. 91～93）

176は須恵器壺。底部は丸底で胴部上位が張り、口縁部は外傾し開く。口縁と頸部の境界に段をもち、段の上部に沈線が1条めぐる。

179～190は土師器。179～182は甕または壺。179は球形の胴部で頸部が「く」の字形にくびれ外傾する口縁がつく。口縁部内外面ともにハケ目、胴部内面ヘラケズリ、外面ハケ目。180はやや長胴で頸部が「く」の字形にくびれ外反する口縁がつく。内面ヘラケズリ、外面ハケ目。182は丸底で頸部のくびれは小さく口縁がやや外反し開く。外面ハケ目。181は壺。丸底で胴部中位が張り、頸部は「く」の字形にくびれ外傾する短い口縁がつく。内面ヘラケズリ、外面ハケ目。183、184は鉢。183は半球形の胴部が上位でくびれ「く」の字形に外傾する短い口縁がつく。内面ナデ、外面ヘラケズリ。184は丸底の鉢で体部が内湾しながら立ち上がり口縁部に至る。内面ナデ、外面ヘラケズリ。185～187は碗、坏類。185は碗。丸底で体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部が小さく外傾する。内面ナデ、外面ハケ目。186は坏。底面は丸みを帯び、体部が内湾しながら立ち上がり口縁は内傾する。内外面ともにナデ。187、189、190は高坏。187、189は高坏の坏部。187は底面は丸みを帯び、深く、底面と体部の境界に稜をもつ。体部は外反外傾し開き口縁に至る。189は体部が深く、底面と体部の境界に稜をもつ。体部は内湾外傾し口縁が外反し開く。190は脚部。遺存部に径0.8cm程の円形透かしをもつ。189と190は同一個体の坏部と脚部と推測されるが直接接合はできなかった。高坏はいずれも内外面ともにナデ。188は坏蓋。天井部は丸みを帯び、体部が内和紙ながら開き口縁に至る。内外面ともにナデ。

191～196は縄文式土器。191～193は押型文土器。194、195は撚り糸文をもつ。196は鉢で体部の張りが強く頸部は外反し直立する短い口縁がつく。

SD-052出土土器（Fig. 95・PL. 93、94）

SD-052出土遺物のうち、ここでは縄文式土器についてのみ報告したい。197～199、201～205は条痕文をもつ。200は押型文、201は網目状の撚り糸文？をもつ。206は浅鉢。

SK-055出土土器（Fig. 95・PL. 94）

207、208は縄文式土器。207は、太目の沈線の間に爪形の刻み目文をもつ。208は口縁端部にきざみ目をもち、下部に沈線がめぐる。

209は土師器の甕。肩部は丸く、頸部が「く」の字形にくびれやや外反外傾する口縁がつく。内面ハケ目、外面ナデ。

SK-056出土土器（Fig. 96・PL. 94）

210は土師器の甕。底部が丸底で、胴部はやや縦長の球形を呈す。頸部が「く」の字形にくびれ外傾する口縁がつく。外面ハケ目。

SK-057出土土器（Fig. 96・PL. 94）

211は土師器の碗。丸底で体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部が小さく外傾する。内面外面ともにナデ。

SK-058出土土器（Fig. 96・PL. 94）

212は土師器の壺。体部は球形を呈し、頸部が「く」の字形にくびれやや内湾外傾する口縁がつく。口縁部内外面ともにハケ目。胴部内面ヘラケズリ、外面ハケ目。

213～216は縄文式土器。213、214は浅鉢。215、216は押型文土器。

SK-059出土土器（Fig. 96・PL. 94）

217～223は縄文式土器。217～220は深鉢。217、218は条痕文をもつ。221～223は浅鉢の口縁部。

SD-060出土土器（Fig. 96・PL. 94、95）

224～231は縄文式土器の鉢類。224～225は鉢の口縁部。227、228は深鉢の胴部片で条痕文をもつ。229～231は深鉢。229はやや内湾する口縁が直立し、口縁と胴部の境界に沈線がめぐる。230は口縁部に「W」字形の突起をもつ。231は無文で寸胴の深鉢。

232、233は土師器。232は台部。外面ヘラケズリ。233は碗。体部が内湾しながら立ち上がり直立する口縁に至る。内面ナデ、外面ハケ目。

SK-061出土土器（Fig. 97・PL. 95）

234、235は縄文式土器。深鉢胴部破片で条痕文をもつ。

SD-062出土土器（Fig. 97・PL. 95）

236～238は縄文式土器深鉢。236、237は胴部破片で条痕文をもつ。238は頸部がくびれ内湾する口縁がつく。

239は土師器丸底壺。やや扁平な胴部で頸部が「く」の字形にくびれ外傾する短い口縁がつく。内面ナデで指頭圧痕を残す。外面ハケ目。

SH-065出土土器（Fig. 97・PL. 95、96）

240～247は土師器。240、242は小型丸底壺。いずれも胴部はやや扁平な球形で、頸部が「く」の字形にくびれ、240は直線的でやや外傾する口縁が、242はやや内湾外傾する口縁がつく。口縁部と胴部外面にハケ目を残す。241、243、244は甕。241、243は丸底で球形に近い胴部をもち、241はやや内湾外傾する口縁が、243は直線的に外傾する口縁がつく。いずれも胴部は内面ナデ、外面ハケ目。241は胴部中位側面に径3㎝程の孔が焼成後、穿孔されている。244は胴部下位に最大径をもつ。頸部は「く」の字形にくびれ、直線的に外傾する口縁がつく。口縁部内面ハケ目、胴部は内面ナデ、外面ハケ目。245、246は高坏。245は脚部。裾部が屈曲し開く。外面ナデ。246は坏部。底面は平坦で底面と体部の境界に段をもち、体部は直線的に外傾し開き口縁に至る。内外面ともにナデ。247は碗。体部が内湾しながら立ち上がり口縁は内傾する。内外面ともにナデ。

SK-069出土土器（Fig. 97・PL. 96、97）

248～257は須恵器。248、249は高坏。248は坏部底面が丸みを帯び、体部は内湾しながら立ち上がり口縁端部

がやや外反する。体部外面に１条の沈線がめぐる。脚部は緩やかに外反しながら開く。小さな三角形の透かしが１単位遺存する。透かし下部に１条の沈線がめぐる。249は脚部。緩やかに外反し広がり裾端部は玉縁状を呈す。縦長の四角形の透かしが推定４単位。250は　口縁部。251は甕の口縁部。二重口縁を呈し、頸部に櫛描波状文をもつ。252～254は坏蓋。天井部は丸みを帯び、口縁部と体部の境界に稜をもつ。252、253は口縁がほぼ直立し、口縁端部はシャープに面取りされている。254は口縁部がやや開く。いずれも天井部外面は回転ヘラケズリ。255～257は坏。いずれも丸底の底部で体部は内湾し立ち上がり、口縁部が外側へ張り出し、内傾するものの高い受けをもつ。256は受け端部がシャープに面取りされている。

SK-071出土土器（Fig. 98・PL. 97）

258～260は縄文式土器鉢類。258は肩部屈曲部に細かい刻み目をもつ。259は口縁に粘土を巻き付けた突起をもつ。260は条痕文をもつ。

SK-072出土土器（Fig. 98）

261は土師器丸底壺。いずれも胴部は球形に近く、頸部が「く」の字形にくびれ、240は直線的に外傾する短い口縁がつく。内外面ともにナデ。

SK-075出土土器（Fig. 98・PL. 97）

263～271は縄文式土器鉢類。263～266は条痕文をもつ。268は補修孔をもつ。

SK-076出土土器（Fig. 98・PL. 97）

272は縄文式土器深鉢。刻み目凸帯文土器。

SK-077出土土器（Fig. 98・PL. 97）

273～279は縄文式土器鉢類。273～278は条痕文をもつ。279は浅鉢の体部。

SK-088出土土器

280～282は土師器。280は甕。底部が丸底で、胴部はやや縦長の球形を呈す。頸部が「く」の字形にくびれ外傾する口縁がつく。外面ハケ目。胴部下位側面に径１㎝程の孔が焼成後、穿孔されている。281、282は小型丸底壺。281は胴部が球形を呈す。内面ナデ、外面ハケ目。282は胴部がやや扁平な球形で、頸部が「く」の字形にくびれ、やや内湾外傾し端部がやや外反する広い口縁部がつく。内外面ともにナデ。

土製品・石器・鉄器等（Fig. 98・PL. 98、99）

今回の調査ではこれまで報告してきた土器群のほかにも土製品や石器、石製品、鉄器などが少量ではあるが出土している。ここでは、出土遺構、法量・材質などを下記一覧表にまとめ報告に代える。

土製品（Fig. 98・PL. 98）

283は、やや不整な円錐台形を呈す紡錘車。中心に径３㎜程度の孔が縦に貫通している。284は、土製円盤？中

心に径２㎜程度の孔が縦に貫通している。両面および側面に焼成前の線刻文が描かれている。他に出土した縄文式土器と胎土が酷似している。

石器・石製品（PL. 98）

285は、石槍。両側辺に大まかな調整を加え刃部を作り出している。286～290は石斧。286、287は打製石斧。287は磨製石斧。基部を欠く。288～290は太型蛤刃石斧。289は先端を、290は基部と先端を欠く。291、292は石匙。293は磨石。294、295は叩き石。296は舌状の磨製石製品で用途不明。297～299は砥石。299は携帯用か、上端に径５mm の孔が穿孔されてている。

鉄器（PL. 99）

いずれも鉄鏃。300は束の鉄鏃の茎部分が錆びて一塊となっている。10本が確認できる。それぞれは、断面が３㎜×４㎜～４㎜×７㎜の四角形を呈す。301は基部が失われ茎の有無は不明。302は基部に茎が折れた紺瀬が残る。303～305は茎。306～308は細身の鉄鏃。いずれも茎が途中で折れている。

Tab. 8　青柳古墳群１区出土土製品・石器・鉄器等一覧表

遺物番号	種　類	出土遺構	法　量（cm・g）				材　質	備　考
			長　さ	幅	厚　さ	重　量		
283	土製紡錘車	F-７Gr.	3.7	3.5	2.7	42.5	―――	
284	土製円盤？	C-10Gr.	6.5	6.4	2.2	112.2	―――	
285	石槍	F-７Gr.	12.2	3.7	1.1	60.2	サヌカイト	
286	石斧	SC-001周溝	9.8	5.4	1.8	133.2	砂岩質	
287	石斧	不明	※9.0	5.2	3.0	※209.6	サヌカイト	基部欠損
288	石斧	SH-051	18.4	7.5	4.8	1,160	玄武岩系	
289	石斧	不明	※13.5	7.7	4.2	※740	玄武岩系	刃部欠損
290	石斧	不明	※10.3	6.8	4.6	※578.9	玄武岩系	基部、刃部欠損
291	石匙	G-８Gr.	5.4	2.8	0.5	7.4	サヌカイト	
292	石匙	不明	※7.5	5.3	0.6	※24.9	サヌカイト	刃部一部欠損
293	磨石	不明	9.6	8.5	3.9	532.8	花崗岩質	
294	叩き石	ST-003	9.5	9.0	4.8	620	砂岩質	
295	叩き石	不明	5.3	5.0	3.3	113.5	砂岩質	
296	不明	ST-003	※10.8	4.5	1.2	※85.5	砂岩質	端部欠損
297	砥石	SC-001周溝	※5.2	3.0	2.5	※65.2	砂岩質	両端欠損
298	砥石	SC-001	11.3	3.7	3.3	276.4	泥岩質	
299	砥石	SK-069	13.2	4.7	1.3	119.6	泥岩質	携帯用
300	鉄鏃茎	SC-005	※14.5	5.2	2.2	605	―――	茎10本束
301	鉄鏃	SC-002	※5.1	2.7	0.5	※10.1	―――	基部欠損
302	鉄鏃	SC-002	※3.7	2.1	0.2	※5.0	―――	茎欠損
303	鉄鏃茎	SC-002	※4.0	0.8	0.3	※3.0	―――	
304	鉄鏃茎	SC-002	※4.0	※0.4	0.3	※2.8	―――	
305	鉄鏃茎	SC-002	※4.6	0.5	0.3	※2.8	―――	
306	鉄鏃	SC-003	※3.2	1.0	0.3	※2.5	―――	茎欠損
307	鉄鏃	SC-005	※5.0	0.7	0.5	※8.6	―――	茎欠損
308	鉄鏃	SC-005	※5.1	0.8	0.4	※7.4	―――	茎欠損

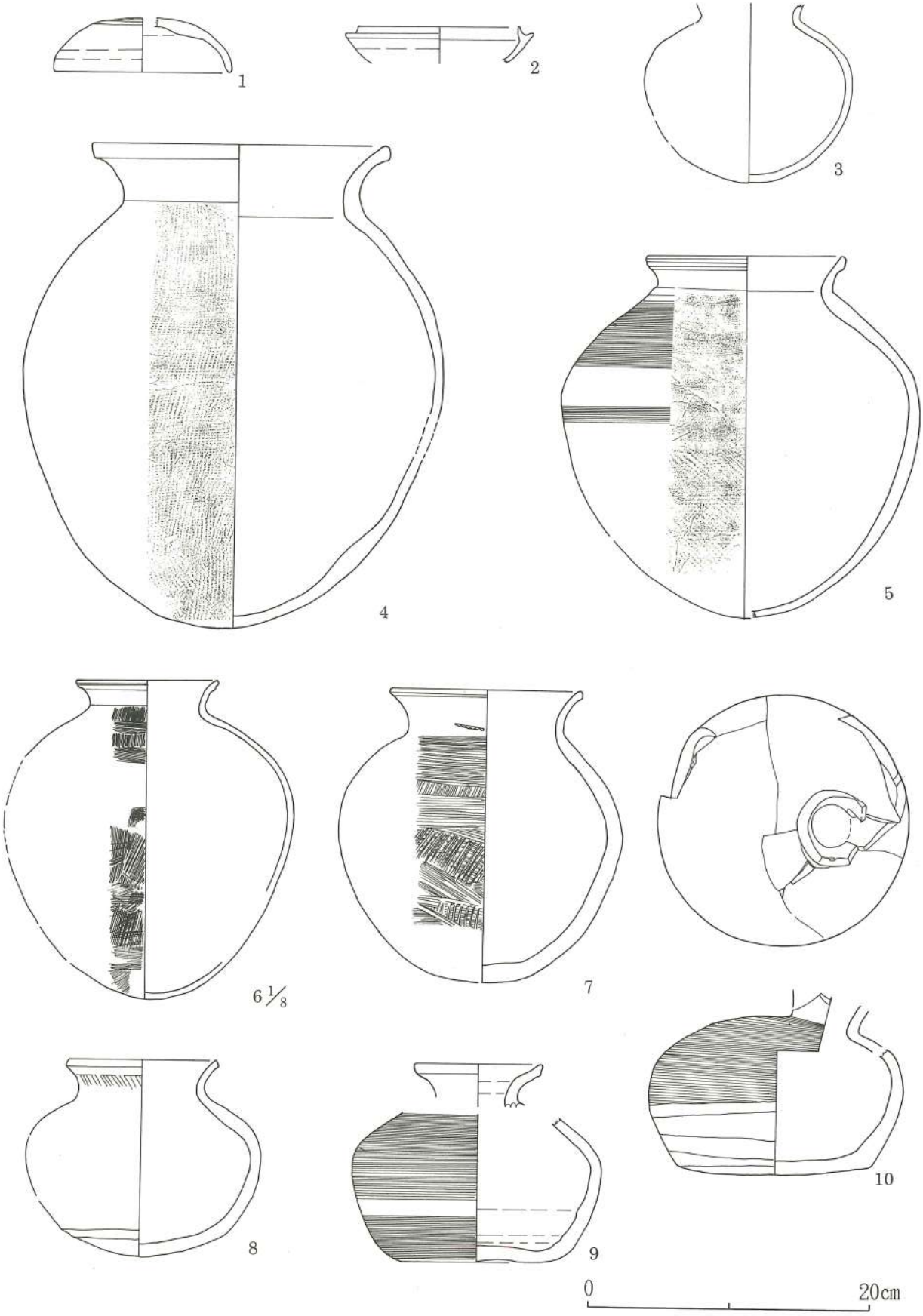


Fig. 86　青柳古墳群１区出土遺物実測図(1)（１/４）

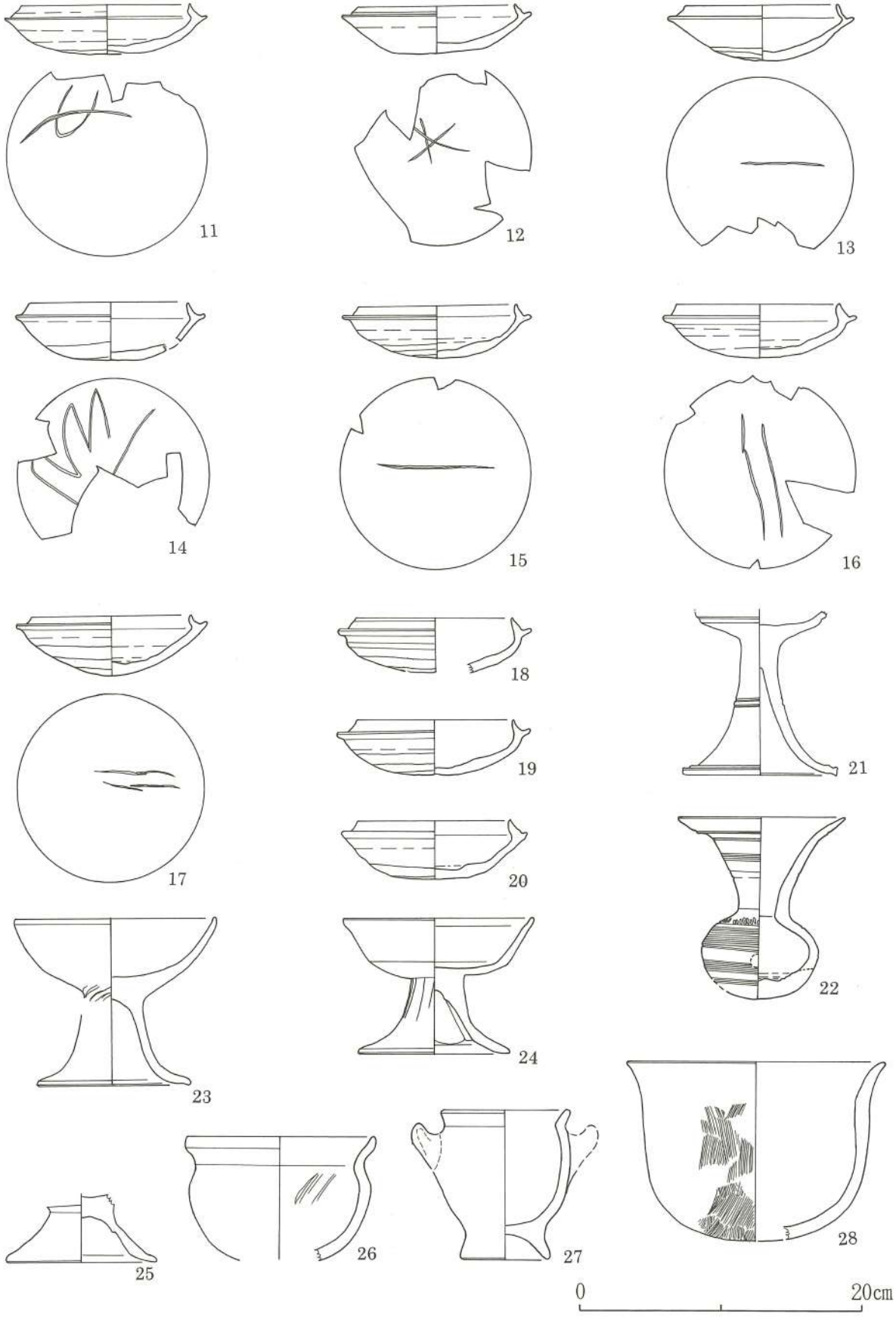


Fig. 87　青柳古墳群１区出土遺物実測図(2)（１/４）

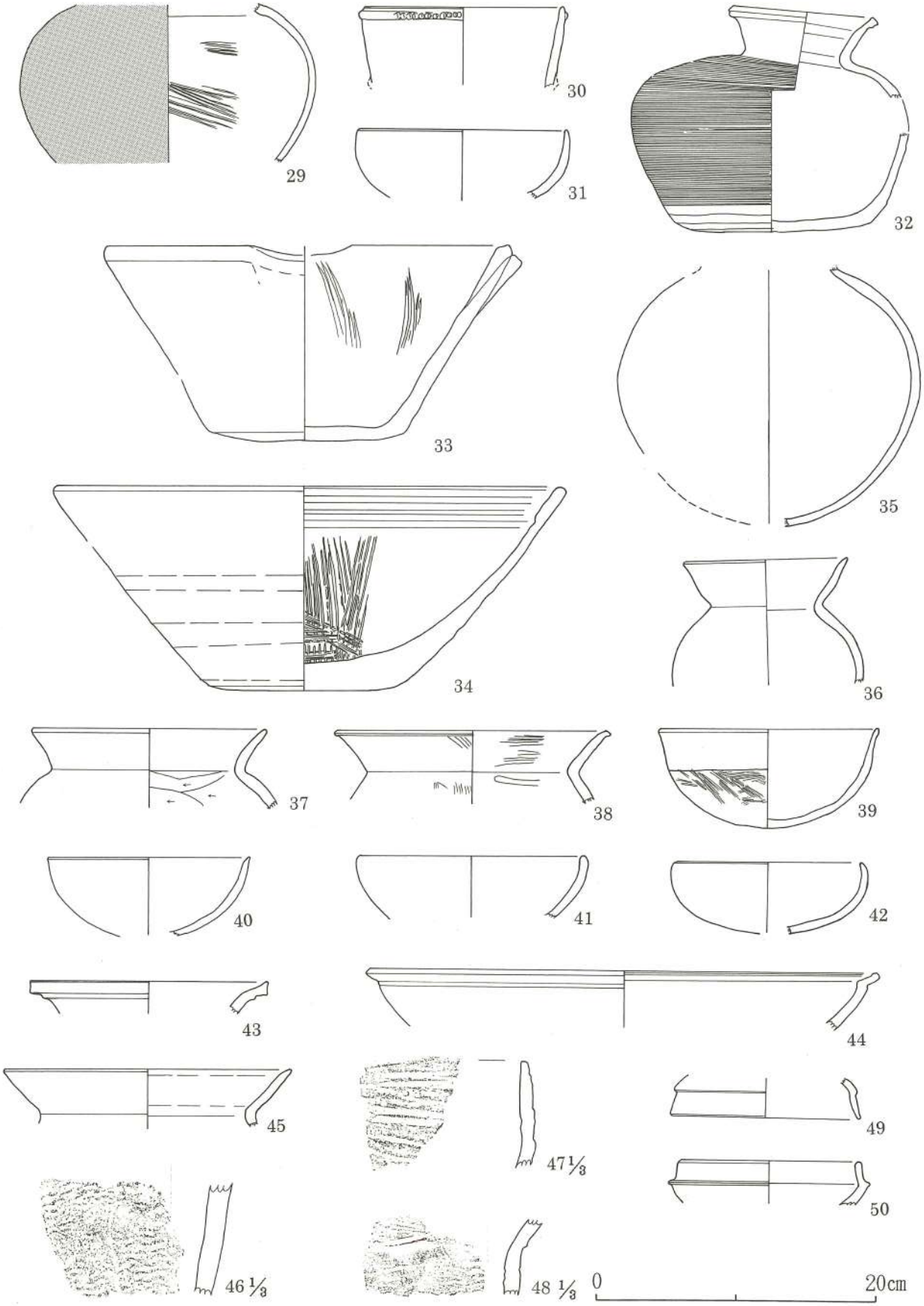


Fig. 88　青柳古墳群１区出土遺物実測図(3)（１/４）

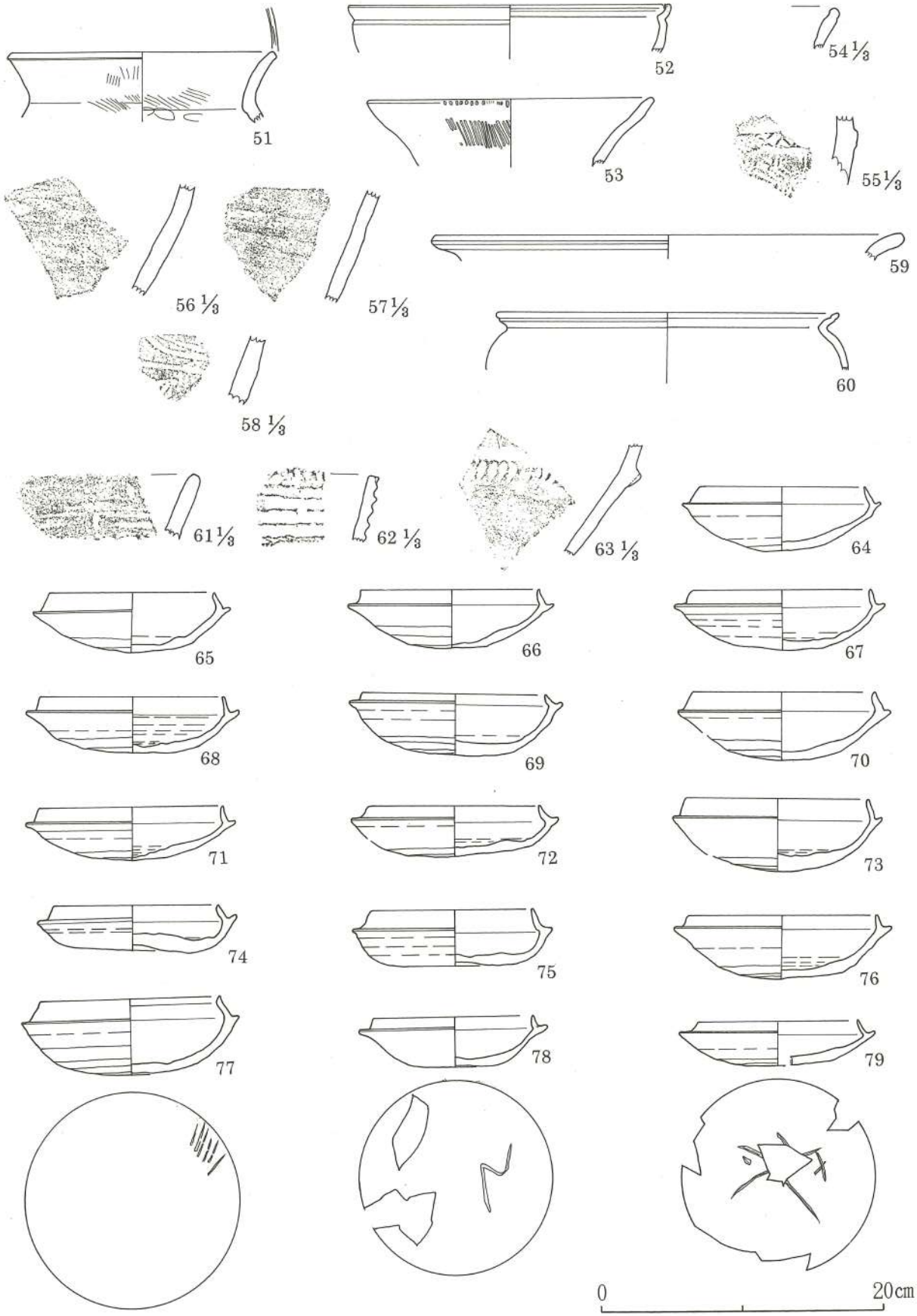


Fig. 89　青柳古墳群１区出土遺物実測図(4)（１/４）

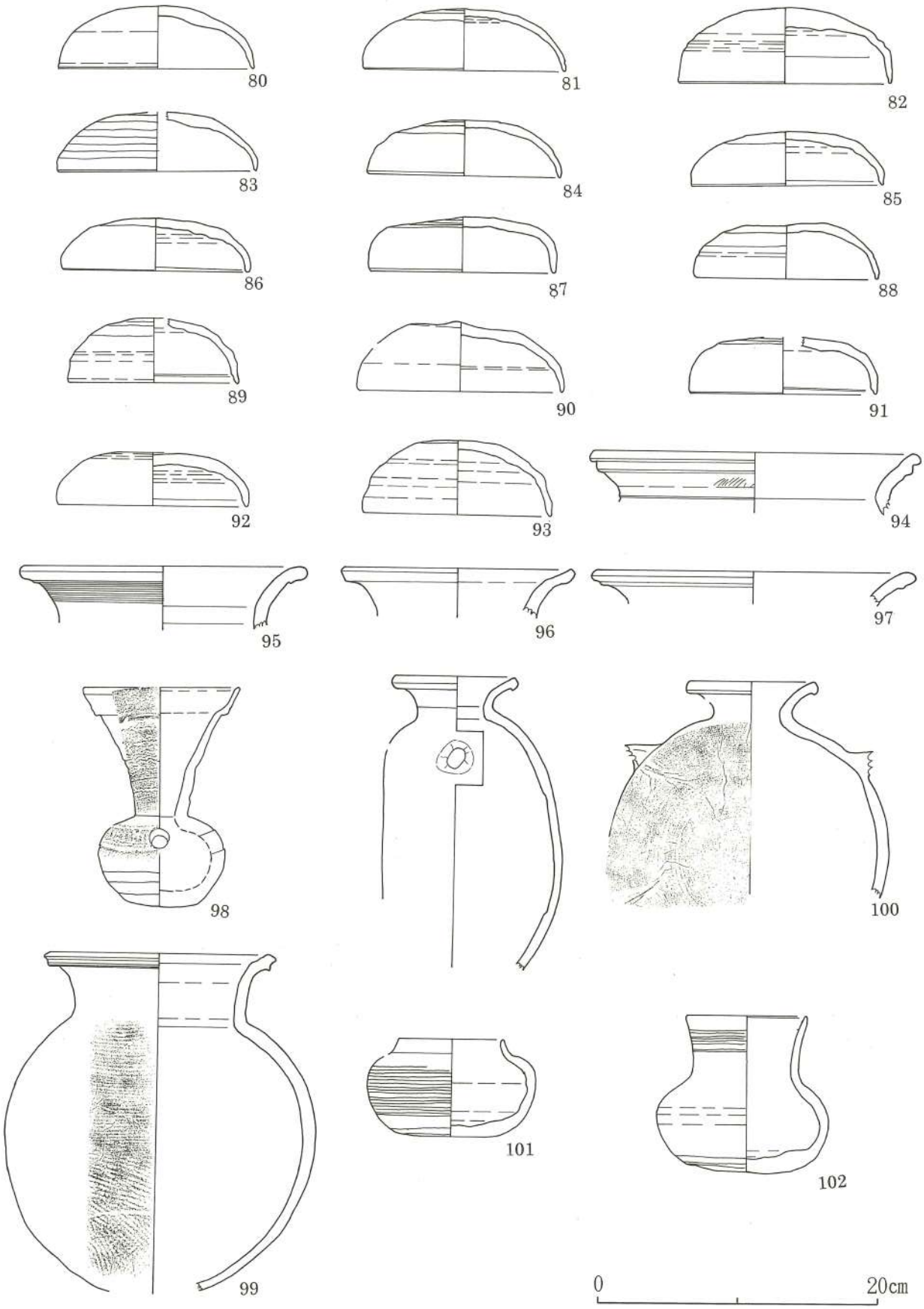


Fig. 90　青柳古墳群１区出土遺物実測図(5)（１/４）

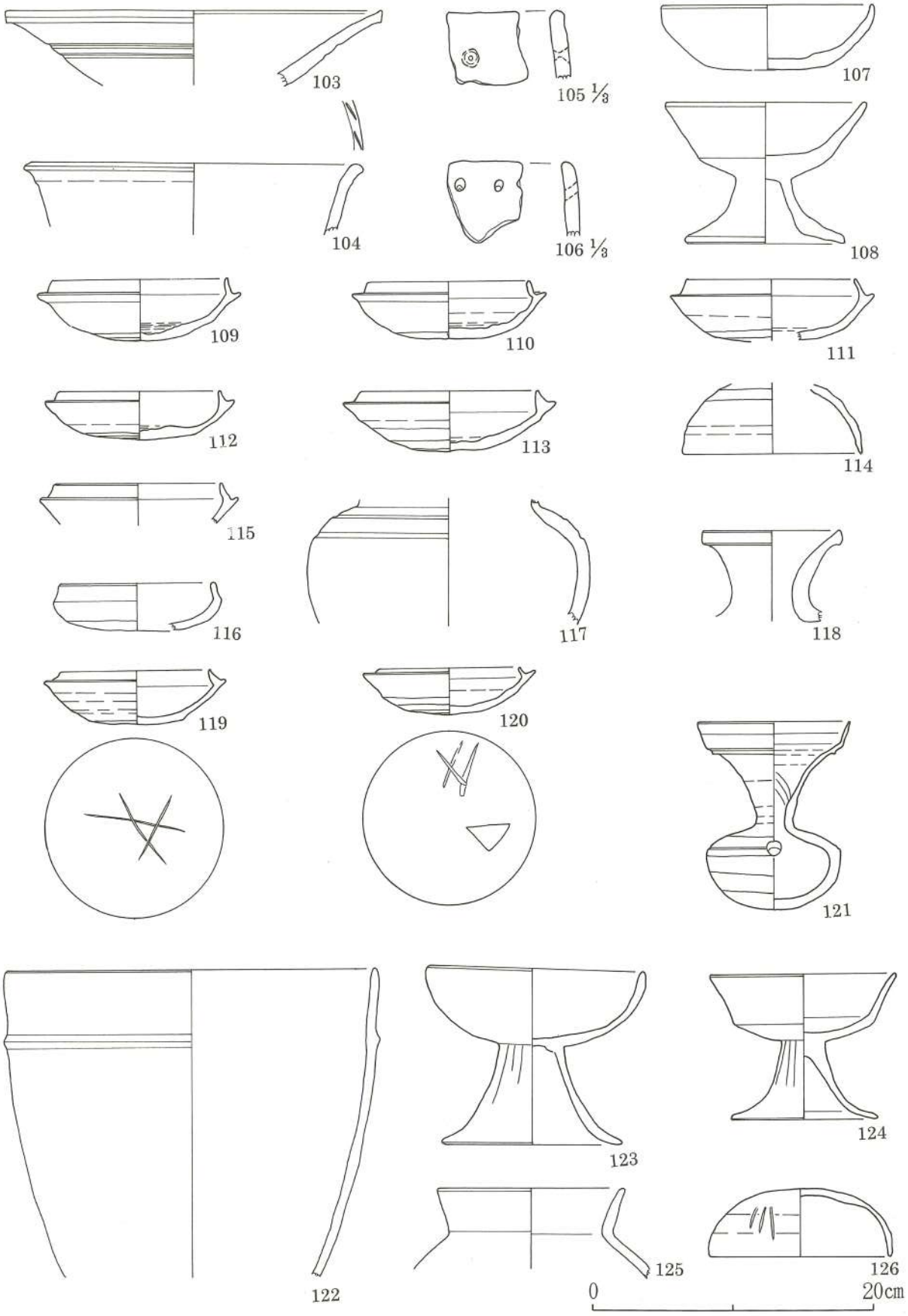


Fig. 91　青柳古墳群１区出土遺物実測図(6)（１/４）

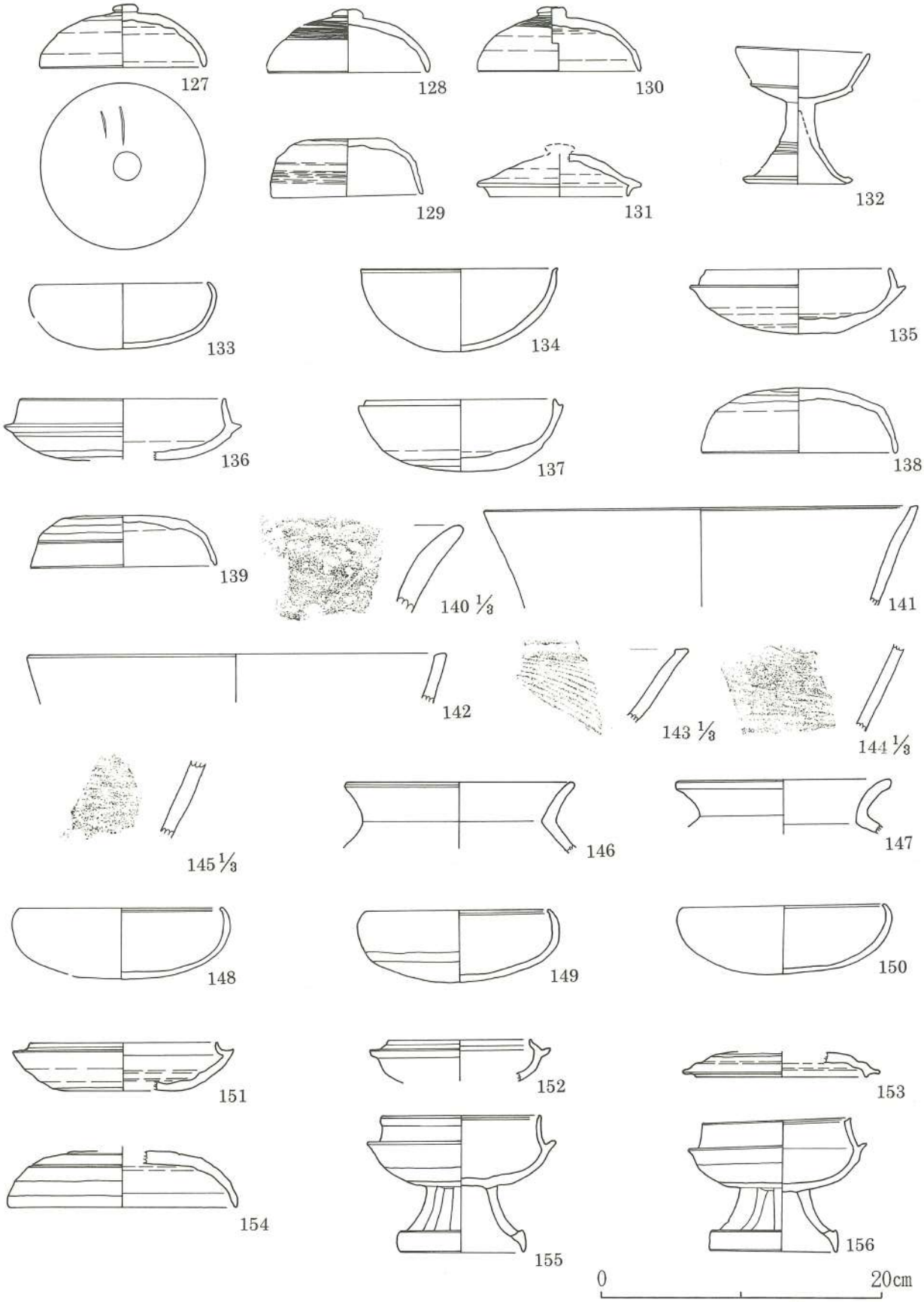


Fig. 92　青柳古墳群１区出土遺物実測図(7)（１/４）

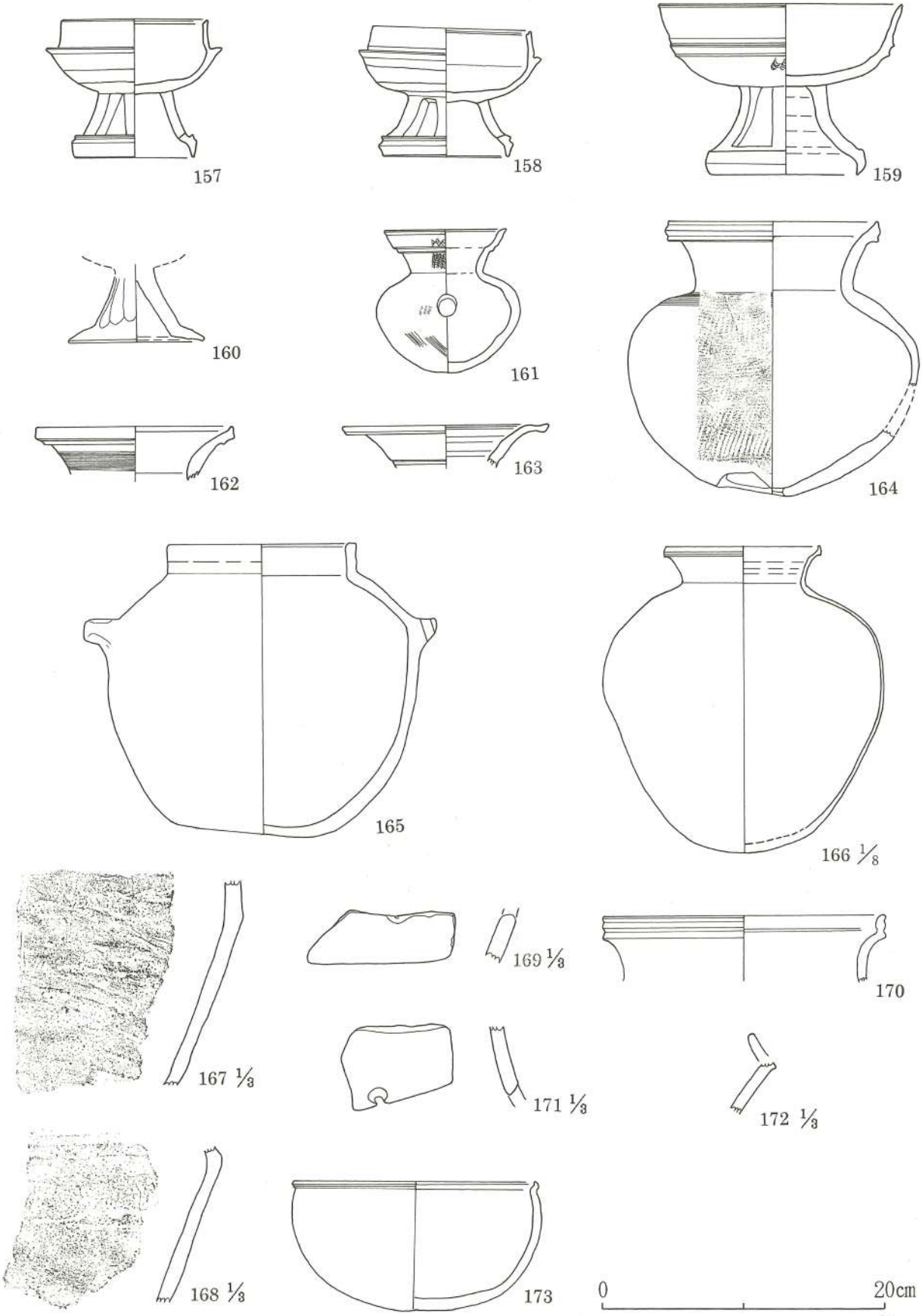


Fig. 93　青柳古墳群１区出土遺物実測図(8)（1/4）

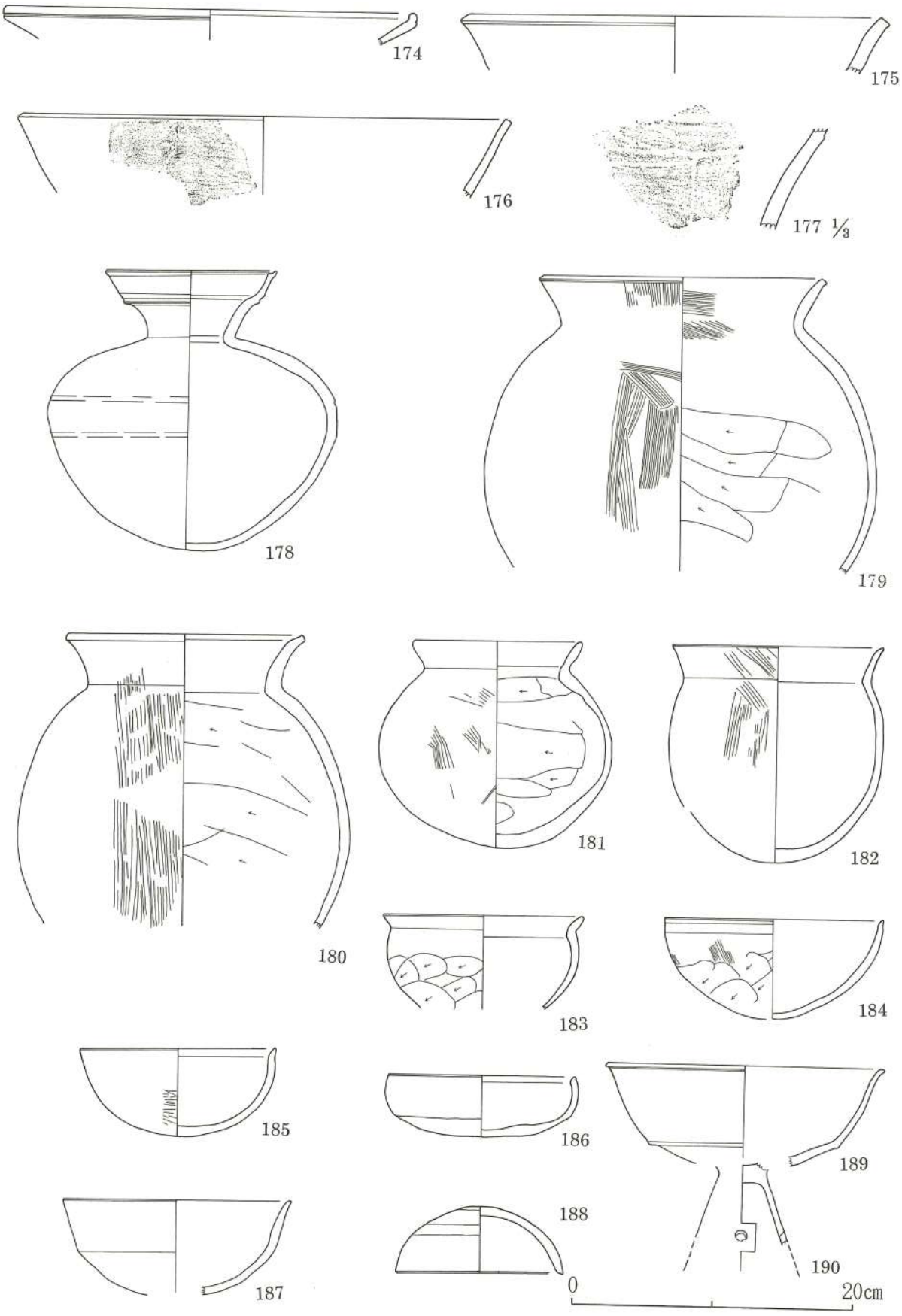


Fig. 94　青柳古墳群１区出土遺物実測図(9)（1／4）

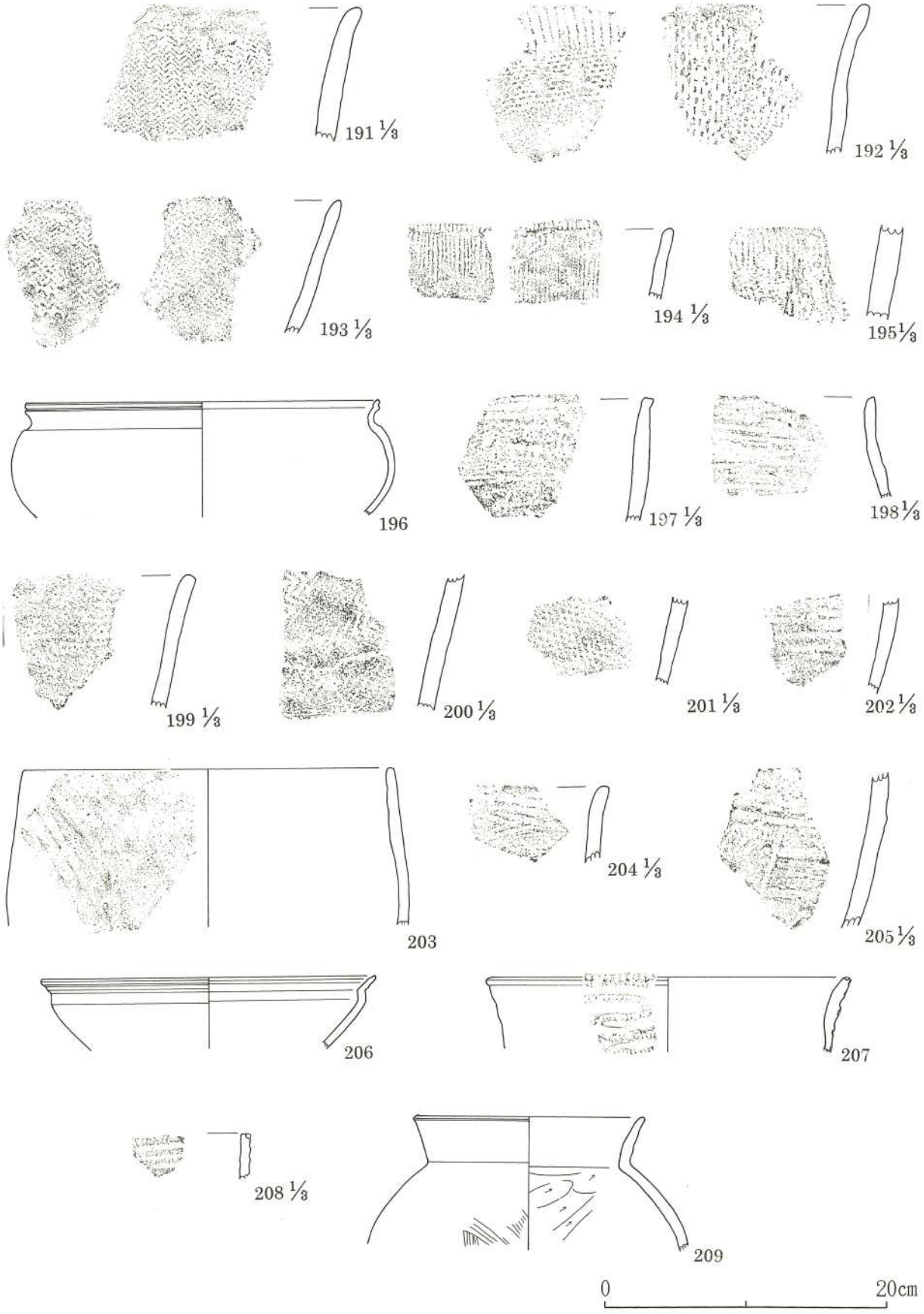


Fig. 95　青柳古墳群１区出土遺物実測図⑽（１/４）

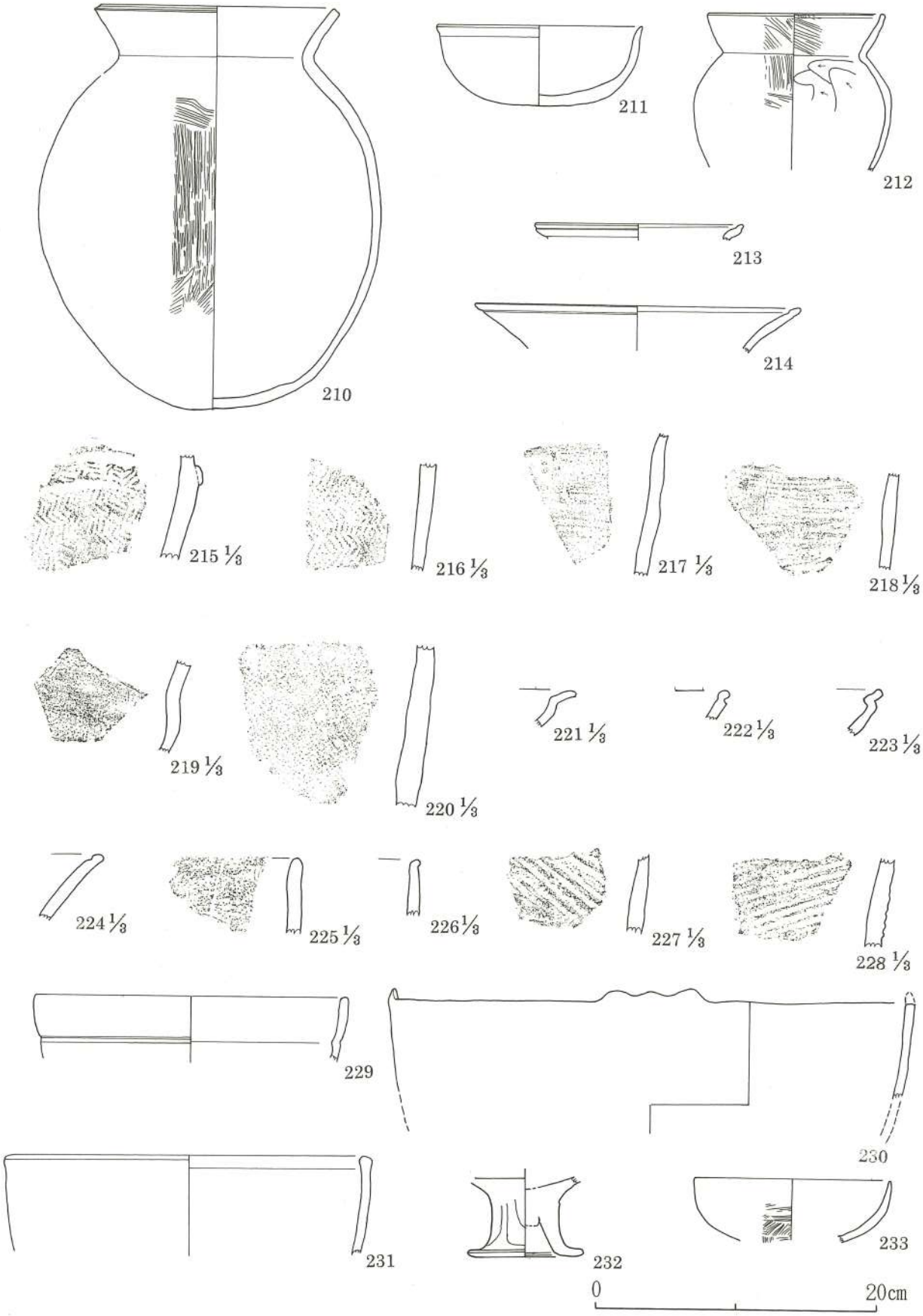


Fig. 96　青柳古墳群１区出土遺物実測図(11)（１/４）

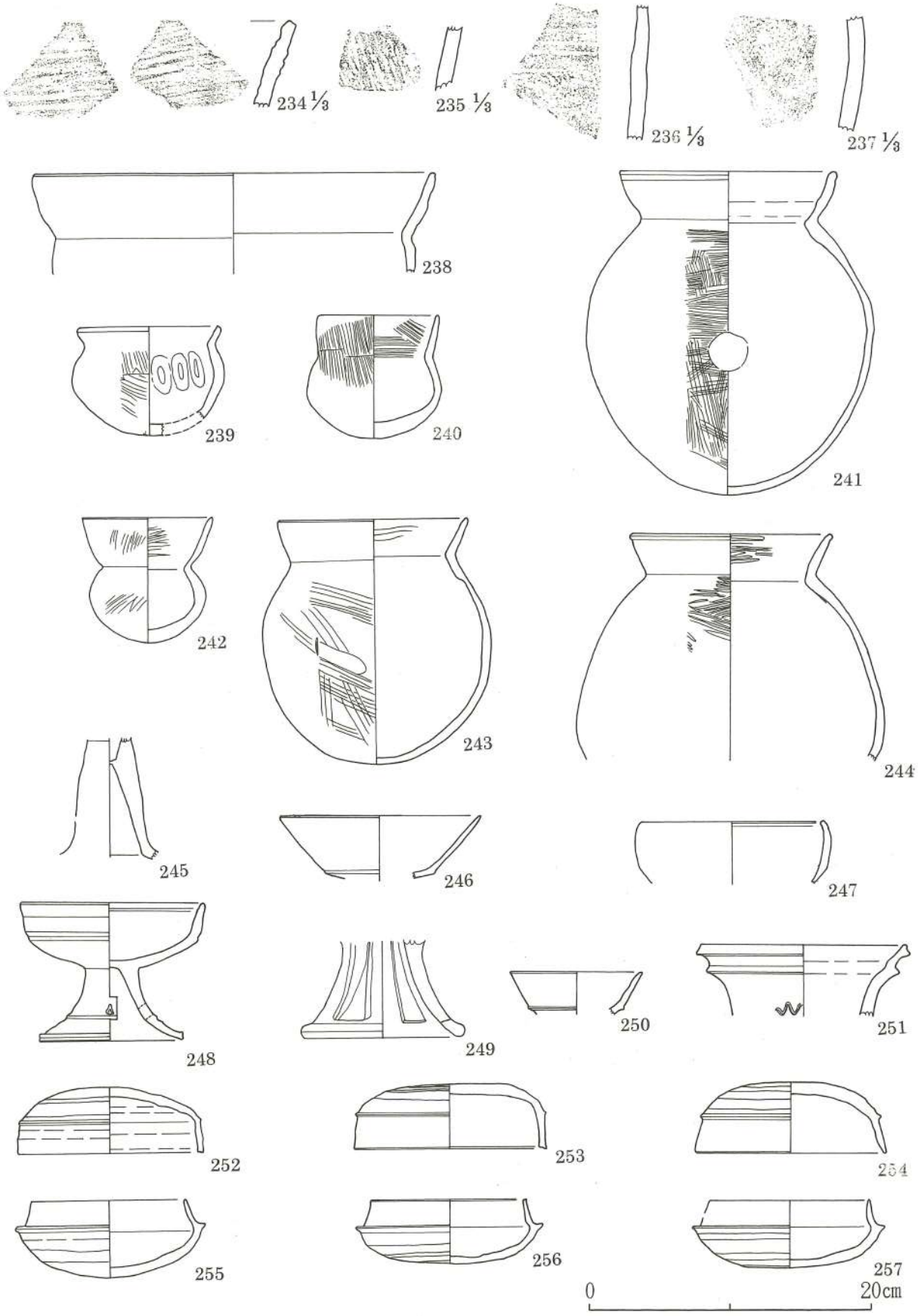


Fig. 97　青柳古墳群１区出土遺物実測図(12)（１/４）

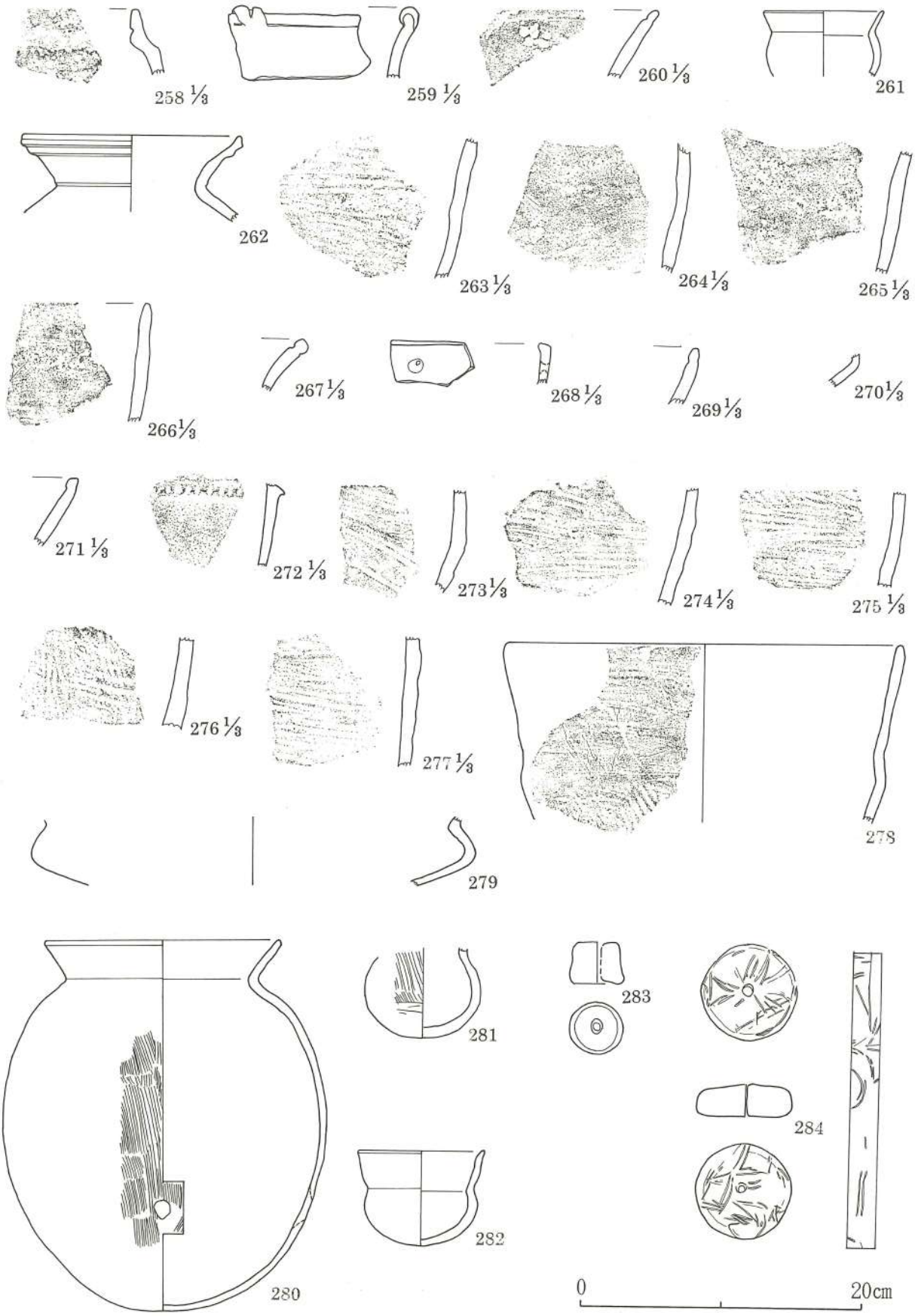


Fig. 98　青柳古墳群１区出土遺物実測図(13)（１/４）

Ⅵ. ま と め

今回報告した３遺跡の調査では、量的には決して多いとはいえないが、縄文時代から中世に及ぶ遺構や遺物が検出された。以下、調査区ごとに調査の所見を列記し、まとめとしたい。

平成７年度堤六本谷遺跡11区の調査

堤六本谷遺跡11区は、同遺跡の中でも中心部にあたっている。今回の調査では、古墳時代の竪穴式住居址11軒、奈良時代の竪穴式住居址６軒出土遺物が無いかあっても少量で時期を特定しがたいもの８軒の合計25軒、掘立柱建物址12棟、土壙107基、その他溝跡、ピットなどが検出された。特に古墳時代の住居址は、ほとんどが古墳時代後期の所産であり、鎮西山南麓部に点在する数多くの円墳からなる後期古墳群を営んだ集団の一部であることは明らかであり当時の社会状況を考える上で貴重な資料となった。

平成８年度堤三本松遺跡２区の調査

今回の堤三本松遺跡２区の調査では、土壙などが検出されたもの、本調査区が丘陵本体から派生する一支丘に位置するため、遺跡の縁辺にあたり、本遺跡における遺構の広がりは、ここから北西部の県道富士中原停車場線付近が主体であろうことが推測される。

平成９年度堤三本柳遺跡１区・青柳古墳群１区の調査

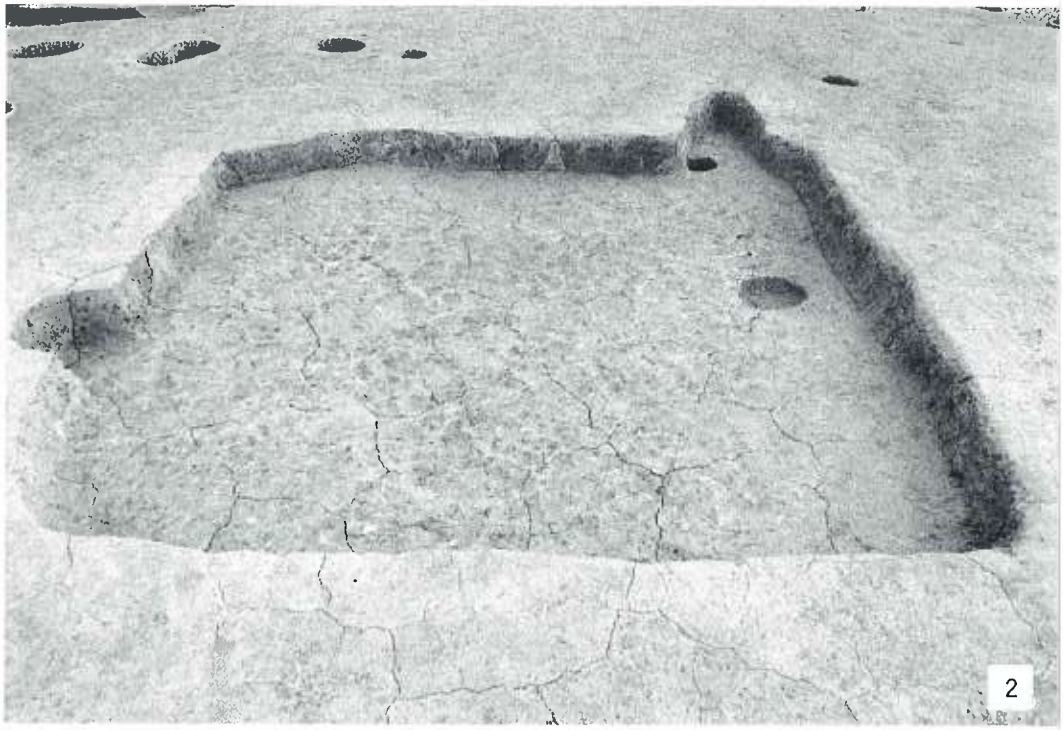
今回調査を行った堤三本柳遺跡１区と青柳古墳群１区は同一丘陵の尾根をはさんで丘陵の東西両斜面に位置している。堤三本柳遺跡１区では明確な遺構は検出できなかったが、青柳古墳群１区では、古墳等の墳墓23基、古墳時代の竪穴式住居址２軒、その他土壙25基などが検出された。

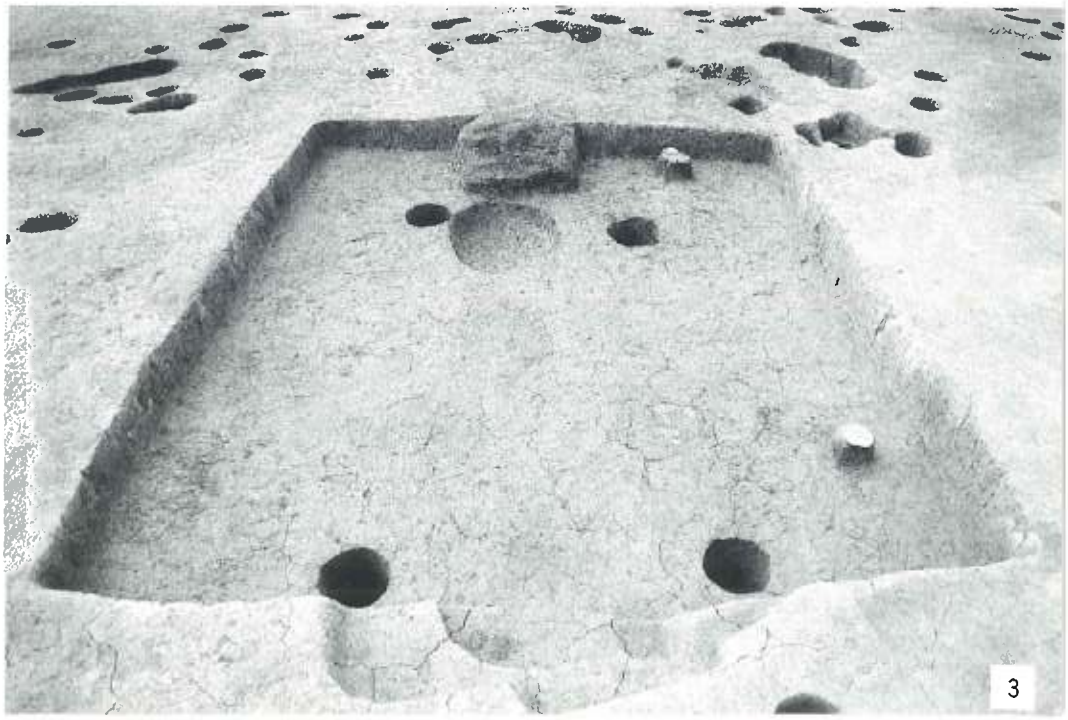
縄文時代の遺構、遺物についてみると、本文中でも述べたが、今回の青柳古墳群の調査では、縄文時代の土壙が検出され、縄文式土器が出土した。古墳の周溝などからも縄文式土器が出土しており、後世の削平を受けるまではかなりの遺構が存在していたものと推測される。また、押型文土器など比較的古い時期の資料が出土した。これまで町内ではこの時期の調査例がなかったが、貴重な資料を得ることができたといえる。

また、古墳時代の遺構、遺物についてみると、今回検出された古墳などの墳墓は、いずれも後世の削平によってかなり破壊されてはいたが、SP-028として調査した円形周溝墓を除くと、時期的には５世紀末頃から６世紀にかけて営まれたものと考えられる。各墳墓の主体部についてもいくつかのバラエティがみられ、この地域での墳墓の変遷を考える上で貴重な資料となった。

また２軒検出された住居址の出土遺物は、５世紀代前半から中頃の資料として、町内では船石古墳出土遺物と並んで最も古式の土師器、須恵器の出土例のひとつであることを付記しておく。

図　　版





堤六本谷遺跡11区

1　SH-125　—北東より—

2　SH-136　—西より—

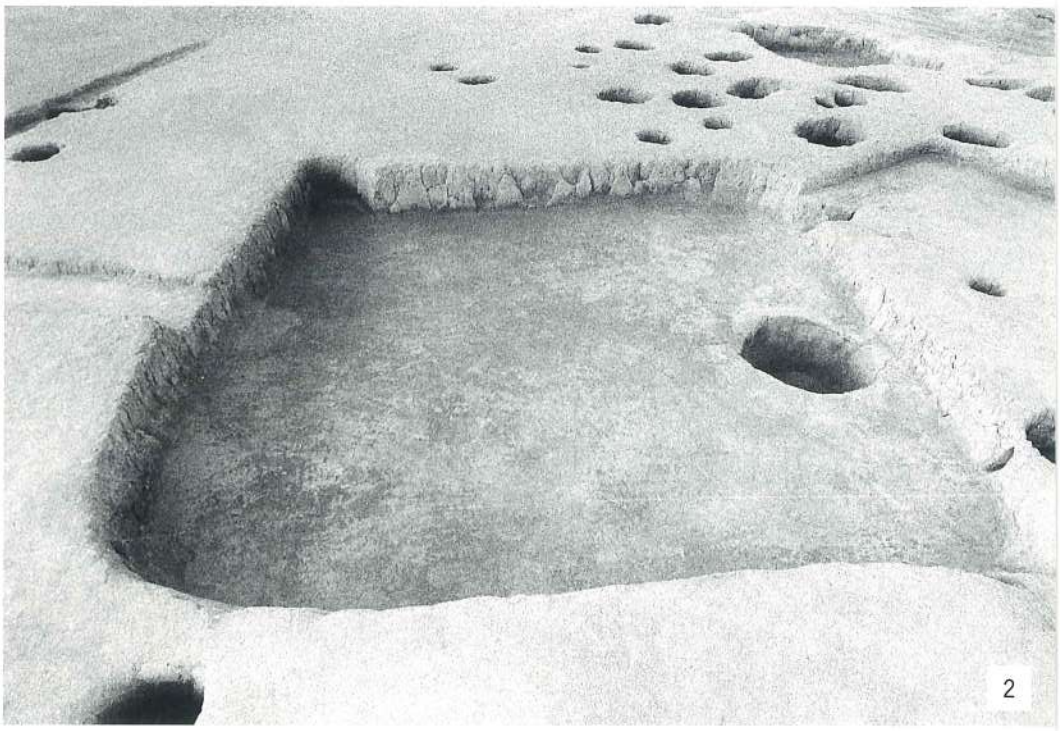
3　SH-137　—北東より—

堤六本谷遺跡11区

1　SH-144　—南より—

2　SH-145　—南東より—

3　SH-156　—北より—

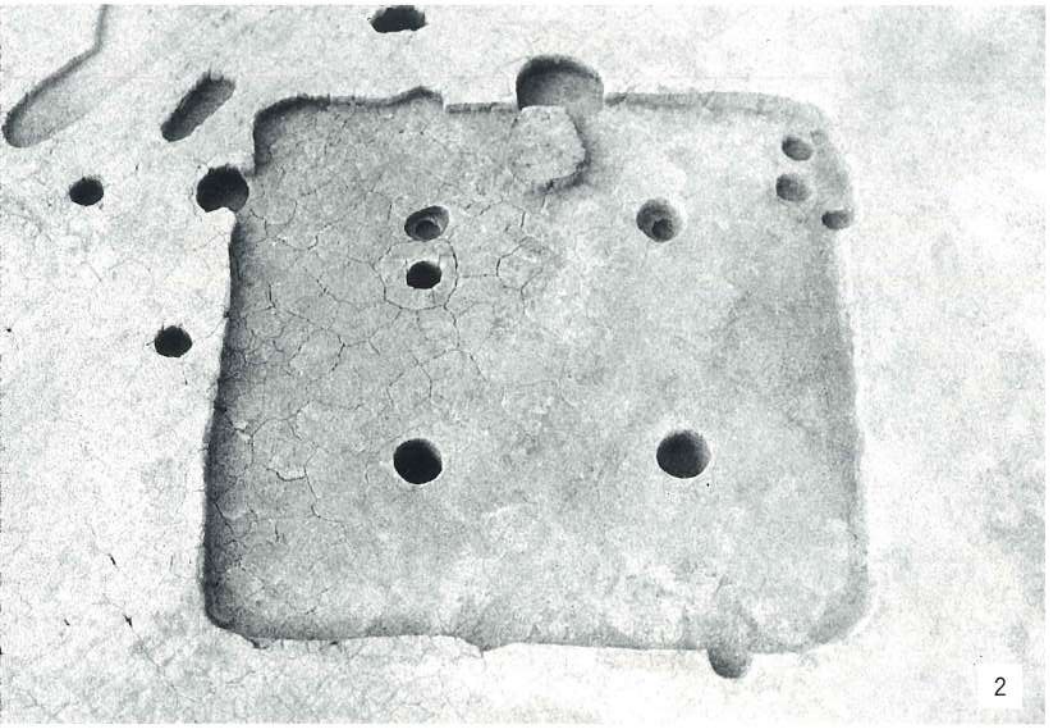


堤六本谷遺跡11区

1　SH-157　―南東より―

2　SH-158　―東より―

3　SH-160　―南より―



堤六本谷遺跡11区

1　SH-161　—北東より—

2　SH-162　—南より—

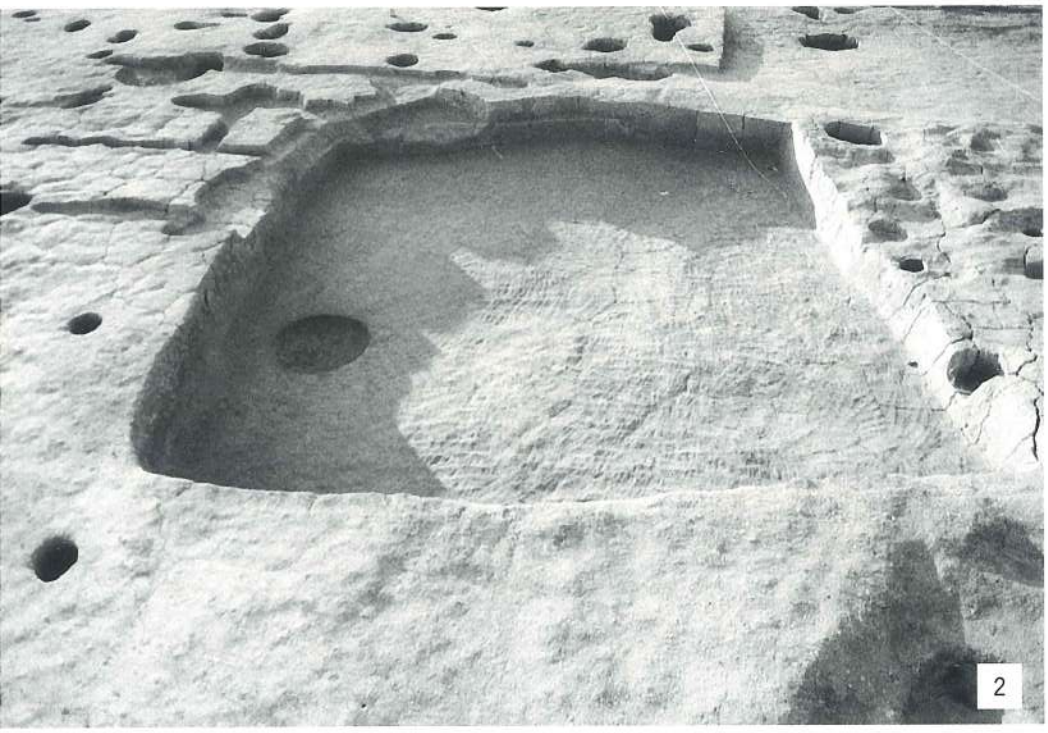
3　SH-163　—北東より—

堤六本谷遺跡11区

1　SH-190　―西より―

2　SH-192　―南より―

3　SH-193　―南より―

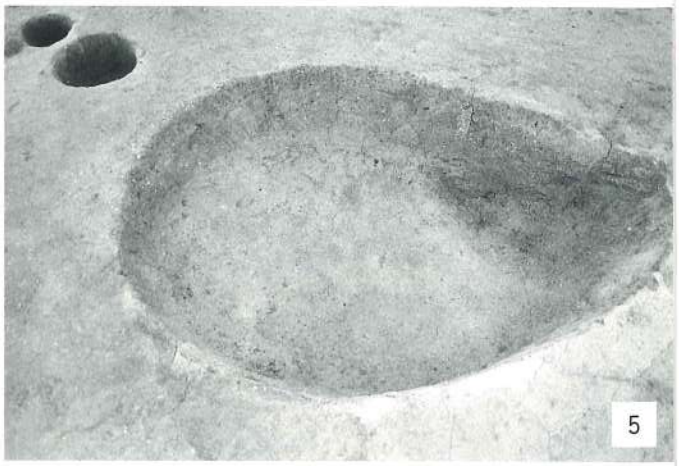


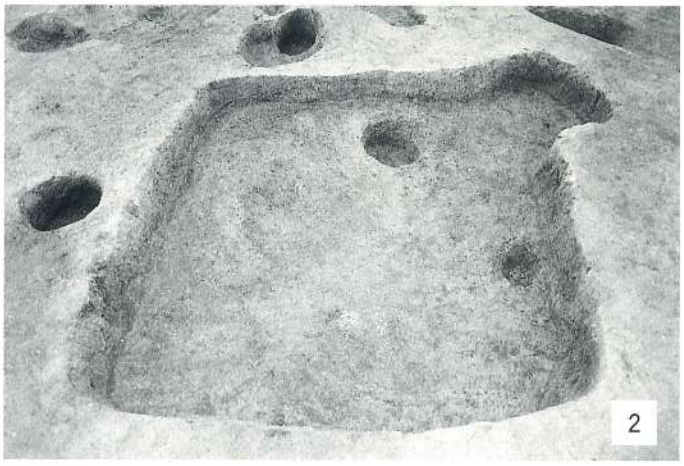
堤六本谷遺跡11区

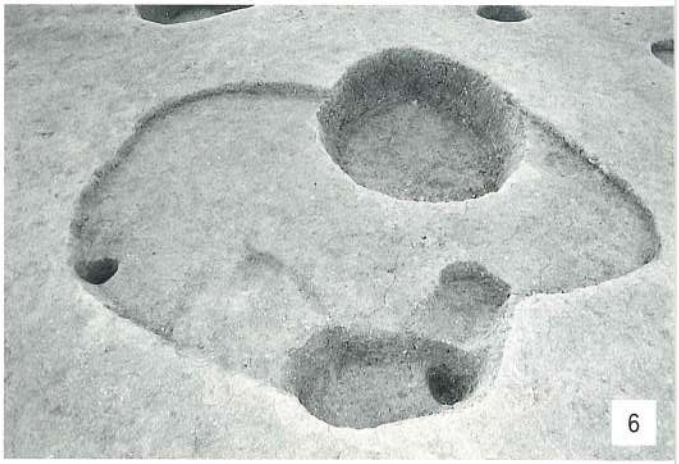
1　SH-203　—北西より—

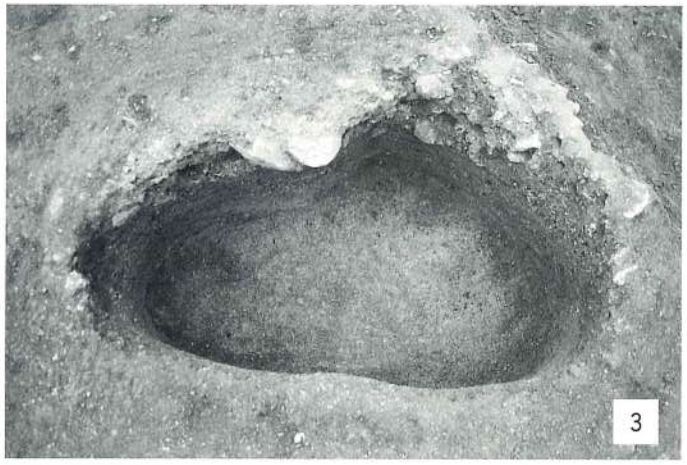
2　SH-212　—東より—

3　SH-219　—東より—









堤六本谷遺跡11区

1　SK-110・111　―東より―

2　SK-113　―南西より―

3　SK-114　―南より―

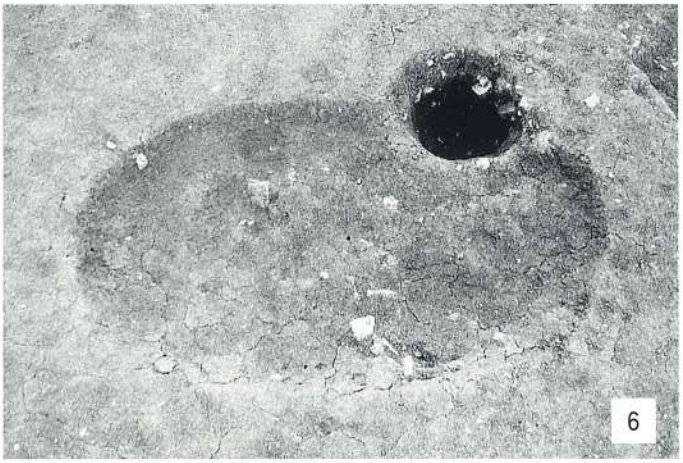
4　SX-115　―北より―

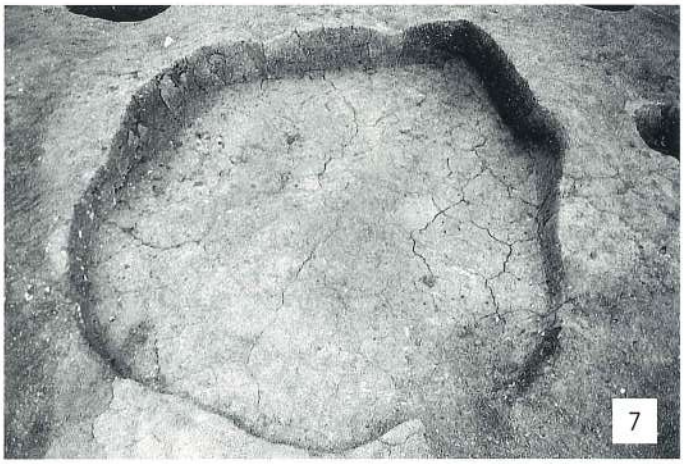
5　SK-117　―北東より―

6　SK-118　―北東より―

7　SK-119　―南より―

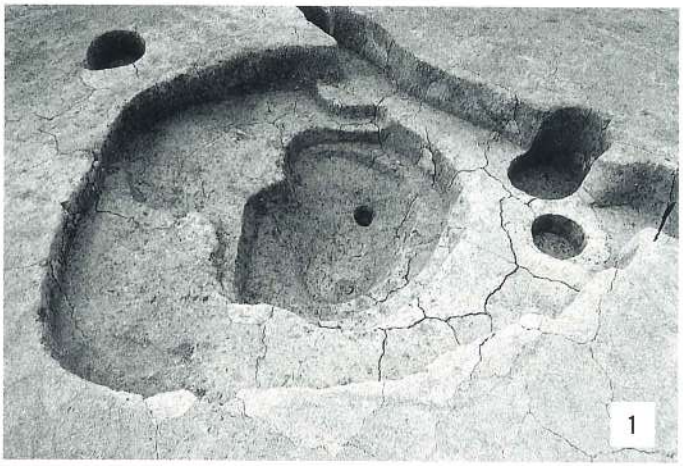
8　SK-120　―南より―

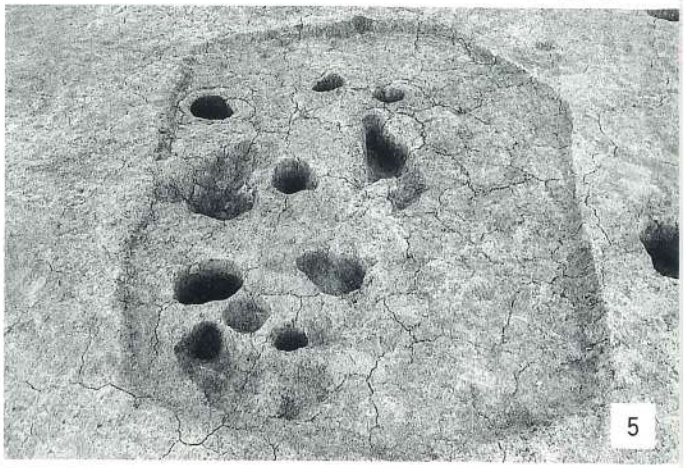


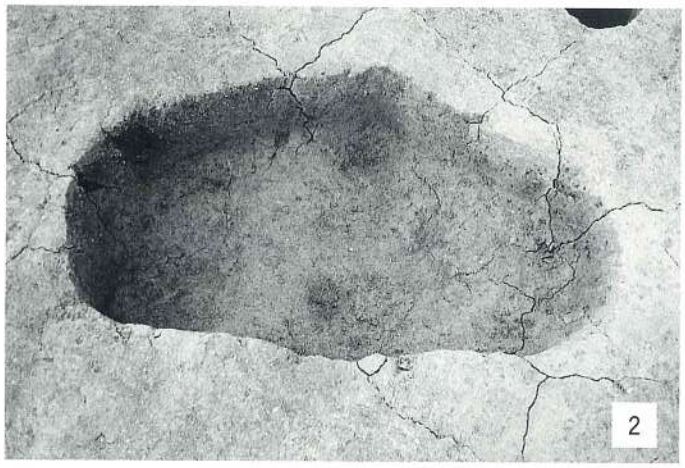


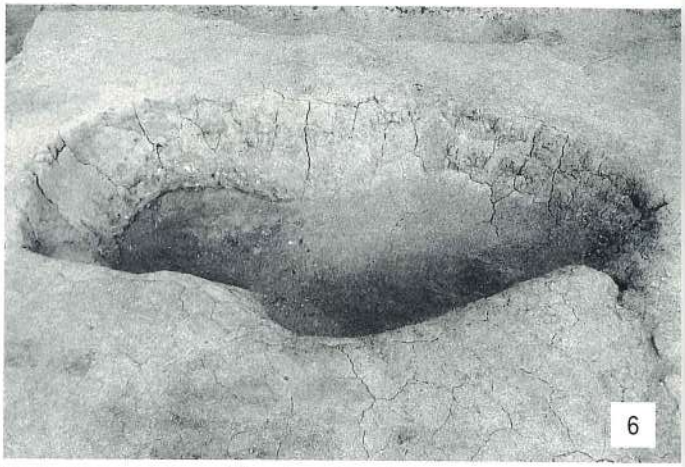
堤六本谷遺跡11区

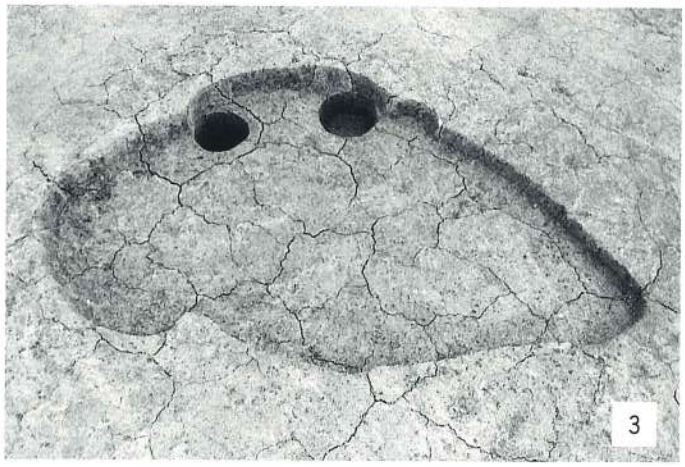
1　SK-122　―北より―
2　SK-124　―東より―
3　SK-126　―西より―
4　SK-127　―東より―
5　SK-131　―北東より―
6　SK-132　―北より―
7　SK-133　―南より―
8　SK-134　―北より―

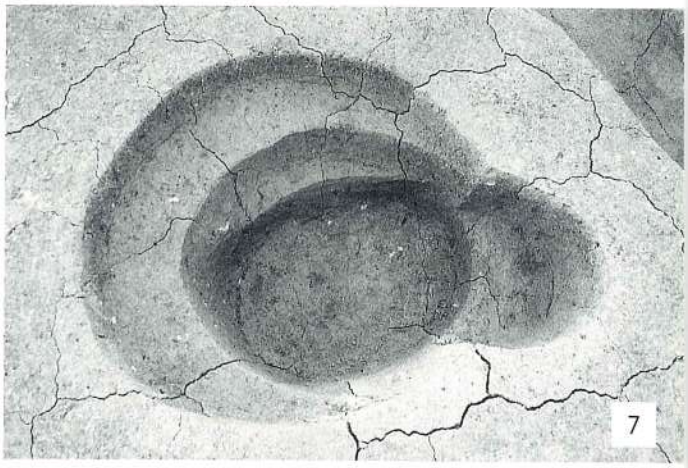


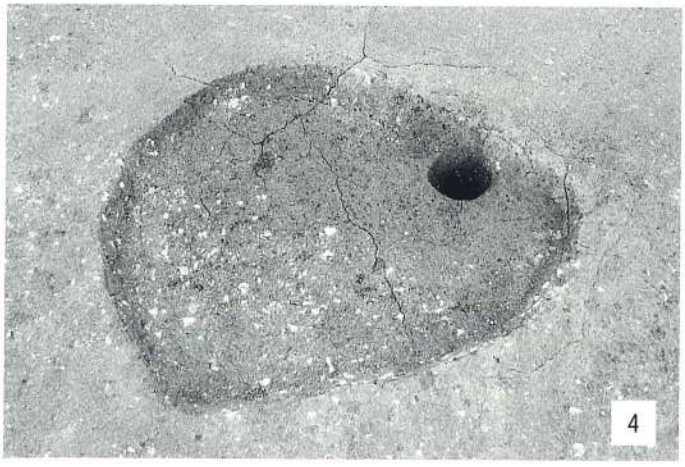


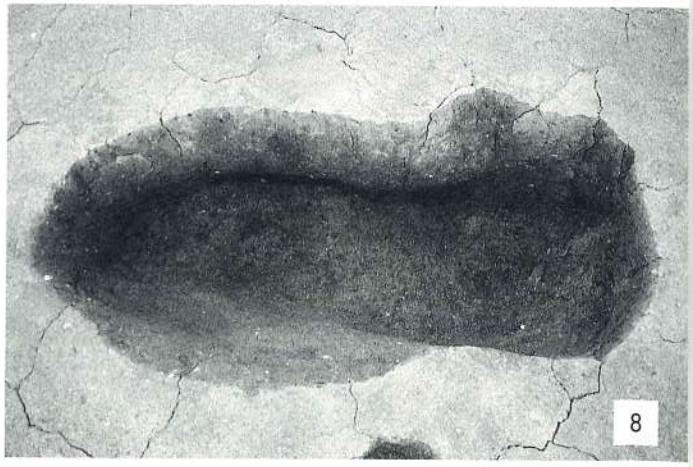












堤六本谷遺跡11区

1　SK-135　—北東より—

2　SK-138　—東より—

3　SK-139　—西より—

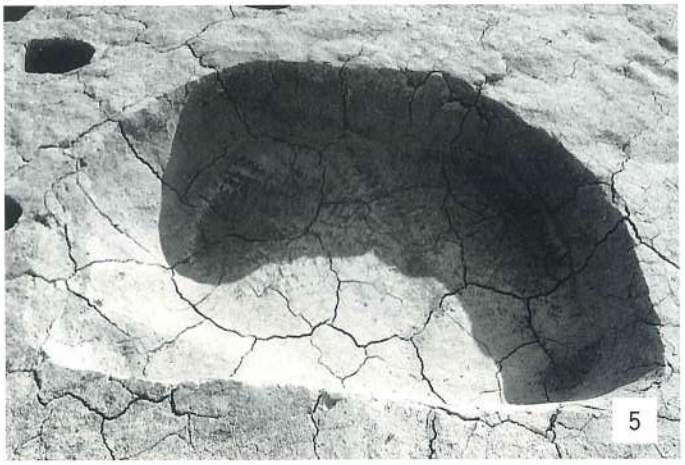
4　SK-140　—南より—

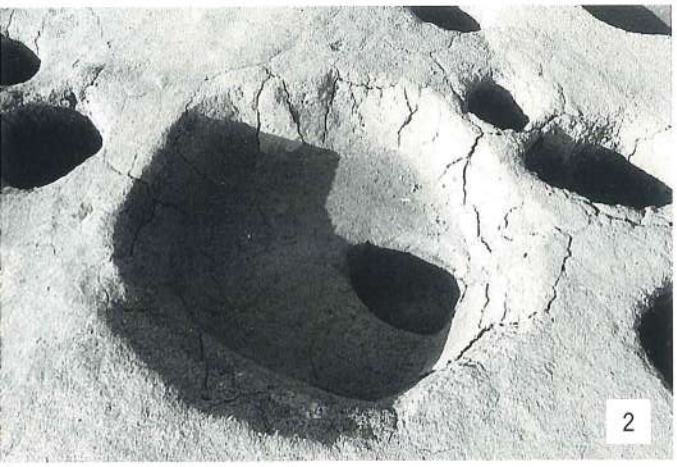
5　SK-142　—南より—

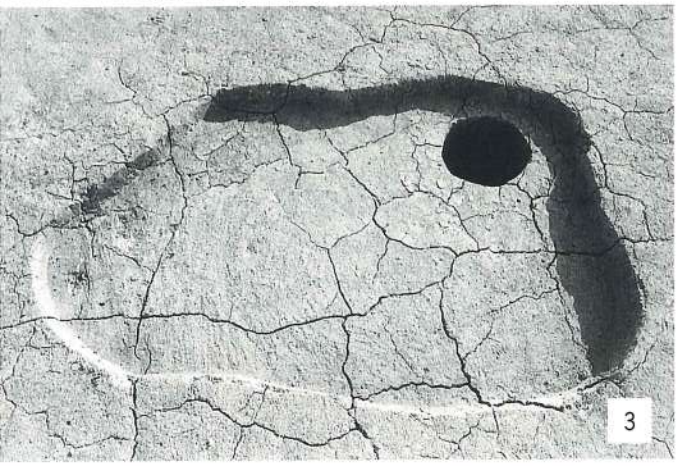
6　SK-148　—南より—

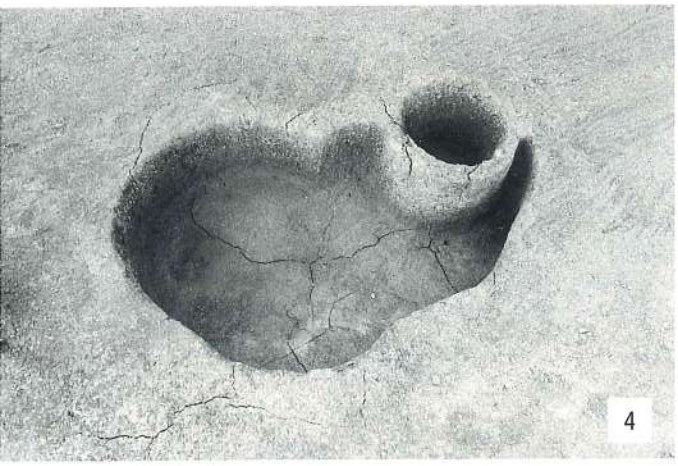
7　SK-150　—北東より—

8　SK-153　—南より—



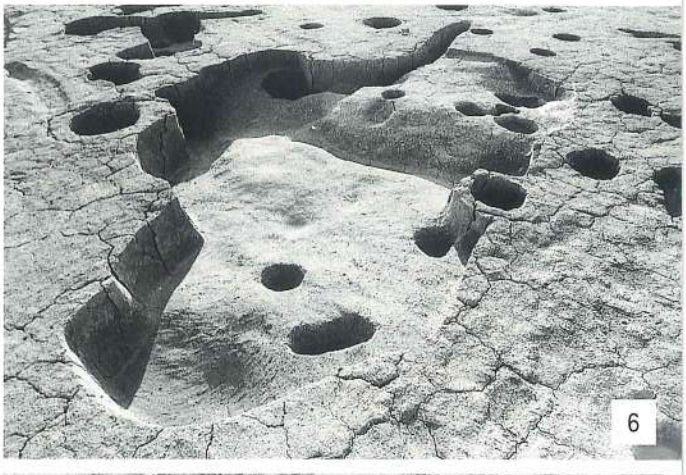


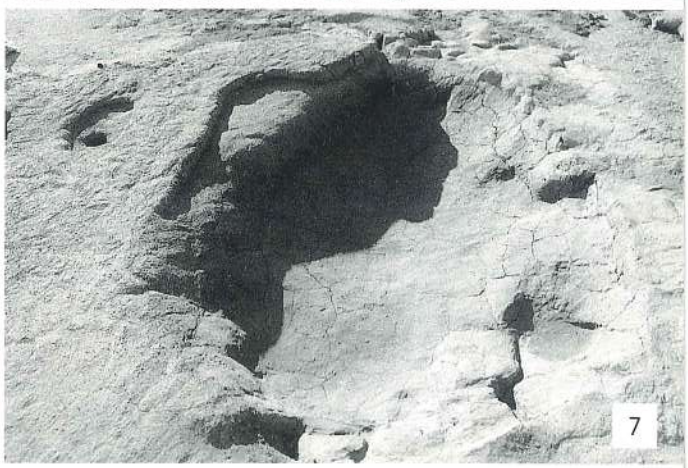




堤六本谷遺跡11区

1　SK-159　―西より―
2　SK-167　―南より―
3　SK-168　―南より―
4　SK-169　―南東より―
5　SK-170　―北より―
6　SK-173　―南東より―
7　SK-178　―北東より―
8　SK-185　―北より―





堤六本谷遺跡11区

1　SK-187　―南より―

2　SK-188　―北東より―

3　SK-195　―北より―

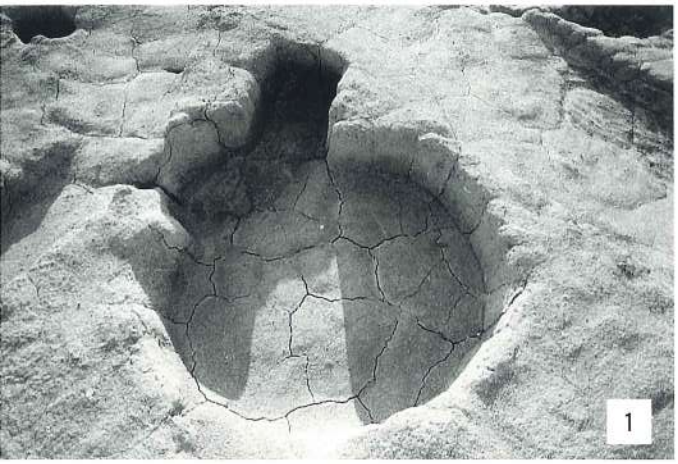
4　SK-197　―南東より―

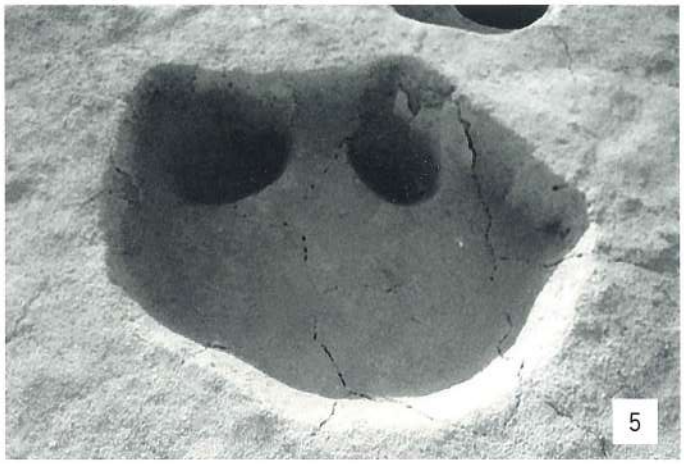
5　SK-198　―東より―

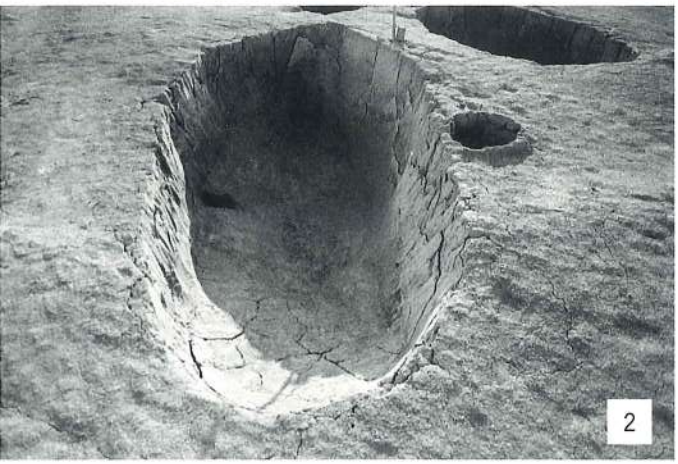
6　SK-199　―北東より―

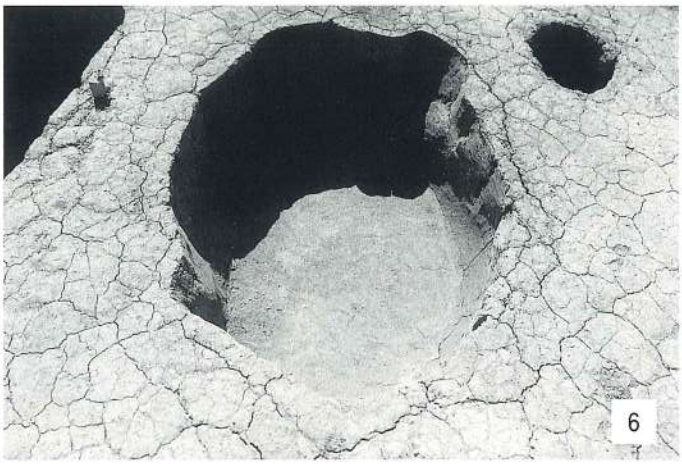
7　SK-204　―東より―

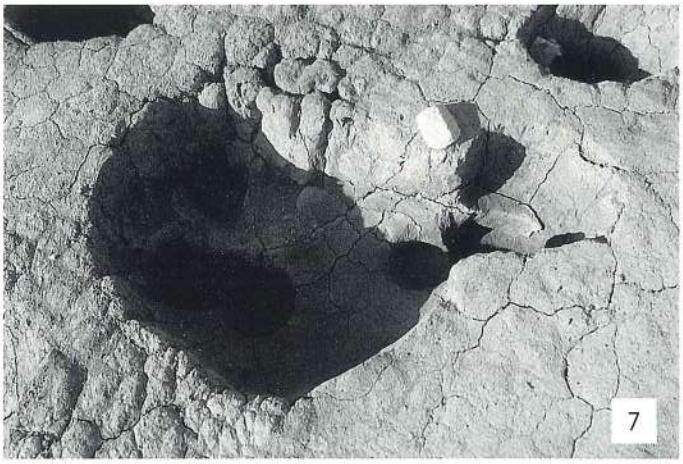
8　SK-205　―東より―

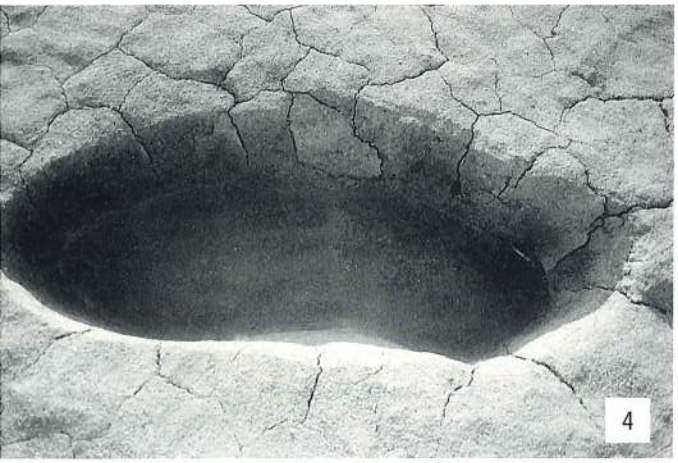


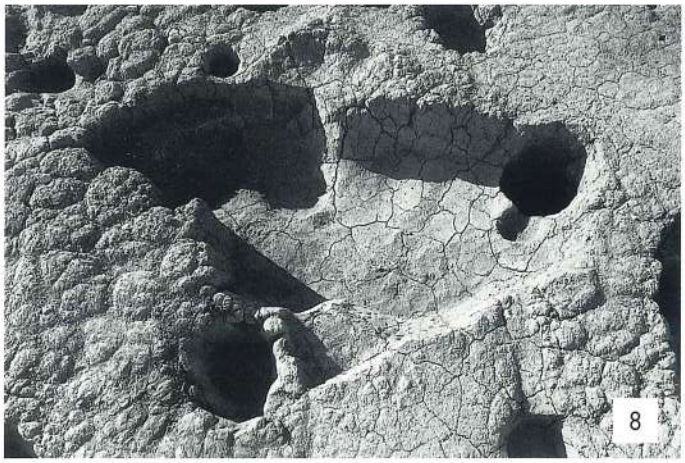






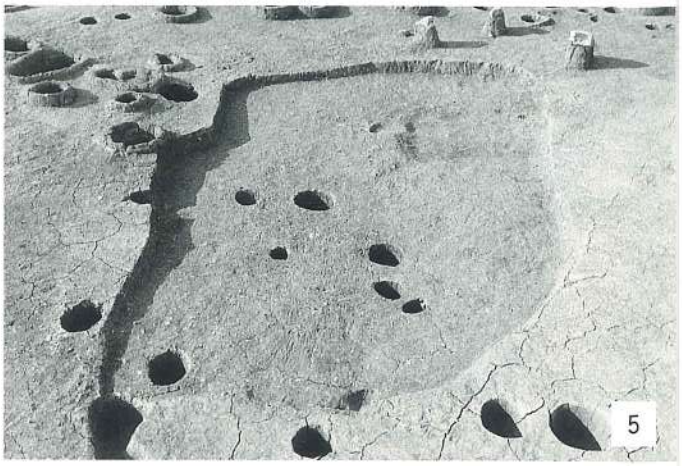


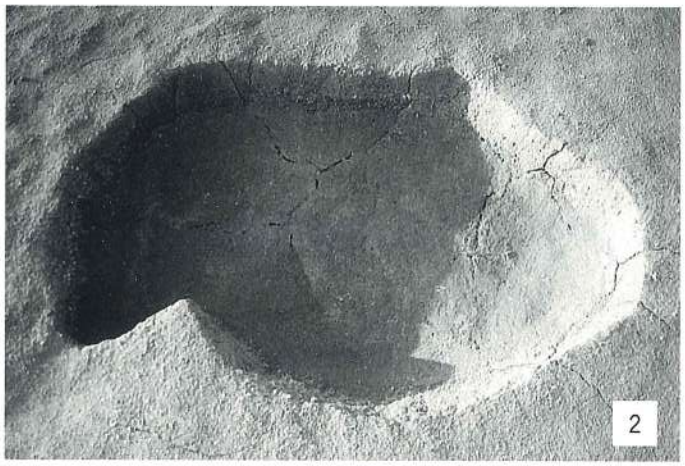


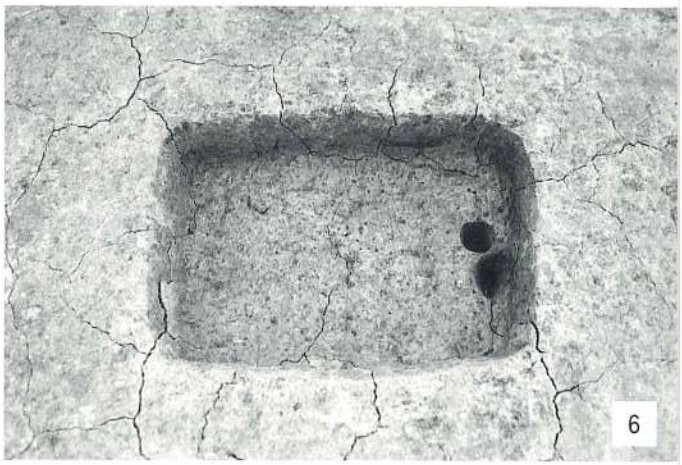


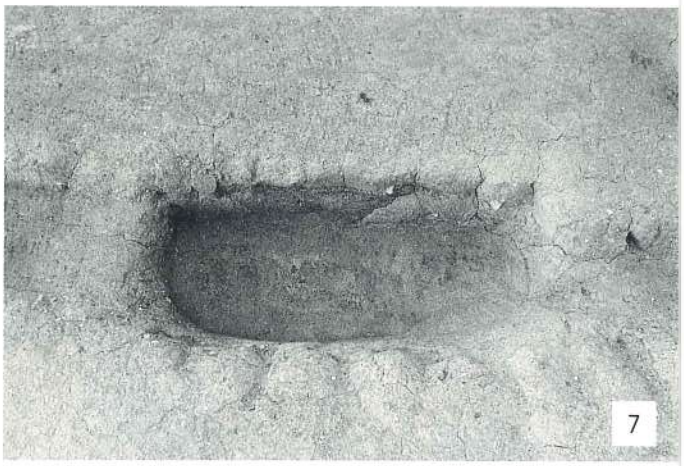
堤六本谷遺跡11区

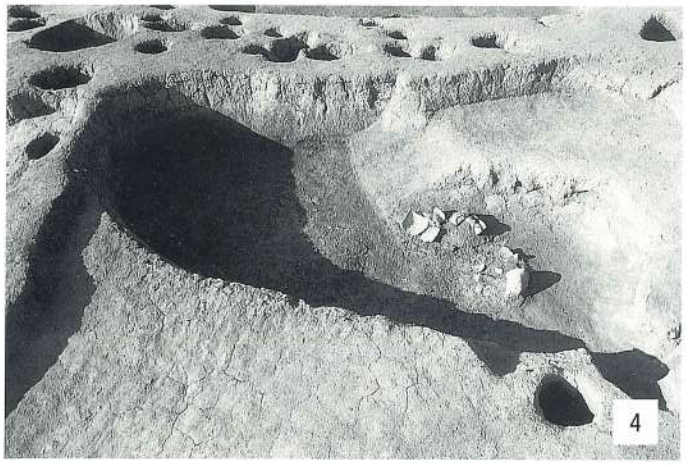
1　SK-207　―北東より―
2　SK-208　―北より―
3　SK-209　―南西より―
4　SK-211　―西より―
5　SK-213　―東より―
6　SK-214　―北より―
7　SK-215　―南より―
8　SK-216　―南東より―











堤六本谷遺跡11区

1　SK-222　―南東より―

2　SK-223　―南東より―

3　SK-224　―南東より―

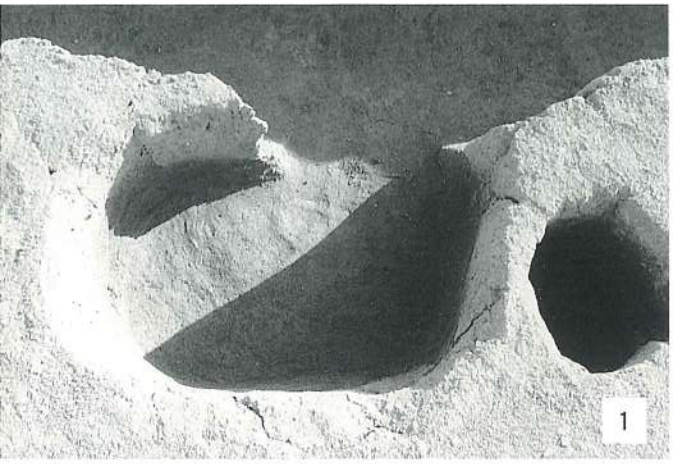
4　SK-227　―北東より―

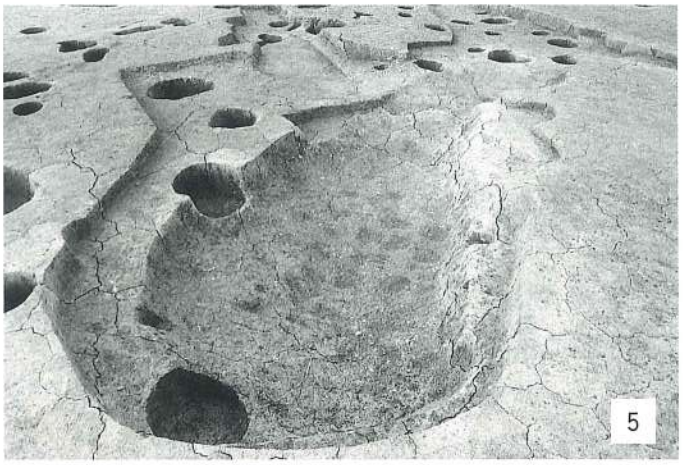
5　SK-240　―南より―

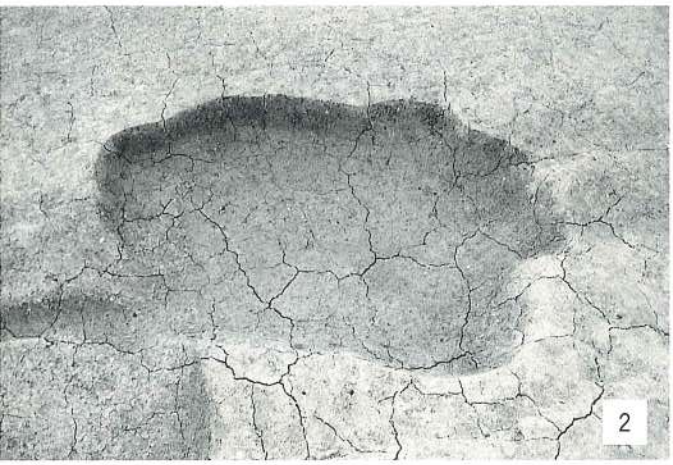
6　SK-245　―北より―

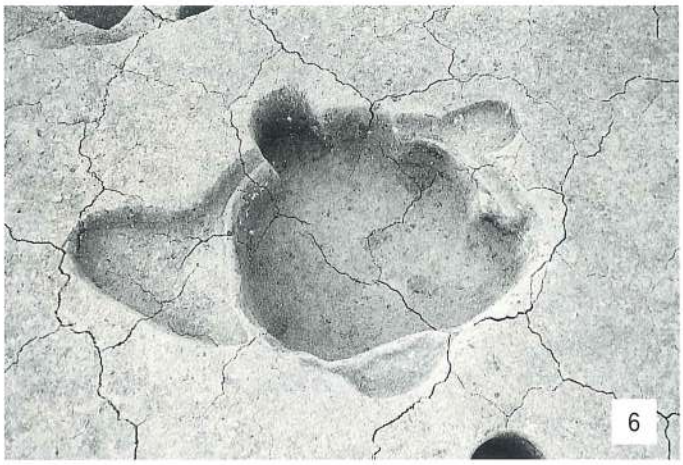
7　SK-246　―東より―

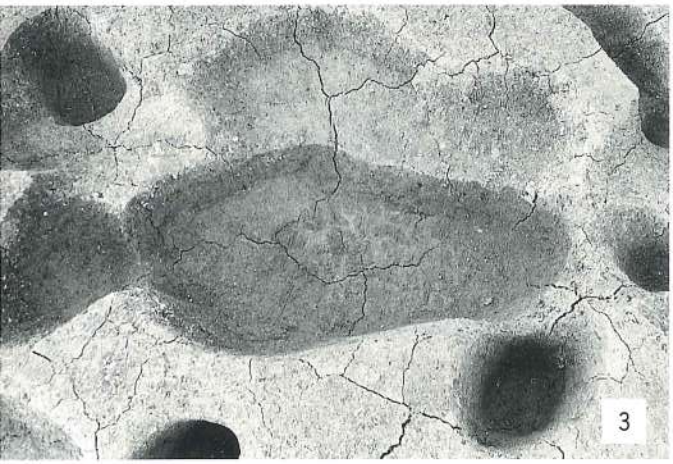
8　SK-249　―北より―

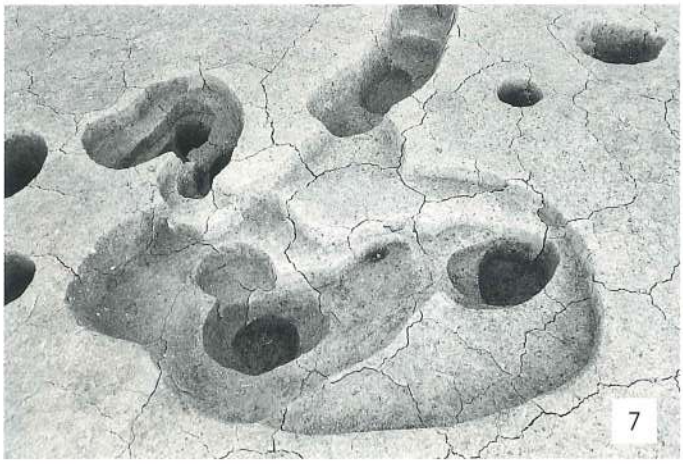


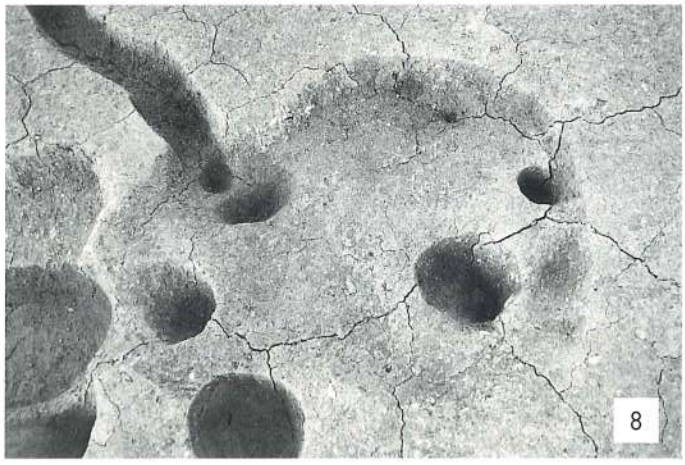






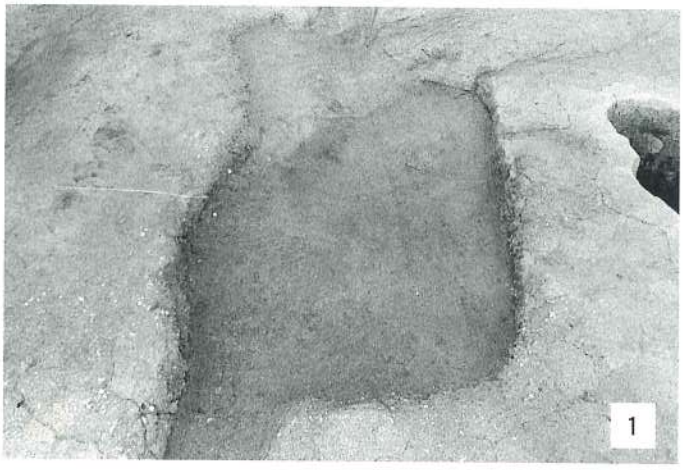


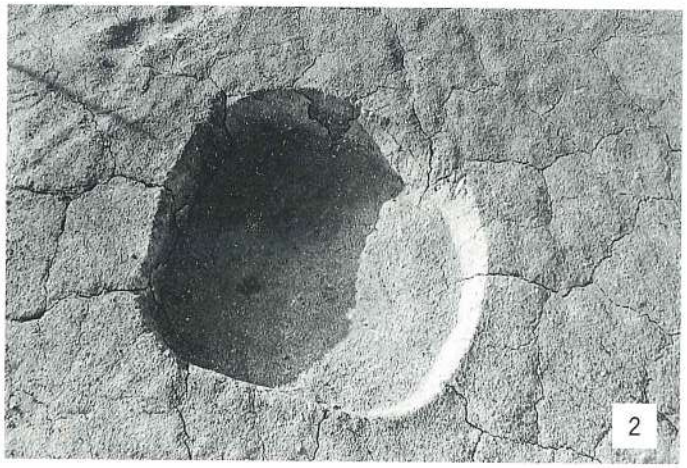


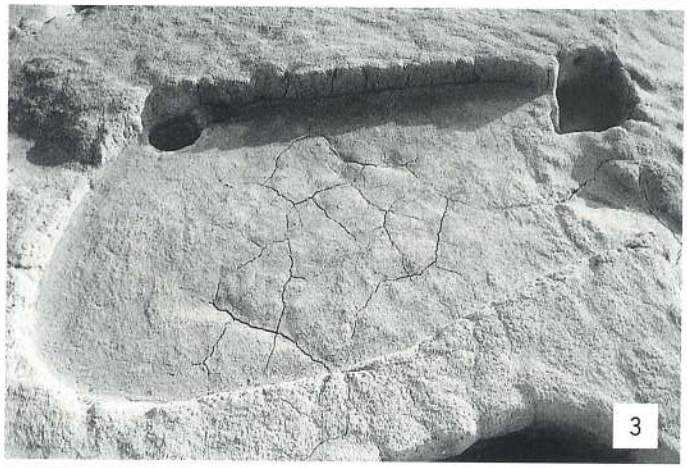


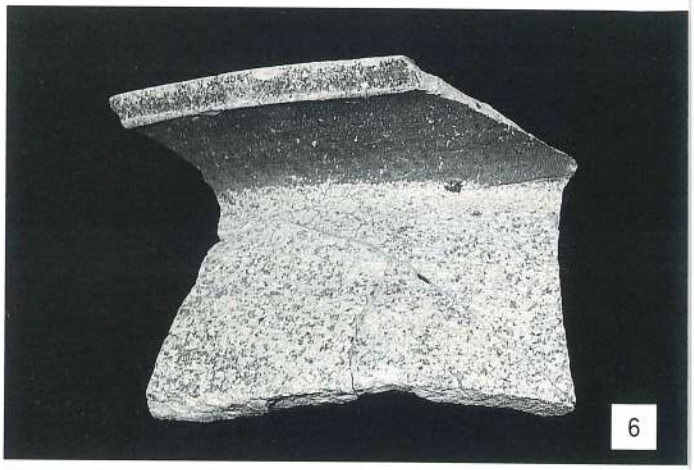
堤六本谷遺跡11区

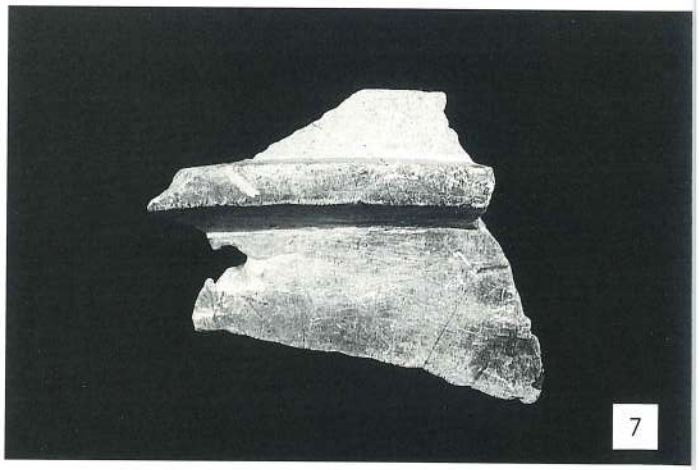
1　SK-251　―北より―
2　SK-252　―北東より―
3　SK-253　―南東より―
4　SK-254　―東より―
5　SK-255　―南東より―
6　SK-256　―北東より―
7　SK-257　―南より―
8　SK-258　―南東より―











堤六本谷遺跡11区

1　SK-261　―南より―

2　SK-263　―南東より―

3　SK-264　―北より―

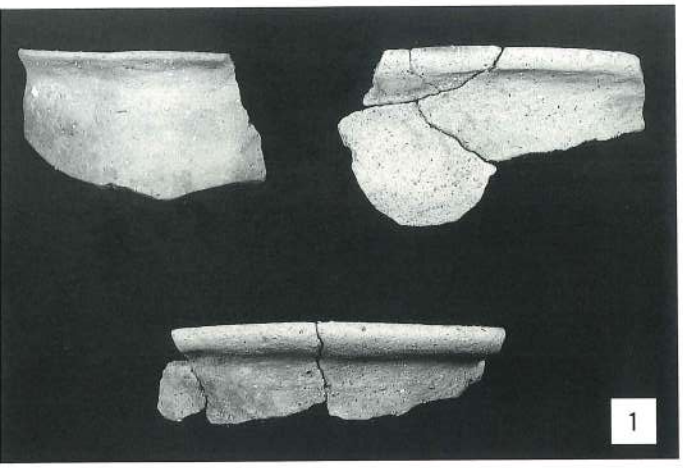
4　SX-266　―東より―

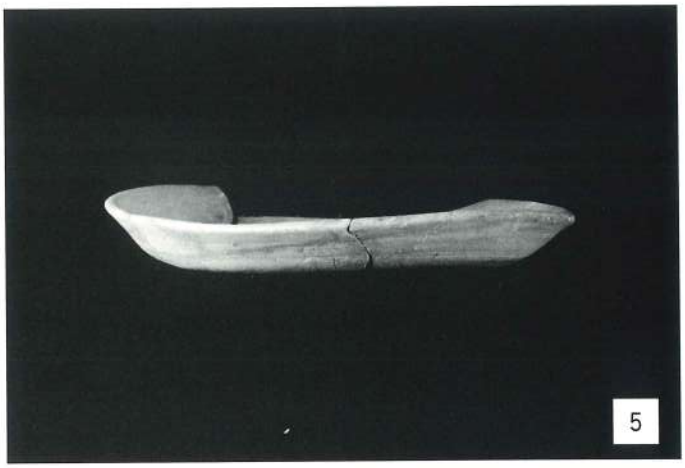
5　1　SK-113出土

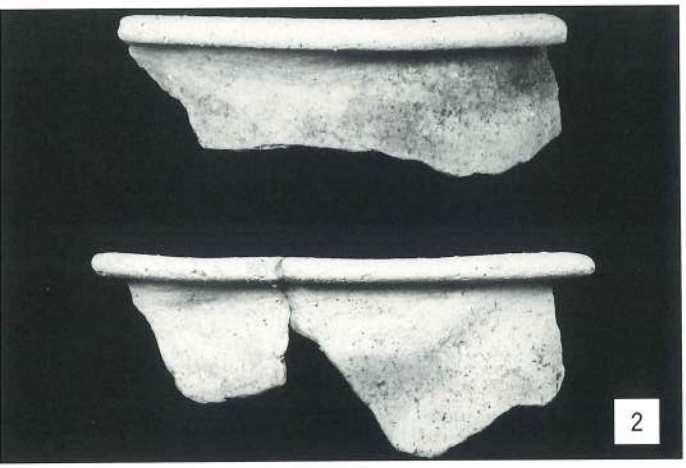
6　2　SK-115出土

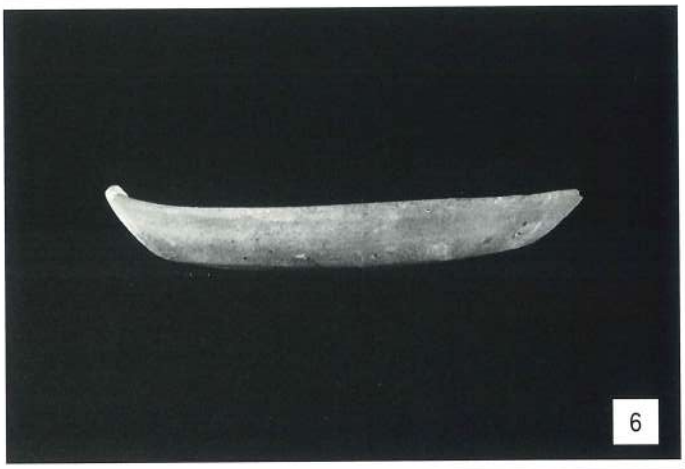
7　3　SK-115出土

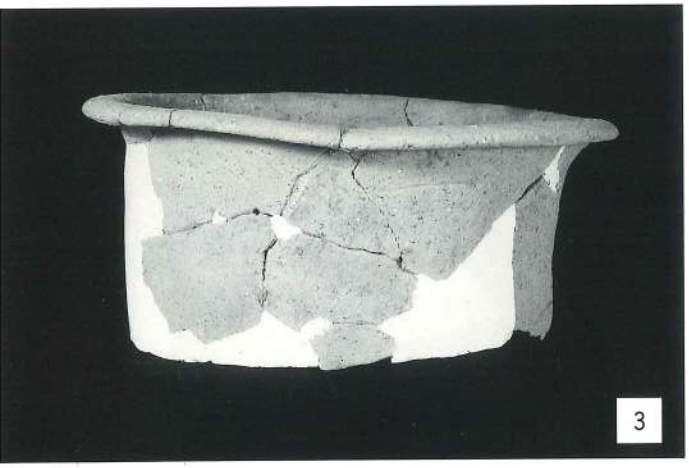
8　9　SK-117出土

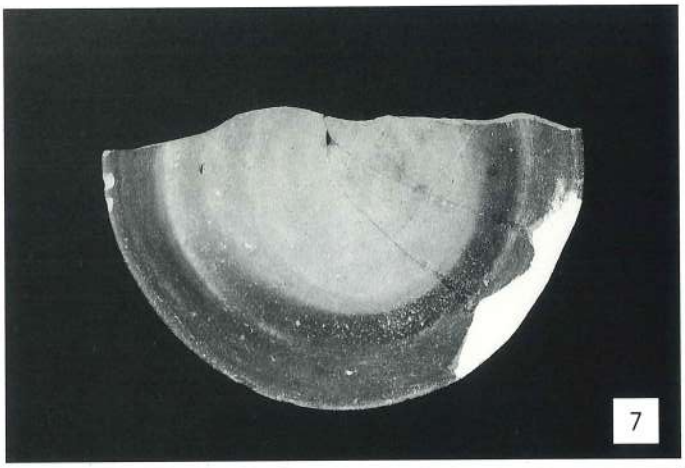


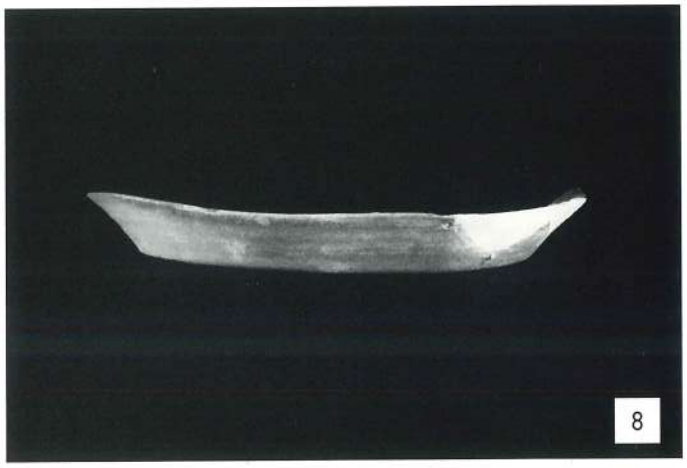












堤六本谷遺跡11区

1　上）12・13　下）14　SK-123出土

2　上）15　下）16　SK-123出土

3　17　SK-123出土

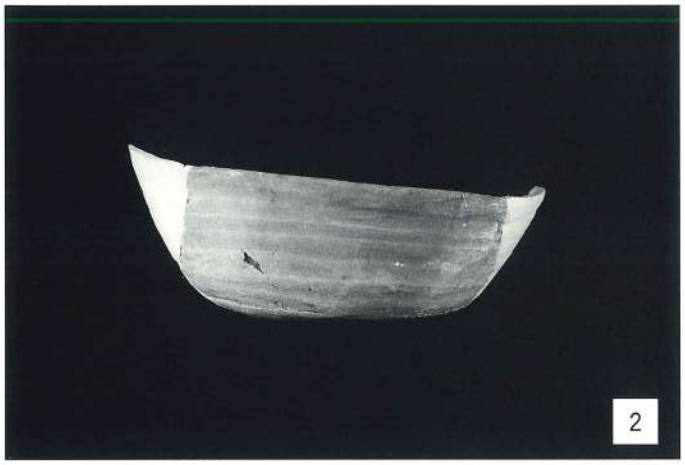
4　18　SK-123出土

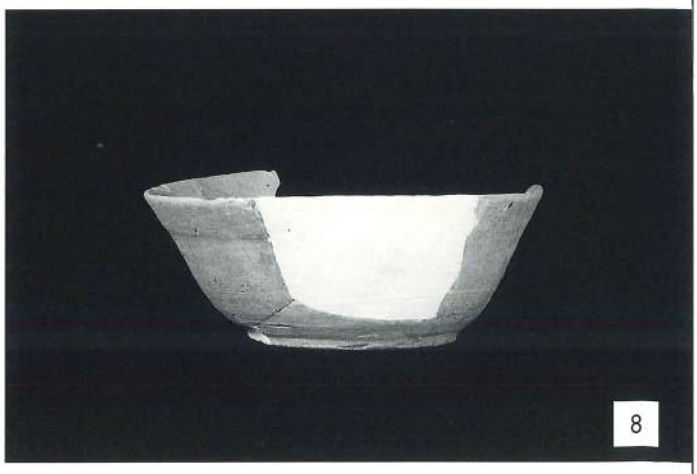
5　19　SK-123出土

6　20　SK-123出土

7　21　SK-123出土

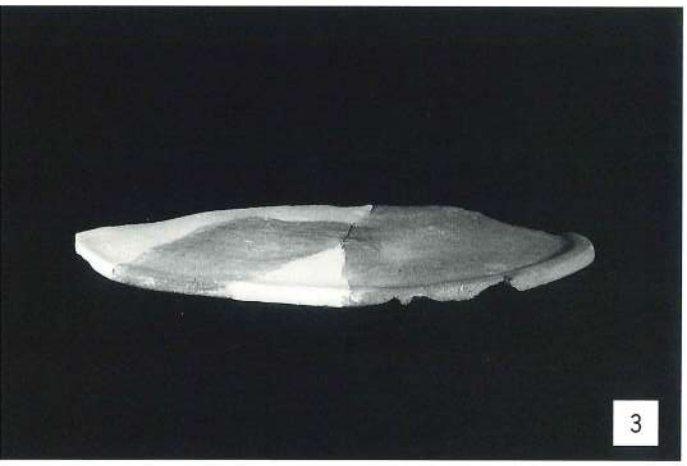
8　21　SK-123出土

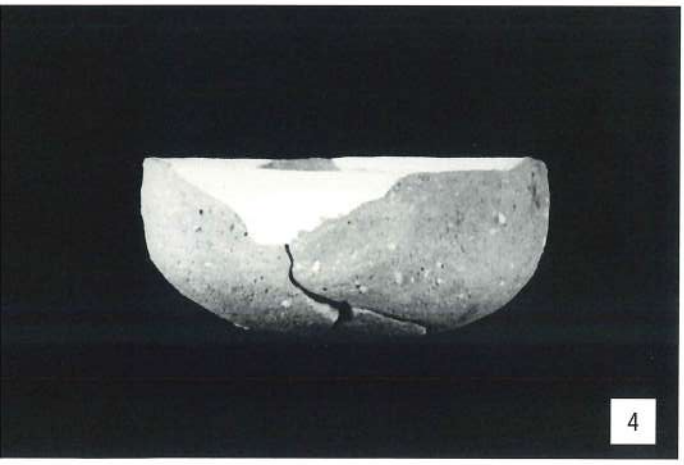




堤六本谷遺跡11区

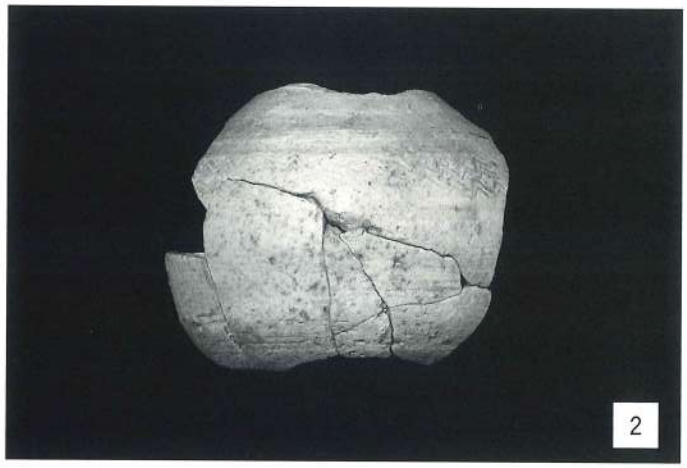
1　22　SK-123出土
2　24　SK-123出土
3　25　SK-123出土
4　26　SK-123出土
5　30　SK-123出土
6　31　SK-123出土
7　32　SK-123出土
8　33　SK-123出土

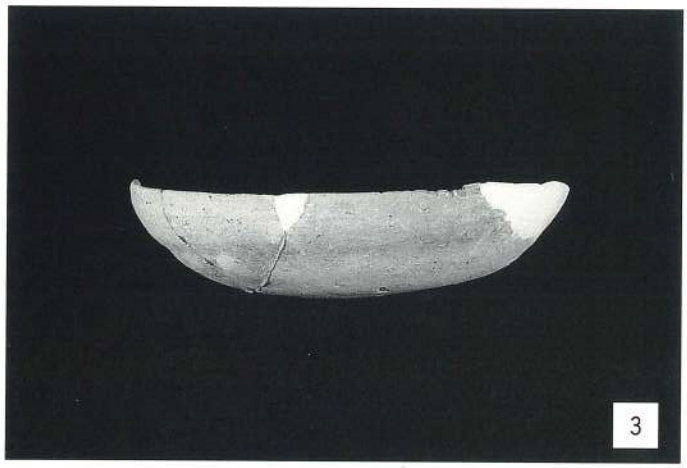


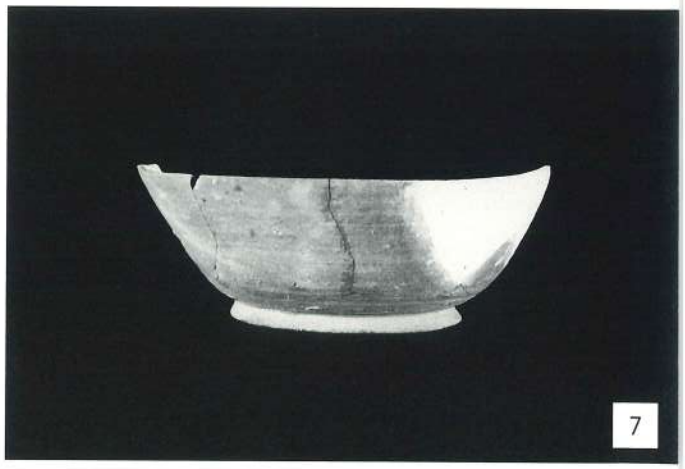


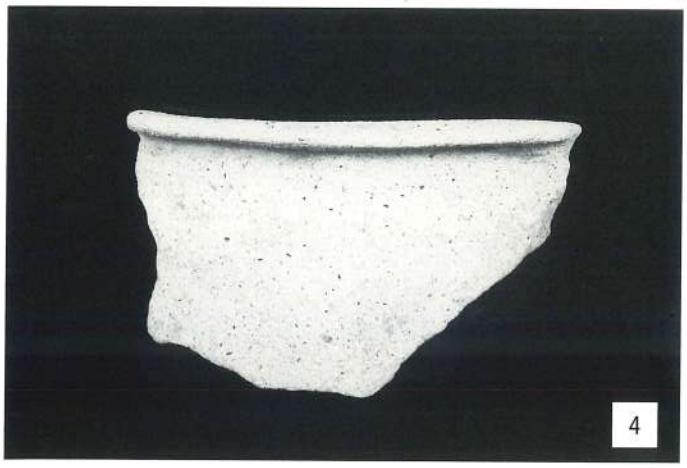
堤六本谷遺跡11区

1　34　SK-123出土
2　36　SK-123出土
3　37　SK-123出土
4　38　SK-125出土
5　42　SK-135出土
6　43　SK-135出土
7　44　SH-137出土
8　45　SH-137出土









堤六本谷遺跡11区

1　46　SH-144出土

2　47　SH-144出土

3　49　SH-144出土

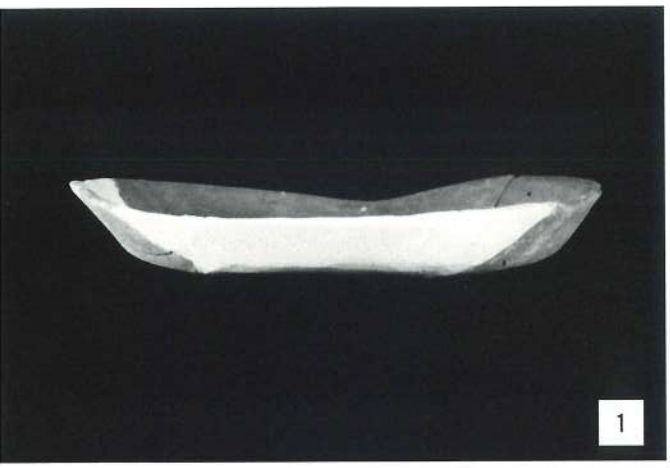
4　50　SH-145出土

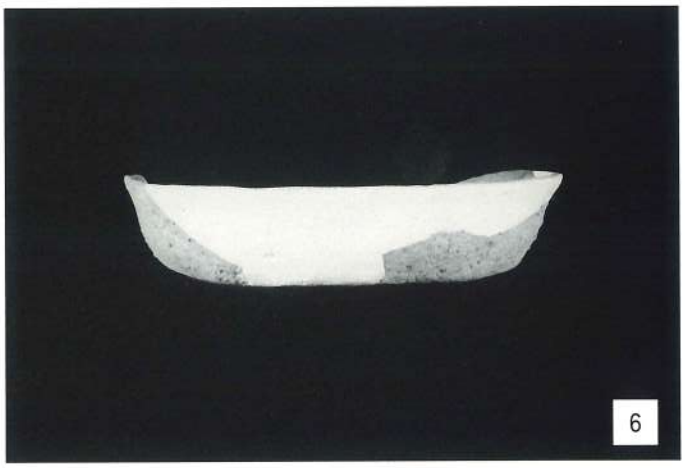
5　57　SK-148出土

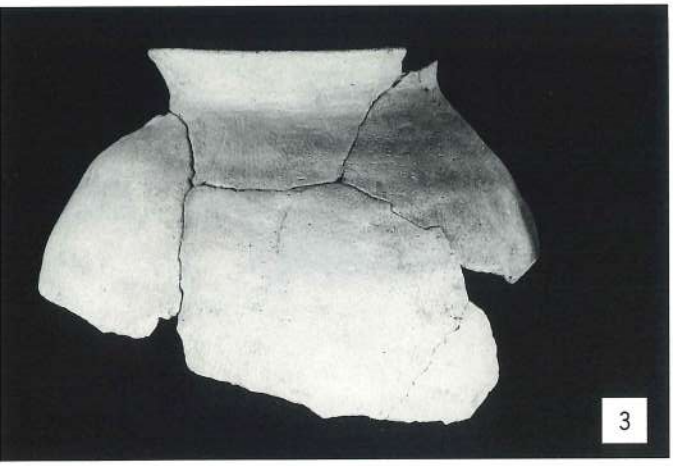
6　58　SK-148出土

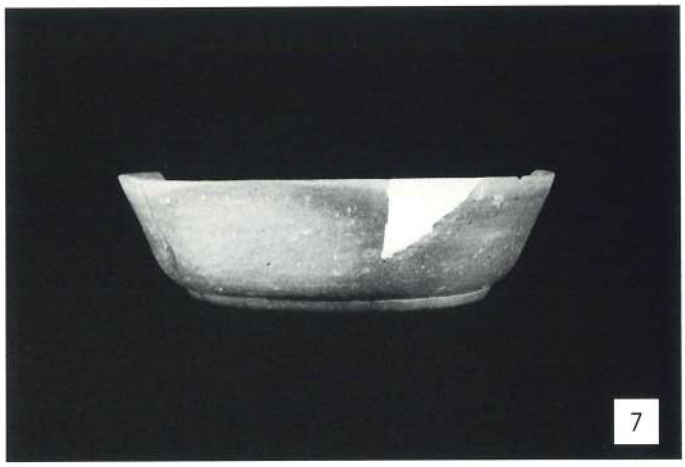
7　59　SH-148出土

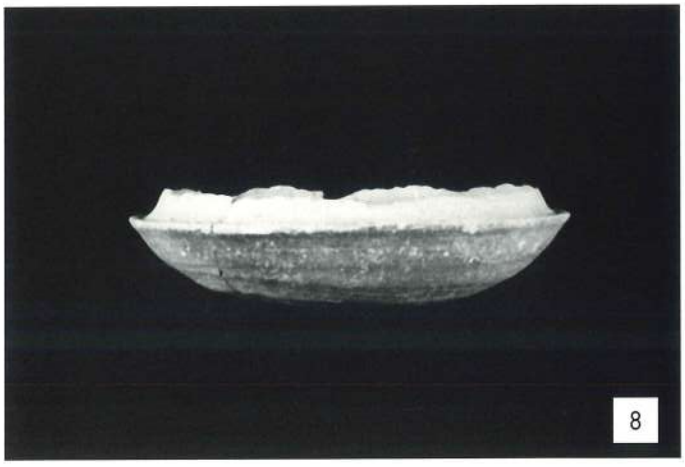
8　60　SH-148出土





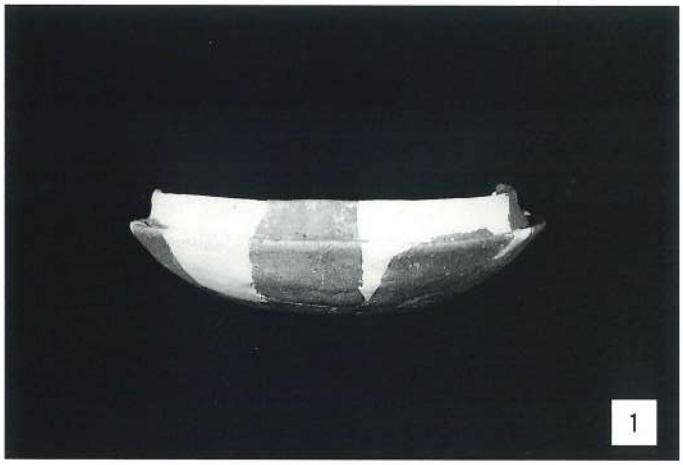


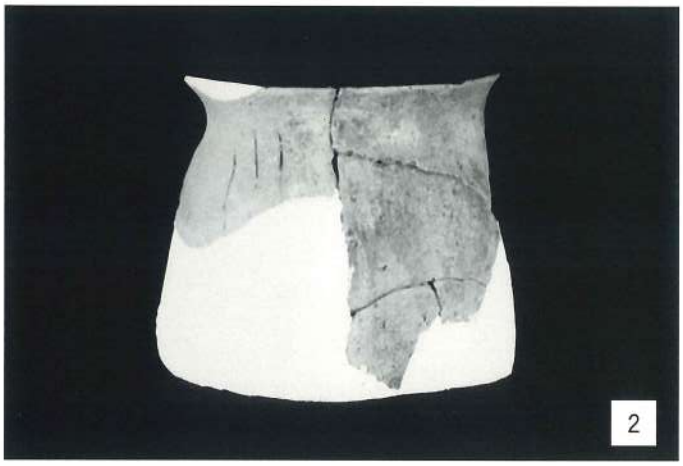


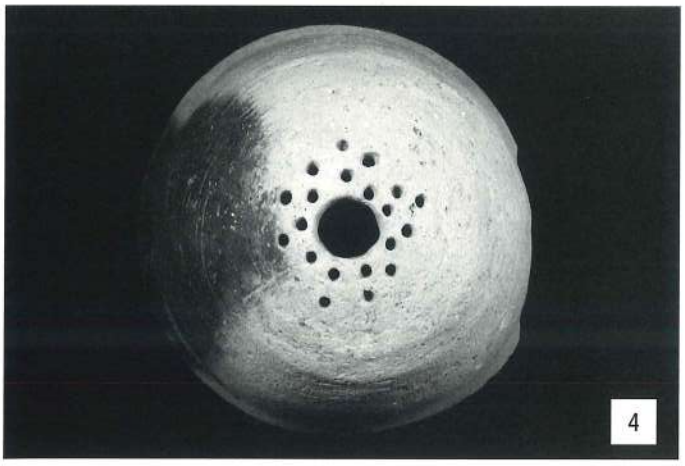


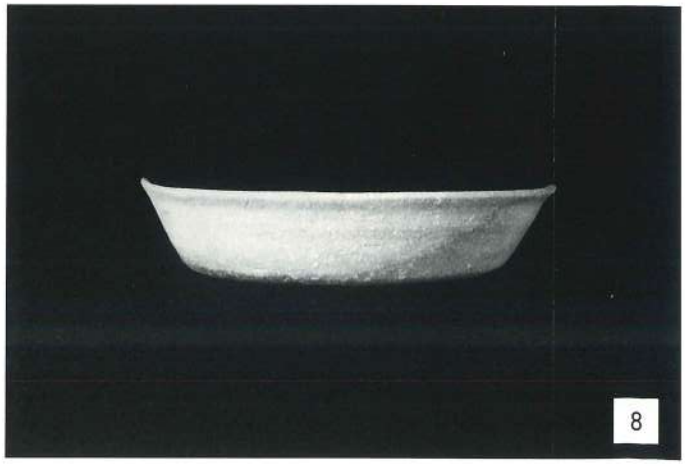
堤六本谷遺跡11区

1　61　SK-148出土
2　63　SK-149出土
3　64　SH-156出土
4　65　SH-156出土
5　66　SH-156出土
6　69　SH-156出土
7　71　SH-156出土
8　77　SH-158出土









堤六本谷遺跡11区

1　79　SK-159出土

2　81　SK-159出土

3　82　SH-160出土

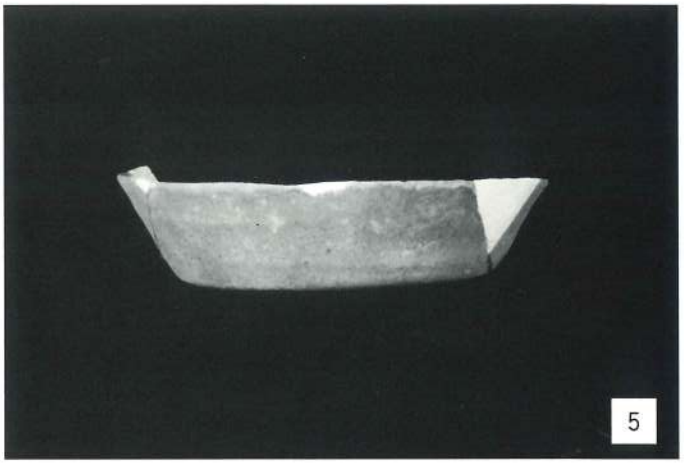
4　82　SH-160出土

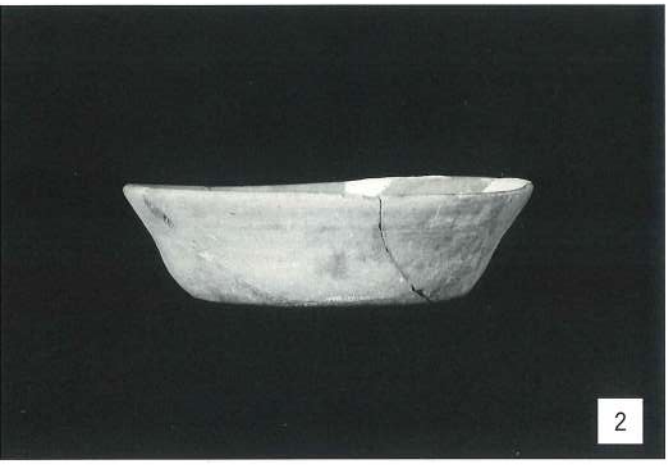
5　83　SH-160出土

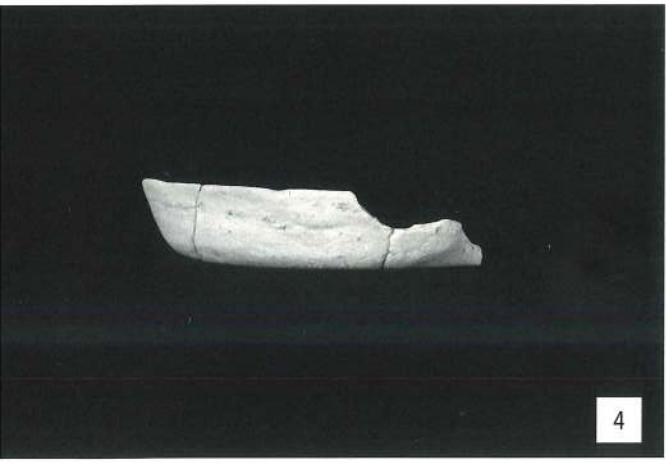
6　85　SH-163出土

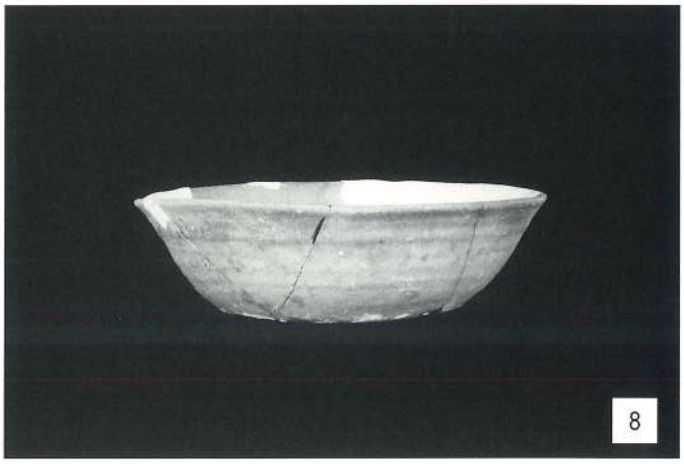
7　89　SH-163出土

8　91　SH-163出土



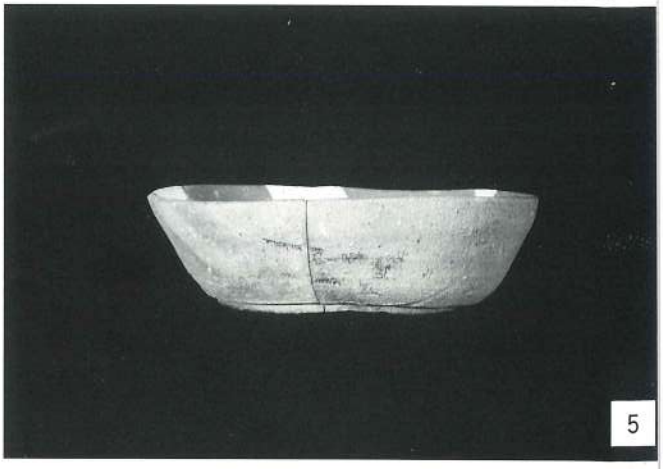


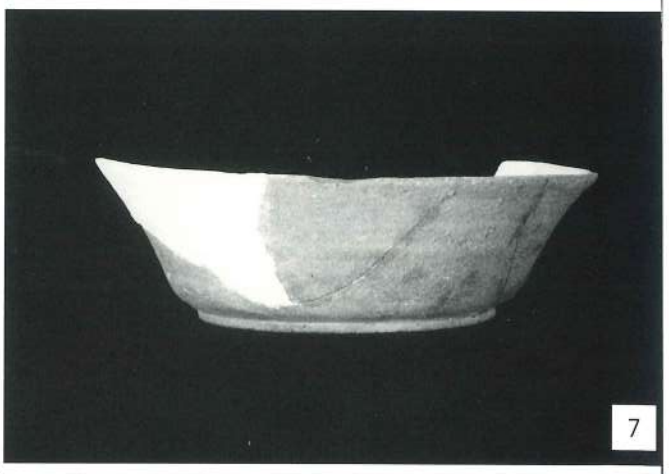


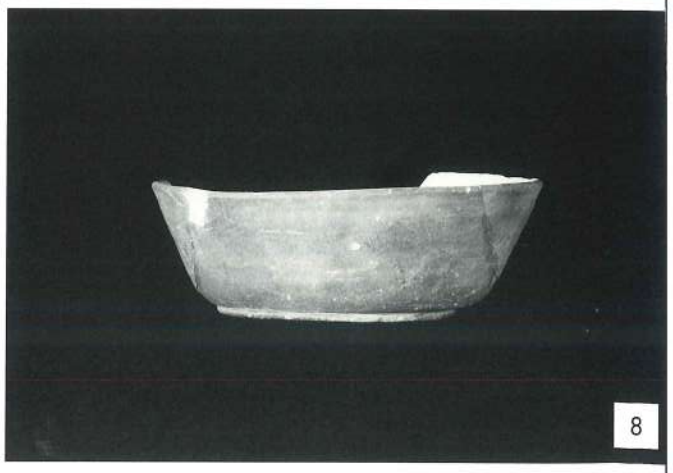


堤六本谷遺跡11区

1　95　SH-164出土
2　96　SH-164出土
3　97　SH-164出土
4　98　SH-164出土
5　99　SH-164出土
6　100　SH-164出土
7　101　SH-164出土
8　102　SH-164出土







堤六本谷遺跡11区

1　103　SH-164出土

2　104　SH-164出土

3　105　SH-164出土

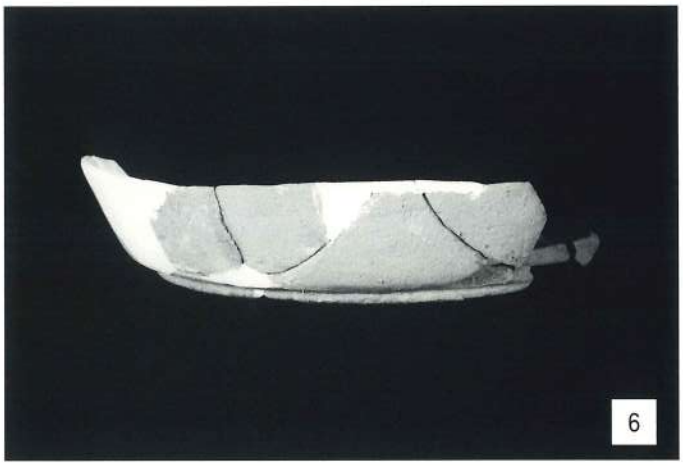
4　106　SH-164出土

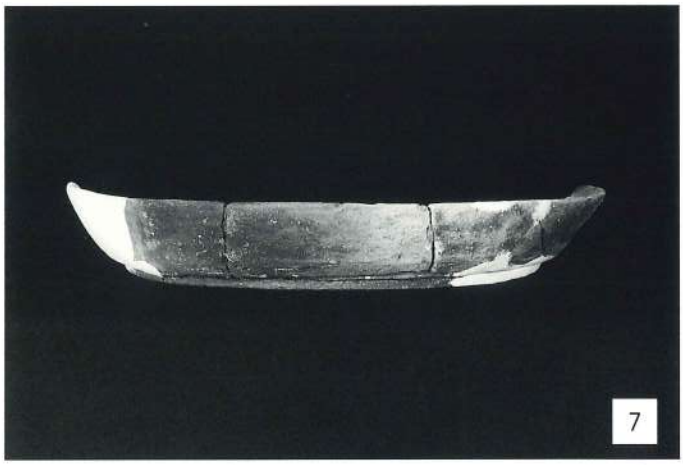
5　107　SH-164出土

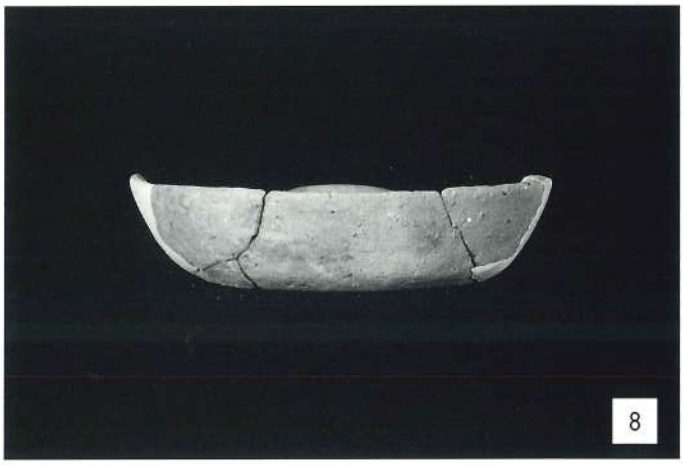
6　108　SH-164出土

7　109　SH-164出土

8　110　SH-164出土

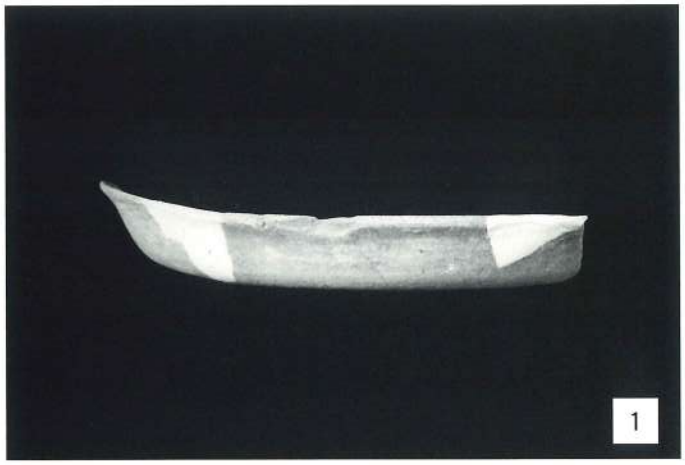


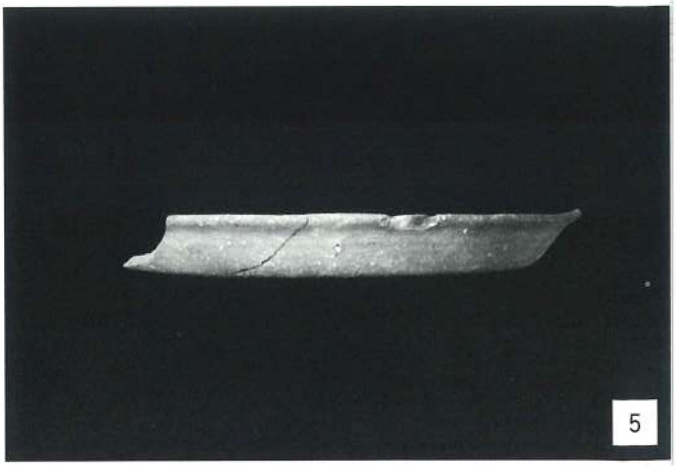


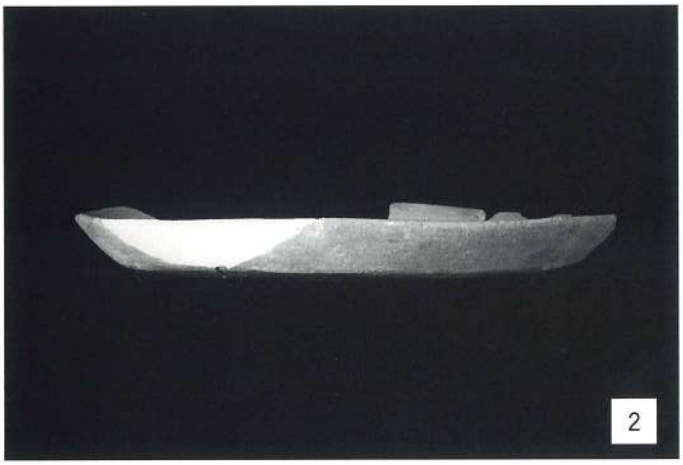


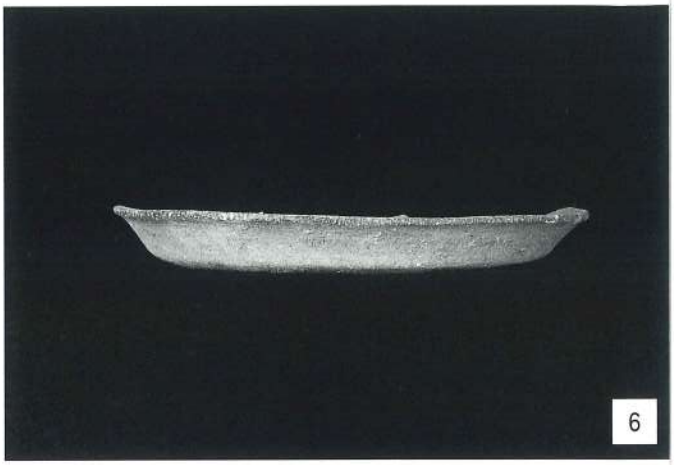
堤六本谷遺跡11区

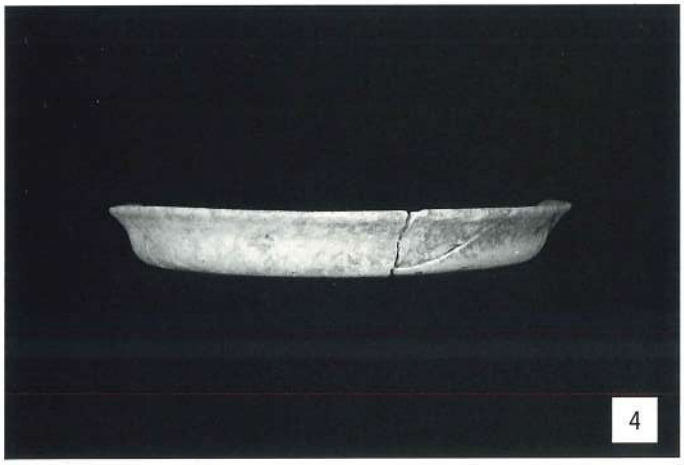
1　111　SH-164出土
2　112　SH-164出土
3　113　SH-164出土
4　114　SH-164出土
5　116　SH-164出土
6　119　SH-164出土
7　122　SH-164出土
8　123　SH-164出土





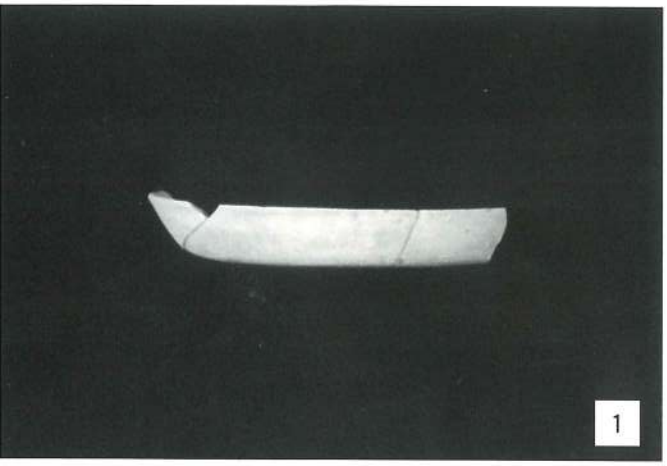


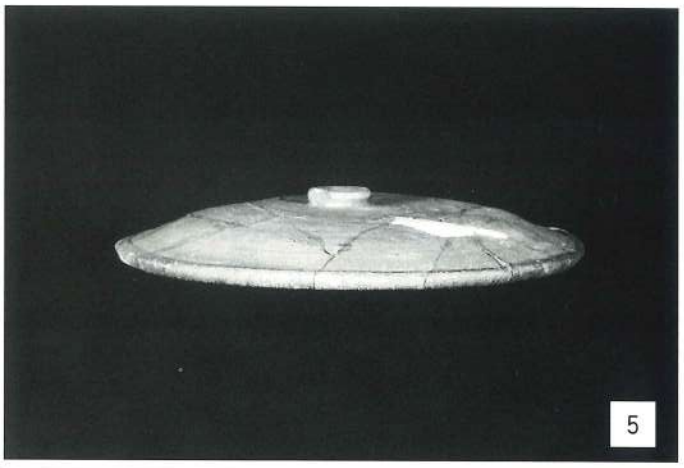


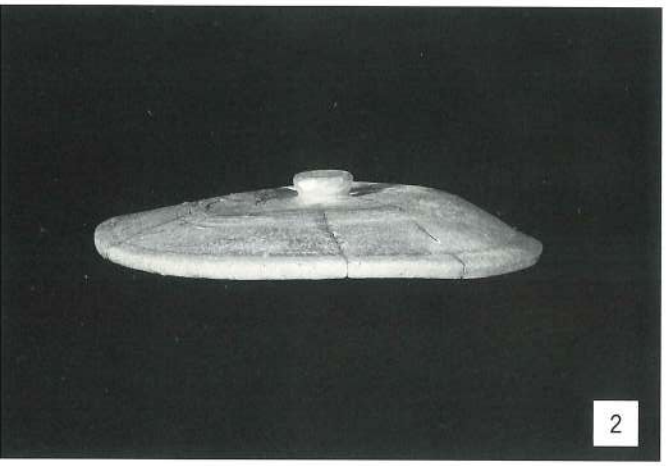


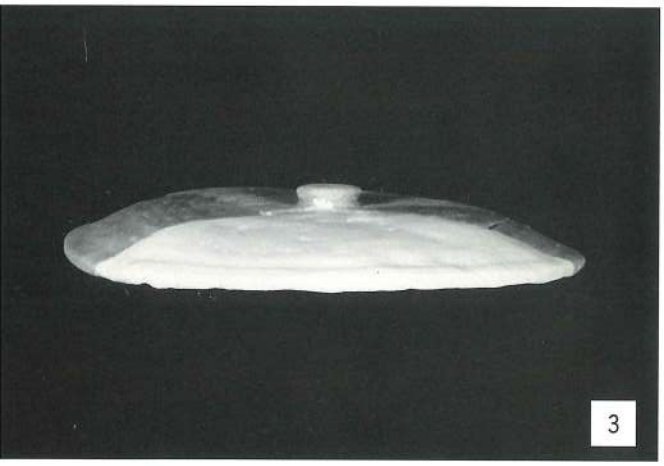
堤六本谷遺跡11区

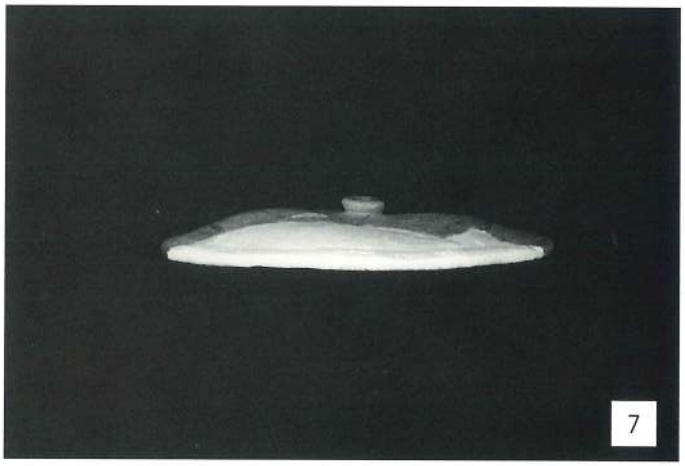
1　124　SH-164出土
2　125　SH-164出土
3　127　SH-164出土
4　128　SH-164出土
5　129　SH-164出土
6　130　SH-164出土
7　133　SH-164出土
8　135　SH-164出土





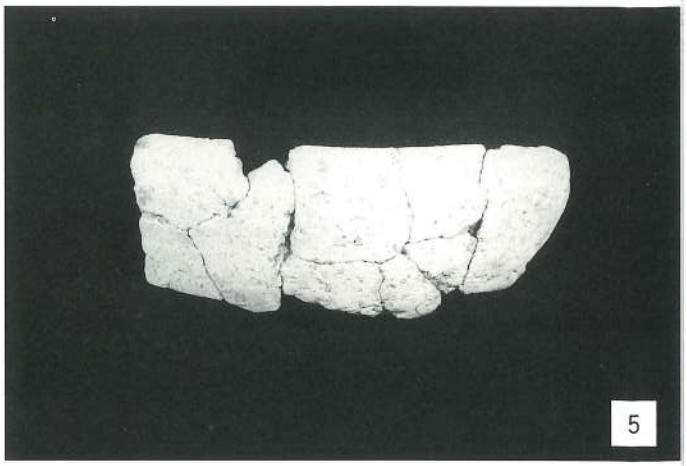


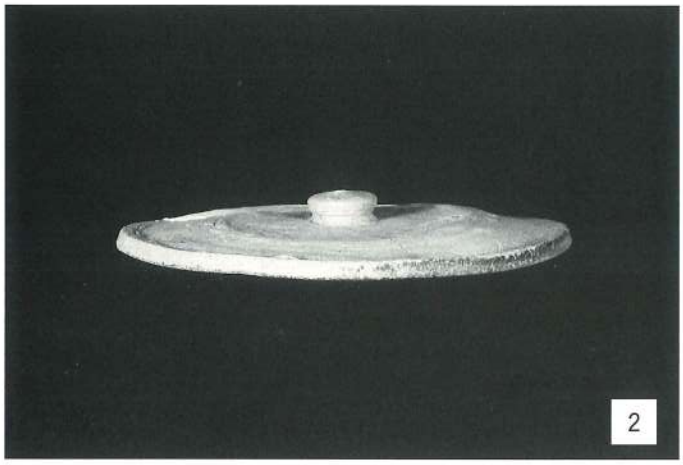


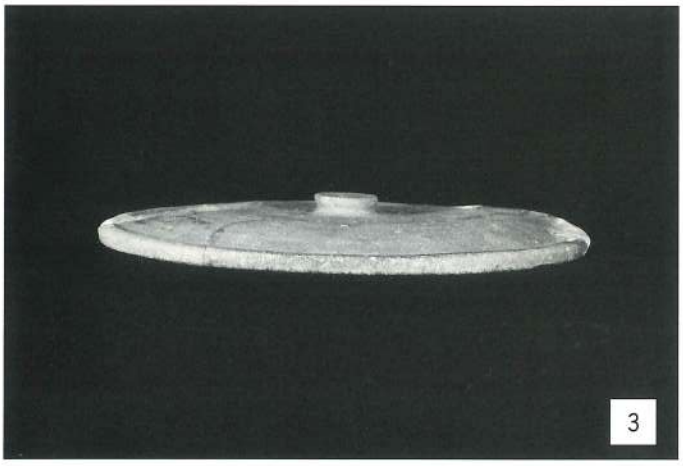


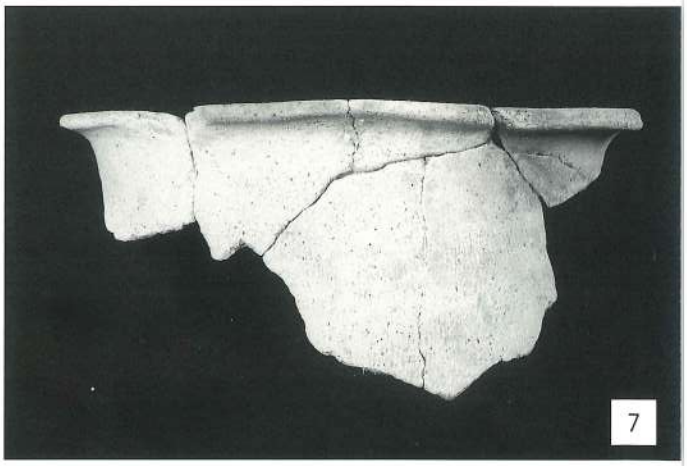
堤六本谷遺跡11区

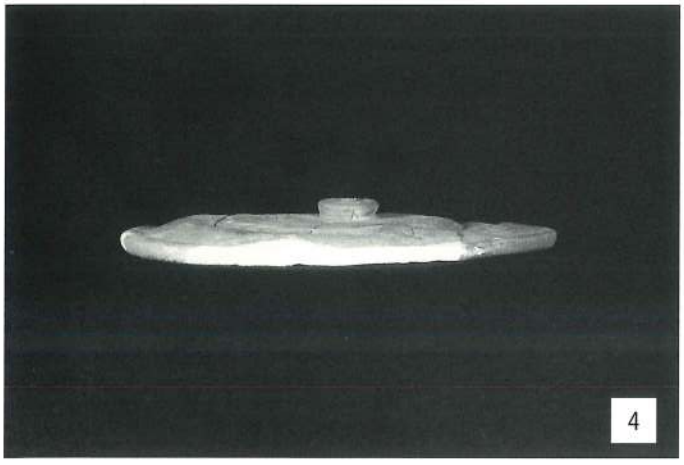
1　136　SH-164出土
2　137　SH-164出土
3　138　SH-164出土
4　139　SH-164出土
5　140　SH-164出土
6　141　SH-164出土
7　142　SH-164出土
8　143　SH-164出土

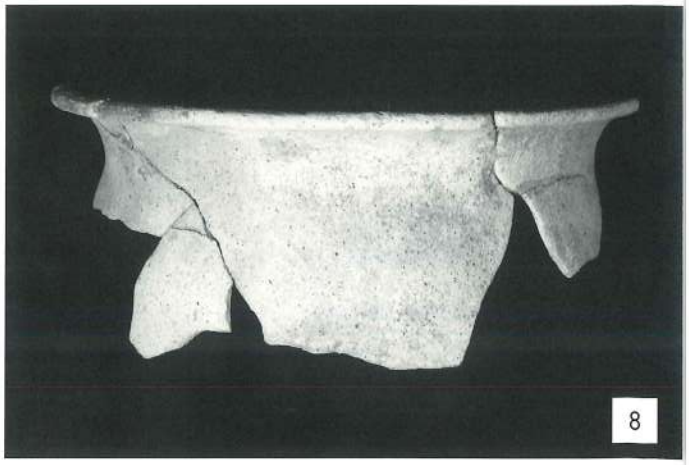






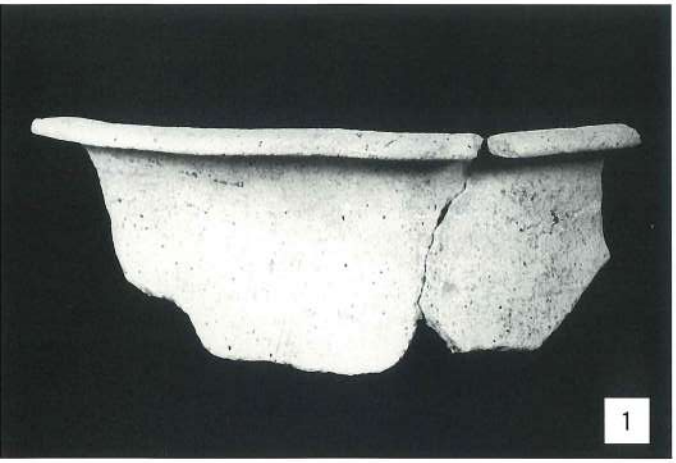


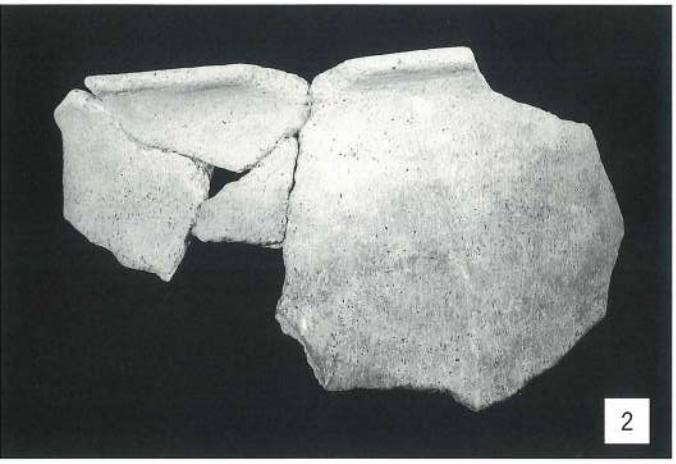


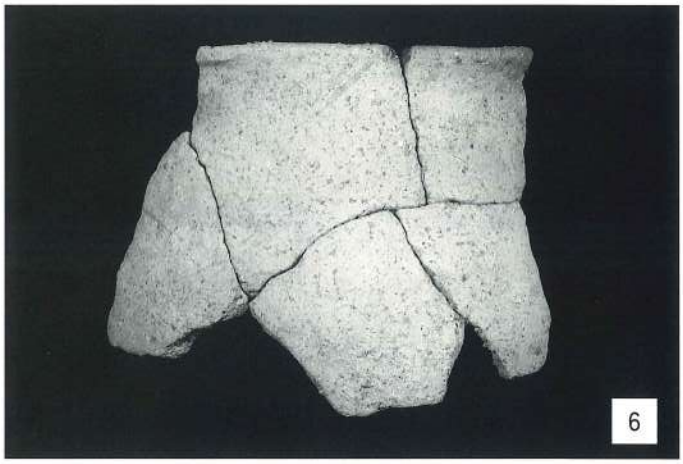


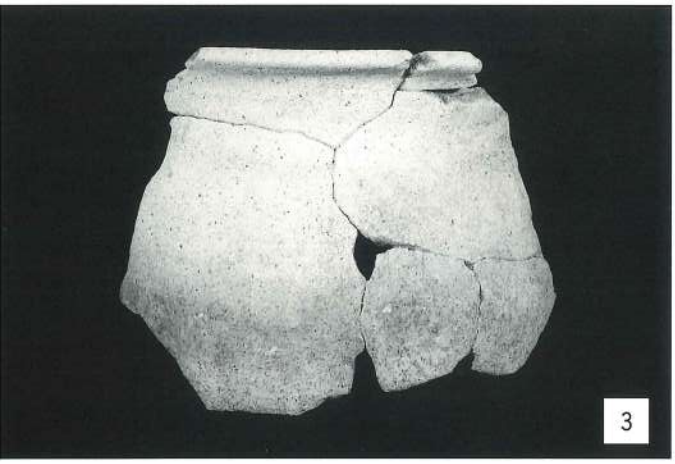
堤六本谷遺跡11区

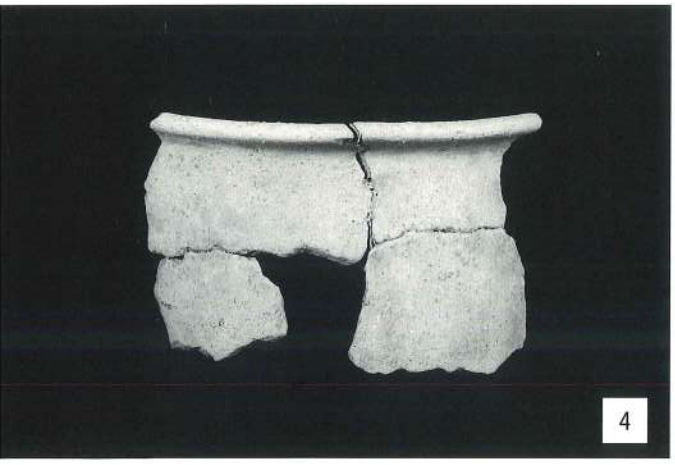
1　144　SH-164出土
2　145　SH-164出土
3　117　SH-164出土
4　148　SH-164出土
5　152　SH-164出土
6　155　SH-164出土
7　156　SH-164出土
8　157　SH-164出土

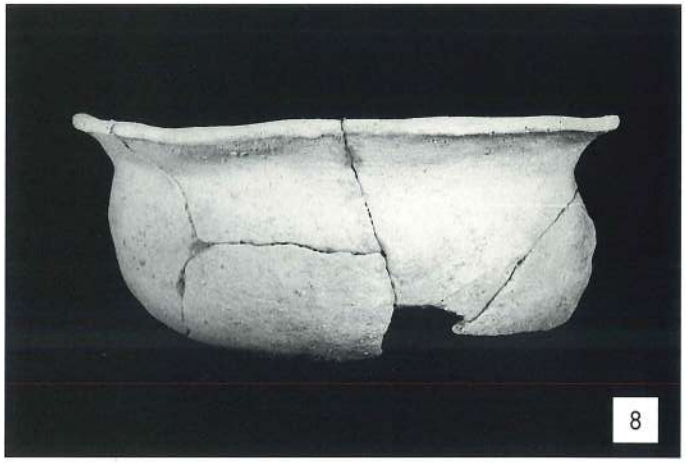












堤六本谷遺跡11区

1　158　SH-164出土

2　159　SH-164出土

3　160　SH-164出土

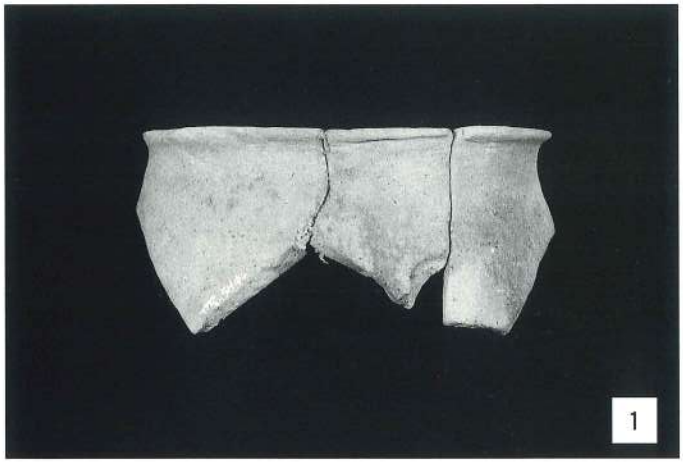
4　164　SH-164出土

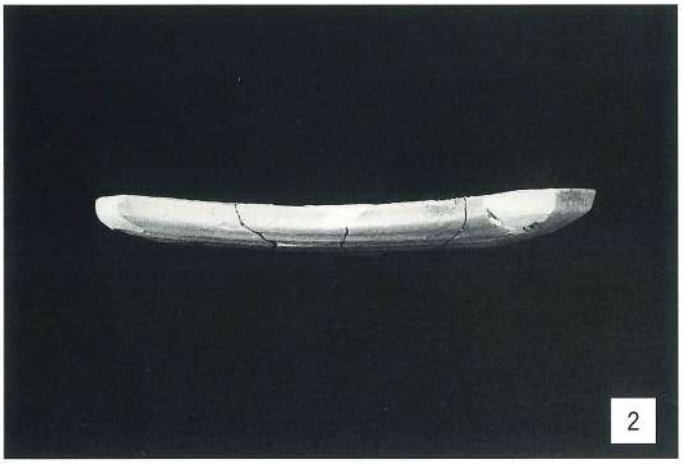
5　169　SH-164出土

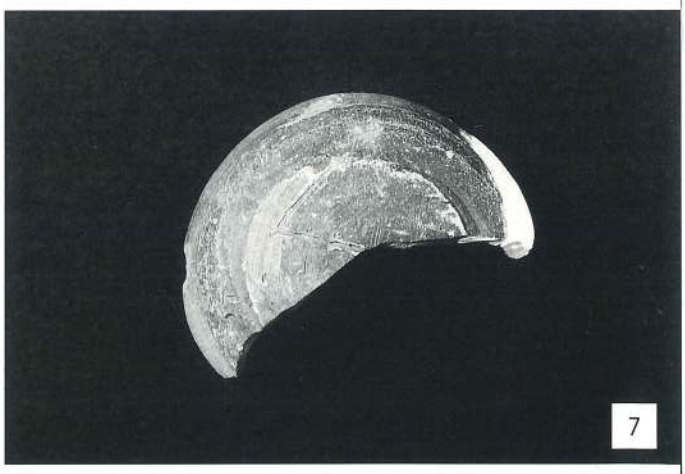
6　170　SH-164出土

7　上）173・174　下）175　SH-164出土

8　176　SH-164出土







堤六本谷遺跡11区

1　177　SH-164出土

2　180　SH-164出土

3　181　SH-164出土

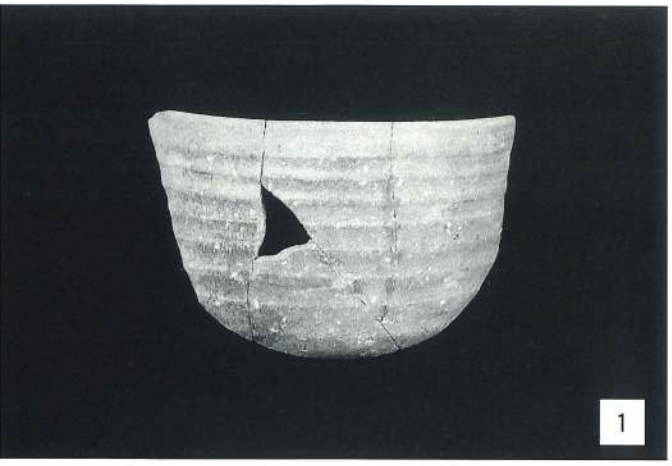
4　182　SK-167出土

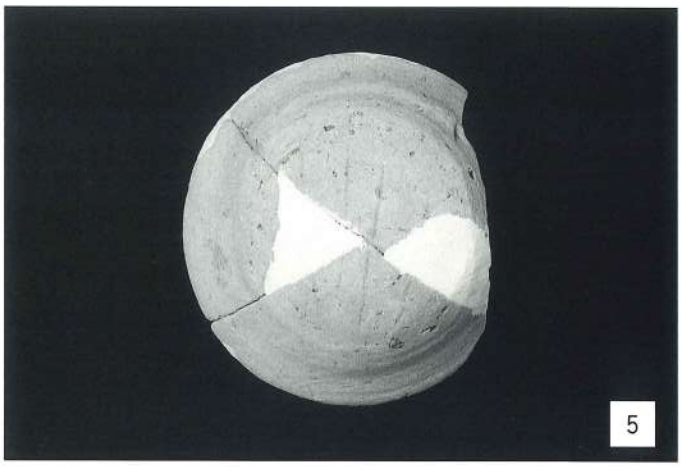
5　183　SK-167出土

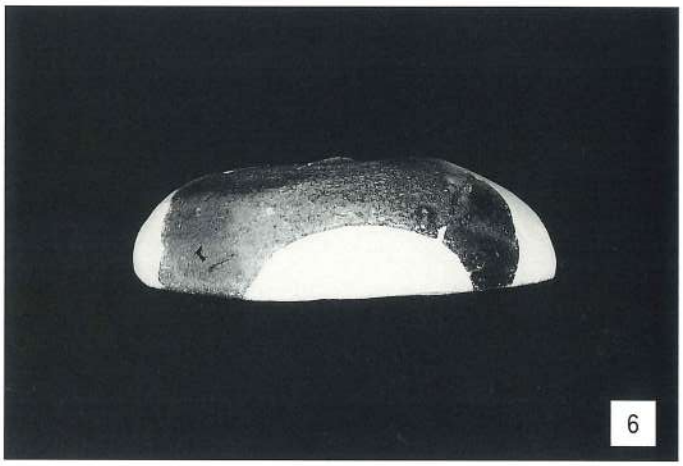
6　184　SK-172出土

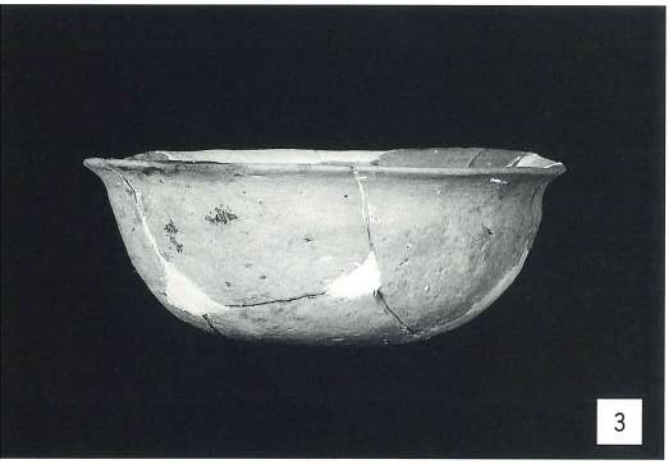
7　186　SK-172出土

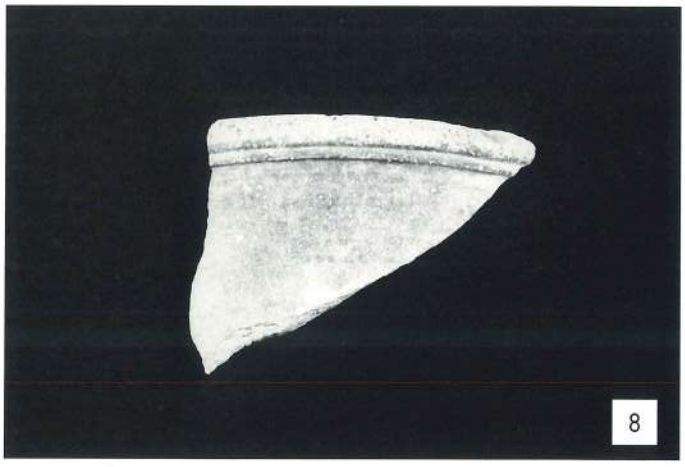
8　186　SK-172出土





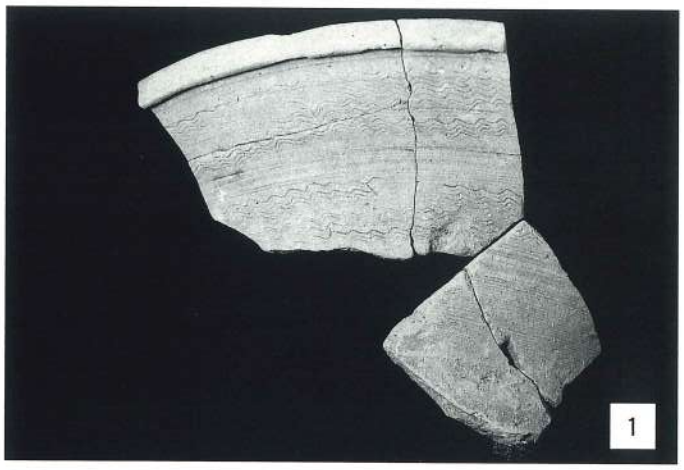


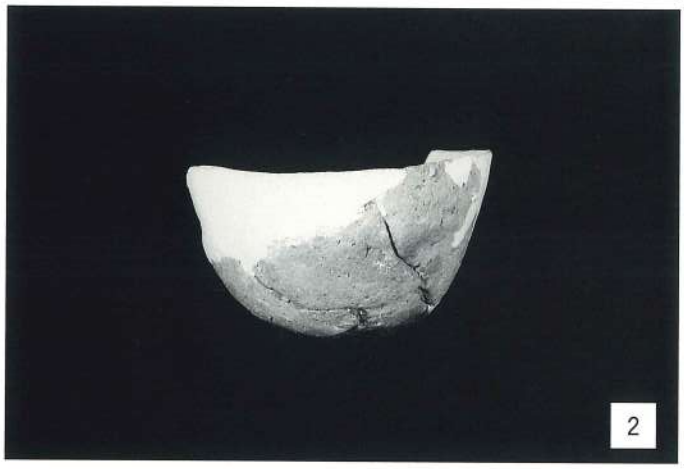


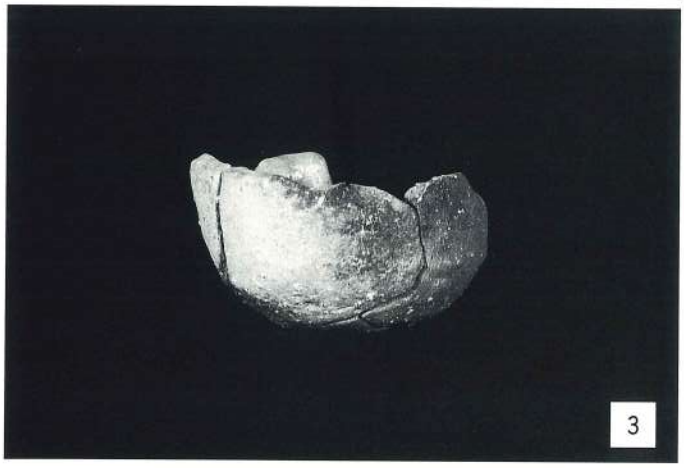


堤六本谷遺跡11区

1　188　SK-172出土
2　189　SK-172出土
3　190　SK-172出土
4　192　SH-174出土
5　194　SH-174出土
6　195　SH-174出土
7　197　SH-174出土
8　198　SH-174出土







堤六本谷遺跡11区

1　199　SH-174出土

2　203　SH-174出土

3　204　SH-174出土

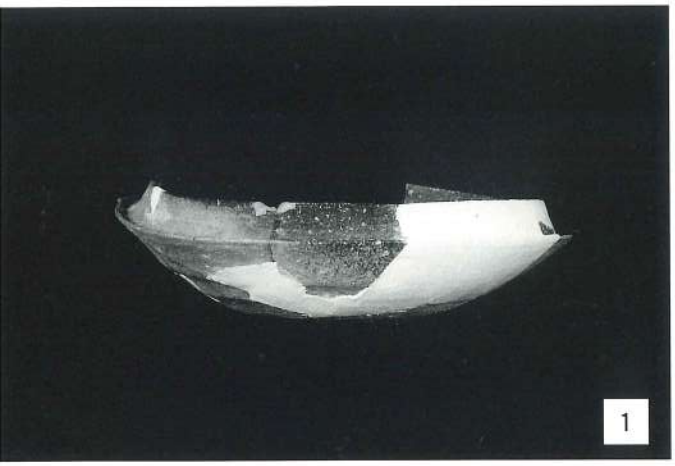
4　206　SH-174出土

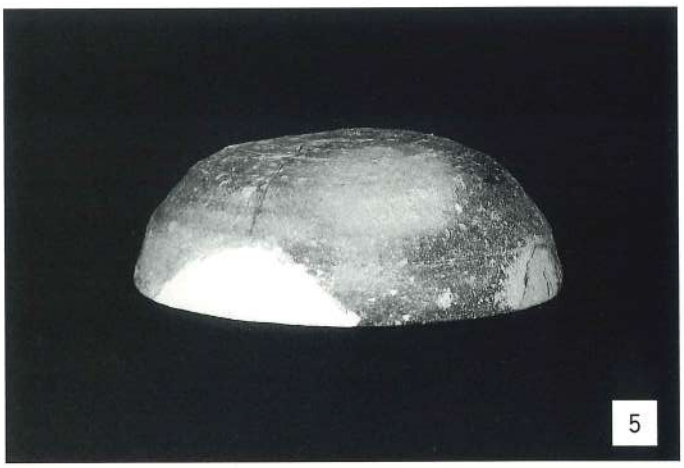
5　207　SH-174出土

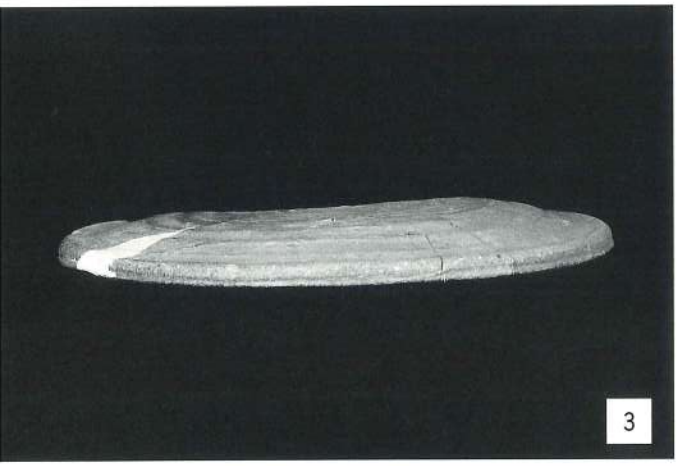
6　208　SH-174出土

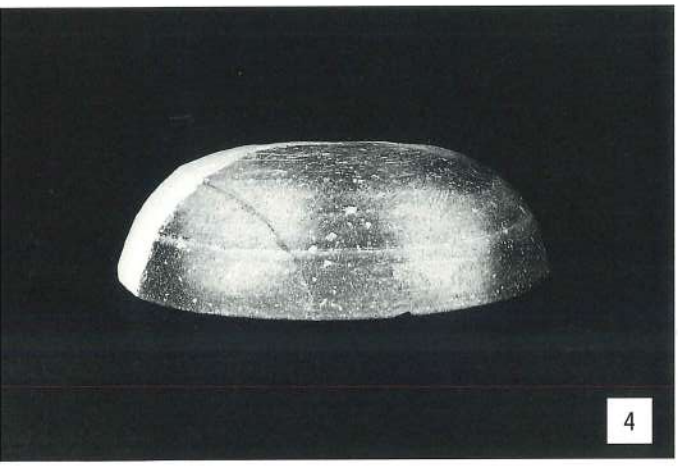
7　211　SH-175出土

8　212　SH-175出土



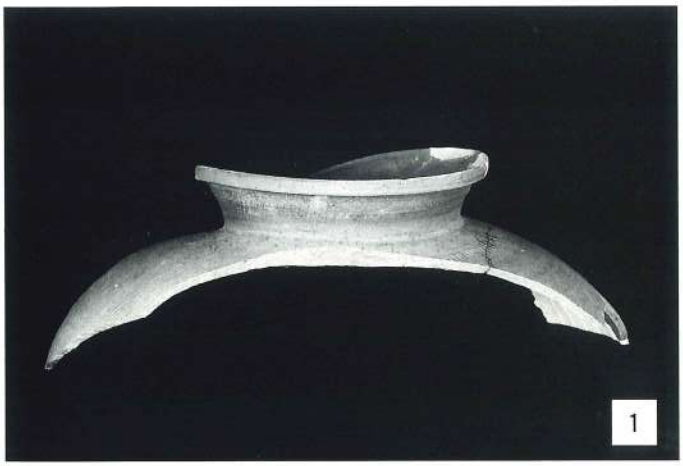


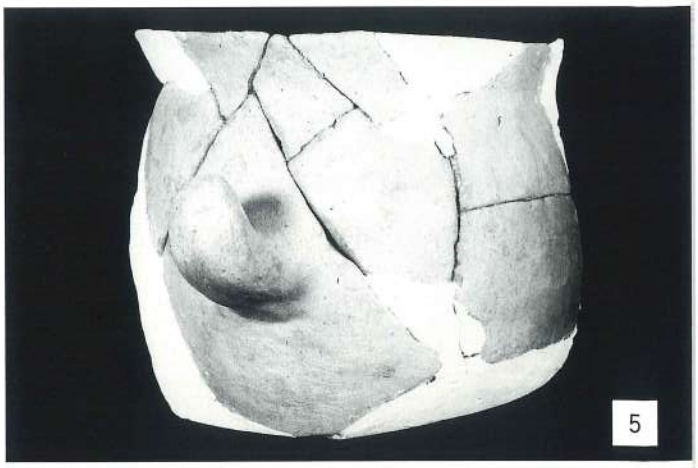


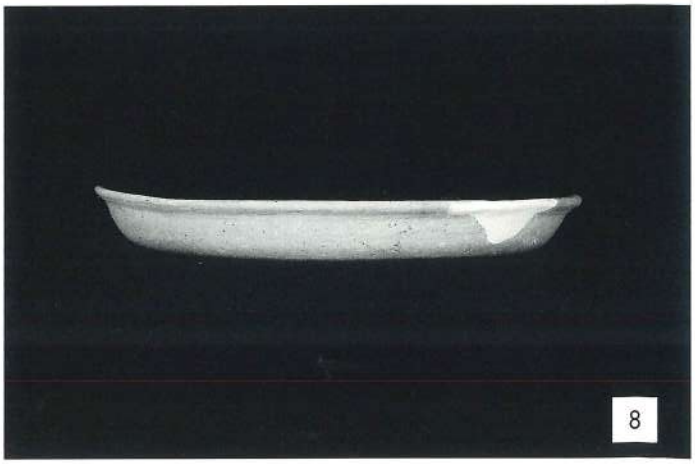


堤六本谷遺跡11区

1　214　SH-175出土
2　215　SH-175出土
3　217　SH-175出土
4　218　SH-175出土
5　219　SH-175出土
6　221　SH-175出土
7　222　SH-175出土
8　223　SH-175出土







堤六本谷遺跡11区

1　224　SH-175出土

2　226　SH-175出土

3　232　SK-178出土

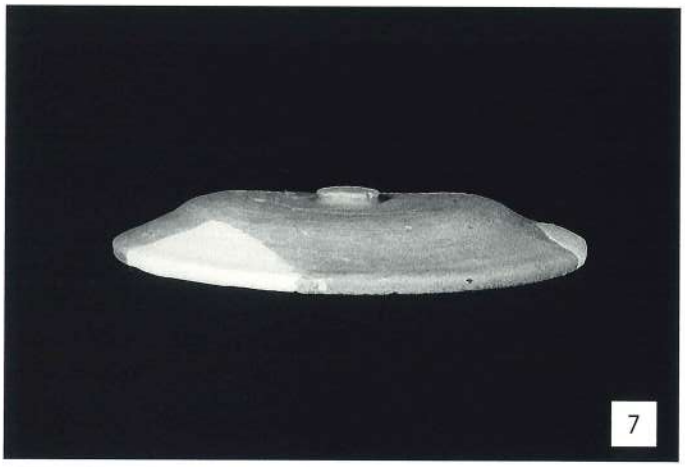
4　234　SK-178出土

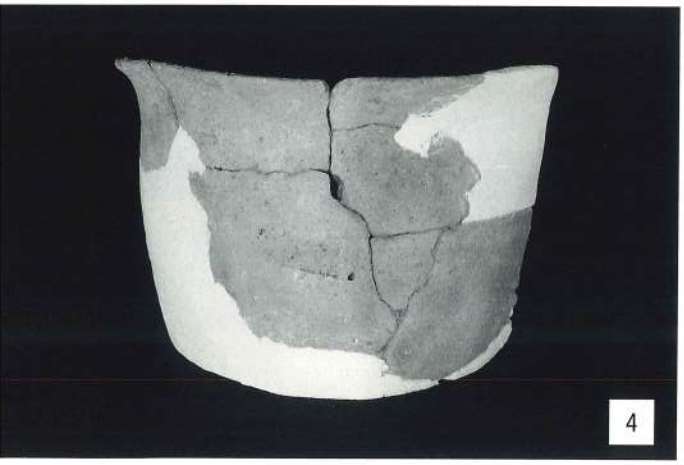
5　237　SK-178出土

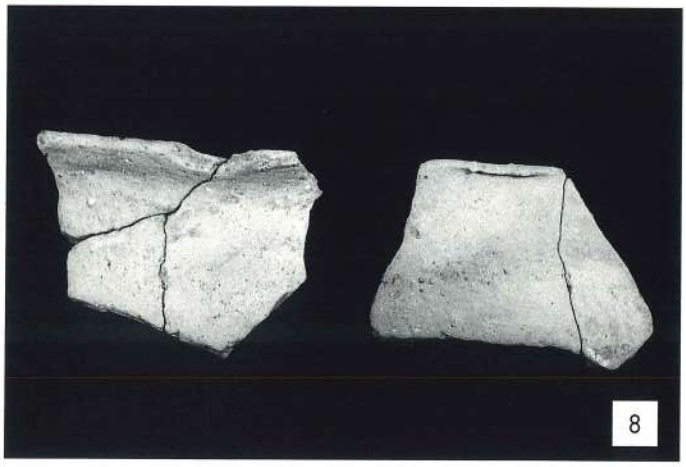
6　238　SK-178出土

7　239　SK-187出土

8　240　SK-187出土







堤六本谷遺跡11区

1　242　SK-187出土

2　245　SK-187出土

3　246　SK-187出土

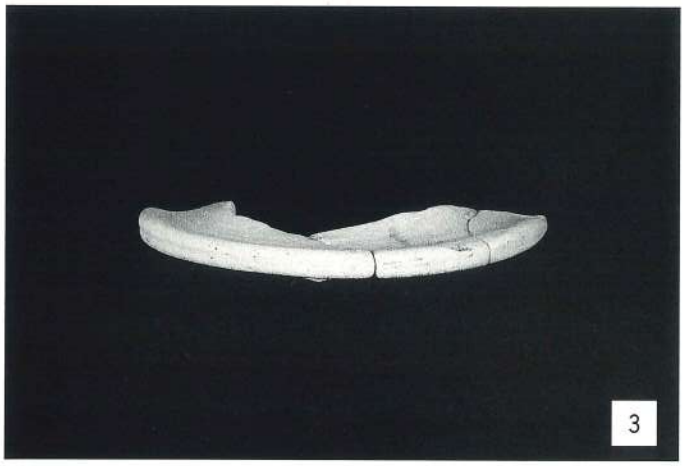
4　249　SK-187出土

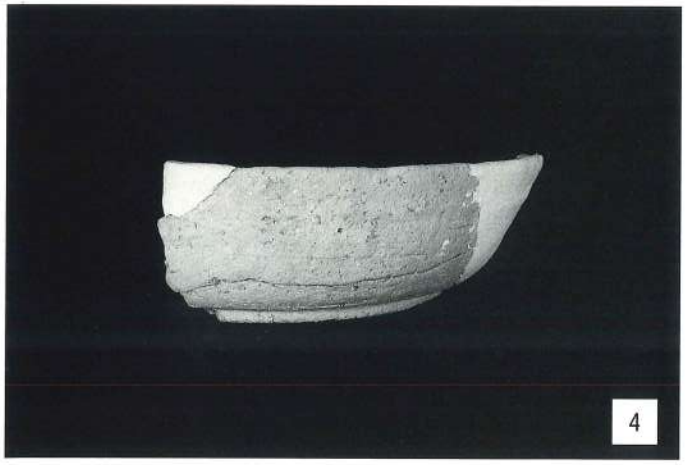
5　250　SK-188出土

6　252　SK-188出土

7　257　SK-188出土

8　259・261　SK-188出土





堤六本谷遺跡11区

1　262　SK-188出土

2　263　SK-188出土

3　264　SK-188出土

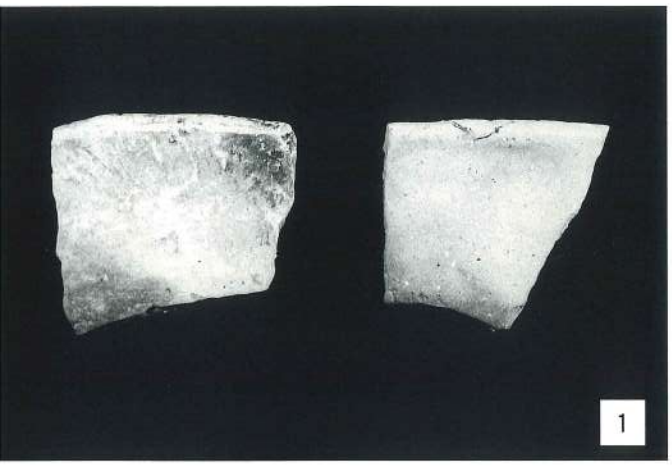
4　268　SH-190出土

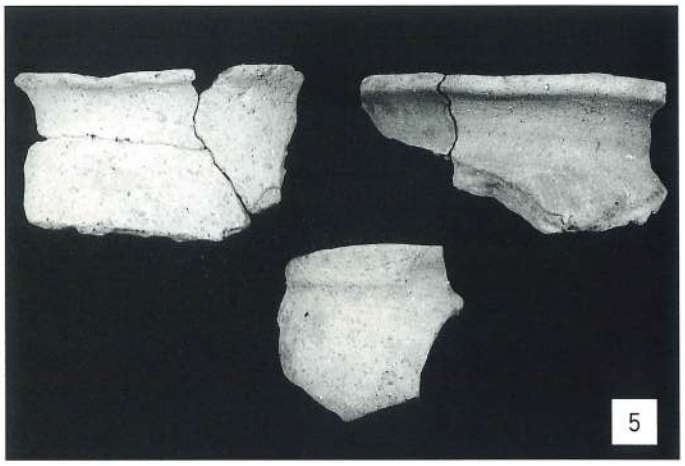
5　269　SH-190出土

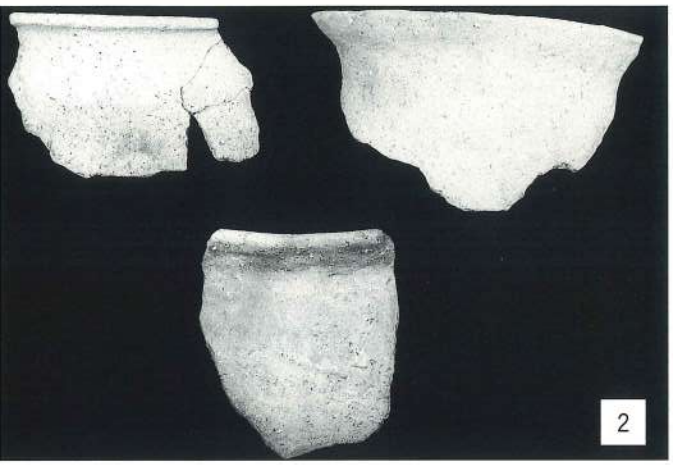
6　270　SH-190出土

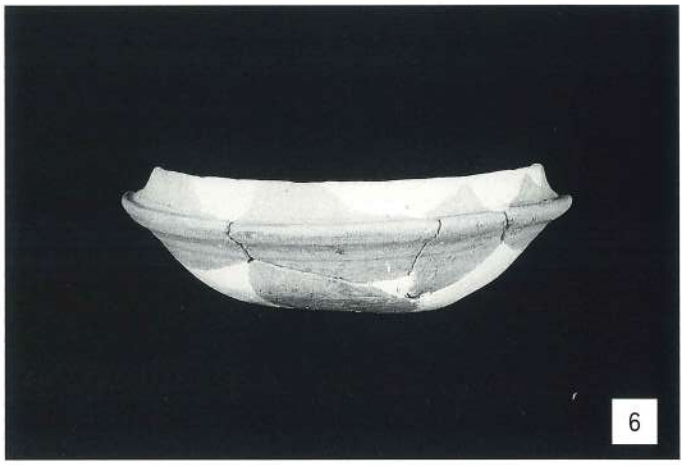
7　271　SH-190出土

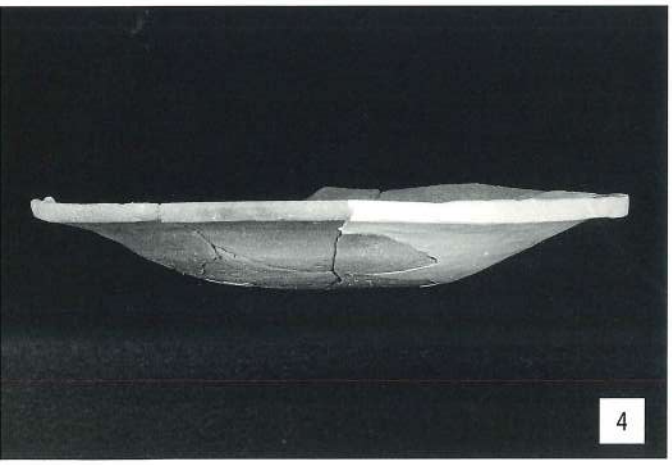
8　272　SH-190出土











堤六本谷遺跡11区

1　273・274　SH-190出土

2　上）277・275　下）276　SH-190出土

3　278　SH-190出土

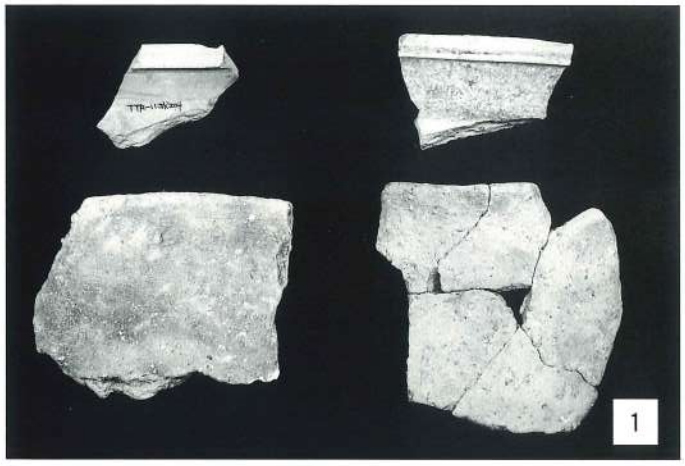
4　280　SH-190出土

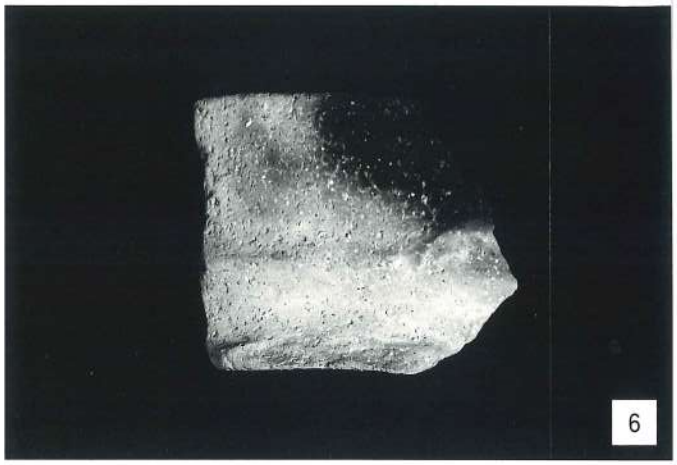
5　上）283・282　下）284　SH-193出土

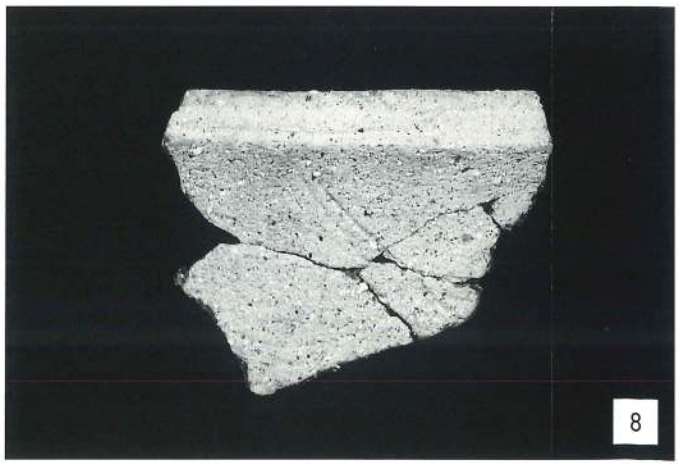
6　287　SH-193出土

7　288　SH-193出土

8　291　SH-193出土

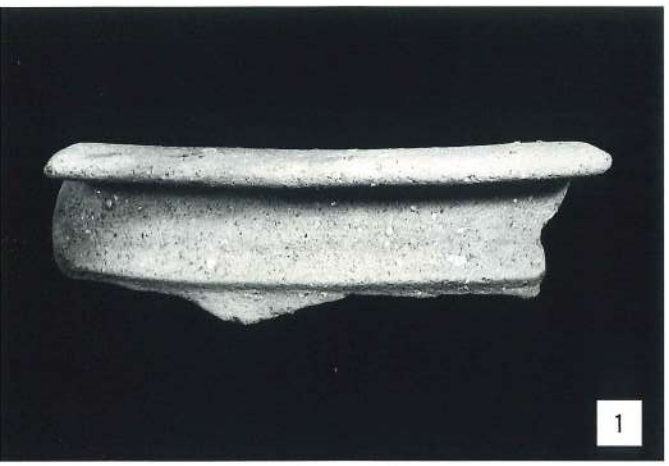


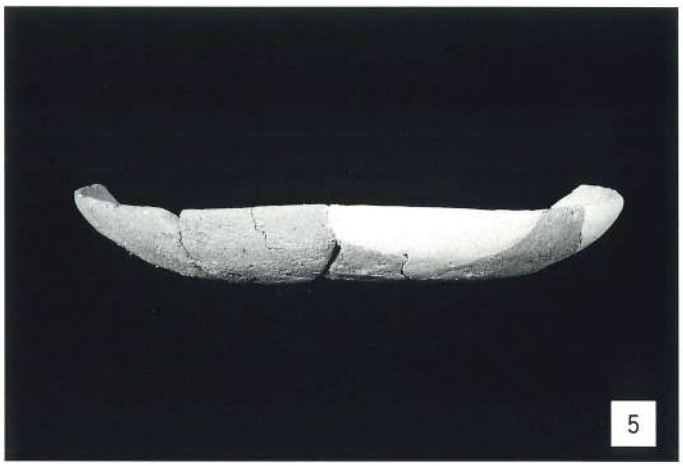


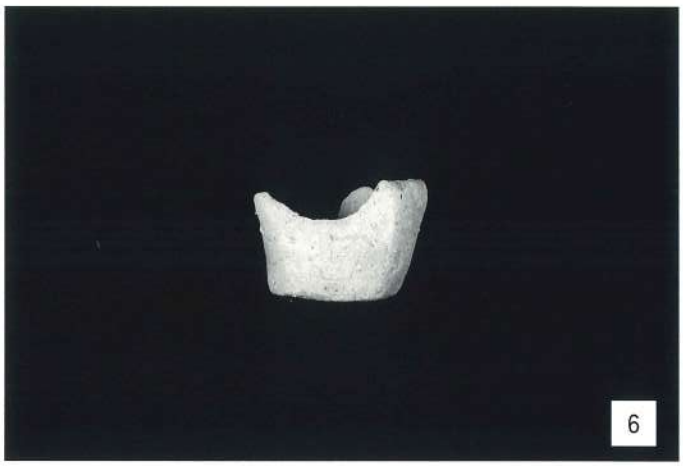


堤六本谷遺跡11区

1　上）300・301　下）303・302　SK-204出土
2　304　SH-212出土
3　307　SH-212出土
4　314　SH-212出土
5　317　SK-219出土
6　318　SK-219出土
7　327　SK-224出土
8　334　SK-229出土

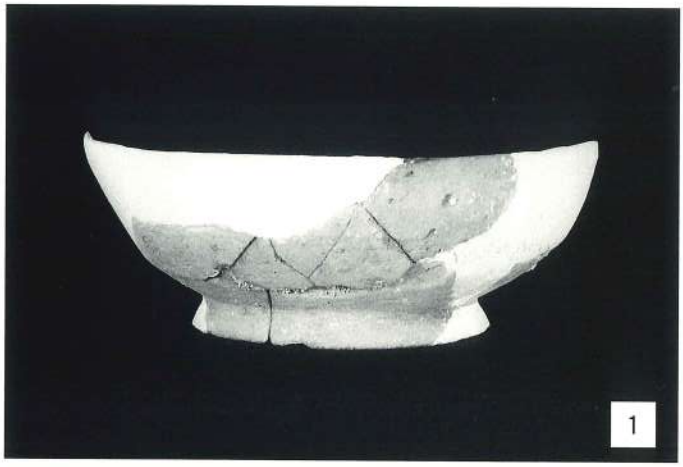


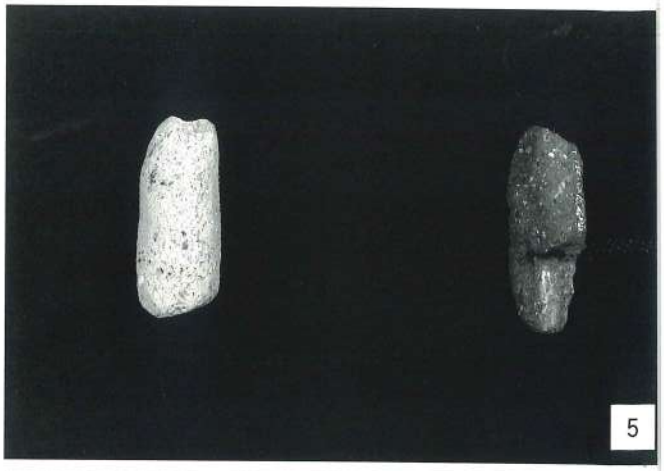


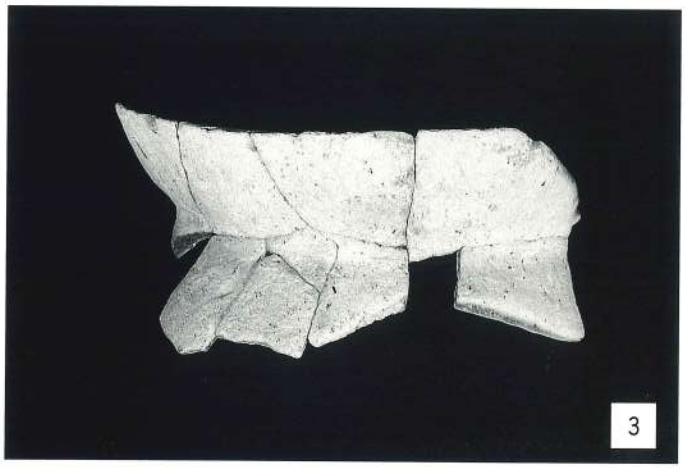


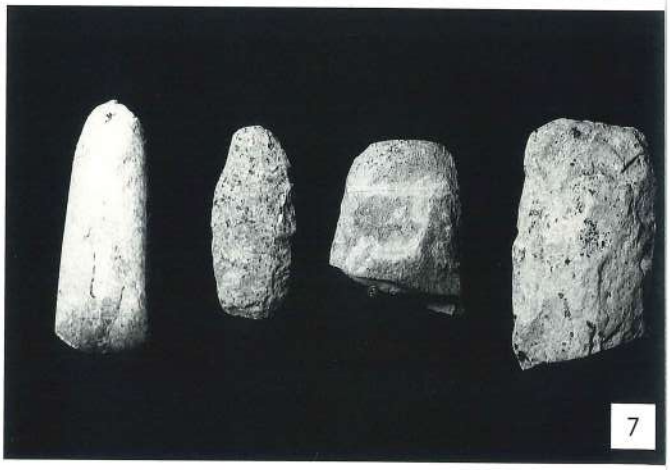
堤六本谷遺跡11区

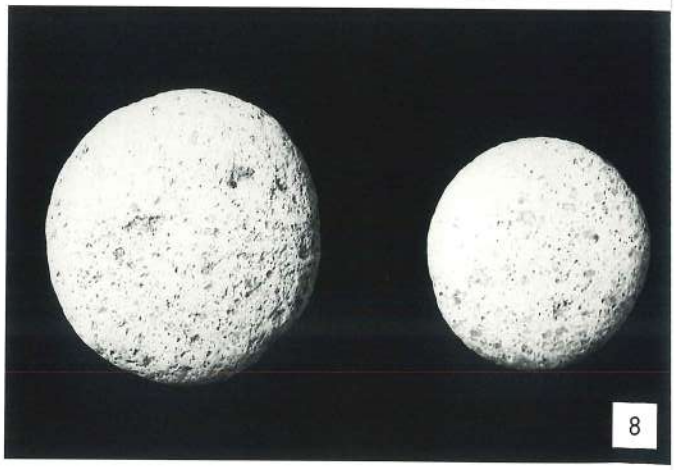
1　337　SK-229出土
2　338　SK-229出土
3　345　SK-244出土
4　349　SH-248出土
5　363　SK-255出土
6　364　SK-255出土
7　365　SK-255出土
8　371　SX-266出土











堤六本谷遺跡11区

1　373　SX-266出土

2　373　SX-266出土

3　374　SX-266出土

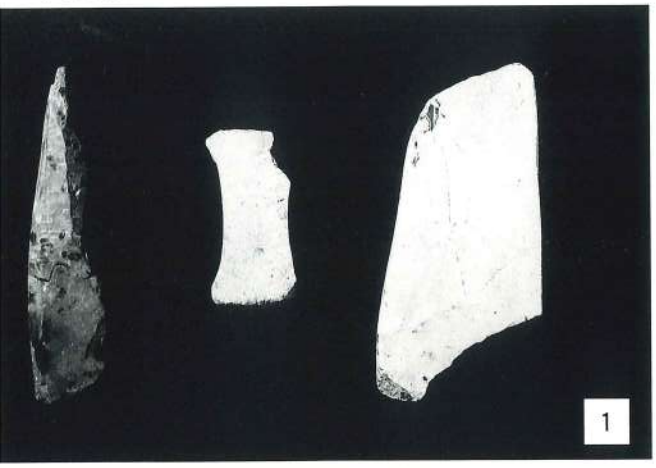
4　375　SX-266出土

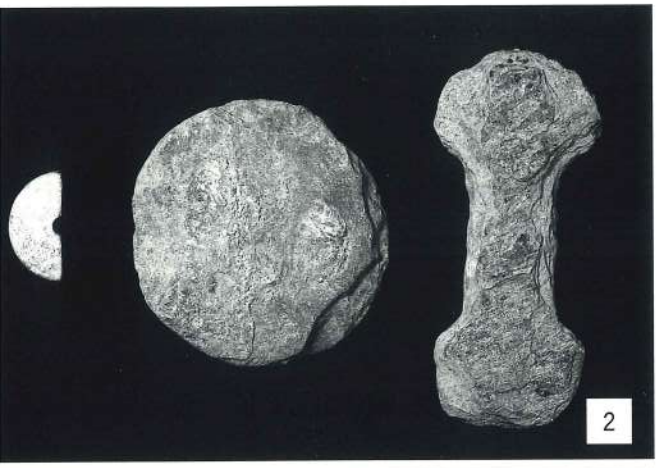
5　土錘376・377

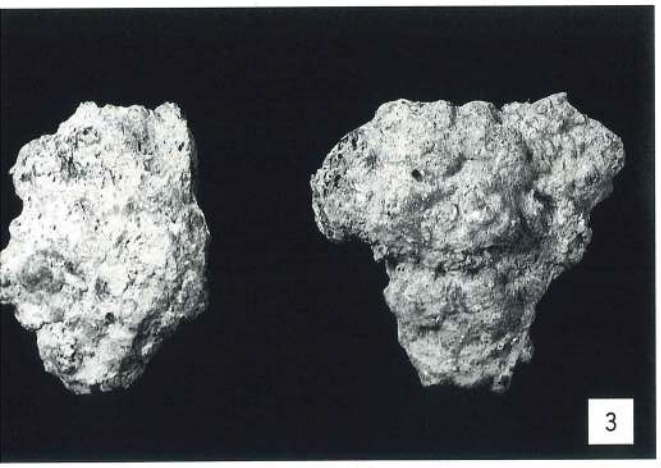
6　石鏃378・379・380

7　石斧381・382・383・384

8　磨石385・386





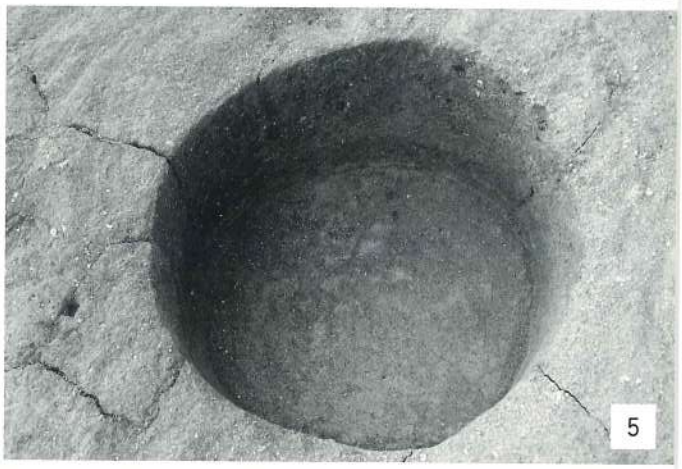


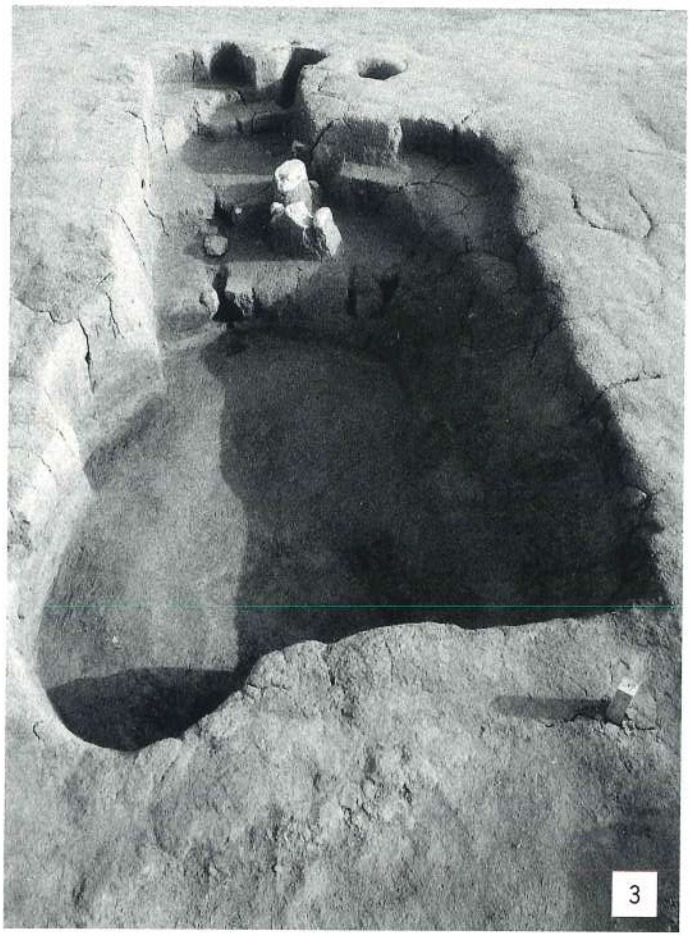
堤六本谷遺跡11区

1　砥石387・388・389

2　紡錘車390・石製円盤391・分銅形石製品392

3　鉄滓393・394





堤三本松遺跡２区

1　SK-001　―北西より―

2　SK-002　―西より―

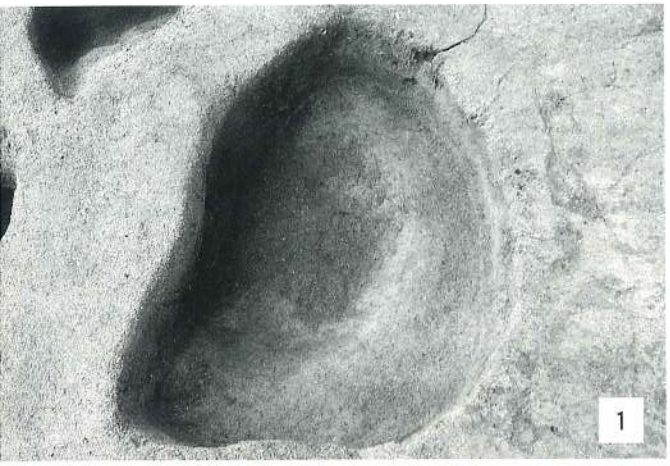
3　SK-003　―南東より―

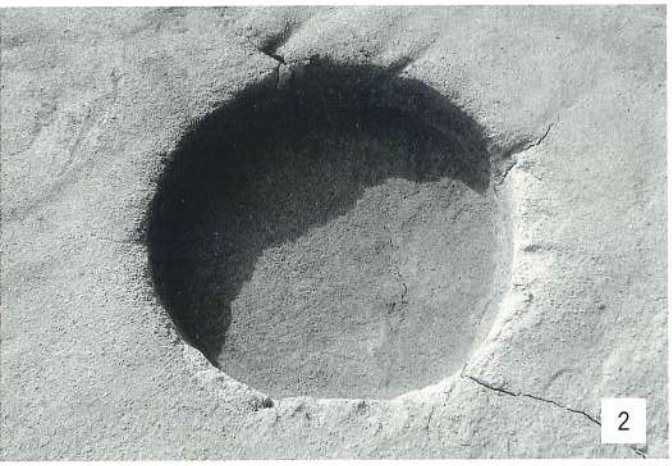
4　SK-004　―北より―

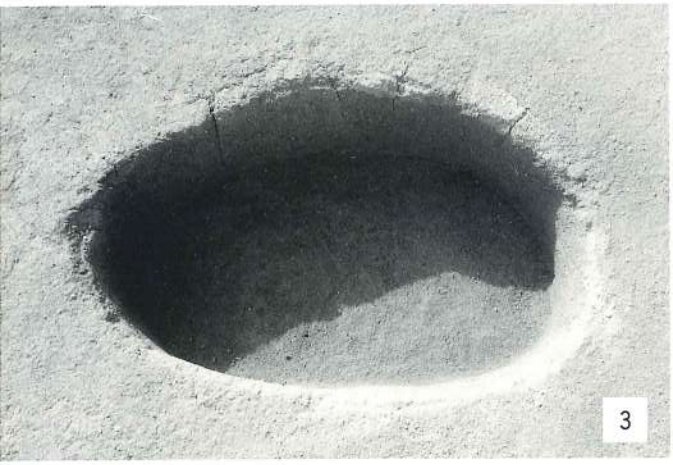
5　SK-006　―南西より―

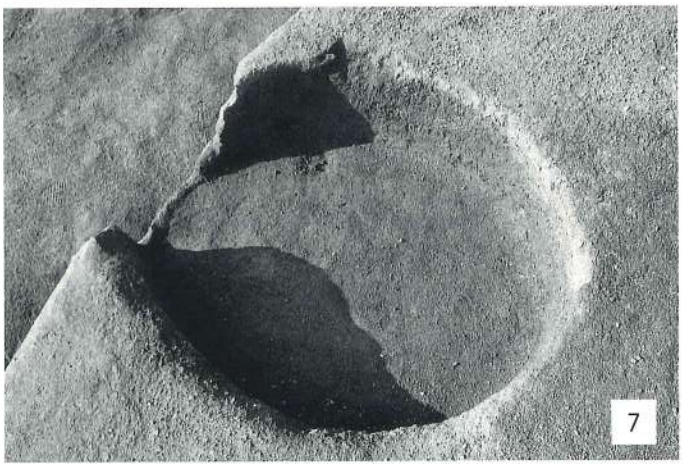
6　SK-007　―南西より―

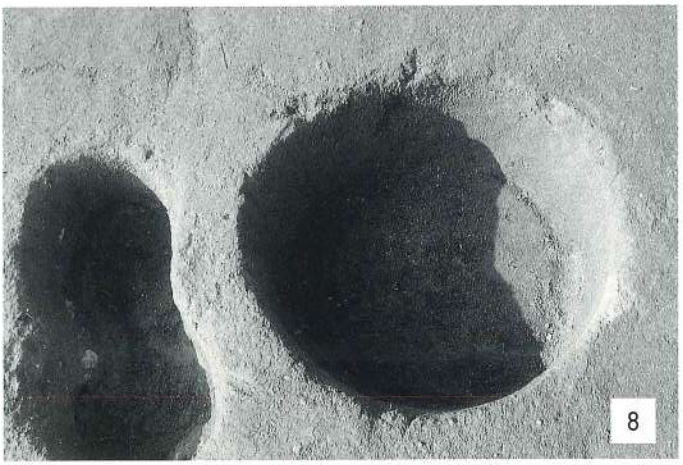
7　SK-008　―東より―





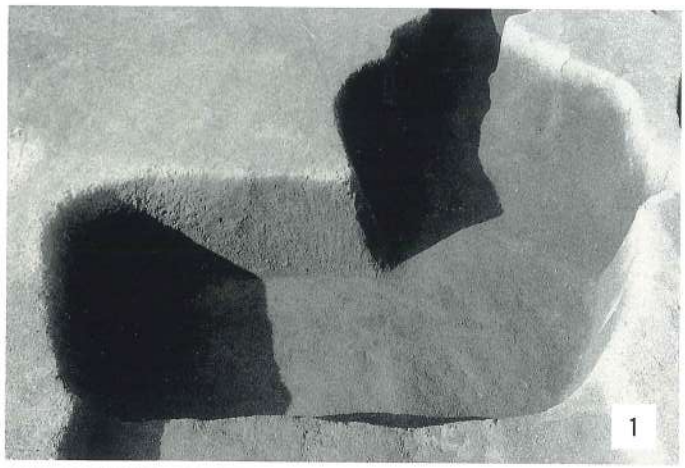


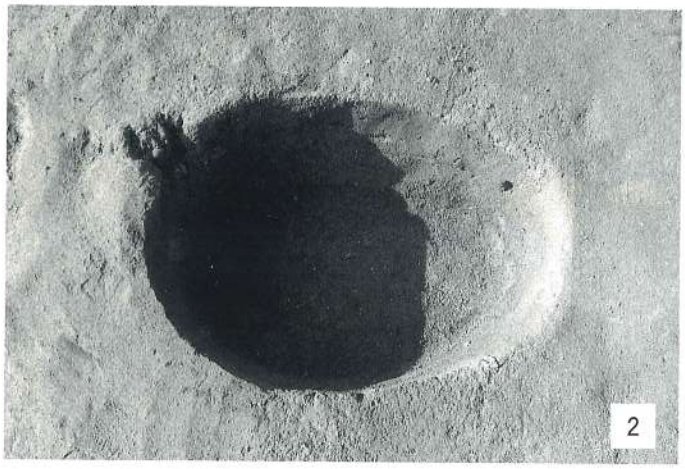


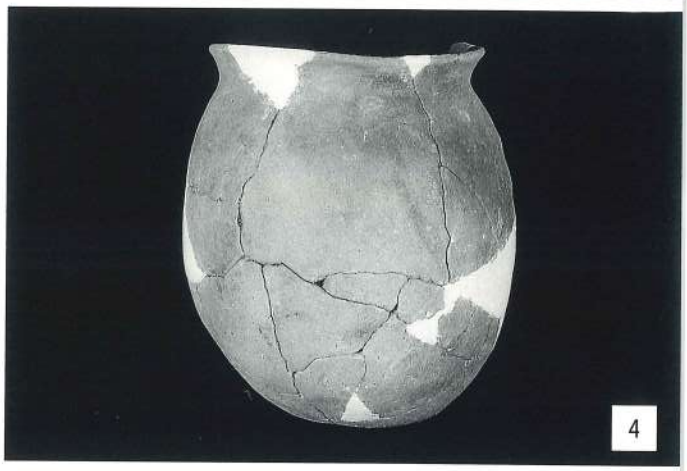


堤三本松遺跡２区

1　SK-009　―東より―
2　SK-010　―南東より―
3　SK-011　―北より―
4　SK-012　―北より―
5　SK-013　―西より―
6　SK-014　―東より―
7　SK-015　―東より―
8　SK-016　―北東より―







堤三本松遺跡２区

1　SK-019　―東より―

2　SK-020　―北東より―

3　7　No19tr.　出土

4　16　表土中出土

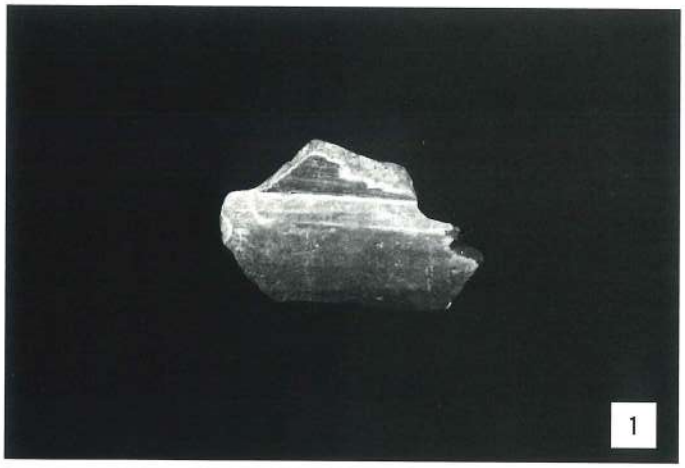
5　18　C-９Gr.　出土

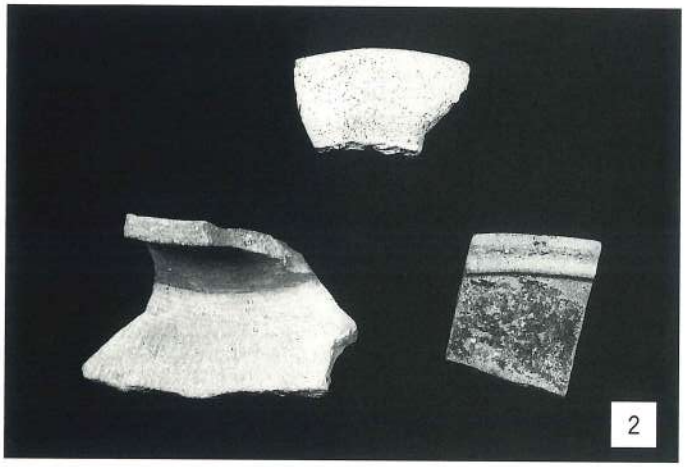
堤三本柳遺跡１区

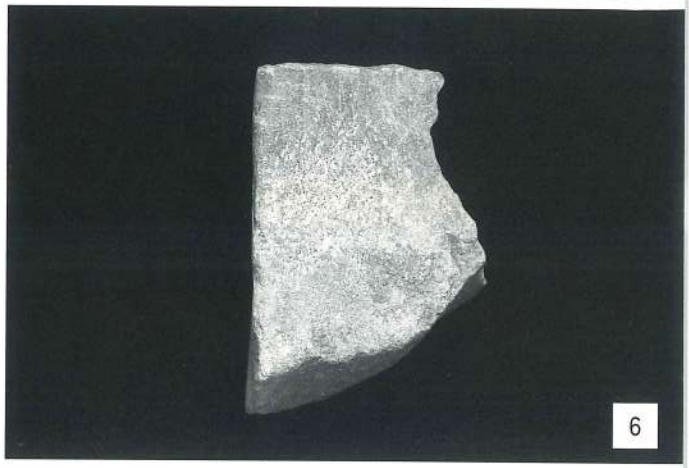
1　SD-025　―南東より―

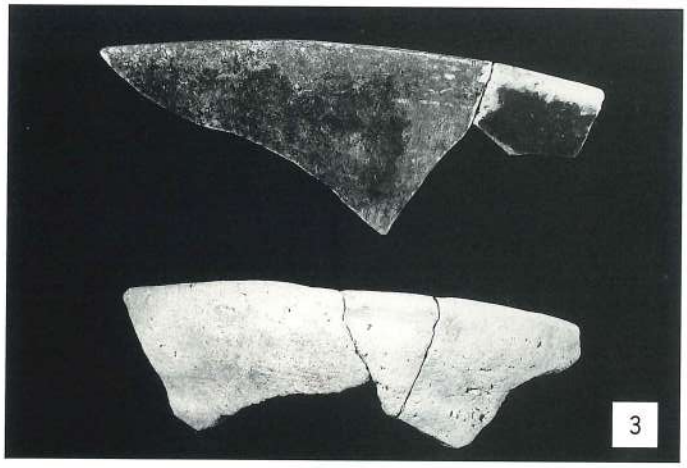
2　SD-025　―北西より―

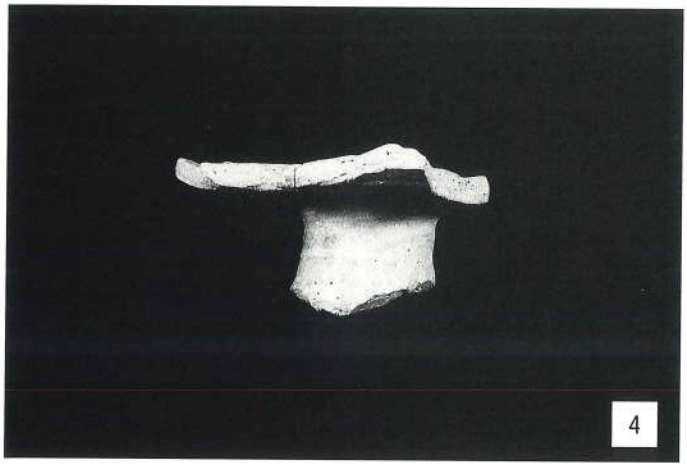
3　SD-026　―北東より―











堤三本柳遺跡１区

1　1　SD-026出土

2　上）6　下）3・2　SD-026出土

3　上）7　下）4　SD-026出土

4　8　SD-027出土

5　16　SD-027出土

6　砥石17　SD-026出土

青柳古墳群１区

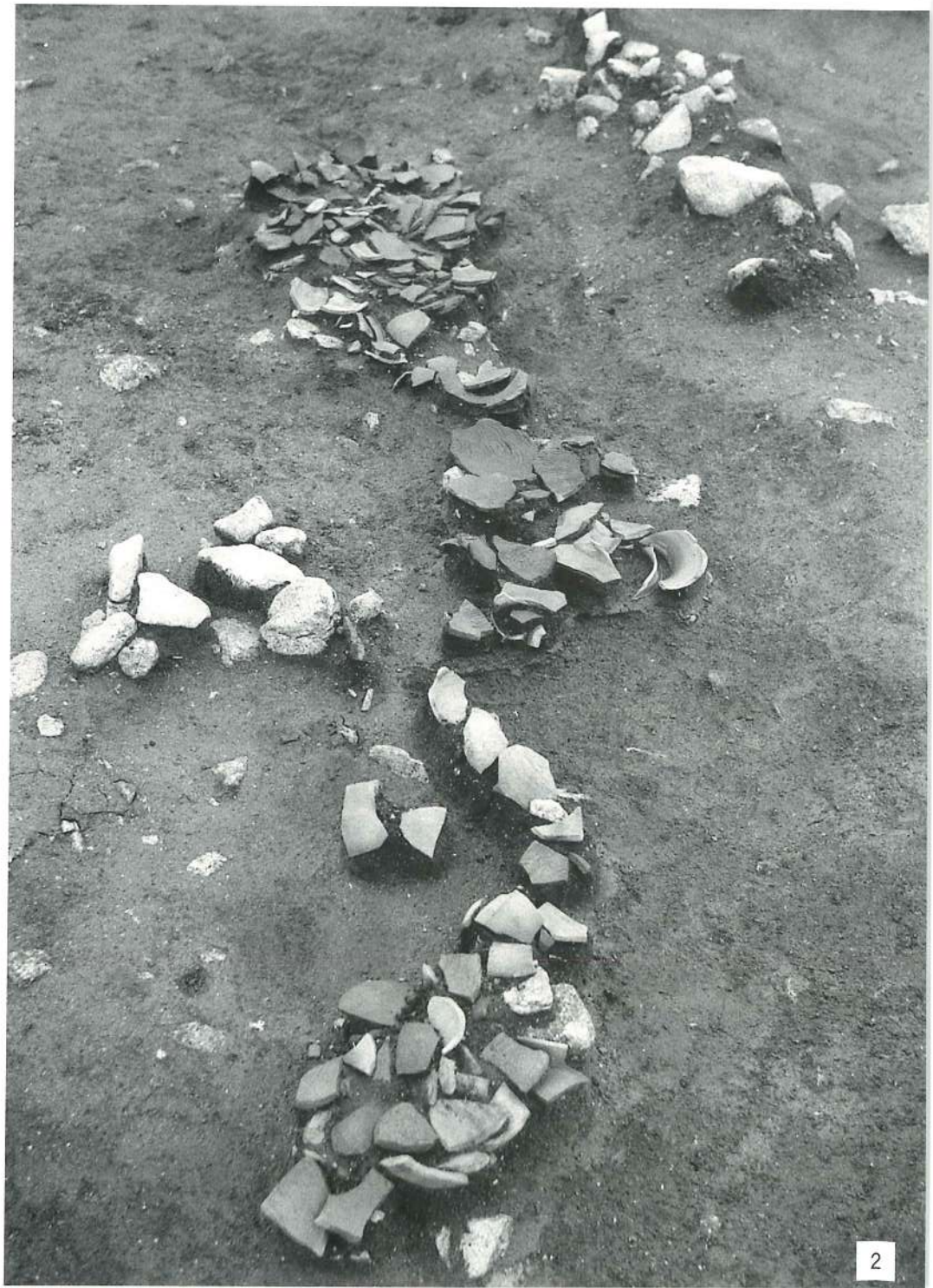
1　SC-001・SC-002　―南より―

2　SC-001石室　―南より―

3　SC-001耳環出土状況

―石室北西部―

1



2

青柳古墳群１区

1　SC-001耳環出土状況

—石室南東部—

2　SC-001周溝遺物出土状況

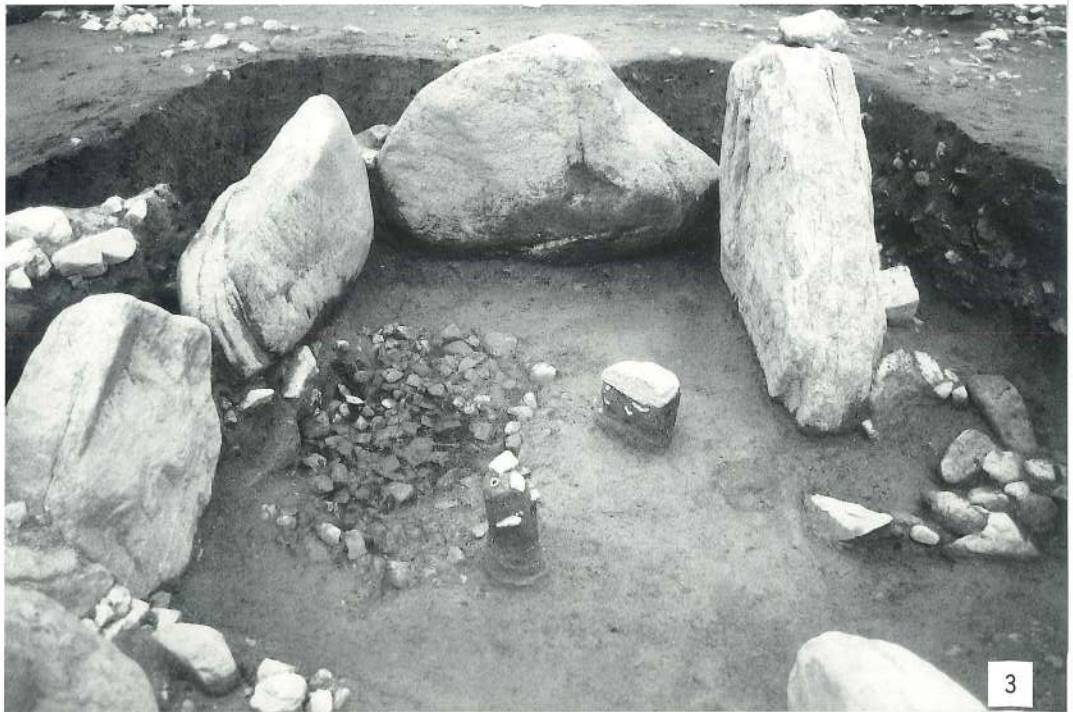
—周溝南部西より—

青柳古墳群１区

1　SC-002石室　―南より―

2　ST-003

―写真上方が北西より―



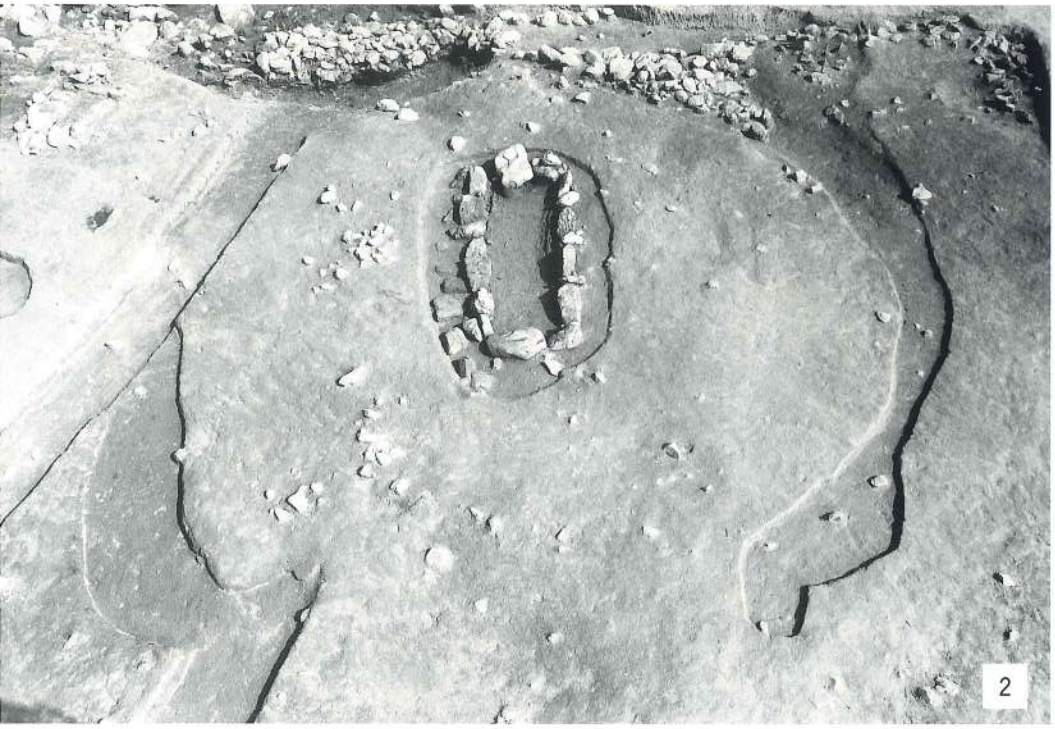
青柳古墳群１区

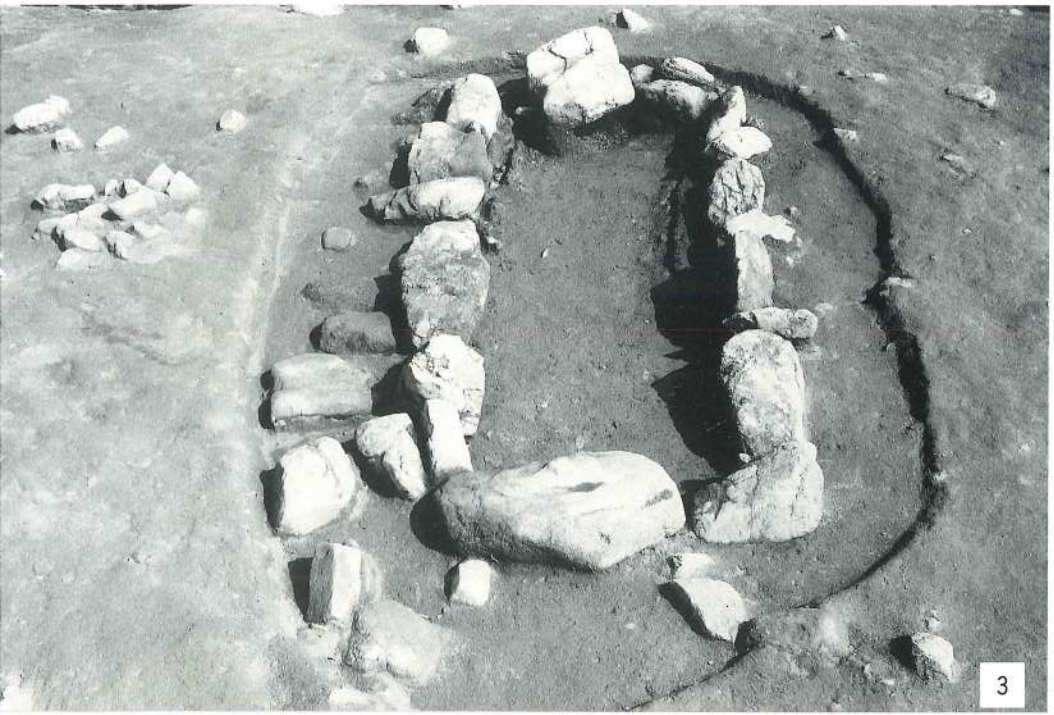
1　ST-003石室　―南東より―

2　ST-003玄門閉塞状況

―石室内より―

3　ST-003玄室　―南東より―



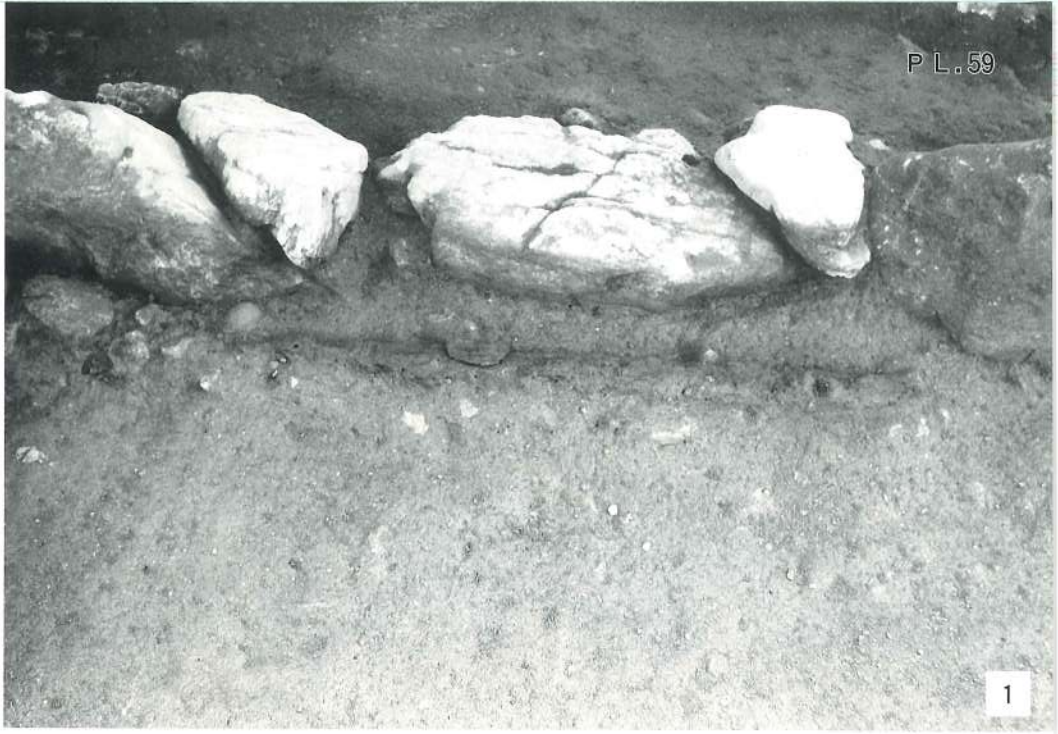


青柳古墳群１区

1　SC-004石室　―南西より―

2　SC-005　―南東より―

3　SC-005石室　―南東より―



青柳古墳群１区

1　SC-005鉄剣出土状況
—南西より—

2　SC-006　—南西より—

3　SC-007石室　—南東より—

青柳古墳群１区

1　SC-010　―東より―

2　SC-011　―南東より―

3　SC-012　―南西より―

青柳古墳群１区

1　SC-016　―東より―

2　SC-017　―南西より―

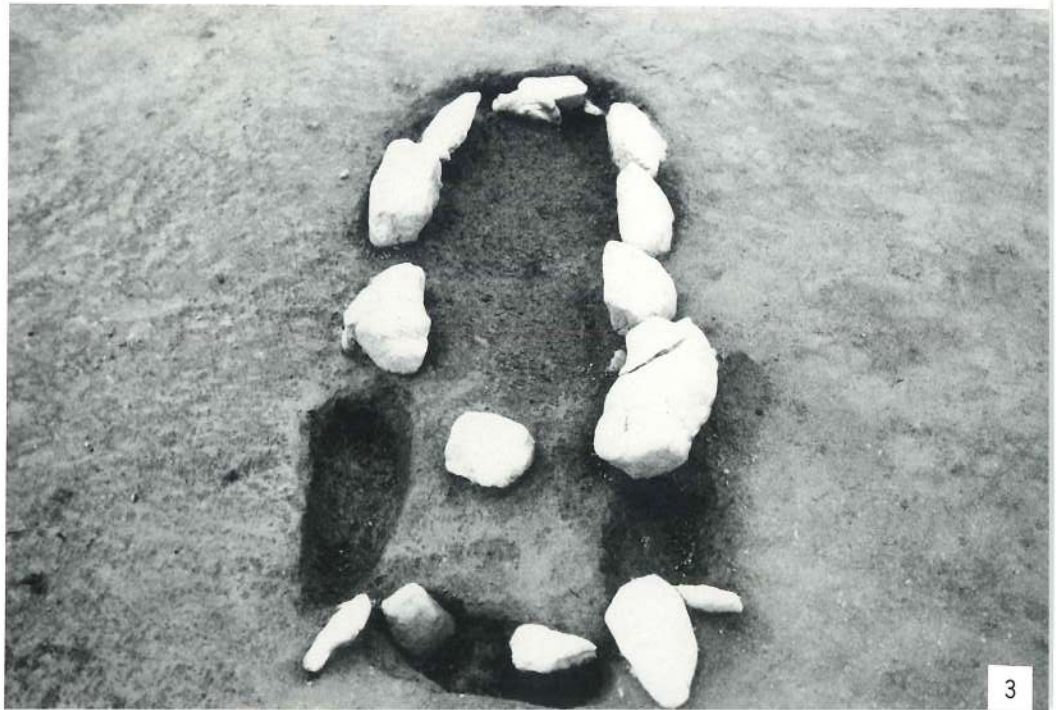
3　ST-017石室　―北西より―

青柳古墳群１区

1　ST-017玄門閉塞状況
—石室内より—

2　ST-017奥壁　—南東より—

3　ST-017玄門　—南東より—

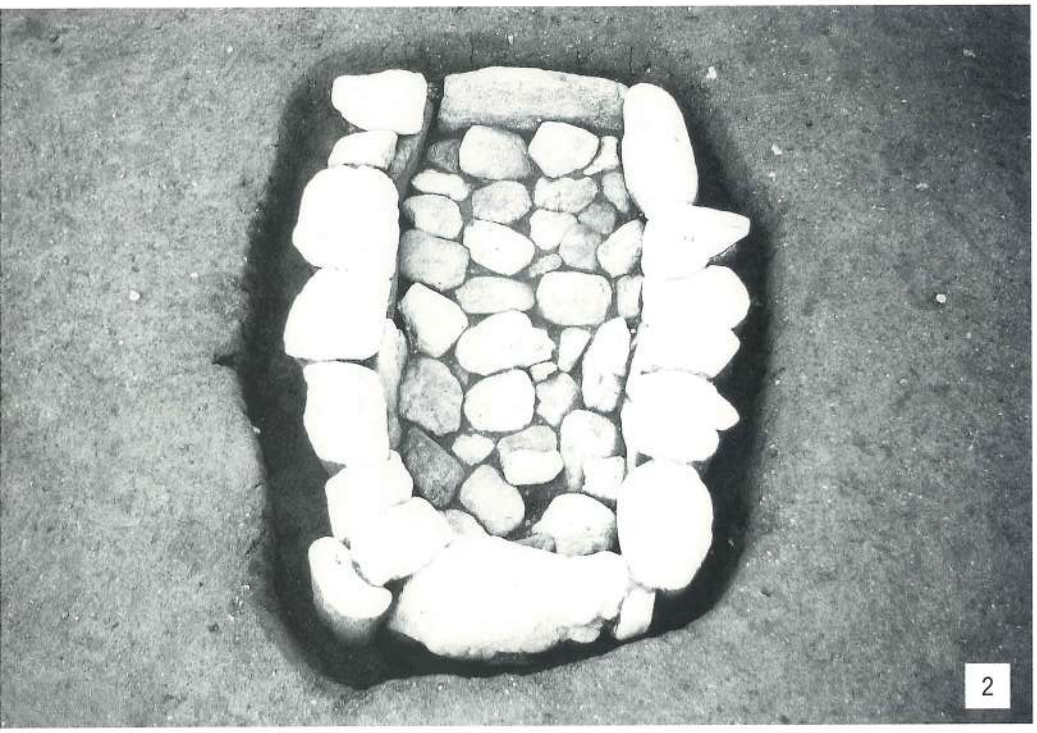


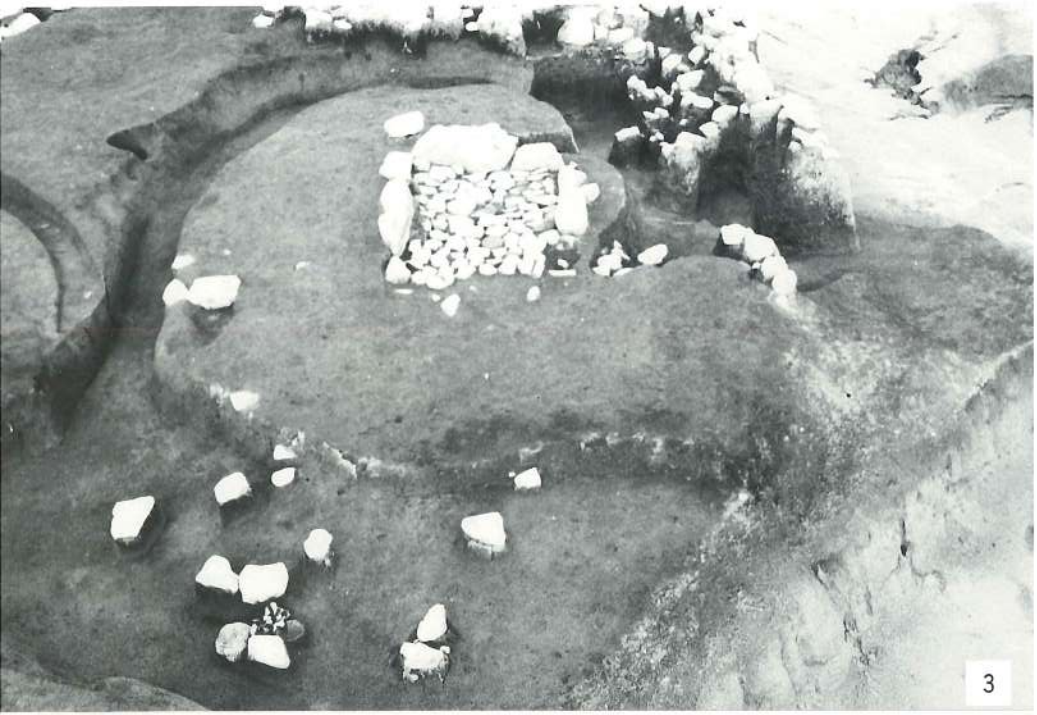
青柳古墳群１区

1　ST-017遺物出土状況
—玄門左袖—

2　ST-017周溝遺物出土状況
—南より—

3　SC-018石棺　—東より—



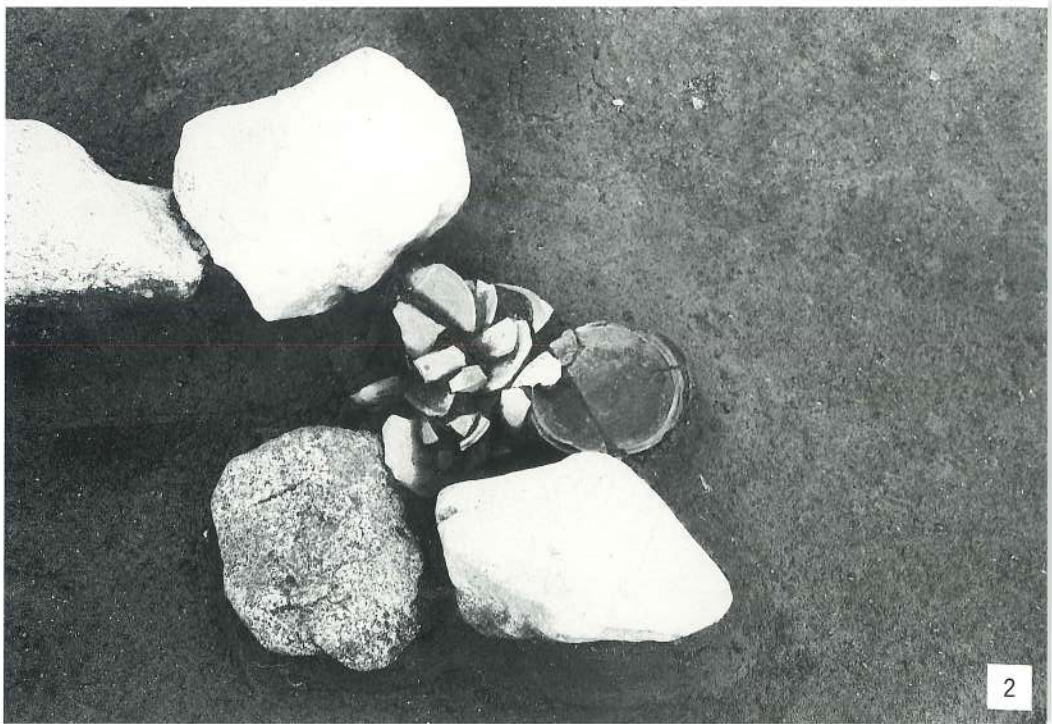


青柳古墳群１区

1　SC-018石室　―南より―

2　SC-020石室　―南西より―

3　SC-021　―南より―



青柳古墳群１区

1　SC-021石室　―南より―

2　SC-021周溝遺物出土状況

―周溝南西部―

青柳古墳群１区

1　SC-022　―南東より―

2　SC-022石室　―西より―

3　SC-022鉄鏃出土状況

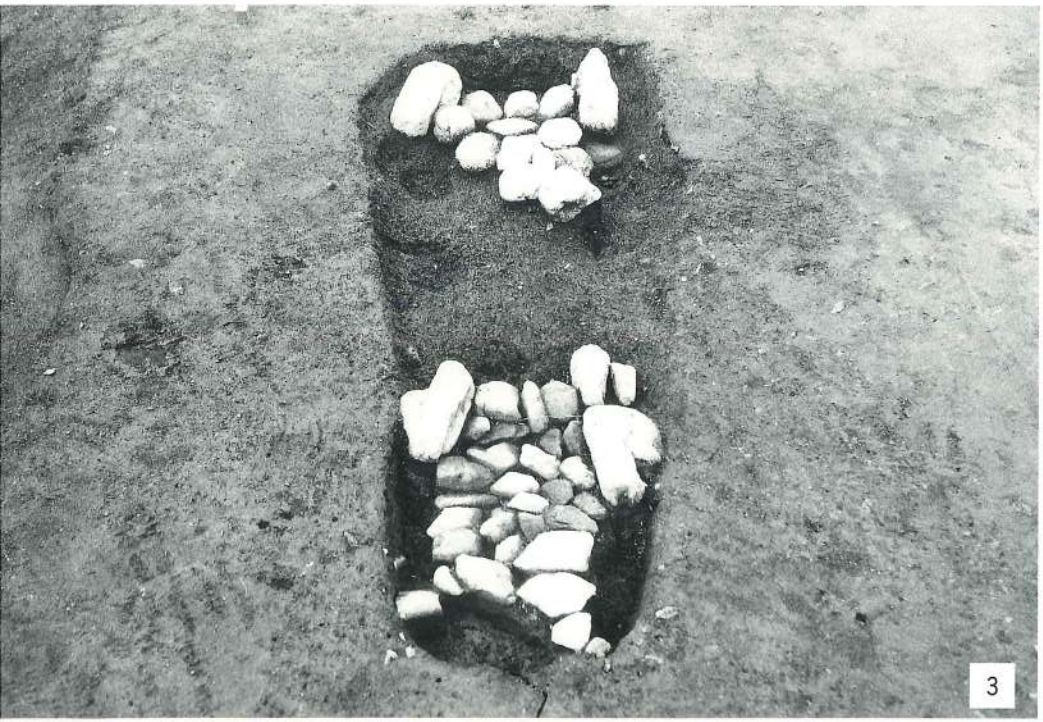
―北壁部―

青柳古墳群１区

1　SC-023　―北より―

2　SC-023石室　―西より―

3　SC-023奥壁　―南より―

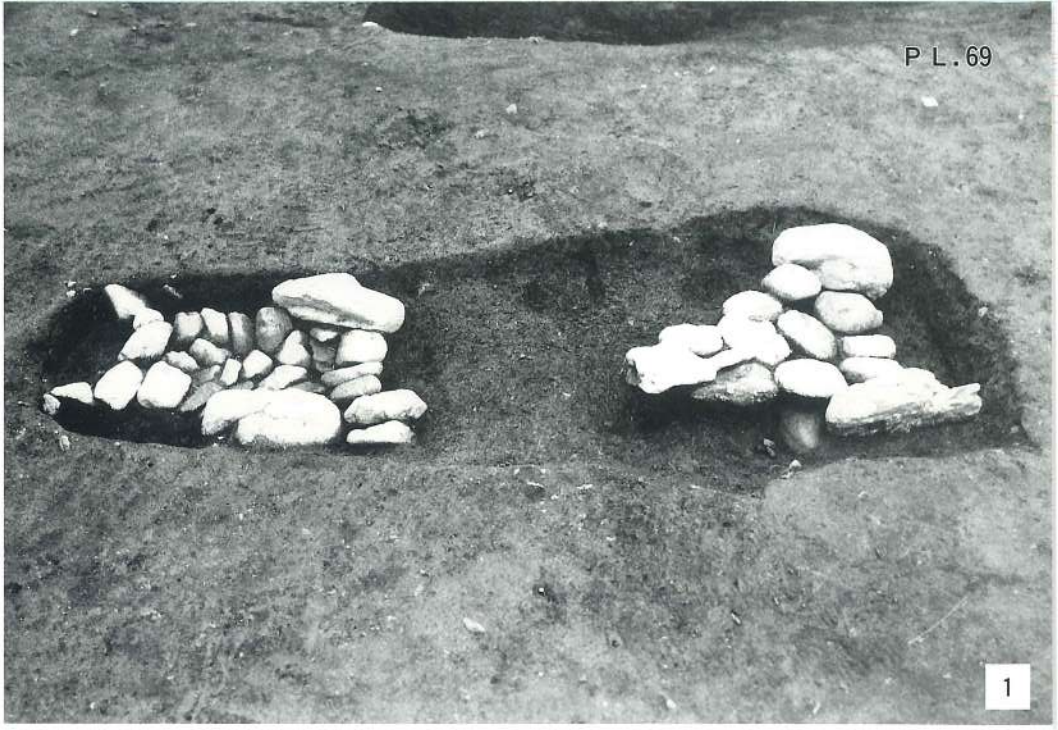


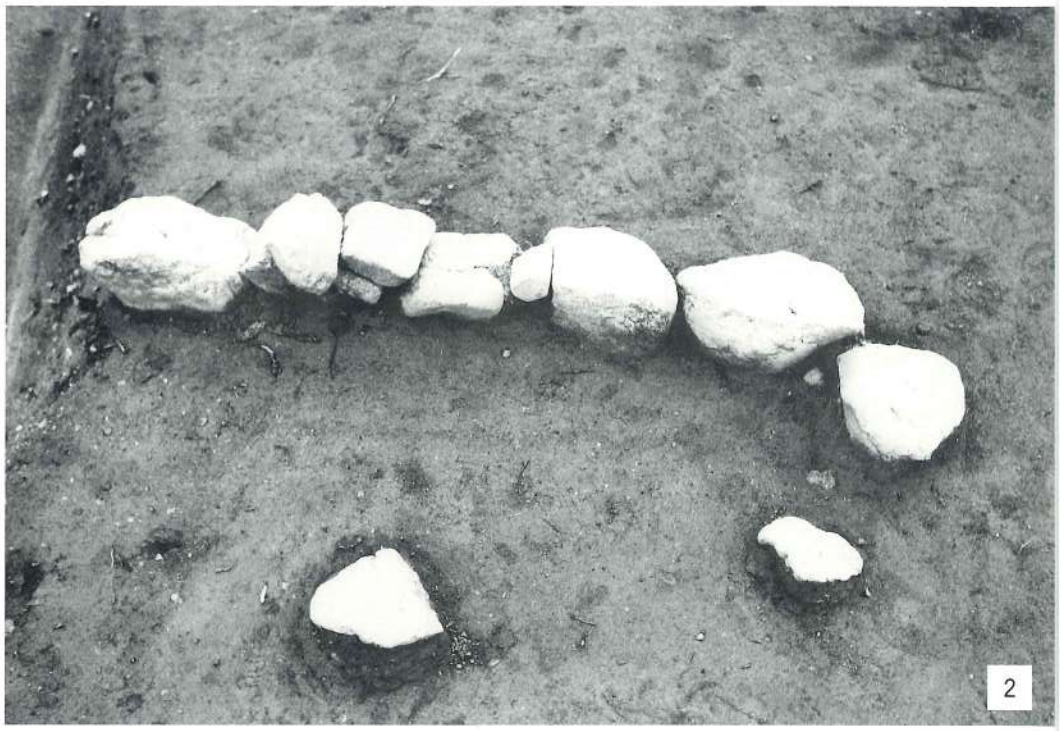
青柳古墳群１区

1　SC-023東側壁　―西より―

2　SC-023西側壁　―東より―

3　SC-024石室　―東より―



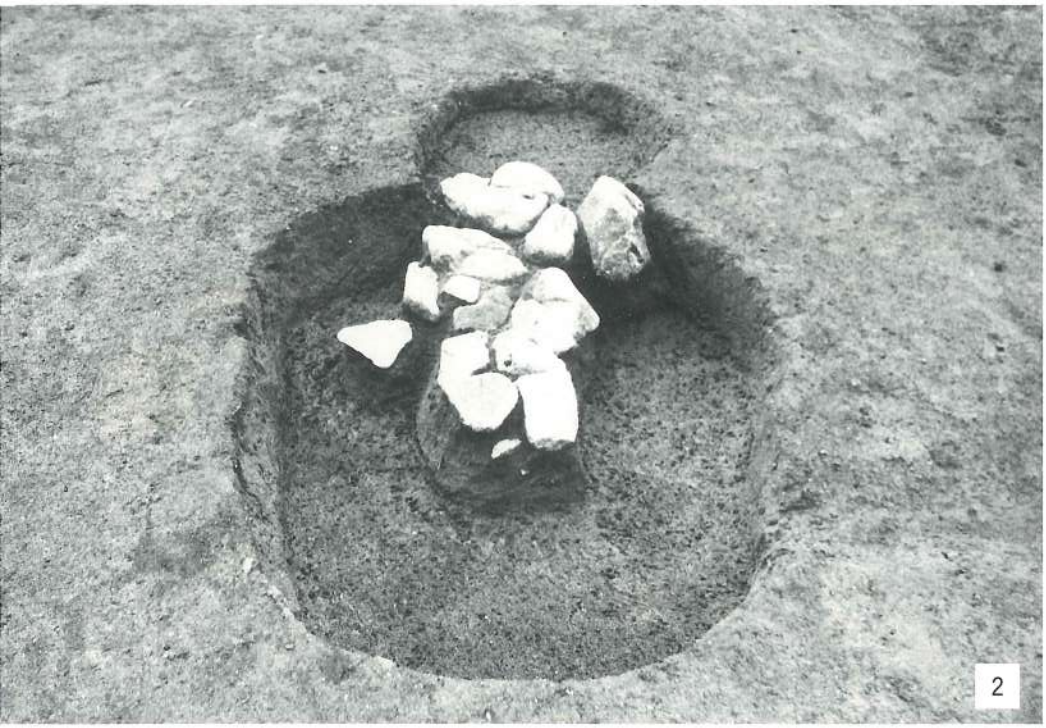


青柳古墳群１区

1　SC-024石室　―北より―

2　SC-025石室　―北より―

3　SC-026石室　―南より―

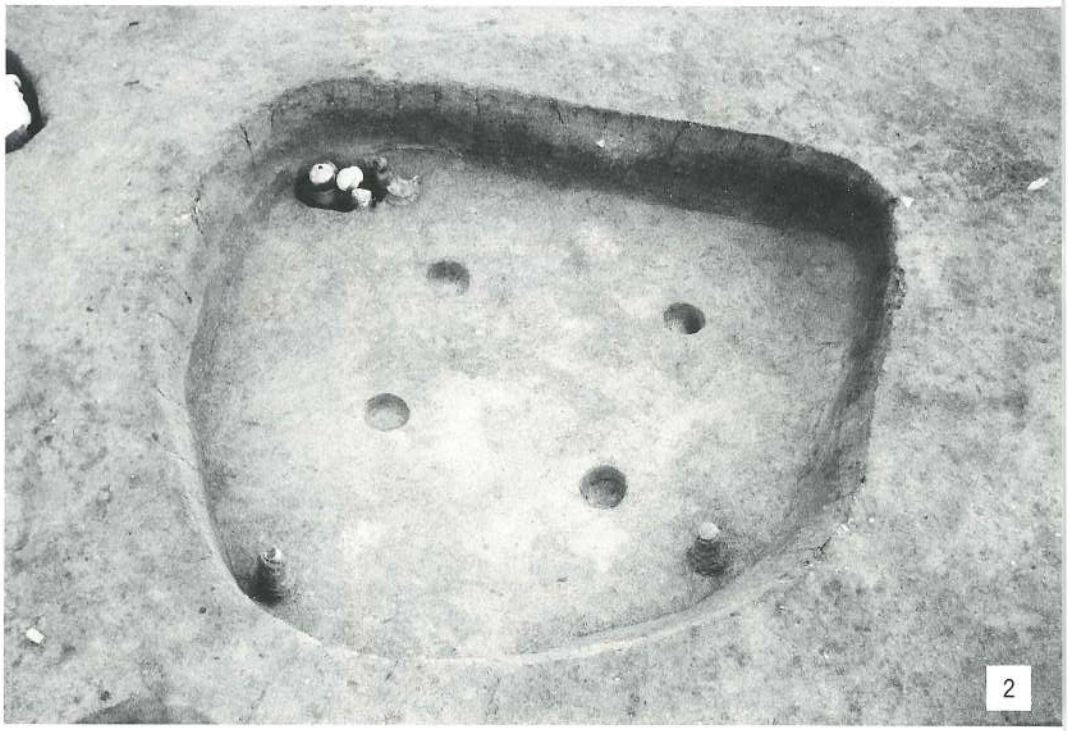


青柳古墳群１区

1　SC-026部分　―南より―

2　SC-027石室　―北より―

3　SP-028円形周溝墓　―南より―



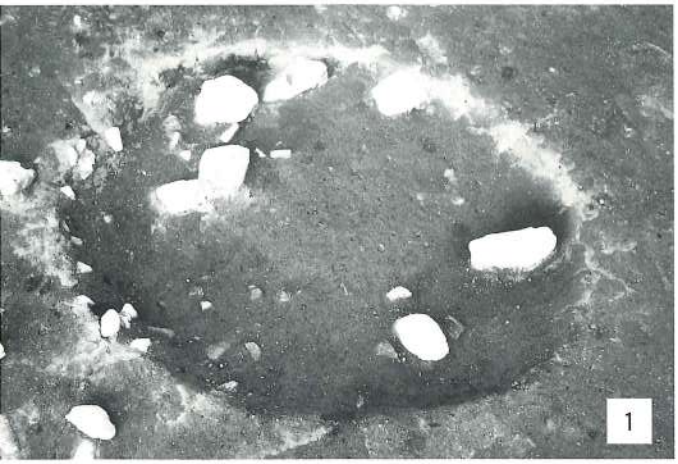
青柳古墳群１区

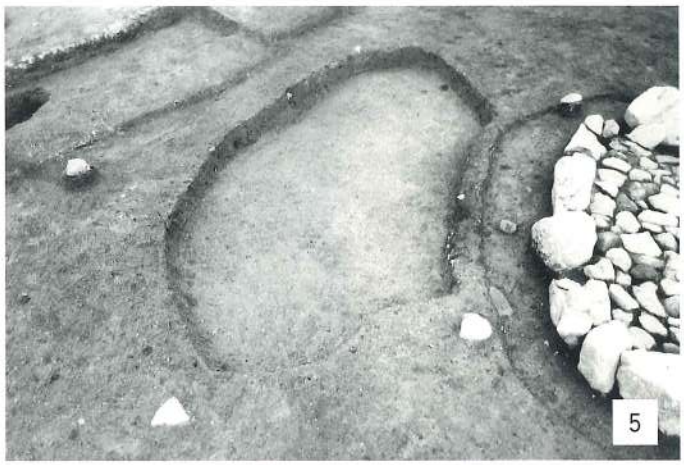
1　SH-051　―南より―

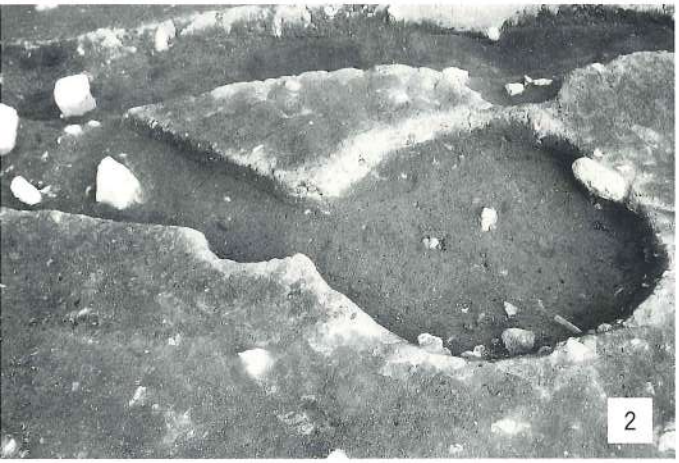
2　SH-065　―北より―

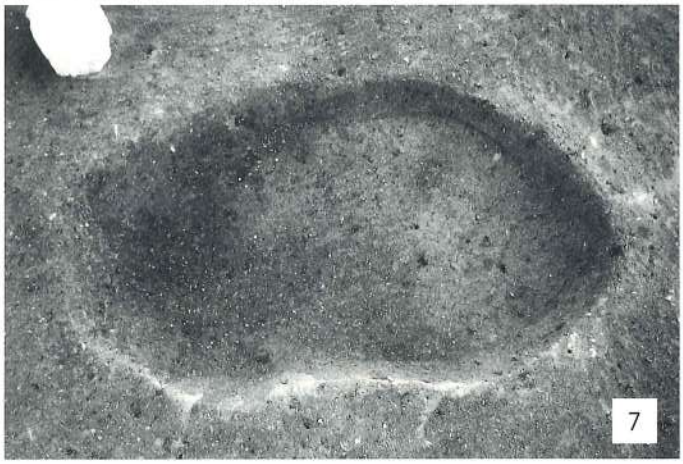
3　SH-065遺物出土状況

―貯蔵穴周辺―



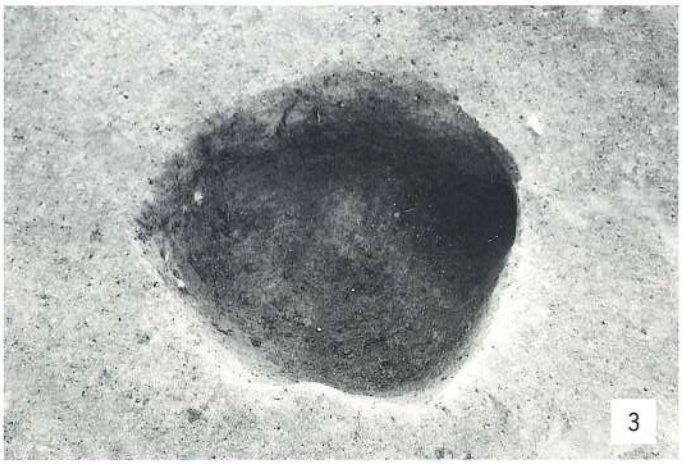


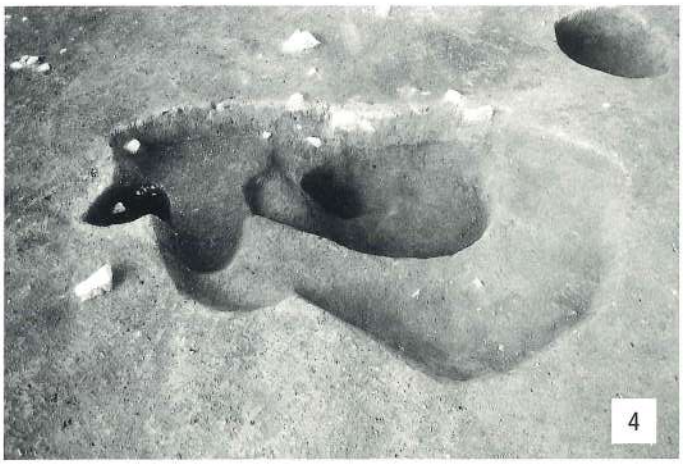




青柳古墳群１区

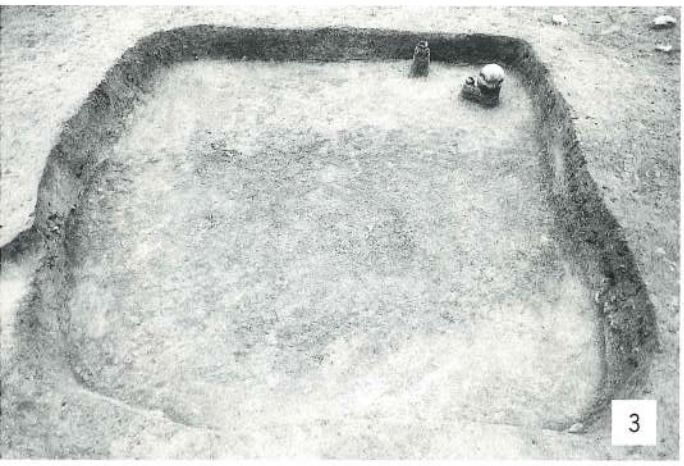
1　SK-053　―南より―
2　SK-054　―北より―
3　SK-055　―西より―
4　SK-056　―北東より―
5　SK-057　―南より―
6　SK-059　―北西より―
7　SK-061　―西より―
8　SK-069　―北より―





青柳古墳群１区

1　SK-070　―北より―
2　SK-072　―東より―
3　SK-073　―北より―
4　SK-074　―南東より―
5　SK-077　―東より―
6　SK-078　―南東より―
7　SK-079　―東より―
8　SK-080　―南西より―



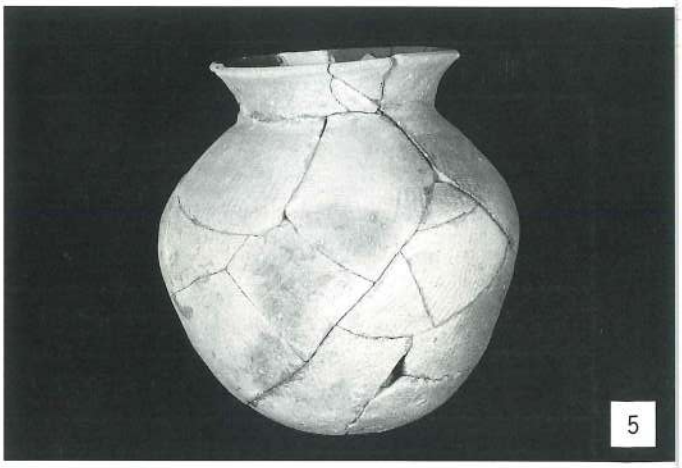
青柳古墳群１区

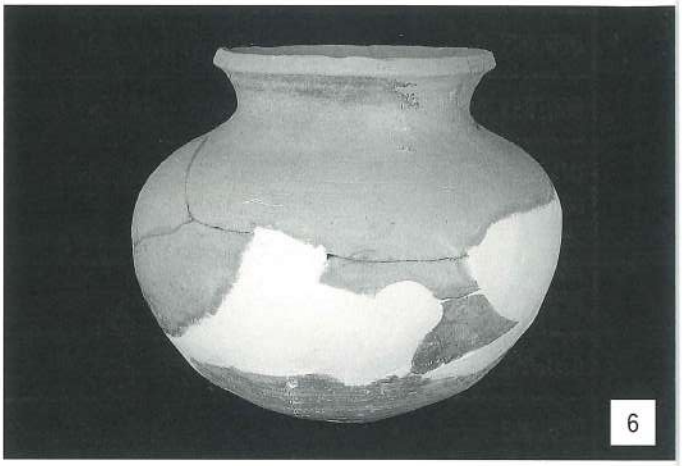
1　SK-081　―西より―

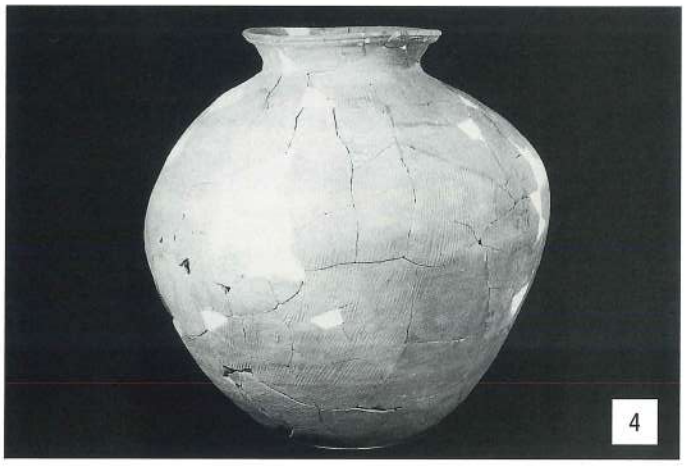
2　SK-083　―北より―

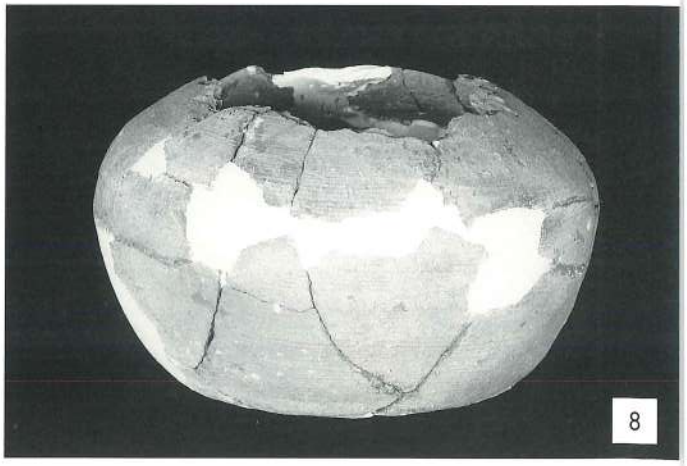
3　SK-088　―西より―

4　SD-064　―南東より―



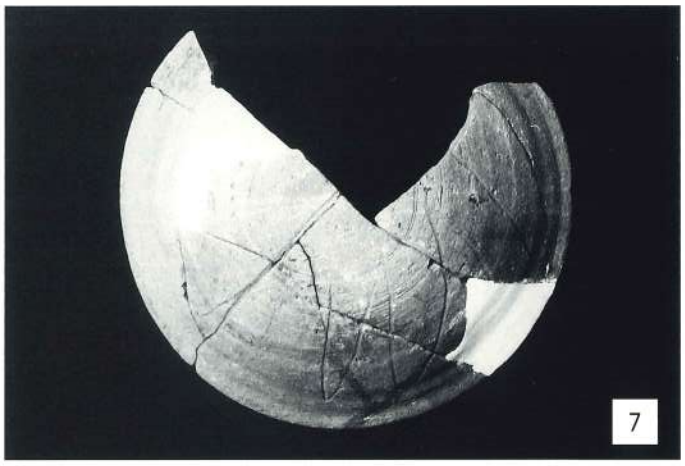


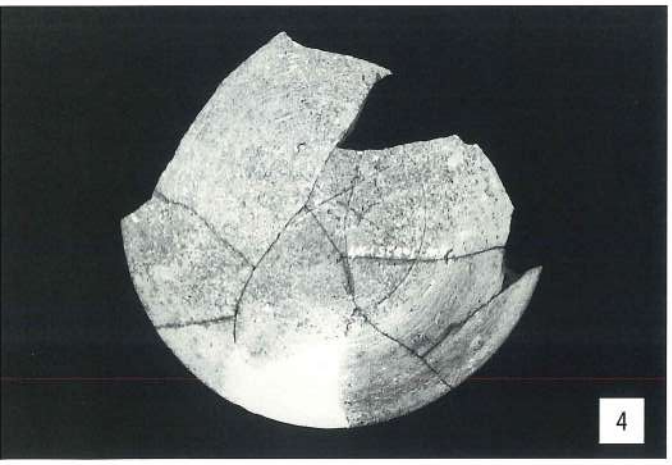




青柳古墳群１区

1	3	SC-001出土
2	4	SC-001出土
3	5	SC-001出土
4	6	SC-001出土
5	7	SC-001出土
6	8	SC-001出土
7	9	SC-001出土
8	9	SC-001出土





青柳古墳群１区

1　10　SC-001出土

2　11　SC-001出土

3　12　SC-001出土

4　12　SC-001出土

5　13　SC-001出土

6　14　SC-001出土

7　14　SC-001出土

8　15　SC-001出土

青柳古墳群１区

1　16　SC-001出土

2　16　SC-001出土

3　17　SC-001出土

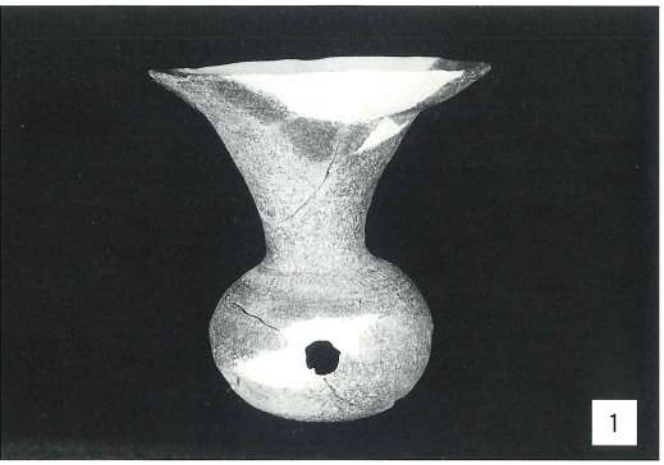
4　17　SC-001出土

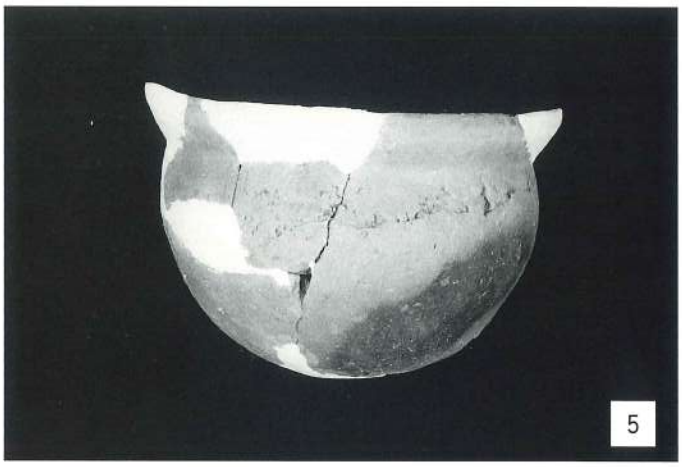
5　18　SC-001出土

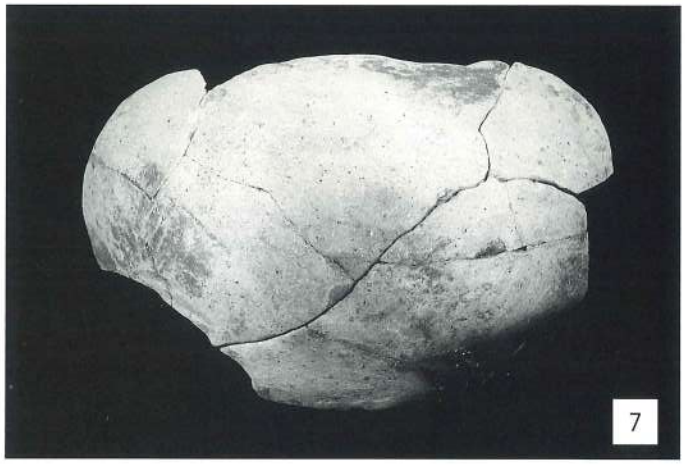
6　19　SC-001出土

7　20　SC-001出土

8　21　SC-001出土

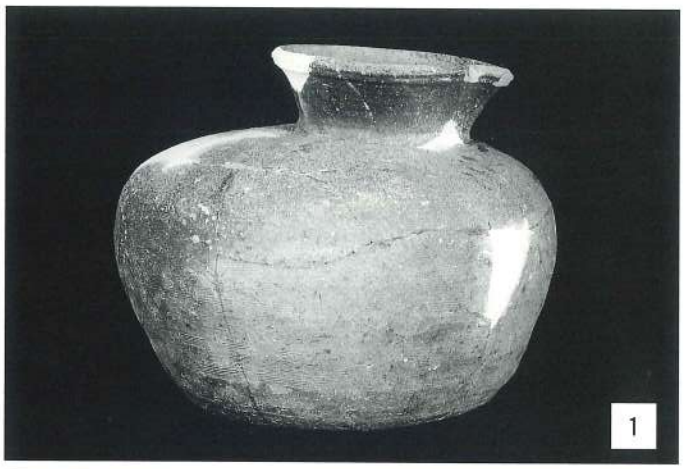


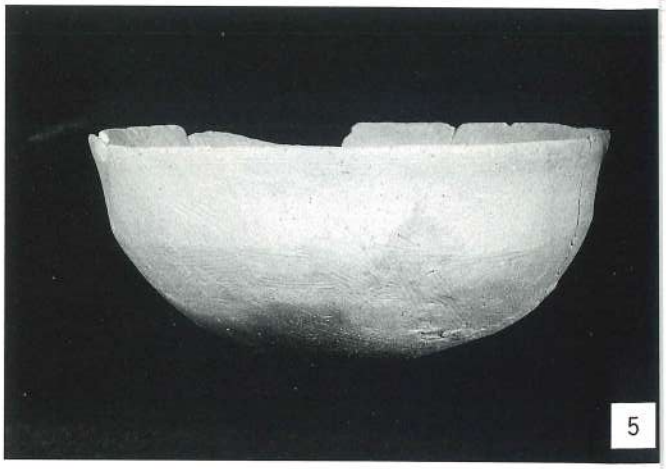


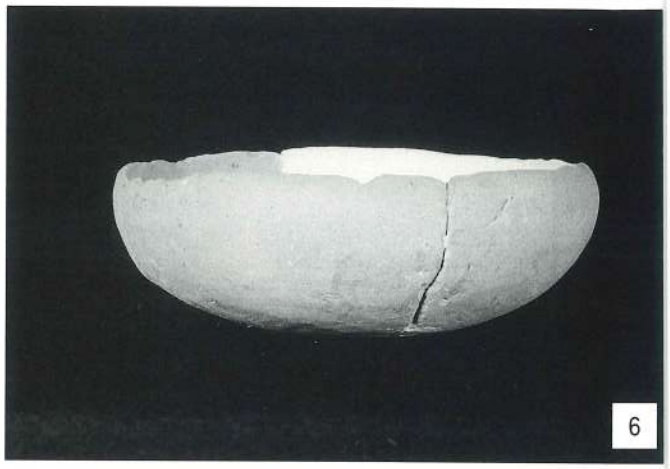


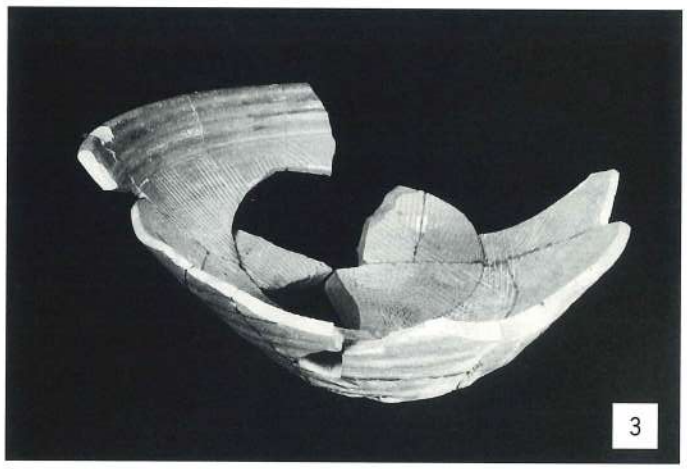
青柳古墳群１区

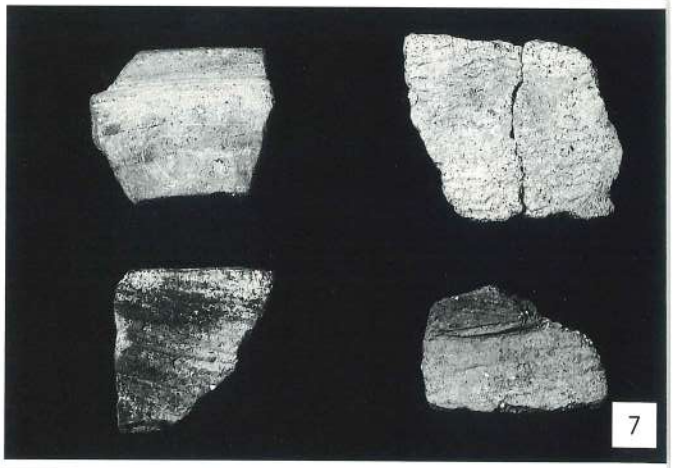
1　22　SC-001出土
2　23　SC-001出土
3　24　SC-001出土
4　25　SC-001出土
5　26　SC-001出土
6　27　SC-001出土
7　29　SC-002出土
8　30　SC-002出土

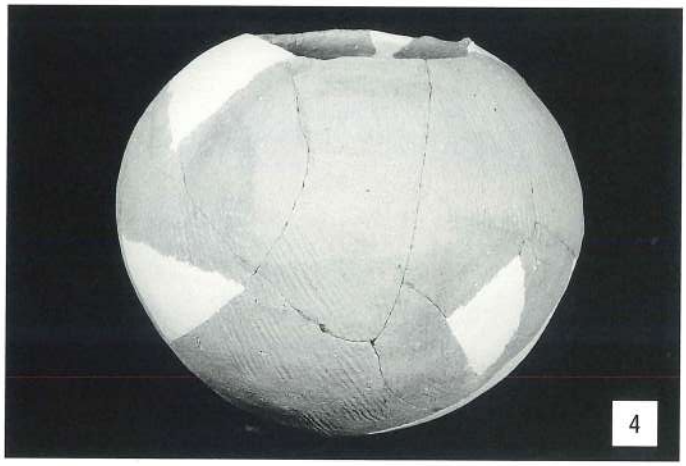


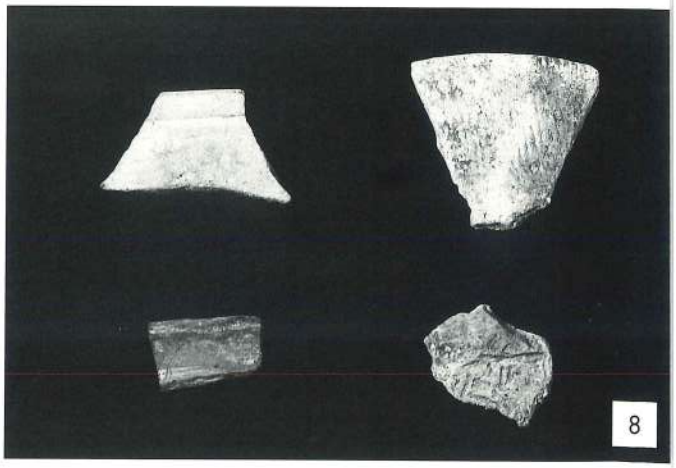












青柳古墳群１区

1　32　ST-003出土

2　33　ST-003出土

3　34　ST-003出土

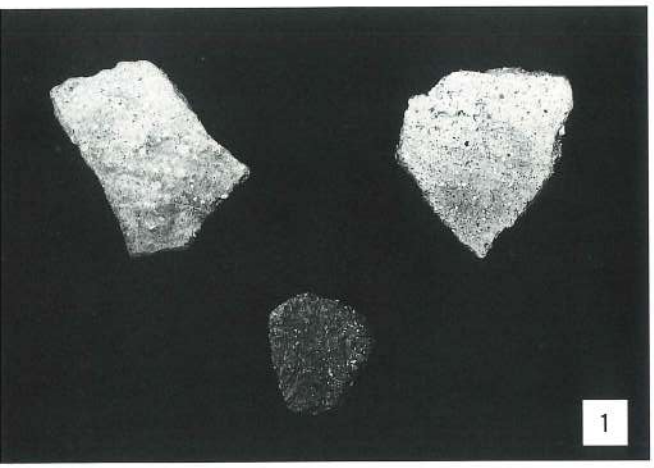
4　35　SC-004出土

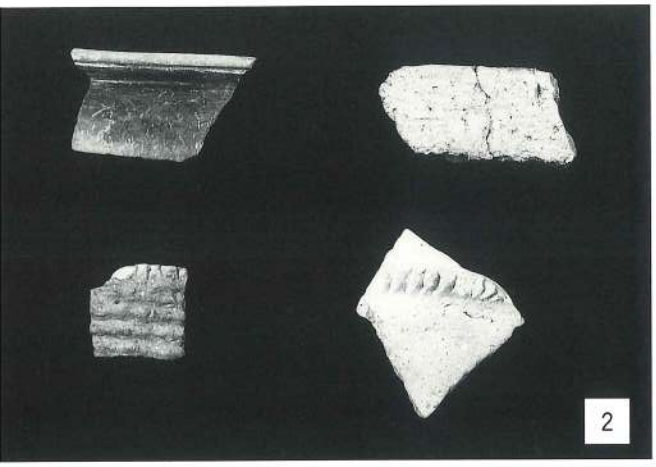
5　39　SC-005出土

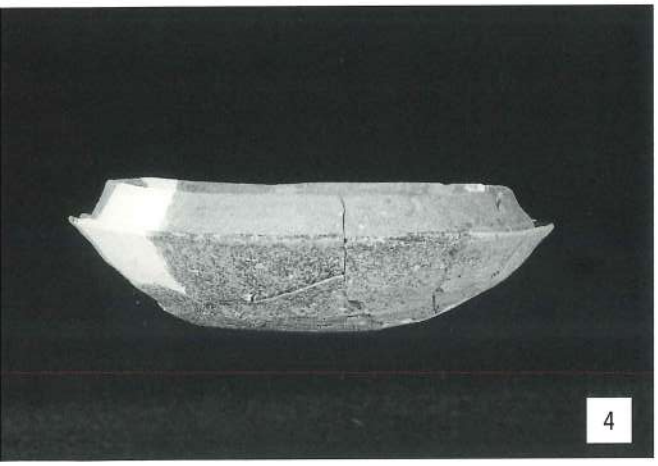
6　42　SC-005出土

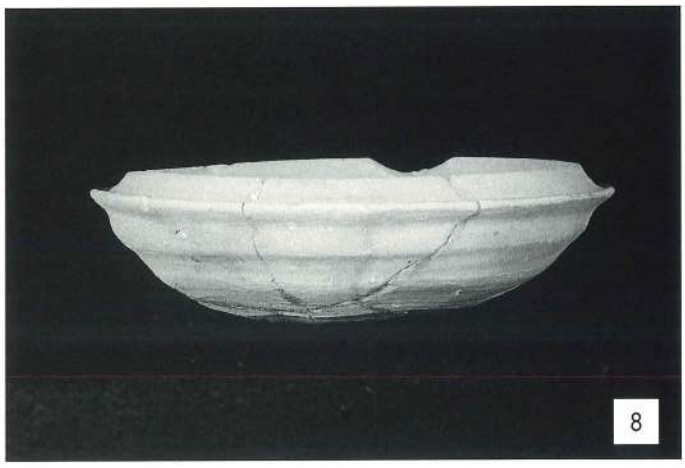
7　上）44・46　下）47・48　SC-005出土

8　上）52・53　下）54・55　SC-009出土









青柳古墳群１区

1　上）56・57　下）58　SC-010出土

2　上）60・61　下）62・63　SC-011出土

3　64　SC-012出土

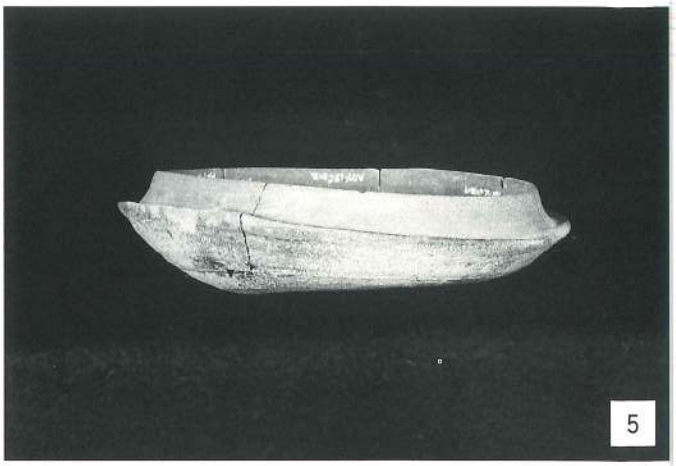
4　65　SC-012出土

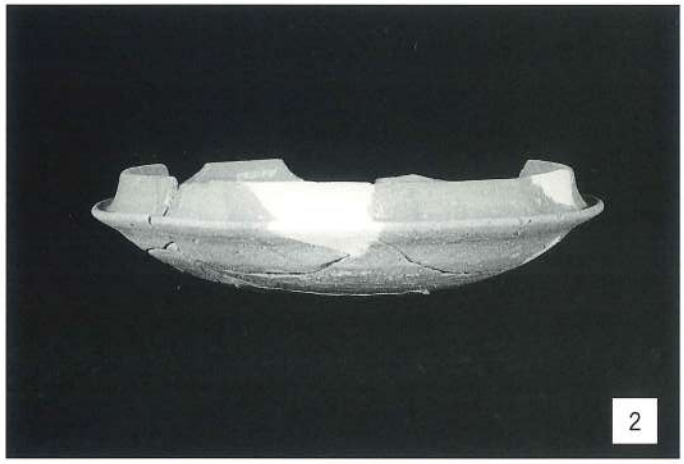
5　66　SC-012出土

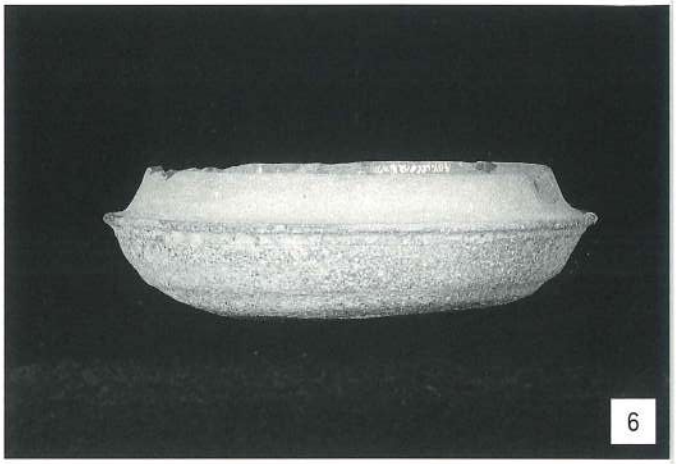
6　67　SC-012出土

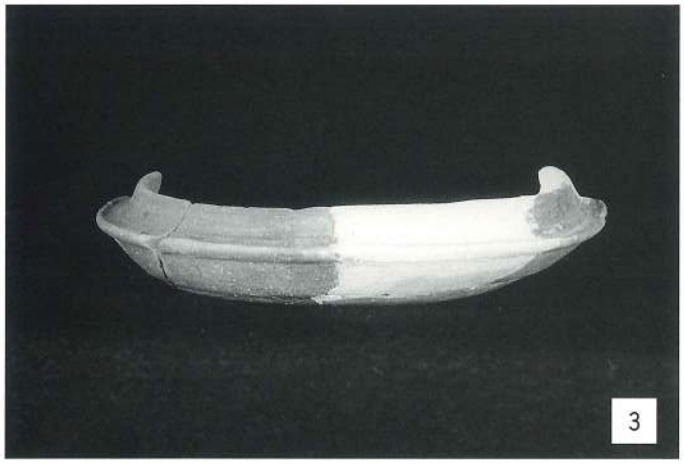
7　68　SC-012出土

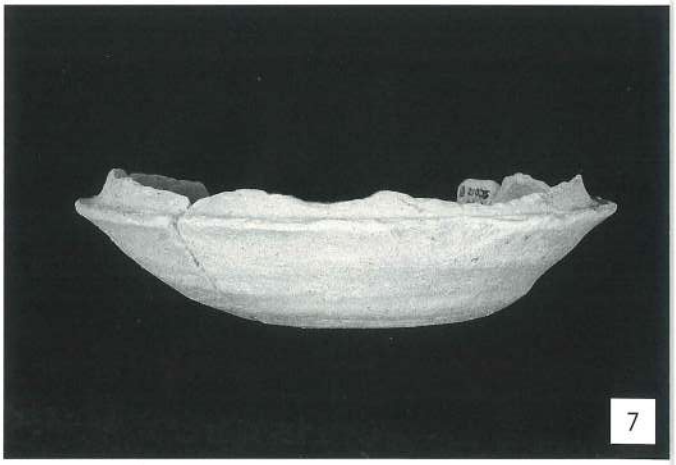
8　96　SC-012出土

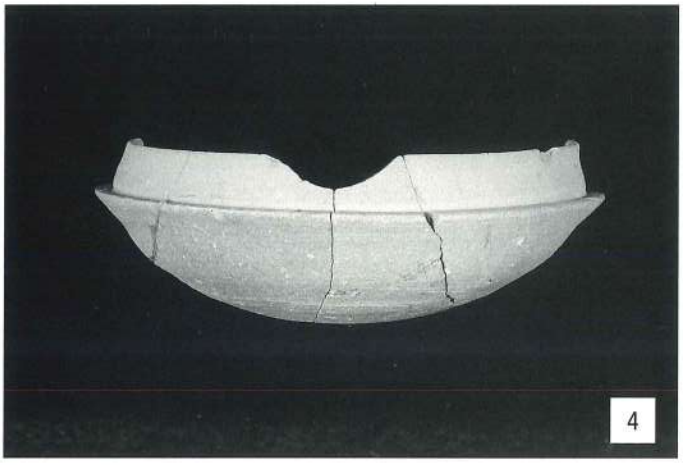


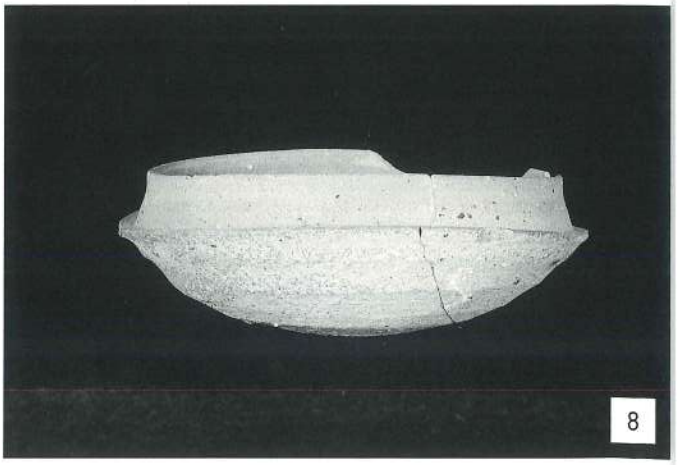






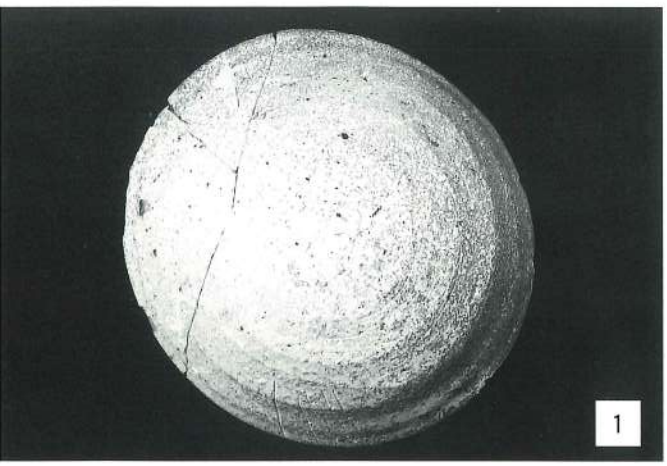


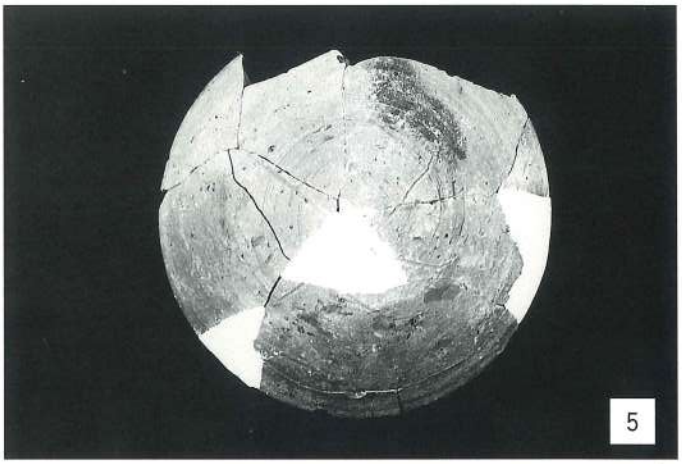


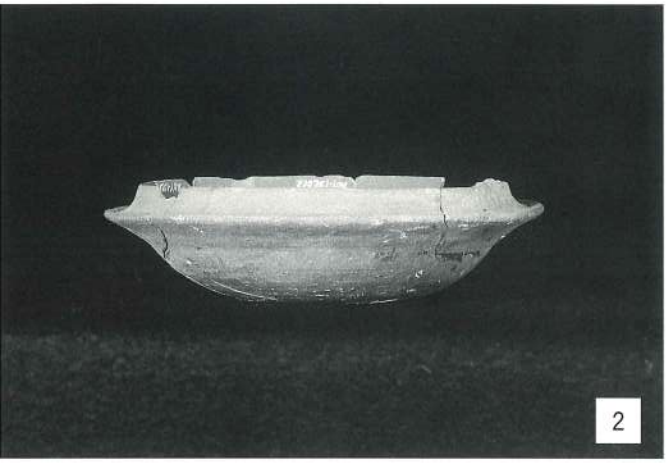


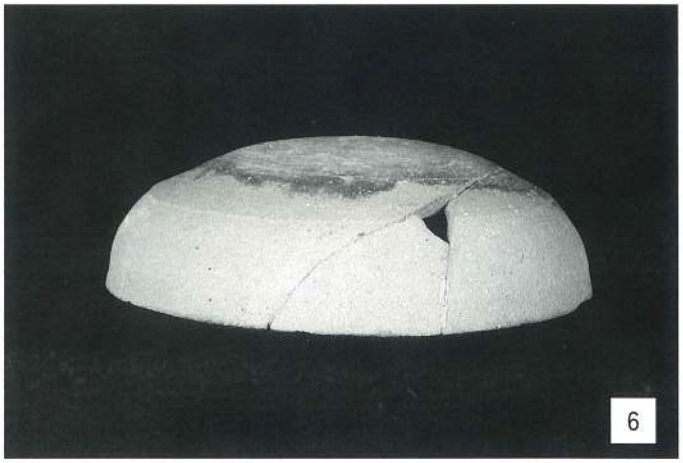
青柳古墳群１区

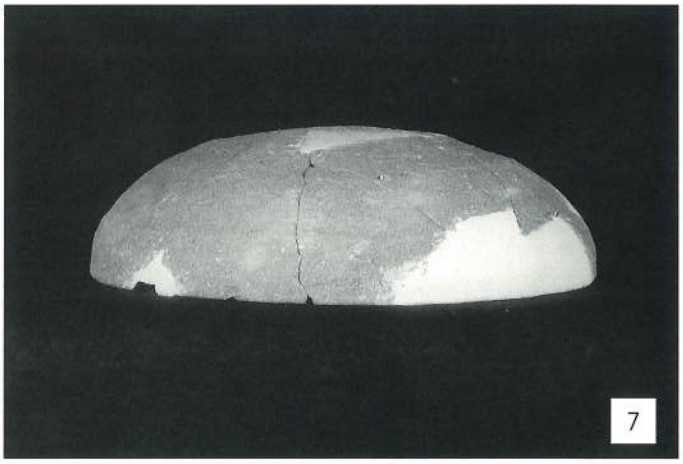
1　70　SC-012出土
2　71　SC-012出土
3　72　SC-012出土
4　73　SC-012出土
5　74　SC-012出土
6　75　SC-012出土
7　76　SC-012出土
8　77　SC-012出土

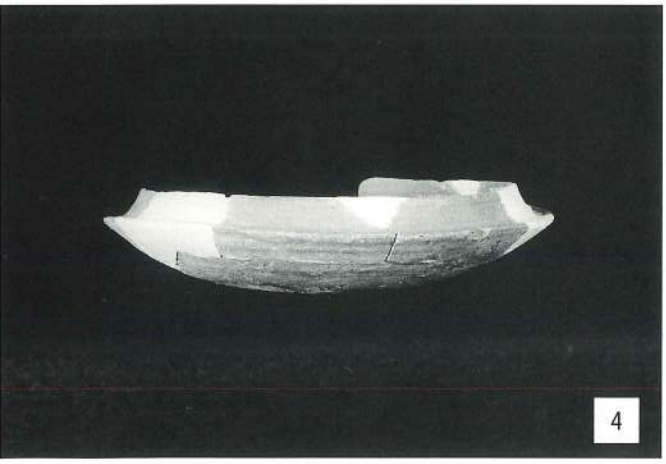


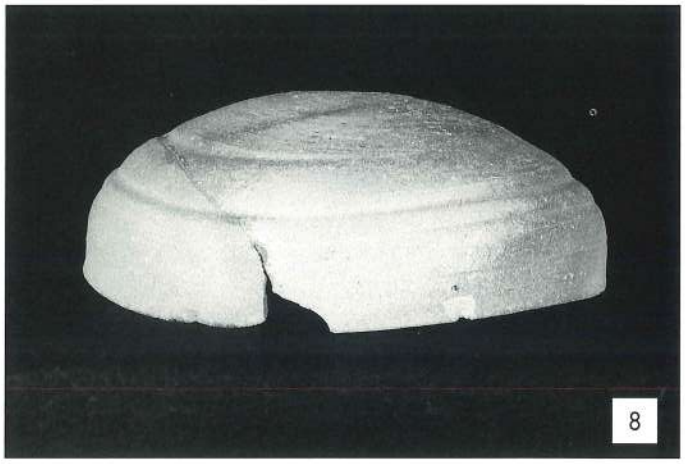






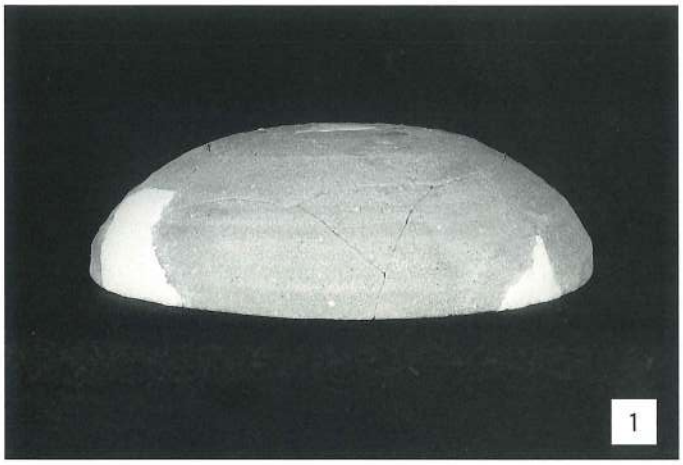


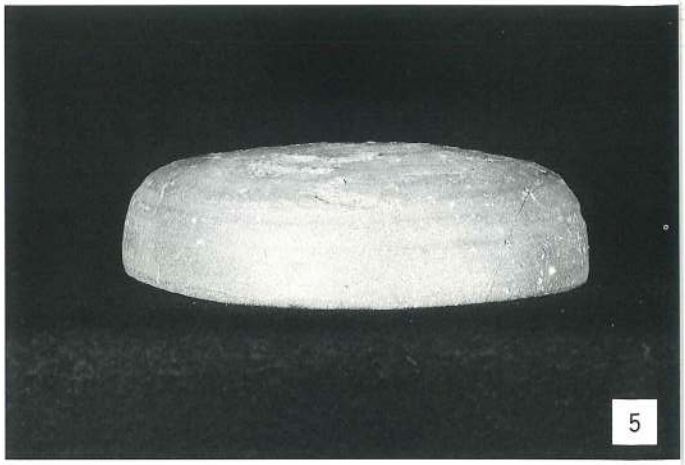


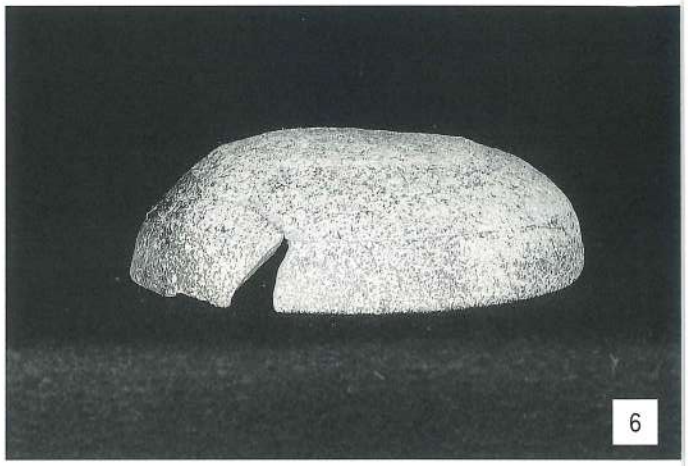


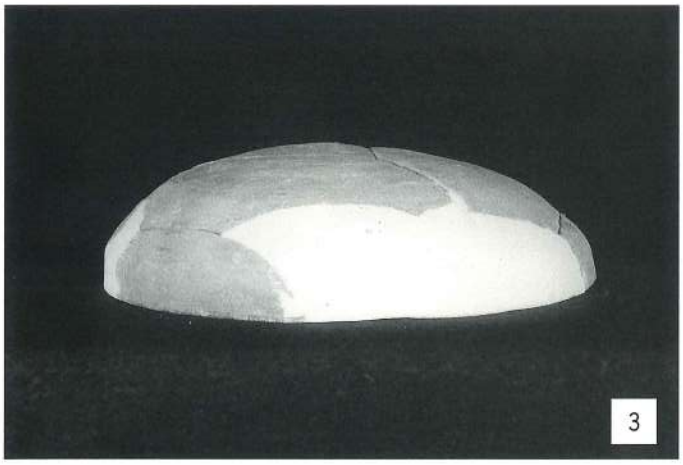
青柳古墳群１区

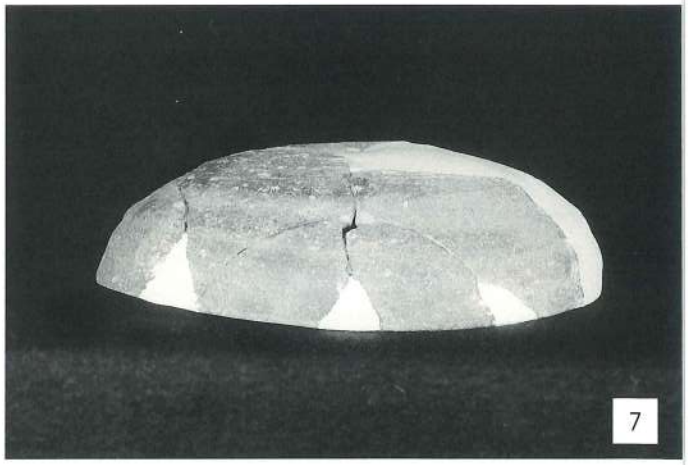
1　77　SC-012出土
2　78　SC-012出土
3　78　SC-012出土
4　79　SC-012出土
5　79　SC-012出土
6　80　SC-012出土
7　81　SC-012出土
8　82　SC-012出土

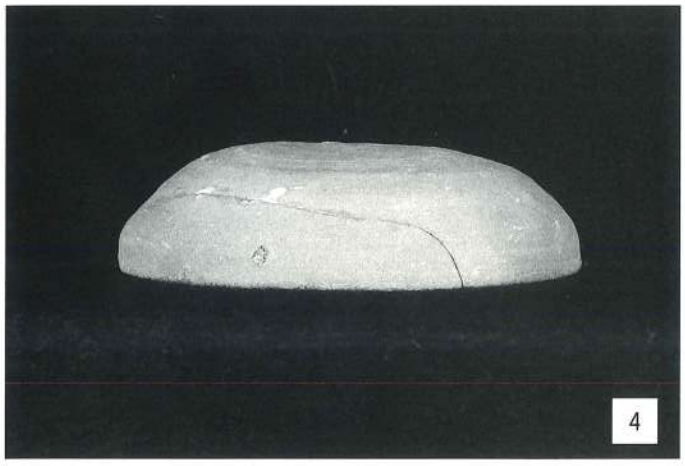


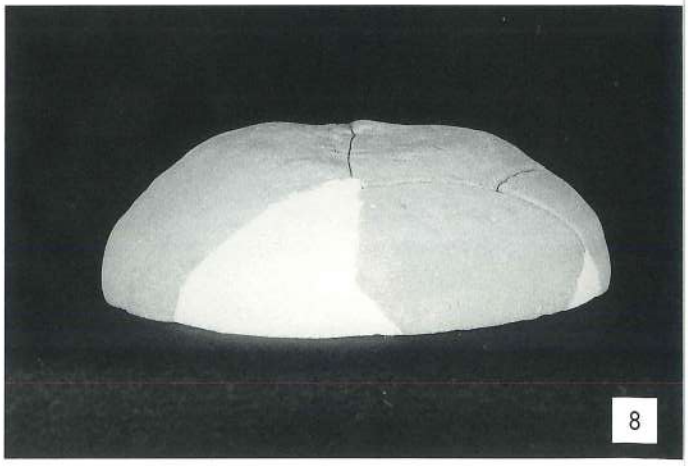












青柳古墳群１区

1　83　SC-012出土

2　84　SC-012出土

3　85　SC-012出土

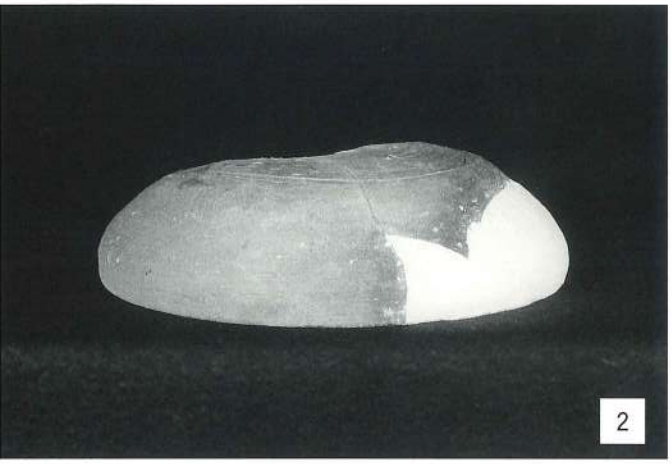
4　86　SC-012出土

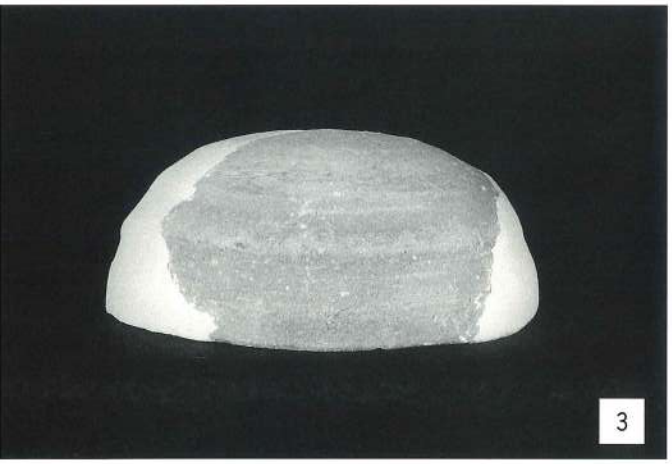
5　87　SC-012出土

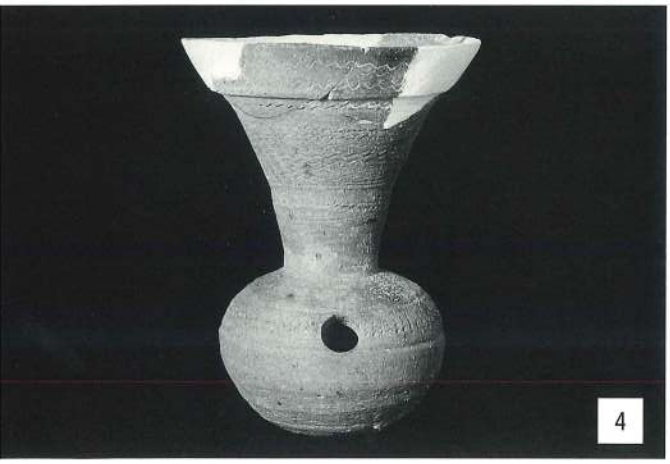
6　88　SC-012出土

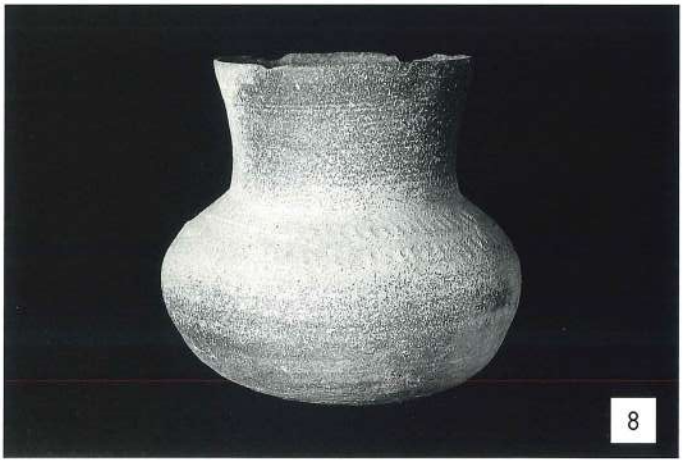
7　89　SC-012出土

8　90　SC-012出土









青柳古墳群１区

1　91　SC-012出土

2　92　SC-012出土

3　93　SC-012出土

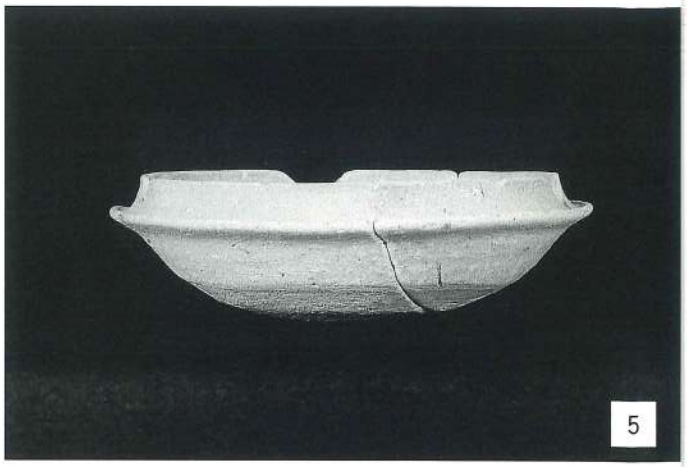
4　98　SC-012出土

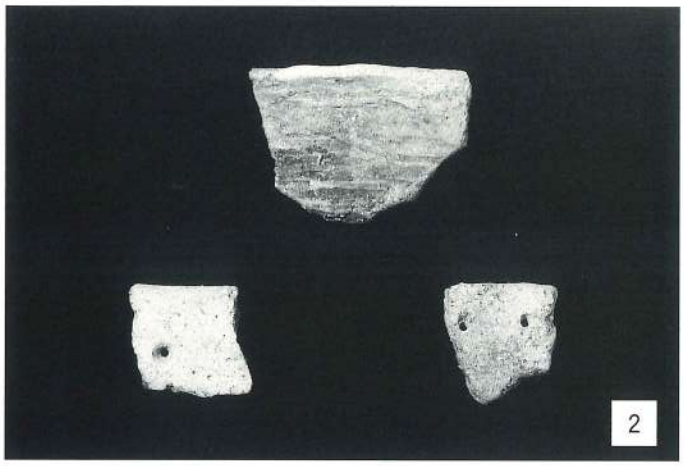
5　99　SC-012出土

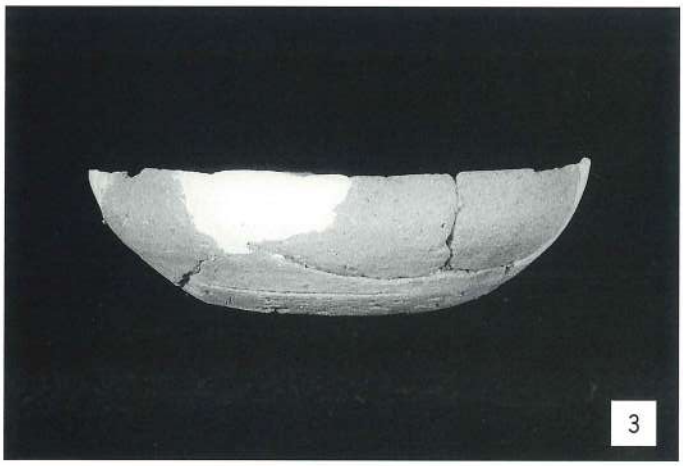
6　100　SC-012出土

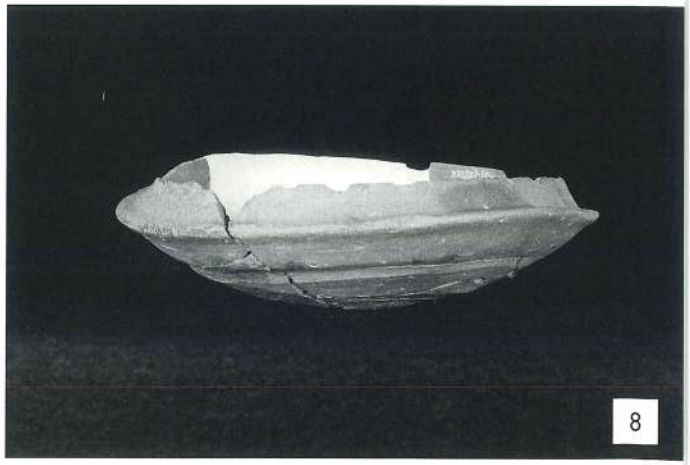
7　101　SC-012出土

8　102　SC-012出土









青柳古墳群１区

1　103　SC-012出土

2　上）104　下）105・106　SC-012出土

3　107　SC-012出土

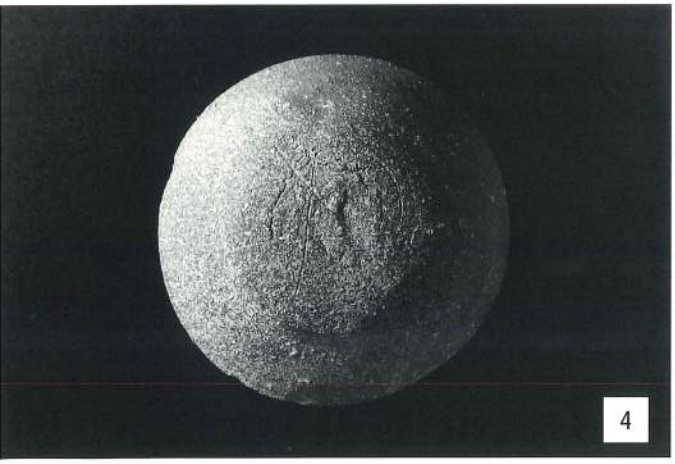
4　108　SC-012出土

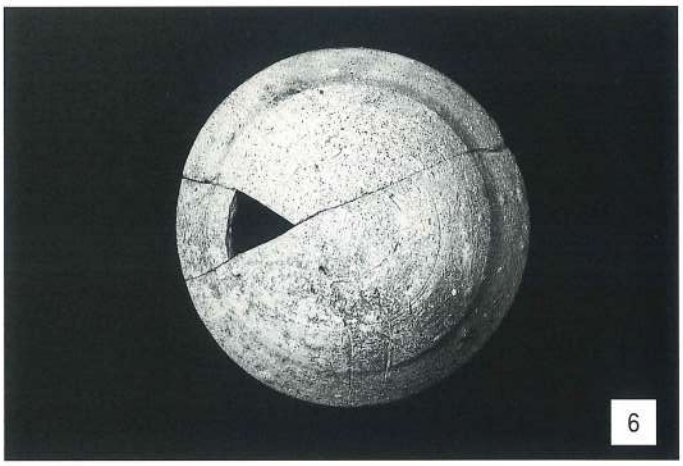
5　109　SC-012出土

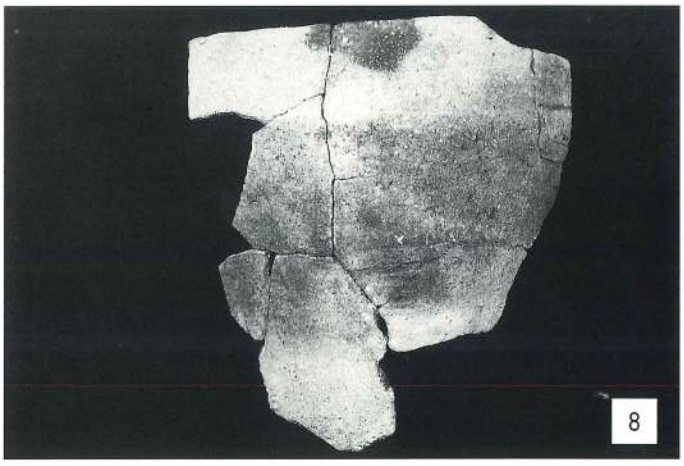
6　110　SC-012出土

7　111　SC-012出土

8　113　SC-012出土

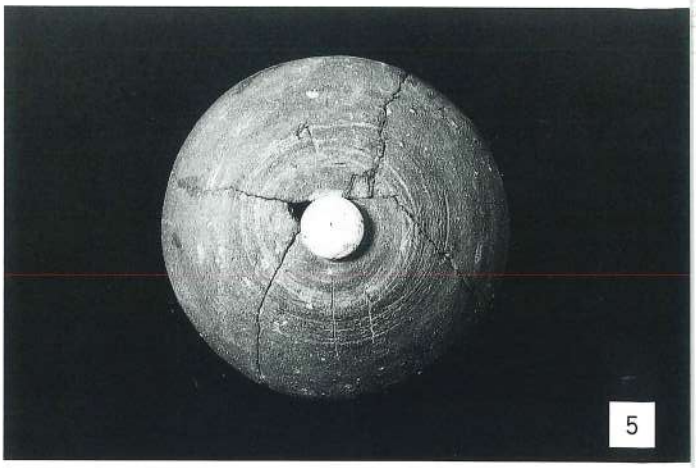


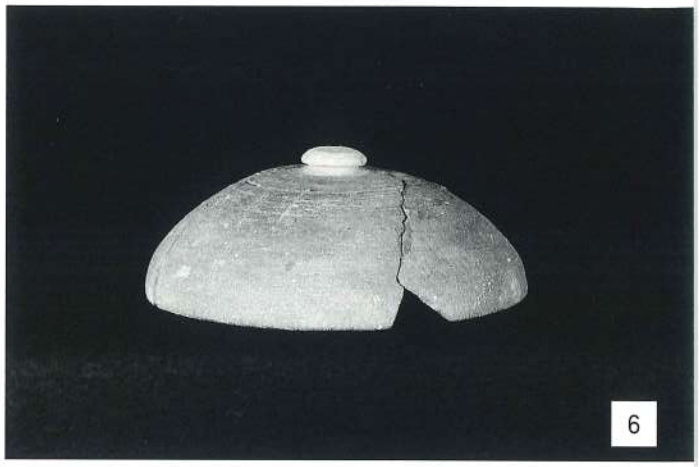


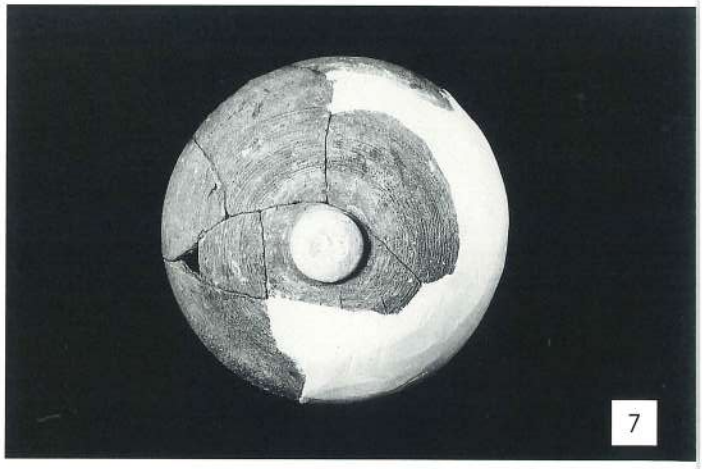


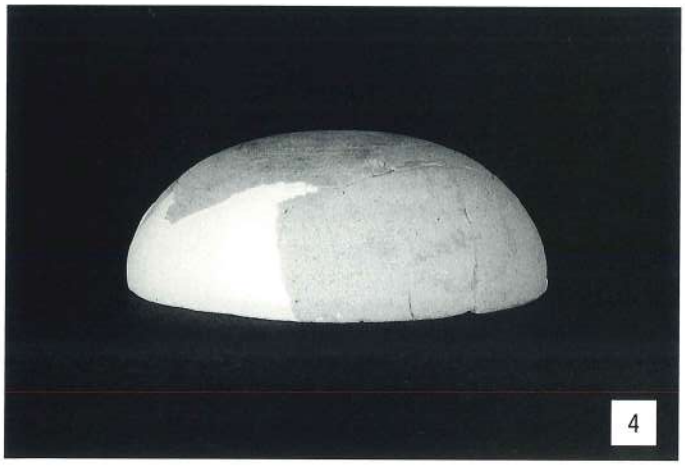
青柳古墳群１区

1　117　SC-012出土
2　118　SC-012出土
3　119　ST-017出土
4　119　ST-017出土
5　120　ST-017出土
6　120　ST-017出土
7　121　ST-017出土
8　122　ST-017出土









青柳古墳群１区

1　123　ST-017出土

2　124　ST-017出土

3　126　ST-017出土

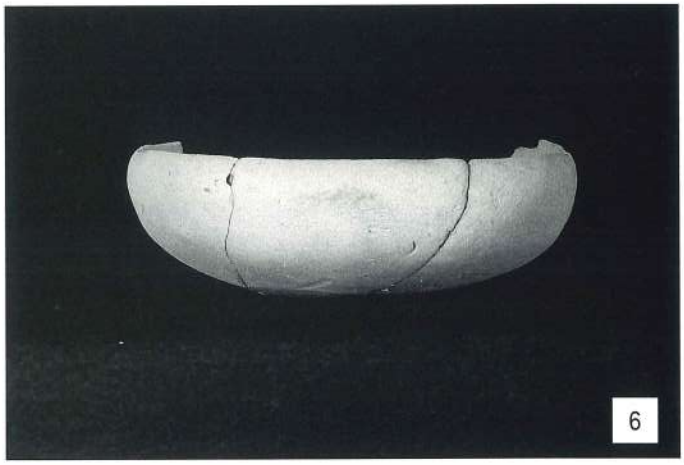
4　126　ST-017出土

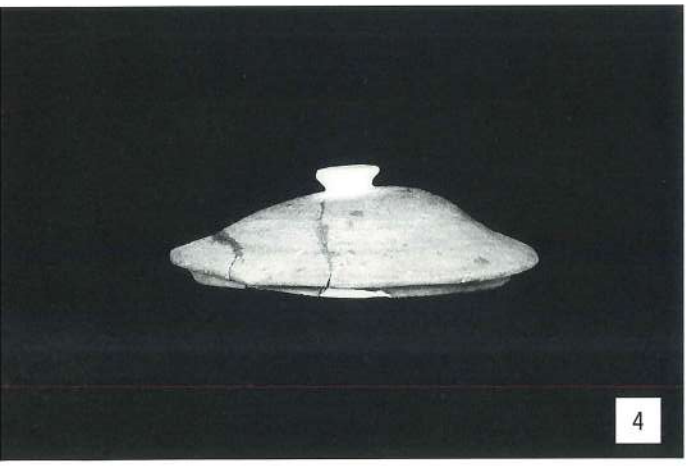
5　127　ST-017出土

6　127　ST-017出土

7　128　ST-017出土

8　128　ST-017出土





青柳古墳群１区

1　129　ST-017出土

2　130　ST-017出土

3　130　ST-017出土

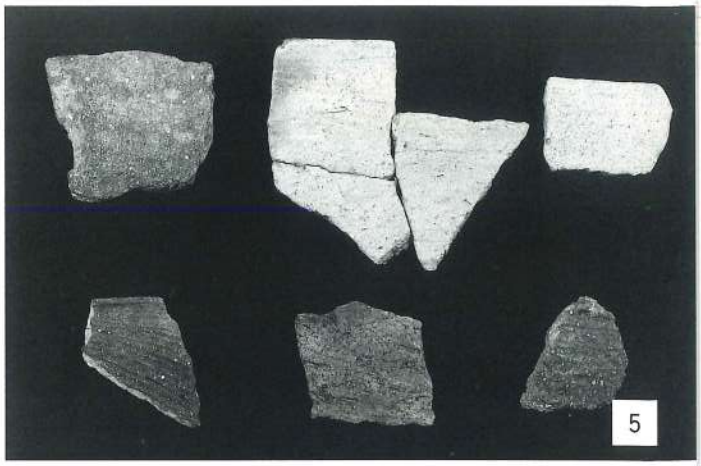
4　131　ST-017出土

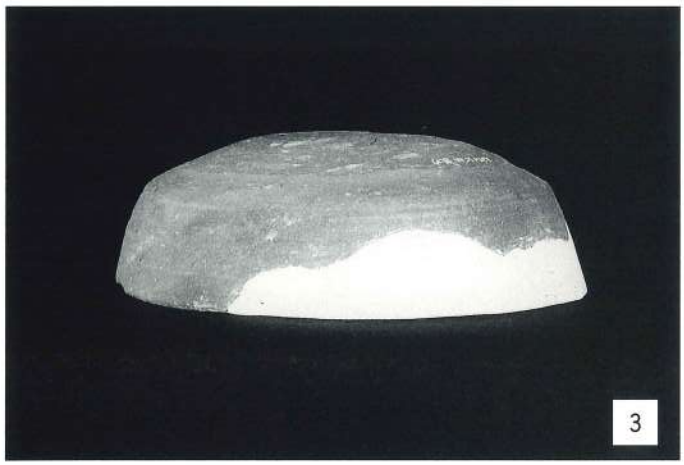
5　132　ST-017出土

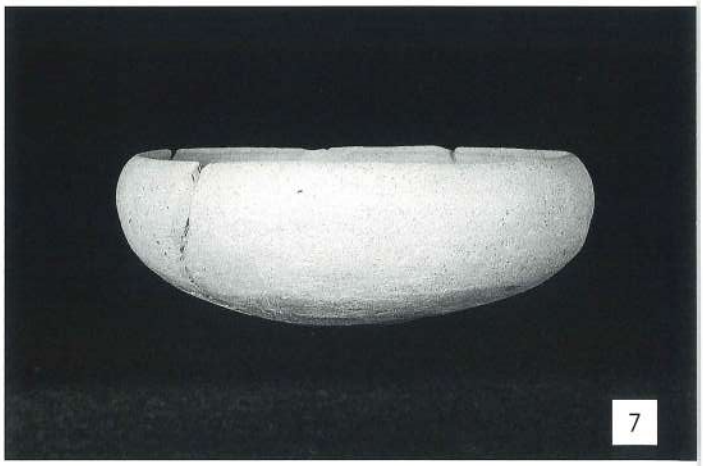
6　133　SC-020出土

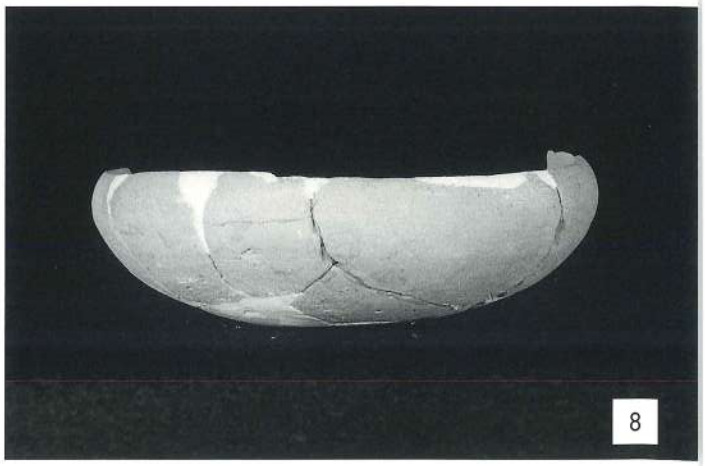
7　134　SC-020出土

8　135　SC-021出土









青柳古墳群１区

1　136　SC-021出土

2　137　SC-021出土

3　138　SC-021出土

4　139　SC-021出土

5　上）140・141・142　下）143・144・145　SC-023出土

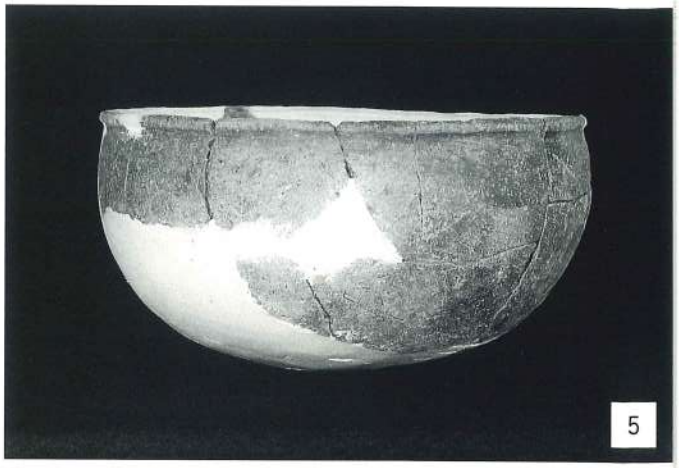
6　148　SC-023出土

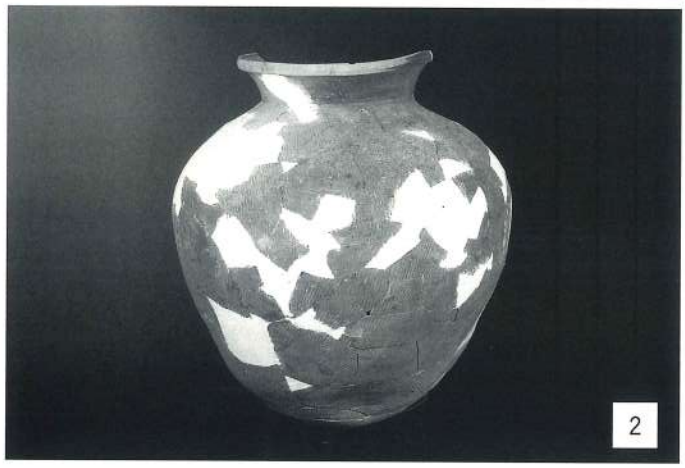
7　149　SC-023出土

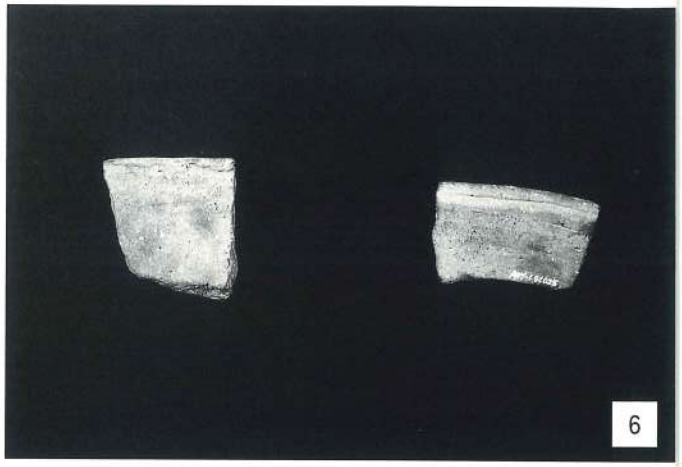
8　150　SC-023出土

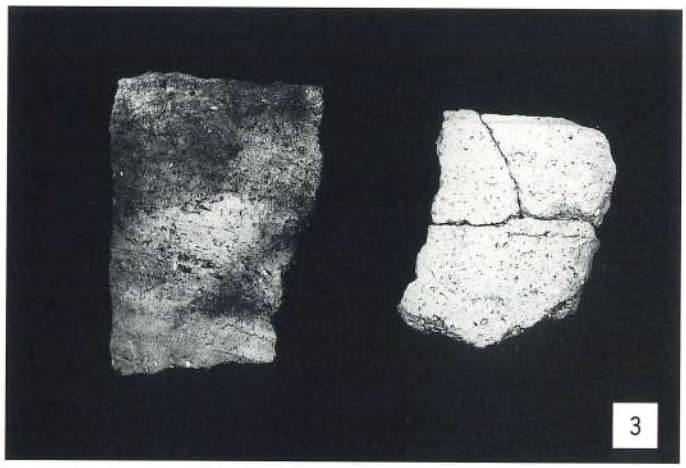
青柳古墳群１区

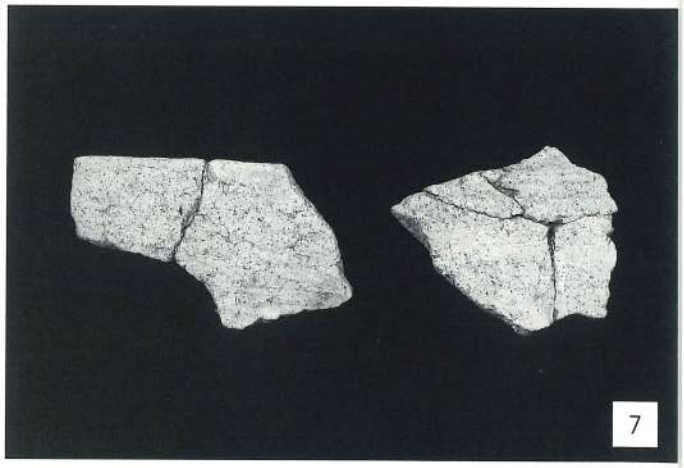
1　155　SC-023出土
2　156　SC-023出土
3　157　SC-023出土
4　158　SC-023出土
5　159　SC-023出土
6　160　SC-023出土
7　161　SC-023出土
8　164　SC-023出土

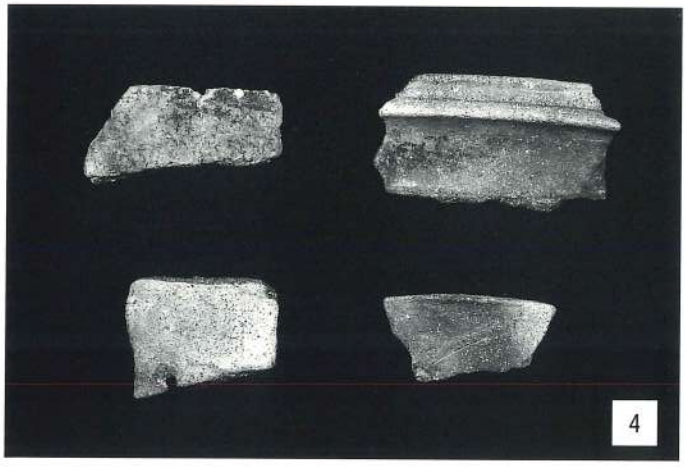


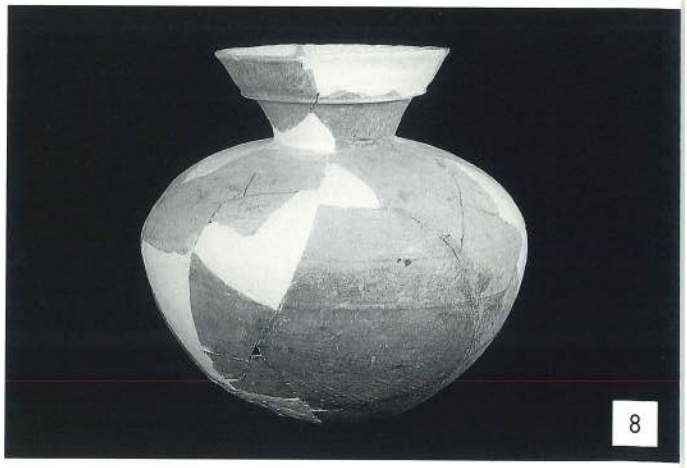












青柳古墳群１区

1　165　SC-023出土

2　166　SC-023出土

3　167・168　SC-024出土

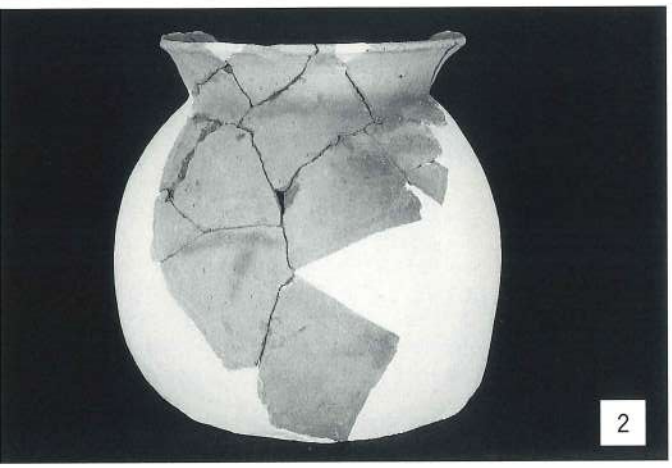
4　上）169・170　下）171・172　SC-024出土

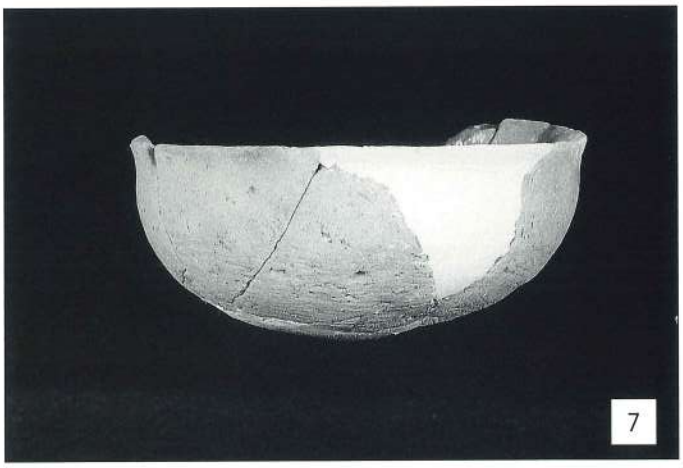
5　173　SC-024出土

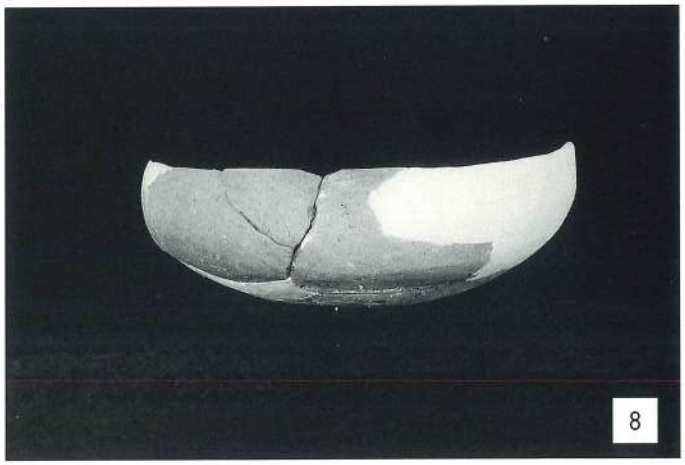
6　174・175　SC-025出土

7　176・177　SC-026出土

8　178　SH-051出土







青柳古墳群１区

1　179　SH-051出土

2　180　SH-051出土

3　181　SH-051出土

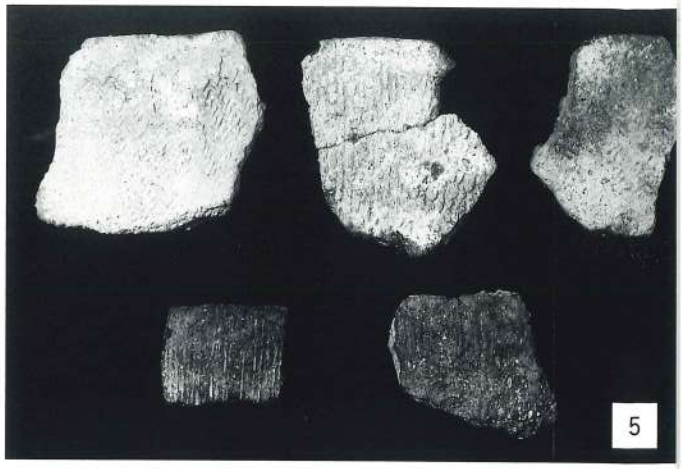
4　182　SH-051出土

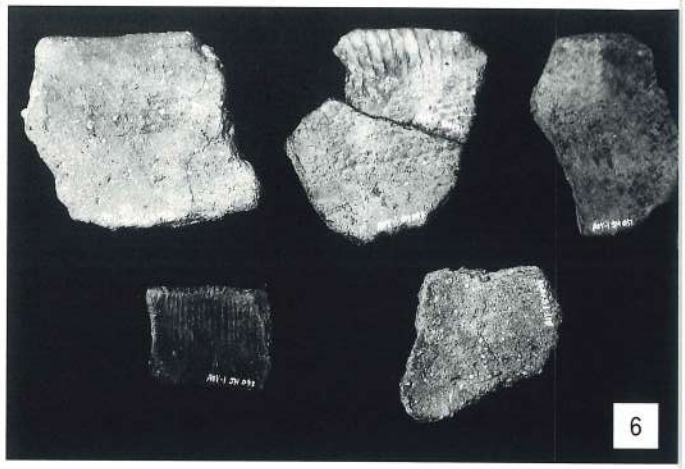
5　183　SH-051出土

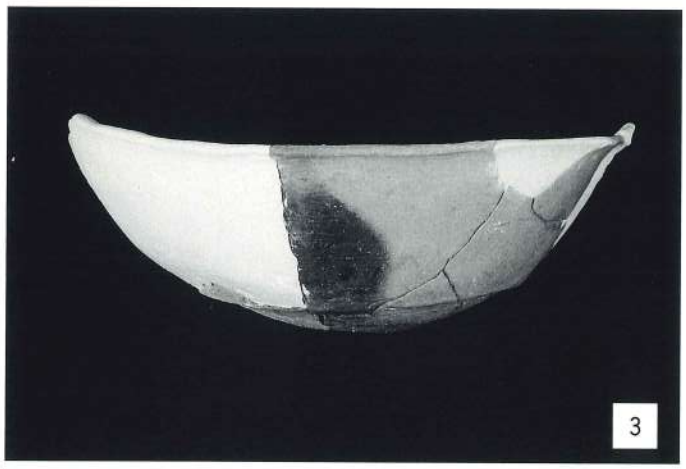
6　184　SH-051出土

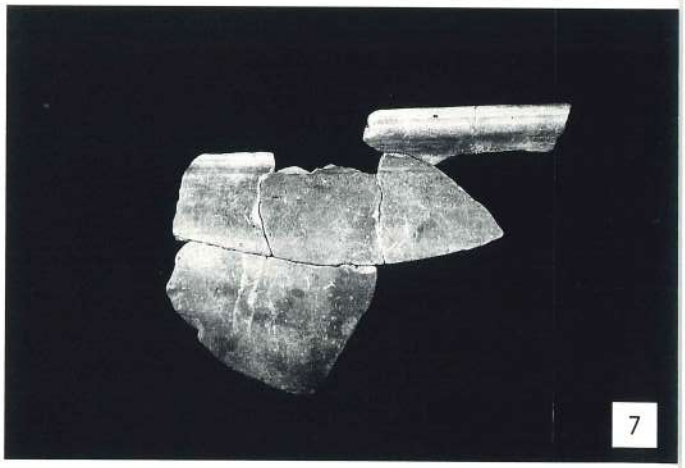
7　185　SH-051出土

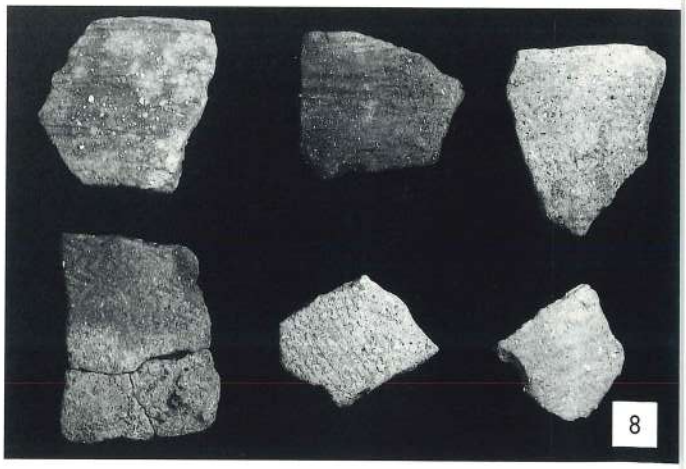
8　186　SH-051出土











青柳古墳群１区

1　187　SH-051出土

2　188　SH-051出土

3　189　SH-051出土

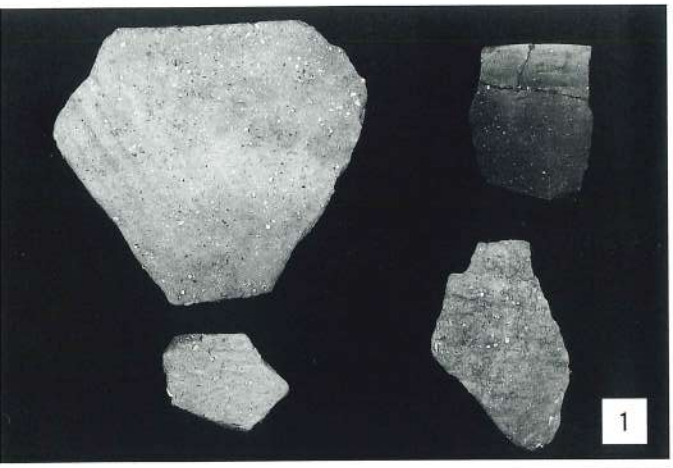
4　190　SH-051出土

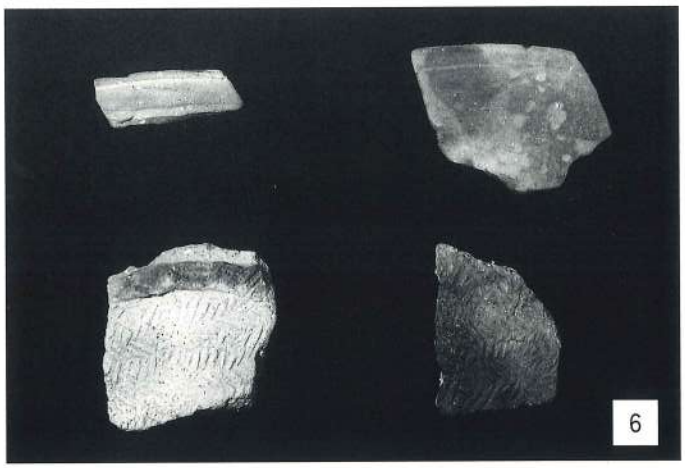
5　上）191・192・193　下）194・195　SH-051出土

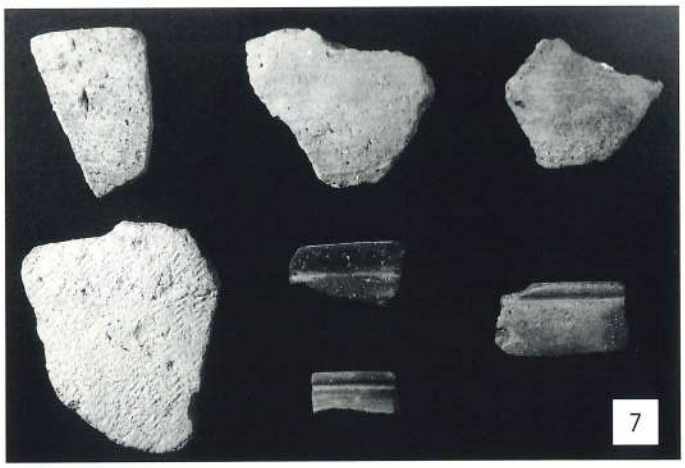
6　上）191・192・193　下）194・195　SH-051出土

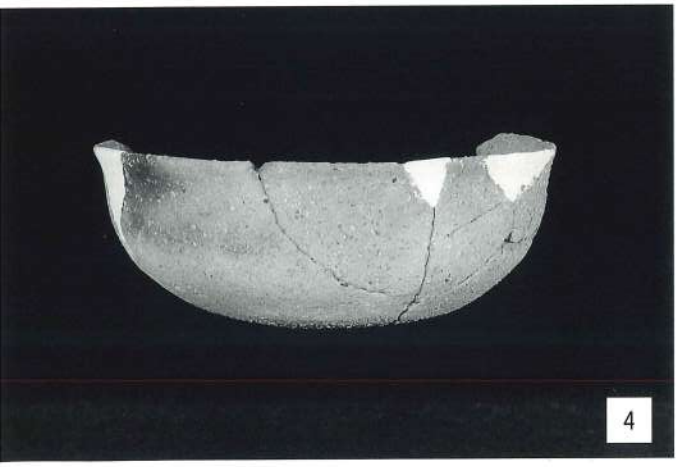
7　196　SH-051出土

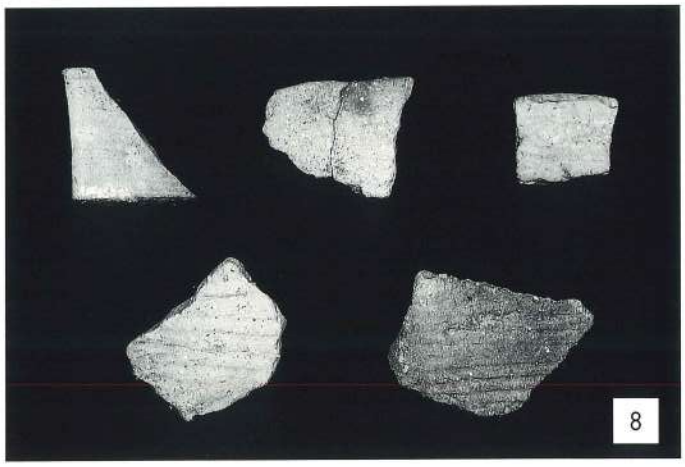
8　上）197・198・199　下）200・201・202　SD-052出土





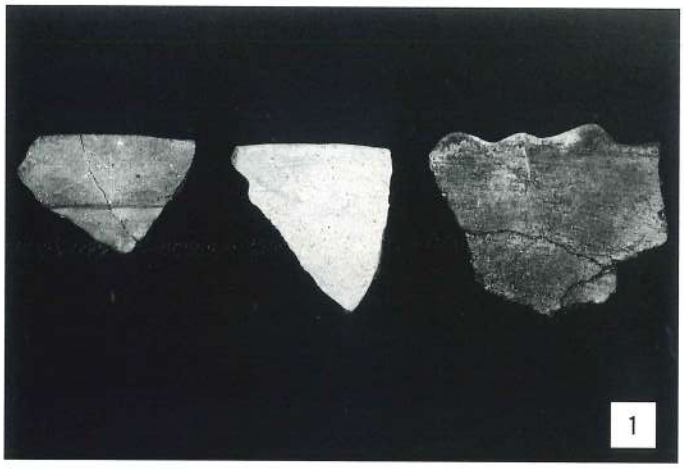


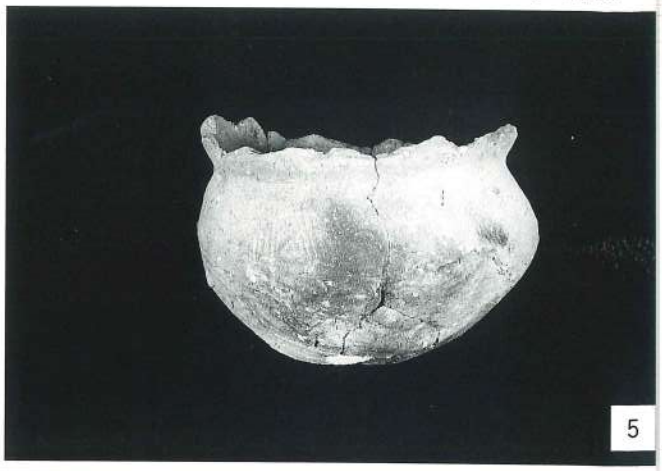


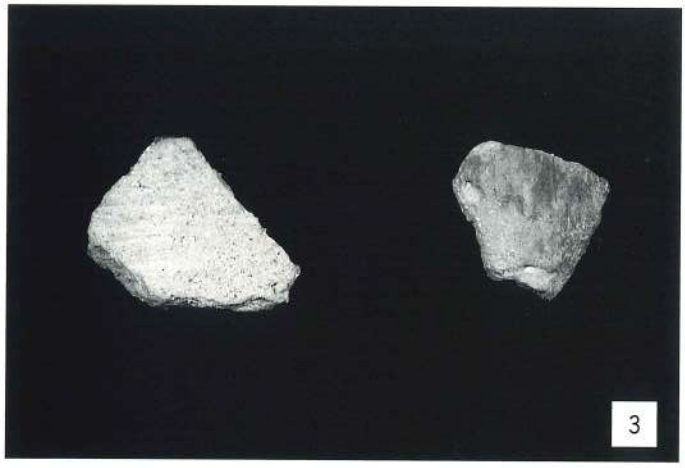


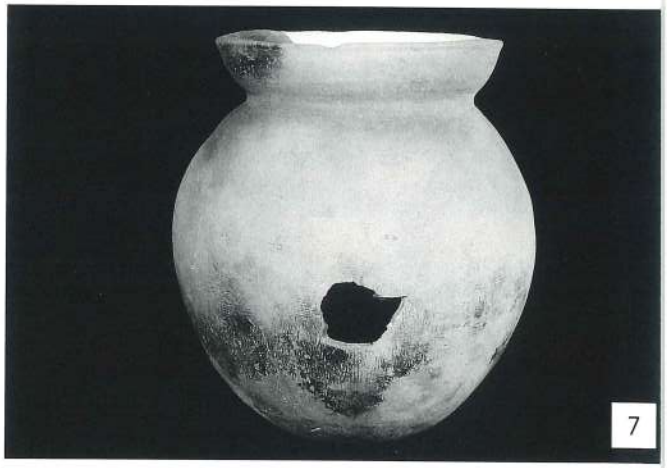
青柳古墳群１区

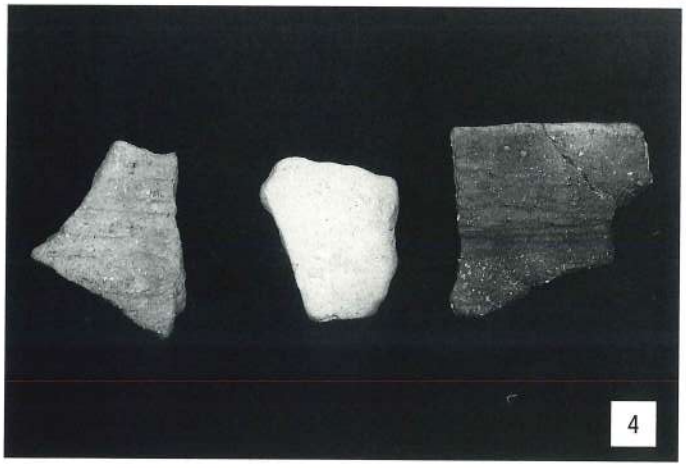
1　上）203・206　下）204・205　SD-052出土
2　207・208　SK-055出土
3　210　SK-056出土
4　211　SK-057出土
5　212　SK-058出土
6　上）213・214　下）215・216　SK-058出土
7　上）217・218・219
　　下）220・221・222・223　SK-059出土
8　上）224・225・226　下）227・228　SD-060出土

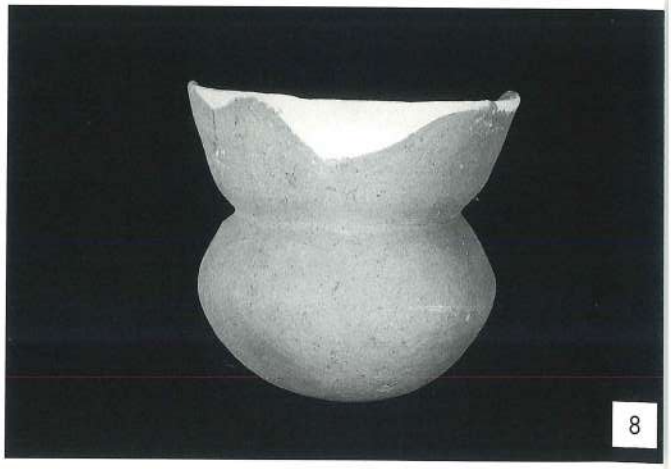












青柳古墳群１区

1　229・231・230　SD-060出土

2　232　SD-060出土

3　234・235　SK-061出土

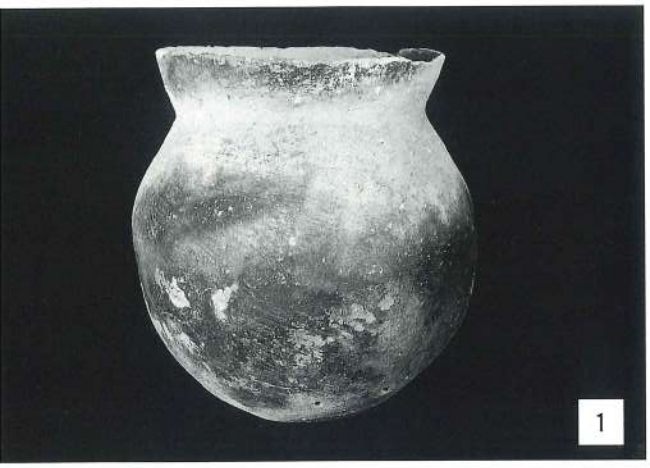
4　236・237・238　SD-062出土

5　239　SD-062出土

6　240　SH-065出土

7　241　SH-065出土

8　242　SH-065出土



青柳古墳群１区

1　243　SH-065出土

2　245　SH-065出土

3　248　SK-069出土

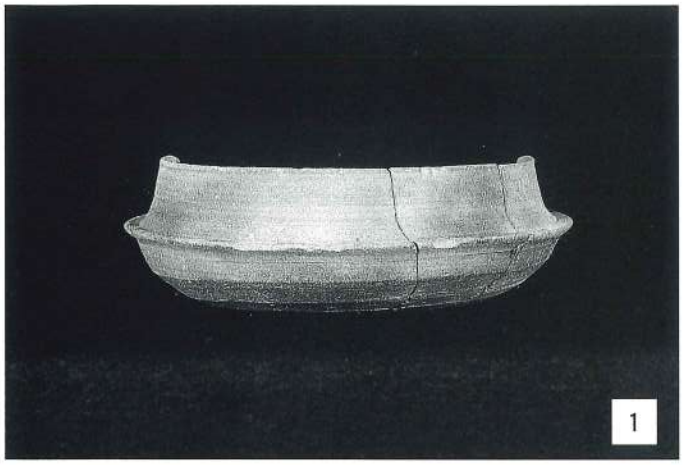
4　249　SK-069出土

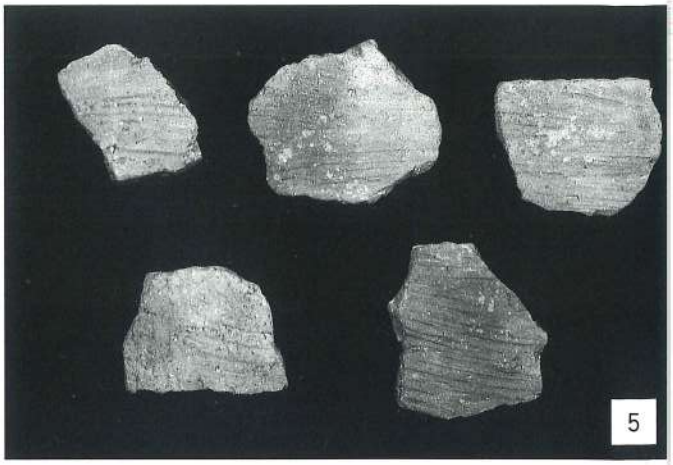
5　252　SK-069出土

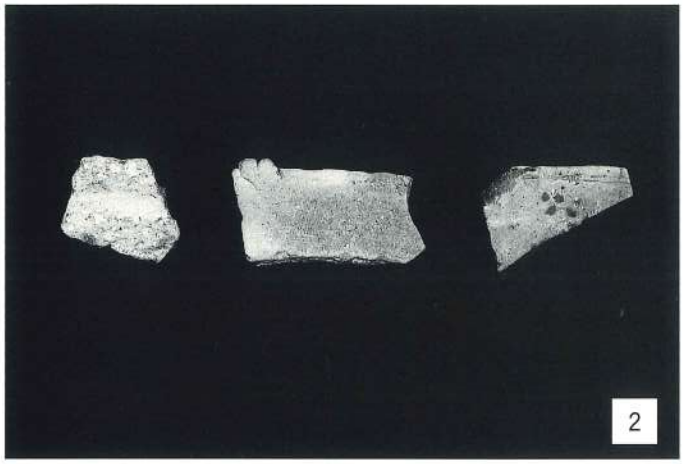
6　253　SK-069出土

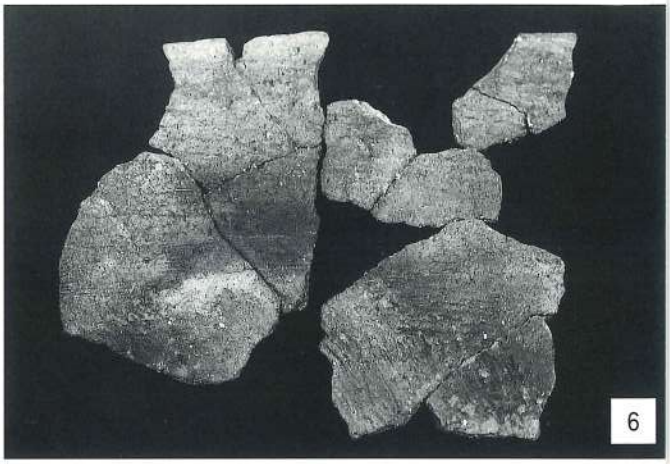
7　254　SK-069出土

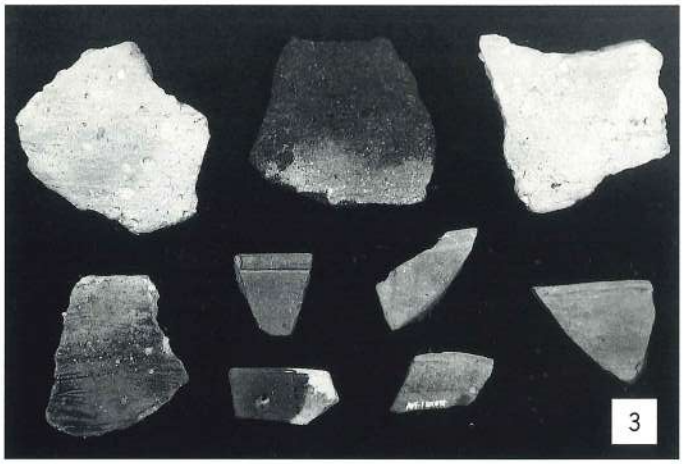
8　255　SK-069出土

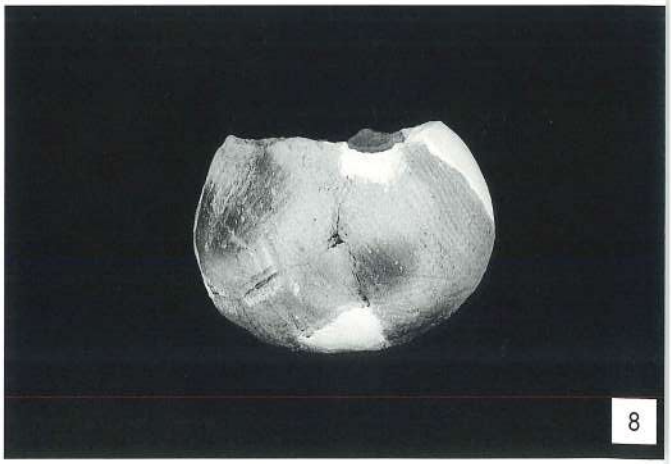






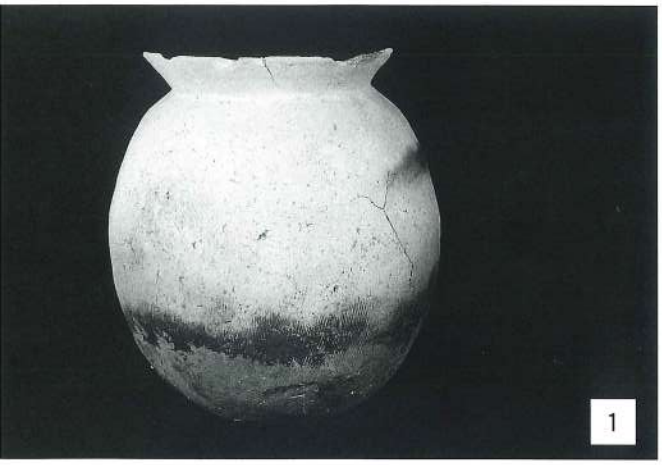


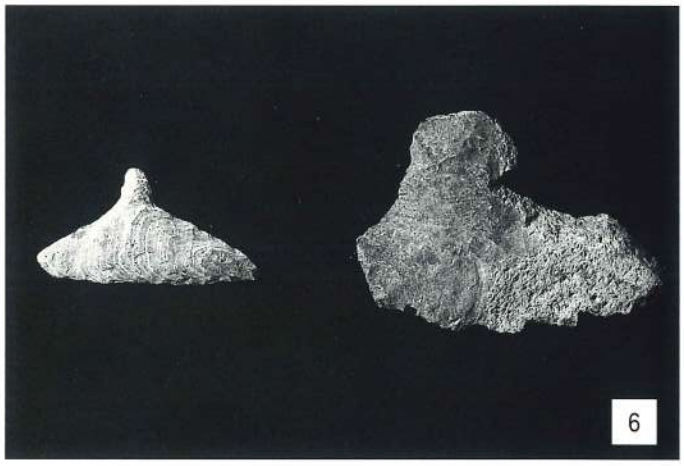


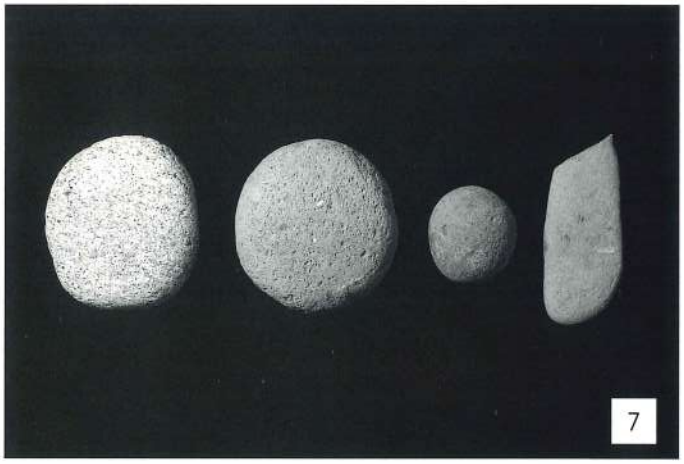


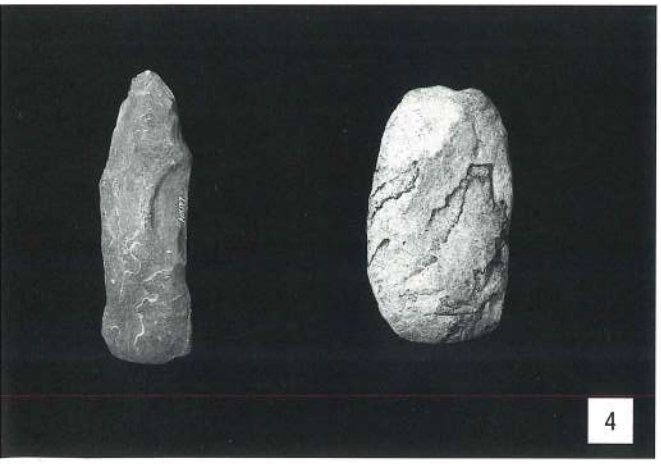
青柳古墳群１区

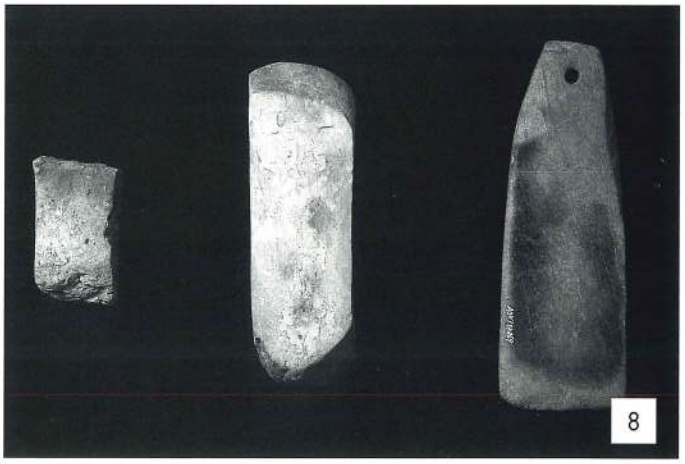
1　256　SK-069出土
2　258・259・260　SK-071出土
3　上）263・264・265　中）267・269
　　下）266・268・270・271　SK-075出土
4　272　SK-076出土
5　上）273・274・275　下）276・277　SK-077出土
6　278　SK-077出土
7　279　SK-077出土
8　281　SK-088出土











青柳古墳群１区

1　280　SK-088出土

2　282　SK-088出土

3　土製品283・284　―表裏―

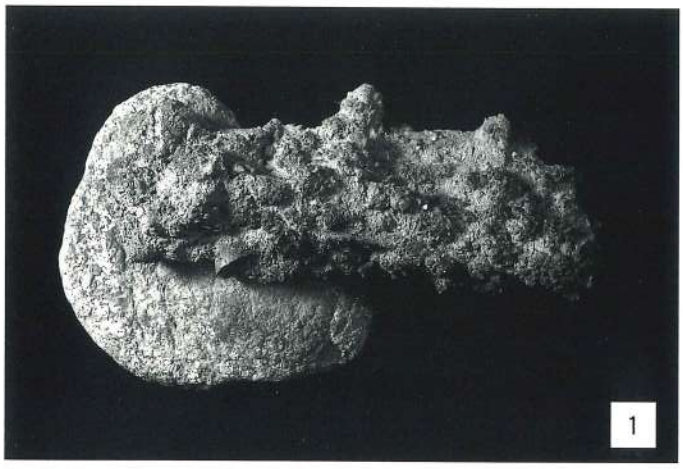
4　石槍・石斧285・286

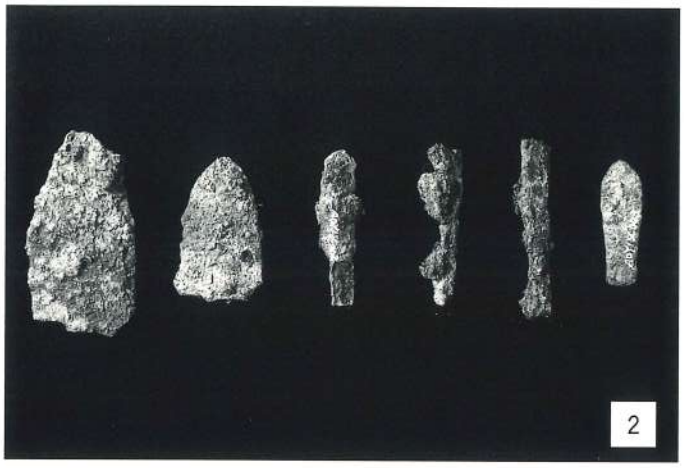
5　石斧287・288・289・290

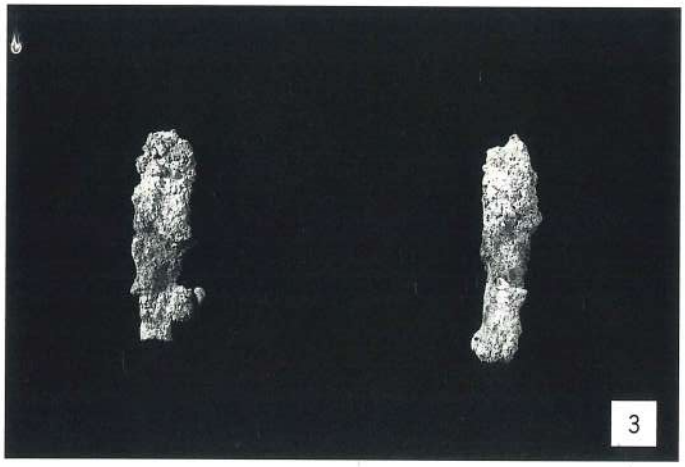
6　石匙291・292

7　磨石293・294・295・296

8　砥石297・298・299







青柳古墳群１区

1　鉄鏃300

2　鉄鏃301・302・303・304・305・306

3　鉄鏃307・308

報告書抄録

ふりがな	つつみろっぽんだにいせきⅣ つつみさんぼんまついせきⅡ つつみさんぼんやなぎⅡ あおやぎこふんぐんⅠ
書名	堤六本谷遺跡Ⅳ　堤三本松遺跡Ⅱ　堤三本柳遺跡Ⅱ　青柳古墳群Ⅰ
副書名	平成７～９年度佐賀県農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	上峰町文化財報告書
シリーズ番号	第20集
編著者名	原田　大介
編集機関	上峰町教育委員会
所在地	〒849-0123　佐賀県三養基郡上峰町坊所319-４　上峰町民センター内　Tel／Fax0952-52-3833
発行年月日	2001年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
堤六本谷遺跡	佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本柳	41345	3035 4005 5011	33°21′00	130°25′15″	1995. 6. 2 1996. 1.31	9,750m²	農業基盤整備事業
堤三本松遺跡	佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本黒木		3012	33°21′12″	130°25′01″	1996. 7.31 1996.12. 3	1,875m²	農業基盤整備事業
堤三本柳遺跡	佐賀県三養基郡上峰町大字堤字三本柳		1001 3006	33°21′13″	130°25′22″	1997.10.21 1998. 2. 5	625m²	農業基盤整備事業
青柳古墳群	佐賀県三養基郡上峰町大字堤字二本柳		3007	33°21′21	130°24′33″	1997.10.21 1998. 2. 5	5,000m²	農業基盤整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堤六本谷遺跡	集落跡	古墳時代 奈良時代 中世	竪穴式住居址　25軒 掘立柱建物址　12棟 土壙　107基	縄文式土器 土師器・須恵器 中世土器 石器類	
堤三本松遺跡	散布地	奈良時代 中世	土壙　19基	土師器・須恵器 中世土器	
堤三本柳遺跡	集落跡 墳墓跡	近世	溝跡	縄文式土器 土師器・須恵器 中世土器 石器類	
青柳古墳群	集落跡 墳墓跡	縄文時代 古墳時代 中世	古墳等の墳墓　24基 竪穴式住居址　２軒 土壙　25基	縄文式土器 土師器・須恵器 中世土器 土製品・石器類 鉄剣・鉄鏃・青銅製耳環	

上峰町文化財調査報告書　第20集

堤六本谷遺跡Ⅳ
堤三本松遺跡Ⅱ
堤三本柳遺跡Ⅱ
青柳古墳群Ⅰ

平成13年3月20日　印　刷
平成13年3月30日　発　行

編　集
発　行　上峰町教育委員会
佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4

印　刷　㈱昭和堂印刷　佐賀支店
佐賀県佐賀市高木瀬西4丁目12-1